

群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第141集  
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第13集

# 上栗須寺前遺跡群 I

篠塚清太地区 (5, 5A)

下大塚北原地区 (5B, 6)

本動堂台地区 (7)

藤岡扇状地扇端部における奈良・平安時代を中心とした集落址の調査

## 第2分冊《本文編》

1 9 9 2

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日本道路公団



〔群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第141集  
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第13集

# 上栗須寺前遺跡群 I

篠塚清太地区 (5, 5A)

下大塚北原地区 (5B, 6)

本動堂台地区 (7)

藤岡扇状地扇端部における奈良・平安時代を中心とした集落址の調査

## 第2分冊《本文編》








1 9 9 2

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日本道路公団

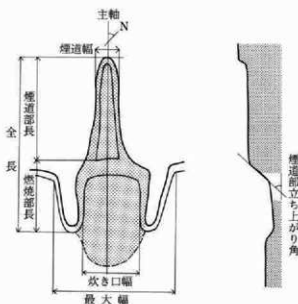




## 凡 例

1. 本報告書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「上栗須寺前遺跡群Ⅰ」の発掘調査報告書第2分冊本文編である。なお該報告は「上栗須寺前遺跡群」のうちの篠塚清太・下大塚北原・本勸堂台地区の調査結果を掲載している。
2. 該遺跡は藤岡市篠塚清太130番地他・下大塚北原426番地他・本勸堂字台58番地他に所在する。
3. 遺跡名については字名のうちで寺前を取り上げ「上栗須寺前遺跡群」と総称する。
4. 「上栗須寺前遺跡群」の全体のグリッドは、国家座標系第IV系の藤岡都市計画区域図9をもとに東西80m×南北60mの大グリッドを設定し、さらに東西、南北を10等分して8m×6mの小グリッドを最小単位としたものである。グリッドは東西をアルファベット（一部ギリシア文字）で南北をアラビア数字で呼称し、各調査区グリッドの国家座標における位置は付図の全体図中に記載した。なお詳細については「上栗須寺前遺跡群Ⅰ」第1分冊本文編に具体的に掲載した。
5. 本報告書における遺構番号は発掘調査時に各区ごとに通番で付されたものを原則として使用し、遺物番号は整理時に通番でふりなおした。
6. 挿図中に使用した方位は座標北である。また、竪穴住居の方位については電付設壁に直交する軸線の方位を採用した。
7. 竪穴住居の面積算出については、1/40平面図上でプランメーター（ローラー極式・レンズ式）による2回計測の平均値を使用し、小数点以下3桁は四捨五入してある。
8. 遺構及び遺物実測図の縮尺は各図中に表示してある。遺物の場合、表示された縮尺と異なるものについては、遺物番号の後尾に（ ）で縮尺を表示した。
9. 遺物実測図中における表示は次のことを意味する。  
 鉄  灰釉  須恵器断面部分・硯・砥石等摩耗部分  土器の寛削りの方向  にこぼれ
10. 遺構平面図中（遺物接合分布図）の表示は次のことを意味する。  
 灰・焼土  石散部分  
●土師 ▲須恵 □灰釉 ○飯 ○羽釜 ⊗土釜 ★縄文 ■砥石・円形叩き石 △鉄製品
11. 遺構平面図中の「L: 85.20m」は、断面図における水糸の標高を表す。
12. 遺物の記述については、第3冊の遺物観察表にまとめた。

13. 竈の計測部位及びその部位名称は下記の通りである。



14. 本文項目中の遺物出土状態及び遺物接合分布図における遺物のタイプ分けについては、「宇津木台遺跡群IV, J地区〔遺物編〕」を参考にして分類を試みた。

タイプA 住居廃絶時にそのまま遺棄されたと認められるものである。住居内にはほぼ完全な形(およそ2/3以上)で残されたもので、出土レベルが床面またはほぼ床面と見なされるもの。  
 タイプBa 廃棄遺物と解され、接合すると完形かほぼそれに近い形になるが、破片の出土地点が平面的広がりを持ち出土レベルに若干の高低差が認められるもの。遺物接合線はまともまっている。

タイプB 住居廃絶直後に住居外から廃棄・流入した可能性が考えられるもので、床面上より出土しているが大きく欠損しているものや破片の出土レベル及び平面的位置にある程度のばらつきが認められるもの。遺物接合線が長く引かれる。

タイプC 覆土中層以上にまともたまって廃棄されたもので、明らかに住居外からの流入を示すものや破片の出土地点の平面的広がりや出土レベル差が極端に大きいもの。

以上の各個体についての破片の出土レベル差・平面的広がり・欠損度を根拠とした分類はかなりの主観的な判断の介入を許すこともままある。そこで本報告では遺物接合分布図(平面図・断面図)を呈示することによって、客観的な検討に資することを期待している。

15. 床直の定義については非常に困難な問題ではあるが、該遺跡地では床面上の凹凸を考慮すると平均2.5cmの高低差を認めることが可能である。そこで床面推定線から+2.5cmまでの範囲の遺物を床直遺物と認定した。

# 目 次

## 凡 例

### IV. 遺跡の調査

#### 3. 篠塚清太地区 (5・5A区)

の遺構と遺物	3
(1) 竪穴住居址	3
5・01号住居址	3
5・02号住居址	7
5・03号住居址	9
5・04号住居址	17
5・05号住居址	18
5・06号住居址	20
5・07号住居址	22
5・08号住居址	24
5・09号住居址	25
5・10号住居址	28
5・11号住居址	29
5・12号住居址	30
5A・01号住居址	31
5A・02号住居址	32
5A・03号住居址	38
5A・04号住居址	46
5A・05号住居址	48
5A・06号住居址	49
5A・07号住居址	52
5A・08号住居址	55
5A・09号住居址	58
5A・10号住居址	61
5A・11号住居址	67
5A・12号住居址	68
5A・13号住居址	71
5A・14号住居址	74
5A・15号住居址	80
5A・16号住居址	81

5A・17号住居址	82
5A・18号住居址	83
(2) 掘立柱建物址	87
5A・01号掘立柱建物址	87
5A・02号掘立柱建物址	88
(3) 溝址・溜井	89
(4) 土 坑	100
(5) 墓 坑	117
(6) グリット・表採	117
4. 下大塚北原地区 (5B・6区)	
の遺構と遺物	120
(1) 竪穴住居址	120
5B・01号住居址	120
5B・02号住居址	125
5B・03号住居址	129
5B・04号住居址	133
5B・05号住居址	134
5B・06号住居址	135
5B・07号住居址	140
5B・08号住居址	141
5B・09号住居址	142
5B・10号住居址	148
5B・11号住居址	151
5B・12号住居址	155
5B・13号住居址	159
5B・14号住居址	161
5B・15号住居址	164
6・01号住居址	168
6・02号住居址	174
6・03a号住居址	179
6・03b号住居址	187
6・04号住居址	193
6・05号住居址	196
6・06号住居址	200
6・07号住居址	204

6・08号住居址	208	(3)溝 址	264
6・09号住居址	212	(4)土坑・土器溜り・井戸	275
6・10号住居址	216	(5)墓 坑	289
6・11号住居址	219	(6)水 田 址	295
6・12号住居址	225	(7)グリッド・トレンチ・表採	296
6・13号住居址	227	5. 本動堂台地区 (7区)	
6・14号住居址	229	の遺構と遺物	301
6・15号住居址	231	(1)塹穴住居址	301
6・16号住居址	232	7・01号住居址	301
6・17号住居址	241	7・02号住居址	305
(2)掘立柱建物址	243	7・03号住居址	308
5B・01号掘立柱建物址	243	7・04号住居址	311
6・01号掘立柱建物址	244	7・05号住居址	315
6・02号掘立柱建物址	246	7・06号住居址	320
6・03号掘立柱建物址	247	7・07号住居址	322
6・04号掘立柱建物址	247	7・08号住居址	326
6・05号掘立柱建物址	248	7・09号住居址	332
6・06号掘立柱建物址	249	7・10号住居址	334
6・07号掘立柱建物址	249	7・11号住居址	336
6・08号掘立柱建物址	250	7・12号住居址	341
6・09号掘立柱建物址	252	7・13号住居址	350
6・10号掘立柱建物址	252	7・14号住居址	355
6・11号掘立柱建物址	253	7・15号住居址	358
6・12号掘立柱建物址	255	7・16号住居址	361
6・13号掘立柱建物址	256	7・17号住居址	363
6・14号掘立柱建物址	257	7・18号住居址	364
6・15号掘立柱建物址	257	7・19号住居址	365
6・16号掘立柱建物址	258	7・20号住居址	370
6・17号掘立柱建物址	259	(2)溝 址	371
6・18号掘立柱建物址	260	(3)土坑・粘土溜り	383
6・19号掘立柱建物址	261	(4)墓 坑	393
6・20号掘立柱建物址	262	(5)グリッド・トレンチ・表採	393
6・21号掘立柱建物址	263		

## 挿図目次

第1図	篠原清太地区(5・5A区)遺構配置図…	1	第35図	5・09号住居址…	26
第2図	下大塚北原地区(6・5B区)・本勸堂台地区 (7区)遺構配置図…	2	第36図	5・09号住居址電…	27
第3図	5・01号住居址…	4	第37図	5・09号住居址出土遺物…	27
第4図	5・01号住居址電…	5	第38図	5・09号住居址接合分布図…	27
第5図	5・01号住居址出土遺物…	5	第39図	5・10号住居址…	28
第6図	5・01号住居址遺物接合分布図…	6	第40図	5・11号住居址…	29
第7図	5・02号住居址…	8	第41図	5・11号住居址電…	30
第8図	5・02号住居址電…	8	第42図	5・11号住居址出土遺物…	30
第9図	5・02号住居址出土遺物…	8	第43図	5・12号住居址…	30
第10図	5・02号住居址接合分布図…	9	第44図	5A・01号住居址…	31
第11図	5・03号住居址…	11	第45図	5A・01号住居址電と掘り方…	32
第12図	5・03号住居址…	12	第46図	5A・02号住居址…	34
第13図	5・03号住居址電…	12	第47図	5A・02号住居址電と掘り方…	34
第14図	5・03号住居址接合分布図…(折り込み)		第48図	5A・02号住居址出土遺物…	35
第15図	5・03号住居址出土遺物…	15	第49図	5A・02号住居址出土遺物…	36
第16図	5・03号住居址出土遺物…	16	第50図	5A・02号住居址接合分布図…	37
第17図	5・04号住居址…	17	第51図	5A・03号住居址…	39
第18図	5・04号住居址電…	18	第52図	5A・03号住居址…	40
第19図	5・04号住居址出土遺物…	18	第53図	5A・03号住居址電と掘り方…	40
第20図	5・05号住居址…	19	第54図	5A・03号住居址出土遺物…	41
第21図	5・05号住居址電…	19	第55図	5A・03号住居址出土遺物…	42
第22図	5・05号住居址出土遺物…	19	第56図	5A・03号住居址接合分布図…(折り込み)	
第23図	5・05号住居址接合分布図…	20	第57図	5A・03号住居址出土遺物…	45
第24図	5・06号住居址…	21	第58図	5A・04号住居址…	46
第25図	5・06号住居址電…	21	第59図	5A・04号住居址電…	47
第26図	5・06号住居址出土遺物…	21	第60図	5A・04号住居址出土遺物…	47
第27図	5・07号住居址…	22	第61図	5A・04号住居址接合分布図…	47
第28図	5・07号住居址…	23	第62図	5A・05号住居址…	48
第29図	5・07号住居址出土遺物…	23	第63図	5A・05号住居址電…	49
第30図	5・07号住居址接合分布図…	23	第64図	5A・05号住居址出土遺物…	49
第31図	5・08号住居址…	24	第65図	5A・05号住居址接合分布図…	49
第32図	5・08号住居址電…	25	第66図	5A・06号住居址…	50
第33図	5・08号住居址出土遺物…	25	第67図	5A・06号住居址電…	51
第34図	5・08号住居址接合分布図…	25	第68図	5A・06号住居址出土遺物…	51
			第69図	5A・06号住居址接合分布図…	51

第70図	5 A・07号住居址	53	第108図	5 A・17号住居址出土遺物	83
第71図	5 A・07号住居址出土遺物	53	第109図	5 A・18号住居址	84
第72図	5 A・07号住居址接合分布図	54	第110図	5 A・18号住居址	85
第73図	5 A・08号住居址	56	第111図	5 A・18号住居址電	85
第74図	5 A・08号住居址電	56	第112図	5 A・18号住居址出土遺物	85
第75図	5 A・08号住居址出土遺物	57	第113図	5 A・18号住居址接合分布図	86
第76図	5 A・08号住居址接合分布図	57	第114図	5 A・01号掘立柱建物址	87
第77図	5 A・09号住居址	59	第115図	5 A・02号掘立柱建物址	88
第78図	5 A・09号住居址電	59	第116図	5・03号溝址	91
第79図	5 A・09号住居址出土遺物	60	第117図	5・01, 02, 04, 07号溝址	93
第80図	5 A・09号住居址接合分布図	60	第118図	5・05, 06号溝址, 及び1号福井	93
第81図	5 A・10号住居址	62	第119図	5 A・01号溝址	96
第82図	5 A・10号住居址電	63	第120図	5 A・02号溝址	96
第83図	5 A・10号住居址出土遺物	63	第121図	5 A・03号溝址	96
第84図	5 A・10号住居址出土遺物	64	第122図	5 A・06~09号溝址	96
第85図	5 A・10号住居址接合分布図(折り込み)		第123図	5 A・04, 05号溝址	97
第86図	5 A・11号住居址	67	第124図	5 A・02号溝石敷部分	98
第87図	5 A・11号住居址電	67	第125図	5 A・02~04号溝出土遺物	99
第88図	5 A・11号住居址出土遺物	67	第126図	5・01, 02, 08~10号土坑	101
第89図	5 A・11号住居址接合分布図	67	第127図	5・03~07, 11, 12, 21, 23, 32号土坑	102
第90図	5 A・12号住居址	69	第128図	5・33~35, 37, 63, 68, 5 A・01, 04号土坑	103
第91図	5 A・12号住居址電	69			
第92図	5 A・12号住居址出土遺物	70	第129図	5 A・20, 32, 33, 37, 38, 62, 74, 77, 78, 82・83号土坑	104
第93図	5 A・12号住居址接合分布図	70			
第94図	5 A・13号住居址	72	第130図	5 A・72, 87, 90, 93, 100, 124, 149, 167, 169, 172号土坑	105
第95図	5 A・13号住居址電	72			
第96図	5 A・13号住居址出土遺物	73	第131図	5 A・202~204, 206, 221, 227, 231号土坑	106
第97図	5 A・13号住居址接合分布図	73	第132図	5 A・241, 247, 251, 258, 261~263, 270, 275, 285号土坑	107
第98図	5 A・14号住居址	75			
第99図	5 A・14号住居址電	75	第133図	5 A・283, 284, 288, 290, 291, 313, 317, 321, 330~332号土坑	108
第100図	5 A・14号住居址電と掘り方	76			
第101図	5 A・14号住居址出土遺物	76	第134図	5 A・333~335, 375, 378, 379, 382, 385~389号土坑	109
第102図	5 A・14号住居址接合分布図(折り込み)				
第103図	5 A・14号住居址出土遺物	79	第135図	5 A・390~396, 399~406, 413号土坑	110
第104図	5 A・15号住居址	80	第136図	5 A・414, 415, 417号土坑	111
第105図	5 A・15号住居址出土遺物	80	第137図	5・02, 11号土坑出土遺物	114
第106図	5 A・16号住居址	81	第138図	5・11, 33号土坑出土遺物	115
第107図	5 A・17号住居址	82	第139図	5・68, 5 A・50, 78, 87, 188, 203, 284, 313,	

378, 396, 402, 405号土坑出土遺物	116	第176図	5 B・09号住居址出土遺物	147
第140図	5 A・01, 02号墓坑	第177図	5 B・10号住居址	148
第141図	5 A・01号墓坑出土遺物	第178図	5 B・10号住居址	149
第142図	5・グリッド出土遺物	第179図	5 B・10号住居址電	149
第143図	5・グリッド, 5 A・グリッド, 表採出土遺物	第180図	5 B・10号住居址出土遺物	149
		第181図	5 B・10号住居址出土遺物	150
第144図	5 B・01号住居址	第182図	5 B・10号住居址接合分布図	150
第145図	5 B・01号住居址掘り方	第183図	5 B・11号住居址	152
第146図	5 B・01号住居址電	第184図	5 B・11号住居址電	152
第147図	5 B・01号住居址出土遺物	第185図	5 B・11号住居址出土遺物	152
第148図	5 B・01号住居址接合分布図	第186図	5 B・11号住居址出土遺物	153
第149図	5 B・02号住居址	第187図	5 B・11号住居址接合分布図	154
第150図	5 B・02号住居址掘り方	第188図	5 B・12号住居址	156
第151図	5 B・02号住居址電	第189図	5 B・12号住居址掘り方	156
第152図	5 B・02号住居址出土遺物	第190図	5 B・12号住居址電	157
第153図	5 B・02号住居址接合分布図	第191図	5 B・12号住居址出土遺物	157
第154図	5 B・03号住居址	第192図	5 B・12号住居址出土遺物	158
第155図	5 B・03号住居址掘り方	第193図	5 B・12号住居址接合分布図	158
第156図	5 B・03号住居址電	第194図	5 B・13号住居址	159
第157図	5 B・03号住居址出土遺物	第195図	5 B・13号住居址出土遺物と土層説明	160
第158図	5 B・03号住居址接合分布図	第196図	5 B・13号住居址接合分布図	160
第159図	5 B・04号住居址	第197図	5 B・14号住居址	162
第160図	5 B・04号住居址出土遺物	第198図	5 B・14号住居址電	162
第161図	5 B・05号住居址	第199図	5 B・14号住居址電掘り方	162
第162図	5 B・05号住居址出土遺物	第200図	5 B・14号住居址出土遺物	163
第163図	5 B・06号住居址	第201図	5 B・14号住居址接合分布図	163
第164図	5 B・06号住居址電	第202図	5 B・15号住居址	165
第165図	5 B・06号住居址出土遺物	第203図	5 B・15号住居址出土遺物	165
第166図	5 B・06号住居址出土遺物	第204図	5 B・15号住居址出土遺物	166
第167図	5 B・06号住居址接合分布図	第205図	5 B・15号住居址接合分布図	167
第168図	5 B・07号住居址	第206図	6・01号住居址	169
第169図	5 B・07号住居址出土遺物	第207図	6・01号住居址電	169
第170図	5 B・07号住居址接合分布図	第208図	6・01号住居址電	170
第171図	5 B・08号住居址	第209図	6・01号住居址出土遺物	170
第172図	5 B・09号住居址	第210図	6・01号住居址接合分布図(折り込み)	
第173図	5 B・09号住居址電	第211図	6・01号住居址出土遺物	173
第174図	5 B・09号住居址出土遺物	第212図	6・02号住居址	175
第175図	5 B・09号住居址接合分布図(折り込み)	第213図	6・02号住居址電	175

第214図	6・02号住居址電掘り方	176	第252図	6・08号住居址接合分布図	211
第215図	6・02号住居址出土遺物	176	第253図	6・09号住居址	213
第216図	6・02号住居址出土遺物	177	第254図	6・09号住居址電	213
第217図	6・02号住居址接合分布図	178	第255図	6・09号住居址電	214
第218図	6・03 a 号住居址	180	第256図	6・09号住居址出土遺物	214
第219図	6・03 a 号住居址	181	第257図	6・09号住居址接合分布図	215
第220図	6・03 a 号住居址電	181	第258図	6・10号住居址	217
第221図	6・03 a 号住居址出土遺物	182	第259図	6・10号住居址電	217
第222図	6・03 a 号住居址出土遺物	183	第260図	6・10号住居址出土遺物	218
第223図	6・03 a 号住居址出土遺物	184	第261図	6・10号住居址接合分布図	218
第224図	6・03 a 号住居址接合分布図 …(折り込み)	184	第262図	6・11号住居址	220
第225図	6・03 b 号住居址	188	第263図	6・11号住居址掘り方	221
第226図	6・03 b 号住居址掘り方	189	第264図	6・11号住居址出土遺物	221
第227図	6・03 b 号住居址出土遺物	189	第265図	6・11号住居址出土遺物	222
第228図	6・03 b 号住居址出土遺物	190	第266図	6・11号住居址接合分布図 ……(折り込み)	222
第229図	6・03 b 号住居址接合分布図 …(折り込み)	190	第267図	6・12号住居址	225
第230図	6・04号住居址	194	第268図	6・12号住居址出土遺物	226
第231図	6・04号住居址電	194	第269図	6・12号住居址接合分布図	226
第232図	6・04号住居址出土遺物	195	第270図	6・13号住居址	227
第233図	6・04号住居址接合分布図	195	第271図	6・13号住居址電	228
第234図	6・05号住居址	197	第272図	6・13号住居址電掘り方	228
第235図	6・05号住居址電	197	第273図	6・13号住居址出土遺物	228
第236図	6・05号住居址出土遺物	198	第274図	6・13号住居址接合分布図	228
第237図	6・05号住居址接合分布図	199	第275図	6・14号住居址	229
第238図	6・06号住居址	201	第276図	6・14号住居址掘り方	230
第239図	6・06号住居址掘り方	201	第277図	6・14号住居址電	230
第240図	6・06号住居址電	202	第278図	6・14号住居址出土遺物	230
第241図	6・06号住居址出土遺物	202	第279図	6・14号住居址接合分布図	231
第242図	6・06号住居址接合分布図	203	第280図	6・15号住居址	232
第243図	6・07号住居址	205	第281図	6・15号住居址電	232
第244図	6・07号住居址掘り方	205	第282図	6・15号住居址出土遺物	232
第245図	6・07号住居址電	206	第283図	6・16号住居址	234
第246図	6・07号住居址出土遺物	206	第284図	6・16号住居址(焼失状態)	235
第247図	6・07号住居址接合分布図	207	第285図	6・16号住居址電	235
第248図	6・08号住居址	209	第286図	6・16号住居址電掘り方	235
第249図	6・08号住居址掘り方	209	第287図	6・16号住居址出土遺物	236
第250図	6・08号住居址電	210	第288図	6・16号住居址出土遺物	237
第251図	6・08号住居址出土遺物	210	第289図	6・16号住居址出土遺物	238

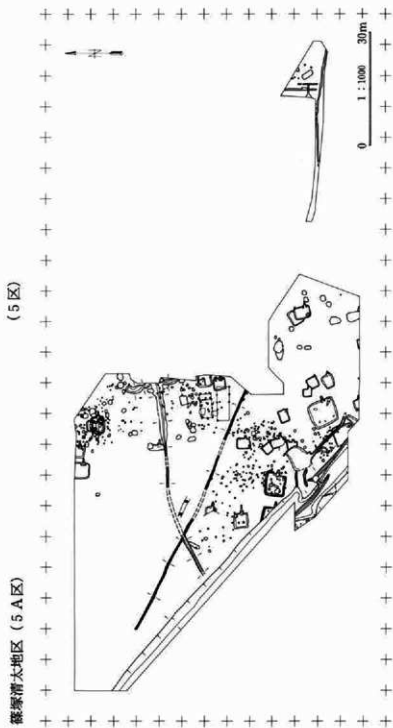


第290図	6・16号住居址接合分布図 ……(折り込み)	第328図	6・02号溝内柵列……………(折り込み)
第291図	6・16号住居址出土遺物……………241	第329図	6・02,09号溝址出土遺物……………273
第292図	6・17号住居址……………242	第330図	6・07号溝址出土遺物……………274
第293図	6・17号住居址電……………242	第331図	5B・01号土器溜り……………275
第294図	6・17号住居址出土遺物……………242	第332図	5B・01～07,18,20号土坑……………276
第295図	6・17号住居址接合分布図……………242	第333図	5B・21～23,37,38,52,56,57,59,62～65号土坑……………277
第296図	5B・01号掘立柱建物址……………243	第334図	5B・66～69,71,6・36,76,83,109,117,118,153号土坑……………278
第297図	5B・01号掘立柱建物址……………244	第335図	6・147,148,160,161,166,173,175～177,180号土坑……………279
第298図	6・01号掘立柱建物址……………245	第336図	6・186～190,193,214,216～218,222,229,251,255,257号土坑……………280
第299図	6・02号掘立柱建物址……………246	第337図	6・247～249,270,271,275号土坑……………281
第300図	6・03号掘立柱建物址……………247	第338図	6・278～280,292,298,302,303,305,317,321,325,329号土坑。01号井戸……………282
第301図	6・04号掘立柱建物址……………248	第339図	5B・01号土器溜り。11,18号土坑出土遺物……………286
第302図	6・05号掘立柱建物址……………248	第340図	6・12,76,147,160,166,217,222号土坑出土遺物……………287
第303図	6・06号掘立柱建物址……………249	第341図	6・222,223,248,249,280号土坑出土遺物……………288
第304図	6・07号掘立柱建物址……………249	第342図	6・03,04号墓坑……………289
第305図	6・07号掘立柱建物址……………250	第343図	6・01,02,05,06号墓坑……………290
第306図	6・08号掘立柱建物址……………251	第344図	6・07,10～12号墓坑……………291
第307図	6・09号掘立柱建物址……………252	第345図	6・08,09号墓坑……………292
第308図	6・10号掘立柱建物址……………253	第346図	6・01,08号墓坑出土遺物……………293
第309図	6・11号掘立柱建物址……………253	第347図	6・04,07,08,09,12号墓坑出土遺物……………294
第310図	6・11号掘立柱建物址……………254	第348図	6・水田址……………295
第311図	6・12号掘立柱建物址……………255	第349図	5B・グリッド出土遺物……………296
第312図	6・13号掘立柱建物址……………256	第350図	5B・グリッド出土遺物……………297
第313図	6・14号掘立柱建物址……………257	第351図	5B・グリッド出土遺物……………298
第314図	6・15号掘立柱建物址……………258	第352図	5B・グリッド,表探出土遺物……………299
第315図	6・16号掘立柱建物址……………258	第353図	6・グリッド,トレンチ,表探出土遺物……………300
第316図	6・16号掘立柱建物址……………259	第354図	7・01号住居址……………302
第317図	6・17号掘立柱建物址……………259	第355図	7・01号住居址掘り方……………303
第318図	6・17号掘立柱建物址……………260	第356図	7・01号住居址電……………303
第319図	6・18号掘立柱建物址……………260	第357図	7・01号住居址出土遺物……………303
第320図	6・18号掘立柱建物址……………261		
第321図	6・19号掘立柱建物址……………262		
第322図	6・20号掘立柱建物址……………262		
第323図	6・21号掘立柱建物址……………263		
第324図	6・01,04,05,07～09号溝址……………260		
第325図	6・01,04,05,07～09号溝址……………(折り込み)		
第326図	6・03号溝址……………269		
第327図	6・06,10号溝址……………270		

第358図	7・01号住居址出土遺物	304	第396図	7・08号住居址電	328
第359図	7・01号住居址接合分布図	304	第397図	7・08号住居址接合分布図 (折り込み)	
第360図	7・02号住居址	306	第398図	7・08号住居址出土遺物	331
第361図	7・02号住居址掘り方	306	第399図	7・09号住居址	332
第362図	7・02号住居址電	306	第400図	7・09号住居址出土遺物	333
第363図	7・02号住居址出土遺物	307	第401図	7・09号住居址接合分布図	333
第364図	7・02号住居址接合分布図	307	第402図	7・10号住居址	334
第365図	7・03号住居址	309	第403図	7・10号住居址掘り方	335
第366図	7・03号住居址掘り方	309	第404図	7・10号住居址電	335
第367図	7・03号住居址電	309	第405図	7・10号住居址出土遺物	335
第368図	7・03号住居址出土遺物	310	第406図	7・10号住居址接合分布図	336
第369図	7・03号住居址接合分布図	310	第407図	7・11号住居址	338
第370図	7・04号住居址	312	第408図	7・11号住居址掘り方	338
第371図	7・04号住居址掘り方	312	第409図	7・11号住居址電	339
第372図	7・04号住居址第1電	313	第410図	7・11号住居址出土遺物	339
第373図	7・04号住居址第2電	313	第411図	7・11号住居址出土遺物	340
第374図	7・04号住居址出土遺物	313	第412図	7・11号住居址接合分布図	340
第375図	7・04号住居址出土遺物	314	第413図	7・12号住居址	342
第376図	7・04号住居址接合分布図	314	第414図	7・12号住居址	343
第377図	7・05号住居址	316	第415図	7・12号住居址掘り方	343
第378図	7・05号住居址掘り方	316	第416図	7・12号住居址第1電	344
第379図	7・05号住居址電	317	第417図	7・12号住居址第2電	344
第380図	7・05号住居址電掘り方	317	第418図	7・12号住居址出土遺物	345
第381図	7・05号住居址出土遺物	317	第419図	7・12号住居址出土遺物	346
第382図	7・05号住居址出土遺物	318	第420図	7・12号住居址接合分布図 (折り込み)	
第383図	7・05号住居址接合分布図	319	第421図	7・12号住居址出土遺物	349
第384図	7・06号住居址と掘り方土層断面	320	第422図	7・13号住居址	351
第385図	7・06号住居址掘り方	321	第423図	7・13号住居址掘り方	351
第386図	7・06号住居址電	321	第424図	7・13号住居址電	352
第387図	7・06号住居址出土遺物	321	第425図	7・13号住居址出土遺物	352
第388図	7・06号住居址接合分布図	321	第426図	7・13号住居址出土遺物	353
第389図	7・07号住居址	323	第427図	7・13号住居址接合分布図	354
第390図	7・07号住居址掘り方	323	第428図	7・14号住居址	356
第391図	7・07号住居址電	323	第429図	7・14号住居址掘り方	356
第392図	7・07号住居址出土遺物	324	第430図	7・14号住居址電	357
第393図	7・07号住居址接合分布図	325	第431図	7・14号住居址出土遺物	357
第394図	7・08号住居址	327	第432図	7・14号住居址接合分布図	357
第395図	7・08号住居址掘り方	328	第433図	7・15号住居址	358

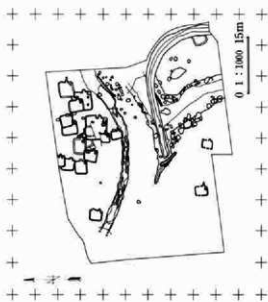
第434図	7・15号住居址掘り方	359	第458図	7・02号溝址	(折り込み)
第435図	7・15号住居址竈	359	第459図	7・03号溝址	(折り込み)
第436図	7・15号住居址出土遺物	359	第460図	7・05号溝址	377
第437図	7・15号住居址接合分布図	360	第461図	7・06号溝址	377
第438図	7・16号住居址	361	第462図	7・07号溝址	377
第439図	7・16号住居址掘り方	362	第463図	7・04号溝石敷部分	378
第440図	7・16号住居址竈	362	第464図	7・04号溝址	(折り込み)
第441図	7・16号住居址出土遺物	362	第465図	7・01～03号溝址出土遺物	381
第442図	7・16号住居址接合分布図	362	第466図	7・03～05, 07号溝址出土遺物	382
第443図	7・17号住居址	363	第467図	7・01号粘土溜り	383
第444図	7・17号住居址竈	363	第468図	7・03, 05～14, 16～18, 20号土坑	384
第445図	7・18号住居址	364	第469図	7・01, 21, 22, 27, 29, 30, 32～37号土坑	385
第446図	7・18号住居址出土遺物	364	第470図	7・38～41, 43～46, 48号土坑	386
第447図	7・18号住居址掘り方	364	第471図	7・49, 55～58, 65号土坑	387
第448図	7・19号住居址	366	第472図	7・61, 62, 64, 67～69, 71～73, 78, 80, 81号土坑	388
第449図	7・19号住居址掘り方	366	第473図	7・82～84, 103, 107, 108, 111, 114, 115, 117, 118, 124号土坑	389
第450図	7・19号住居址竈	366	第474図	7・01号粘土溜り, 21, 28, 55, 65, 78, 109, 123号土坑出土遺物	390
第451図	7・19号住居址出土遺物	367	第475図	7・01号墓坑	393
第452図	7・19号住居址出土遺物	368	第476図	7・グリッド, トレンチ出土遺物	394
第453図	7・19号住居址接合分布図	369	第477図	7・トレンチ, 表探出土遺物	395
第454図	7・20号住居址	370			
第455図	7・20号住居址掘り方	370			
第456図	7・20号住居址出土遺物	370			
第457図	7・01号溝址	372			





第1図 藤原清太地区（5・5A区）遺構配置図

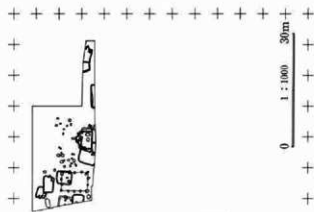
本勸堂台地区 (7区)



下大塚北原地区 (6区)



(5B区)



第2図 下大塚北原地区 (5B・6区)・本勸堂台地区 (7区) 遺構配置図

### 3. 篠塚清太地区（5・5A区）の遺構と遺物

篠塚清太地区は、県道寺尾・藤岡線を挟んで微高地上の5・5A区と、北東方向へ緩やかなスロープの4B区があり、その東側には北東に向かって開けた谷地が入っている。基盤層である黄灰色砂質シルト層の中には、厚さ20cmの黒褐色シルトと黒褐色砂質シルト（黄灰色軽石濃集）の黒いベルト層が間層となって挟まれている。その中の黄灰色軽石は、およそ4500年前に浅間火山から噴出したAs-D軽石か、約1万年前に浅間火山から噴出した浅間一総社軽石が考えられる。	篠塚清太 基盤層 黄灰色軽石
検出した遺構は、中世・平安・奈良・古墳時代に互っている。4B区では、中世の掘立柱建物跡とそれを巡る溝があり、土坑からは北宋銭が出土している。また谷地を隔てた南側からは、奈良時代初頭の焼失住居が検出されており、同時代の良好な土器セットの知見が期待される。5・5A区は、平安時代竪穴住居が主であり、平均に規模の小さい平安時代竪穴住居の中において特に5A・03号住と呼ばれる7×6mの大型住居の存在は注目される。（4B区についての報告は第1分冊で触れている）	検出遺構 北宋銭 焼失住居 大型住居

#### (1) 竪穴住居址

##### 5・01号住居址

##### 遺 構（押図番号第3図 写真番号P L-103）

本住居址は、篠塚清太地区の占地する舌状微高地の付け根の平坦部分に位置し、東側は4B区に向かって北東方向への緩やかなスロープが浅い小谷へと連なっている。所在するグリッドはD14・88であり、現況での標高は86.00m、確認面では85.30mを測る。5・09号住と北側部分で重複し、最寄りの住居址は15mを隔てて西に5・02号住と5・05号住が壁を接するようにして存在する。集落は、本住居址より東へは広がらずに、西の微高地上東西70m・南北80mの範囲に確認されている。

絶対的位置  
確認面  
相対的位置

規模は、東西2.90m・南北3.74mで面積は12.93㎡を測る。平面形態は、北壁が5・09号住との重複で不明だが、推定復元すると南北軸と東西軸の比が10：6の横長長方形となる。主軸方向は、N-81°-Eと東へ傾いている。住居址は、褐色シルト層を切り込んでおり、確認面からの高さは各壁ともほぼ60cmでかなり深く、壁は約60cmで立ち上がっている。篠塚清太地区は、暗褐色シルト層から遺構確認を開始したために、平安時代の遺構はほとんど暗褐色のAs-Bテフラ濃集層が覆土上面に再堆積しており、本住居址同様確認面から床面まで深い。覆土は4層に分かれ、土層もレンズ状で自然堆積の様相を示している。

規模・形態  
主軸方位  
壁  
覆土

床面は平坦で、床面上には68土坑が穿たれており、南西隅の68土坑は後からの掘り込みである。

床

##### 竈（押図番号第4図 写真番号P L-103）

燃焼部は、壁を掘り込み作られ、中央部は壁の延長上に位置する。側壁は、垂直に立ち上がる。袖は礎を埋置し補強されている。火床面は、焼土・灰面が薄く堆積している。煙道部は40°で立ち上がり、水平方向に掘り込まれ、天井部は焼土化し崩落せずに残る。煙道口は、垂直に立ち上がる。

燃焼部  
火床面  
煙道部

#### IV 遺跡の調査

##### 遺物の出土状態 (挿図番号第6図)

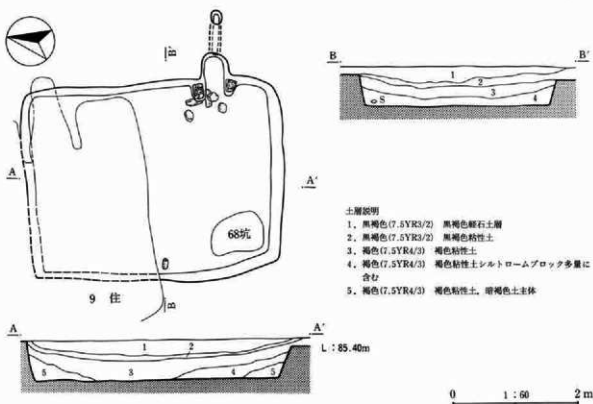
**経点数** 出土遺物総点数は415点を数え、遺物分布は竈周辺と南西隅に集中している。遺物接合分布図を見ると、平面分布に現れた接合線は単純で、接合関係のない単体の遺物が多いことを示している。  
**遺物分布** 層的な埋没状況は、順次さしたる攪乱も受けずに住居の埋没に伴って、第4層・第3層の順に遺物が廃棄・流入し堆積した様子が窺える。特に床面上の第4層には、住居廃絶時期に近接すると推測されるタイプA・タイプBに分類される土器群が、竈附近に廃棄された状態で出土している。タイプAは1があり、タイプBは16で、残りはタイプCである。

##### 出土遺物 (挿図番号第5図 写真番号PL-187)

**図示遺物** 図示した遺物は、土釜1、須恵器甕2、須恵器台付甕1、須恵器坏2、須恵器高台付埴2、  
**灰釉** 灰釉高台付埴2の10個体である。  
**須恵器** 須恵器甕22は、酸化炎焼成で頸部内面にハゼが見られる。須恵器坏1はカワラケ状を呈し、いずれも酸化炎焼成である。須恵器高台付埴13は内面黒色土器で暗文が内面に施されている。

##### 所見

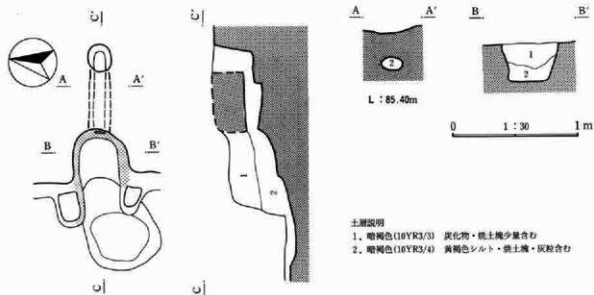
該住居址は09号住を切って存在し、また須恵器22が03住出土遺物との住居址間接合が確認され、出土状態の分析の結果03号住→01号住という時間順列が明らかになった。



第3図 5・01号住居址



3 篠塚清太地区 (5・5A区) の遺構と遺物

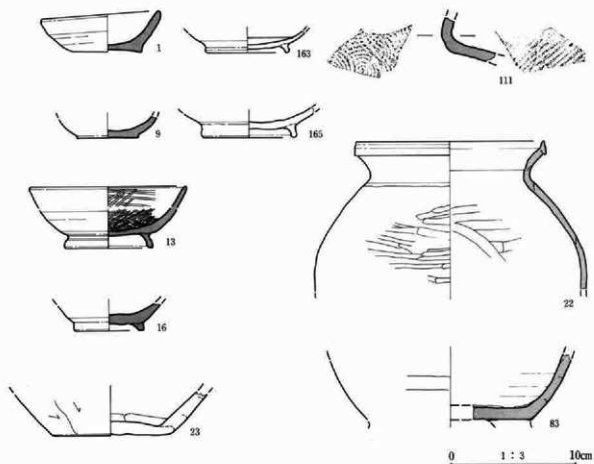


L: 85.40m

土層説明

1. 暗褐色(10YR3/3) 炭化物・粘土塊少量含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 黄褐色シルト・粘土塊・灰粒含む

第4図 5・01号住居址寛



第5図 5・01号住居址出土遺物



## 5・02号住居址

## 遺 構 (挿図番号第7図 写真番号P L-103)

本住居址はD14・95, 96グリッドに所在し、5・01号住から南西へ15mの距離にあり、現況での標高は86.00mでほとんど変わらず確認面で85.20mを測る。周囲には2m北に5・04号住と5・05号住が重複して所在し、西に2m隔てて5・03号住, 8m西南に5・06号住, 6m南に5・07号住と5・12号住が位置する。この住居址群の在り方から、集落址はさらに南へ展開していくことが予想される。

住居址の規模は、東西2.96・南北2.36mを測り、面積は9.93㎡である。平面形態は、東西軸と南北軸の比が4対3であり縦長長方形の範囲に入れられる。主軸方向はN-67°-Eである。また住居址確認面から床までの深さは60cmであり、壁は北・西壁が明瞭出90°に近いが、東・南壁は緩やかな約65°の立ち上がりを示している。覆土は5層に分層でき、上層(第2層)に褐色粘質土が埋没し、下層(第4層)にはシルト質土が入り、水の影響を多分に受けていると思われる。

最下層の第5層には人為的な堆積が感じられるが、その他は自然な堆積の状態が認められる。床面は中央部が若干の緩やかな窪みを持つが、掘り方と言うほどではない。

## 竈 (挿図番号第8図 写真番号P L-103)

燃焼部は壁外に位置する。側壁は垂直に立ち上がる。袖は一部地山が内湾気味に掘り残される。燃焼部火床面は10cm程の厚みで、黒色灰面上に焼土炭化物・灰の混土層が見られ、最終焼却物と考えられる。煙道部は奥壁が垂直に12cm立ち上がった部分より、約30°の角度で伸びる。

## 遺物の出土状態 (挿図番号第10図)

出土遺物総点数は214点で、遺物分布は住居址北東隅に偏っている。掲載しえた遺物は出土遺物総点数からすると4個体と僅少で、廃棄あるいは流入した小破片の土器の多さを物語っている。電内出土遺物の24, 28はAタイプで、26はBaタイプである。垂直分布を見ると27に代表される北東隅の土器群は第3層と第4層の境界附近に分布し、北東方向からの一時的な流入が予想される。

## 出土遺物 (挿図番号第9図 写真番号P L-187)

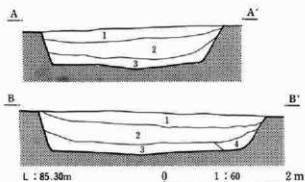
図示しえた遺物は、土師器壺1, 土師器小壺1, 土師器環2の4個体である。

土師器壺26は、頸部に横篋削りが施され、肩が張り口縁部の外反するタイプと推測される。土師器環は、口径が12cmタイプで、底部が湾曲して内湾する口縁部に至る。

## 所 見

土層観察からの推測だが、該住居址の第5, 第6層は人為的な堆積様相が極めて強く、貼床である可能性が考慮される。該住居址の遺物廃棄は、ある程度埋没が進んだ過程であったと思われる。

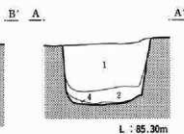
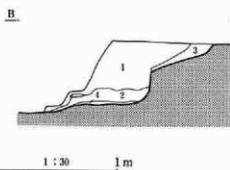
IV 遺跡の調査



土層説明

1. 褐色(7.5YR4/2) 褐色粘性土、黒色味強
2. 褐色(7.5YR4/3) 褐色粘性土、As・B・焼土少量含む
3. 褐色(7.5YR4/2) 褐色粘性土、赤褐色シトローム50%、炭化物  
焼土少量含む
4. 褐色(7.5YR4/3) 褐色粘性土、炭化物焼土多量に含む(竈左袖附  
近)

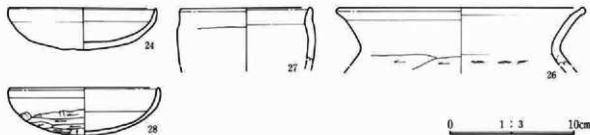
第7図 5・02号住居址



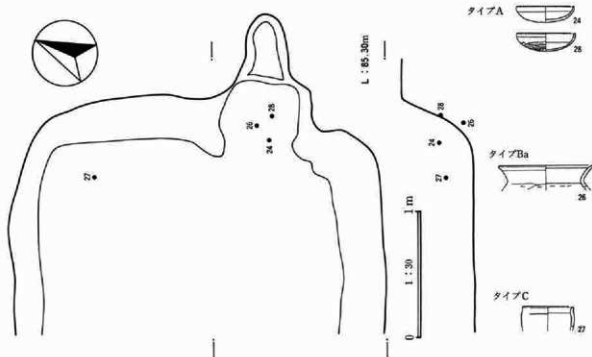
土層説明

1. 褐色(7.5YR4/3) 褐色粘性土、焼土・炭化物少量含む
2. 褐色(7.5YR4/3) 赤褐色焼土塊・炭化物・灰多量に含む
3. 黄褐色(2.5Y5/4) 黄褐色シトローム、自然堆積土
4. 黄褐色(2.5Y5/4) 黒色炭化物、灰層

第8図 5・02号住居址竈



第9図 5・02号住居址出土遺物



第10図 5・02号住居址接合分布図

## 5・03号住居址

遺 構 (挿図番号第11・12図 写真番号P L-104)

本住居址の所在するグリッドは、D14・84, 85, 94, 95の4グリッドにまたがっており、5・02号住の西2mに位置し、5・02号住とその北の5・04, 5・06号住とすぐ西の5・06号住とにおよそ2mの間隔で挟まれるようにして存在する。確認面での標高は85.10mを測り、周囲の住居址と平坦である。

規模は、東西6.60m・南北6.50mを測り、面積は43.82㎡で、本遺跡中最大級の規模の住居址である。平面形態は、ほぼ正方形を呈するが、若干東壁が長く、主軸方位はN-70°-Eである。確認面から床面までの深さは各壁とも約70cmと深く、およそ70°の角度で立ち上がっている。住居址は、褐色粘質土層を切り込んで形成されている。第4層に分かれる覆土中には、全面に焼土粒と炭化物が混入しており、何等かの形で火焼の影響を受けたことが予想される。また、壁崩壊土と見られるシルトローンを主体とした褐色土が西壁隅に流れ込み、埋没時において西側からの何等かの圧力のあったことが窺える。

床面はフラットで、床面上には北壁際に長さ250cm・幅55cmの範囲に焼土層が、床面との間に厚さ約10cmの暗褐色土とシルトの混土層を間層にして、言わば浮いた状態で広がっている。ピットは床面上では確認されず、貼床を剥がした状態で掘り方という形で検出された。南隅のP1～P12へと時計回りにナンバリングされ、P2を除いて柱穴痕であると推定される。柱穴の様相と土層断面から本住居址は、3回の建て替えを経ていることが看取される。1回目はP1, P3, P4, P6の柱穴が同心円上に並び、しかも貯蔵穴が対角線上に乗るという極めて企画性の強いプランである。2回目はP8, P10, P11, P5の柱穴が約40cm中に入った1回目との相似性を

絶対的位置

相対的位置

確認面

規模

形態  
主軸方位

覆土

床

ピット

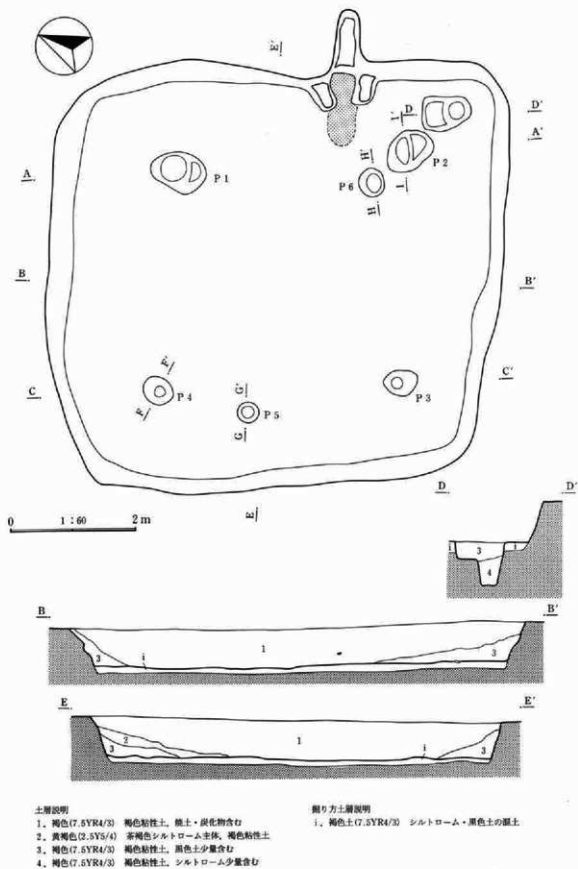
建て替え

#### IV 遺跡の調査

	示すプランで、やはり対角線上に貯蔵穴がきている。3回目は、P7, P9, P4 (1回目と重複) P12で、わずかに南北に長い長方形プランを呈し、柱穴位置はほぼ1回目と2回目の中間に置かれている。この3回の建て替えの順序は①住居の企画プランに従って柱穴位置が決まる、②企画プランを崩さない形で柱穴を相対的に内側へ入れてバランスを保つ、③これ以上内へも外へも柱を動かさないで、1回目と2回目の中間に柱を建てる、と言ったことが推察される。また貯蔵穴も企画プランと土層断面の観察から、1回目と2回目の築造時に2回掘られている可能性
入り口施設	がある。P5については、いわゆる“第5のピット”として入り口施設との見方もあるが、周辺にさしたる硬化面も馬蹄形状の高まりも認められず、竈に対面する西壁際1mの位置に存在する
貼床	といういわば状況証拠のみなので、ここでは指摘だけにとどめておく。床面は貼床を施しており、その構成土は褐色粘質土・黄褐色シルト・黒褐色シルトの混土層である。
	竈 (挿図番号第13図 写真番号P L-104)
燃焼部	燃焼部は壁を掘り込み作られ、中心は壁の延長線上に位置する。側壁は垂直に立ち上がり、上部から2/3部分まで焼土化している。袖は、内湾気味に焚き口部に崩落土が見られる。火床面は、奥壁に向かいゆるやかに上がり、灰面が薄く残る。煙道部はほぼ垂直に立ち上がり、水平方向に揺られ、煙道口からゆるく立ち上がる。天井部は一部崩落せずに残る。
火床面	
煙道部	
	遺物の出土状態 (挿図番号第14図)
総点数 掲載遺物 平面分布	出土遺物総点数は1250点を超え、掲載遺物も32個体に上る。遺物分布は、南壁附近に薄いがほぼ住居址全面に亘って厚い分布が認められる。遺物接合線は錯綜しており、平面分布では接合線
層位分布	が大きく住居址全体に引き出され、遺物の散乱した様相を示している。層位的には、接合された遺物の位置関係が上下に大きく乱れており、また床面附近からの遺物の出土はほとんどなく、埋没が進んでからの混入が多いと考えられる。最も破片の散らばりの範囲の大きい土器は、土師器壺48で5×3m四方に及び、次いで土師器小甕50の散布範囲が広く、須恵器壺53も同様な散布範囲
タイプ	をもっている。また土師器壺48は、垂直方向にも最も大きな散布傾向を示している。かような理由からかタイプAはなく、タイプBが2個体 (37, 45) で、後はタイプCに分類される。
	出土遺物 (挿図番号第15・16図 写真番号P L-187)
図示遺物	図示した遺物は、土師器壺7, 土師器小甕3, 土師器环12, 須恵器壺破片2, 須恵器环3, 須恵器高台付環1, 須恵器盤1, 須恵器环蓋1, 須恵器台付盤1, 須恵器鐮鉢1の32個体である。
土師器	土師器壺は、①胴部にあまり膨らみをもたず縦位の寛削りを施す47, ②胴部中位に膨らみもち斜縦位の寛削りを施す44, 48, ③胴部が球状を呈する46に分けられる。土師器環はかなりヴァリエティに富んでおり、①縁線を口縁部と体部の境に有するもの、②尖り気味の丸底から内湾する口縁に至るもの、③口縁部が短く内傾するもの等に分類される。
須恵器	須恵器環は法量に大小があり、大の60は回転寛切りの底部をもち、小の57, 58は底部回転寛切り後寛撫でが施され、特に58は内面に櫛状工具による成形を有する。須恵器鐮鉢55は底部外面に意図的な凹凸が施され、底部内面には使用痕と目される擦痕が観察される。

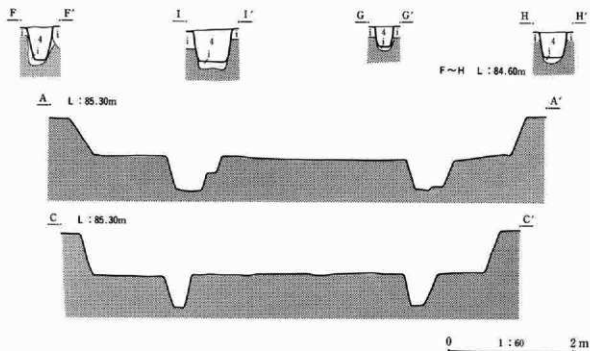
#### 所 見

前述のように、貼床を抜いた状態での遺構確認がなされているため、遺物は皆浮いた状態で検出された。加えて、該住居址のような遺物出土状況パターンは、焼失住居のそれに類似している。

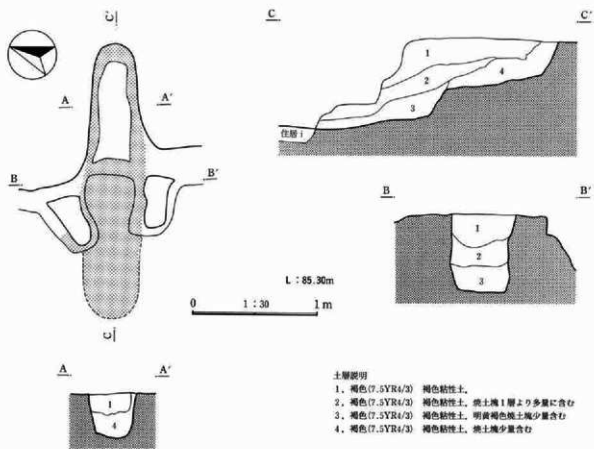


第11図 5・03号住居址

IV 遺跡の調査

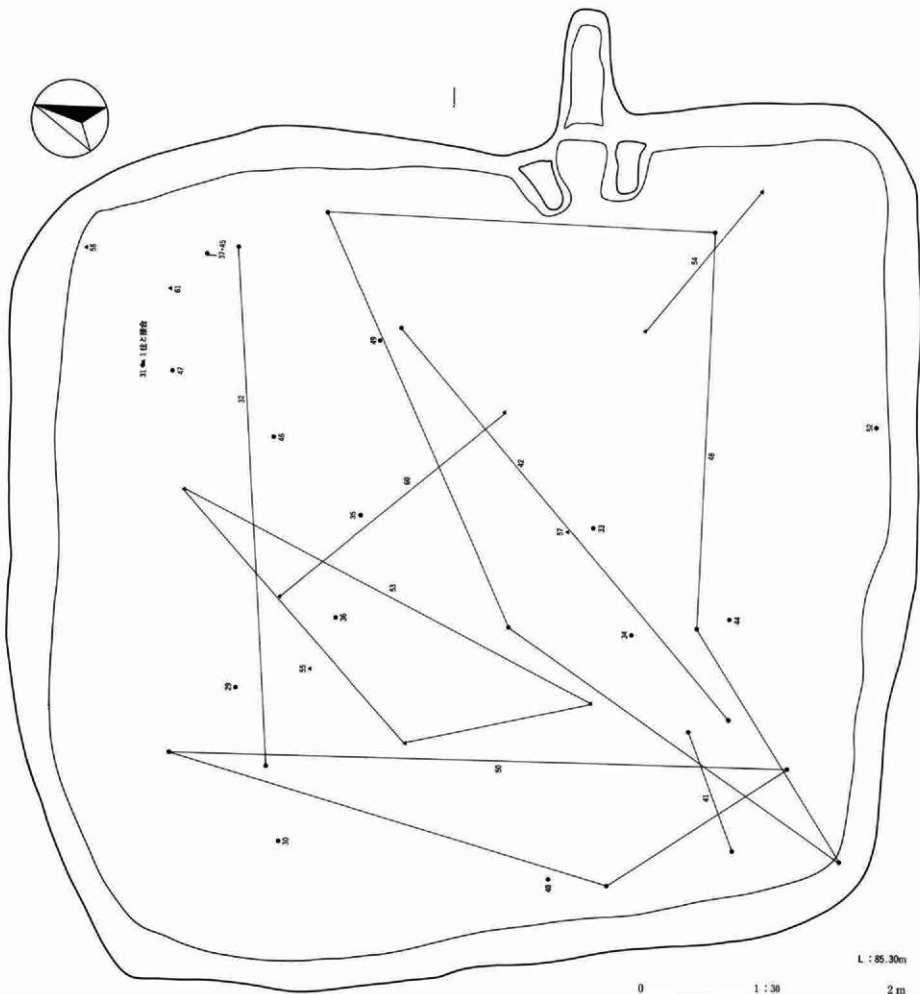


第12図 5・03号住居址

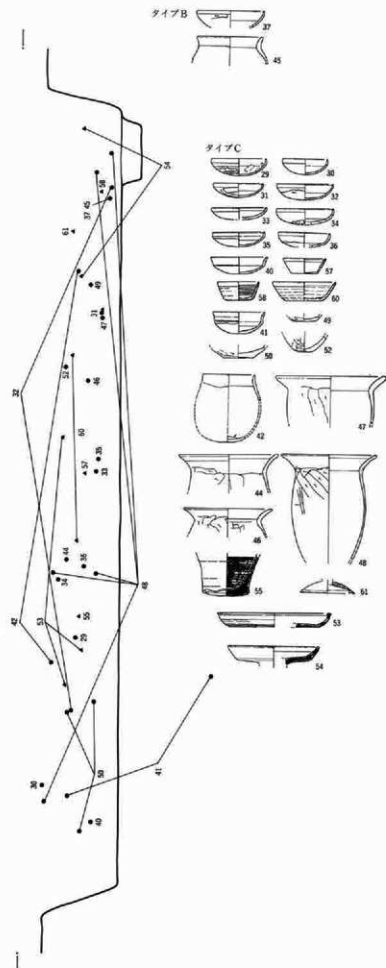


第13図 5・03号住居址竈



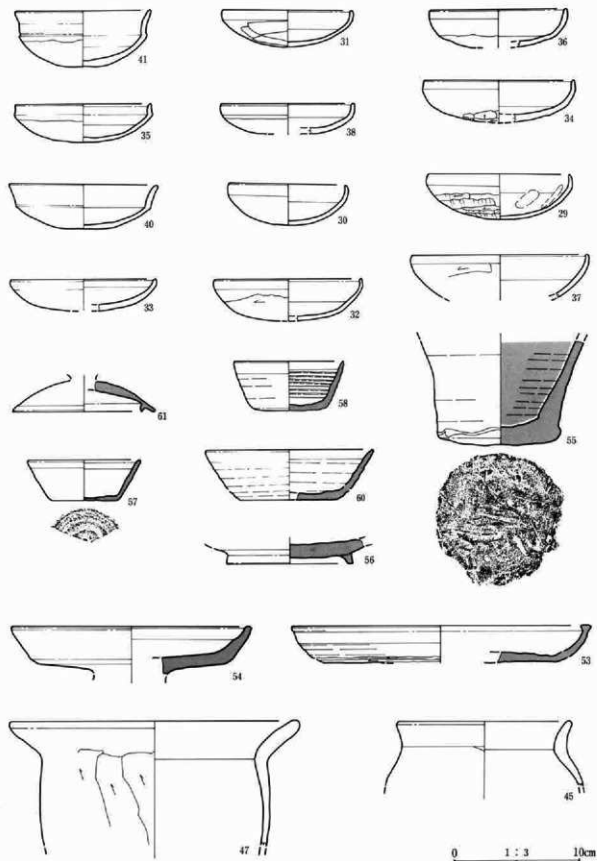


第14図 5・03号住居址接合分布図



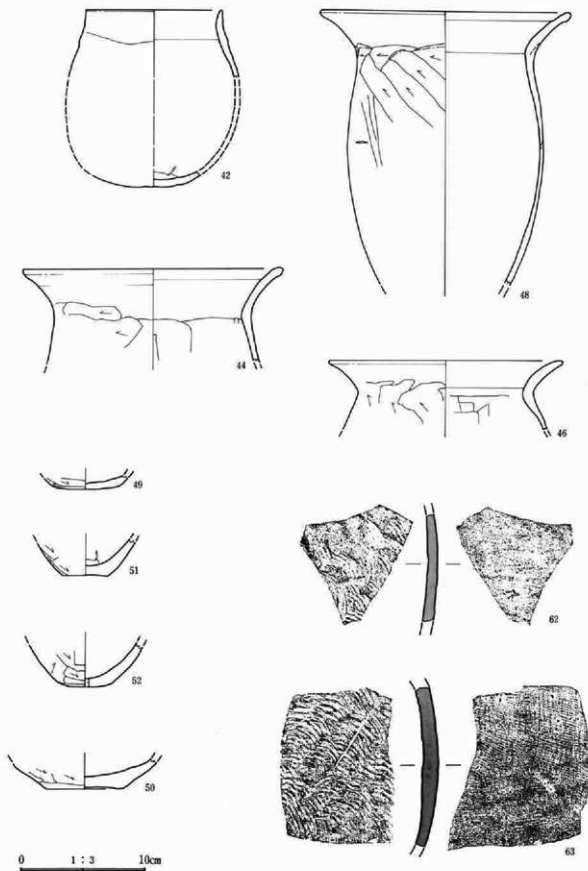


3 篠原清太地区（5・5A区）の遺構と遺物



第15図 5・03号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第16図 5・03号住居址出土遺物

## 5・04号住居址

遺 構（挿図番号第17図 写真番号P L-104）

本住居址の所在するグリッドはD14・85で、5・03号住の北東2mに近接して所在し、南東隅と竈の一部を重複して隣合う5・05号住に切られ、確認面での標高は85.10mを測る。

規模は東西1.76m・南北2.06mを測り、面積は4.68㎡とかなりのミニ住居である。平面形態は、南東隅を5・05号住に切られているため推定だが、現況では、西壁を上底、東壁を下底、南壁を斜辺とする台形状を呈し、主軸方位はN-82°-Eである。住居址の確認面からの深さは平均30cmで、東壁が60°と幾分緩やかな立ち上がりを見せているが、その他の壁は90°に近い。覆土は2層に分かれ、焼土・炭化物を多量に含む褐色粘質土で、下層には黄褐色シルトロームが混入している。この覆土の様相は5・03号住に類似していて、火焼の影響を推測させる。

床面には貼床は認められず、北西隅に僅かな窪みが見られるけれども土坑というほどでなく、全体として平坦である。

竈（挿図番号第18図 写真番号P L-104）

燃焼部は壁外に作られ、僅かに袖部分が残る。1/2を05号住居により壊されている。火床面は炭化物・焼土塊がレンズ状に、約13cm程堆積している。煙道部はない。

遺物の出土状態（挿図番号第17図）

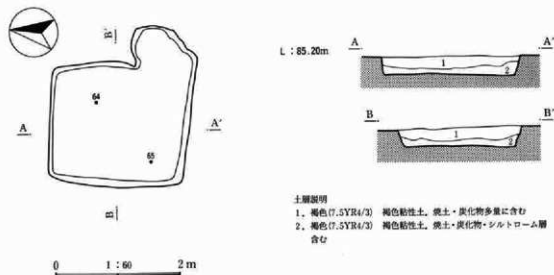
出土遺物総点数は136点と比較的少なく、住居址中央部に散布する傾向が窺える。掲載遺物は3個体に過ぎず、土師器環66は埋土遺物として処理されている。層位的に土師器甕64はタイプBに区分され、土師器環65は第1層と第2層の境界に位置しタイプCとされる。土層と遺物の埋没状況からは、自然な埋没過程が推測される。

出土遺物（挿図番号第19図）

土師器環65は厚手の内湾タイプで、66は口縁の内傾するタイプである。

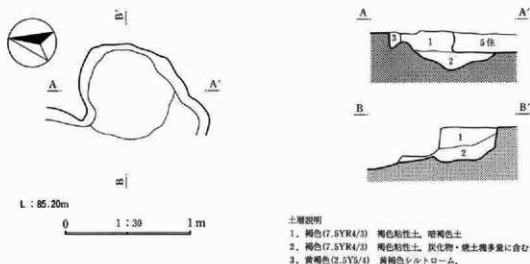
所 見

電右袖を中心とした全体の1/2が05号住により切られたために、竈が西南隅に寄った形になっているが、本来は東壁に南から1/4のあたりに主軸をもつ竈が備えつけられていたと思われる。

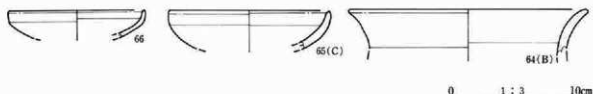


第17図 5・04号住居址

#### IV 遺跡の調査



第18図 5・04号住居址電



第19図 5・04号住居址出土遺物

#### 5・05号住居址

遺 構 (挿図番号第20図 写真番号PL-105)

**絶対的位置** 本住居址の所在するグリッドはD14・85, 86, 95, 96にまたがっており、住居址は北西隅で5・04号住を切って存在し、5・02号住がすぐ2m南に位置する。検出面での標高は85.10mで若干検出面が深くになっている。

**規模・形態** 規模は東西2.52m・南北2.72mで、面積7.50m<sup>2</sup>の規模をもっている。平面形態は、北西隅が04

**壁** 号住と重複して切り合っているため不確定要素を残すものの、ほぼ各壁とも直角に交わり東西軸と南北軸の比も1対1と見て良く、設計に正方形プランを意図していることが窺える。主軸方位

**主軸方位** はN-67°Eである。確認面からの深さは15cmと浅いが、壁はほぼ90°に立ち上がっている。住居址の覆土は2層。焼土・炭化物を多く含み赤褐色を呈し火熱が加わった様子がある。また、下層にはAs-Bパミスが10%混入しており、本住居址の時期推定に手掛かりを与えるものと思われる。

**床** 床面は、貼床もなく西壁寄りで緩やかな窪みを有するが、他は段差もなく平坦である。

竈 (挿図番号第21図 写真番号PL-105)

**燃焼部** 燃焼部はコーナーに位置し、壁を僅かに掘り込む。袖は、内壁の焼け等あまり残存状況はよくないため削除。火床面は、床面とほぼ同レベルである。煙道部は、緩やかな立ち上がりを持つ。

**遺物の出土状態** (挿図番号第23図)

**検点数** 出土遺物総点数は203点で、遺物は住居址の東半部に主に分布している。層位的には、床面直上

**遺物分布**

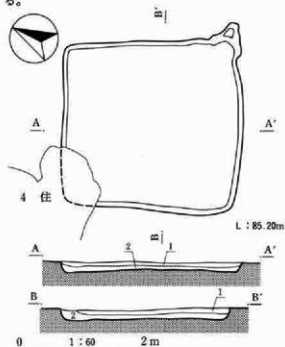
のものと、第1層と第2層の境界面に分布するものに大きく区分される。掲載遺物は4個体で 掲載遺物  
 竈内出土の土師器壺69がタイプBで、その他はタイプCである(土師器壺70は、タイプCとは言っ タイプ  
 ても壁に近く、廃絶初期に埋没したのと考えられる)。須恵器小甕71は、土師器坏67と同様に第  
 2層埋没初期に流入したものと推察される。

#### 出土遺物 (挿図番号第22図)

土師器壺69は胴部に膨らみがなく、縦篋削りが施され厚手の器壁である。土師器坏67は、篋削 土師器  
 りが口縁部付近まで施され、丸底の深い器形である。

#### 所見

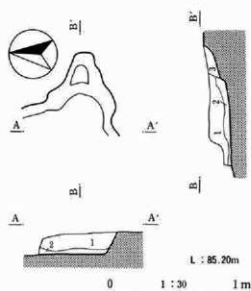
As-B 軽石混入の覆土様相では、該住居址の形成時期は12世紀初頭以後で、出土遺物との時間軸  
 の齟齬がある。ところが、埋没状況から判断すると、遺物は埋没初期の流入によるものと思われ  
 る。



#### 土層説明

1. 褐色(7.5YR4/3) 褐色粘性土、赤褐色・黒土・炭化物多量に含む
2. 褐色(7.5YR4/3) 褐色粘性土、赤褐色・黒土・炭化物多量に含む、A-B少量含む

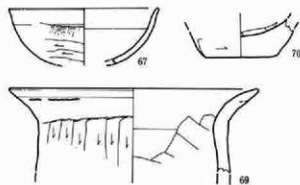
第20図 5・05号住居址



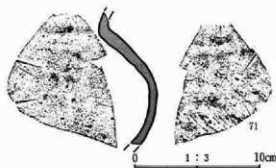
#### 土層説明

1. 褐色(7.5YR4/2) (住居址埋没土1層)
2. 褐色(7.5YR4/2) 褐色粘性土、黒土・炭化物多量に含む
3. 黄褐色(2.5Y3/4) 黄褐色シルトローム。

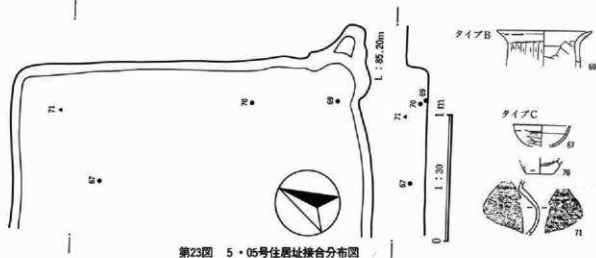
第21図 5・05号住居址竈



第22図 5・05号住居址出土遺物



#### IV 遺跡の調査



#### 5・06号住居址

遺 構 (挿図番号第24図 写真番号P L-105)

**絶対的位置  
相対的位置** 本住居址の所在するグリッドはD14・94、D15・04で、住居址は03号住の西壁1.5mに近接して位置し、西半分を調査区外に突出させている。また06号溝によって竈と東北隅の上面を掠め取られている。確認面での標高は85.20mを測る。

**確認面** 規模は東西2.62m・南北5.10m、推定面積15.1㎡である。平面形態は、西半分が調査区外のため推定だが、柱穴、貯蔵穴の位置などから5・03号住型の正方形プランを呈すると思われる。主軸方位はN-72°-Eを示す。確認面から床面までの深さは40cmで、壁は75°でしっかりと掘り上げられている。住居址の覆土は2層に分けられ、黄褐色シルトブロックを含む褐色粘質土を主体にして、壁際には焼土・炭化物を含む暗褐色土が三角堆積している。

**床** 床面は平坦で、床面上には柱穴と思われるピットが北東寄り、貯蔵穴が南東隅に穿たれている。また、貯蔵穴の上部の掘り方は矩形を意識しているが、底部は円形である。床には貼床が施されており、その構成土は灰・焼土・炭化物・黄灰色シルトブロックの混土層からなり、貼床下の掘り方はフラットである。

**竈** (挿図番号第25図 写真番号P L-105)

**焼焼部** 焼焼部は住居内に位置する。幅は狭く、奥壁に向かい炭・灰・焼土の混土が見られ、約30°の角度で立ち上がる。煙道と焼焼部の境が明瞭に区別されない形のものであろうか。

**遺物の出土状態** (挿図番号第24図)

**総点数  
遺物分布  
タイプ** 出土遺物総点数は188点を数え、遺物の多くは竈前附近に散布している。垂直分布を見ると、床面直上の遺物は少なく、10~20cm程深い遺物が多い。タイプAはなく、土師器盤72がタイプBaで住居址中央北寄りから出土し、須恵器高台付埴75はタイプCであるが竈左袖直上から出土している。また埋土遺物でタイプCに分類されるが、土師器環73は有稜環である。

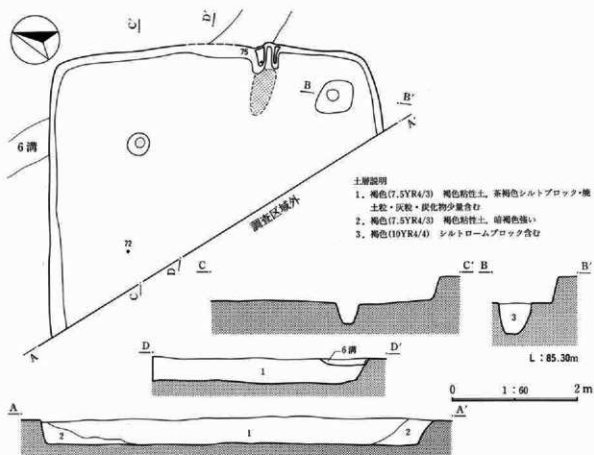
**出土遺物** (挿図番号第26図 写真番号P L-188)

**図示遺物** 土師器盤72は、体部の弱い稜線から外反する口縁部に至る。

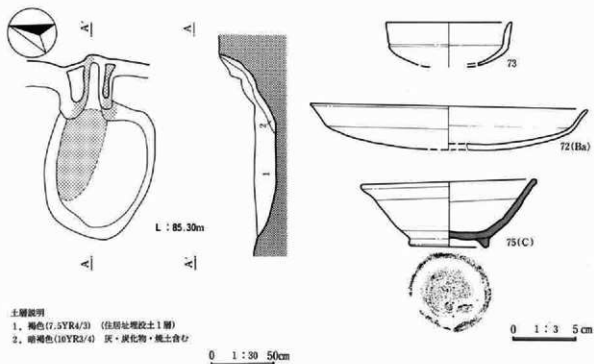
#### 所 見

須恵器高台埴75は、06号溝が出土地点で該住居址を切っているための混入遺物と理解され、本来は06号溝に所属するものと思われる。





第24図 5・06号住居址



第25図 5・06号住居址竈

第26図 5・06号住居址出土遺物

#### IV 遺跡の調査

##### 5・07号住居址

遺 構 (押図番号第27・28図 写真番号P L-105)

絶対的位置 相対的位置	本住居址の所在するグリッドはD15・05で、住居址は06号住の東南4mの所にあり、調査区外に住居址の1/2がはみ出ている。舌状微高地の基部に近い本住居址の立地状況からすると、集落はさらに調査区外の南に展開することが予想される。また、住居址確認面での標高は85.20mを測る。
確認面	
規模	規模は、東西軸のみが測定可能で2.40mを測り、プランは不明であるが、04号住と並ぶミニ住居であることが推量できる。平面形態は、竈の位置から推測すると、矩形の正方形に近い築造プランが窺える。主軸方位はN-69°-Eである。壁から床面までの深さは60cmで、住居址はオリブ褐色の粘質土層を切り込んで形成されている。覆土は3層に分かれ、土層全体に焼土と炭化物が混入し、上層では焼土がブロック状に、下層ではシルトロームがブロック状に散在している。
平面形態	
主軸方位	
覆土	
床	床面は平坦で、床面上には竈前に炭化物層が散布し、北西隅にP1が穿たれている。P1についての性格は不明である。

##### 竈

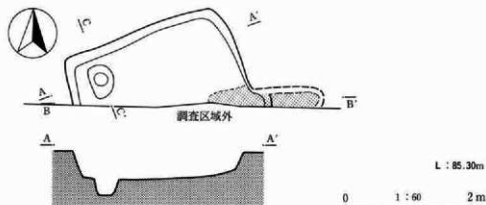
竈の全容については、主体部が調査区外のため不明である。

##### 遺物の出土状態 (押図番号第30図)

検点数	出土遺物検点数は42点と少なく、大部分の遺物が20~30cm近く床面から浮いた状態で、住居址中央部に散在している。掲載遺物は4点で、すべてタイプCに分類される。該住居址は、全体の1/2の調査であるため不明な点も多いが、層位的な埋没状況からすると、遺物は埋没がかなり進んだ時期の流入によるものと推察される。
-----	--

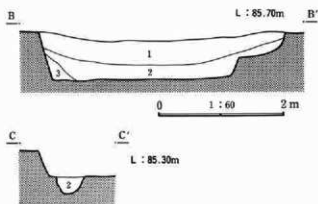
##### 出土遺物 (押図番号第29図 写真番号P L-188)

図示遺物	図示した遺物は、土師器壺1、須恵器高台付埴2、灰釉高台付皿1の4個体である。
須恵器	須恵器高台付埴77は、雑な高台貼付がなされ、底部は回転糸切り後撫で調整が行われている。
灰釉	須恵器高台付埴78は口縁部が大きく外反する珍しい器形を呈している。灰釉高台付皿164は漬け掛けの施軸方法がとられ、内面には重ね焼きの痕跡が認められる。



第27図 5・07号住居址

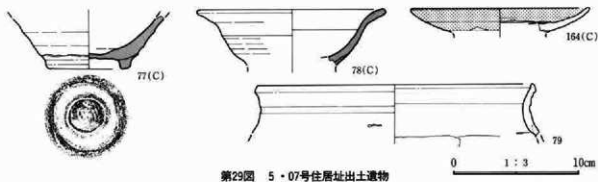
3 篠塚清太地区（5・5A区）の遺構と遺物



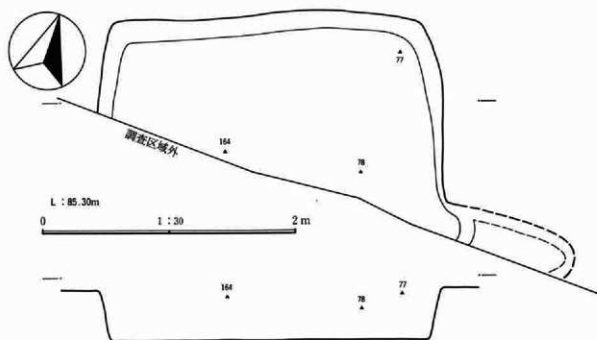
土層説明

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 褐色、炭化物・焼土混含む
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 黒褐色強く焼土・炭化物・シルトロームブロック含む
3. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 褐色土

第28図 5・07号住居址



第29図 5・07号住居址出土遺物



第30図 5・07号住居址接合分布図

IV 遺跡の調査

5・08号住居址

遺構 (挿図番号第31図 写真番号P L-106)

絶対的位置 相対的位置 確認面	本住居址はD14・74, 75グリッドに所在して、大型住居址である03号住の北6mに位置し、すぐ西4mには11号住と5A・06号住が南北に隣あって存在する。確認面での標高は85.10mである。
規模・形態	規模は東西2.90m・南北2.18m、面積7.53m <sup>2</sup> を測る。平面形態は、東西軸・南北軸の比が4:3の東西に長い縦長長方形のプランである。主軸方位はN-72°-Eと若干北寄りを指している。確認面からの深さは30cmほどで、壁は90°に近く明瞭に立ち上がっているが、東壁のラインは乱れている。
主軸方位	3の東西に長い縦長長方形のプランである。主軸方位はN-72°-Eと若干北寄りを指している。確認面からの深さは30cmほどで、壁は90°に近く明瞭に立ち上がっているが、東壁のラインは乱れている。
埋込面・壁	覆土はシルトロームブロック・焼土をわずかに含む全体に均質な褐色粘質土層で分層できなかった。床面はフラットだが西壁に向かって僅かな5cm程の傾斜を持ち、貼床は認められない。
覆土	覆土はシルトロームブロック・焼土をわずかに含む全体に均質な褐色粘質土層で分層できなかった。床面はフラットだが西壁に向かって僅かな5cm程の傾斜を持ち、貼床は認められない。
床	覆土はシルトロームブロック・焼土をわずかに含む全体に均質な褐色粘質土層で分層できなかった。床面はフラットだが西壁に向かって僅かな5cm程の傾斜を持ち、貼床は認められない。

竈 (挿図番号第32図 写真番号P L-107)

燃焼部	燃焼部は住居内に位置し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。袖はコーナーの一部掘り残した部分を左袖として利用している。火床面は奥壁に三角堆積で灰層が残り、直上には天井崩落土と考えられる焼土塊主体の土が見られる。燃焼部の奥壁は70°で立ち上がり、煙道部は10°で斜方向に伸びる。
火床面	燃焼部は住居内に位置し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。袖はコーナーの一部掘り残した部分を左袖として利用している。火床面は奥壁に三角堆積で灰層が残り、直上には天井崩落土と考えられる焼土塊主体の土が見られる。燃焼部の奥壁は70°で立ち上がり、煙道部は10°で斜方向に伸びる。
煙道部	燃焼部は住居内に位置し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。袖はコーナーの一部掘り残した部分を左袖として利用している。火床面は奥壁に三角堆積で灰層が残り、直上には天井崩落土と考えられる焼土塊主体の土が見られる。燃焼部の奥壁は70°で立ち上がり、煙道部は10°で斜方向に伸びる。

遺物の出土状態 (挿図番号第34図)

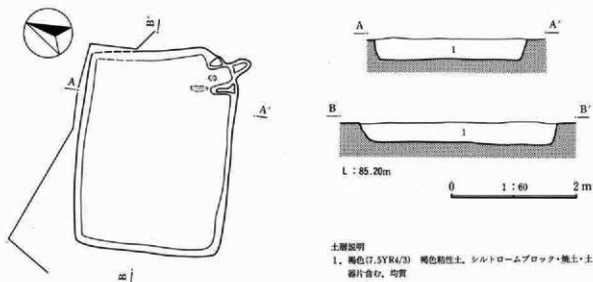
絶点数 掲載遺物 タイプ	出土遺物絶点数は149点であるが、掲載遺物は2点と僅少である。平面的には西壁附近に分布が見られる。遺物は土師器坏81がタイプBで西壁に、竈附近にタイプCの土師器壺80が出土している。
--------------------	---

出土遺物 (挿図番号第33図)

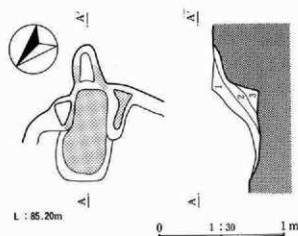
土師器	土師器坏81は丸底で口縁部が直立し、底部手持り寛削り調整が施されている。
-----	--------------------------------------

所見

南東コーナーに築かれた竈という点から05号住との同時期という見方もできるが、竈の形態(火床が住居内にあり袖を有する)と土層の状態からより古い時期の所産と思考される。



第31図 5・08号住居址



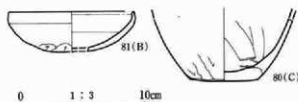
L : 85.20m

0 1 : 30 1 m

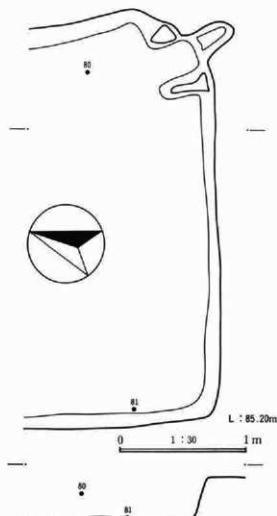
## 土層説明

1. 暗オリーブ灰(2.5GY3/1) 暗灰色粘性土
2. 暗褐色(10Y2.3/3) 赤褐色焼土塊、暗褐色土少量含む
3. 暗オリーブ灰(2.5GY3/1) 暗灰色炭化物・灰層・焼土含む

第32図 5・08号住居址竈



第33図 5・08号住居址出土遺物



第34図 5・08号住居址接合分布図

## 5・09号住居址

遺 構 (挿図番号第35図 写真番号P L-106)

本住居址は5区の東端に位置し、所在するグリッドはD14・78, 79, 88, 89の4グリッドにまたがり、01号住と南半分で重複している。確認面での標高は85.30mを測り、01号住が本住居址を切っており新旧関係は明らかである。

規模は東西3.40m・南北3.26m・面積11.28㎡である。平面形態は東南隅の張った南壁を斜辺とする台形プランと見られる。主軸方位はN-60°-Eを指す。確認面からの深さは西壁で80cm・北壁で70cmと深く、壁は西・北壁ではほぼ90°の明瞭な立ち上がりを示している。しかし、5・01号住に切られている東・南壁は約20cmを残すのみである。住居址の覆土は4層に分かれるが、暗褐色土層全体に黄灰色シルトロームが多量混入（80%）し、急速な埋没過程を経たことが窺える。

床面はフラットで貼床もなく、床面上には南東コーナーに隅丸方形の掘り方を有する貯蔵穴（長径54cm、短径42cm、深さ70cm）があり、この覆土も南側からのある種の圧力の存在を示す埋没状態である。

絶対的位置  
確認面  
規模・形態  
主軸方位  
壁  
覆土  
床

#### IV 道路の調査

##### 竈 (挿図番号第36図 写真番号P L-107)

**燃焼部** 燃焼部は住居内に位置する。袖は01号住と重複する。焚き口前に灰掻き穴あり。火床面はほぼ垂直に立ち上がる。煙道部は15°~20°の角度で外方向へ伸びる。

**火床面**

**煙道部**

##### 遺物の出土状態 (挿図番号第38図)

**総点数** 出土遺物総点数は81点で、01号住と重複しており、上部の遺物は01号住遺物と混在している可能性がある。遺物の平面分布は中央部に偏っており、層位的には各層に互って遺物の垂直分布が見られる。掲載遺物はタイプAが須恵器環12, 坏蓋20, 21で、タイプBが土師器甕82である。

**平面分布**

**垂直分布**

**タイプ**

##### 出土遺物 (挿図番号第37図 写真番号P L-188)

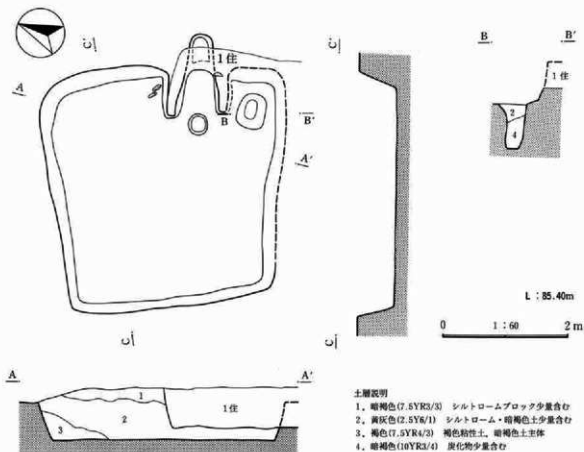
**図示遺物** 図示しえた遺物は、土師器甕1, 須恵器環1, 須恵器坏蓋2の4個体である。

**須恵器**

須恵器環12は酸化炭焼成で、底部回転覚切り後寛撫で調整が施されている。須恵器坏蓋20, 21は、堅緻な焼成で僅かに自然釉がかかっている。

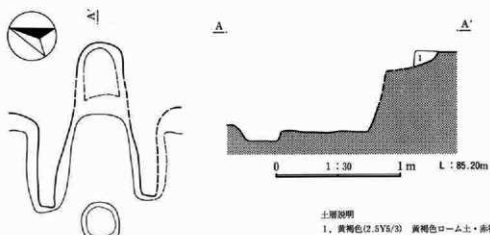
##### 所見

土器組成 (カエリのある坏蓋・須恵器環・土師器長甕) や覆土様相・電形態 (火床を住居址内にもつ)・住居址の主軸方向等の諸要素の類似から03号住との同時存在の可能性が考慮される。

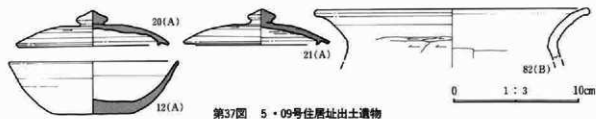


第35図 5・09号住居址

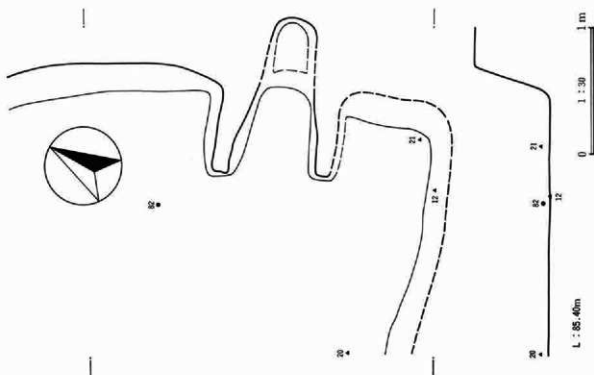
3 篠原清水地区（5・5A区）の遺構と遺物



第36図 5・09号住居址竈



第37図 5・09号住居址出土遺物



第38図 5・09号住居址接合分布図

#### IV 遺跡の調査

##### 5・10号住居址

遺 構 (挿図番号第39回 写真番号P L-107)

- 絶対的位置** 本住居址は集落の東南端に位置し、南側の調査区外から僅かに住居の北東隅部分を調査区内に覗かせているのみで、その全容は窺い知れない。所在するグリッドはD15・07である。住居址は
- 確認面** オリーブ褐色の旧表土を切り込んでおり、確認面での標高は86.25mを測る。最寄りの住居址は、電部分だけが調査されている12号住で8m西に位置する。
- 規模** 規模は北壁がかろうじて東西2.24mを測れるのみである。それゆえに平面形態は不明であるが、
- 主軸方位** 北東隅の壁の回り具合からプランは隅丸方形のミニ住居である可能性がある。主軸方位はN-76°
- 覆土** -Eである。覆土は分層できず、オリーブ褐色土の旧表土にロームブロックが多量混入し、焼土・炭化物を少量含む一時的な埋没状態を示している。また東壁は後世の水流による侵食を受けている様子が看取される。
- 床** 床面については平坦な面が予想されるが、他についての情報は報告出来ない。

##### 電

調査区外に存在すると推定されるが明らかでない。

##### 遺物の出土状態

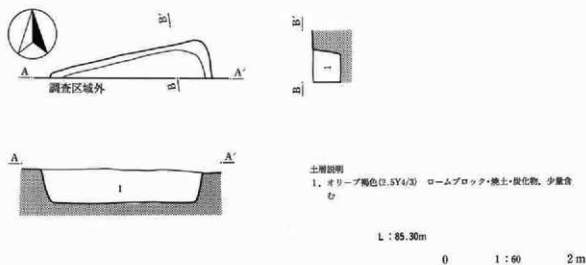
出土遺物は確認できなかった。

##### 出土遺物

出土遺物が検出されないため掲載できない。

##### 所 見

6・7区及び滝前・滝下遺跡の調査から該地域は9世紀初頭に大洪水を受けた形跡があり、該住居址の東壁の侵食がその時の水流によるものとすれば10号住の形成はそれ以前となる。



第39回 5・10号住居址



## 5・11号住居址

## 遺 構（挿図番号第40図 写真番号P L-107）

本住居址の所在するグリッドはD14・73, 74, 83, 84にまたがっている。住居址は5区の西端で08号住の4m西、5A・06号住の南2mに近接して存在する。確認面での標高は85.10mを測るが、西側部分1/2を1号竈井によって破壊されており、その全容は知ることができない。

規模は南北軸2.50mを測るのみで残存面積は推定9.30㎡である。平面形態は推測の域をでないが、電の位置や東壁の様相から縦長長方形プランの可能性が考えられる。また北東コーナーの壁が半円状に東側へ張り出しているのが特徴的である。主軸方位はN-90°-Eである。確認面からの深さは、北壁で25cm・南壁で20cmを測り、浅いが90°に近いしっかりとした立ち上がりを示している。住居址の覆土は2層に分けられ、上層に焼土・炭化物が少量見られるもののほぼ自然堆積と

いっていい。床面は南から北へ緩やかな傾斜をもち、その比高差はおよそ10cmである。貼床・掘り方は認められない。

## 竈（挿図番号第41図 写真番号P L-107）

燃焼部の中心は住居外に位置する。袖は見られないが、壁の突き口部分が内湾して掘られる。燃焼部  
火床面は床面と同レベルで、直上には焼土塊を多量に含む灰層が乗り、天井崩落土と考えられる。火床面  
煙道部はない。

## 遺物の出土状態

出土遺物総点数は僅か11点に過ぎず、しかも掲載遺物は土師器甕と須恵器環の破片2点に過ぎない。土師器甕85、須恵器環84双方とも竈内出土であるので、タイプBと認定しうる。

## 出土遺物（挿図番号第42図）

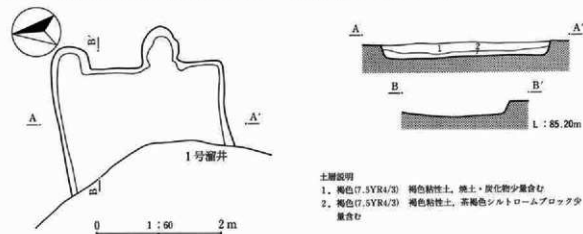
図示した遺物は、土師器甕1、須恵器環1の2個体である。

土師器甕85は、コの字口縁の前れた様相が看取される。

須恵器環84は、回転糸切りで底部周辺無で調整が施される。

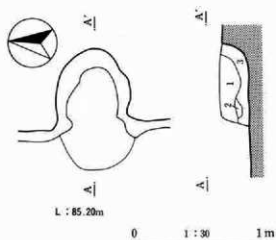
## 所 見

壁の張り出しの例については5A・03号住に類例を認められるが、該住居址の張り出しは半円形の部分的なもので、その形態の同様なものについて該調査区では見当たらない。

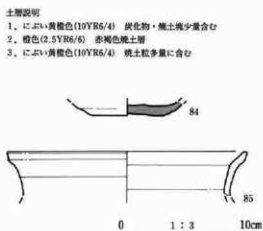


第40図 5・11号住居址

#### IV 遺跡の調査



第41図 5・11号住居址竈



第42図 5・11号住居址出土遺物

#### 5・12号住居址

##### 遺 構 (挿図番号第43図)

**絶対的位置** 本住居址はD15・06グリッドに所在し、僅かに北東隅を調査区内に突き出しているに過ぎない。

**相対的位置** 住居址は07号住と10号住のちょうど中間に位置し、その大部分が調査区外のためその全容は不明である。確認面での標高は85.15mを測る。

**確認面** 規模・平面形態は不明であるが、主軸方位についてはかううじてN-4°-Eが計れる。残存壁高は30cm程で、ほぼ90°に立ち上がっている。旧表土のオリブ褐色土層を切り込み、覆土はほぼ旧表土のオリブ褐色土が全体に埋没している。

床面等については確認できない。

##### 竈

調査区外に存在するものと理解され、解明できない。

##### 出土遺物

出土遺物は確認できなかった。

##### 所 見

覆土は10号住と類似したオリブ褐色土で、該住居址の所産は10号住の形成とそれほど遠くないものと推測される。



第43図 5・12号住居址

## 5A・01号住居址

遺 構（挿図番号第44図 写真番号P L-111）

本住居址はD14・41、42グリッドに所在し、北西10mに02号溝、南5mには02号住が位置する。絶対的位置  
 地形は北西方向に緩やかな傾斜をみせ、02号溝より先にはほとんど遺構は確認されていない。確  
 認面での標高は85.00mを測るが、西側約2/3を後世の攪乱により欠落させておりその全容は窺い  
 知れない。

規模は南北軸が測定可能で2.46mを測り、残存面積は12.93㎡である。平面形態は推定だが、電  
 の位置や東壁の長さから縦長の隅丸方形を意識した設計意図が感じられる。主軸方位はN-97°-E  
 である。確認面から床面までの深さは平均30cmであり、壁は70°~80°で明瞭な立ち上がりを示して  
 いる。覆土は3層に分層され、床面はフラットで床面上には深さ5cmの周溝が全周していたもの  
 と推量される。貼床は暗褐色土と黄色シルトブロックを構成土にして、約20cmの厚さに施されて  
 いる。掘り方は電前面に隅丸方形の10cm程の窪みと、本来の貯蔵穴位置におよそ4cm程の矩形的  
 掘り方が認められた。そしてその矩形的掘り方には、炭化物と焼土ブロックが多量混入していた  
 ために貯蔵穴の可能性も否定できないが、あまりにも浅いので貯蔵穴とはしない。

竈（挿図番号第45図 写真番号P L-111）

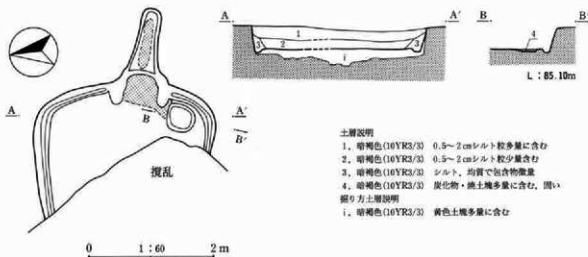
燃焼部は住居壁を掘り込み作られ、中心は住居壁の延長上にある。竈壁面はほぼ垂直に立ち上  
 がり、方形の掘り方を持つ。袖は下端15cm程の半楕円形の掘り残し部分の痕跡が認められた。火  
 床面は全体に焼土・灰が散らばり、焚き口前が15cm程の深さで方形に掘り込まれ、灰が堆積して  
 いた。煙道部はゆるやかに伸びている。

## 出土遺物

出土遺物は認められなかった。

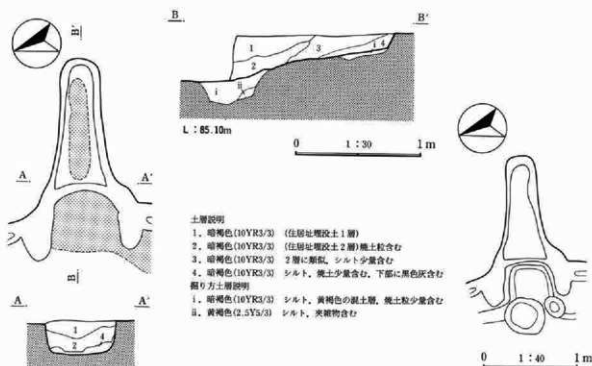
## 所 見

該住居址は遺物の出土が認められないため時系列の中に組み込むのは困難だが、電形態と覆土  
 様相から類似する例を搜すと、5・02号住がそれに該当する。



第44図 5A・01号住居址

#### IV 遺跡の調査



第45図 5A・01号住居址電と掘り方

#### 5A・02号住居址

遺 構 (押図番号第46図 写真番号P L-112)

**絶対的位置** 本住居址はD14・51グリッドに所在し、01号住の南5m、18号住の北4mに位置し、中世遺構  
**相対的位置** である04号溝がすぐ西を北西から南東方向へ走っている。確認面での標高は85.00mを測り、5区  
**確認面** 検出遺構よりも若干深くなっている。

**規模・形態** 規模は東西3.44m・南北3.10mで、竪穴内の面積は9.77㎡を測る。平面形態は南東隅が僅かに  
**主軸方位** 内側へ入るものの、東西軸の若干長い縦長方形の設計意図が看取される。主軸方位はN-89°-E  
**壁** である。確認面からの深さは北壁で30cmを測る他は平均25cmで、北壁のラインが乱れているのを  
**覆土** 除いてはほぼ80°のクリアな立ち上がりを見せている。住居址の覆土は分層できず下層ほどシルト  
ローム粒が多く含まれる傾向をもっており、急激な埋没過程を経た様相が窺える。

**床** 床面は固く踏み締められており、平坦であるが北へ向かって緩やかに下がる傾向にある。床面  
**ビット** 上には電前面を主に住居全面に亘って炭化物が広く散布している。またビット4個が存在し、南  
東コーナーには貯蔵穴が検出され、周囲も全周している。P1、P2は柱穴の可能性があるが、

**入り口施設** 対応するビットは確認されていない。P3、P4は南壁に近接する入り口施設の可能性がある。貯蔵穴と目される土坑は床面から10cmと浅いが、位置と遺物の出土状態から貯蔵穴としたい。周囲は北壁際で歪みをもつが、約6cmの深さで壁下を巡っている。貼床は黄褐色土と明黄褐色土を構成土として約5cmの厚さに施されている。掘り方は住居址の四隅と中央に楕円形の掘りこみが、入り口施設は予想される南壁際中央付近に2段の楕円形の掘りこみが存在している。また北東隅の円形の掘りこみは、上部に粘性土の貼付が見られることと遺物の出土遺物状態から床下土坑としたい。

**貼床** 周囲は北壁際で歪みをもつが、約6cmの深さで壁下を巡っている。貼床は黄褐色土と明黄褐色土を構成土として約5cmの厚さに施されている。掘り方は住居址の四隅と中央に楕円形の掘りこみが、入り口施設は予想される南壁際中央付近に2段の楕円形の掘りこみが存在している。また北東隅の円形の掘りこみは、上部に粘性土の貼付が見られることと遺物の出土遺物状態から床下土坑としたい。

竪穴住居の外部施設として、北壁に沿って4個のピットが検出された。このピット群が壁体か  
外部施設  
上層構造を支えるものとするれば、竪穴の周囲を巡っていたものと考えられる。

#### 竈 (挿図番号第47図 写真番号P L-112)

燃焼部は長方形に壁を掘り込み作られ、側壁は垂直に立ち上がる。壁面は固く焼土化している。  
燃焼部  
袖は認められない。右側壁面には砂岩が立てられ、補強材として利用されていたと考えられる。  
火床面  
火床面は焼土・灰の堆積がある。煙道部は奥壁中央部の22cm立ち上がった部分より、水平方向に  
煙道部  
伸びる。煙り出し部はやや窪み、土師器甕の破片や坏類が多量に出土した。竈前は灰面が広がり、  
大障が設置されていた。

#### 遺物の出土状態 (挿図番号第50図 写真番号P L-112)

出土遺物総点数は1081点を数え、相当の数量を記録している。遺物の平面分布は竈や貯蔵穴周  
辺に集中しており、接合線の錯綜度が遺物の散乱状況を如実に物語っている。掲載遺物について  
総点数  
平面分布  
掲載遺物  
埋没状況を観察すると、平面的に最大2.5mの散乱を示すが須恵器甕174、須恵器高台付塊166、  
170で、土師器甕175も細かく破砕されて散乱している。これらはいずれも竈周辺を中心とした接  
合線が描かれている。層位的にも1層で分層されないにもかかわらず、遺物の垂直方向への動き  
層位分布  
は激しく、須恵器高台付塊166の上下変化が著しい。タイプAに土師器坏224、須恵器坏225、226、  
228、須恵器高台付塊172があり、タイプBaに土師器甕175、176、177、土師器台付甕181、須恵  
器高台付塊170、227、タイプBに土師器甕178、須恵器坏168、169、須恵器高台付塊167があげら  
れる。また床面密着の複数の河原石の存在が注目される。

#### 出土遺物 (挿図番号第48・49図 写真番号P L-189)

図示した遺物は、土師器甕6、土師器小型台付甕1、土師器坏1、須恵器坏6、須恵器高台  
図示遺物  
付塊6、鉄製刀子1、砥石1、円形叩き石2の24個体である。

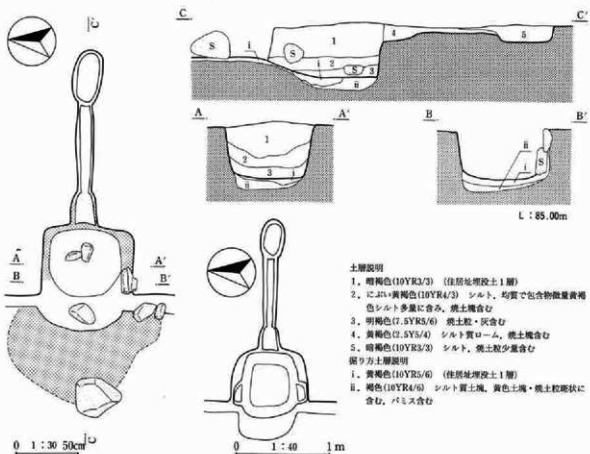
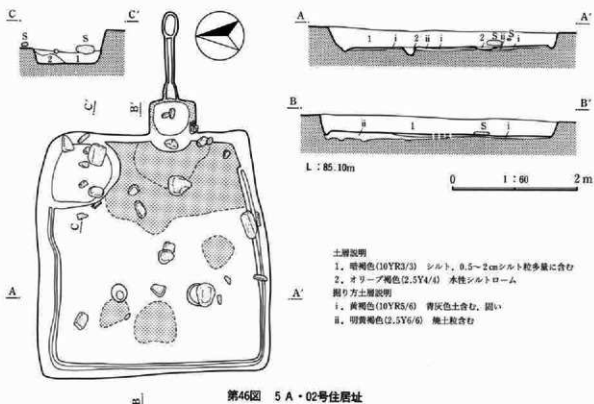
土師器甕は、①典型的なコの字口縁部で最大径を胴部中央にもつ(176、179)、②コの字口縁部  
土師器  
の頸部がハの字に開き最大径を胴部上位にもつ(175)、③コの字口縁部の崩れた形で頸部と口縁  
部を画する沈線は見られるものの口縁は外反しない(178)、④やはりコの字口縁部の崩れた形態  
で体部の膨らみがさほど認められない(177)の4タイプに分けられる。土師器坏224は器内の厚  
い底部から直線的に外反する体部に至り、底部と体部に篋削りを施し、底面内部に十字の線刻が  
が観察される。

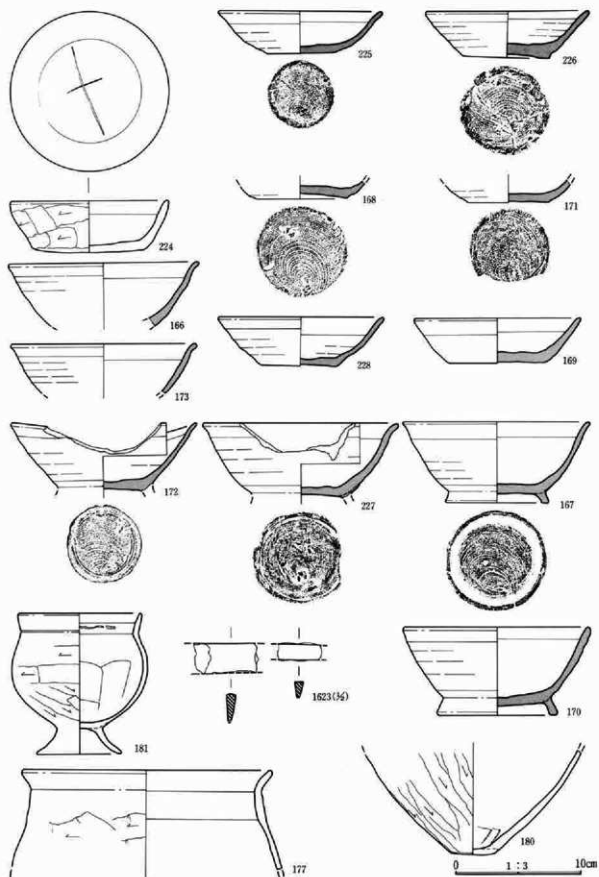
須恵器坏はどの坏も底部回転糸切りで、体部が直線的に外反するタイプに集約される。須恵器  
須恵器  
高台付塊は体部が深く直線的に外反するものと(167、170)、若干丸味を帯びた体部から外反する  
口縁部に至るものがある(166、173、227)。

#### 所見

炭化物の広い散布範囲や覆土の急激な埋没状況と錯綜とした土器接合状態は焼失住居の可能性  
を示唆している。また打痕のある扁平な河原石が床面密着の状態出土している点は注目に値す  
る。

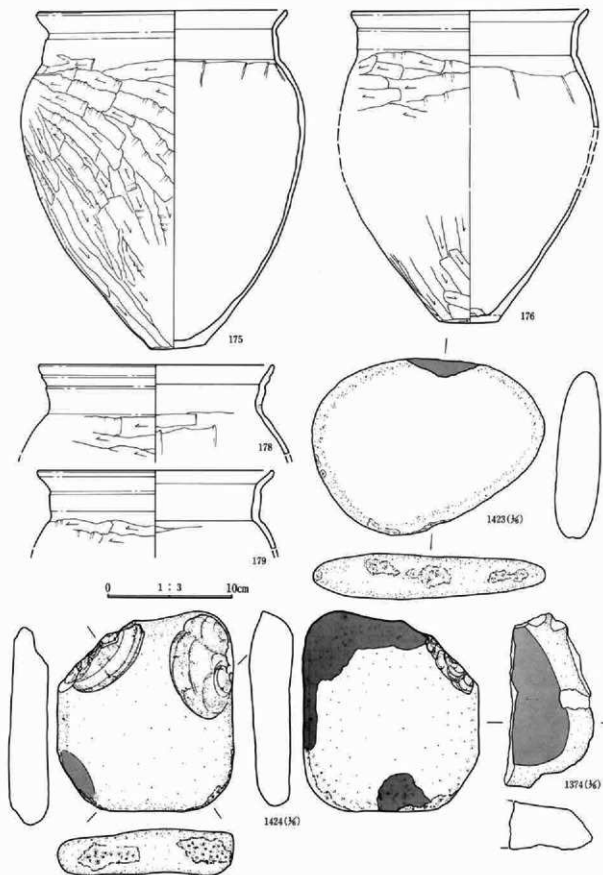
IV 遺跡の調査





第48図 5A・02号住居址出土遺物

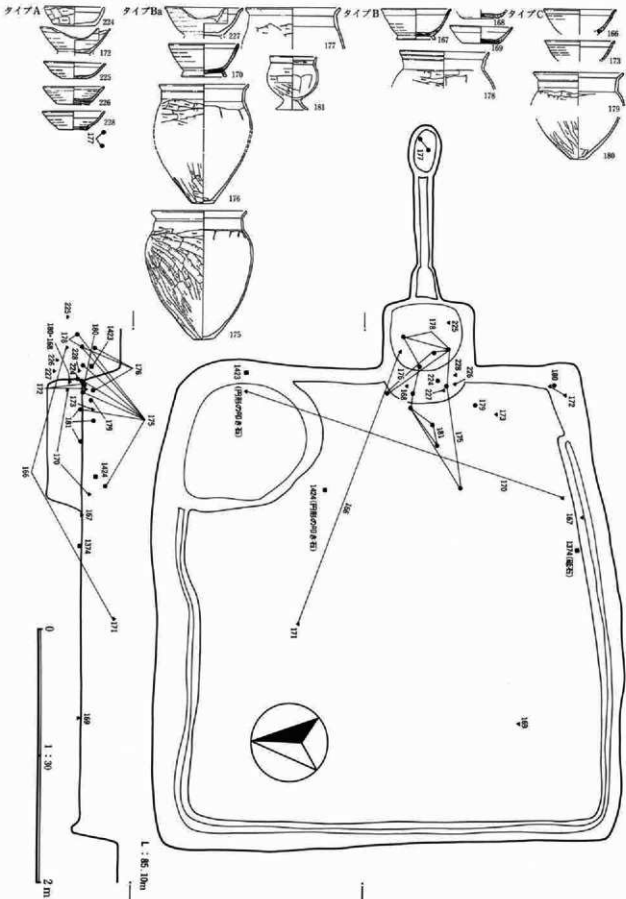
IV 遺跡の調査



第49図 S A - 02号住居址出土遺物



3 篠塚清太地区（5・5A区）の遺構と遺物



第50図 5A・02号住居址複合分布図

IV 遺跡の調査

5A・03号住居址

遺 構 (挿図番号第51・52図 写真番号P L—113)

**絶対的位置** 本住居址は篠塚地内から南北に続く舌状微高地の付け根部分に位置し、所在するグリッドはD

**相対的位置** 14・62, 63, 72, 73にまたがっている。近接する住居址はすぐ西に3mをおいて18号住、6m東

**確認面** には重複住居である05, 06号住が存在する。確認面での標高は85.10mである。

**規模** 規模は東西5.00m・南北5.00m、面積25.00㎡を測り、同時期の他の住居址とは隔絶した大型住

**平面形態** 居址である。平面形態は基本的には正方形プランを指向したものであると思われるが、電左側を80cmほど外へ張り出し竪穴部分として居住空間に取り込んでいる特殊形態の住居址である。管見に

**主軸方位** 触れた範囲では、株木遺跡H・6号住、埼玉県の阿知越遺跡2, 6, 9号住、沼下7号住、清水谷

**覆土** 3, 17号住に類似がある。主軸方位はN-98°-Eである。確認面からの深さは平均30cmを測り、壁

**壁** は約85°の角度で明瞭な立ち上がりを見せている。住居址の覆土は6層に分けられ、黄色土ブロック、炭化物、焼土粒が土層全体に混入している。特に北壁際からは褐色土の流入が見られ、土

**床** 層の堆積状態から判断すると、この北壁からの流入は本住居址の埋没開始期の極めて早い時期の

**ピット** 所産と考えられる。

**床** 床面はフラットで中央部は固く締まっており、床面上には炭化物が3カ所とピット5基、貯蔵

**ピット** 穴、周溝が穿たれている。炭化物は電前面に濃く、またP4の周囲と住居址中央部西よりに淡く

**入り口施設** 散布している。ピットはP1～P4までが柱穴であり、奇麗に同心円上に並び、貯蔵穴は円形プ

**外部施設** ランを呈しP2とP4を結ぶ対角線上に乗り、まるで鬼高期の規格的な住居址を見るようである。

**入り口施設** P5は入り口施設と関連するピットと思われる。溝は平均8cmを測り、壁下をほぼ全周する。貼

**外部施設** 床は全面に施され、褐色土と黄褐色土と黄色シルトブロックを構成土とする。掘り方は柱穴の外

**外部施設** 側を圍繞する形で北・西・南壁に沿ってコの字に回り、またP1とP4を結ぶ線上に楕円形のピ

**外部施設** ット群と幅1mの細長い掘り込みが存在する。

住居址の外部施設としては、電の両側に同様な規模で存在する4基の土坑(83, 90, 93, 100土坑)が目される。土層の様相から該住居と同時存在の可能性がある。

竈 (挿図番号第53図 写真番号P L—113)

**燃焼部** 燃焼部は壁を方形に掘り込み作られる。側壁は垂直に立ち上がり、固く焼土化している。袖は

**焚き口** 認められないが、両側焚き口部には砂岩が埋置され、補強材として利用されていたと考えられる。

**火床面** 火床面は住居内土層から推測すると、かなり住居隔絶に近い時期につぶれた形跡がある。煙道部

**煙道部** は奥壁中央部より29cm, 30°の角度で立ち上がり、水平方向に伸びる。中央部は土坑に切られている。煙り出し部に甕の破片が出土している。側壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物の出土状態 (挿図番号第56図 写真番号P L—113)

**総点数** 出土遺物総点数は、1392点と02号住出土遺物数を大きく凌駕している。遺物の平面分布を見る

**平面分布** と、電と貯蔵穴周辺に密度濃く集中しており、遺物接合線は電と貯蔵穴附近で煩雑な様相を呈し

**層位分布** ている。層位的には電周辺で床面密着の遺物が多く、離れるに従って浮く傾向にあるが、概して

**タイプ** 床直遺物の多いのが本住居址の一特徴である。土師器壺198は最大6mもの距離をおき該住居址の

**タイプ** 1/3もの範囲に散乱している。垂直分布でも土師器壺194は30cm以上の変動幅をもっている。タイプAの大部分は貯蔵穴出土遺物で土師器杯や須恵器杯が多く、変わり種では紡錘車223がタイプAである。土師器壺の多くはタイプBに該当し、198, 200は電煙道部の構築材と推察される。

出土遺物（採回番号第54・55・57図 写真番号P L-189・190・191・216）

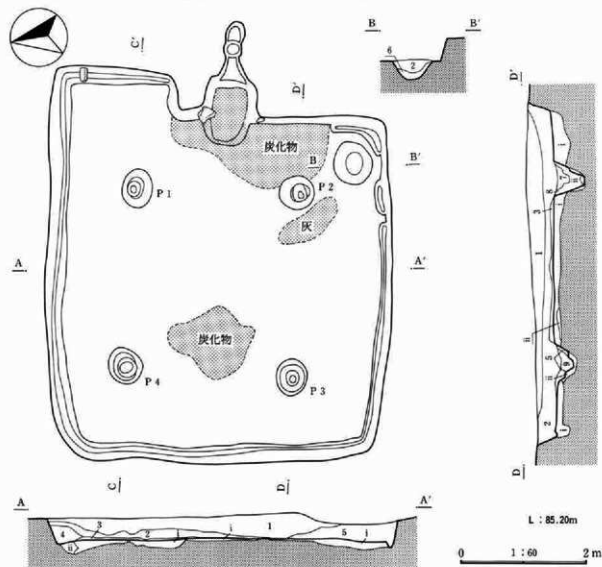
図示した遺物は、土師器甕11、土師器小壺2、土師器坏12、須恵器壺破片1、須恵器坏8、須恵器高台付塊4、紡錘車2、土錘1、円形石板1、鉄製品8（刀子、鏃、鏝、釘等）の50個体である。

土師器甕は①胴部上位に最大径をもち、口縁部が短く外反する(194, 201)、②口縁部が一旦直立して上位で外反するコの字口縁への変化を示し始め、胴部上位に横篔削りを施す2形態に分類される。土師器小壺193は、土師器甕の①タイプと同類である。土師器坏は2形態に分けられ、平底から僅かに内湾する体部に至り、底部にのみ篔削りを施すものと、平底の底部から剥いS字状に外反する体部に至り、底部に篔削り、体部に指頭成形後撫でを施すものである。

紡錘車218は須恵器高台付塊の転用である。円形石板222は紡錘車の未製品である可能性がある。紡錘車

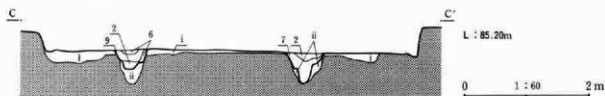
### 所 見

この大形住居は竈の左壁が張り出すという特異な形態をもち、さらに居住面積や出土遺物量・質量においても他の住居址から隔絶しており、集落における上層階級の住居址と思量される。



第51図 5A・03号住居址

IV 遺跡の調査



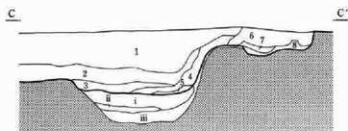
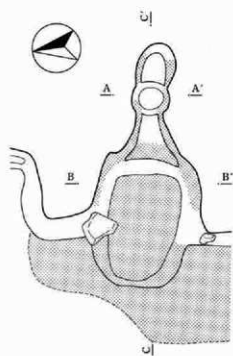
土層説明

1. 黄褐色(10YR5/6) 黄色土塊・炭粒・焼土粒含む
2. 黄褐色(10YR5/6) 1層に類似、褐色土
3. 褐色(10YR4/1) 焼土粒・炭化物含む、固い
4. 暗褐色(10YR3/4) 灰色土塊・暗色スジ状変色土
5. 褐色(7.5YR4/1) 上面橙色スジ状、僅かに黄色粒・焼土粒含む
6. におい黄褐色(10YR4/3) 灰・焼土粒・土層片含む

7. におい黄褐色(10YR4/3) 焼土粒・炭粒少量含む
8. 黄褐色(10YR5/6) 黄色土塊含む
9. 明黄褐色(2.5Y6/8) 灰褐色少量含む、距離見られる掘り方土層説明

- 掘り方土層説明
- i. におい黄褐色(10YR5/3) 灰・鉄分沈着面、灰色土・黄色土の互層
  - ii. 明黄褐色(10YR6/6) 黄色土・明黄褐色土の混土

第52図 5 A・03号住居址

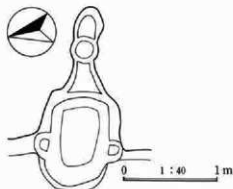
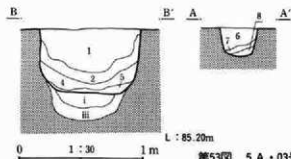


土層説明

1. 黄褐色(10YR5/8) (住居址埋没土1層)
2. 黄褐色(10YR5/8) (住居址埋没土2層)
3. 褐色(10YR4/6) 焼土粒・黄褐色土粒少量含む、やや灰色気味
4. 明赤褐色(2.5YR5/8) 焼土塊少量含む
5. 黒褐色(10YR2/3) 焼土粒・塊・炭粒・灰の混土
6. 黄褐色(10YR5/6) 焼土塊・黄色土少量含む
7. 暗褐色(10YR3/3) 黄色土小塊・焼土・黒色土塊含む
8. 明黄褐色(2.5Y6/8) 焼土粒少量含む

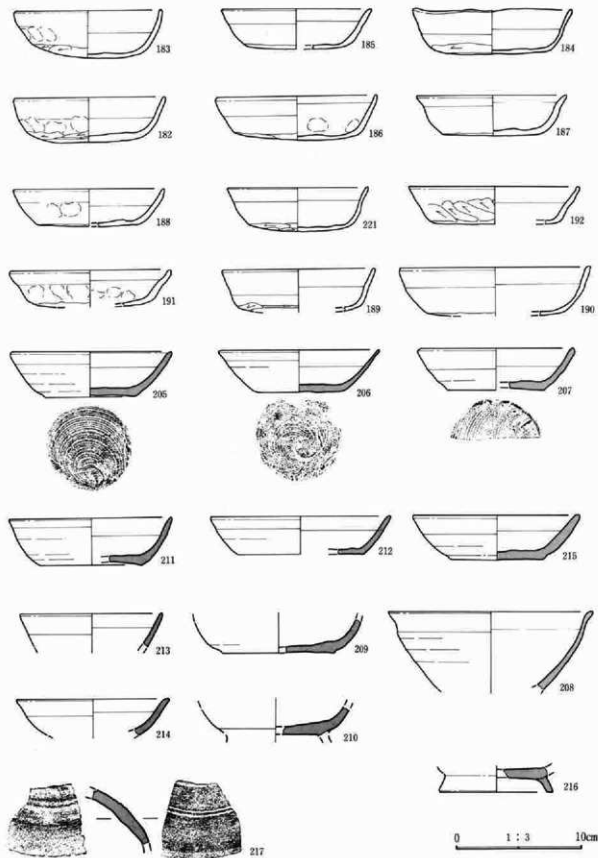
掘り方土層説明

- i. 灰褐色(7.5YR4/2) 焼土粒・炭粒含む
- ii. 黒褐色(7.5YR3/1) 灰多量に含み、焼土粒・褐色土小塊少量含む
- iii. 褐色(7.5YR4/4) 焼土粒・黄色土粒含む



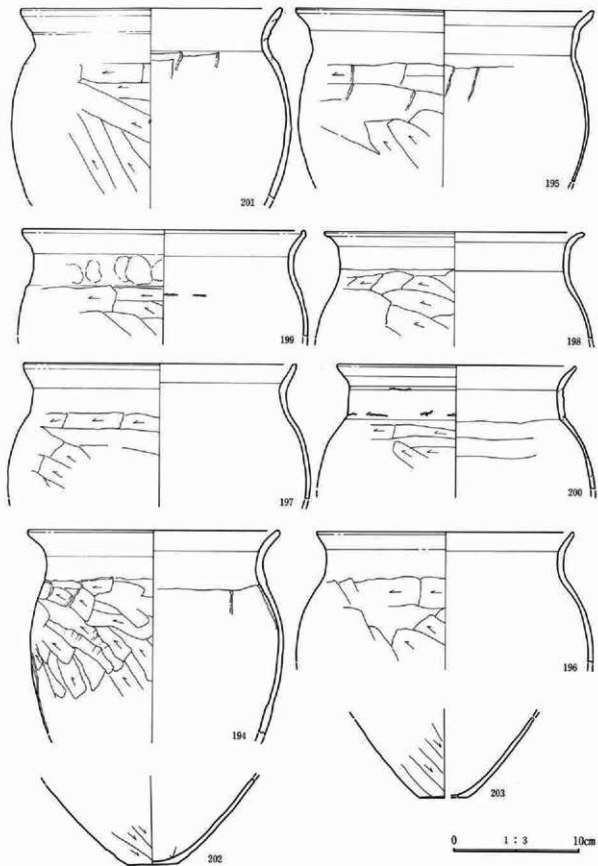
第53図 5 A・03号住居址竈と掘り方

3 藤塚清太地区（5・5A区）の遺構と遺物

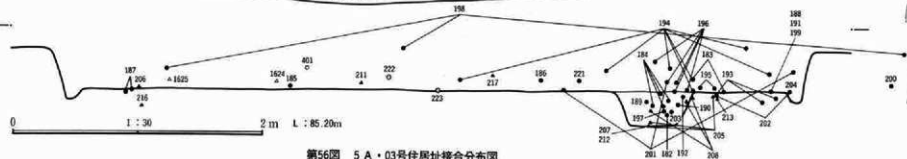
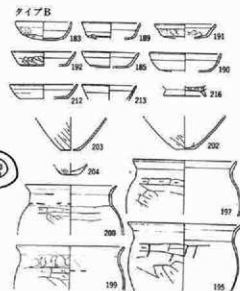
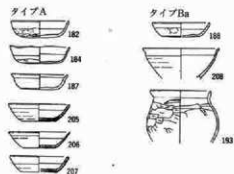
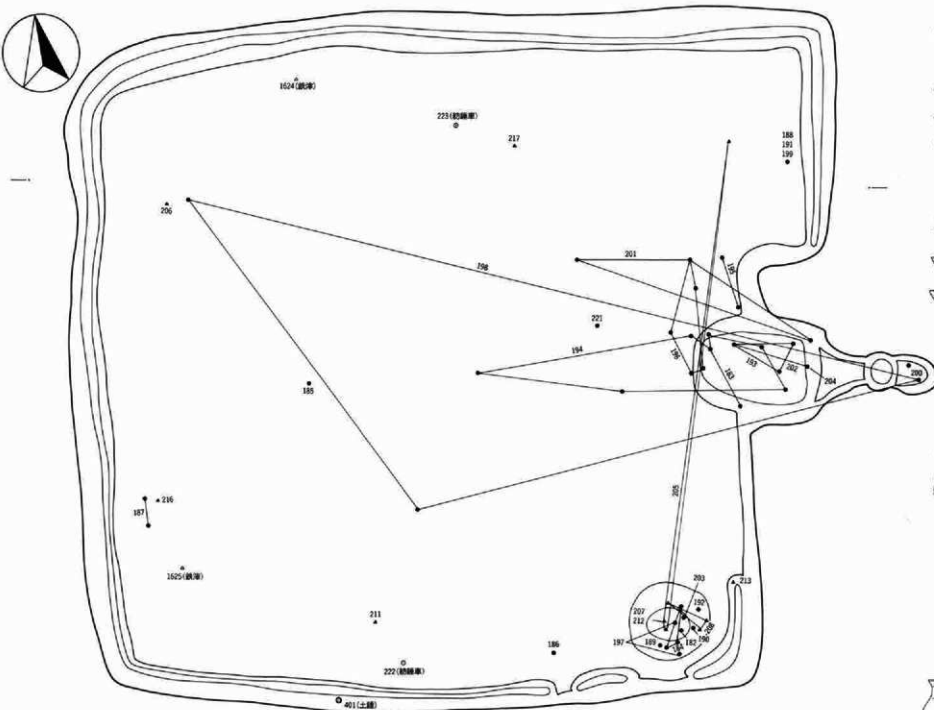


第54図 5A・03号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第55図 5A・03号住居址出土遺物

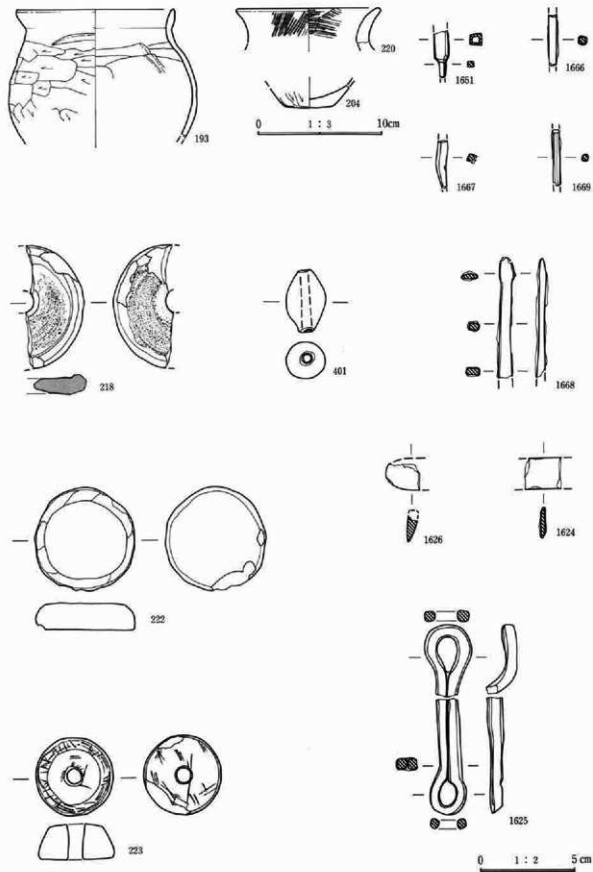


第56図 5 A・03号住居址複合分布図





3 篠塚清太地区（5・5A区）の遺構と遺物



第57図 5A・03号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査

5 A・04号住居址

遺構 (挿図番号第58図 写真番号P L—114)

絶対的位置	本住居址はD14・53, 54, 63, 64グリッドに位置し、南3mには重複した05、06号住が所在する。確認面での標高は85.10mである。
規模	規模は東西2.46m・南北3.38m、面積4.66㎡で、この時期の住居址としては篠塚清太地区では主軸方位
壁	平均的なスケールといえる。主軸方位はN-92°-Eを示している。確認面からの深さは25cm内外と浅く、北・西壁は85°と際立っているが、南壁で50°、東壁ではさらに緩く30°と不明瞭に立ち上がっている。覆土は3層に分層されたが、暗褐色土を主体に黄色シルト粒が混入し、自然堆積とは言
覆土	い難い様相を示している。
床	床面は概ね平坦で、床面上には南東隅に貯蔵穴が穿たれている。貼床及び掘り方は認められなかった。

竈 (挿図番号第59図 写真番号P L—114)

燃焼部 火床面 煙道部	燃焼部は東壁中央南寄りの壁外を掘り込み作られ、側壁は垂直に立ち上がる。壁面の焼けは弱い。火床面は床面より緩やかに移行し、奥壁で煙道部へ立ち上がる。灰・焼土の堆積は薄い。煙道部は立ち上がり部分が残りに、煙り出し等は削平されている。
-------------------	--

遺物の出土状態 (挿図番号第61図)

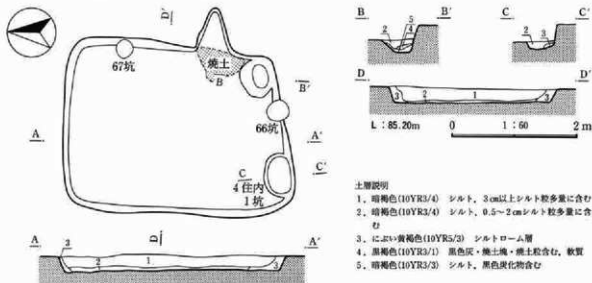
総点数 掲載遺物 平面分布 層位分布 タイプ	出土遺物総点数は344点を数えるが、破片のみで掲載遺物は7個体と少ない。遺物は住居址中央に分布の中心があり、層位的にも1層中に多くの遺物の混入が見られ、1層堆積時のある時期に遺物の流入のあったことが窺える。タイプBaは須恵器環399、タイプCは299である。
------------------------------------	---

出土遺物 (挿図番号第60図 写真番号P L—191)

図示遺物 須恵器	図示した遺物は、土師器甕1、須恵器甕1、須恵器環2、須恵器高台付塊1、瓦片1、鉄製品(釘)1の7個体である。須恵器環399は、橙色を呈し酸化炭焼成である。
-------------	---

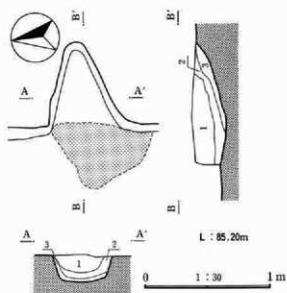
所見

該住居址の出土遺物はその殆どが住居址廃棄後の流入と考えられ、住居居業時には遺物は残さず、他に所へ移った形跡が窺われる。



第58図 5 A・04号住居址

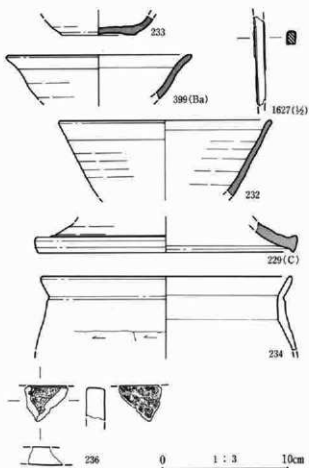
3 篠塚清太地区（5・5A区）の遺構と遺物



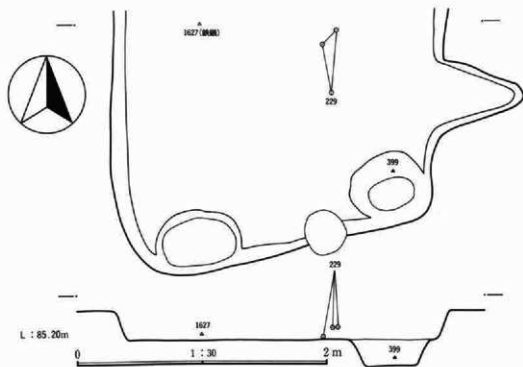
土層説明

1. 暗褐色(10YR3/4) (住居址埋没土1層)
2. 暗褐色(10YR3/4) シルト少量。焼土塊・炭化物多量に含む
3. による黄褐色(10YR4/3) シルト。均質で包含物少量含む

第59図 5A・04号住居址電



第60図 5A・04号住居址出土遺物



第61図 5A・04号住居址接合分佈図

IV 遺跡の調査

5 A・05号住居址

遺 構 (挿図番号第62図 写真番号P L-114)

**絶対的位置** 本住居址はD14・63, 64, 73, グリッドに位置し、06号住と南東壁で切り合っている重複住居  
**相対的位置** である。北と西のほぼ等距離(3m)には、04号住と大型住居の03号住が存在する。確認面での  
**確認面** 標高は85.10mで、周囲の住居址と同様である。

**規模** 規模は東西2.48m・南北2.46m、面積7.69m<sup>2</sup>であるが、南東壁を06号住と切り合っているため  
**平面形態** に不確定要素が残る。平面形態は正方形プランを意図していると思われるが、竈が南東隅に設置  
**主軸方位** されたために南東壁が若干竈方向へ開いた形態を示している。主軸方位はN-67°-Eを指す。確認  
**壁・覆土** 面からの深さは30cm前後で、壁は75°~85°の角度で明瞭な立ち上がりを見せている。覆土は5層に  
 分けられたが、埋没の様相はレンズ状でなくシルトロームブロックを多量に含むことから、人為  
 的な埋没が考えられる。

**床** 床面はフラットで、貼床は認められなかった。

竈 (挿図番号第63図 写真番号P L-114)

**燃焼部** 燃焼部は南東部隅を掘り込む、隅竈である。壁面は垂直に立ち上がる。側壁の焼けは弱い。埋  
**袖** 没土の中層に焼土層が見られ、壁の崩落によるものと思われる。袖は右袖部分が地山で掘り残さ  
**火床面** れ、左部分は壁の延長で作られる。火床面は床面と同レベルで、奥壁に向かい灰の堆積がある。  
**煙道部** 煙道部は奥壁から斜めに立ち上がり、水平方向に伸びる。

遺物の出土状態 (挿図番号第65図)

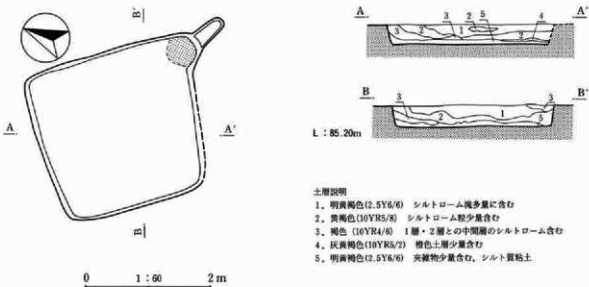
**総点数** 出土遺物総点数は6点。床面直上の遺物はなく、竈内遺物の237がタイプBに分類される。  
**タイプ**

出土遺物 (挿図番号第64図)

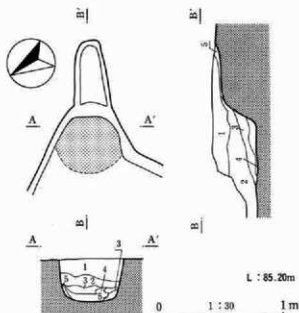
**図示遺物** 図示しえた遺物は、土師器甕底部の1個体のみである。

所 見

該住居址は竈形態・規模・主軸方向等5・05号住との類似が指摘できるが、出土土器が不明確  
 で土器による時期設定が困難である。



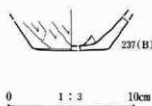
第62図 5 A・05号住居址



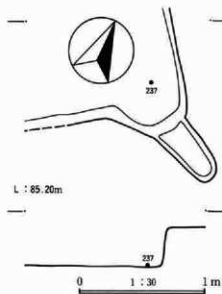
## 土層説明

1. 黄褐色(10YR5/8) (住居址埋没土2層)
2. 褐色(10YR4/6) (住居址埋没土3層)
3. 明赤褐色(2.5YR5/8) 雑土層
4. 灰黄褐色(10YR4/2) 雑土粒・小陶片含む、灰層
5. 褐色(10YR4/6) 雑土粒・黄茶色粒状点状を含む

第63図 5A・05号住居址電



第64図 5A・05号住居址出土遺物



第65図 5A・05号住居址接合分布図

## 5A・06号住居址

## 遺 構 (押図番号第66図 写真番号P L-114)

本住居址はD14・63, 64, 73, 74グリッドにまたがって位置し、5A・05号住に北壁を切られた形で重複して所在する。また南壁と西壁の一部を、ゴミ穴と思われる攪乱によって削平されている。確認面での標高は85.10mである。

規模は東西2.12m・南北3.76mと残存する部分から計測可能で、推定面積は14.96㎡である。平面形態は隅丸の横長方形プランであるが、前述のように北壁の半分を5A・05号住に切られ、南壁と西壁のほぼ1/2を後世の攪乱によって失われている。主軸方位はN-72°-Eである。確認面からの壁の深さは25cmで、重複する5A・05号住より若干浅いが、壁の検出が困難だった南壁を除いて明瞭な立ち上がりを見せている。覆土は5層に分けられるが、南壁付近では地山土の住居址への流入が見られ、壁との分別が困難であった。また南壁近傍を除いて覆土のほとんどは、明黄褐色土にシルトロームブロックを多量に含んだ人為的な一括土であると推測される。

床面は平坦で点床は認められない。床面上には南東コーナーに貯蔵穴が穿たれているが、その他の施設は確認されなかった。貯蔵穴は円形を呈しており、多くの遺物の混入が見られた。

絶対的位置  
相対的位置

確認面

規模

平面形態

主軸方位

壁

覆土

床

貯蔵穴

IV 遺跡の調査

竈 (挿図番号第67図 写真番号P L-114)

**燃焼部** 燃焼部は東壁中央南寄りの壁外に作られる。壁は垂直に立ち上がり、方形に掘られる。壁面の焼けは強く、レンガ状に焼き締まる。袖は焚き口部で、内両気味に地山の高まりが残っていた。

**火床面** 火床面は床面が緩やかに煙道部に向かう。焼土・灰層の堆積が見られる。煙道部は火床面から段を持たずに、緩やかに立ち上がる。掘り方は方形に掘られ、壁面はレンガ状に焼き締まる。

遺物の出土状態 (挿図番号第69図 写真番号P L-114)

**総点数** 出土遺物総点数は102点で、遺物の平面分布の中心は竈・貯蔵穴周辺から住居中央部にある。

**平面分布** 層位的には第1層中に混入している遺物が大半を占め、床直遺物は貯蔵穴周辺に多い。掲載遺物の埋没状況では、貯蔵穴内出土遺物は須恵器高台付埴240, 242がタイプAで、241がタイプB、土師器埴243がタイプCである。また北壁寄り出土している須恵器高台付埴38はタイプBaで、239はタイプCである。また、須恵器高台付埴240は墨書「++」である。

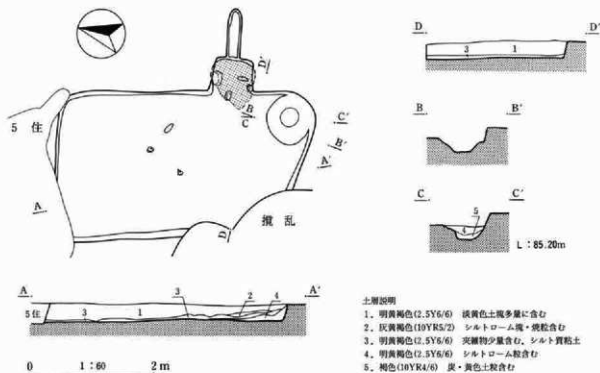
出土遺物 (挿図番号第68図 写真番号P L-191・216)

**図示遺物** 図示した遺物は、土師器埴1, 須恵器高台付埴5の6個体である。

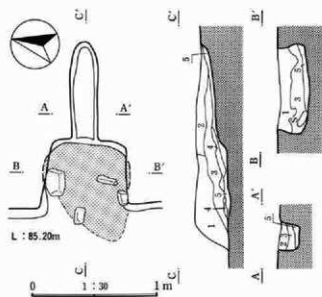
**須恵器** 須恵器高台付埴はいずれも粗い胎土と雑な高台の貼付に特徴をもち、高台の断面には三角形、平行四辺形、不整形等変化に富んでいる。中でも238は黄褐色の色調を呈し、酸化炎焼成によるものと思われる。

所見

燃焼部が壁外に作られ、その掘り方は方形に掘り込まれて壁面がレンガ状に焼き締まるという形状の竈形埴は、5A・02, 03号住竈と同類である。



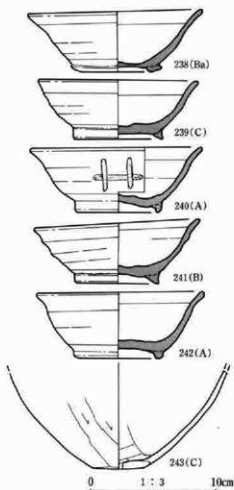
第66図 5A・06号住居址



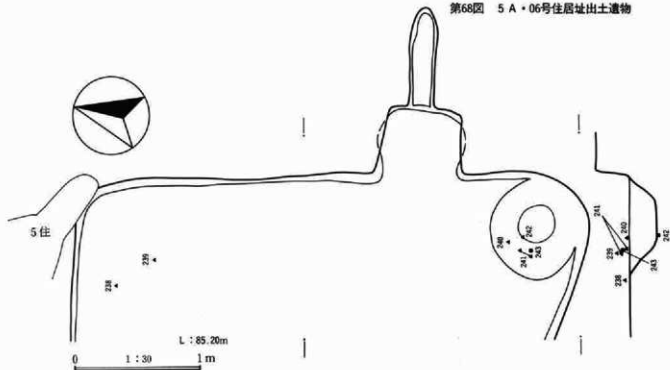
土層説明

1. 明黄褐色(2.5Y6/6) (住居址埋没土1期)
2. によい黄褐色(10YR4/3) 焼土塊・黄色土塊含む
3. 暗褐色(10YR3/3) シルト、によい黄色土塊少量含む
4. 明赤褐色(2.5YR5/8) 焼土、(天井部崩落土小)
5. 黄灰色(2.5Y4/1) 灰層、焼土塊・黄色土塊含む

第67図 5A・06号住居址寛



第68図 5A・06号住居址出土遺物



第69図 5A・06号住居址接合分布図

#### IV 道跡の調査

##### 5 A・07号住居址

##### 遺構 (挿図番号第70図 写真番号P L-115)

本住居址は5 A区の東縁から調査区外に、あたかも電周辺部を突き出すような恰好で存在していたため調査区を拡張したところ、東壁は擾乱によって失われていた。所在するグリッドはD14・35, 36, 45, 46で、すぐ50cm南には近接して09号住が位置している。確認面での標高は85.20cmを測る。

**規模・形態** 規模は東西(推定)2.74m・南北3.10m, 推定面積9.24m<sup>2</sup>である。平面形態はほぼ正方形を呈すると思われるが、東壁を擾乱によって失われたため形状については不明の点がある。主軸方位はN-77-Eを示す。確認面からの深さは平均60cmを計り、北壁で70°西壁と南壁はほぼ90°に近い角度で立ち上がっている。覆土は8層に分層されるが、主体は暗褐色土と褐色土の第2層で、壁際の三角堆積土も含めて自然堆積の様相ではなく、住居址廃絶時に埋没過程において何等かの人為的な現象のあったことが窺える。

**床** 床面上には住居床面の1/4強を占める範囲に、高さ5cm程のフラットな間丸長方形の高まりが北西コーナーに接している。また北・西・南の壁下には周溝が巡っている。貼床の構成土は鈍い黄色土と鈍い黄褐色土の混土層である。掘り方は5・5 A区周辺に分布する黒褐色砂質シルト層まで掘りこんでおり、多数の小穴が見受けられるだけできたる掘り込みはない。

##### 電

電は擾乱による削平を受けて欠損している。

##### 遺物の出土状態 (挿図番号第72図)

**総点数** 出土遺物総点数は379点を数え、遺物の平面分布は電推定位置の附近に集中している。層的には遺物のほとんどが第1層に含まれており、該住居址埋没の最終段階での遺物の廃棄・流入が推測される。また埋没初期には遺物もほんの僅か認められるが、土層の堆積に乱れが観察され、何等かの人為的影響の存在が感じられる。掲載遺物の分布を見ると、平面的には須恵器壺252を除いて接合線は短く、それほど動きを示していない。垂直分布を見ると第1層に含まれるタイプCの遺物群と、床直に近いタイプBaに区分できる土師器環244に大別される。須恵器壺252はその破片が床面直上と1層上面から検出されており、本来は破砕して該住居址外にあったものが埋没初期に流入し、次に埋没最終段階でさらに一破片が流入したことを物語っている。

##### 出土遺物 (挿図番号第71図 写真番号P L-191・216)

**陶器** 図示した遺物は、土師器環1, 須恵器壺破片1, 須恵器高台付壺1, 須恵器環3, 須恵器高台付皿1, 甕石製の砥石1の8個体である。

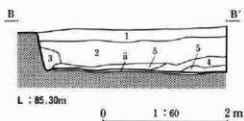
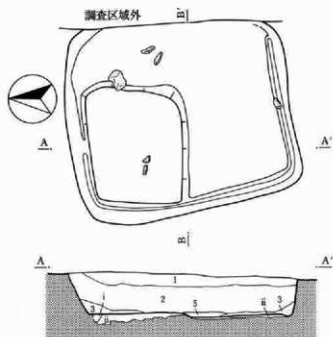
**土師器** 土師器環244は口径14.1cmを測り、胎土は圈内の厚い平底の底部から直線的に外反する体部をもつ土師器環と同質である。

##### 所見

遺物の埋没状況からすると住居廃絶後第1層・第2層の埋没過程での遺物の廃棄・流入は殆ど認められない。それは第2層埋没時に該住居址周辺には住居が営まれず遺物の廃棄行為が行われる状況になかった証左であり、一時中断の後第3層埋没過程で再び廃棄・流入行為が開始されるのは該住居址周辺に再度住居が形成された故と考えられる。上層出土土器と下層出土土器では第2層を間層として時期差が認められる。

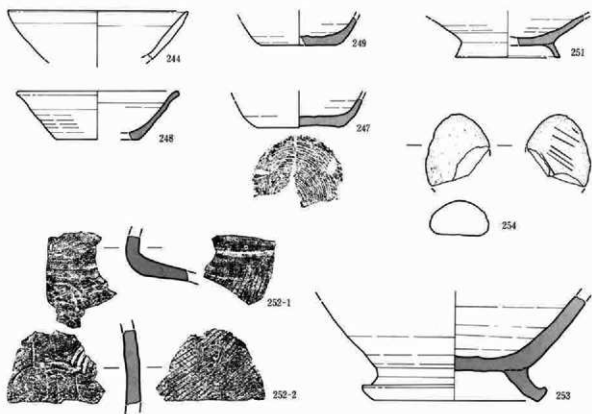


3 篠塚清太地区（5・5A区）の遺構と遺物



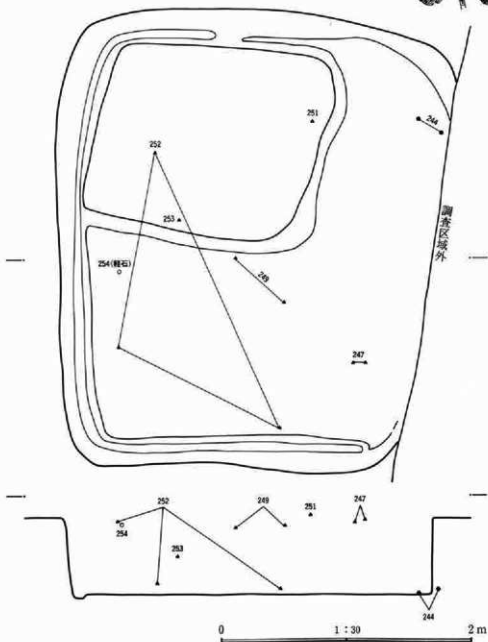
- 土層説明  
 1. 黄褐色(10YR3/4) 黄色細粒・黄土粒・灰粒、土層片少量含む  
 2. 褐色(10YR4/6) 黄色土塊・黄土粒少量含む  
 3. 褐色(10YR4/6) 黄色土塊含む  
 4. 褐色(10YR4/6) 灰粒・黄土粒・灰黄色土塊の混土  
 5. 黄褐色(7.5Y5/6) 黄土塊・灰黄色土・褐色土の混土  
 掘り方土層説明  
 i. におい黄褐色(10YR4/3) 黄色土粒少量含む  
 ii. におい黄褐色(10YR4/3) におい黄色の混土層

第70図 5A・07号住居址



第71図 5A・07号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第72図 5A・07号住居址接合分布図

## 5A・08号住居址

## 遺 構 (挿図番号第73図 写真番号P L-115)

本住居址はD14・13, 23, 24グリッドに所在し、02号溝の北にいましも南壁を削り取られる程の近距離に踵を接している。近接する住居址は半径15mの範囲には検出されていない。それというのにも本住居址はおおよそ2/3を攪乱によって欠損しており、そのうえこの攪乱の範囲は以前自動車販売会社であった跡地全体に広がっている。このことから自動車販売会社の建造時に相当に地下を攪乱したことが窺える。前述のような事情から残存部分が床面直上まで削り込まれ、確認面は標高84.70mである。

絶対的位置

確認面

本住居址は東壁のみ計測可能であるが、東北コーナーを313土坑によって切られているために規模・平面形態ともに不明である。主軸方位は推定でN-85°Eを指すものと思われる。

規模・形態

主軸方位

壁は東壁のみで平均13cmを測るが、貯蔵穴付近では不明瞭である。覆土は僅かに黄色土粒を含む鈍い黄褐色土層が1層残されているだけである。

壁  
覆土

残存部の床面はフラットで、床面上には南東隅に隅丸長方形の貯蔵穴が穿たれている。貼床の構成土は黒褐色土と黄褐色土の混土層でやや固くしまっている。

床  
貼床

## 竈 (挿図番号第74図 写真番号P L-115)

燃焼部は東壁中央南寄りの壁を掘り込み作られている。袖は突き口部両端に、内湾気味に地山の高まりが見られる。火床面は楕円状になり、土器片や礫が出土し、直上に焼土層が乗る。煙道部は火床面より緩く立ち上がり、水平方向に伸びる。壁は垂直に立ち上がる。覆土中に地山塊を多く含む層は、火床面直上に焼土層が乗ることから、崩落と考えられる。

燃焼部・袖

火床面  
煙道部

## 遺物の出土状態 (挿図番号第76図)

出土遺物総点数は、前述のような削平を受けているために、30点と僅少である。遺物の平面分布は、電周辺を中心とした東壁沿いに多い。掲載遺物の動きを見ると、羽釜255、256の散乱が甚だしく、電崩壊時の動きと見ることもできる。出土遺物はタイプAがなく、タイプBa(255、256、257)である。鉄製品1628は住居址北東隅の壁際から出土している。

総点数  
平面分布  
掲載遺物

タイプ

## 出土遺物 (挿図番号第75図 写真番号P L-191)

図示しえた遺物は、羽釜3、鉄製品(刀子)1、円形叩き石1の5個体である。

図示遺物

羽釜255、256は双方とも断面三角形の踵から内傾する口縁部に至り、口唇部はやや内傾気味である。また口唇部の内傾の度合いは256の方が強い。

羽釜

鉄製品はその形状から刀子と判断した。

鉄製品

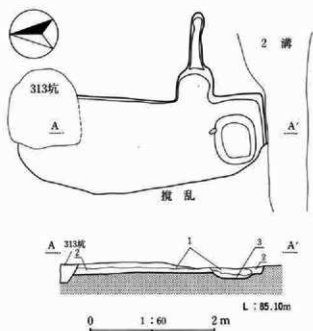
円形叩き石は扁平な円形で上部が打ち欠かれ、下部には摩耗痕があって何等かの使用に供した跡が窺える。本遺跡からは、何点かの同様な円形石製品の出土が認められるので注意を要する。

円形叩き石

## 所 見

確実に羽釜を有する住居址は該遺跡地では僅少で、該住居址の他に5B・01号住、7・19号住、が挙げられる程度である。

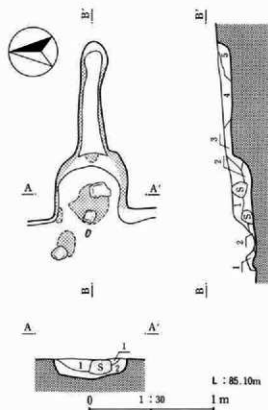
IV 遺跡の調査



土層説明

1. におい・黄褐色(10YR4/3) シルト、黄褐色土塵小塊少量含む
2. 黒褐色(10YR2/3) 黄褐色土を互層に堆積、固い
3. オリーブ褐色(2.5Y4/4) シルト、炭土塊・炭化物粒少量含む

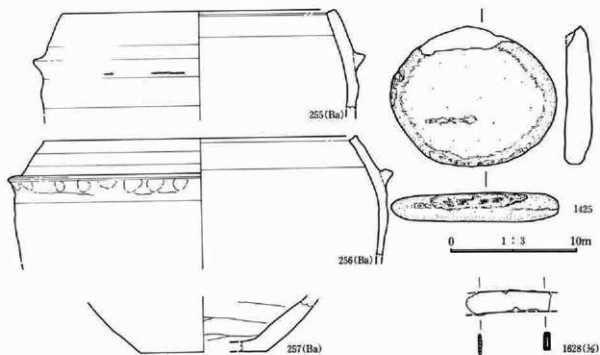
第73図 5A・08号住居址



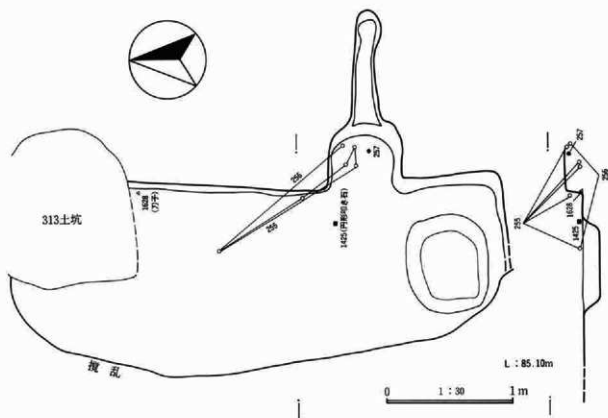
土層説明

1. 黒褐色(10YR2/2) (住居址埋没土1層)
2. 褐色(10YR4/4) 5層に類似、シルト・焼土塊・炭化物・灰少量含む
3. 暗褐色(10YR3/3) シルト、黄褐色土ブロック状に僅かに含み焼土粒少量含む
4. 黒褐色(10YR3/2) シルト、焼土塊少量含む
5. 暗褐色(10YR3/3) シルト、焼土塊少量含む

第74図 5A・08号住居址竈



第75図 5A・08号住居址出土遺物



第76図 5A・08号住居址接合分布図

#### IV 遺跡の調査

##### 5 A・09号住

##### 遺 構 (挿図番号第77図 写真番号P L-115)

- 絶対的位置** 本住居址はD14・45、46グリッドに位置し、5 A区の東縁部に沿って07号住の南50cmに近接して所在する。そのため該住居址は、07号住と同様に攪乱によって煙道の先を欠損している。確認面での標高は85.10mである。
- 規模・形態** 規模は東西2.90m・南北2.86m、面積12.12㎡であり、平面形態は隅丸方形の構築プランを示す。
- 主軸方位** 主軸方位はN-84°-Eである。確認面までの壁高は平均50cmで、床面附近は90°に近い立ち上がりを示し、途中から70°に変換するような様相が見て取れる。しかし北壁のみは90°に近い角度で明瞭に立ち上がっている。覆土は6層に分けられ、暗褐色土を主体とした土層全体に黄色土ブロックと焼土粒が混入しているため、人為的な埋没の可能性が考えられる。
- 床** 床面は概ねフラットで、床面上には特別な施設は認められない。貼床の構成土は黄色土ブロックと褐色土ブロックの混土層からなり、部分的に黒褐色土に軽石の混じるブロックも含まれる。掘り方は小ピットが10数個穿たれているのみである。

##### 竈 (挿図番号第78図 写真番号P L-116)

- 燃焼部** 燃焼部は東壁中央南寄り住居内に作られる。袖は地山塊の混土を貼り付け作られている。火床
- 火床面** 面は床面よりやや窪み、直上には焼土と地山塊の混土が乗る。掘り方には、焼土・灰を含む埋土
- 掘り方** がある。煙道部は大半が攪乱により、壊されている。煙道口部分は焼き締まる。

##### 遺物の出土状態 (挿図番号第80図)

- 総点数** 出土遺物総点数は25点と少ないが、遺物は住居址全体に散在し、層位的にも各層に分布する傾向にある。掲載遺物の出土状態を見ると、土師器環260が竈内と東壁北よりの壁際とで接合線が引
- 層位分布** かれる外は、土師器甕261が竈内で、土師器環258が南壁際で検出されている。タイプAはなく、
- 掲載遺物** タイプ Ba が260で、タイプBが259、261、タイプCは258である。

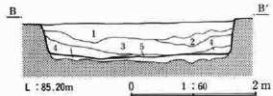
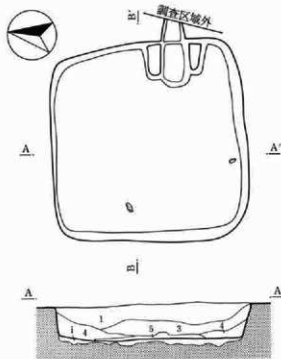
##### 出土遺物 (挿図番号第79図 写真番号P L-191)

- 図示遺物** 図示した遺物は、土師器甕1、土師器環3の4個体である。
- 土師器** 土師器環258、259は尖り気味の底から短く内傾する口縁部に至り、260は丸底で体部が内湾し内部に暗文が施される。

##### 所 見

09号住の第1層堆積時に廃棄・流入遺物は見当たらず、該期には住居址の周囲に生活は営まれなかったものと思われ、北接する07号住の形成は該住居址完全埋没後の所産と理解される。

3 篠塚清太地区（5・5A区）の遺構と遺物



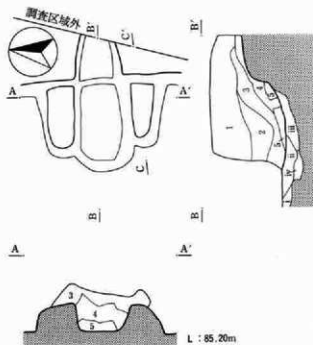
土層説明

1. 暗褐色(10YR3/4) 斑点状黄色土塊含み、焼土粒少量含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 焼土・灰粒・黄色土塊の混土
3. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土塊、斑点状含む
4. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土塊・褐色土塊少量含む
5. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土塊・黒色土塊・灰粒・焼土粒含む

掘り方土層説明

- i. 褐色(10YR4/4) 黄色土塊・褐色土塊の混土、黒褐色の軽石含む

第77図 5A・09号住居址



土層説明

1. 暗褐色(10YR3/4) (住居址埋没土2層)
2. 暗褐色(10YR3/4) (住居址埋没土3層)
3. 褐色(10YR4/6) 黄色土塊斑点状に少量含み、焼土粒・灰粒少量含む
4. 褐色(10YR4/6) 黄色土塊・焼土粒少量含む
5. 黄褐色(10YR5/8) 赤褐色焼土塊多量に含む。(天井部崩落土②)

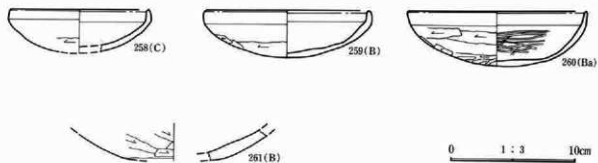
掘り方土層説明

- i. 褐色(10YR4/4) (住居掘り方埋没土i層)
- ii. 黄褐色(10YR5/4) 焼土塊・黄色土塊・灰の混土
- iii. 黄褐色(10YR5/8) 焼土粒・黄色土塊・褐色土塊・黒色土塊の混土
- iv. 黄褐色(10YR5/8) 焼土粒少量含む

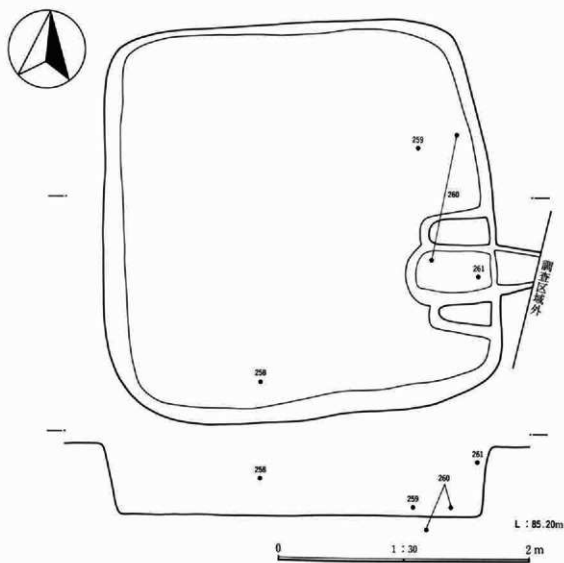
0 1:30 1m

第78図 5A・09号住居址

IV 遺跡の調査



第79図 5A・09号住居址出土遺物



第80図 5A・09号住居址接合分布図



## 5A・10号住

## 遺 構 (挿図番号第81図 写真番号P L-116)

本住居址は調査区の北縁に位置し、北壁を含む住居址の一部分を調査区外へはみ出している。所在するグリッドはD13・82, 83で、12号住が1.5m東にほとんど電の煙道部を接するばかりに存在し、西・南側は擾乱によって遺構は失われている。住居址確認面での標高は84.90mである。

規模は、北側部分が調査区外へ突出しているために南北軸は不明であるが、東西3.68mを測る。平面形態は現況から推測すると、隅丸方形の可能性が高く、周溝と約20cm外側へ張った壁の位置からすると拡張住居であるかもしれない。主軸方位はN-92°-Eを示す。確認面までの壁高は東壁60cm・南壁、西壁とも50cmを測る。東壁、南壁はほぼ90°に近い立ち上がりを見せるが、西壁は60°の不明瞭な緩慢なラインを描く。住居址は旧表土であるオリブ褐色土層を切り込み、鈍い黄褐色のシルトローム層まで掘り込んでいる。覆土は14層に細かく分層され、かなり変化に富んだ埋設過程の様相が窺える。埋設の初期に北東側からの地山土を含む大量の土砂の流入が認められ、次に廃棄された住居址内で灰や炭化物の残存するような何等かの状況のあったことが土層の状態から看取される。そしてそれ以降は自然堆積のレンズ状の埋設状況が見られる。

床面は全般的に平坦で、電前面を中心に住居址中央部に堅緻な部分が認められた。床面上には東南コーナーに楕円形の貯蔵穴が穿たれ、周溝が南壁と西壁下を巡っている。貼床は2面施されており、最初オリブ褐色土と鈍い黄色の混土層を構成土とした上面にシルト質の灰の乗った貼床が施される。次に拡張された住居の床としてオリブ褐色土を主体に焼土粒と灰を含む混土層を構成土とする貼床が施される。該住居址の拡張は西南北の3方向が推測される。

## 電 (挿図番号第82図 写真番号P L-117)

燃焼部は東壁中央部を掘り込み作られ、中心部は壁の延長上にある。壁面は垂直に立ち上がり方形の掘り方を持つ。また上半は煙道に向け焼けている。袖は芯に地山を掘り残り、焚き口は内湾気味に検出された。火床面は中心よりやや前方がレンズ状に窪み、焼土・灰面が広がる。直上には焼土・灰の混土、その上に天井部崩落土の焼土層が乗っていた。煙道部は天井部が崩落せず残っていた。煙道口へは45°の傾斜を持ち立ち上がり、煙り出し部に向かい緩やかに立ち上がる。煙り出しは垂直に立ち上がり、壁面は全面焼土化していた。掘り方は方形に掘られ、天井部側壁が焼けている。

## 遺物の出土状態 (挿図番号第85図 写真番号P L-116)

出土遺物総点数は988点と1000点に近く、本遺跡地でも出土遺物の多い住居址である。遺物の分布状況を見ると、平面分布は住居址の南半分に集中しており、層位的には分布の中心は最上層の第1層と貼床を形成する土層にある。その理由については、該住居址の拡張に起因するものと思われる。掲載遺物の埋設状況は他に例がないほどに接合線が錯綜しており、甚だしいのは須恵器壺296で、2m東に隣接する12号住や10m東の13号住との接合関係が認められる。垂直分布では前述のように上下の2グループに分けられ、上層は埋設最終期の土層で、296は該期の遺物流入・廃棄による所産と思考される。タイプAはなく、タイプBaが4個体で、タイプBが6個体確認され残りはタイプCである。土器様相は上層、下層ともさしたる変化はなく、短時間の埋設が窺える。

絶対的位置

相対的位置

確認面

規模

平面形態

主軸方位

壁

覆土

床

貯蔵穴

貼床

燃焼部

火床面

煙道部

焼土

灰面

混土

焼土層

傾斜

立ち上がり

緩やかに

焼土化

方形

掘り方

天井部

崩落

総点数

平面分布

層位分布

垂直分布

傾斜

隣接

タイプ

個体

確認

残り

タイプ

層

変化

埋設

窺

IV 遺跡の調査

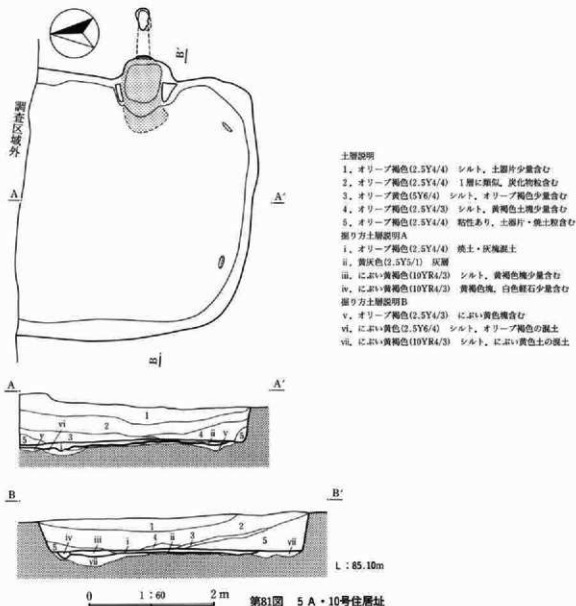
出土遺物 (挿図番号第83・84図 写真番号P L-191・192・216)

図示遺物 図示しえた遺物は、土師器甕5, 土師器小甕1, 土師器环7, 土師器盤6, 須恵器甕破片6, 須恵器环2, 砥石1, 打製石斧1の29個体である。

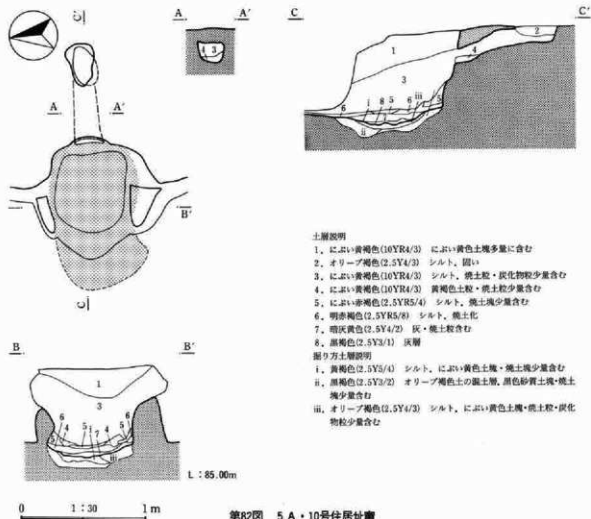
土師器 土師器小甕279は球状の胴部をもち、体部に横長削りが施される。土師器环は①それほどシャープではない稜線のある273, 275, ②丸底で内湾する口縁をもつ271, 274, ③丸底から直立する口縁に至る270, 276, ④内面に放射状暗文が施され、口縁部の薄い272の4タイプに分けられる。土師器盤は、①体部と口縁部を画す稜線をもつ262, 263, 264, ②平底気味の底部から外反する口縁部に至る265, 266, ③平底気味の底部から直線的に外傾して口縁部に至る267の3形態に分類される。土師器盤の数量とヴァリエーションの豊富さが、本住居址の特色と思われる。

所見

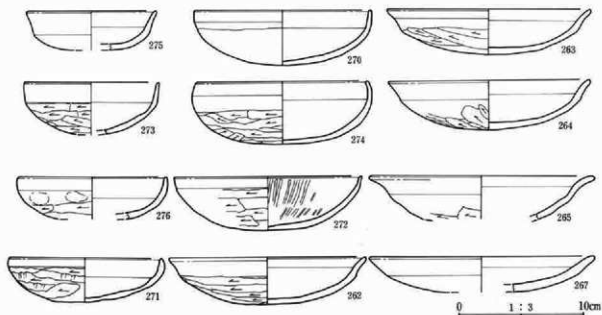
該住居址には住居居絶直後から遺物の廃棄・流入が続き、周囲に住居が盛んに営まれた時期の住居廃棄の状況が窺える。また住居址間接合土器296から10号住→12号住の時系列が認められる。



3 探深清水地区(5・5A区)の遺構と遺物

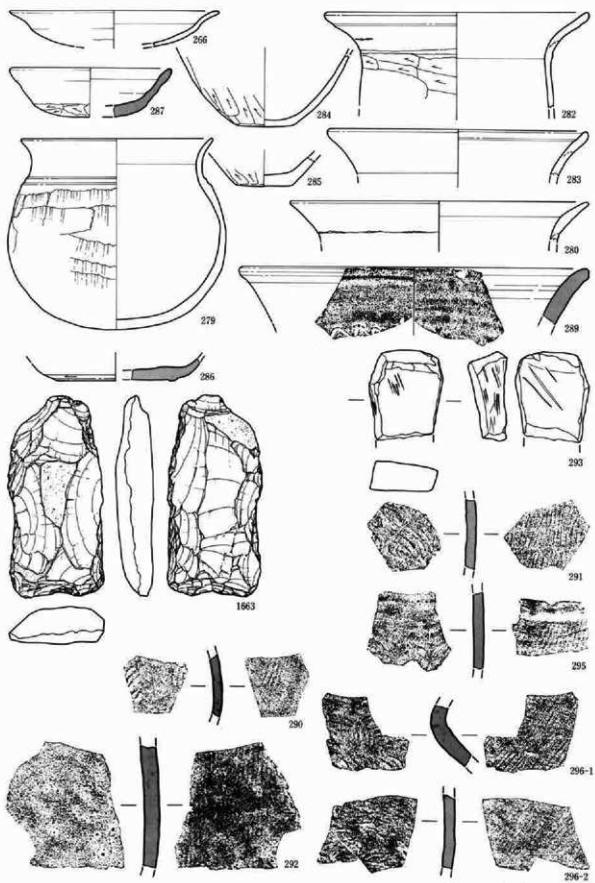


第82図 5A・10号住居址竈



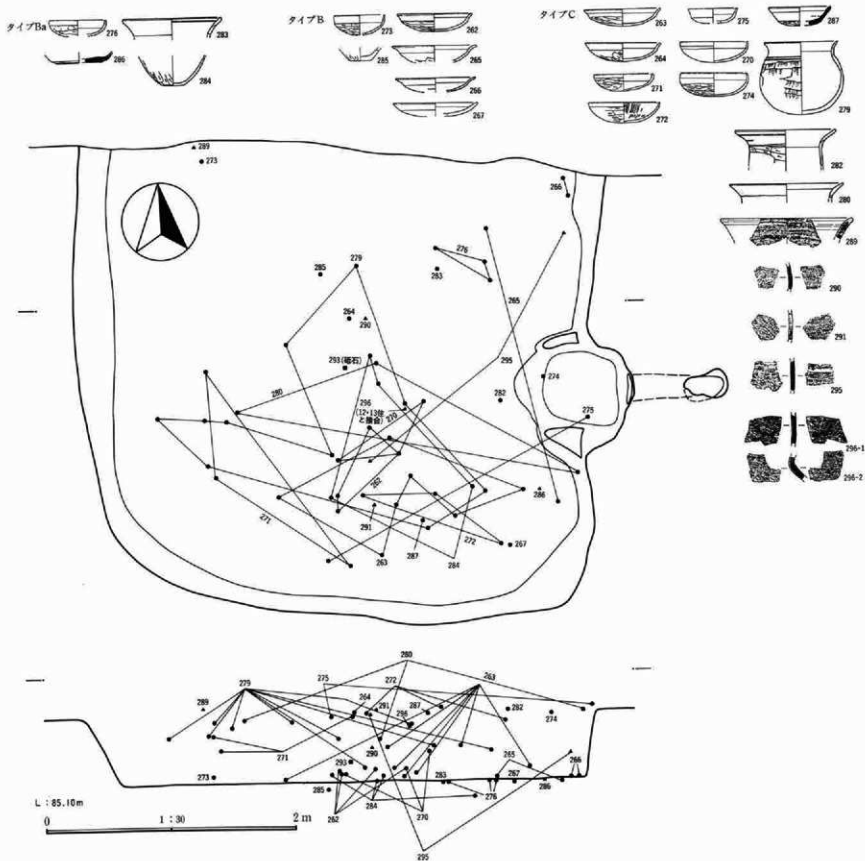
第83図 5A・10号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第84図 5A・10号住居址出土遺物

0 1:3 10cm



第85図 5A・10号住居址接合分布図



## 5A・11号住居址

遺 構（挿図番号第86図 写真番号P L-117）

本住居址は覆乱を全面に受けている自動車販売会社跡地のなかで、かろうじて水路脇に電の残骸として存在している。所在するグリッドはD14・32で、おそらくD14・21, 31にも広がっている。絶対的位置はただろうが、電底面の焼けた範囲と西壁の痕跡だけが確認できるのみで確かでない。

電（挿図番号第87図 写真番号P L-117）

燃焼部は東壁に作られ、火床面下のみ残り、他は全て覆乱されていた。火床面はレンズ状に窪み焼土層が上面に乗り、下層に地山ブロックと焼土の混土がある。境部分より土器片が出土した。

遺物の出土状態（挿図番号第89図）

出土遺物総点数は9点で、全て土師器類297である。ほとんど床面上まで削平を受けているため、かろうじて電の窪みに297が残存していたものであろう。297はタイプBaである。

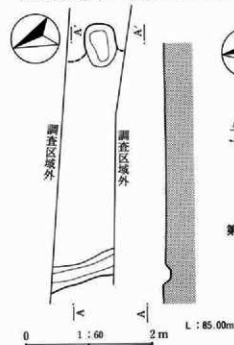
出土遺物（挿図番号第88図）

図示しえた遺物は、土師器類1個体のみである。

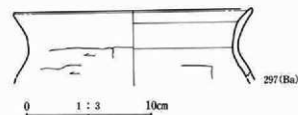
土師器類297は頸部に横篋削りが施され、胴部が球状を呈していたことが推量される。

## 所 見

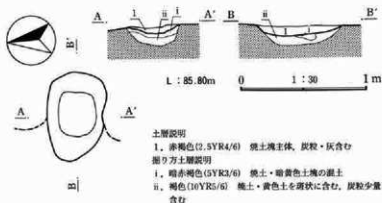
該住居址の存在から住居址の分布範囲はさらに西側へ広がっていた可能性がある。



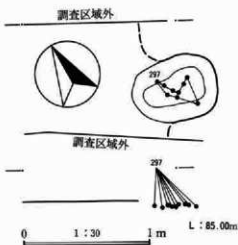
第86図 5A・11号住居址



第88図 5A・11号住居址出土遺物



第87図 5A・11号住居址電



第89図 5A・11号住居址接合分布図

#### IV 遺跡の調査

##### 5A・12号住居址

##### 遺構 (挿図番号第90図 写真番号P L-117)

絶対的位置	本住居址は、5A・10号住と同様に北壁と住居址の1/3を調査区外へ突出させている。所在する
相対的位置	グリッドはD14・83、84で、1.5m西には5A・10号住が軒を接するようにして位置する。住居址
確認面	確認面での標高は85.00mを測る。
規模・形態	規模は東西軸で2.82mを測れるのみで、南北軸と面積については不明である。平面形態は竈の
主軸方位	位置や形態から正方形プランを呈すると推測されるが確かでない。主軸方位はN-94°-Eである。
壁	確認面までの壁高は60cmを測り、壁はほぼ90°の角度で直に立ち上がっている。住居址の切り込み
覆土	層はシルト質の褐色土層で、覆土の上層にはAs-B層が水平堆積しており、11世紀には完全に埋没仕切っていたことが窺取される。覆土は3層に分けられ、後世の土坑による擾乱を除いては、レンズ状の自然堆積の様相を示している。
床	床面は板ねフラットで、竈前から住居中央部は堅くしまっている。床面上には周溝が西壁から南壁下を回り、南東コーナーに楕円形の貯蔵穴が穿たれている。貼床はしまりのある明黄褐色土を上層にして、鈍い黄褐色土と黄褐色土の混土層を構成土とする。掘り方は住居中央部に浅い大小2個の土坑が穿たれ、南東コーナーに床下土坑が貯蔵穴と一部接するようにして存在する。床下土坑は楕円の形状で、灰層下にシルト質の粘性土を覆土としている。

##### 竈 (挿図番号第91図 写真番号P L-118)

燃焼部	燃焼部は東壁南寄り部分にあり、中心は壁の延長上にある。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、上半部は奥壁煙道口に向かい焼き締まる。袖は地山塊混土を貼り付け作られ、焚き口部はやや内湾する。火床面はやや窪み、灰面直上に焼土層・地山塊混土層を乗せ、天井部崩落土と考えられる。
袖	
火床面	
煙道部	煙道部は中心部を後世の土坑により壊されていた。煙道口はやや隅丸方形の掘り方を持ち、レンガ状に焼き締まっている。煙り出し部はやや垂直に立ち上がり、煙道部中心とはややずれる。

##### 遺物の出土状態 (挿図番号第93図)

総点数 掲載遺物 平面分布 層位分布	出土遺物総点数は800点を数えるが、掲載遺物は8個体と少なく、小破片遺物が大多数であることを看取できる。遺物の平面分布の中心は貯蔵穴付近で、南壁際でも分布が認められる。層位的には各土層に遺物の流入が認められ、順次埋没していった状況が窺える。接合線の引ける遺物は土師器盤298と土師器環300で、298は1.5m四方に散乱している。タイプAは土師器環299と砥石306で、299は貯蔵穴で306は左袖附近から出土している。タイプBaは土師器壺301(竈内)、土師器環300、土師器盤298で、タイプBが須恵器壺304、タイプCは土師器壺358、須恵器盤303である。
タイプ	

##### 出土遺物 (挿図番号第92図 写真番号P L-192)

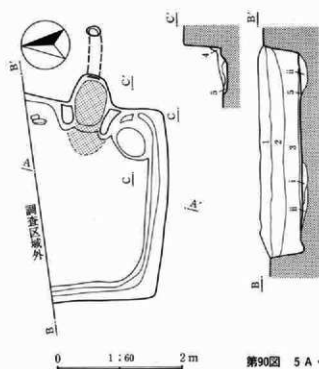
図示遺物	図示した遺物は、土師器壺2、土師器環2、土師器盤1、須恵器壺1、須恵器盤1、砥石1の8個体である。
土師器	土師器壺は、球形の胴部を呈するものと推測される。土師器環299は本来体部に線縁を有するタイプと思われる。土師器盤298は、平底気味の底部から外反する口縁部に至るタイプである。

##### 所見

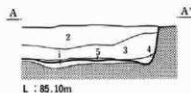
該住居址と10号住とは近接しているため同時存在とはなし得ない。土器に時間差は殆ど窺えないが、タイプBaの環の比較では若干後出の要素を認め10号住→12号住の時系列が肯定される。



3 篠塚清太地区 (5・5A区) の遺構と遺物

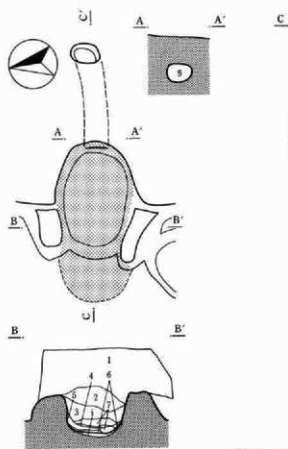


第90図 5A・12号住居址

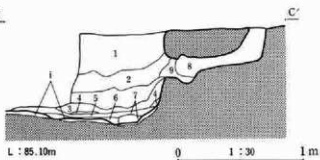


土層説明

1. オリーブ褐色(2.5Y4/4) A≒B少量含む。焼土粒・土溜片含む
  2. 褐色(10YR4/4) シルト、黄褐色塊少量含む、土溜片・炭化物粒多量を含む
  3. 暗褐色(10YR3/3) シルト、土溜片少量含む
  4. 黄褐色(10YR5/4) 焼土・炭粒含む
  5. 明黄褐色(2.5Y6/8) 黄色土・灰色土の混土、固い掘り方土層説明
- 掘り方土層説明
- i. におい黄褐色(2.5Y6/4) 焼土・炭粒・黄色土塊・褐色土塊の混土
  - ii. 黄褐色(2.5Y5/6) 黄色土主体、褐色土塊・黄灰色土塊少量含む混土



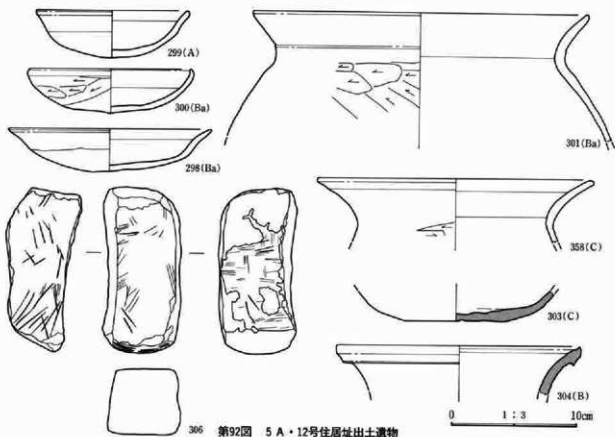
第91図 5A・12号住居址竈



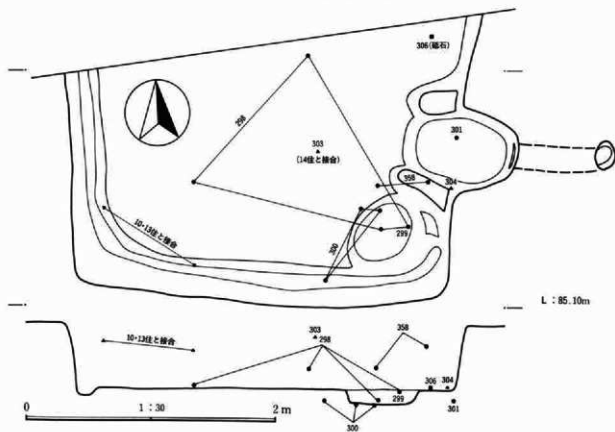
土層説明

1. 褐色(10YR4/4) (住居址埋没土2層)
  2. 褐色(10YR4/4) 焼土塊・黄色土塊含む
  3. 黄褐色(10YR5/6) 天井部崩落土、焼土塊・炭化物・炭粒含む
  4. 褐色(7.5YR4/6) 灰・焼土粒含む
  5. 黄褐色(10YR5/4) 焼土・炭粒少量含む
  6. 褐灰色(7.5YR4/1) 炭化物を反層に含む
  7. 褐色(7.5YR6/6) 焼土層
  8. 褐色(10YR4/6) 黄色土・褐色土の互層、焼土塊含む
  9. 褐色(7.5YR6/8) 焼土塊・褐色土の混土
- 掘り方土層説明
- i. 黄褐色(2.5Y5/3) 灰色土の混土層、焼土粒・炭化物少量含む

IV 遺跡の調査



第92図 5 A・12号住居址出土遺物



第93図 5 A・12号住居址接合分布図

## 5A・13号住居址

## 遺 構（挿図番号第94図 写真番号P L-118）

本住居址はD13・84, 94グリッドに所在し、5A・12号住の南東5mに位置する。周囲にはAs-B軽石を覆土に含んだ土坑が多数穿たれており、本住居址内にもその一連の土坑が幾つか存在している。確認面の標高は85.10mと比較的高い数値を示し、下部には5A・14号住が重複している。

規模は東西2.54m・南北3.12mを測り、面積は8.98㎡である。平面形態は東西軸対南北軸の比が1:1.68の、かなり横長の長方形プランを企図しているようだ。主軸方位はN-85°-Eを指している。床から確認面までの壁高は平均40cmを測り、壁はほぼ90°に近い明瞭な立ち上がりを見せている。覆土は2層に大別され、上層に焼土粒・炭化物粒・土器片を含む褐色土層、下層には黄色土粒を多く含んだ褐色土層が北壁側から流れ込んだ様相が見られる。

床面の状態はフラットであるが、5A・14号住と重複している部分の床面の検出にはかなり微妙なものがあった。床面上には2個の貯蔵穴が南東コーナーと西壁中央部の僅か北よりに穿たれていて、西壁中央部のP2と呼ばれる貯蔵穴の南縁に沿うように、長さ50cm・幅15cm・高さ5cmの高まりが存在する。同様な例としては荒砥三木堂遺跡1区1号住居に類例がある。

## 竈（挿図番号第95図 写真番号P L-118）

燃焼部は東壁中央部にあり、煙道につづく奥壁部分を僅かに掘り込んでいる。壁面の焼けは弱い。袖は地山塊を含む土を貼り付け作られている。火床面は床面よりやや下がり、薄く灰の堆積が見られる。灰直上には焼土塊を多く含む層が乗り、左袖寄りの部分で地山塊が多く乗り、天井崩落土と考えられる。煙道部は大平を攪乱により壊されているが、底面と煙道口部分が残る。煙道口への立ち上がりは小さく、煙道は水平方向に伸びる。天井部は部分的に崩落している。

## 遺物の出土状態（挿図番号第97図）

出土遺物総点数は682点を数えるが、掲載遺物は10個体と少なく、小破片が出土遺物の大部分である。遺物の埋没状況を平面的に鳥瞰すると、西壁から南壁に沿って鍵の手のように分布している。層位的には遺物の集中帯が3ブロックあり、埋没時に何回かの遺物の廃棄・流入のあったことが窺える。掲載遺物の平面分布は、最も接合線が長く広範囲に広がっているのは須恵器羽釜318で、接合線は二等辺三角形をしめし、その頂点は15号住にまで散乱している。また竈内と貯蔵穴周辺に遺物の集中が見られ、鉄製品1629は北西隅で検出されている。垂直分布を見ると、遺物は住居址廃絶時のものと4a層流入時のものとそれ以降のものに分けられる。タイプAは器形が小さく壊れにくいせいか須恵器高台付塊に多い(308, 309)。タイプBaはなく、タイプBが須恵器高台付塊312、313、タイプCは須恵器高台付塊307、310、314、羽釜318、である。

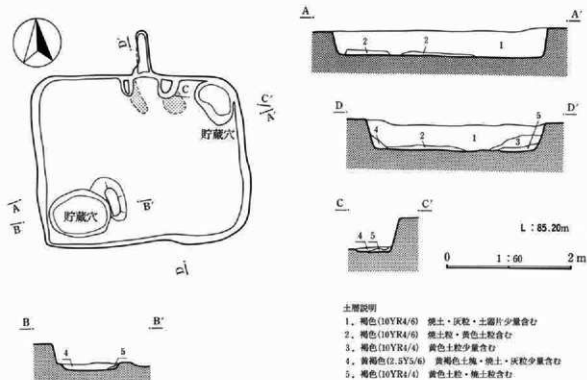
## 出土遺物（挿図番号第96図 写真番号P L-192・216）

須恵器羽釜318は、断面三角形で上向きにつく鉤をへて内傾する口縁部に至る。全体的にシャープな作りで、還元炭焼成である。須恵器高台付塊は、いずれも胎土が粗く雑な高台の貼付に特徴をもち、焼成は半還元か酸化炭焼成が多い。

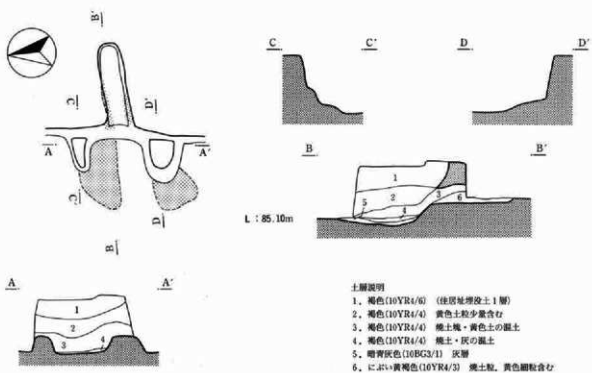
## 所 見

遺物の平面分布が鍵の手状に見えるのは住居址の重複による現象であると理解され、該住居址への遺物廃棄行為や流入現象は埋没過程で通時的に存在したものと思量される。

IV 道跡の調査

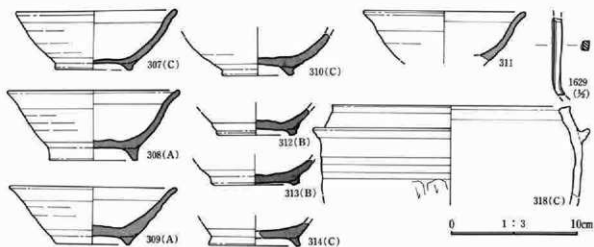


第94図 5A・13号住居址

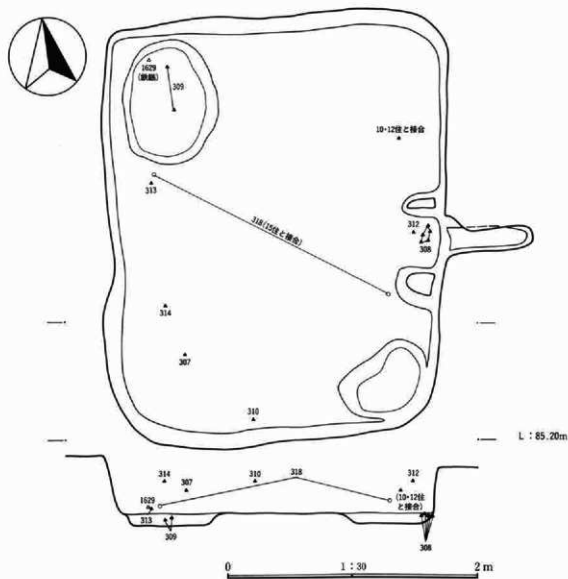


第95図 5A・13号住居址

3 藤塚清太地区（5・5A区）の遺構と遺物



第96図 5A・13号住居址出土遺物



第97図 5A・13号住居址接合分布図

#### IV 遺跡の調査

##### 5A・14号住居

##### 遺構 (挿図番号第98図 写真番号P L-119)

**絶対的位置  
確認面** 本住居址は5A・13号住の下部に重複して存在し、D13・94グリッドに位置する。確認面での標高は85.10mで、5A・13号住と同様である。

**規模・形態** 規模は東西3.66m・南北2.98mで、面積は14.33㎡を測り、平面形態は縦長の長方形プランを呈している。主軸方位はN-81°-Eである。床面から確認面までの壁高はほぼ80cmで、角度は約65°～70°で立ち上がり、西壁は一部で段差をもっている。覆土は、明黄褐色土を主体に黒褐色土と黄褐色土の土塊が、土層内に混入するという図式で構成されている。そして、床面に近くなるほど焼土粒や炭化物粒の含有量が多くなる傾向があり、人為的な埋没の可能性もある。

**床** 床面は全体的に平坦で堅く締まり、特に電前が堅硬である。床面上には南東隅に貯蔵穴が穿たれ、西壁下と南壁の一部に周溝が巡っている。また住居址の南東寄り東西1m・南北1.6mの範囲に焼土面が広がっているのが確認された。覆土の様相と前述の観察からすると、焼失住居の可能性が高い。貼床の構成土は、褐色土と黄色土と明黄褐色土の混土層で、層全体が緻密に締まっている。

##### 竈 (挿図番号第99・100図 写真番号P L-119)

**燃焼部** 燃焼部は東壁中央部の壁を掘り込んで作られている。中心は壁の延長やや外側にあり僅かに袖を持つ。壁面は垂直に立ち上がり、上半はレンガ状に焼き締まる。袖は地山塊混土を貼り付け作られている。右袖部には土師器壺が埋置され補強材として利用していた。火床面は隅丸形状に窪み僅かに奥が低くなる。灰の堆積は多い。直上には焼土層・地山混土層が乗り、天井崩落と考えられる。煙道部は奥壁中央部に掘り方台形の煙道口を持ち、全面レンガ状に焼き締まる。煙道は斜め方向に伸び、掘り方台形の煙り出しに出る。天井部はやや落ち込んでいる。電前には土師器壺が横倒しの状態で個体出土しており、焚き口部の補強材として利用されていた可能性もある。

##### 遺物の出土状態 (挿図番号第102図)

**総点数** 出土遺物総点数は446点を数え、遺物は住居址東半部に集中している。層位的には13号住により上部を削平され、廃絶時に近い最下層の土層には特有の乱れがある。掲載遺物は電周辺にその分布が見られ、平面的には接合線が長く引かれるのは土師器壺331と須恵器壺343である。垂直分布では、331は竈を中心とし、343は外部からの何回かの流入の所産と思考される。タイプAに土師器壺331、332、土師器環323が、タイプBaに土師器壺333が、タイプBに土師器壺336、土師器盤329があげられる。

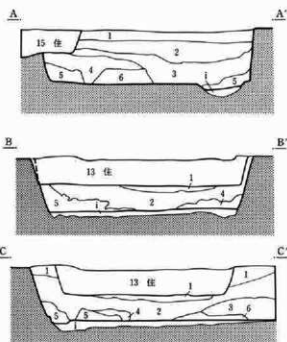
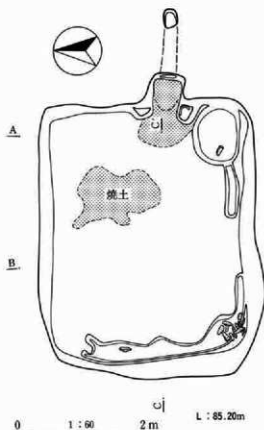
##### 出土遺物 (挿図番号第101・103図 写真番号P L-192・193・216・217)

**土師器** 土師器壺は、①胴部上位に膨らみをもち斜縦位の寛削りが施されるもの(331)、②胴部中位に膨らみをもち斜縦位の寛削りが施されるもの(332、333)、③胴部が球形を呈するもの(336)の3タイプに分かれる。土師器環は、尖り気味の丸底から口縁部が短く内傾するタイプが大半を占める。土師器盤は、平底気味の底部から外反する口縁部に至る328と、ほとんど稜線が認められず直線的に底部から体部をへて口縁部に至る329がある。

##### 所見

該住居址は焼失住居と考えられ、下層埋没土はその乱れようから焼失時における所産と理解される。遺物の出土様相は10号住と酷似しており遺物廃棄・流入の激しさを物語る。

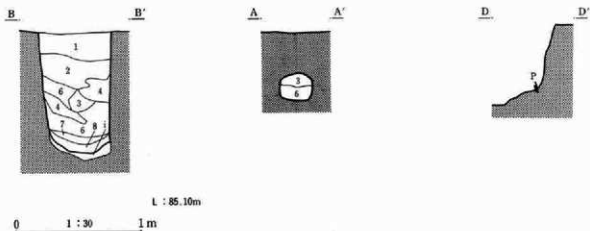
3 篠塚清太地区(5・5A区)の遺構と遺物



土層説明

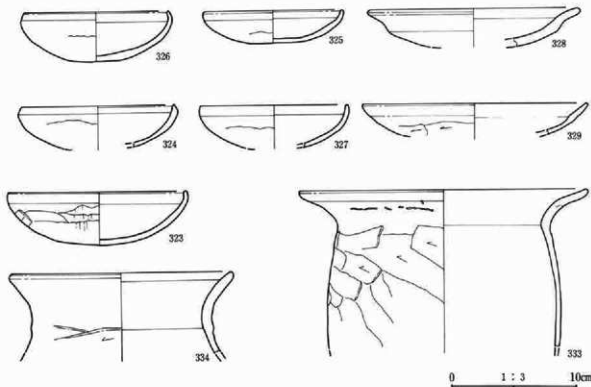
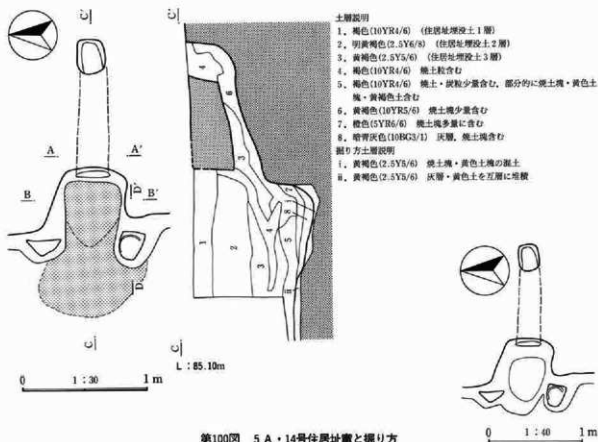
1. 褐色(10YR4/6) 黄褐色土小塊・褐色土の混土
  2. 明黄褐色(2.5Y6/6) 黄色小塊含む、褐色土塊・焼土粒少量含む
  3. 黄褐色(2.5Y5/6) 焼土塊・灰粒・褐色土塊含む
  4. 明黄褐色(2.5Y6/8) 黄色土塊・褐色土塊の混土
  5. 黒褐色(10YR2/3) 黄色土少量含む、土質緻密
  6. 褐色(10YR4/4) 焼土粒・灰粒・灰混土
- 掘り方土層説明
1. 明黄褐色(2.5Y6/8) 黄色土・黄褐色土の混土

第98図 5A・14号住居址

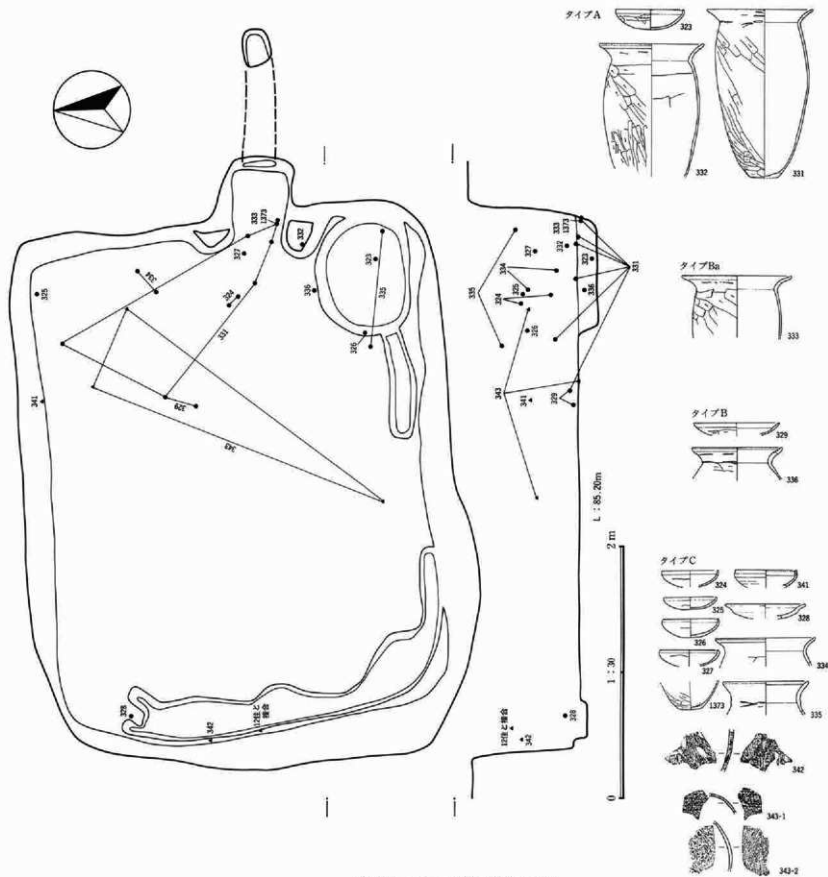


第99図 5A・14号住居址竈

IV 遺跡の調査



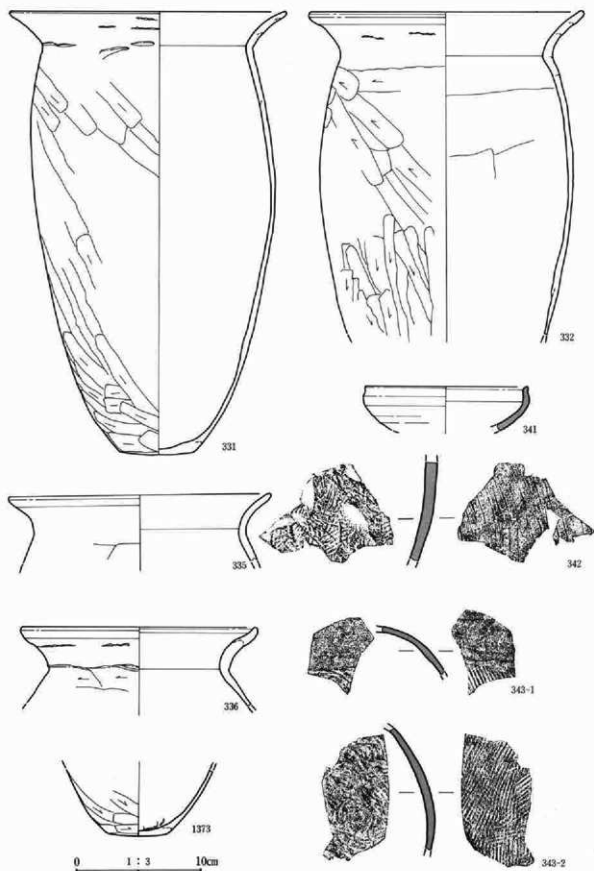




第102図 5 A・14号住居址接合分布図



3 蕨塚清太地区（5・5A区）の遺構と遺物



第103図 5A・14号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査

5 A・15号住居址

遺構 (挿図番号第104図 写真番号P L-119)

- 絶対的位置 本住居址はD13・84グリッドに位置し、13、14号住と重複して所在する。該住居址は13号住に  
 確認面 切られ、14号住の上部に乗った形で切り合い、確認面の標高は85.05mを測る。  
 規模・主軸 規模は東西2.62mが測れるが、面積、平面形態は不明である。主軸方位はN-85°-Eと考えられ  
 覆土 るが確かでない。確認面までの壁高は35cmを測り、角度は80°近い傾きを示している。覆土は2層  
 に分けられ、純な自然堆積の様相が看取される。  
 床 床面は概ね平坦で、床面上の施設は住居址が欠損しているため確認できない。

竈

重複により確認できなかった。

遺物の出土状態 (挿図番号第104図)

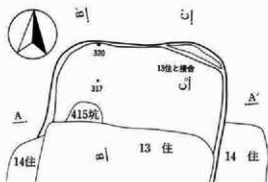
- 結点数 出土遺物結点数は309点を数えるが、掲載遺物は僅か3個体で小破片の多さが際立っている。出  
 掲載遺物 土遺物は北壁際に集中し、層位的にも床から浮いた遺物が多い。いずれもタイプCである。  
 タイプ

出土遺物 (挿図番号第105図)

- 図示遺物 図示した遺物は、土師器坏2、須恵器甕破片1の3個体である。  
 土師器 土師器坏は、いずれも丸底で体部が内湾する形態をもち、口径が13cmタイプである。

所見

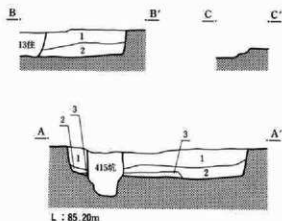
該住居址は14号住と近い時期の所産と考えられるが、切り合いから14号住→15号住という順序  
 が与えられる。



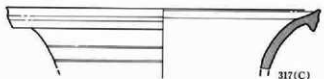
土層説明

1. 褐色(10YR4/6) 焼土粒・土器片含む
2. 黄褐色(10YR4/3) 焼土粒・土器片・黄色土含む
3. 黄褐色(10YR4/3) 黄色土少量含む

第104図 5 A・15号住居址



0 1:60 2m



0 1:3 10cm

第105図 5 A・15号住居址出土遺物

## 5A・16号住居址

遺 構 (挿図番号第106図 写真番号P L-119)

本住居址は5A区の西南端に位置し、4号溝を掘削する時点で破壊され、4号溝の底部に竈部分と推定される焼土と貯蔵穴及び西壁と北壁の一部が確認されているにすぎない。所在するグリッドはD14・92である。

規模は不明であるが、かろうじて北西コーナーと南壁下の周溝が検出されているため、南北軸で推定3.74mを測ると思われる。また平面形態も推定ではあるけれども、貯蔵穴位置と北西コーナー及び南壁下の周溝から、正方形プランが想定できる。主軸方位は推定N-71°-Eである。壁高は西壁で50cmを測り、明瞭な立ち上がりを示している。覆土については、前述のように本住居址は4号溝によってすでに中世において破壊されているため記述しえない。

床面については残存部分から判断すると、概ね平坦であろうことが推測される。床面上の施設としては、南東隅に貯蔵穴とおもわれる隅丸方形の掘り込みが穿たれており、南壁下には周溝が存在する。また北西コーナー付近には、円形の土坑が掘り込まれている。

## 電

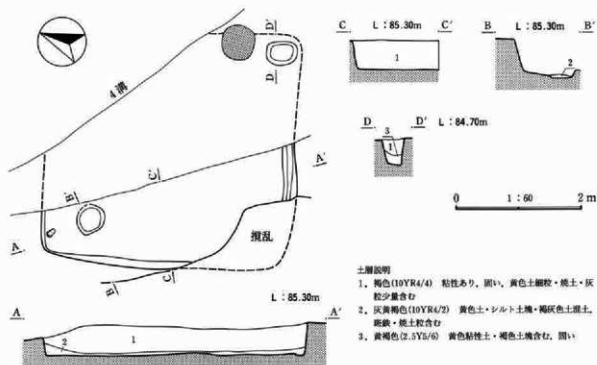
04号溝開削時の削平により破壊消失せしめられたものと推測される。

遺物の出土状態 (写真番号P L-217)

出土遺物総点数は6点あるが、極小破片であるため図示しえた遺物は皆無である。

## 所 見

主軸方向は8m南東に所在する5・06号住に近似する。



第106図 5A・16号住居址

#### IV 遺跡の調査

##### 5 A・17号住居址

遺 構 (挿図番号第107図 写真番号P L-119)

本住居址は、5 A・16号住居同様に4号溝による破壊と西側の2/3部分を調査区外へ突き出しているために、その全容は窺い知れないが、僅かに残る痕跡から復元を試みる。該住居址の所在する絶対的位置 相対的位置 グリッドはD14・81で、5 A・03号住の南西7mの位置にある。

規模・形態 規模は南北軸で推定3.60mを測れるのみであり、平面形態・主軸方位・壁・覆土ともに不明である。

床 床面はフラットで全面に亘って堅緻であり、床面上には南西コーナーに隅丸方形の貯蔵穴と住居址北寄りに柱穴と思われるピットが穿たれている。また南北壁が予想される付近には周溝が検出され、竈附近には焼土が広い範囲に確認された。

竈 (写真番号P L-120)

燃焼部 燃焼部は火床面のみ残り、貯蔵穴の位置から、東壁を掘り込んで作られていたと考えられる。

焚き口 竈前の焚き口部にあたる部分より、土師器壺が横倒しの状態で出土し、焚き口補強材として利用されていたと考えられる。

遺物の出土状態

総点数 出土遺物総点数は86点を数え、その殆どが竈周辺出土の壺の破片である。該住居址は04号溝の開削に際して床面直上までの削平を受けたため、遺物は床に張り付いた状態で検出された。掲載遺物の土師器壺344、345は、その出土位置から竈に係わる用途が思考される。

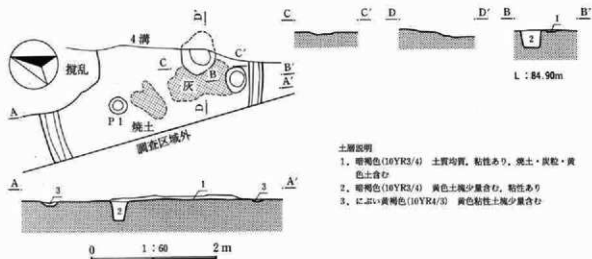
出土遺物 (挿図番号第108図 写真番号P L-192・193)

図示遺物 図示した遺物は、土師器壺2個体のみである。

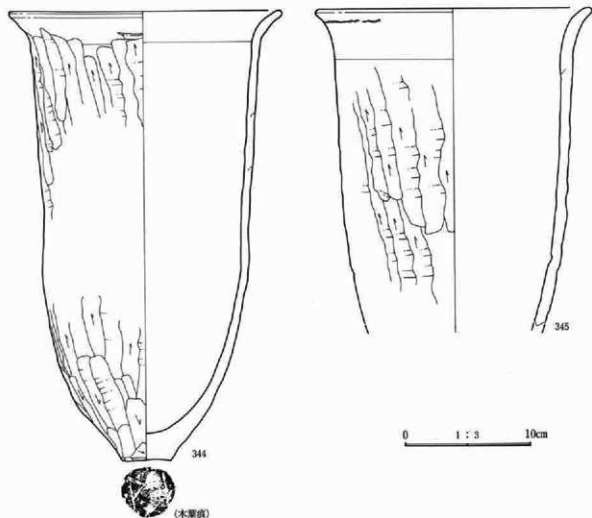
土師器 土師器壺は、いずれも胴部に膨らみがなく縦位の寛削りが施されるタイプである。土師器壺345はその形状から甔の可能性も考えられる。

所 見

該住居址も焼土のありようから焼失住居と考えられ、出土遺物様相から該地区における一番の古手の住居址と位置付けられる。



第107図 5 A・17号住居址



第108図 5A・17号住居址出土遺物

## 5A・18号住居址

遺 構 (挿図番号第109・110図 写真番号P L-120)

本住居址は、5A区の西端を東南から西北に区切る4号溝により、住居址のほぼ1/2を対角線に沿うようにして切り取られている。所在するグリッドはD14・61, 71, 72にまたがっており、すぐ東3mには大型住居址である5A・03号住が存在する。

規模は、北壁が残存しているために、東西軸がかるうじて3.72mを測れる。平面形態は、5A区の傾向から推定すると、正方形プランを意図した可能性が高い。主軸方位はN-106°Eを示す。床面は平坦で全面堅く締まっており、床面上には柱穴が4個穿たれていたはずだが、2個は4号溝によって欠損している。また周溝は壁下を全周していたと考えられるが、現況では残存した北壁と東壁の一部で確認されている。

竈 (挿図番号第111図 写真番号P L-120)

燃焼部は右袖側は後世の溝により覆され、2/3が残っていた。壁面は垂直に立ち上がり、レンガ状に焼き締まっている。火床面は床面と同レベルで、薄く灰層が堆積する。煙道部は緩やかに立ち上がり、側壁の焼けは弱い。土師器坏や須恵器坏片等が、多く出土している。

絶対的位置

相対的位置

規模・形態

主軸方位

床

燃焼部

火床面

煙道部

#### IV 遺跡の調査

##### 遺物の出土状態 (挿図番号第113図)

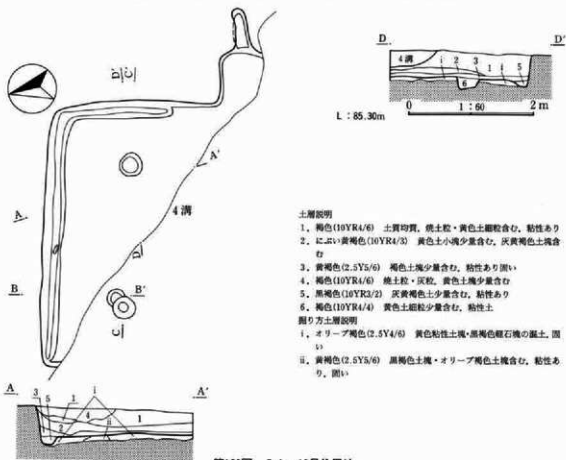
- 総点数** 出土遺物総点数は108点を数え、遺物分布の密度はそれほど濃くなく、住居址全体に散在している
- 遺物分布** 層位的には床面附近に分布の中心が認められる。
- 層位分布** 掲載遺物の埋没状況は、比較的接合線の数が少なく多少の遺物の動きが電周辺に認められるだけで、床面密着の遺物が多い。以上のことを併せて考えると、掲載遺物の多くは同時間内の所産と推測され、極めて住居址廃絶期に近い遺物群と考えられる。出土遺物はタイプAはなく、タイプBaが須恵器環346、351、須恵器環蓋349で、残りはタイプBである。

##### 出土遺物 (挿図番号第112図)

- 図示遺物** 図示した遺物は、土師器甕3、土師器環2、須恵器甕1、須恵器環3、須恵器環蓋1の10個体である。
- 土師器** 土師器甕は口縁部が短く外反する形態をもち、頸部に横篋削りが施される。土師器環は平底の底部からやや膨らみをもって外反する体部に至り、底部に篋削り、体部に指頭成形後撫でが施される。
- 須恵器** 須恵器環は、回転永切り未調整の底部から僅かに膨らみをもって外反するタイプで、いずれも胎土の密な還元炎焼成である。

##### 所見

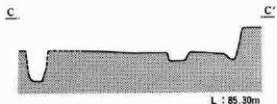
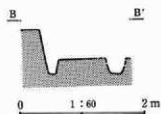
遺物は住居址廃絶直後の廃棄遺物が大部分で、それ以後の廃棄・流入遺物は僅少である。このことから周辺に営まれた住居址群の最終期の住居であることが推測される。



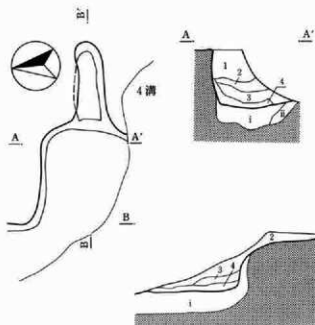
第109図 5A・18号住居址



3 篠塚清太地区 (5・5A区) の遺構と遺物



第110図 5A・18号住居址



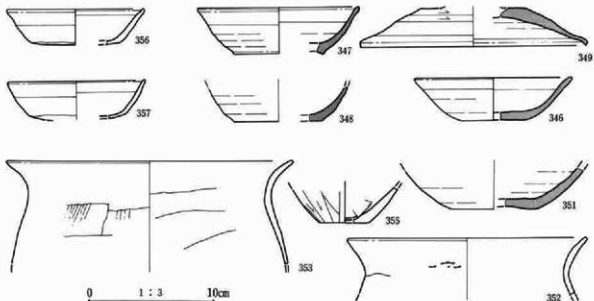
土層説明

1. 褐色(10YR4/4) 黄色土細粒・焼土・炭粒少量含む、粘性あり
2. にぶい黄褐色(10YR4/3) 黄色土粒、灰黄褐色土細粒含む、粘性・磁鉄あり
3. 暗赤褐色(2.5YR3/2) 焼土塊含む、土器片多量に含む
4. にぶい赤褐色(2.5Y4/3) 焼土塊、磁鉄・灰含む、固い

掘り方土層説明

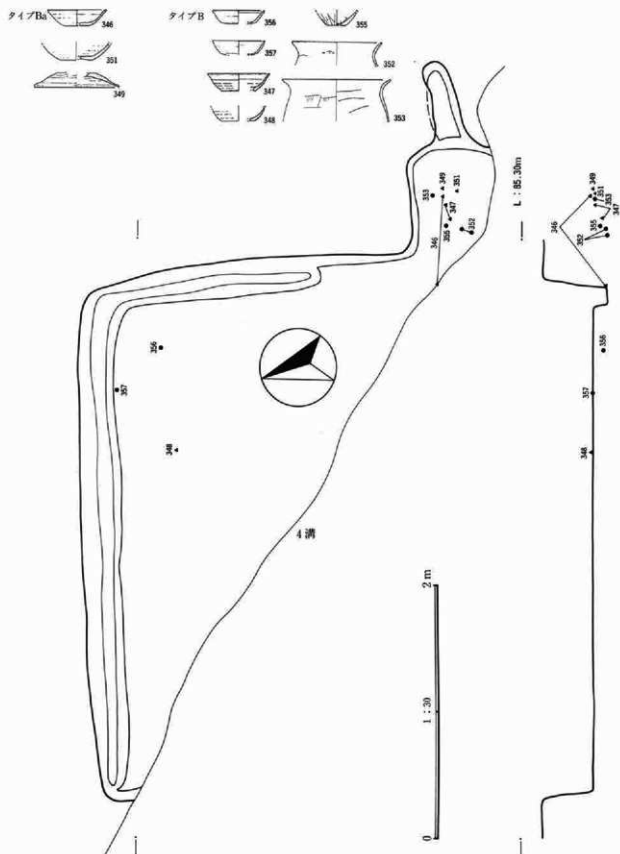
- i. 暗赤褐色(5YR3/4) 焼土塊・黄色土塊・灰・炭粒・磁鉄少量含む、粘性あり、固い
- ii. にぶい黄褐色(10YR4/3) 焼土粒・黄色土細粒・灰褐色土・鉄分沈着あり

第111図 5A・18号住居址竈



第112図 5A・18号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



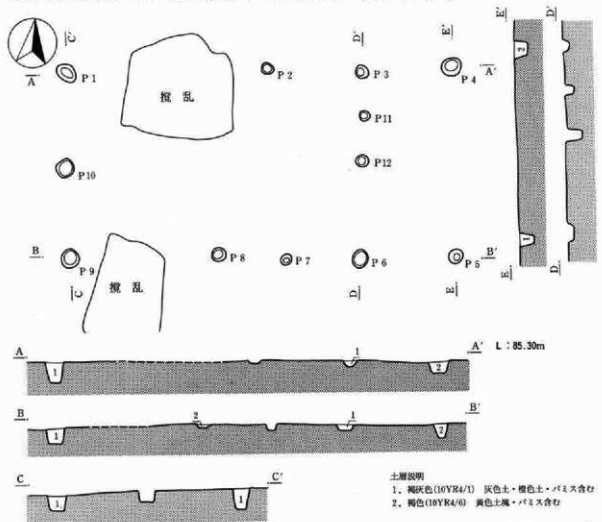
第113図 5 A・18号住居址接合分布図

## (2) 掘立柱建物跡

篠塚清太地区の掘立柱建物跡は、数多くの土坑が検出されたにもかかわらず、確認されたのは2棟のみである。篠塚清太地区の遺構群はその存在する低台地のいわば鞍部に位置し、掘立柱建物跡はほぼ該遺跡地の中央部の標高85.00m附近に所在する。2棟の掘立柱建物跡は東西に長軸をとり、平行する配置の在り方と横長長方形のプランから倉庫の可能性が考えられる。

## 5 A・01号掘立柱建物跡 (挿図番号第114図 写真番号P L-122)

本掘立柱建物跡は、遺跡地のほぼ中央部D14・34, 35, 44, 45グリッドに所在する。1.5m南に位置平行して02号掘立があり、東2mには07号住が存在する。確認面での標高は85.20mを測る。棟方標高棟方  
向は東西で、長軸方位はN-85°-Eを示す。規模は東西6.1m・南北2.9m、面積18.2m<sup>2</sup>である。平面規模  
平面形態は5間×2間の横長長方形で、柱間寸法は一定でない。確認された柱穴総数は12個であり、平面形態  
柱穴本来ならP1とP2の間に2個、P8とP9の間に1個の柱穴があるはずだが、擾乱により欠損柱穴  
している。柱穴の形状は円形・楕円形で、各柱穴の深さは一定でないが四隅を構成するP1, 4, 形状  
5, 9の各柱穴の深さはほぼ一定である。また内側のP11, 12は、その位置から束柱の可能性も深さ  
ある。土層には上層にAs-B軽石が混入しており、時期同定の一資料となし得る。



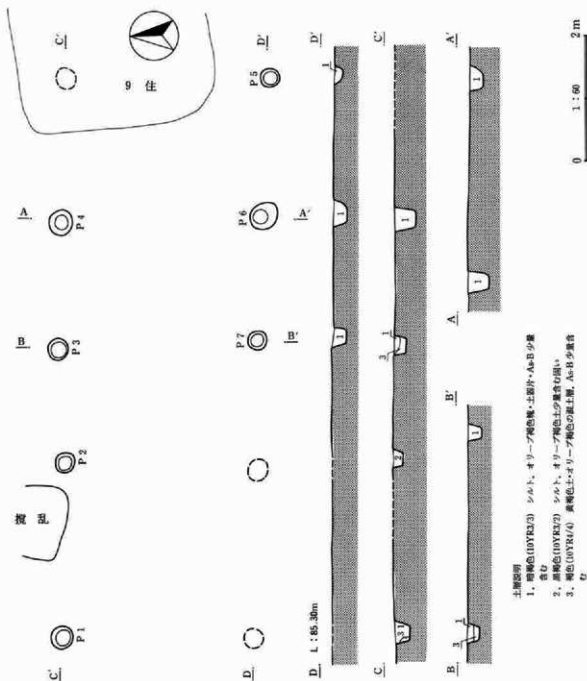
第114図 5 A・01号掘立柱建物跡

0 1:60 2 m

IV 遺跡の調査

5 A・02号掘立柱建物跡 (挿図番号第115図 写真番号P L-122)

**位置** 本掘立柱建物跡は、前述の01号掘立の南D14・44, 45, 54, 55グリッドに所在する。柱穴痕確  
**標高** 認面の標高は85.10mを測り、北に隣接する01号掘立よりも若干低い。棟方向は東西で、長軸方位  
**規模・形態** はN-89°-Eを示す。規模は東西8.8m・南北3.1m、面積27.6㎡である。平面形態は4間×1間の  
**柱穴** 超横長長方形で、柱間寸法は一定でない。確認された柱穴総数は7個で、北東隅と南西隅と本来  
**形状・深さ** P 8の位置にある柱穴痕が3個欠落している。柱穴の形状は円形で、各柱穴の深さは約20cm内外  
 ではば一定である。土層には上層に As-B 軽石が僅かに含まれている。



第115図 5 A・02号掘立柱建物址

### (3) 溝跡・溜井

篠塚清太地区では14条の溝跡が確認されている。本発掘区の乗る低台地は、藤岡扇台地の走行と同様に、南南西方向から北北西方向に緩い傾斜をもっている。その地形を横切るような形で多くの溝が掘削されているが、ひとり5A・02号溝は等高線に沿うようにして各溝と直行するような走方向を取っている。ただ5A・04号溝は中世の鎌倉街道の伝承地でもあり、加えて中大塚遺跡でも同規模・同形状の道路状遺構が確認されており、道路状遺構の可能性が高い。

溝跡と溜井はセットをなすものと考えられ、特に藤岡扇状地のような水枯れの起こり易い土地では必要不可欠なものと思される。なお溜井は5区で1基確認されている。

鎌倉街道  
伝承地

溜井

#### 5・01号溝（挿図番号第117図）

本溝は5区の一帯東の三角形の形状を呈する約200㎡の発掘区に位置する。走方向を南から北へとり、E14・75、85グリッドを直角に横切るようにして発掘区外へ伸びている。断面形は台形状を呈し、深さは12cm内外である。確認できた長さは9mを測れる。

走方向

位置・形状

#### 5・02号溝（挿図番号第117図）

本溝はE14・85グリッドのほぼ中央部に位置し、01号溝と直交している。走方向は東西でグリッド線に沿って西行し、溜井状のくぼみに至り発掘区外へ伸びている。断面形は台形状で深さは10cm程度であり、確認できた長さはおよそ3.5mである。

位置  
走方向  
形状

#### 5・03号溝（挿図番号第116図）

本溝はE14・96、95、94、93とグリッド線に平行するようにして、走方向を東から西にとっている。断面形は台形状を呈し、深さは5～15cmの幅をもっている。発掘区で確認できた全長はおよそ30mである。該溝には底面に多くの小土坑が掘り込まれ、かつE14・95附近では溝に沿って十数個の小土坑列が確認されている。その意味するところについてはこれからの研究課題である。

位置  
走方向  
形状

小土坑列

#### 5・04号溝（挿図番号第117図）

本溝は02号溝と約1mの距離で平行してE14・85グリッドに位置する。走方向は南北で北行し、現象面的には発掘区内で完結する様相をみせる。断面形は台形を呈し、深さは5～10cm、長さ5.5mを測る。01号溝と併せて考えると、南北に延びる道路状遺構の可能性も推測される。

位置  
走方向  
形状

#### IV 遺跡の調査

##### 5・05号溝 (挿図番号第118図)

位置  
走方向  
形状  
本溝は5区の西端D15・04グリッドに位置し、走方向は南西～北西ラインで発掘区外へ伸びている。断面形はU字状を呈し、深さは35～45cmで、長さ3mを測る。いちおう溝としているが細長い土坑の可能性も捨て切れない。

##### 5・06号溝 (挿図番号第118図)

位置  
走方向  
形状  
本溝はD14・83, 93, 94, D15・05グリッドを斜めに南東から北西方向へ走って、5・01溜井へ流入する。断面形は逆台形を呈し、深さ12cmで長さ15mを測る。D15・04の05号溝附近で向きを変え、東方向からの流れを示す気配もあるが消失している。

##### 5・07号溝 (挿図番号第117図)

位置  
走方向  
形状  
本溝は5区の東部E14・75グリッドに位置し、01, 04号溝と平行して走る様相を呈している。断面形は浅い逆台形で、深さ5cmで発掘区外へ伸びている。

##### 5・01溜井 (挿図番号第118図 写真番号P L-108)

位置  
本溜井は5区の西端のD14・73, 83グリッドに所在し、位置関係から推測すると5・06号溝が溜井に流れ込み、5 A・06, 07号溝が溜井から流れ出す形にある。

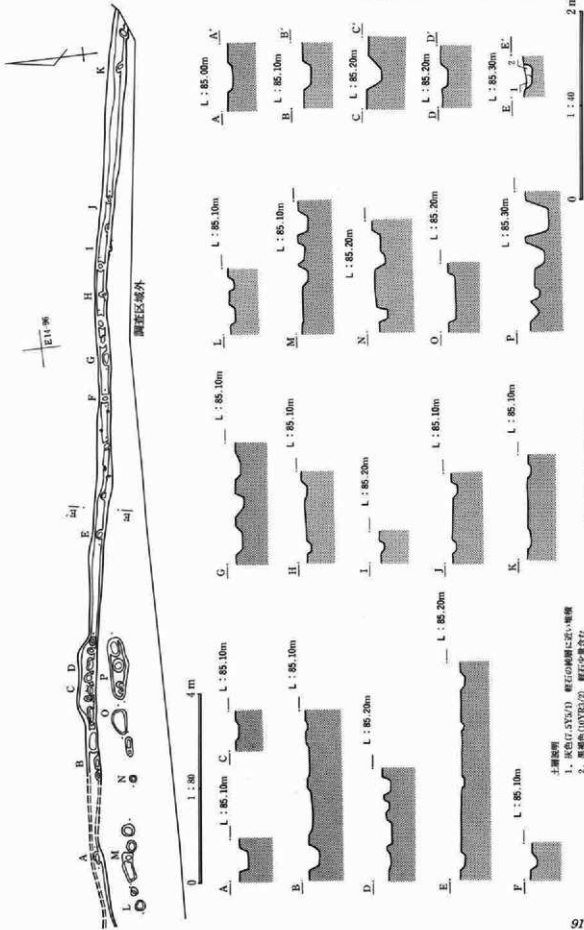
平面形態  
平面形態は不整形で、断面形は中央が僅かに窪む皿状を呈している。規模は推定東西6.7m、南北5.0m、面積33.5㎡、深さは現況で55cmを測る。

埋没土  
埋没土は粘性のある還元性の土層で湛水した様相が窺える。

出土遺物  
出土遺物は小片ばかりで図示しえた遺物はないが、遺物分布は北辺に偏っており、とくにその中央部に密度が高い。

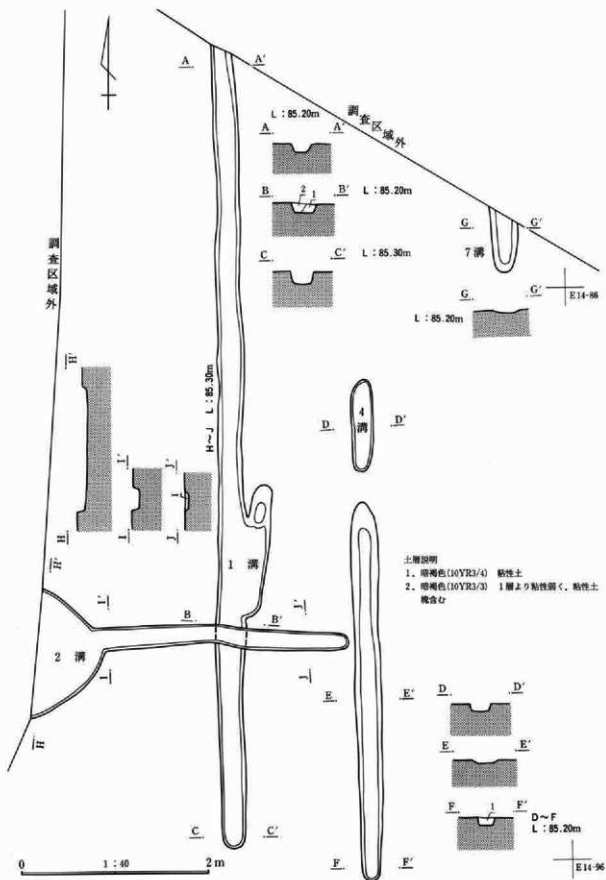
溜井状遺構  
また5区東の飛び地部分E14・85グリッドに位置し、02号溝が東から注ぎ込んでいる溜井状の遺構がある。該遺構は大半が調査区に位置し、平面形態は円形状を呈すると推定され、断面形は皿状で径1.3m・深さは現況で10cmを測る。

本遺構は小型で深さも浅く溜井としては疑問符がつくので、02溝との関係やその立地から溜井と判断してもよいと思われるが、ここでは溜井とは結論づけない。



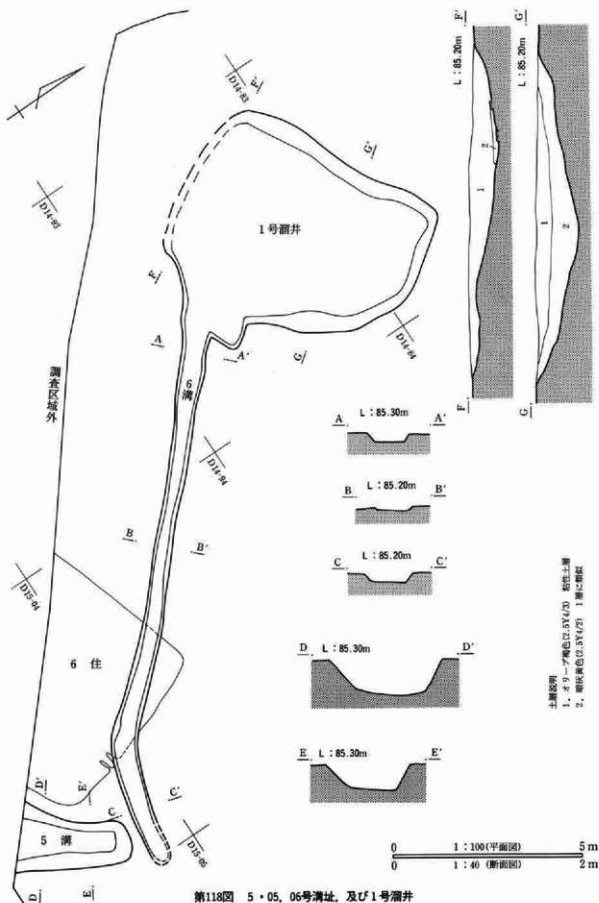
第116図 5・03号溝址

IV 遺跡の調査



前117図 5・01, 02, 04, 07号溝址





第118図 5・05, 06号溝址, 及び1号掘井

#### IV 遺跡の調査

##### 5 A・01号溝 (挿図番号第119図)

**走方向** 本溝は発掘区を斜めに横断する現代の三面コンクリートの水路に沿うようにして、東南東から  
**位置** 西北西に一直線に走行している。通過するグリッドは、D14・55, 54, 44, 43, 42, 32, 31, 20,  
**形状** C14・29, 18の11グリッドにまたがっている。断面形はU字状を呈し、幅30cm弱で深さは平均20  
**層相** cmである。埋没土層は2層に分かれ、上層の第1層にはAs-B軽石が5%含まれており、As-B軽  
 石降下後も使用に供されていたことが窺える。該溝は02号溝を切っているものと推定される。

##### 5 A・02号溝 (挿図番号第120・125図 写真番号P L—121・194)

**位置** 本溝は遺跡地の北半部を南西から北西方向へC14・39, D14・30グリッドを斜めに横切り、D  
**走方向** 14・21グリッドから向きを東方向へ変えてD14・22～25グリッドを東へ走っている。断面形は下  
**形状** 部がU字状で上部が楕円状の広がりを呈し、複元すると幅は80cmで深さ30cmを測るものとなる。  
 断面を見ると、何回かの掘り返した形跡があり廃絶時までの時間幅がある程度長く考える必要が  
**層相** ある。また底部に砂層の堆積が見られることから水流のあったことが窺える。As-B軽石の降下時  
 点では完全に該溝は埋没しており、使用年代としては平安時代が考えられる。

##### 5 A・03号溝 (挿図番号第121・125図 写真番号P L—121・194)

**走方向** 本溝は遺跡地の東縁に沿って南北に走り (N-18°-W)、D14・15グリッド付近で02溝と交差しさ  
**位置** らに南流しながら調査区外へ延びていく。断面形は皿状を呈し (一部U字形)、上幅は160cmを越  
**形状** えるが深さは18cmに過ぎない。土層断面を観察すると、第1, 2層ともAs-B軽石の混土層で、  
**層相** このことから該溝はAs-B層降下後の中世初頭の所産と推測され、さらに02溝を切って所在する  
 ことが理解される。

##### 5 A・04号溝 (挿図番号第123・125図 写真番号P L—110・120・121・122)

**走方向** 本溝は遺跡地の西南辺を南東から北西方向へN-35°-Wの傾きで向かっている大溝で、古来から  
 鎌倉街道跡地との伝承のある地であり、地割りも南西方向から北西方向へ細長い形状の土地が続  
**形状・深さ** いている。溝の断面形は皿状を呈し、規模は上幅460cm・下幅350cm、深さ40～70cmと群を抜いて  
**層相** 大きい。土層断面を観察すると、現耕作土下の第1層にはAs-A軽石の混土層が存在し、南端の  
**第1層** セクションでは第2層の上部が畝状を呈し、谷部にはAs-Aの純層が残存していた。また畝状の  
 高まりの土壌をプラント・オパール分析したところ、イネのプラント・オパールが検出され、稲  
**第2層** 作の行われていた可能性が認められた。第2層は風化白色軽石を含む均質土層で、風化白色軽石  
**第3層** はAs-B軽石と思量される。第3層は水の影響を受けたと思われるシルト質の鉄分沈着層で、締  
 まりが強いが水流を示す砂礫層の堆積は見られない。該溝の特徴的なことは、中央部に小溝が穿  
**溝の散布** たれその内部と周辺には線の散布が認められ、D14・46グリッド付近で幅を広げて北流すること  
 である。また土層断面を見ると南から北へ向かって深さを増すように感じられるが、標高差は殆  
 どなく台地状の地形をプラットに掘り込んだ結果の所産と考えられる。

**鎌倉街道** 前述したように鎌倉街道伝承地であるという点と溝跡とするには水流の痕跡の認められない点  
**伝承地** から勘察すると、中大塚遺跡1区で検出された道路遺構との関連が想起される。これらの点につ  
 いては成果と問題点の項で触れてみたい。

## 5 A・05号溝(挿図番号第123図 写真番号P L-122)

本溝は04溝の東辺に沿って調査区外からD14・82グリッドにまで伸びる溝で、走方向はN-46°-Wの傾きで北流する。溝の断面形は皿状を呈し、規模は上幅80cm、深さ26cmである。土層は04溝の第3層と類似する土壌が埋設土となり、かつ04溝の第2層が埋設後の該溝を覆っている。このことから本溝は04溝を多分に意識して掘削され、同時期かあるいはかなり近い時期の所産と思考される。

位置  
走方向  
形状  
層相

## 5 A・06号溝(挿図番号第122図 写真番号P L-120・122)

本溝はD14・82、83グリッドにまたがる全長5m弱の小溝で、2m北の07溝とはほぼ平行して存在している。走方向はN-103°-Wと東西で、形状は弱い弧を描く様相を見せている。溝の断面形は皿状を呈し、上幅は55cmを測るが深さは6cmと浅い。土層は最下層に砂粒を多量に含み水の流れた形跡が認められる。また該溝のすぐ東には5・01溜井があり、両者の関係についても考究する必要がある。

位置  
走方向  
形状・層相

## 5 A・07号溝(挿図番号第122図 写真番号P L-120・122)

本溝は06溝に平行してD14・82、83グリッドに所在し、走方向をN-91°-Eと東西にとる小溝である。断面形はU字形を呈し、規模は上幅30cm弱だが深さは13cmである。土層状態は06溝と類似しており、水流の存在したことが窺える。該溝は04溝に流れこむ形をとっており、5・01溜井と06溝をも含めた関係把握の必要性があるだろう。

位置  
走方向  
形状  
層相

## 5 A・08号溝(挿図番号第122図)

本溝はD14・05、D13・95グリッドにまたがって所在し、走方向をN-42°-Eにとる全長5m強の小溝である。溝の断面形は薄い皿状を呈し、規模は上幅25cm、深さ5cmを測る。土層は一層でAs-B 軽石を多量に含んでいる。

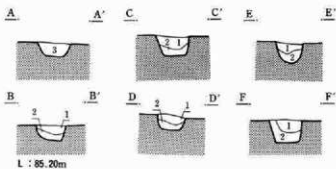
位置  
走方向  
形状・層相

## 5 A・09号溝(挿図番号第122図)

本溝はD14・05グリッドに所在する全長2m弱の小溝で、N-64°-Eの走方向をもつ。溝の断面形は皿状を呈し、規模は上幅20cm、深さ8cmを測る。土層は08溝と類似しており、As-B 軽石の多量混入が見られ、付近の土坑の埋設土との類似性も指摘される。

位置  
走方向  
形状・層相

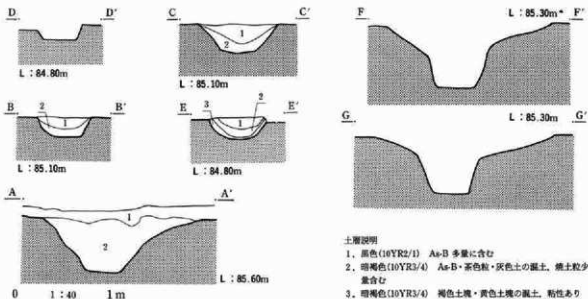
IV 遺跡の調査



- 土層説明  
 1. 黒褐色(10YR3/2) 細砂、軽石少量含む  
 2. 暗褐色(10YR3/4) シルト粒を少量含む  
 3. 濃い黄褐色(10YR4/2) シルト粒少量含む

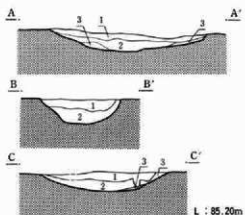
第119図 5A・01号溝址

0 1:40 1m



- 土層説明  
 1. 黒色(10YR2/1) A+B 多量に含む  
 2. 暗褐色(10YR3/4) A+B・茶色土・灰色土の混土、軽石少量含む  
 3. 暗褐色(10YR3/4) 褐色土塊・黄色土塊の混土、粘性あり

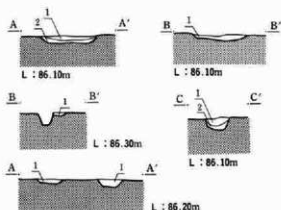
第120図 5A・02号溝址



- 土層説明  
 1. 黒色(10YR2/1) A+B 多量に含む  
 2. 黒色(10YR2/1) A+B 少量、黄色土塊・土層片含む  
 3. 褐色(10YR4/4) 黄褐色土の混土

第121図 5A・03号溝址

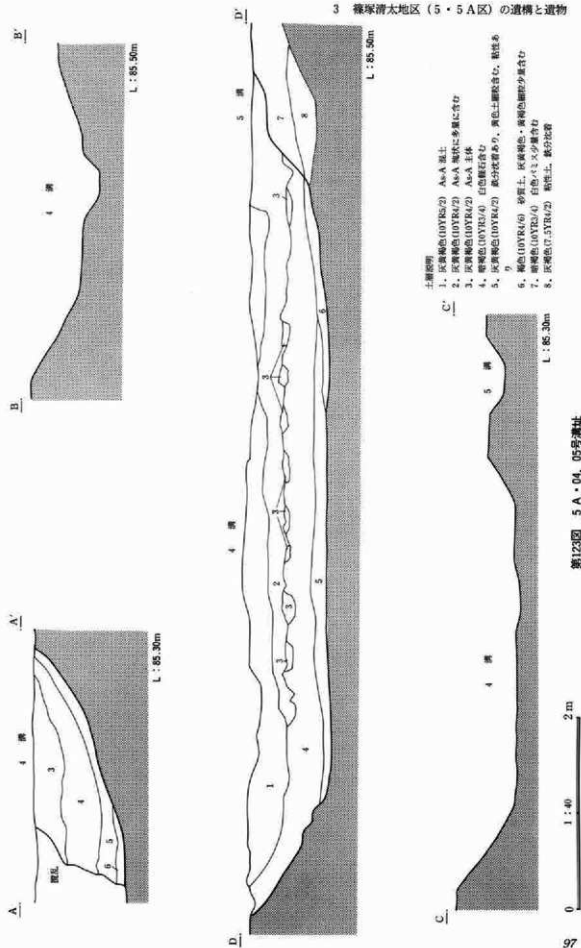
0 1:40 1m



- 6・7号溝  
 土層説明  
 1. 灰褐色(7.5YR4/2) 粘性あり、固い、泥鉄含む  
 2. 灰褐色(7.5YR4/2) 1層に崩れ、砂粒多量に含む
- 8・9号溝  
 土層説明  
 1. 黒色(10YR2/1) A+B 多量に含む

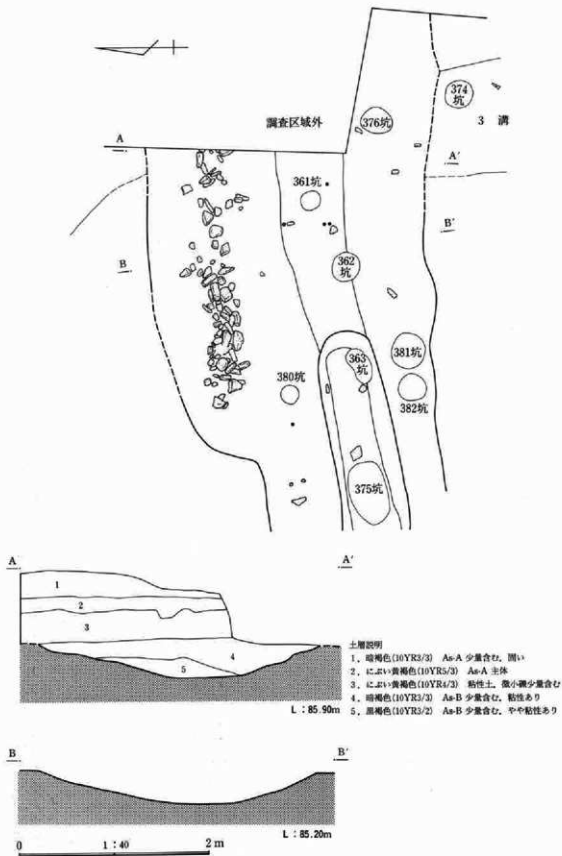
第122図 5A・06~09号溝址

0 1:40 1m



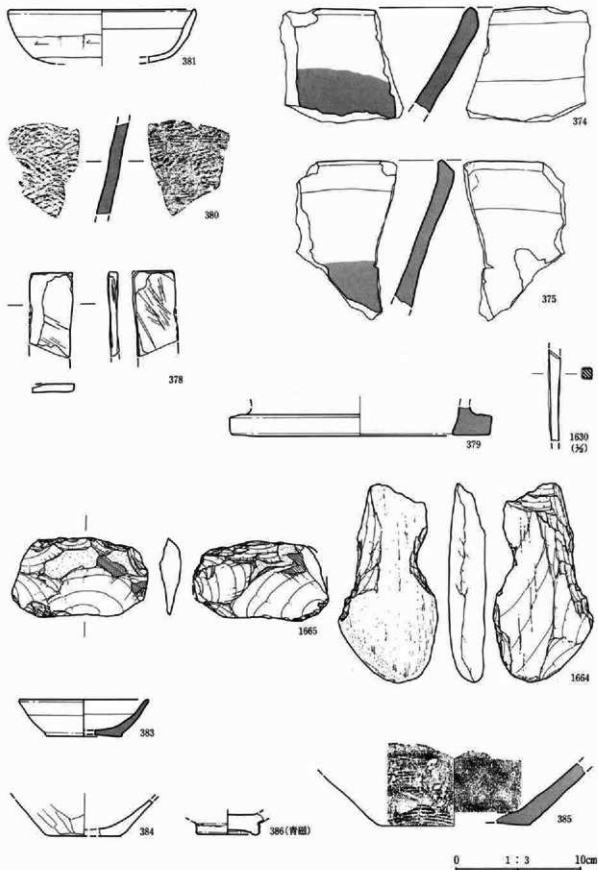
第123図 5A・04、05号溝址

IV 遺跡の調査



第124図 5 A・02号溝石敷数部分

3 篠塚清太地区 (5・5A区) の遺構と遺物



第125図 5A・02~04号清出土遺物

## (4) 土 坑

5区 (挿図番号第126~128・137~139図 写真番号P L-108・193・194)

- 東群土坑** 該区土坑は大形土坑を主とする東群と小形土坑の多い西群に大別される。また東群土坑は長軸長が3mを超える超大形土坑と墓坑状の大形土坑に細別できる。
- 超大形土坑** 超大形土坑は02土坑 (推定334×214cm・深さ34cm), 10土坑 (315×231cm・深さ54cm), 34土坑 (260×167cm・深さ15cm), 37土坑 (推定320×122cm・15cm) の4基を数える。超大形土坑は出土遺物も殆ど無く、その性格は不明である。ただその中で、10土坑は楕円形の掘り方のなかに隅丸長方形の掘り込みをもつという特異な掘り方を呈しており、07土坑に類例を求めることができる。
- 10土坑** 遺物は02土坑で土師器甕を中心に90点、10土坑で土師器坏・甕を主に135点、34土坑では35点で須恵器甕が半数を占める。しかしこれらの超大形土坑の出土遺物は小破片が多く、図示することができなかった。東群のその他の大形土坑は、形状から円形 (05・06・33)、隅丸方形 (03・11)、隅丸長方形 (01・08・68)、楕円形 (07) に分類される。出土遺物は殆どの土坑が多くても5点程度だが、11土坑は殆どが須恵器甕134点で、68土坑は完形に近い遺物が12点 (須恵器坏が大部分) 検出されている。また33土坑からは耳皿や灰釉陶器が出土している。11土坑と33土坑の周囲には焼土が散布しており、出土遺物様相と絡めて考える必要がある。
- 西群土坑** 西群の土坑は東のそれに比べて矮小な土坑が多く、それも06溝周辺に集中している。その中で目をひくのは04土坑 (176×142・深さ39cm) で、土師器坏片が2点出土している。

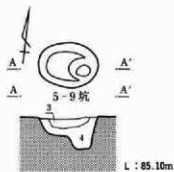
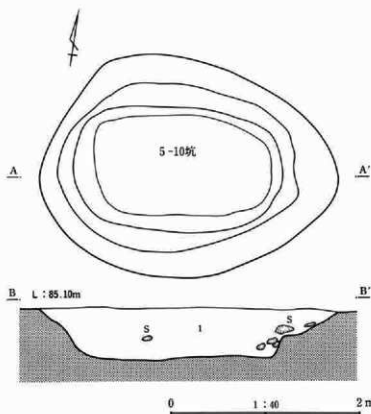
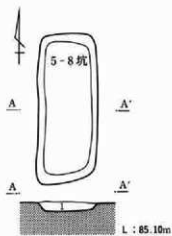
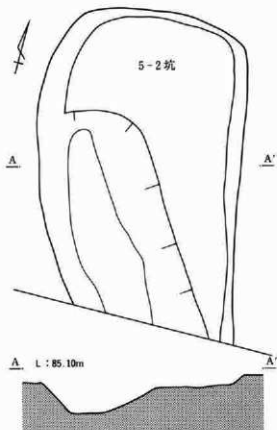
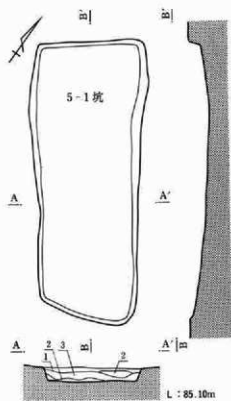
5A区 (挿図番号第128~136・139図 写真番号P L-123・124・125・194)

該区の土坑群は大別して02溝以北のA群と、02溝と01溝に挟まれたB群と、01溝以南のC群に大別される。また該区土坑は覆土中にAs-B 軽石の混入したものが多く、小土坑の殆どはAs-B 層降下後の所産と考えることが可能である。

- A群土坑** A群土坑は南部に大形のものも多く、北部は概して小形土坑が密集している。出土遺物の多い
- 290土坑** のは290土坑 (55×47cm・深さ21cm) で、土師器甕を中心に102点が検出され、特に耳皿片が目
- 402・417土坑** される。次いで402土坑 (109×83cm・深さ22cm) の43点と417土坑 (73×39cm・深さ30cm) の37点が検出されている。402土坑は土師器と須恵器の割合がほぼ半分ずつで、417土坑はすべて土師器である。
- B群土坑** B群土坑はD14・34グリッド付近で隅丸長方形の土坑の重複が激しく、東隣のD14・36グリッドでは円形土坑の集中が見られる。また南側の小土坑群は掘立柱建物跡にかかわる一群で、01、02掘立という2棟の掘立柱建物が存在したと思われる。
- C群土坑** C群土坑はさらに04、05号住以東の東群と03号住の北の中群と02号住以西の西群に細別できる。
- 33土坑** 東群のほぼ中心にある33土坑 (122×107cm・深さ24cm) は、いわば不整楕円形といった形状をもっている。中群は小土坑が大部分を占め掘立柱建物跡の存在も考えられるが、うまい組み方が見いだせなかった。そんな中で72土坑 (332×192cm・深さ19cm) は5・10土坑に匹敵する大きさで、覆土中にAs-B 軽石を含み、遺物も14点土師器が出土している。西群の土坑は散在的であるが、
- 72土坑** 169土坑 (286×73cm・深さ12cm) は楕円形の形状をもち、覆土層中にAs-B 軽石が多量に混入している。
- 169土坑**



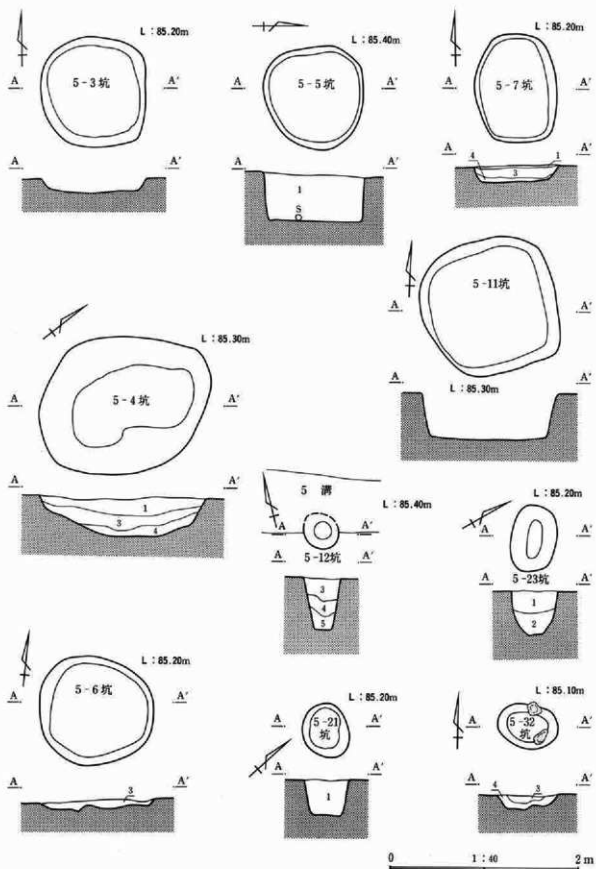
3 養塚清太地区 (5・5A区) の遺構と遺物



0 1:40 2m

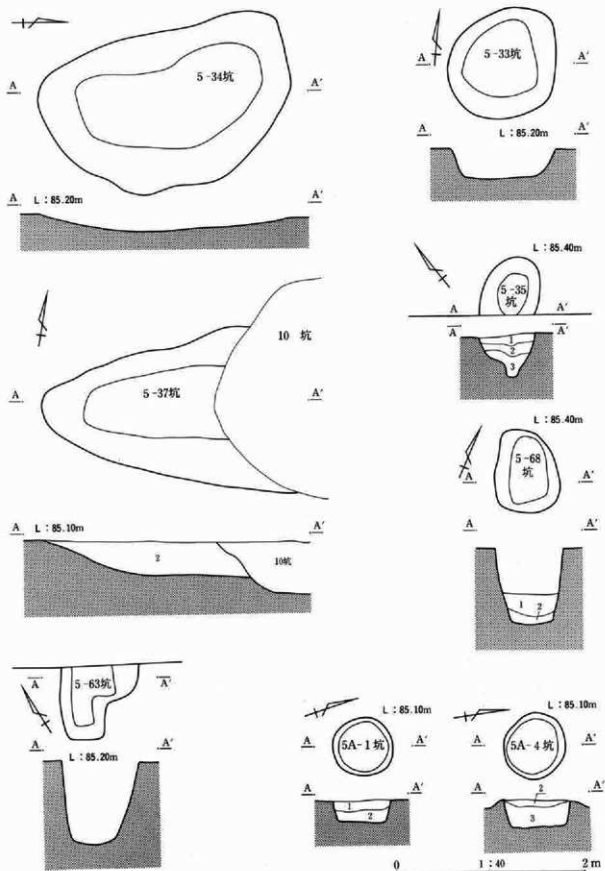
第126図 5・01, 02, 08~10号土坑

IV 遺跡の調査



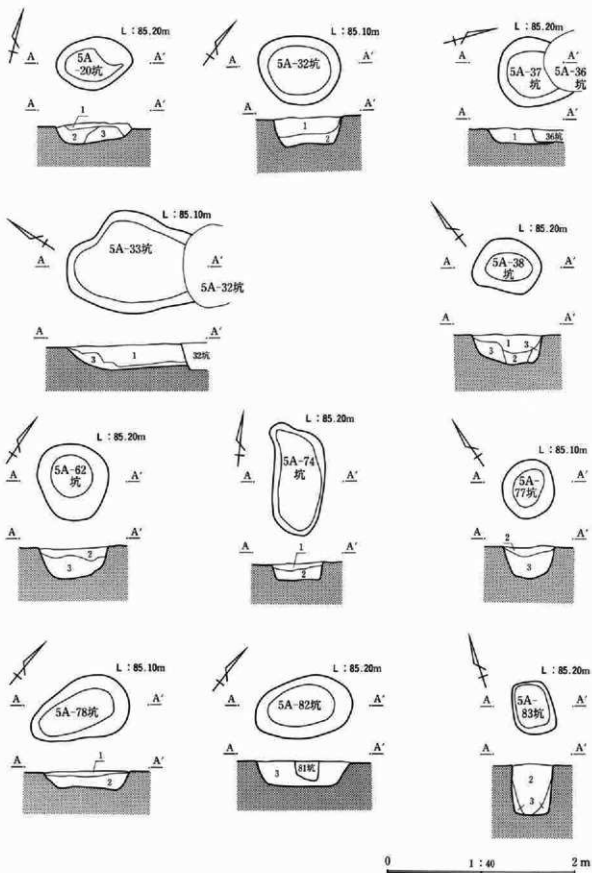
第127図 5-03~07, 11, 12, 21, 23, 32号土坑

3 篠塚清太地区 (5・5A区) の遺構と遺物

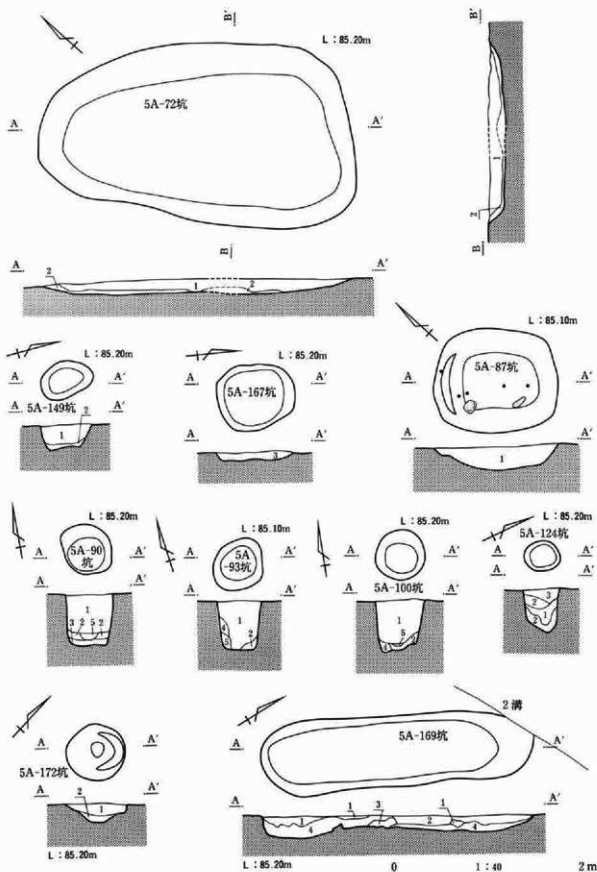


第128図 5・33~35, 37, 63, 68, 5A・01, 04号土坑

IV 遺跡の調査

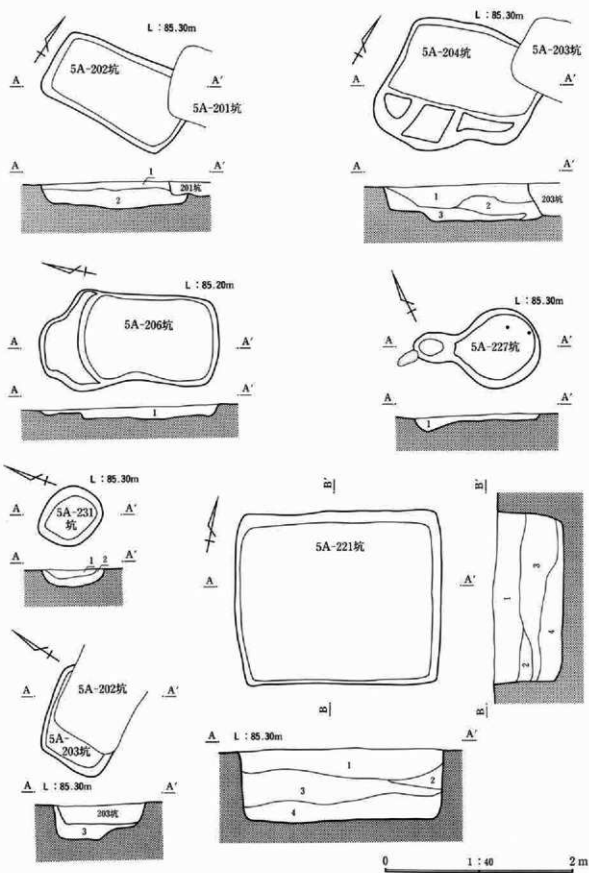


第129図 5A・20, 32, 33, 37, 38, 62, 74, 77, 78, 82・83号土坑



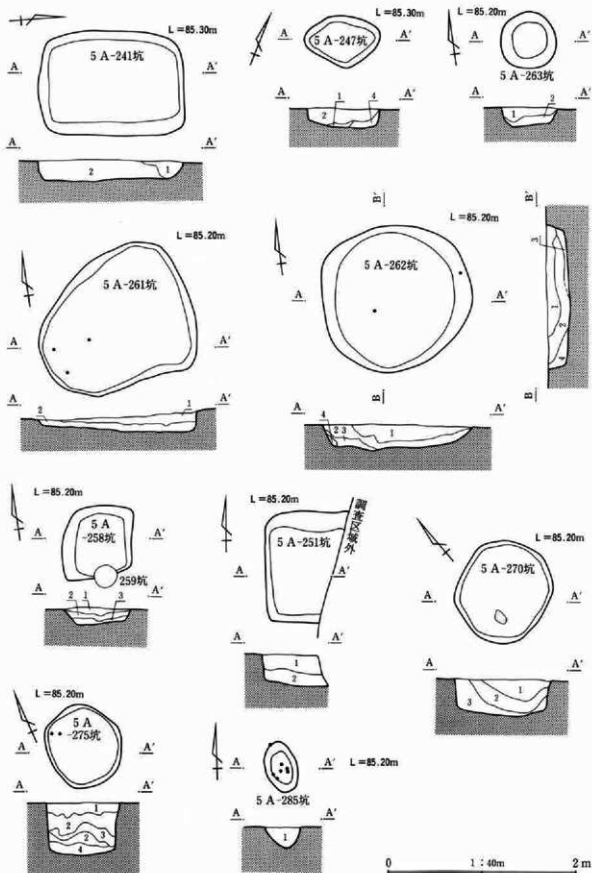
第130図 5A・72, 87, 90, 93, 100, 124, 149, 167, 169, 172号土坑

IV 遺跡の調査



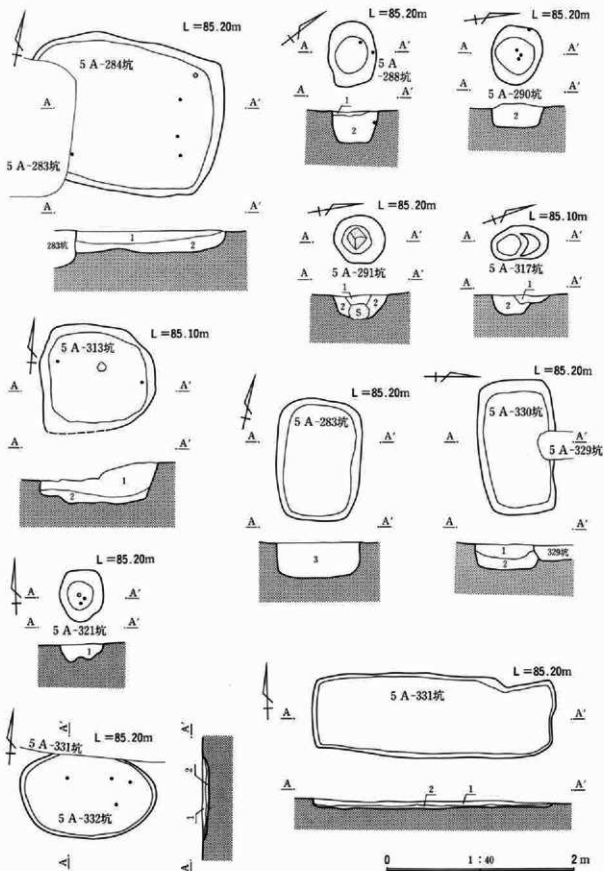
第131図 5A・202~204, 206, 221, 227, 231号土坑

3 藤塚清太地区（5・5A区）の遺構と遺物



第132図 5A・241, 247, 251, 258, 261~263, 270, 275, 285号土坑

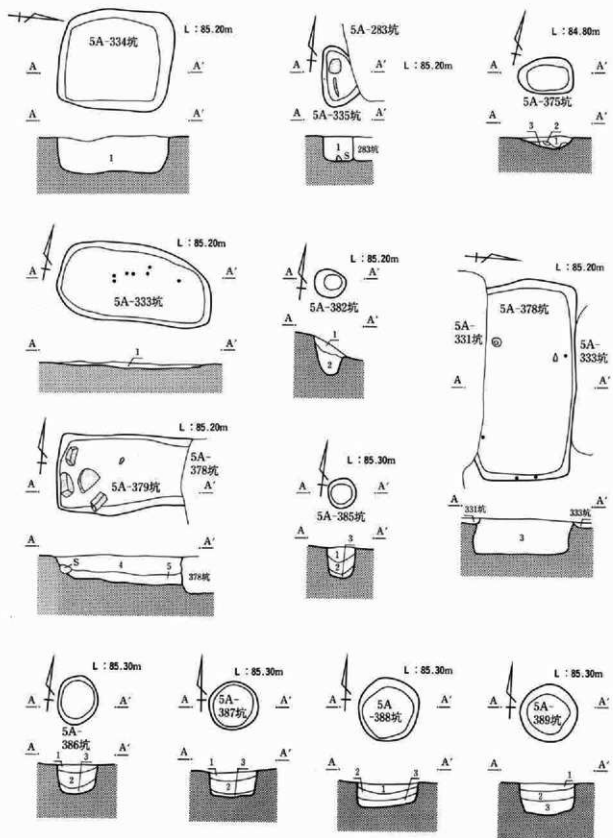
IV 遺跡の調査



第133図 5 A・283, 284, 288, 290, 291, 313, 317, 321, 330~332号土坑

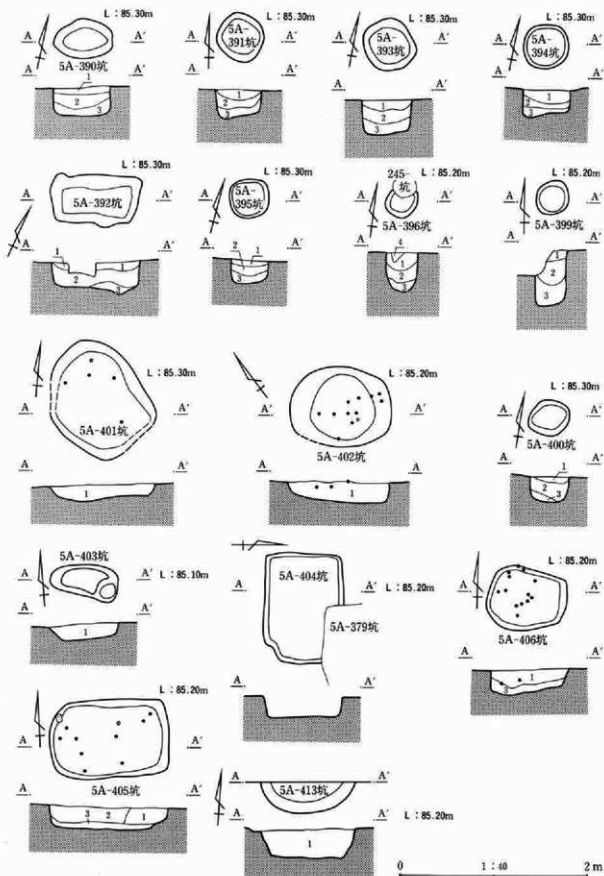


3 藤塚清太地区（5・5A区）の遺構と遺物



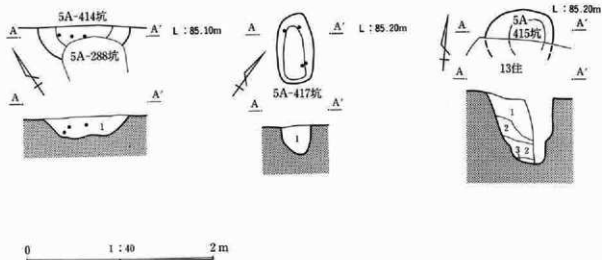
第134図 5A・333～335、375、378、379、382、385～389号土坑

IV 遺跡の調査



第135図 5A・390~396, 399~406, 413号土坑

3 藤家清太地区(5・5A区)の遺構と遺物



第136図 5A・414, 415, 417号土坑

5区土層説明

1・4・8・12・21・23号土坑

1. 褐色(7.5YR4/3) 粘性土
2. 褐色(7.5YR4/3) 焼土・ロームブロック少量含む
3. 褐色(7.5YR4/3) 粘性土・茶褐色シルトローム含む
4. 褐色(7.5YR4/3) 粘性土・茶褐色シルトローム含む
5. 褐色(7.5YR4/3) 粘性土・茶褐色シルトローム含む

9・10・32・37号土坑

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/2) 粘性土、軽石多量に含む
2. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 粘性土、軽石多量に含む
3. 暗褐色(7.5YR3/4) 粘性土、軽石多量に含む
4. 褐色(7.5YR4/3) 粘性土、軽石多量に含む

35号土坑

1. 褐色(7.5YR4/3) 粘性土、焼土・土層片含む
2. 褐色(7.5YR4/3) 粘性土、暗褐色土含む
3. 褐色(7.5YR4/3) 粘性土、暗褐色土・シルトローム含む

68号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) 黄褐色土のシルトロームを含む
2. 黄褐色(10YR5/6) 粘性土、土層片含む

5A区土層説明

1~4・20・32・33・37・38・62号土坑

1. 暗褐色(10YR3/3) シルト、シルト粒・As-B少量含む
2. 暗褐色(10YR3/4) シルト、均質で包合物微量、シルト粒含む
3. にじみ黄褐色(10YR4/3) シルト、均質で包合物微量
4. 暗褐色(10YR3/3) 土、均質で包合物微量、軽石少量含む
5. 暗褐色(10YR3/3) 土、均質で包合物微量、As-B少量含む
6. にじみ黄褐色(10YR4/3) シルト、均質で包合物微量
7. 灰黄褐色(10YR4/2) シルト、均質で包合物微量

72・74・77・78・82・83・87号土坑

1. にじみ黄褐色(10YR4/3) シルト、軽石・炭化物少量含む
2. にじみ黄褐色(10YR4/3) シルト、1層に比べ、軽石少量含む
3. にじみ黄褐色(10YR4/3) シルト、1・2層に比べ、水の影響を受けた層

#### IV 遺跡の調査

90・93・100号土坑

1. 暗褐色(10YR3/3) 黄色土粒・褐色土塊の混土
2. 黄褐色(10YR5/8) 黄色土塊主体、褐色土含む
3. 明黄褐色(2.5Y6/8) 黄色パミス含む
4. 黒褐色(10YR2/2) 4層に類似
5. 暗緑灰色(10GY4/1) 黄色土・褐色土塊少量含む

124・149号土坑

1. 暗褐色(10YR3/3) シルト、均質で包含物微量、土器小片少量含む
2. 暗褐色(10YR3/3) シルト、にぶい黄褐色土塊少量含む
3. にぶい黄褐色(10YR4/3) シルト、淡白色礫石少量含む

167・172号土坑

1. 黄褐色(10YR5/8) 黄色土塊含む
2. 暗褐色(10YR3/3) 黄色粒少量含む
3. 暗褐色(10YR3/3) 白色パミス多量に含み、黄色土粒含む

169号土坑

1. 黒色(10YR2/1) 礫石主体
2. 黒色(10YR2/1) 礫石多量に含み、暗褐色土塊・黄褐色土塊の混土
3. 黒色(10YR2/1) 礫石・暗褐色土塊の混土
4. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土塊少量含む

202～204・206号土坑

1. 黒色(10YR2/1) A-B 多量に含む
2. 黒色(10YR2/1) A-B 多量に含み、黄色土粒・土塊の混土
3. 黒色(10YR2/1) A-B・黄色土・褐色土塊の混土

221号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) 黄褐色土塊少量含み、A-B 多量に含む
2. 暗褐色(10YR3/4) シルト、黄褐色土塊・A-B 少量含む
3. 黄褐色(2.5Y5/4) 暗褐色の混土、シルト、粘性あり、A-B 少量含む
4. 暗褐色(10YR3/3) シルト、黄褐色土塊・A-B 少量含む

227・231号土坑

1. 黒褐色(10YR2/2) A-B 多量に含み、黄褐色土粒含む
2. 黒褐色(10YR2/2) 1層より黄色土塊多量に含む

241号土坑

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) A-B 含む
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) A-B 少量含む、固い

247・251号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) A-B 多量に含む
2. 暗褐色(10YR3/4) A-B 多量に含み、黄色土塊少量含む
3. 暗褐色(10YR3/3) 黄色土・A-B の混土
4. 暗褐色(10YR3/3) 黄色土・褐色土塊・A-B の混土

258号土坑

1. 褐色(10YR4/4) 焼土粒・土器小片少量含む
2. 褐色(10YR4/6) 焼土粒少量含む
3. 褐色(10YR4/4) 焼土粒・炭粒少量含む

261・270・285号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) 焼土・炭粒・A-B 少量含む
2. 黒褐色(10YR2/3) A-B 含む
3. 黒褐色(10YR2/3) 褐色土含む

262号土坑

1. 褐色(10YR4/4) A-B 少量含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 褐色粘性土塊・黒色A-B 含む
3. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土塊含む

263号土坑

1. 黒色(10YR2/1) A-B 多量に含む
2. 黒色(10YR2/1) A-B・褐色粘性土塊含む
3. 黒色(10YR2/1) A-B・褐色土塊・黄色土塊含む

275号土坑

1. 黒色(10YR2/1) A-B 多量に含み、黄色・褐色土塊含む
2. 褐色(10YR4/4) 褐色粘性土塊主体、黄色土塊少量含む
3. 暗褐色(10YR3/3) 黄色土・A-B の混土、炭化物含む
4. 褐色(10YR4/4) 黄色土塊少量含む

283・284号土坑

1. 黒色(10YR2/1) A-B 多量に含む
2. 黒色(10YR2/1) A-B・褐色土塊含む
3. 黒色(10YR2/1) 褐色土塊を斑点状に含む

### 3 篠塚清太地区(5・5A区)の遺構と遺物

288・290・291号土坑

1. 黒褐色(10YR3/2) As-B 少量含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 焼土粒・炭粒含む、夾雑物少ない、粘性あり

317・321号土坑

1. 黒色(10YR2/1) As-B 多量を含む
2. 黒色(10YR2/1) As-B 多量に含み、褐色土塊含む

313号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) シルト、黄褐色土塊少量含む
2. 暗褐色(10YR3/4) シルト、黄褐色土塊含む

330号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) As-B・黄色土塊・焼土粒・炭粒含む
2. 褐色(10YR4/4) 黄色土少量含む、粘性土

331～333・378・379号土坑

1. 黒色(10YR2/1) As-B 多量を含む
2. 黒色(10YR2/1) As-B、褐色土塊の混土
3. 黒褐色(10YR3/2) As-B 多量に含み、褐色土塊面点状に少量含む
4. 黒褐色(10YR3/2) As-B 多量に含み、褐色土塊含む
5. 暗褐色(10YR3/3) As-B、褐色土塊少量含む

375・403号土坑

1. 暗褐色(10YR3/3) 黄褐色土塊少量含む
2. 黄褐色(2.5Y3/4) 1層に類似
3. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 暗褐色土含む、細粒、固い

382号土坑

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) As-B 少量含む
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) におよぶ黄色の混土層、As-B 少量含む

385～396・399・400～402号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) シルト、均質で包含物微量、軽石少量含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 1層に類似
3. オリーブ褐色(2.5Y3/3) シルト質ローム層

405・406号土坑

1. 黄褐色(10YR5/6) 黄色粒・土塊含む
2. 褐色(10YR4/4) 土器片・焼土粒少量含む、緻密
3. 黒褐色(10YR2/3) 緻密、黒褐色土粒面に含む

413号土坑

1. におよぶ黄褐色(10YR4/3) におよぶ黄色土塊少量含み、As-B 含む

414号土坑

1. 暗褐色(10YR3/3) シルト、黄褐色土少量含む

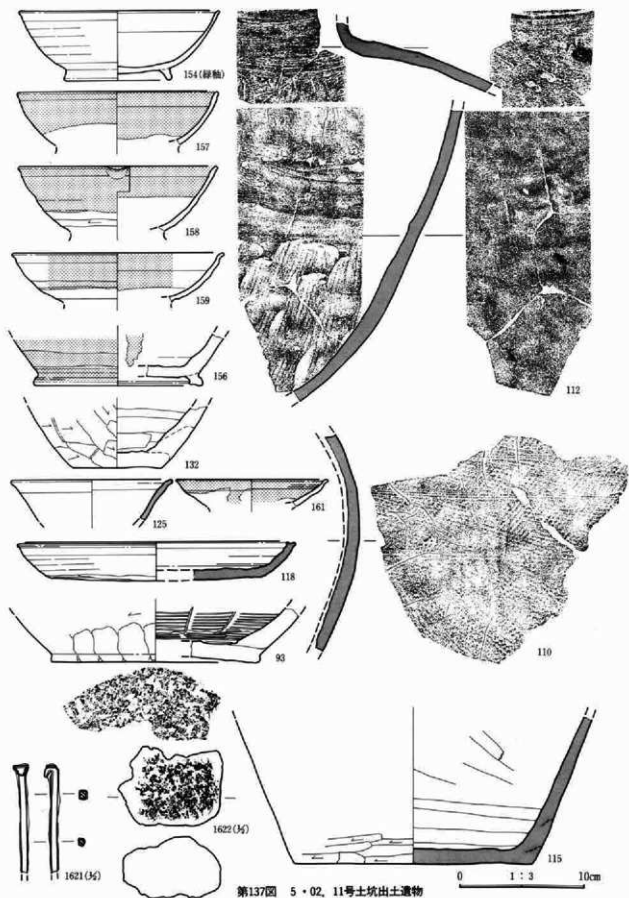
415号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) 焼土粒・土器片・炭粒・黄色土粒含む
2. 黄褐色(2.5Y3/6) 黄色土含む、褐色土の混土
3. 褐色(10YR3/4) 焼土粒少量含む

417号土坑

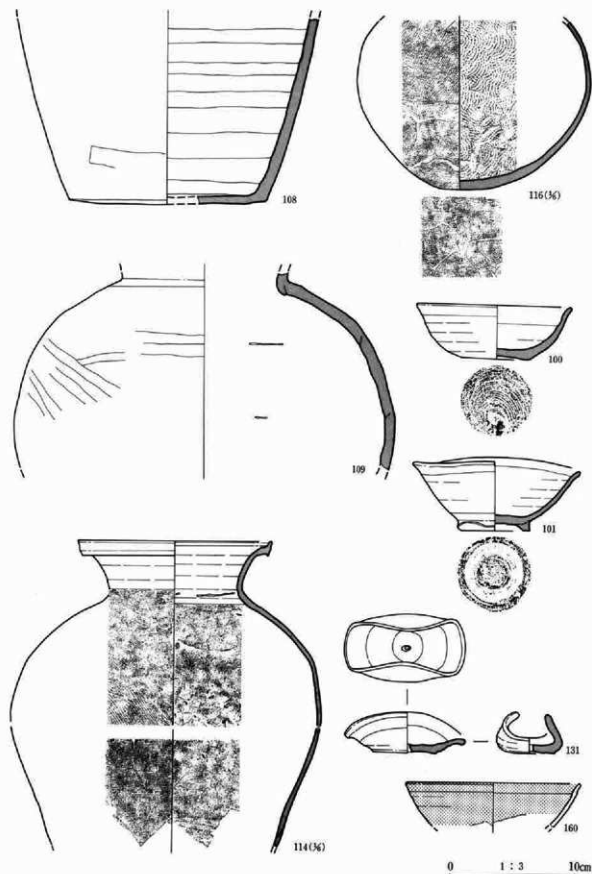
1. 褐色(10YR4/6) 焼土・土器片・炭粒多量に含む混土

IV 遺跡の調査



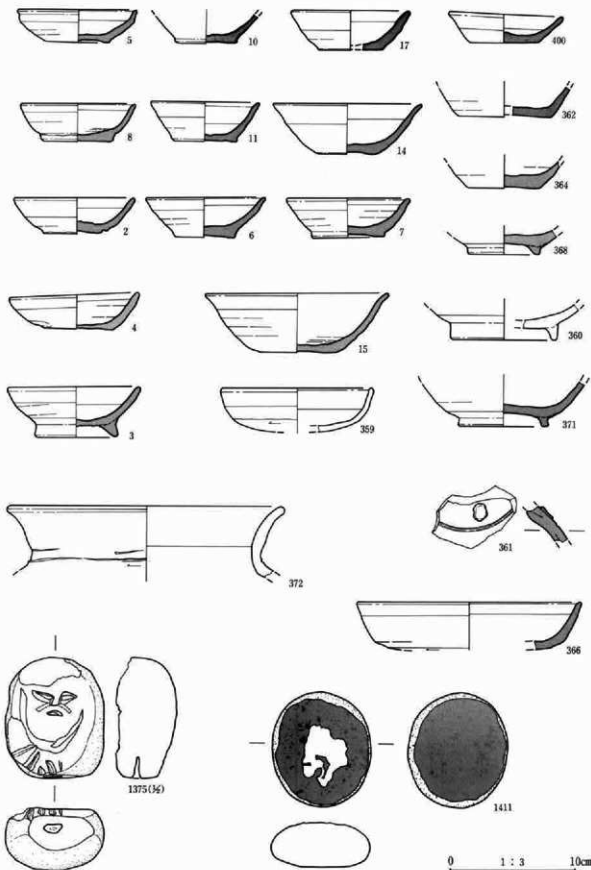
第137図 5・02, 11号土坑出土遺物

3 養塚清太地区（5・5A区）の遺構と遺物



第138図 5・11, 33号土坑出土遺物

IV 遺跡の調査



第139図 5・68, 5A・50, 78, 87, 188, 203, 284, 313, 378, 396, 402, 405号土坑出土遺物



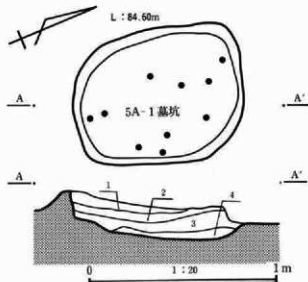
## (5) 墓 坑

## 5A・01墓坑 (挿図番号第140・141図 写真番号P L-125)

本墓坑は該区の西北端D13・92グリッドに孤立して所在する。平面形態は隅丸長方形で、長軸方向はほぼ磁北を示し、規模は90×70cm・深さ20cmを測る。覆土は5層に分けられ、上層には焼土塊が30%含まれ、最下層も同様に焼土塊30%が混入している。遺物は10点程確認されており、掲載遺物は底部に砂粒の付着したいわゆる砂底の須恵器と思われる。

## 5A・02墓坑 (挿図番号第140図)

本墓坑は土坑密集地のD13・94グリッドに所在し、404土坑に東側1/2を切られている。平面形態は01墓坑と同様に隅丸長方形であるが、長軸方向は東西を指し示し、規模は短軸が約60cmを測れるのみである。底面全体には焼土や炭化物が厚く堆積し、火葬にかかわる遺構であろう。



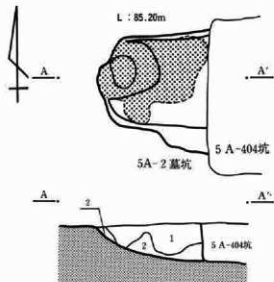
## 1号墓坑土層説明

1. 褐色(10YR4/4) 焼土塊・炭粒含む
2. におい黄褐色(10YR4/3) 褐色土・黄褐色土塊の混入
3. 明黄褐色(2.5Y6/8) 黄色シヤリ質土主体、褐色土少量含む
4. 褐色(10YR4/4) 焼土塊・炭粒少量含む、1層に採取

## 2号墓坑土層説明

1. 褐色(10YR4/4) 焼土・炭粒少量含む
2. 暗赤褐色(5YR3/6) 焼土・炭粒多量に含む

第140図 5A・01, 02号墓坑



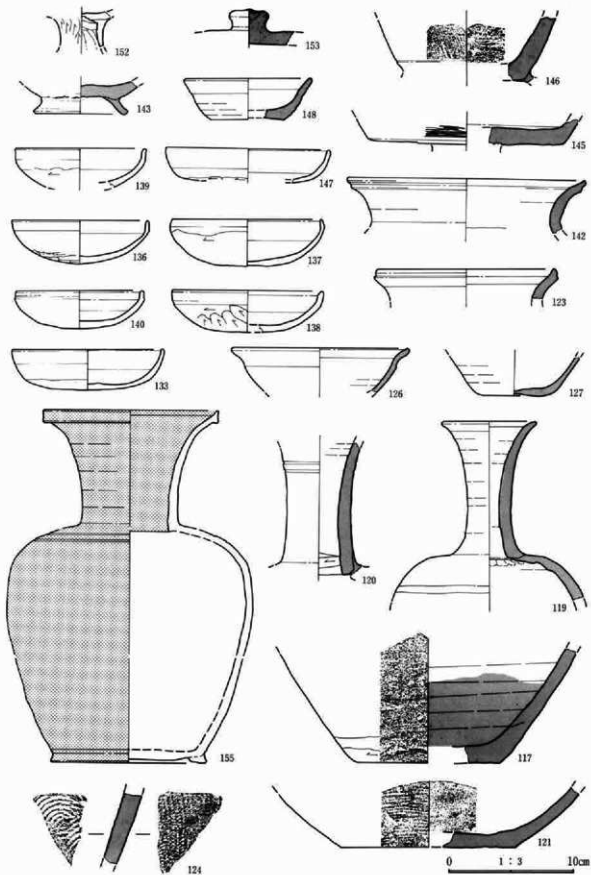
第141図 5A・01号墓坑出土遺物 (S=1:3)

## (6) グリッド・表採遺物 (挿図番号第142・143図 写真番号P L-194・195)

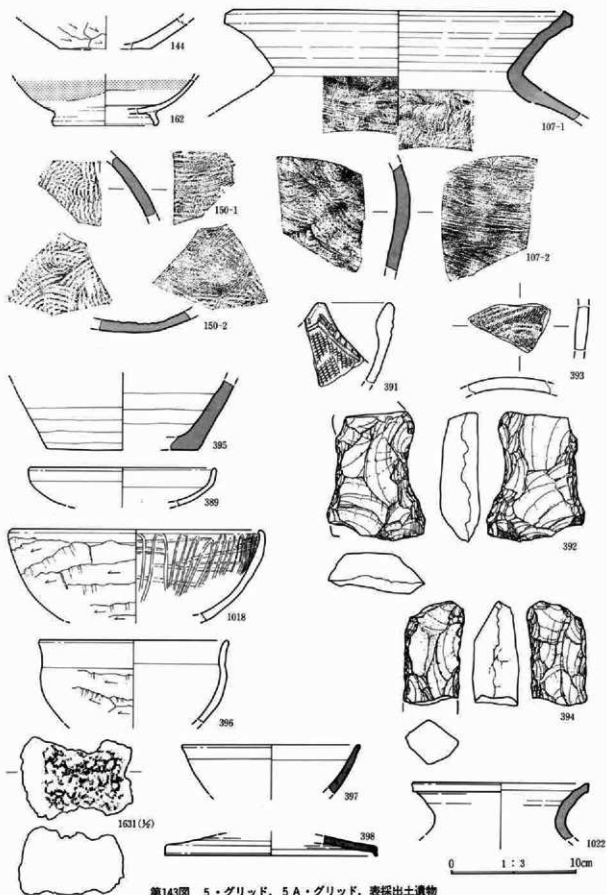
グリッド遺物の取り上げは5区D14・98グリッドで323点を数え、該区での飛び抜けた遺物密集度を示している。その他に5区ではD14・88、89グリッドで50点余りの遺物出土を見ている。また5A区でもD13・88、D14・25グリッドで50点内外の出土遺物がある。

出土遺物様相は、5区D14・98グリッドでは須恵器が過半を占め、釉の掛かった長頸瓶が数点出土している。D14・88、89グリッドでは土師器が主体で、特に丸底に手持ち寛削りを施した土師器の出土量が多い。5A区のD13・88、D14・25グリッドは土師器類の出土量が多い。

IV 遺跡の調査



第142図 5・グリッド出土遺物



第143図 5・グリッド, 5A・グリッド, 表探出土遺物

## 4. 下大塚北原地区（5B・6区）の遺構と遺物

- 谷底低地** 下大塚北原地区は、5B区から西に向かい徐々に下がって6区で大きな浅い谷底低地となり、さらに西へ向かうと比高差1m程の崖線が北西方向に走っている。この谷底低地は、鮎川の旧河道と推定されている。<sup>1)</sup>
- 旧河道**
- 検出遺構** 検出した遺構は、奈良時代の集落（竪穴住居・掘立柱建物跡）を主に古墳時代末・平安時代の竪穴住居とAs-B下水田である。
- 5B区** 5B区は、周囲が藤岡粘土の採掘による攪乱を受けていて、かろうじて馬入れ道の部分が攪乱を免れたという、約50m×20mの細長い発掘区である。該区は竪穴住居の重複が激しく3基の作り替え電を持つ竪穴住居や北電の竪穴住居及び焚口80cmの大電の竪穴住居が特筆される。
- 6区** 6区では奈良時代の竪穴住居と掘立柱建物の集落跡が検出された。掘立柱建物は12棟を数え、高床倉庫と考えられる総柱建物や平地式建物・納屋なども確認されている。6区の西側の2本の溝に挟まれた部分では、As-B下水田が確認されている。なお6・06号住からは金環が検出されている。

## (1) 竪穴住居址

## 5B・01号住居址

遺 構 (挿図番号第144・145図 写真番号P L-128)

- 絶対的位置** 本住居址は、5B区の西端の6区の谷底低地を望む微高地の縁辺に位置する。所在するグリッドはB13-81, 91であり、確認面での標高は85.00mを測り、5A区よりも若干確認面が低くなっている。該住居址の周りには、竪穴住居や土坑が密度濃く集中しており、5B・01号掘立柱建物が重複している。また北側1.5mには、5B・12号住が近接している。
- 相対的位置**
- 規模・形態** 規模は東西3.12m・南北3.64mで、面積は11.75㎡を測る。平面形態は、若干横長の隅丸方形プランを呈している。主軸方位はN-94°-Eを示し、ほぼ東西グリッド線に沿っている。床から確認面までの壁高は平均40cmで、角度は各壁とも70°~80°で立ち上がり明瞭な掘り込みラインを見せている。覆土は4層に分けられ、最上層はAs-B 軽石を多量に含みレンズ状に堆積している。最下層は黄色シルトブロックを散在させた粘質土で、北西方向からの流入が見られる。その他の2層はレンズ状堆積を示し、自然堆積の様相が窺える。
- 主軸方位**
- 壁**
- 覆土**
- 床** 床面は東壁附近において若干の凹凸はあるものの、全般的には平坦で緻密に締まっている。床面上の施設としては、南東コーナー電磁に貯蔵穴が穿たれている。また南西コーナーの住居内1号土坑は、遺物の出土状況や覆土の様相から床下土坑の可能性もある。貼床の構成土は粘性の強い黄褐色土を主体に、締まりのある黒褐色土塊が混入している。掘り方は住居址の北東部分に集中し、南北に細長い掘り方が2条検出された。また5B・01号掘立柱建物の柱穴が貼床下の掘り方から確認された。
- 貯蔵穴**
- 貼床**
- 掘り方**
- 電** (挿図番号第146図 写真番号P L-128)
- 燃焼部** 燃焼部は東壁南東隅を掘り込み作られる。壁面は垂直に立ち上がり、上部で外へ拡張される。
- 火床面** 壁面は焼土化している。右側壁部に礎が置かれる。火床面は床面と同レベルで灰・焼土塊を含む。

灰面は貯蔵穴内まで広がる。煙道部は奥壁中央部で僅かに段を持ち、同角度で煙り出し部まで立ち上がる。

遺物の出土状態(挿図番号第148図 写真番号P L-128)

出土遺物総点数は439点を数え、その内訳は土師器の出土量が90%近くで須恵器は10%を占める。遺物の平面分布は北西隅と南壁際に集中しており、層位的には最下層に小破片遺物の密集が見られる。遺物接合状況は、接合線が竪周辺を中心にかなり大きく広い範囲に引かれ、かなり動きの激しい散乱状況を示している。接合遺物の出土はそのほとんどが床面に近く、住居址廃絶期にごく近い時期の所産と考えられる。掲載遺物は17点で、ほとんどの遺物が破片であるのでタイプAはなく、羽釜412がかるうじてタイプBaと認定され、他はタイプBが主である。

出土遺物(挿図番号第147図 写真番号P L-195・217)

図示した遺物は、土師器台付甕1, 羽釜2, 須恵器甕破片4, 須恵器環2, 須恵器埴5, 須恵器高台付椀1, 須恵器環蓋1, 灰釉高台付椀1の17個体である。

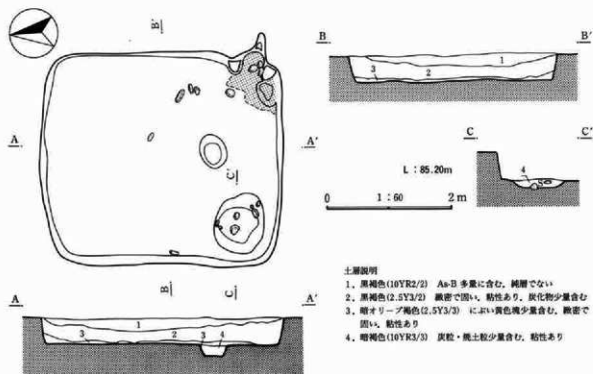
羽釜は、丸味のある胴部から断面三角形の踵を経て、内傾する口縁部に至り口唇部が内傾するもの(412)と直線的な胴部から細みの踵を経て、直立する口縁部に至るもの(417)がある。

須恵器環581は、底径が小さく体部中位に膨らみをもち、外反するタイプで焼きがあまりく、須恵器環405は、体部が深く大型で、いずれも酸化炎焼成である。

灰釉高台付椀411は、精選された胎土をもち潰け掛けで施釉されている。

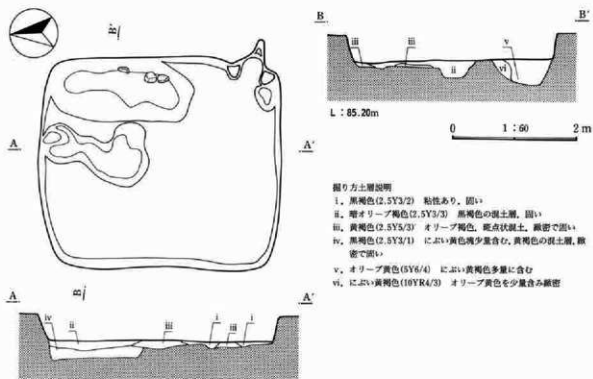
## 所見

出土遺物は殆どが小破片で、住居廃絶時に廃棄・流入した遺物が多く、埋没が進むにつれて土器廃棄量が少なくなる傾向が看取される。羽釜の出土が特徴的である。



第144図 5B・01号住居址

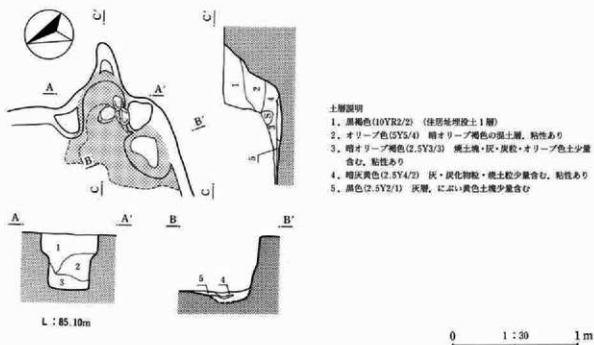
IV 遺跡の調査



掘り方土層説明

- i. 黒褐色(2.5Y3/2) 粘性あり、固い
- ii. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 黒褐色の粗土層、固い
- iii. 黄褐色(2.5Y5/3) オリーブ褐色、斑点状混土、緻密で固い
- iv. 黒褐色(2.5Y3/1) におい黄色土少量含む、黄褐色の粗土層、緻密で固い
- v. オリーブ黄色(5Y6/4) におい黄褐色多量に含む
- vi. におい黄褐色(10YR4/3) オリーブ黄色を少量含む緻密

第145図 5B・01号住居址掘り方

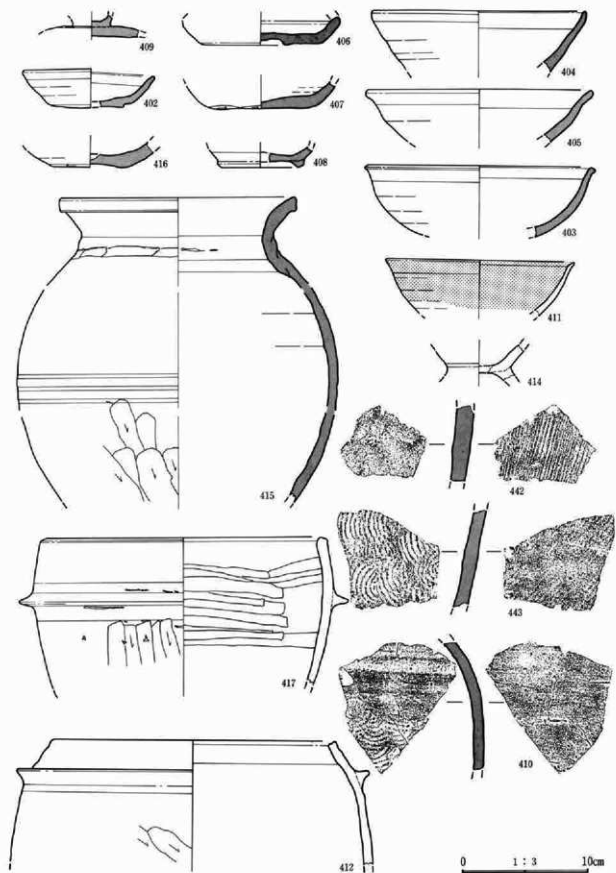


土層説明

- 1. 黒褐色(10YR2/2) (住居址埋没土1層)
- 2. オリーブ色(5Y5/4) 暗オリーブ褐色の粗土層、粘性あり
- 3. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 横土塊・灰・炭粉・オリーブ色土少量含む、粘性あり
- 4. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 灰・炭化物粉・横土粒少量含む、粘性あり
- 5. 黒色(2.5Y2/1) 灰層、におい黄色土少量含む

第146図 5B・01号住居址掘

4 下大塚北原地区（5B・6区）の遺構と遺物



第147図 5B・01号住居址出土遺物





## 5B・02号住居址

遺 構 (挿図番号第149・150図 写真番号P L-129)

本住居址は5B区の最東端に位置し、北側部分1/2を重複した03号住とともに擾乱によって削り取られている。B14・85グリッドに所在し、西側1/3を03号住と切り合っている。確認面での標高は85.15mを測る。

規模は、土層と構築プランからの推定で、およそ東西軸は3.34mと考えられる。平面形態は、竈の位置と東西軸の長さから正方形プランの可能性が高い。主軸方位はN-102°-Eを指し、若干南東に傾いている。床面上から確認面までの壁高は平均25cmで、壁の角度は70~80°で立ち上がっている。覆土は粘性のある暗オリーブ褐色土で分層できない。

床面は、若干の凹凸は見られるものの緻密に締まっており、床面上には南東隅に貯蔵穴が穿たれている。貼床は、オリーブ褐色土と黒褐色土とが互層をなして構成されている。

竈 (挿図番号第151図 写真番号P L-129)

燃焼部は、東壁を掘り込み作られる。壁面は、垂直に立ち上がる。覆層中層土中に土師器壺片・砂礫を多く含む。袖を持たないが、左焚き口部に礫が立った状態で埋設され、補強材に利用されていたと考えられる。火床面は、底面よりやや窪み、竈前には灰のかき出しによる窪みがある。煙道部へは緩やかに立ち上がり、水平方向に伸びる。覆層土中に焼土塊があり、崩落による流れ込みと考えられる。

遺物の出土状態 (挿図番号第153図 写真番号P L-129)

出土遺物総点数は657点と比較的多く、その中でも須恵器の出土量が15%と高い値を示している。出土遺物は住居址全体に散乱しており、平面的には煮沸具と見られる土師器壺が竈周辺から複数個体出土しているのが特徴的である。層位的には、分層されない粘質土層の中の上から下部にまで混在している。遺物接合状況は、接合線が広い範囲に四散しており、最長で須恵器環424は2mの間隔で接合線が引かれている。垂直分布を見ると、接合線の長い遺物は一般的に上下の変動が激しく、土師器壺433は最大30cmもの上下方向への動きが見られ、住居址埋没時にかなりの遺物の散乱する状況の介在した事情が窺える。出土状態は、タイプAが須恵器環418と須恵器高台付塊421、423で、タイプBaは須恵器高台付塊419、土師器壺433で、タイプBのほとんどは土師器壺が主である。

出土遺物 (挿図番号第152図 写真番号P L-195・196・217)

図示した遺物は、土師器壺6、須恵器環1、須恵器高台付塊5、須恵器碗4、灰軸台付壺1の17個体である。

土師器壺は、胴部に膨らみをもって口縁部が外反するもの(433, 434, 435)と口縁部の崩れたコの字口縁をもつもの(437, 438, 439)に分けられる。また434の胴部にはハゼが確認された。

須恵器環418は、底部回転糸切り未調整で底径が小さく、体部は丸味を帯びて外反し口唇部に至りさらに外傾する。須恵器高台付塊(419, 421)は、丸味のある体部から僅かに外反する口縁部を有する。

## 所 見

遺物接合線の長く引かれる土器が多く、住居跡絶直後からの激しい投棄行為の存在が予測される。そしてこのことは、該住居跡絶後も周囲では住居が形成され続いていた証左とみたい。

絶対的位置  
確認面

規模・形態

主軸方位

壁

覆土

床

貼床

燃焼部

火床面

煙道部

総点数

平面分布

層位分布

遺物分布

垂直分布

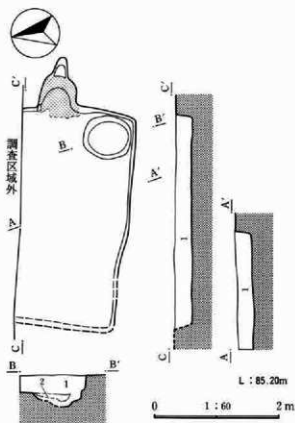
タイプ

図示遺物

土師器

須恵器

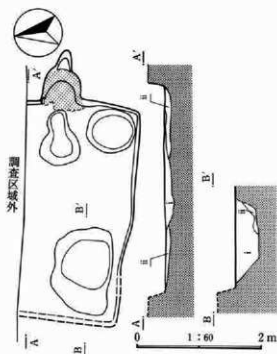
IV 遺跡の調査



土層説明

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 粘性あり、ローム粒・土器片・焼土粒少量含む
2. 黄灰色(2.5Y4/1) 焼土塊・炭粒・炭灰含む

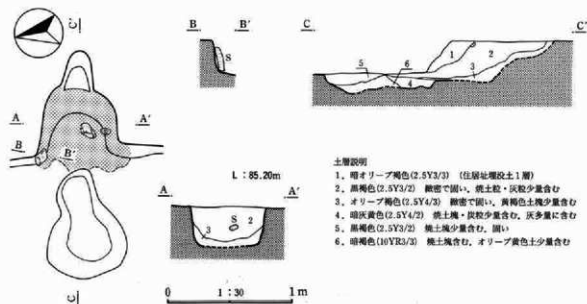
第149図 5B・02号住居址



掘り方土層説明

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 緻密で固い、黒褐色土・焼土粒少量含む
2. 黒褐色(2.5Y3/2) 緻密で固い、黄褐色土少量含む

第150図 5B・02号住居址掘り方

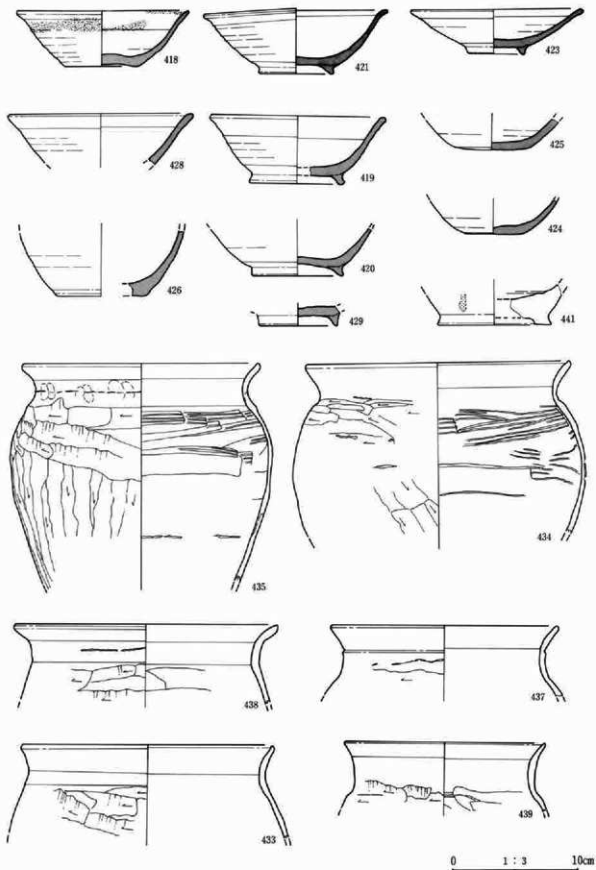


土層説明

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) (住居址埋込土1層)
2. 黒褐色(2.5Y3/2) 緻密で固い、焼土粒・炭粒少量含む
3. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 緻密で固い、黄褐色土少量含む
4. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 焼土塊・炭粒少量含む、灰少量を含む
5. 黒褐色(2.5Y3/2) 焼土塊少量含む、固い
6. 暗褐色(10YR3/3) 焼土塊含む、オリーブ黄色土少量含む

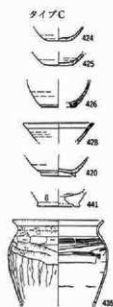
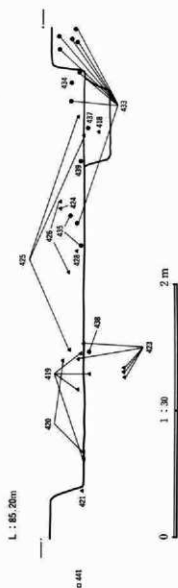
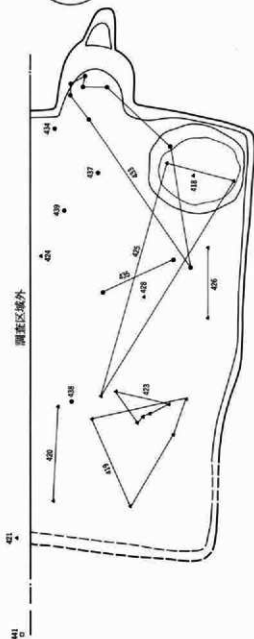
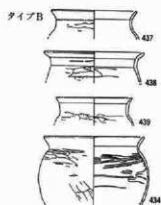
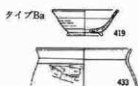
第151図 5B・02号住居址竈

4 下大塚北原地区(5B・6区)の遺構と遺物



第152図 5B・02号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第153図 5B・02号住居址接合分布図

## 5B・03号住居址

遺 構 (挿図番号第154・155図 写真番号P L-129)

本住居址は、前述の5B・02号住と重複し、B14・05グリッドに所在する。確認面の標高は85.15mを測り、竈を含むおよそ東側1/2を5B・02号住によって切られている。また、擾乱によって北側部分2/3も失われている。

絶対的位置  
確認図

規模は、南壁が辛うじて復元できるために、東西軸が3.56mと測れる。平面形態は不明であるが、主軸方位はN-97°-Eを指す。壁は、西壁が確認面まで50cmと測定でき、角度はほぼ90°に近い角度で立ち上がっている。覆土は3層に分けられ、主体となる緻密なオリブ褐色土がレンズ状堆積をなし、最下層の暗オリブ褐色土が壁下に三角堆積している。

規模・形態  
主軸方位  
壁・覆土

床面には貼床が施され、竈前には円形の床下土坑が確認されている。貼床の構成土は、緻密な暗オリブ褐色土で、シルトロームブロックが混入している。

床

竈 (挿図番号第156図 写真番号P L-129)

燃焼部は、02号住に大半が削平され、僅かに火床面が残る。火床面は、レンズ状に窪み、ふかふかの灰層の上に焼土塊を含む灰層があり、直上天井崩落土の焼土層が乗る。

燃焼部  
火床面

遺物の出土状態 (挿図番号第158図 写真番号P L-129・130)

出土遺物総点数は279点を数え、遺物の平面分布を見ると、竈及び南東隅周辺に第1の集中が見られ、西壁際に第2の集中域がある。層位分布では、第1の集中域に床面直上の遺物が多く、第2の集中域には10~20cm程度浮いている遺物が多い傾向にある。遺物接合分布図から看取されることは、02号住ほど平面的な変動はなく、竈を中心にして土師器台付甕456と羽釜450が1.5m程の散布状況を示している。層位的には、羽釜450が40cm近い上下差で02号住との住居址間接合を示す。土師器台付甕456は、タイプAとしたいが、散布範囲が広いのでタイプBaとした。タイプBには、土師器甕440、452、454と須恵器壺445、444、須恵器高台付甕447があげられる。

総点数  
平面分布  
層位分布  
遺物接合

タイプ

出土遺物 (挿図番号第157図 写真番号P L-217)

図示した遺物は、土師器壺6、土師器台付甕1、須恵器壺1、須恵器甕破片1、須恵器台付甕1、須恵器坏2、須恵器高台付甕5、灰軸高台付甕1の18個体である。

図示遺物

土師器壺は、いずれも胴部の膨らみが小さく、口縁部上位と下位の屈曲が弱くなってコの字口縁が崩れるタイプである。その中でも、436はコの字口縁の様相を残し、453は器内が厚くなり始めるといふ新要素を表している。土師器台付甕456は、口縁部が崩れたコの字口縁を示し、上位に縦鋭削り、中位から下位にかけて縦鋭削りが施される。

土師器

須恵器壺450は、該遺跡地唯一の出土であるので詳細を報告したいが、破片のゆえにその様相がつかめない。須恵器高台付甕の底部は回転糸切り未調整でなく、いずれも撫で調整が施されている。

須恵器

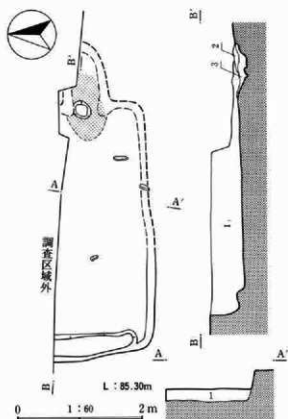
灰軸高台付甕449は、漬け掛けの施軸方法を取っているものと思われ、内面に重ね焼きの跡が残っている。

灰軸

## 所 見

該住居址と02号住は重複から03号住→02号住の順列が時間的に与えられる。遺物状態から03号住廃絶時に存在した周囲の住居は埋没過程で移転し完全埋没後に02号住の形成をみたし解される。

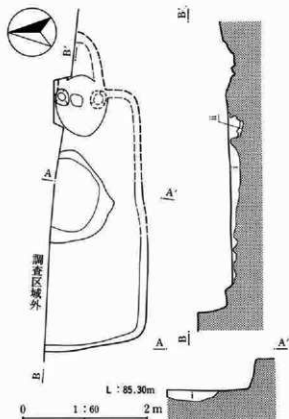
IV 遺跡の調査



土層説明

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 緻密で固い、浅黄色灰少量含む
2. 黄褐色(2.5Y5/4) 焼土塊少量含む、緻密
3. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) オリーブ褐色の凝土層、焼土塊・浅黄色土・炭化物・灰含む

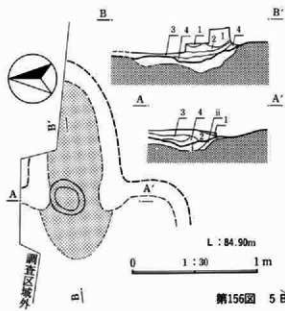
第154図 5B・03号住居址



掘り方土層説明

- Ⅰ. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 緻密で固い、浅黄色少量含む
- Ⅱ. 浅黄色(5Y7/4) 暗オリーブ褐色土少量含む

第155図 5B・03号住居址掘り方



土層説明

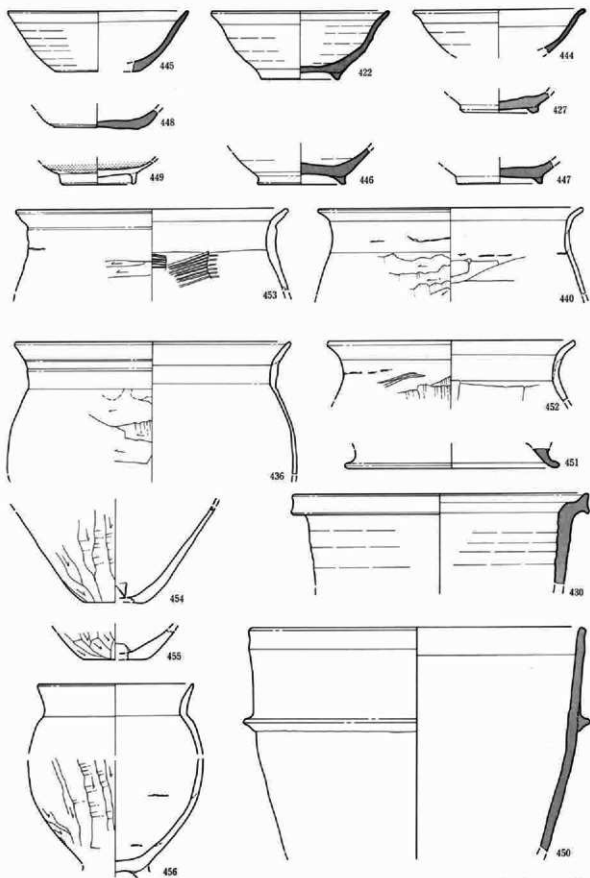
1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) (住居址埋設土1層)
2. 暗灰黄色(2.5Y4/2) にぶい黄色土塊少量含む
3. 赤褐色(5Y4/8) 焼土塊・灰多量に含む
4. 褐灰色(10YR4/1) 灰多量に含む

掘り方土層説明

- Ⅰ. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 緻密、焼土塊・灰含む
- Ⅱ. にぶい黄色(2.5Y6/4) オリーブ褐色土の凝土層

第156図 5B・03号住居址竈

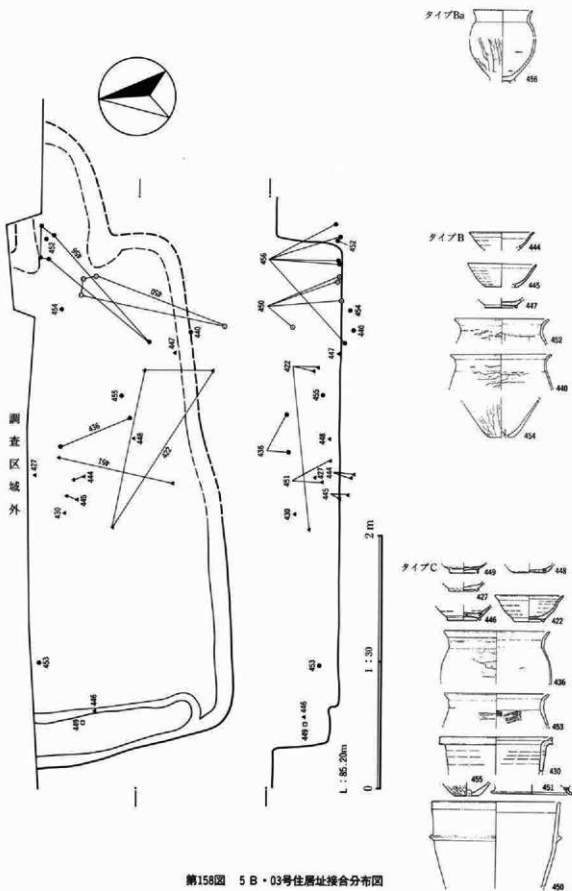
4 下大塚北原地区（5B・6区）の遺構と遺物



第157図 5B・03号住居址出土遺物

0 1:3 10cm

IV 遺跡の調査





## 5B・04号住居址

## 遺 構 (挿図番号第159図 写真番号PL-130)

本住居址はB14・04グリッドに所在し、5B・03号住の4m西に位置する。確認面での標高は84.90mを測るが、住居址南側部分を大幅に倉庫建設時の攪乱により失い、およそ1/5が現存しているに過ぎない。

絶対的位置  
相対的位置  
確認面

規模は、北壁の現状から東西5.68mが測れるのみである。平面形態は不明で、主軸方位はN-89°-Eである。締まった暗褐色土層を切り込み、覆土は4層に分層され最上層には埋没最終時に湛水した様子が窺える。またその下層は、レンズ状堆積と三角堆積である。

規模・形態  
主軸方位  
覆土

床面には貼床は認められず、床面上の施設の有無については不明であるが、壁際に細長い柵状床の施設が存在する。

## 電

攪乱のため電は削平されていた。

## 遺物の出土状態

出土遺物総点数は33点と少なく、遺物の出土は壁際に見られるが全て浮いた状態で検出された。

総点数

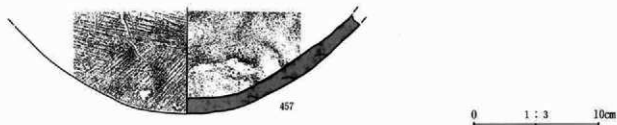
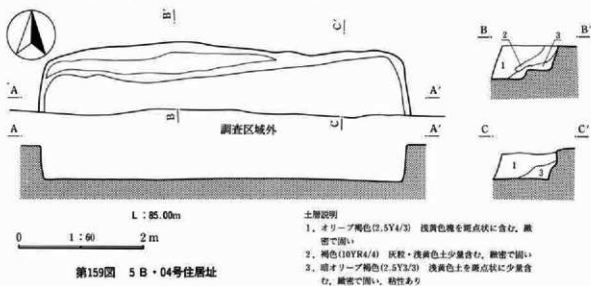
## 出土遺物 (挿図番号第160図)

図示した遺物は、須恵器大甕の底部1個体のみである。

図示遺物

## 所 見

覆土上層に流入遺物が混入するほかは、埋没過程での廃棄はみられず周囲に生活の痕跡はない。



IV 遺跡の調査

5 B・05号住居址

遺構 (挿図番号第161図 写真番号P L-130)

絶対的位置	本住居址は5 B区の西端に位置し、その1/3を調査区外の道路下に突き出している。所在するグリッドは、小形住居址ながらB13・90, 91, B14・00, 01の4グリッドにまたがっている。近接する住居址は、すぐ北側の重複する5 B・07号住で、北壁を切り取られている。確認面の標高は84.90mを測り、かなり高い位置での遺構確認がなされている。
規模・壁	規模は東壁が検出されているため、南北軸のみが2.64mと確認されている。床面からの壁高は50cmで、壁はほぼ70°の角度で明瞭な立ち上がりを見せている。遺構の切り込み層は遺構確認面とほぼ同レベルで、覆土は細かなユニットに分層され、同質の層が上下に乱れて混在し、人為的な一括埋土の様相が看取される。
覆土	
床	床面は平坦で緻密に貼床が施され、推定北壁附近に焼土塊を多量に含む褐色土エリアが検出された。貼床は5cm程で、その構成土は黄褐色土と褐色土の混土層で堅く踏み締められ茶色に変色している。
貼床	

電

電は調査区外に存在すると思われる。

遺物の出土状態 (挿図番号第161図 写真番号P L-130)

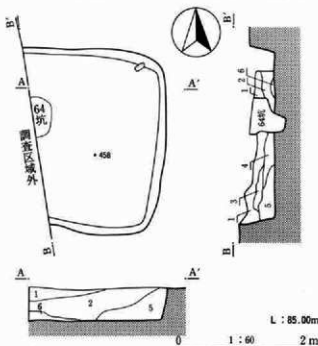
総点数  
タイプ 出土遺物総点数は142点を数えるが、殆どがタイプCに当たる遺物で、掲載遺物は1点である。

出土遺物 (挿図番号第162図 写真番号P L-217)

図示遺物 図示しえた遺物は、須恵器甕の口縁部破片のみである。

所見

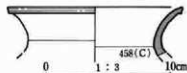
該住居址と07号住とは切り合い関係にあり、05号住→07号住という時系列が理解される。覆土は人為的な一括埋土で、07号住築成に伴う整地作業の結果と推測される。



第161図 5 B・05号住居址

土層説明

1. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 黄色粘土塊含む
2. 灰黄褐色(10YR4/2) 粘性あり固い、鉄分・焼土・炭粒少量含む
3. 褐色(10YR4/4) 黄色粘土塊・炭粒少量含む、固い
4. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 黄色粘土塊少量含む、粘性あり、固い
5. 褐色(10YR4/4) 炭粒・焼土粒・黄色粘土粒少量含む
6. 褐色(7.5YR4/3) 焼土塊多量、灰黄褐色土・鉄分含む



第162図 5 B・05号住居址出土遺物

## 5B・06号住居址

## 遺 構 (押図番号第163図 写真番号P L-131)

本住居址は5B区のほぼ中央に位置し、B14・02, 03グリッドに所在する。この一帯は重複が激しく、6軒の竪穴住居址が切り合い、かつ南側が覆乱によって失われている。確認面の標高は85.00mを測り、比較的高い位置で遺構確認ができた。

該住居址は北壁と西壁を切り合いによって、また南壁を覆乱によって失われているために規模・面積等は不明だが、東西軸において4mを越えるものと思われる。主軸方位はN-91°-Eを指し示す。確認面での壁高は50cmを測り、角度は80°内外で明瞭な立ち上がりを示している。覆土は炭化物・焼土粒・土器片を混じた褐色土を主体としているが、一番古い住居址の故に幾層もの遺構の重複を受けているためかなりの乱れが認められる。

床面の状態は平坦で、床面上の施設としては東壁の一部と推定北壁下に周溝が認められた。貼床は全面に施されていたと考えられ、貼床下には竈左袖近くに床下土坑が穿たれて、掘り方は住居址中央部を楕円形に掘り残したコの字状の掘り方が予想される。

## 竈 (押図番号第164図 写真番号P L-130・131)

第1竈燃焼部は東壁にあり、僅かに壁を掘り込んで作られる。壁面は垂直に立ち上がり、レンガ状に焼土化している。袖は地山塊主体の土を貼り付け作られる。火床面の灰の堆積は約8cmと厚く、締まりがなくふかふかしている。直上には土師器甕小片が多く出土し、角礫も混じる。煙道部は上部が削平されているが、天井焼土面の残りから、崩落せず残っていたと考えられる。煙道口へは鋭角に立ち上がり、煙道はほぼ水平に伸びる。

06号住はほぼ完全に残った第1竈の他に、煙道部がほぼ平行に2本確認できた。この2本の煙道は、06号住により壊された別住居の煙道と、06号住居の竈作り替えの2通りの扱いがあるが、両者とも決め手にかける。しかし、ここでは06号住居の第2竈として扱う。

第2竈煙道部は、天井部が崩落せず残り、方形の掘り方を持ち、天井・側壁がレンガ状に焼き締まっていた。煙り出しも方形の掘り方を持ち、全面がレンガ状に焼土化している。煙り出しより土師器甕片が出土した。

第3竈煙道部はややつぶれた状態で確認できた。掘り方は方形を呈し、天井・側壁が焼き締まっていた。

## 遺物の出土状態 (押図番号第167図 写真番号P L-130・131)

出土遺物総点数は1119点と5B区では最多の出土点数を数えるが、確実に該住居址に所属すると思われる遺物はそれほど多くない。遺物の平面的な広がりには遺構全体に厚く及んでおり、出土レベルは多岐に亘っている。遺物の接合状況は竈を基点とした接合線が長く引かれ、最大で3mの散乱が見られる。須恵器短頸壺465は一辺3mの二等辺三角形の接合線を有している。層位的には上部を09号住により削平を受けているため接合状況を示し得るのは床面密着の土器が多いが、土師器甕590は55cmのレベル差をもっている。タイプAはなく、土師器甕1031がタイプBaで、タイプBには土師器甕461、土師器坏1032、須恵器甕464、須恵器坏蓋463がある。

## 出土遺物 (押図番号第165・166図 写真番号P L-196・217)

図示した遺物は、土師器甕5、土師器坏2、土師器盤2、須恵器甕破片1、須恵器短頸壺1、須恵器坏1、須恵器坏蓋2、刀子1の15個体である。

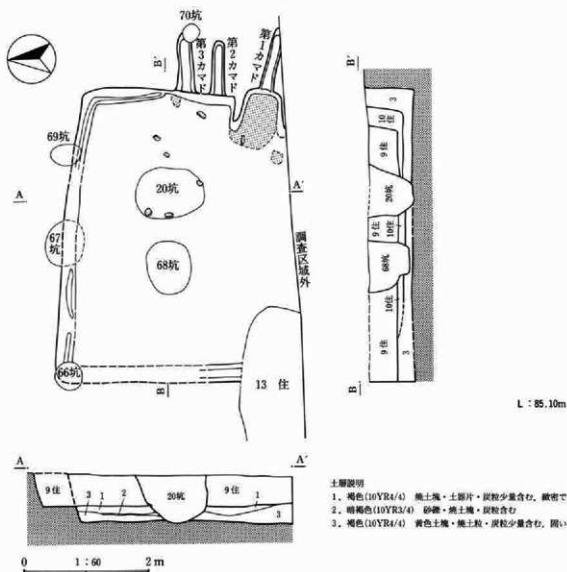
#### IV 遺跡の調査

**土師器** 土師器壺は①胴部が球状を呈し、頸部に横篋削りが施される566と②胴部上位に膨らみをもち、体部に斜縦位の篋削りを施す(461, 1031)の2タイプである。須恵器環588は口縁が直立する。土師器盤460、590は摩滅が激しく細部は不明だが、460の方が稜線がしっかりしている。

**須恵器** 須恵器短頸壺465は体部の曲線が優美である。須恵器円蓋は463がつまみ出した僅かな返りを持ち、598は自然軸の掛かった体部の頂点に広いリング状の鈕を有している。

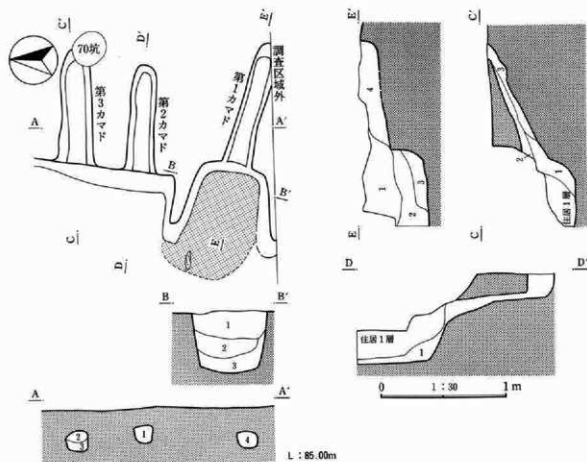
#### 所見

該住居址は7棟の重複する住居址群の一で、15号住→06号住→10号住→09号住→13号住→11号住→08号住という順序が与えられる。該住居址の廃絶は遺物廃棄行為の盛んな時期である。



第163図 5B・06号住居址

4 下大塚北原地区 (5B・6区) の遺構と遺物



土層説明

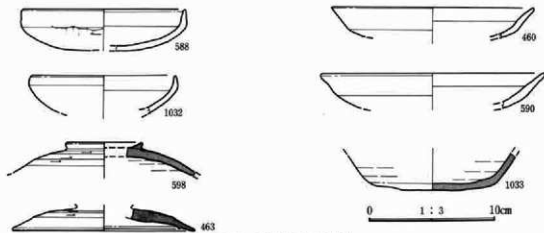
第1層

1. 褐色(10YR4/6) 焼土粒・炭粒・黄色土細粒・小礫少量含む
2. 褐色(10YR4/6) 焼土粒・黄色土塊少量含む
3. 褐色(10YR4/6) 焼土塊・焼土細粒・炭細粒・黄色土細粒少量含む
4. 褐色(10YR4/6) 焼土塊少量含む

第2・第3層

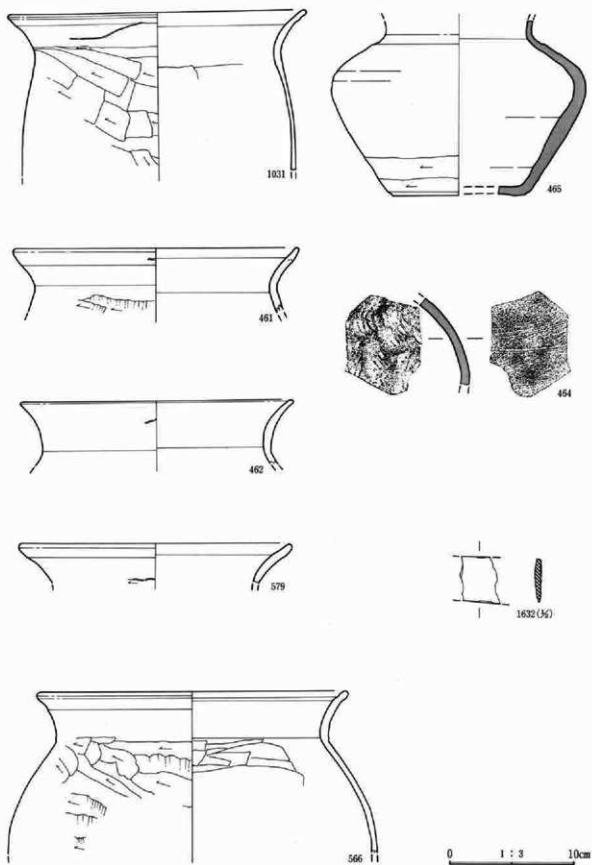
1. 暗褐色(10YR3/4) 焼土細粒・炭粒・黄色土細粒少量含む、土器片含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 焼土塊・黄色土塊少量含む
3. 褐色(10YR4/4) 焼土粒含む、土質均質、固い

第164図 5B・06号住居址竈



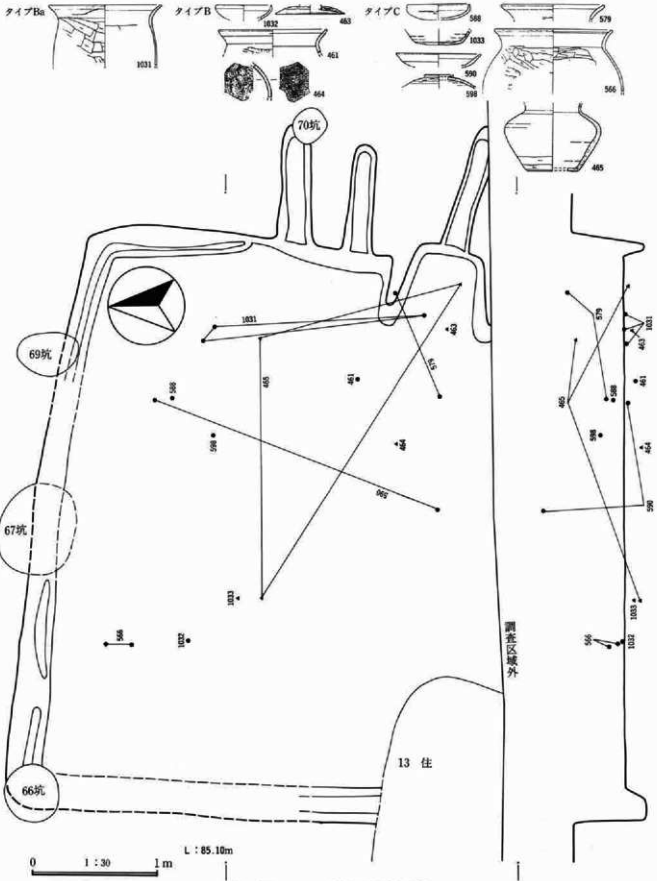
第165図 5B・06号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第166図 5B・06号住居址出土遺物

4 下大塚北原地区（5B・6区）の遺構と遺物



第167図 5B・06号住居址接合分布図

#### IV 遺跡の調査

##### 5 B・07号住居址

遺 構 (挿図番号第168図 写真番号P L-131)

絶対的位置 本住居址はB13・90, 91グリッドに位置し、5 B・05号住と南側部分で切り合い、西側1/2を調査

確認面 区外に突出させている。確認面での標高は85.00mを測り、かなり高い面で確認ができた。

規模・形態 規模は南北軸が3.52mを測るが、平面形態は不明である。主軸方位は推定でN-10°-Eを示す。

主軸方位 壁高は50cmが計測され、角度は80°のシャープな立ち上がりを見せる。覆土は5層に分層され、オリープ褐色土を主体に床付近では4層の細かなユニットに分かれている。

床 床はフラットで堅く踏み締められ、茶褐色に変色している。床面上の施設としては南東隅に貯蔵穴が穿たれ、周溝は全周していたことが予想される。貼床の構成土は、黄褐色土を主体に褐色土ブロックの混じる締まりの強いシルト質土である。

##### 電

電は05号住により削平されている。

遺物の出土状態 (挿図番号第170図 写真番号P L-131)

結点数 出土遺物結点数は132点で、土師器の割合は97%を越えている。遺物の平面的な広がり

タイプ 南壁際に集中している。貯蔵穴付近でタイプBの土師器壺466が接合されている。

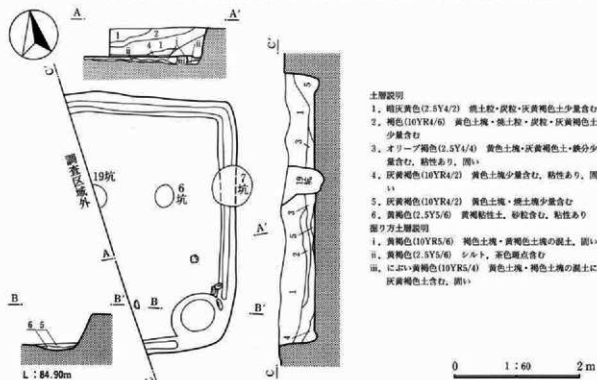
出土遺物 (挿図番号第169図 写真番号P L-217)

図示遺物 図示した遺物は、土師器壺1と須恵器甕破片1の2個体と少ない。

土師器 土師器壺466は、体部に縦位の彫削りを施す長壺と推測される。

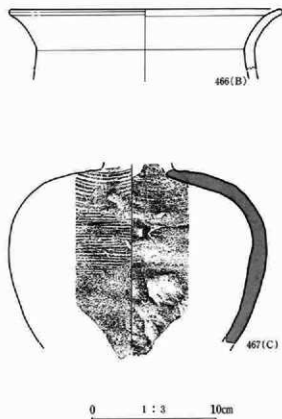
##### 所 見

該住居址の形成は05号住を埋め立ててのものと思われ、05号住廃絶後それほど時間の経過しない時期の所産と理解される。遺物の多くは小破片で出土位置は壁際であり流入の可能性が高い。

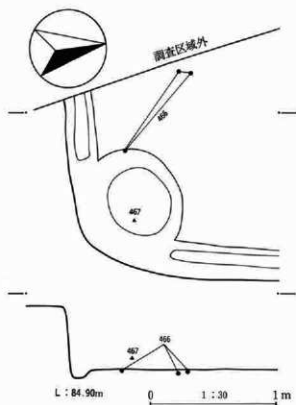


第168図 5 B・07号住居址





第169図 5B・07号住居址出土遺物



第170図 5B・07号住居址接合分布図

## 5B・08号住居址

## 遺 構 (挿図番号第171図)

本住居址は、B13・92グリッドに位置する焼土範囲から住居址の存在が推測されているもので、**絶対的位置**  
 竪穴住居としての掘り込みは確認されていない。焼土範囲の標高は85.00mとかなり高い面での確 **確認面**  
 認がなされており、遺物の散布状況からすると場合によっては、竪穴住居址以外の建造物、例え  
 ば平地式建物も想定する必要があるかもしれない。

## 竈 (写真番号P L-132)

焼土範囲が竈の可能性を持つが確かでない。

## 遺物の出土状態

殆どの遺物がグリッド遺物として処理されたため、その概要を知ることができない。

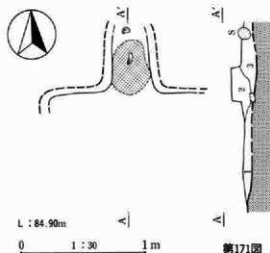
## 出土遺物

遺構につく遺物が確認できず、図示しえた遺物は残念ながら掲載できない。

## 所 見

該住居址の所在するグリッドは表採遺物の密集地域で、特に密度の濃い部分と住居址部分が重  
 複している。

#### IV 遺跡の調査



##### 土層説明

1. 褐色(G6YR4/4) 機土粒・灰粒少量含む、土器片含む
2. 灰褐色(7.5YR4/2) 機土・灰少量含む
3. 暗褐色(7.5YR3/4) 砂利・機土・灰粒含む、粘性あり固い

第171図 5B・08号住居址

#### 5B・09号住居址

##### 遺 構 (押図番号第172図)

**絶対的位置** 本住居址はB13・92, 93, B14・02, 03の4グリッドにまたがって所在し、7棟の住居址が錯綜して切り合っている一群に属している。確認面での標高は電上面で84.80mを測り、竪穴部分はさらに確認面が35cm程低い。

**規模** 規模は、残存している西壁下周溝と土層から復元すると、東西4.28m, 南北3.30m, 推定面積16.76m<sup>2</sup>を測り、平面形態は主軸を南北に持つ北壁の横長長方形となる。主軸方位はN-1°-Wではほぼ真北を指し示す。壁は電左側の北壁部分が僅かに残り、確認面までの壁高は35cmで、掘り込みの角度はほぼ90°に近い。覆土は褐色土を主体にして3層に分層されるが、僅かな部分しか残存しておらず、その層相は明らかにしない。

**床** 床面の状態は明らかではないが、床面上の施設として北壁の一部から西壁にかけて周溝が巡っているのが確認されている。

##### 竈 (押図番号第173図 写真番号PL-132)

**燃焼部** 燃焼部は北壁を掘り込んで作られる。壁面は垂直に立ち上がり、レンガ状に焼き締まる。掘り方は釣鐘型を呈する。火床面は棒状炭化物を含む灰面があり、奥壁に向かい厚く堆積する。直上には焼土塊を含む層がある。

##### 遺物の出土状態 (押図番号第175図)

**総点数** 出土遺物総点数は79点と少ないが、出土遺物の掲載率は48%と非常に高く復元可能な遺物が多いことを物語っている。遺物の広がりには該住居址全体に密集して存在し、層位的にも分層された各層に混入している。出土レベルを見ると3層に分かれる埋没土層に従っての3分類が可能である。かなり錯綜とした出土状態も埋没土の3時期の廃棄・流入の結果と理解できるものと思われる。

**遺物接合** 遺物接合分布図では接合線はそれほど大きな変移を示さず、須恵器坏蓋681と須恵器製品690が1.5m内外の動きを示すのみである。層位的な接合状況は各層間では殆ど見られず、水平的な接合を示している。タイプAの須恵器坏蓋637, タイプBaの須恵器坏蓋681, タイプBの須恵器坏蓋638, 須恵器坏蓋633, 土師器台付壺577は第3層に属し、タイプCでも土師器坏459, 553, 587, 土師器壺591, 須恵器坏640等は第2層の所産と考えられる。

## 出土遺物(押図番号第174・176図 写真番号P.L-196)

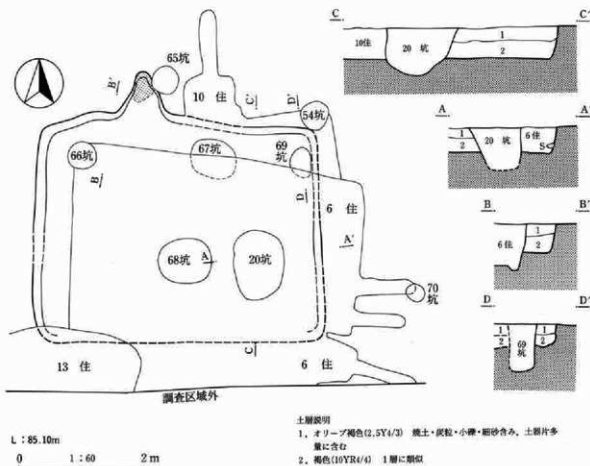
図示した遺物は、土師器壺7, 土師器台付甕1, 土師器杯6, 土師器盤1, 須恵器甕破片3, 須恵器杯3, 須恵器高台付甕1, 須恵器坏蓋5の27個体である。

土師器壺567は中位に膨らみをもつ胴部から短く外反する口縁部に至り、570は器内が薄くなり胴部が球状を呈し、斜縦位の篋削りを施す。土師器坏は口径が16cm(459, 584, 587)と12cm(553, 556)の2タイプに分かれ、16cmタイプはさらに器高の高いもの(584, 587)と低いもの(459)に分類される。土師器盤591は稜線の明瞭でないタイプである。

須恵器坏はいずれも回転篋削りの底部から外反する体部を有し、口径に大(638, 639)と小(640)がある。須恵器坏蓋にはつまみ出しの返りをもつもの(633, 635, 681)と返りのないもの(595)があり、また擬宝珠鈕のもの(635, 681)とリング状鈕のもの(637)がある。

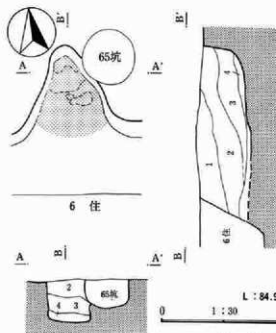
## 所見

該住居址の遺物出土様相は埋土全般に互り、住居廃絶後に間断のない遺物の廃棄・流入が行われた結果と解される。当然タイプCの土器群は廃絶後の周囲の住居の所産と見なされる。



第172図 5B・09号住居址

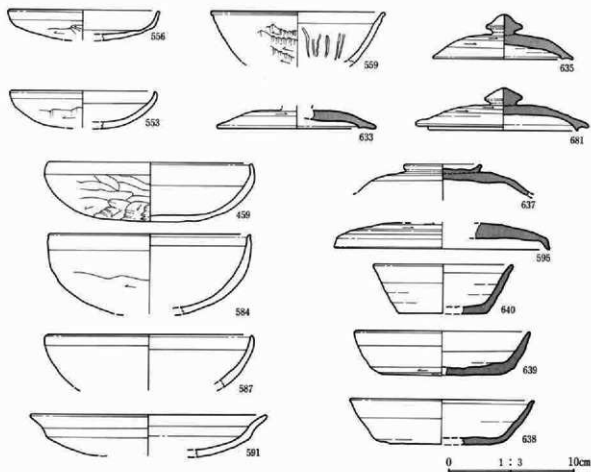
IV 遺跡の調査



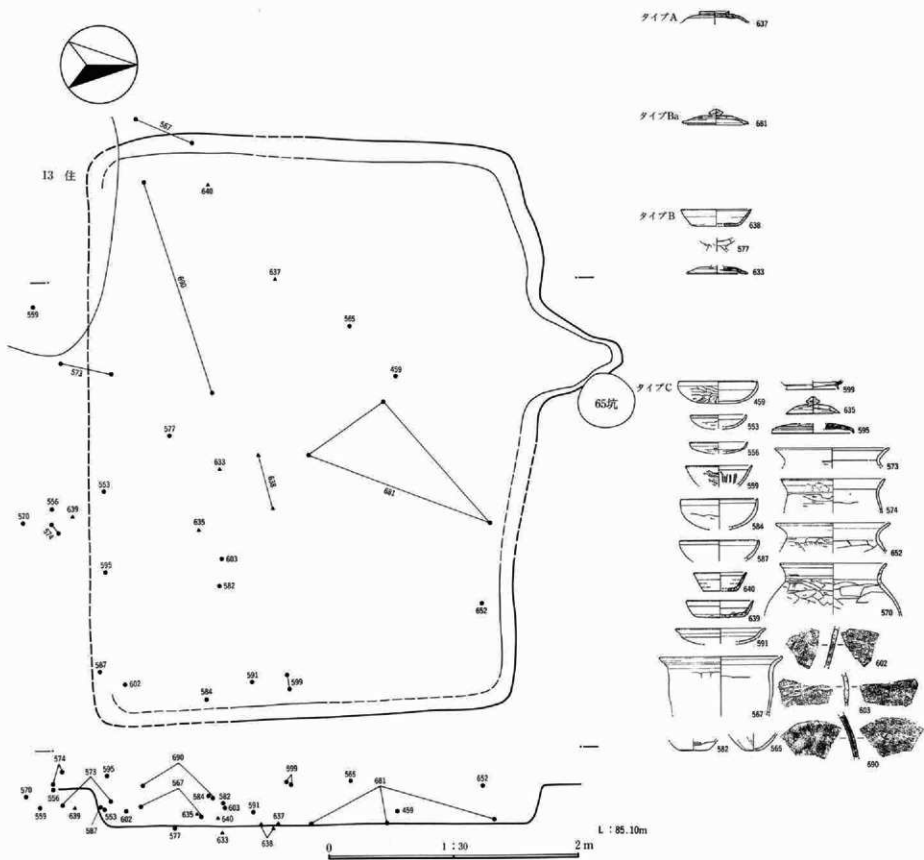
土層説明

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) (住居址埋没土1層)
2. 褐色(10YR4/4) 黄色土粒・焼土灰粒少量含む
3. 暗褐色(10YR3/4) 土質均質、焼土塊・黄色土細粒少量含む
4. 暗褐色(10YR3/4) 褐色土の混土、粘性あり、夾雑物少ない

第173図 5B・09号住居址竈



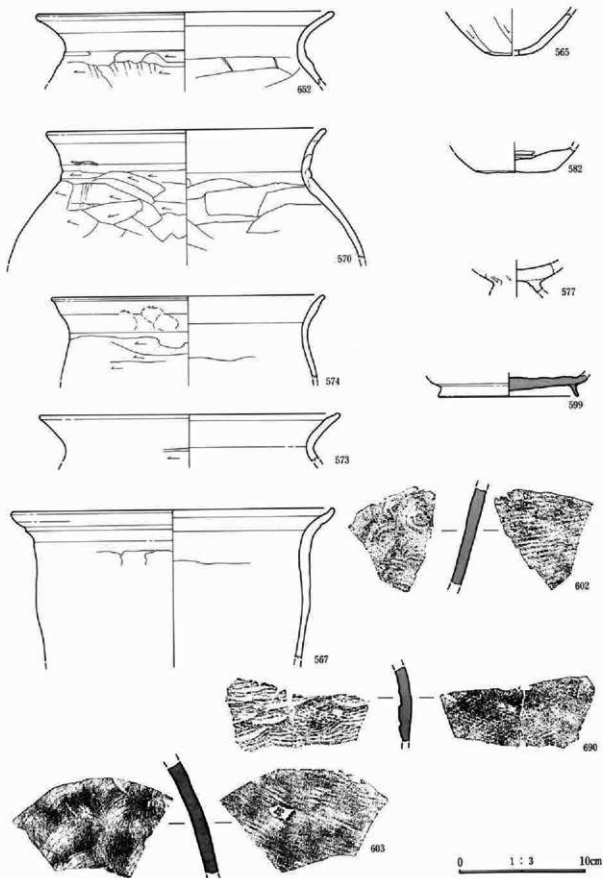
第174図 5B・09号住居址出土遺物



第175図 5B・09号住居址接合分布図



4 下大塚北原地区（5B・6区）の遺構と遺物



第176図 5B・09号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査

5B・10号住居址

遺 構 (挿図番号第177・178図 写真番号P L-132)

**絶対的位置** 本住居址はB13・92, 93, B14・02, 03グリッドに位置し、前述の5B・06, 09号住と重複して所在している。確認面の標高は84.90mを測るが、重複遺構確認による土層の掘り下げのため、初期の確認面よりだいたい確認面が下がっている。

**規模・形態** 規模・平面形態は、5B・06, 09号住との切り合いにより失われており不明である。主軸方位は竈と残存している北壁・東壁の一部からの推測でN-7°-Wとした。壁に残っている北壁と東壁の状況から壁高50cm・角度80°に推定している。覆土は褐色土に黄褐色土ブロックの混じるシルト質土で、最下層の暗褐色土は緻密で粘性に富んでいる。床面の状態は不明だが、残存している壁下の周溝の様相から床面上には周溝が全周していたものと思われる。

**竈** (挿図番号第179図 写真番号P L-132)

**燃焼部** 燃焼部は北壁を掘り込み作られる。壁面は垂直に立ち上がり、レンガ状に焼き締まる。覆土上層は、地山混土を詰め込み埋め戻されたような状況であり、灰層直上には天井部と見られる底面の焼けた地山主体の層が乗り、天井を落としたのち埋め戻された竈と考えられる。

**煙道部** 煙道部は煙道口部分が崩落しているが、全体には崩落せずに残る。方形の掘り方を持ち、天井・側壁はレンガ状に焼き締まっている。

**遺物の出土状態** (挿図番号第180～182図)

**総点数** 出土遺物総点数は46点と極端に少ないが、09号住がほぼ全面に亘って重複している故と理解される。

**平面分布** 遺物の平面的な接合分布は接合線が大きく引かれる遺物が多く、土師器環674は底辺が5.5mの二等辺三角形の散布状況を呈する。層位的な接合状況を見るに須恵器環680は最大で70cmを越える上下差をもち、他の遺物もかなりの変動幅で分布している。これは住居址の幾重もの重複による擾乱の結果である。それゆえに全ての掲載遺物がタイプCに分類されるものと考えられる。

**出土遺物** (挿図番号第180・181図 写真番号P L-196)

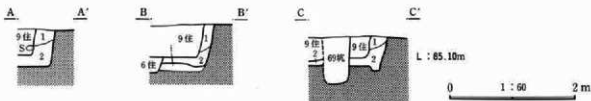
**図示遺物** 図示した遺物は、土師器壺5, 土師器環1, 須恵器環1の7個体である。

**土師器** 土師器壺はいずれも頸部に横篋削りを有する球形胴と推測され、大(679)と小(676)がある。土師器環674は、底部が湾曲して直立する口縁に至るものである。

**須恵器** 須恵器環680は、園内の厚い底部から直線的に外反する体部に至り、底部に手持ち篋削りを施す。

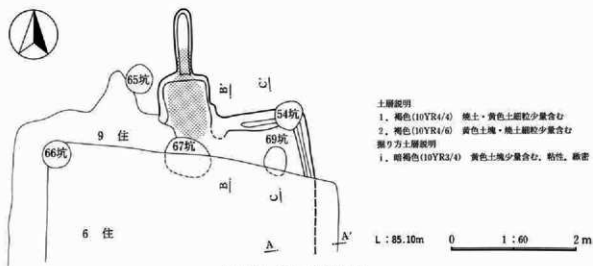
所 見

該住居址は7棟の重複する住居址群の一つで、15号住→06号住→10号住→09号住→13号住→11号住→08号住という順序が与えられる。該住居址の廃絶は遺物廃棄行為の盛んな時期である。

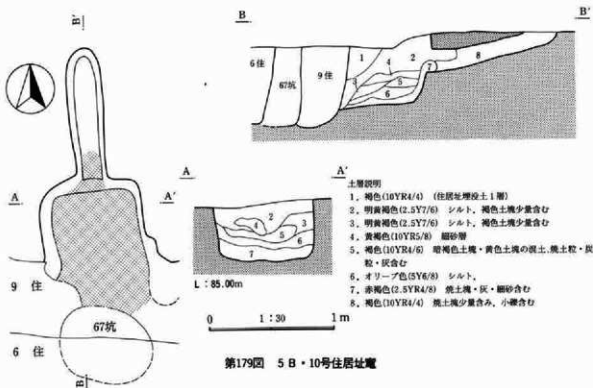


第177図 5B・10号住居址

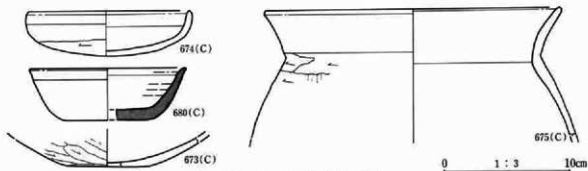




第178図 5B・10号住居址

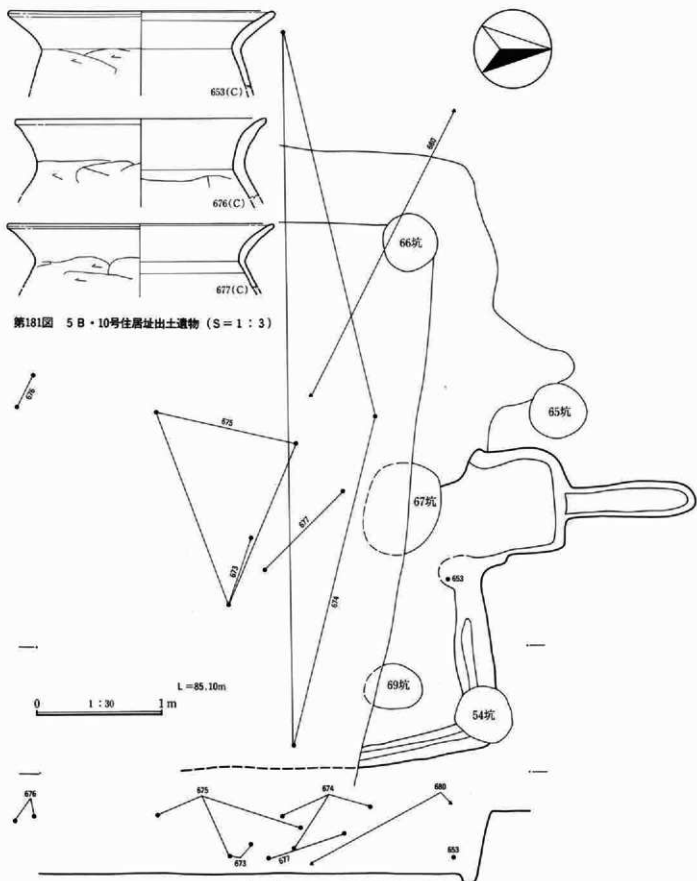


第179図 5B・10号住居址



第180図 5B・10号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第181図 5B・10号住居址出土遺物 (S=1:3)

第182図 5B・10号住居址接合分布図

## 5B・11号住居址

遺 構 (挿図番号第183図 写真番号P L-133)

本住居址はB13・92, B14・02グリッドに位置し、5B・13, 15号住と重複して所在する。確認面の標高は84.80mとかなり下げられており、重複の激しいこの一帯での遺構確認作業の経過を示している。

規模は、竈と思われる焼土範囲と西壁・北壁が検出されており、それを基に推定線を引きみると東西3.18m・南北4.04m、面積13.91m<sup>2</sup>が想定される。平面形態は、方形あるいは横長方形が推測されるが確かでない。主軸方位はN-101°-Eを示すものと思われる。確認された部分の壁高は10cmで、角度は90°に近い。覆土は3層に分けられるが、黒色・黄褐色灰層が間層として斜めに堆積しており、細かい土器片の混入と合わせて住居廃絶後の住居址の利用の在り方が窺える。

床面は下層の5B・15号住の覆土との判別が困難で、土器の出土状態からの推定である。床面上の施設としては、円形の貯蔵穴が検出されている。

竈 (挿図番号第184図 写真番号P L-133)

燃焼部は東壁を掘り込み作られ、調査では火床面のみ残った。灰層直上に焼土層が乗る。

遺物の出土状態 (挿図番号第187図 写真番号P L-133)

出土遺物総点数は287点を数え、遺構確認面が低い割には遺物の出土量が多い。遺物の平面分布は住居址全体に亘り、特に中央部において密集度が濃い傾向にある。層位的には床面密着の遺物は少なく、灰層を境にして上下層に分かれる様相が看取される。遺物の接合分布状況は平面的には土器器壁487, 696, 697の接合線が長く引かれ、広い散布状況を示している。出土レベルを見ると696, 697はほぼ同レベルの破片の接合だが、487はレベル差を持った多数の破片が接合されている。床面の確認が困難であるゆえかタイプA, タイプBaはなく、タイプBが土器器壁547, 549, 550, 土器器蓋560, 561, 鉄製品1643である。残りはタイプCとなる。

出土遺物 (挿図番号第185・186図 写真番号P L-196・197・217)

図示した遺物は、土器器壁8, 土器器環9, 土器器蓋4, 須恵器甕破片1, 須恵器台付壺1, 須恵器環1, 須恵器瓶1, 須恵器環蓋3, 瓦破片1, 円形叩き石1, 刀子1の31個体である。

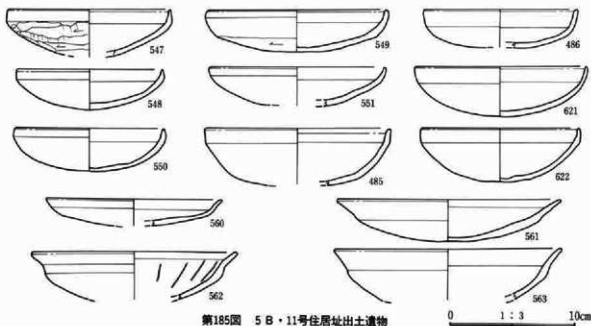
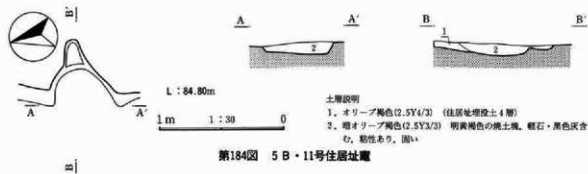
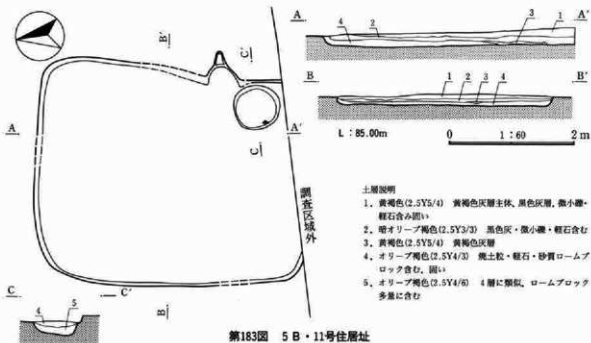
土器器壁はいずれも球形胴を呈し、口縁部は強く外反する。土器器環は①尖り気味の底部から口縁部が短く内傾するタイプ(547, 550, 551, 622), ②丸底で体部が内湾するタイプ(486, 548, 549, 621), ③深い丸底から直立する口縁に至るタイプ(485, 622)の3タイプに分類される。土器器蓋はいずれも不明瞭だが、体部が深いもの(562, 563)と浅いもの(560, 561)がある。なお562には体部内面に放射状の線刻がある。

須恵器環蓋636はボタン状のつまみをもち、634は端部にカエリを有するという若干古式の様相が看取できる。

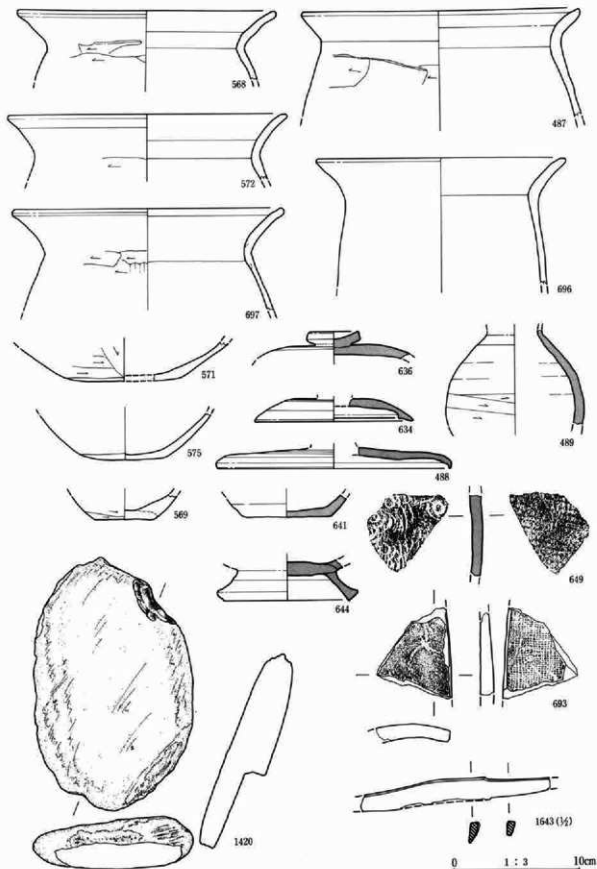
## 所 見

該住居址の覆土第2層と第3層の中間に灰層が存在し、この灰層に絡んで廃棄遺物が密集している。遺物廃棄状況から見ると、依然として周囲には盛んに生活が営まれていたと思われる。

IV 遺跡の調査

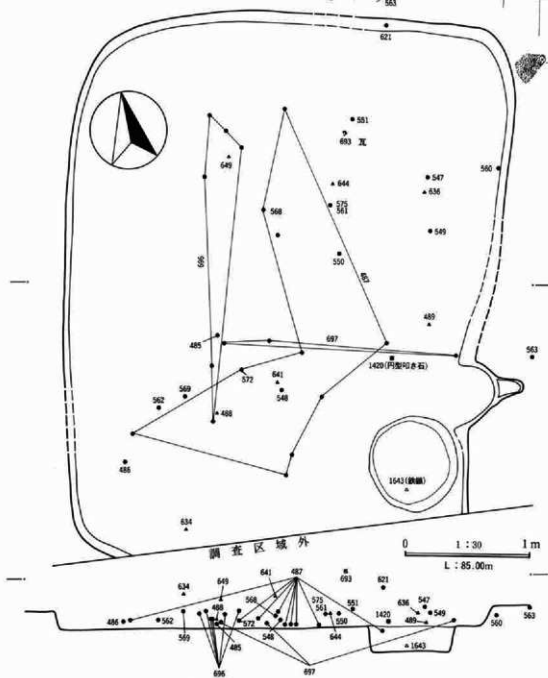
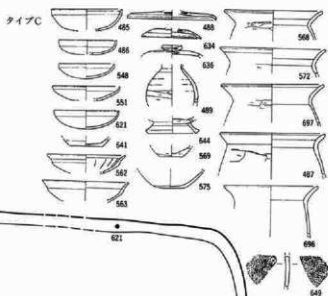


4 下大塚北原地区 (5B・6区) の遺構と遺物



第186図 5B・11号住居址出土遺物

#### IV 遺跡の調査



第187図 5B・11号住居址接合分布図

## 5B・12号住居址

## 遺 構 (挿図番号第188・189図 写真番号P L-134)

本住居址は5B区の北西端に位置し、B13・81グリッドに所在する。近接する住居址は、南1mに5B・01号住があり、また該住居址の北西コーナーと切り合う形で5B・14号住が重複して存在する。確認面の標高は85.00mを測り、かなり高い所での確認がなされている。

規模は東西4.12m・南北2.56m、面積10.86㎡である。平面形態は、東西軸：南北軸の比が1.56：1の、東西にかなり細長い縦長長方形の形状を呈している。主軸方位はN-78°-Eを示し、幾分南に傾いている。確認面までの壁高は平均50cmを測り、角度はほぼ85°~90°の明瞭な立ち上がりを見せている。覆土は暗褐色土層と灰黄褐色土層に大別され、大礫や小礫を多量に含むという、5B区には希な層相を見せている。

床面は平坦で堅くしまっており、南東隅には円形の貯蔵穴が壁に接して穿たれている。貼床は礫の多い地山を考慮してか、堅くしっかりと締めている様子が窺える。掘り方は電前を掘り残すようにして住居址中央部をコの字型に掘り込み、西壁から60cmの幅で棚状に掘り残している。

## 竈 (挿図番号第190図 写真番号P L-133)

燃焼部は東壁延長上に中心があり、壁を掘り込み袖を持つ中間型の竈である。壁面は垂直に立ち上がり焼き締まる。中層に天井崩落土と思われる地山主体の層がある。袖は内湾し焚き口部となる。左袖周辺に土器が多く出土した。火床面は床面よりやや高く、薄く灰層があり、底面はやや焼土化している。電前には、焼土・土器片を含む窪みがある。煙道部へはほぼ垂直に立ち上がり、僅かに外へ傾斜する。中層中に土器片を多く含む。

## 遺物の出土状態 (挿図番号第191~193図 写真番号P L-134)

出土遺物総点数は909点を数え、5B区では06号住に次ぐ遺物量の多さである。出土遺物は平面的には該住居址の南東隅を中心とした分布が見られ、層位的にも南東方向から土層の埋没に従って順次レベルを下げていく分布の仕方が認められる。接合線の引かれる遺物は土師器環469と須恵器壺481で、481は底辺1.5mの台形状の散らばり方をしている。出土レベルからも481は約30cmのレベル差を持っている。タイプAに土師器環468、須恵器高台付盤478、タイプBaはなく、タイプBに土師器環469、須恵器環470、473、須恵器高台付椀475、須恵器壺破片483がある。

## 出土遺物 (挿図番号第191・192図 写真番号P L-197・217)

図示しえた遺物は、土師器環2、須恵器壺4、須恵器環5、須恵器高台付椀3、須恵器高台付盤1、須恵器盤1、須恵器環蓋2の18個体である。

土師器環は寛削りした平底の底部から、撫でを施された体部が緩いS字状のカーブを描いて外反するタイプである。

須恵器壺481は体部に平行タキが見られ、6・16号住の須恵器壺1278との類似が指摘できる。須恵器環470、471は回転糸切り未調整で、若干上げ底気味の底部から体部が丸味をもって外反する。須恵器高台付椀476は断面台形の高い高台を付し、回転糸切り未調整の底部から体部下位に僅かな影らみをもつ。

## 所 見

多くの遺物は接合線を持たない小破片で上層の第1層に混入しており、廃絶後間断なく遺物廃棄が続けられた様子が窺える。特に須恵器の割合が他住居址に比べて多く河原石の投棄量も多い。

絶対的位置  
相対的位置

確認面

規模・形態

主軸方位

覆土

床・貼床

掘り方

燃焼部

袖

火床面

煙道部

総点数  
平面分布  
層位分布

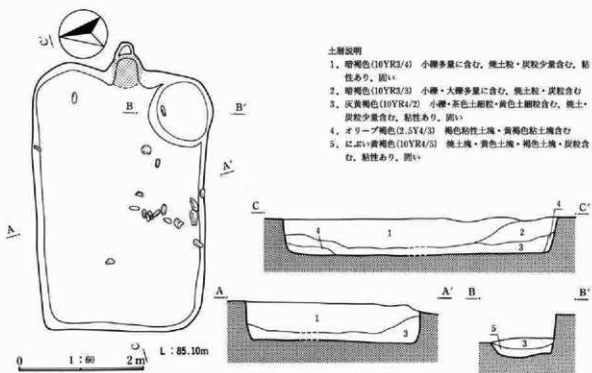
タイプ

図示遺物

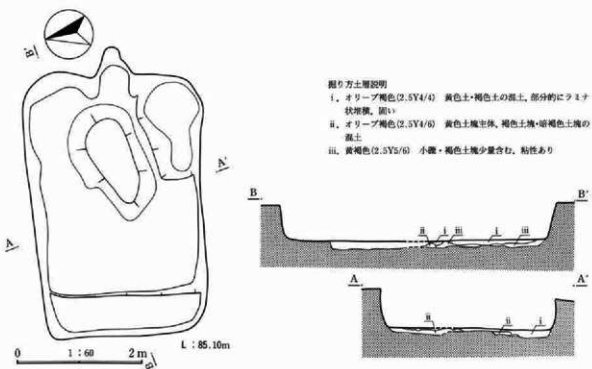
土師器

須恵器

IV 遺跡の調査



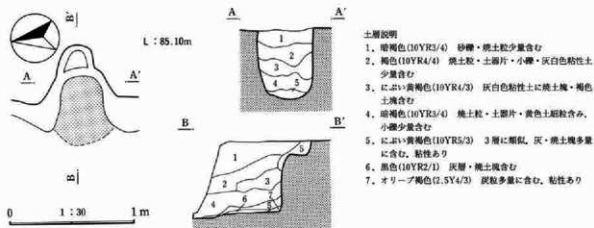
第188図 5B・12号住居址



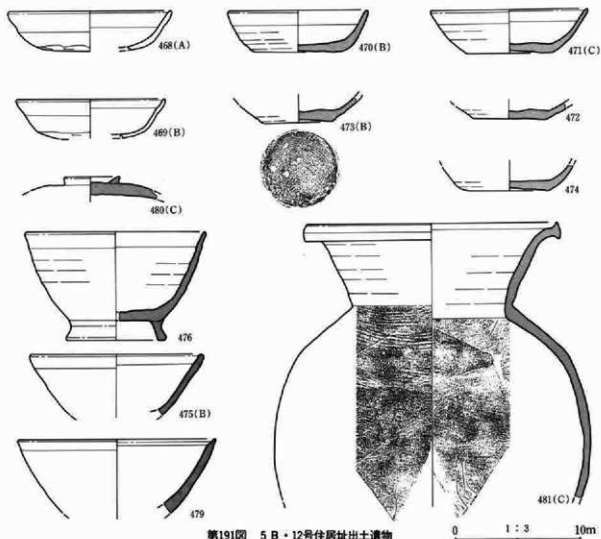
第189図 5B・12号住居址掘り方



4 下大塚北原地区（5B・6区）の遺構と遺物

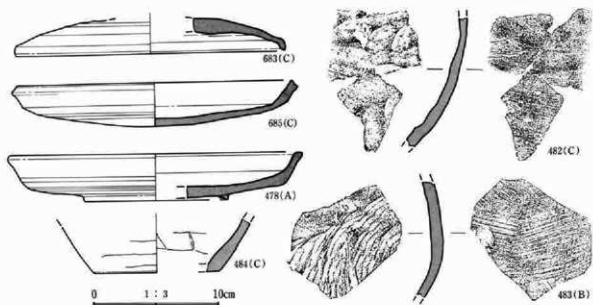


第190図 5B・12号住居址電

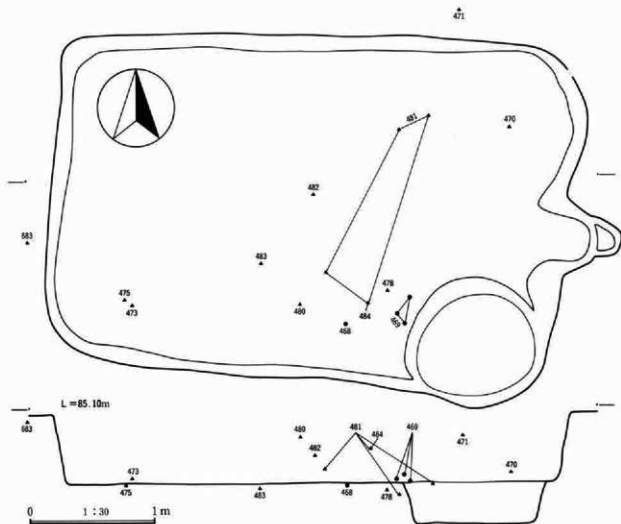


第191図 5B・12号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第192図 5B・12号住居址出土遺物



第193図 5B・12号住居址接合分布図

## 5B・13号住居址

遺 構 (挿図番号第194図 写真番号P L-134)

本住居址は7棟の重複住居址群の一角にあり、B14・02グリッドに位置する。該住居址はその大部分を擾乱によって失われており、直接的には5B・09, 11, 15号住との切り合い関係が見られる。確認面の標高は85.00mで、5B・11号住下にその存在が認められた。

検出されたのは北壁部分と北東コーナーという住居址の一部分なので、その規模は殆ど窺い知れないが、かろうじて東西軸が4.60mを測れる。平面形態は不明だが、主軸方位はN-93°-Eと推定できる。壁は85°~90°でしっかりした立ち上がりを見せ、壁高はおよそ40cmである。覆土は、暗オリーブ褐色土を主体とした類似した土層がレンズ状に堆積しており、大きくは2層に分層された。

床面の状態は部分的なため推測だが、貼床が施されていたところから概ねフラットであったと思われる。

## 寛

寛は擾乱により削平されている。

遺物の出土状態 (挿図番号第195・196図 写真番号P L-134)

出土遺物総点数は64点と少ない。接合遺物には土師器甕492があり1.5m程の散乱状況を示しているが、レベル差なくほぼ床面上に密着している。土師器甕492と土師器坏491がタイプBで、他はタイプCである。

出土遺物 (挿図番号第195図 写真番号P L-197・217)

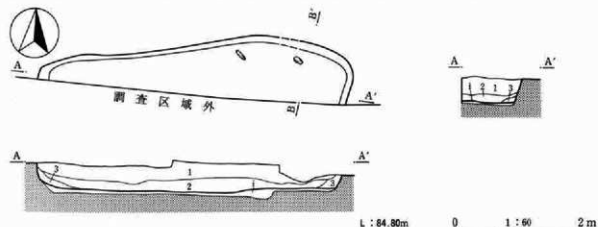
図示した遺物は、土師器甕2、土師器坏1、須恵器台付壺1の4個体である。

土師器甕492は体部に斜傾位の寛削りが施され、器内が薄く最大径を中位にもつタイプと推測される。土師器坏491は体部が直線的に外反し、本来体部と丸底の底部を画する稜線を有するタイプであるが、稜線は不明瞭である。

須恵器高台付壺494は、底部を利用した転用甕である。

## 所 見

該住居址廃絶時の遺物廃棄はそれほど多くなく、混入遺物は第1層に散在しており流入遺物と解される。切り合いから13号住→11号住の順序での形成が妥当性をもつと考えられる。

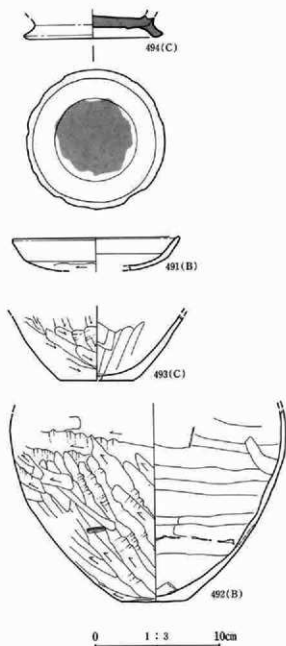


第194図 5B・13号住居址

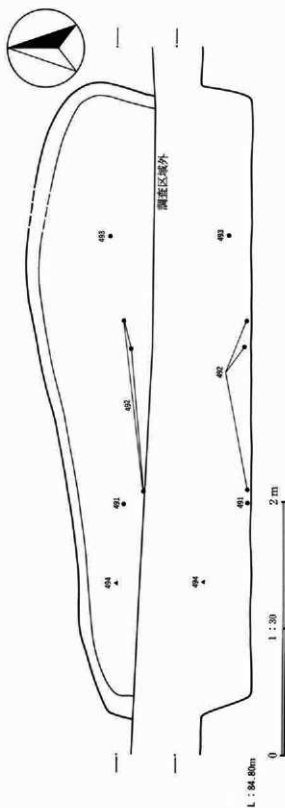
#### IV 遺跡の調査

##### 土層説明

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 軽石・微小礫・粘土粒含み、炭化物少量含む
  2. 暗褐色(10YR3/4) 1層より粘性あり、軽石・微小礫少量含む
  3. 暗褐色(7.5YR3/3) ロームブロック含む、粘性あり
- 掘り方土層説明
1. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 粘性あり、ロームブロック少量含む



第195図 5B・13号住居址出土遺物と土層説明



第196図 5B・13号住居址接合分布図

## 5B・14号住居址

遺 構 (挿図番号第197図 写真番号P L-135)

本住居址は5B区の北西隅に位置し、B13・81グリッドに所在し、南東コーナーを5B・12号住と切り合っている。確認面の標高は85.00mを測り、かなり高い面での確認ができた。

規模は東西2.42m・南北2.42m、面積7.73㎡で、平面形態は若干南東コーナーの張り出した不正方形を呈している。主軸方位はN-65°-Wと該遺跡地には希な西電であるので、同様な規模で電跡の確認できない5B・05号住も西電の可能性が高い。壁はほぼ90°に近い角度で掘り下げられており、壁高は60cmを越えて深い。覆土は3層に分かれ、砂礫を多く含む艶い褐色土の上層、黄褐色土ブロックを多量に含む中層、緻密で粘性の強い暗褐色土の下層により構成されている。床面の状態は平坦でなく、北壁沿いの床面には礫が露出している。貼床は確認できなかったが、該遺跡地の貼床の粘性土に黄色土ブロックの混入するという特徴からすると、あるいは最下層の3層がそれにあたる可能性も考えられる。

竈 (挿図番号第198・199図 写真番号P L-135)

燃焼部は西壁にあり、奥壁を僅かに掘り込み袖を持つ。袖は地山塊の混土を貼り付けたもので、灰面の広がりや電位置を決め精査したところ、竈内壁の焼けが弱いので、袖の大半を電調査前に削除してしまったことがわかった。火床面はレンズ状に灰の堆積が見られ、電前から左隅の貯蔵穴への灰の広がりがある。

遺物の出土状態 (挿図番号第200・201図)

出土遺物総点数は351点と比較的多いが、①小破片遺物が多いということ、②遺構確認が困難であったために遺物の埋土取りあげが多い、という2つ理由から掲載遺物は僅か4点に過ぎない。遺物の平面分布は竈附近を中心に散在しており、層位的には1層中への廃棄・流入が多く認められる。接合関係は須恵器高台付盤477が高い出土レベルながら1個体として認識された。遺物は全てがタイプCに分類される。

出土遺物 (挿図番号第200図 写真番号P L-217)

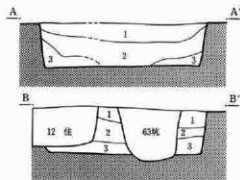
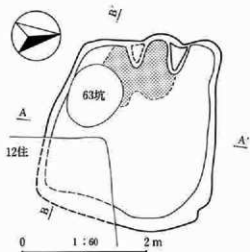
図示した遺物は、土師器環2、須恵器壺1、須恵器高台付盤1の4個体と少ない。

土師器環は僅かな丸底から浅い体部に至り、直立した口縁をもつ。調整手法は、全体が摩滅しているために明らかでない。

## 所 見

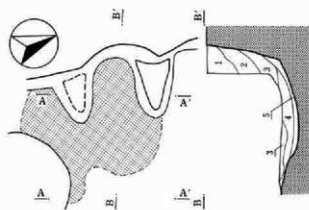
該住居址は12号住との切り合いから14号住→12号住の順列が認められる。遺物は第1層への廃棄・流入が多く、住居廃絶後第2層までの埋没を経て小破片の廃棄・流入をみたと解される。

IV 遺跡の調査

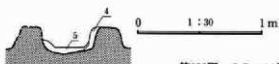


- 土層説明
1. 褐色(10YR4/4) 砂礫多量を含む
  2. にぶい黄褐色(10YR4/3) 黄褐色土塊・砂礫少量含む, 灰黄褐色粘性土含む
  3. 暗褐色(10YR3/3) 砂礫・黄色土塊少量含む, 腐葉

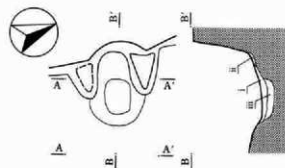
第197図 5B・14号住居址



- 土層説明
1. 褐色(10YR4/4) (住居址埋没土1層)
  2. にぶい黄褐色(10YR4/3) (住居址埋没土2層)
  3. 褐色(10YR4/4) 黄色土塊・焼土粒少量含む, 粘性あり
  4. にぶい黄褐色(10YR4/3) 黄色土塊・焼土塊含む, 粘性あり
  5. 暗褐色(10YR3/3) 灰層, 焼土粒少量含む



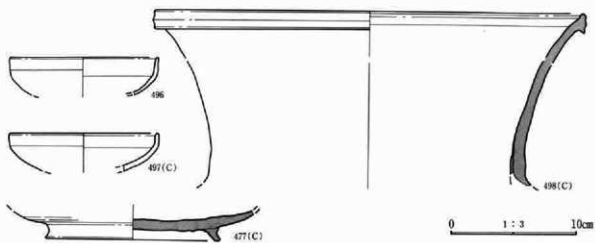
第198図 5B・14号住居址竈



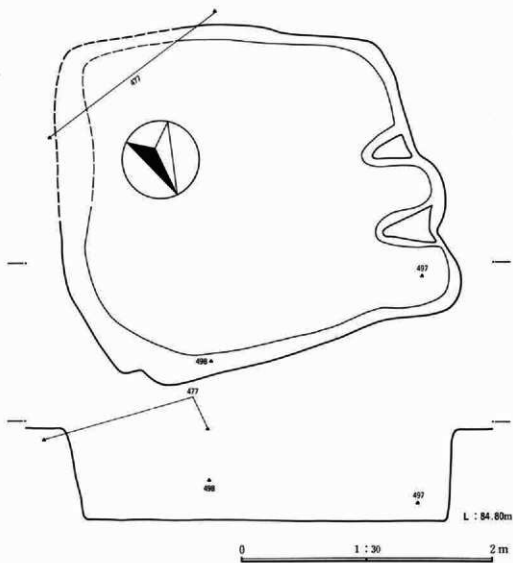
- 掘り方土層説明
- i. 褐色(7.5YR4/3) ロームブロック・焼土粒・炭化物少量含む
  - ii. 褐色(10YR4/4) シルト質, 砂質ローム少量含む
  - iii. 黄褐色(2.5Y3/4) 砂質ローム層, シルト質



第199図 5B・14号住居址竈掘り方



第200図 5B・14号住居址出土遺物



第201図 5B・14号住居址接合分布図

#### IV 遺跡の調査

##### 5 B・15号住居址

遺 構 (挿図番号第202図 写真番号P L-135)

**絶対的位置** 本住居址は7棟の重複住居址群の最下層から確認され、B13・92, B14・02グリッドに位置している。**相対的位置** 該住居址はかなりの大型住居と推定され、上部を5 B・11号住に、南側部分を13号住に、東側部分を9号住に切られている。確認面の標高は84.60mで、11号住の床面が確認面となっている。

**規模** 平面形態は不明で、規模が東西軸が6mを超えるものと推定できる大型住居である。**主軸方位** はN-90°-Wと若干南へ振れている。残存している壁は、西壁がほぼ90°ですっきりと立ち上がり、北壁は約60°とだれた感じの立ち上がりを見せている。調査中の感触では、北壁には貼り壁が施されていた形跡がある。**覆土** は2層に大別され、オリーブ褐色土を主体とした粘質土で、ロームブロックを若干混じっている。

**床** 床面の状態はフラットに貼床が施されており、土層の様相からから2面の貼床が確認されている。**貼床** の構成土は、上層が粘性で締まりのあるオリーブ褐色土で、下層は焼土粒と黒色灰の混じったオリーブ褐色土とシルト質の暗灰黄色土とが互層になっている。床面上の施設は周溝が全周していたと推測され、当然柱穴痕があつてしかるべきであるが未確認である。掘り方は北壁沿いに約2mの幅で掘り込まれていたが、南側は攪乱のため不明である。

##### 竈

竈跡と思われる焼土範囲が東壁際存在するが、痕跡のみでその全容は不明である。

遺物の出土状態 (挿図番号第203～205図)

**総点数** 出土遺物総点数は622点とかなり多く、遺物の平面分布はその散らばりが住居址全面に及び、層位的には攪乱を受けた部分を除いて濃い密集度を示している。**層位的**には第1層と第2層の下部に遺物が大別されるが、混入している遺物相にはさしたる相違はない。遺物接合分布図の接合線は長く引かれる傾向にあり、特に散乱度の高いのは土師器環501, 502と土師器盤505で、特に502は斜辺が3.5mの直角三角形形状を呈し、505も3.5m以上の飛散の仕方をしている。出土レベルを見ると501と505は第1層、第2層間の遺物接合が観察され遺物の移動の激しさを物語っている。遺物はタイプAが土師器環503で、タイプBaが土師器壺509, 須恵器環515で、タイプBが土師器環504, 507, 須恵器環514である。

出土遺物 (挿図番号第203・204図 写真番号P L-197・218)

**図示遺物** 図示した遺物は、土師器壺4, 土師器環8, 土師器盤2, 須恵器壺破片1, 須恵器環1, 須恵器盤2, 須恵器小形短頸壺1, 須恵器環蓋1, 円形叩き石1の21個体である。

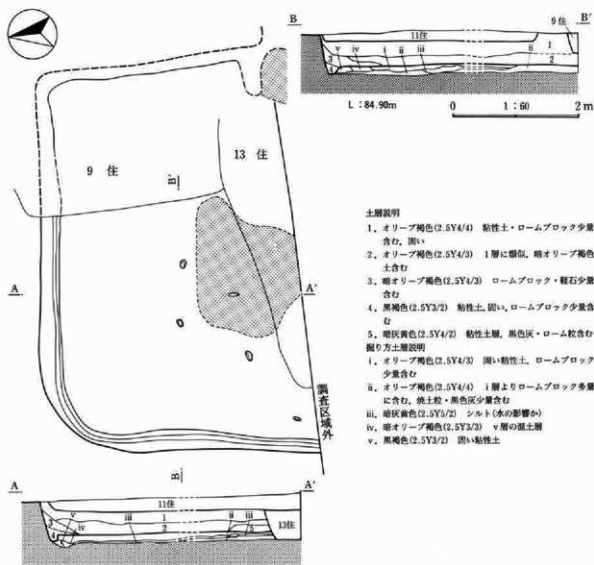
**土師器** 土師器壺は509が斜縦位の寛削りが施され胴部中位に膨らみをもつタイプで、510は胴部が球状のタイプである。土師器環は3種類に分かれ、①体部と口縁部を画す稜線を有するもの(508)、②尖り気味の丸底から口縁部が短く内傾するもの(502, 507)、③丸底で体部が内湾するもの(499, 500, 501, 503, 504)である。土師器盤は体部の弱い稜線から外湾する口縁部に至るタイプで、特に505は稜線が不明瞭である。須恵器小形短頸壺519は、三彩小壺と類似。

##### 所 見

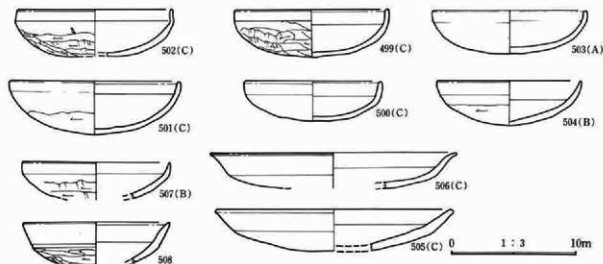
7棟の重複住居址の最古のものと考えられ、そのゆえに該住居址の遺物出土様相は後に形成される住居の遺物が間断なく廃棄され続けていった結果の所産と理解される。



4 下大塚北原地区 (5B・6区) の遺構と遺物

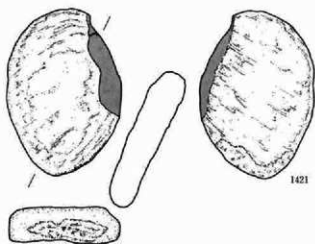
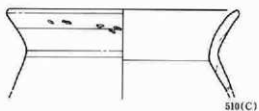
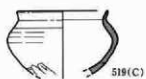
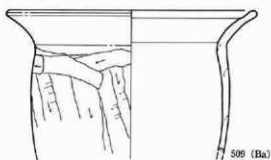
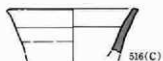
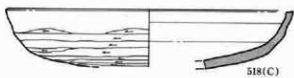


第202図 5B・15号住居址

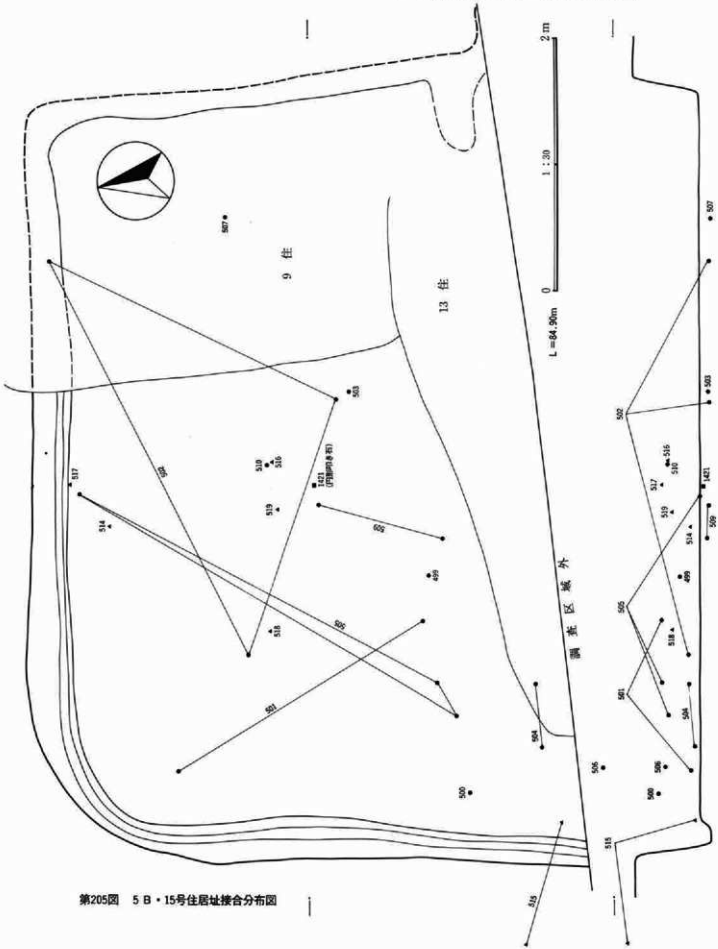


第203図 5B・15号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第204図 5 B・15号住居址出土遺物



第205図 5B・15号住居址接合分布図

#### IV 遺跡の調査

##### 6・01号住居址

##### 遺 構 (挿図番号第206図 写真番号P L-139)

絶対的位置 相対的位置 確認面	本住居址は6区の東南端部に位置し、A14・49、59グリッドに所在する。近接する住居址は、北に僅か1mを隔てて6・02、03号住が重複して存在する。確認面での標高は84.60mを測る。
規模・形態	規模は東西3.56m・南北3.92m、面積16.58㎡で、平面形態はしっかりした正方形を呈している。
主軸・壁	主軸方位はN-46°-Eを示し、ほぼ北東方向を向いている。壁はくっきりとした垂直の立ち上がり
覆土	を示し、確認面での壁高は平均20cmを測る。覆土は3層に分けられ、レンズ状堆積のシルト質オリープ褐色土を主体に、廃棄時の流れ込みと考えられる暗オリープ褐色土の三角堆積が見られる。
床	床面は全般的に平坦だが、南壁際に若干の窪みを感じられる。床面上にはほぼ等間隔に柱穴痕が検出され、柱穴痕の対角線上の南東コーナーには楕円形の貯蔵穴が穿たれ、整然とした企画プランの存在が窺える。また、周溝はほぼ全周しているが南壁中央部が約50cm程断絶しており、かつその部分に小石を敷いた形跡が見られ、入り口施設の存在が予想される。

##### 竈 (挿図番号第207・208図 写真番号P L-139)

焼焼部	焼焼部は東壁中央部の住居内に作られ袖が残る。煙道部へは段を有したり、くびれたりせずに移行する。覆土右袖上層にアーチ状に焼土層が2層確認できたが、天井部の崩落によるものと考えられる。袖は地山を掘り残し作られ、側壁が垂直に立ち上がり焼土化している。左袖焚き口部に地山塊主体の天井部崩落土が残る。火床面は床面と同レベルで灰層が薄く堆積し、直上に焼土塊がある。煙道部は部分的に崩落せず残る。掘り方は方形を呈し、側壁は焼けている。
袖	
火床面	
煙道部	

##### 遺物の出土状態 (挿図番号第210図 写真番号P L-139)

総点数 層位分布	出土遺物総点数は540点を数え、その分布の中心は竈及び貯蔵穴周辺に濃密である。層位的には第1層遺物は小破片が多く接合資料となるものが希で、第2層遺物は床面直上のものが多い傾向にある。接合分布図から理解されることは、平面的には接合線が複雑に引かれる遺物が多く、特に土師器壺1042は十数片の遺物が住居址全体に拡散しており、竈周辺遺物と貯蔵穴内遺物の接合関係も多く見られる。垂直分布は床密着の遺物が殆どで、煮沸用具の壺の出土が竈前や貯蔵穴周辺で、タイプA (1034, 1035) あるいはタイプBa (1037, 1038, 1042) というあり方で存在している。
平面分布	
垂直分布	
タイプ	

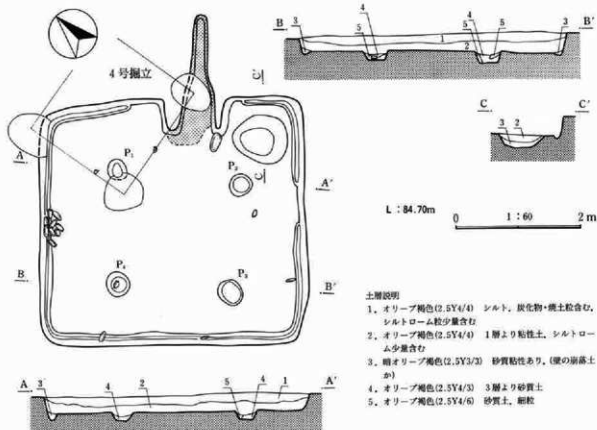
##### 出土遺物 (挿図番号第209・211図 写真番号P L-198・218)

図示遺物	図示しえた遺物は8個体で、600点近い遺物総点数からすると少なく、その内訳は土師器壺7と土師器坏1である。
土師器	土師器壺は①胴部に膨らみがなく縦位の寛削りを施す(1034, 1035, 1036, 1037)、②胴部中に膨らみをもち斜縦位の寛削りを施す(1038)、③胴部が球状を呈する(1042)の3種類に分けられる。土師器坏1039は体部と口縁部を画する稜線をもつタイプである。

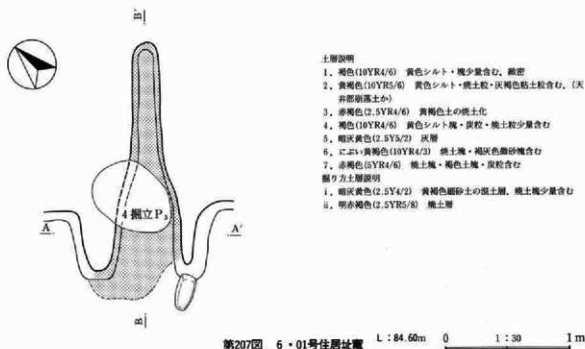
##### 所 見

該住居址は6区では最古期の一群に属している。遺物の出土様相から住居廃絶時の遺棄遺物として土師器長壺があり、床直の散乱した廃棄遺物も多く廃棄行為の盛んさを物語っている。

4 下塚北原地区 (5 B・6区) の遺構と遺物

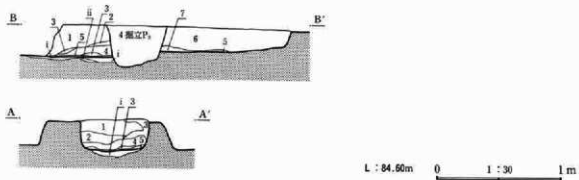


第206図 6・01号住居址

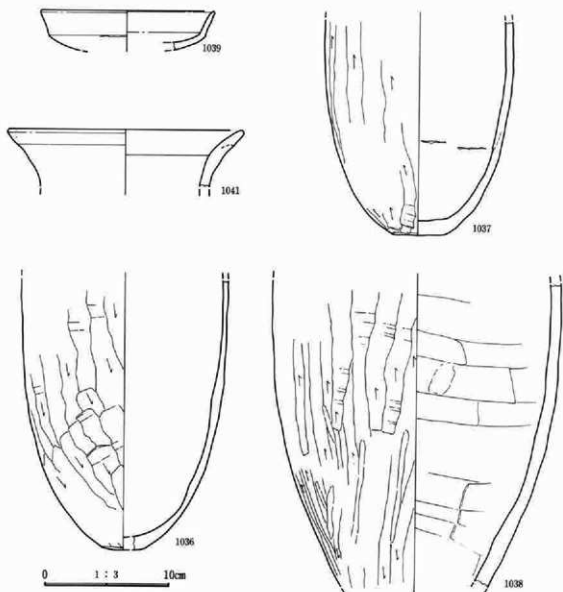


第207図 6・01号住居址竈

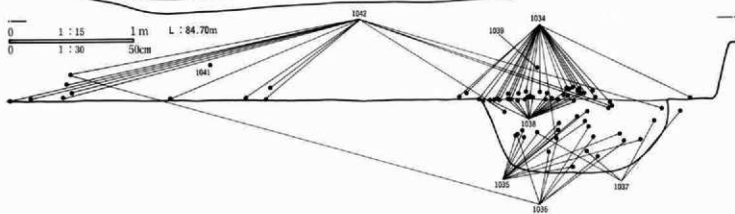
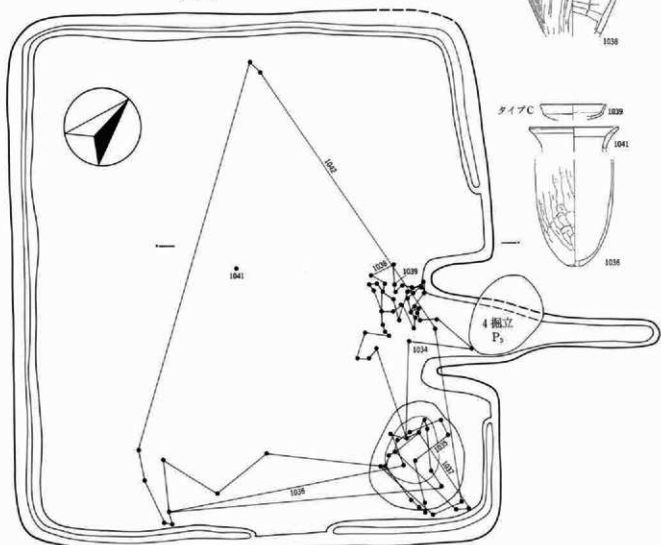
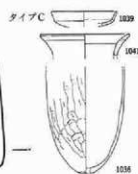
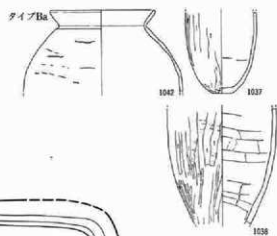
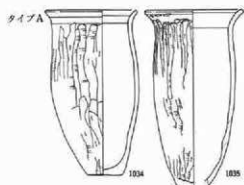
IV 遺跡の調査



第208図 6・01号住居址概



第209図 6・01号住居址出土遺物

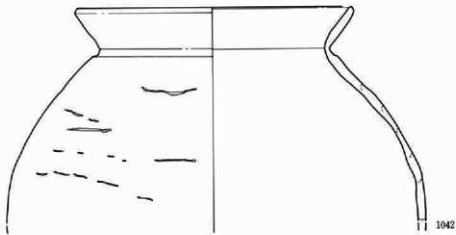
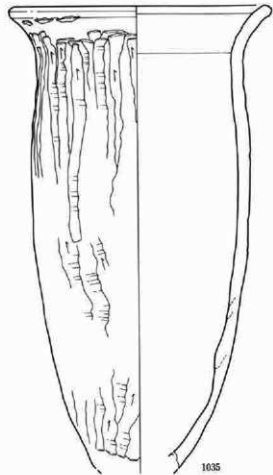
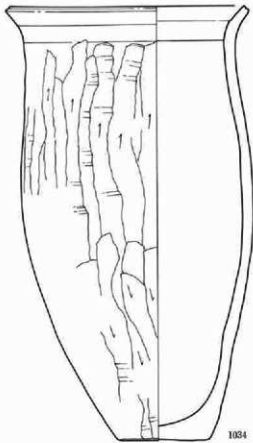


第210図 6・01号住居址接合分布図





4 下大塚北原地区(5B・6区)の遺構と遺物



0 1 : 3 10cm

第211図 6・01号住居址出土遺物

#### IV 遺跡の調査

##### 6・02号住居址

遺 構 (挿図番号第212図 写真番号P L-140)

絶対的位置 本住居址は、A14・38, 39, 48, 49の4グリッドにまたがって位置する。近接する住居址はすぐ南1mに6・01号住が、そして該住居址に重複して03号住が所在する。確認面の標高は84.65m

相対的位置 相対的位置は、かなり確認面が低いという憾みがあった。

確認面 規模・形態 規模は東西3.68m・南北4.40m、面積16.59㎡で、平面形態は東西軸・南北軸が1:1.19の横長

主軸・壁 長方形である。主軸方位はN-77°-Eを示す。検出時の壁はかなりだれた感じであったが、基部の立ち上がりの様子からはしっかりした掘り込みが予想され、そして確認面までの壁高は15~20cmと浅い。

床・貼床 床面はフラットで03号住の覆土を床土としており、分層できなかったが貼床の施されていた形跡もあるが確かでない。

竈 (挿図番号第213・214図 写真番号P L-140)

燃焼部 燃焼部は東壁右寄りの壁を掘り込み作られる。焚き口部には角柱状砂岩を埋置している。壁面は垂直に立ち上がり、レンガ状に焼き締まる。火床面は中央部がレンズ状に窪む。灰層の堆積は厚く、数層に分けられる。直上には焼土塊が乗る。

火床面 遺物の出土状態 (挿図番号第217図 写真番号P L-140)

総点数 出土遺物総点数は756点を数えるが、切り合っている3a, 3b号住出土遺物との分別が困難であった。遺物の平面分布は該住居址のほぼ全面に亘っており、層位的には第1層遺物と第2層遺物に分かれ、第1層遺物はその堆積の仕方から廃棄の可能性が高い。遺物接合分布図の接合線はさほど長い線は引かれないうが、住居中央部を中心とした平面的な接合状態が見られる。接合遺物の出土レベルも第1層と第2層に属する遺物に明瞭に分類され、第2層遺物には床面直上のものが多い。タイプAは土師器環1141のみで、タイプBaには須恵器環1047, 須恵器環蓋1049, 1050があり、タイプBは須恵器環蓋1052, 須恵器環蓋破片1054である。

出土遺物 (挿図番号第215・216図 写真番号P L-199・218)

図示遺物 図示した遺物は、土師器環4, 須恵器環破片2, 須恵器環1, 須恵器高台付塊2, 須恵器環蓋6, 円形叩き石1, 刀子1, 釘1の18個体である。

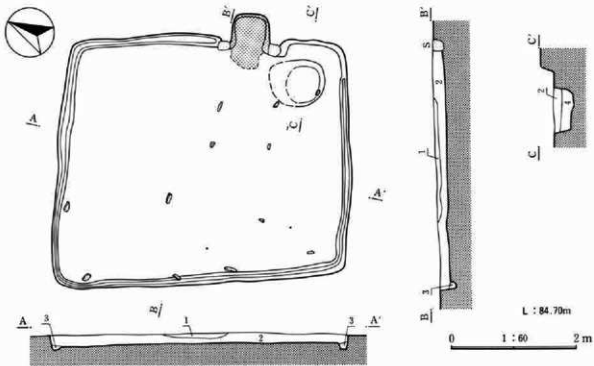
土師器 土師器環は、全て湾曲する底部から直立する口縁部に至り、直立する口縁部は横撫で、湾曲する底部は寛削りという調整手法である。

須恵器 須恵器環1047は、回転寛削りの底部から丸味をもって立ち上がり外反する体部をもつ。須恵器高台付塊1046は底部回転寛削りで精選された胎土をもち、内湾する体部と底部には外反する断面三角形の高台を付ける。須恵器環蓋は、水平な天井部から緩やかに湾曲する体部を経て、口縁部が垂直に折れるタイプで、肉厚の大形(1050)と小形(1049)の2種類がある。

#### 所 見

該住居址は03a号住と03b号住とともに切り合い、03b号住→03a号住→02号住の順に形成されたものと思われる。遺物廃棄は住居居絶の直後から行われ、焼却材の投棄も為されたようだ。

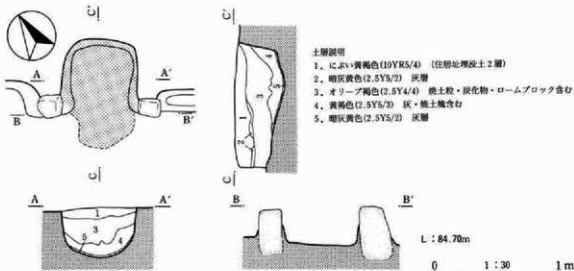
4 下大塚北原地区(5B・6区)の遺構と遺物



土層説明

1. 褐色(10YR4/1) シルト、黒色灰含む、全体的に固い
2. におい黄褐色(10YR5/4) シルト、篩目で固い、焼土粒・炭化物粒・シルトロームブロック含む
3. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) シルト、シルトロームブロック含む
4. 灰黄褐色(10YR4/2) 焼土粒・炭粒・土器片含む、黄褐色シルト塊・褐色土塊の混入、固い

第212図 6・02号住居址

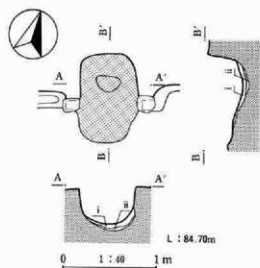


土層説明

1. におい黄褐色(10YR5/4) (住居址埋設土2層)
2. 暗灰黄色(2.5Y3/2) 灰層
3. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 焼土粒・炭化物・ロームブロック含む
4. 黄褐色(2.5Y5/3) 灰・焼土塊含む
5. 暗灰黄色(2.5Y5/2) 灰層

第213図 6・02号住居址遺

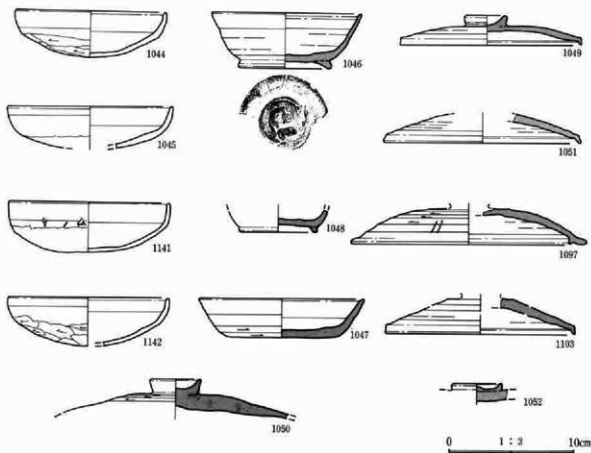
IV 遺跡の調査



掘り方土層説明

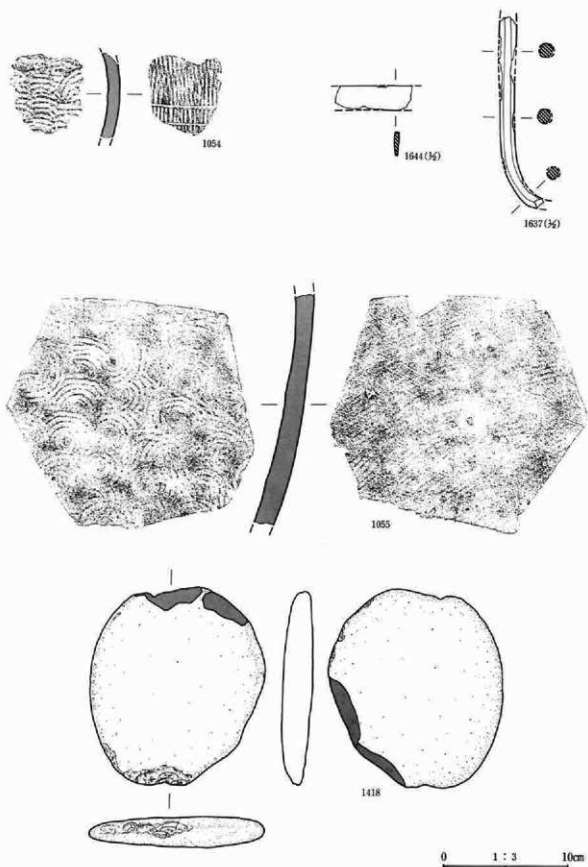
- i. 灰褐色(5YR4/2) 灰層・砂質ローム・焼土塊少量含む、軟質  
 ii. 暗灰黄色(2.5Y5/2) 灰層と砂質ロームの混土層、軟質

第214図 6・02号住居址電掘り方



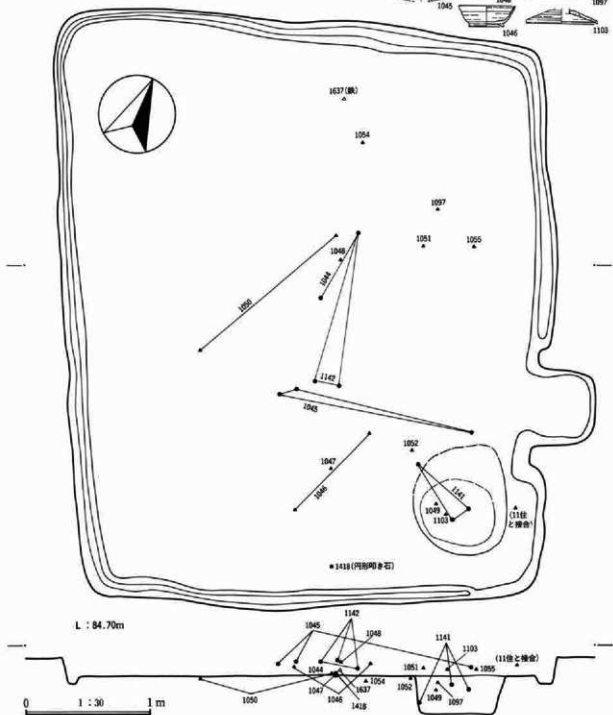
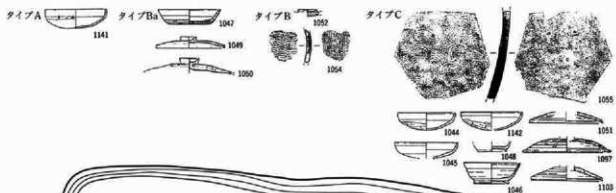
第215図 6・02号住居址出土遺物

4 下大塚北原地区（5B・6区）の遺構と遺物



第216図 6・02号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第217図 6・02号住居址接合分布図

## 6・03a号住居址

<b>遺 構</b> (挿図番号第218・219図 写真番号P L-141)	
本住居址は6・03号住との重複住居址で、A14・38, 39, 48, 49グリッドにまたがって所在する。確認面の標高は84.55mで、02号住とともに確認された。	絶対的位置 確認面
規模は東西5.50m・南北5.90m、面積34.75㎡を測り、平面形態は東西軸：南北軸の比が1：1.07の正方形を呈する。主軸方位はN-79°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面での壁高は約35cmである。覆土は三角堆積土を除いて3層に大別でき、上層のオリーブ褐色土が該住居址の覆土で、下層の暗灰黄色土は貼床の構成土と認められる。	規模・形態 主軸・壁 覆土
床面は若干の凹凸はあるものの概ねフラットで、床面上には対角線上に並ぶ4基の柱穴と、南壁際中央部から40cm隔てて入り口状施設に伴うものと思われるピットが穿たれている。貼床は前述のように粘性のシルト質暗灰黄色土で、住居拡張の際に前の住居である03b号住の跡を貼床したものと理解される。	床・ピット 貼床

**竈** (挿図番号第220図 写真番号P L-140)

東壁南寄り住居内に竈が作られる。燃焼部は02号住により削平され、火床面のみが残る。火床面は灰層が数層確認でき、中央やや前方が灰の掻き出しにより窪む。

**遺物の出土状態** (挿図番号第224図 写真番号P L-140)

出土遺物総点数は3 a、3 b号住合計で2701点を数え、本遺跡地中最多の出土遺物数である。遺物の平面分布はほぼ住居址全体に及ぶが、特徴的には南壁際に完形の遺物の出土が多数見られた。遺物接合線では住居址の端から端まで大きく飛んでいるものが3個体(1075, 1103, 1162)認められ、いずれも竈周辺を中心とした分布状況が観察できる。層位的にも接合遺物はかなりの上下差をもって接合され、単体の遺物は西壁際にレベル差をもって集中している。該住居址の掲載遺物のうち、タイプAは40%、タイプBaは11%、タイプBは9%、タイプCは40%で、床面密着遺物の多さを物語っている。タイプAには土師器甕1057, 1061, 土師器台付甕1060, 土師器環1067, 1070, 1075, 1078, 1079, 1080, 土師器盤1073, 須恵器坏蓋1102, 1115, 1116, 須恵器環1090, 1091, 須恵器高台付塊1095がある。

**出土遺物** (挿図番号第221~223図 写真番号P L-199・200・218)

図示した遺物は、土師器甕3, 土師器台付甕1, 土師器環12, 土師器盤1, 須恵器甕3, 須恵器環8, 須恵器高台付塊2, 須恵器坏蓋8, 須恵器高台付盤1, 須恵器短頸壺蓋1, 須恵器器台1の41個体の多きによる。

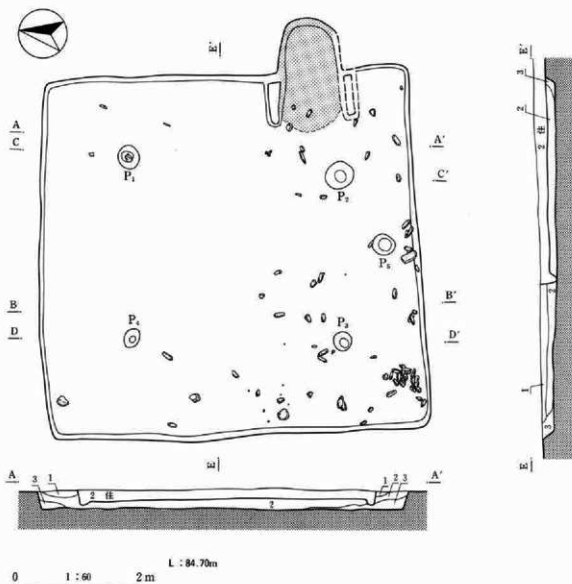
土師器甕は器肉が薄く胴部中に膨らみをもって短胴化が進み、①胴部上位に横位、中位・下位に斜縦位の寛削りを施すものと②口縁部の屈曲が弱くなり、胴部が球状を呈し、斜縦位の寛削りを施すものの2種類に分けられる。土師器台付甕1060は、胴部が球状を呈し壺に近似するタイプである。土師器環は①底部が湾曲して直立する口縁部に至るもの(1067, 1069, 1075, 1076, 1078, 1080)、②丸底の底部から口縁部が内湾するもので、口径が17cmタイプの大型(1088)と13cmタイプの小形(1068, 1070, 1074, 1079, 1086)がある。③平底で肉厚の底部から体部が外反して立ち上がり内部に放射状暗文が施される(1083)の3タイプに分類される。土師器盤は、肉厚の底部から大きく外反する体部を有し内部に暗文が施されているタイプ(1084)と平底気味の底部から外湾する口縁部に至るタイプ(1073)がある。

#### IV 遺跡の調査

**須恵器** 須恵器環は①器内の厚い底部から直線的に外反する体部に至り、底部に手持ち寛削りを施す(1089)。②①と形態はほぼ同様だが底部に回転寛切り後撫でを施す(1091)。③器内が比較的薄く底部に回転寛削りを施す(1090, 1092, 1094, 1109)。④③と形態はほぼ同様だが、底部に回転寛切り後撫でを施す。の4種類になる。須恵器高台付壇は、下位に僅かな丸味をもつ体部から外反する口縁部に至り、断面台形の高台を付すもの(1095)と丸味をもつ底部から直線的な体部をもち、断面三角形の高台を付すもの(1162)がある。須恵器環蓋は水平な天井部から緩やかに湾曲して口縁部に至り、つまみ出した短い返りがつくもの(1117)とリング状つまみを有し、口縁部が垂直に折れて返りのないもの(1102, 1115, 1116)に分けられる。

#### 所見

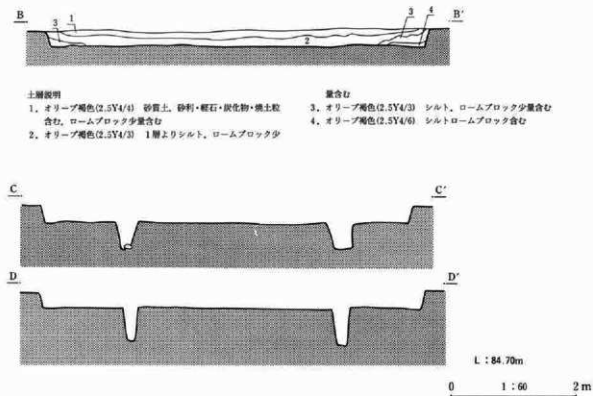
該住居址は遺築遺物が多く土器編年軸の好個の資料となるものと思される。また廃絶以後遺物廃棄の恒常的な場であったことが遺物出土様相から理解される。



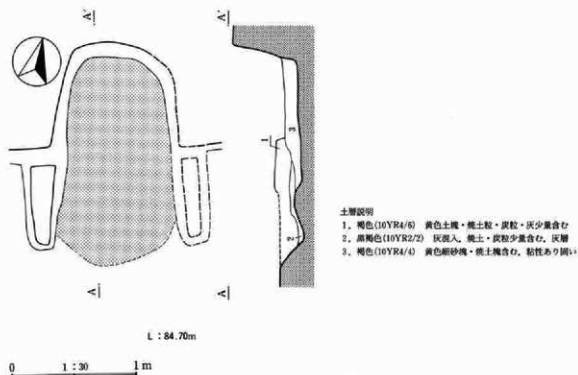
第218図 6・03a号住居址



4 下大塚北原地区（5B・6区）の遺構と遺物

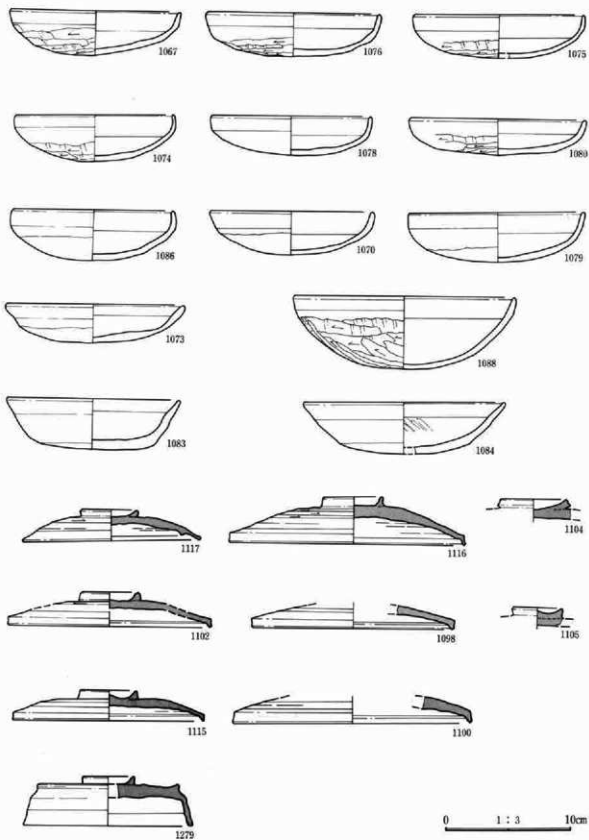


第219図 6・03a号住居址



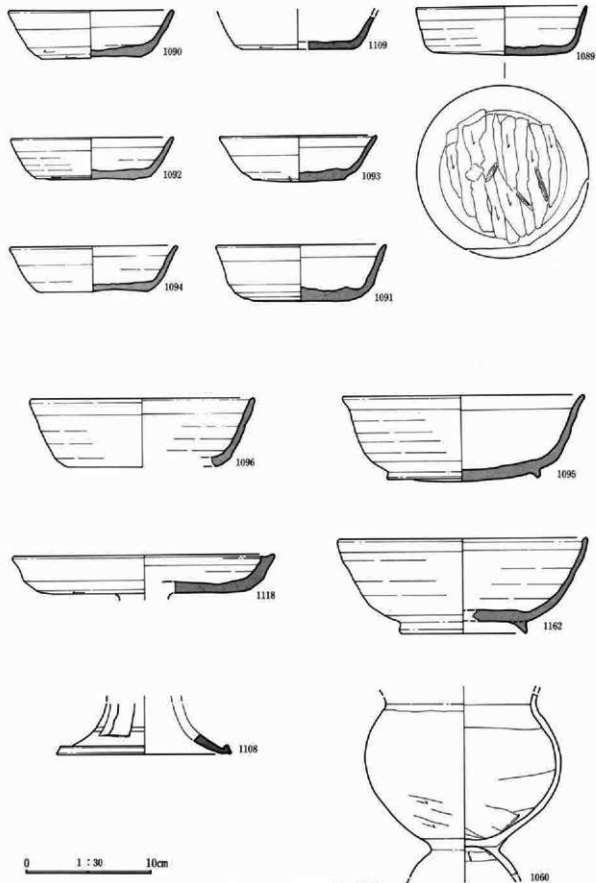
第220図 6・03a号住居址裏

IV 遺跡の調査



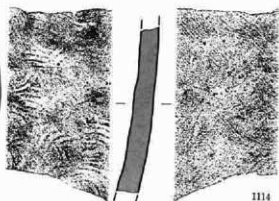
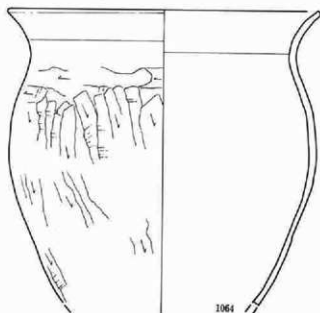
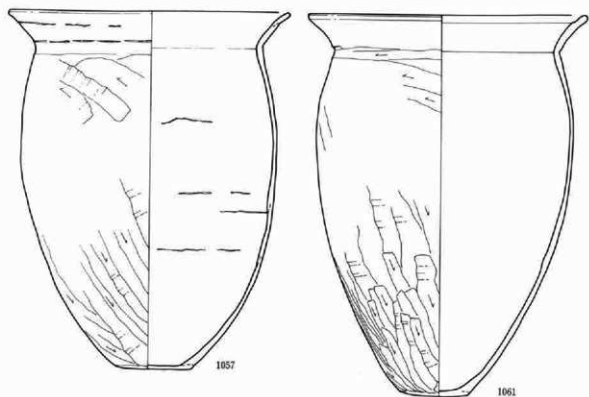
第221図 6・03a号住居址出土遺物

4 下大塚北原地区（5B・6区）の遺構と遺物



第222図 6・03a号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第223図 6・03a号住居址出土遺物

0 1:3 10cm





## 6・03b号住居址

遺 構 (挿図番号第225・226図 写真番号P L-141)

本住居址は03a号住の拡張以前の旧住居址で、03a号住と共に北壁と南壁を共用している。規模は東西4.84m・南北4.88m、面積26.86㎡を測り、平面形態はまさに正方形プランを意図しているものと思われる。主軸方位はN-79°-Eを示し、ほぼ03a号住と軸を同じくしている。壁は北壁と西壁が03a号住との共用のため、同様の数値と考えられる。

相対的位置

規模・形態

壁

床

床面は平坦で、床面上には整然と長方形の頂角の位置に4基の柱穴が穿たれ、南東コーナーには円形の貯蔵穴が掘られている。また電袖部分には、軸石か土器の抜き取り痕と思われる小ピットが存在する。掘り方は、壁からほぼ60cmの距離で北壁を除いてコの字型に掘り込まれて廻っており、北西・南西コーナーには円形の掘り方が穿たれている。

掘り方

## 電

東壁を掘り込み電が作られている。電は火床面下の灰層のみが残り、ふかふかの灰層が堆積し、貯蔵穴内まで灰の広がりが見られた。電前には古い住居の貯蔵穴が確認できた。

遺物の出土状態 (挿図番号第229図 写真番号P L-142)

出土遺物総点数は3a号住のなかに合計されており、掲載遺物は床直遺物が多く12点である。遺物接合分布図の平面分布から看取されることは、煮沸土器と考えられる土師器甕や水甕と思われる須恵器甕が電や貯蔵穴といった炊飯施設周辺から確認され、極めて原位置に近いものと思われ。出土レベルは3a号住にほとんど切り取られているという関係から、ほぼ床面直上の遺物に限られる。前述の関係からタイプCはなく、タイプAに土師器甕1056、1058、土師器台付甕1059、土師器坏1068、1069、1071、1072、1077、1081、1082があり、タイプBaに土師器甕1062、1063、土師器坏1087、須恵器坏蓋1106があり、タイプBが須恵器甕1111である。

掲載遺物

平面分布

出土レベル

タイプ

出土遺物 (挿図番号第227・228図 写真番号P L-200・201)

図示した遺物は、土師器甕4、土師器台付甕1、土師器坏8、須恵器甕破片1、須恵器坏蓋1の15個体である。

図示遺物

土師器甕(1156、1058、1163)は胴部上位に膨らみをもち、上部に斜位、中・下部に縦位の寛削りを施す。土師器台付甕1059は、胴部が球状を呈する他は甕に近似している。土師器坏は底部が湾曲して直立する口縁部に至るものが主流で、法量は口径13cm前後である。土師器坏1087は、丸底の体部から外反する口縁部に至り、稜線は弱い。

土師器

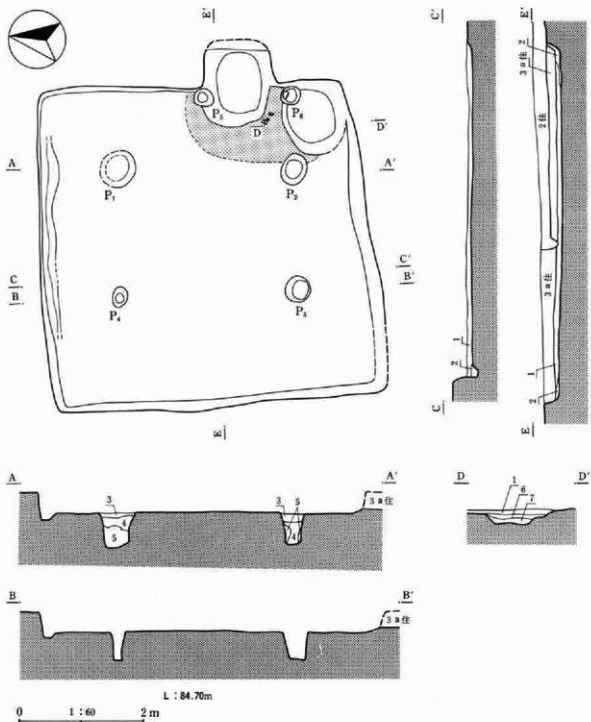
須恵器坏蓋は2種類確認できるが、破片のため器形を知り得ない。

須恵器

## 所 見

該住居址を拡張したのが3a号住であり、該住居址の遺物はほぼ完形で遺棄遺物としての在り方が認められる。

IV 遺跡の調査



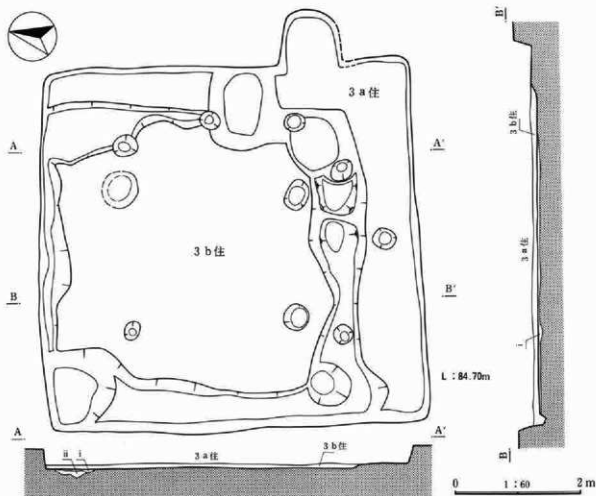
土層説明

1. 暗灰黄色(2.5Y4/2) シルト、粘性あり、数分の腐葉ローム粒少量含む
2. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) シルト、鉄分・マンガン・腐葉、粘性あり
3. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 灰黄色細砂土塊含む、粘性あり、固い
4. 黄褐色(2.5Y5/2) 炭粒少量含む、粘性あり

5. 黄褐色(2.5Y5/6) 黄色シルト塊・炭粒少量含む、粘性あり
6. オリーブ褐色(2.5Y4/6) 灰黄色土・黄褐色超砂塊の混入、焼土粒・炭粒少量含む、粘性あり固い
7. 灰黄褐色(10YR4/2) 焼土粒・黄色土超粒・炭粒・灰の混入、部分的に小塊・黄色土塊含む

第225図 6・03b号住居址

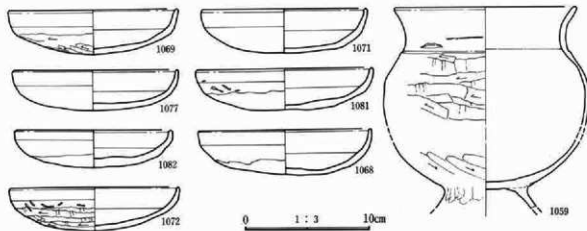




掘り方土層説明

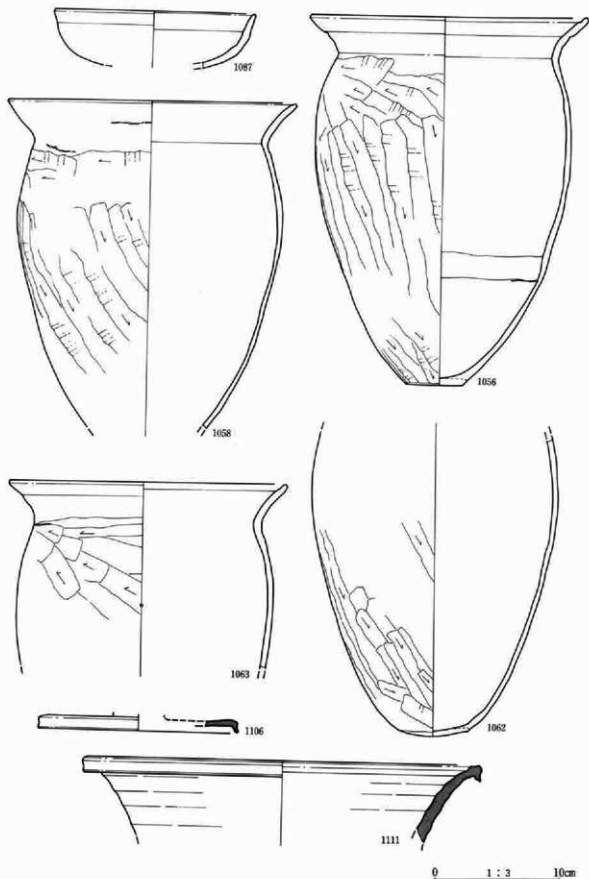
- i. にぶい黄褐色(10YR5/2) 黄色土細粒・小礫・炭粒・焼土粒少量含む。固い  
 ii. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 黄色土塊・焼土粒・炭粒少量含む

第226図 6・03b号住居址掘り方

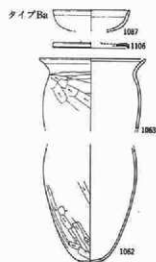
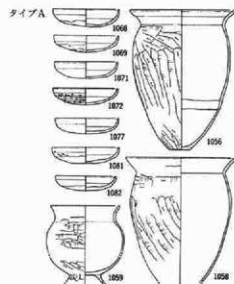
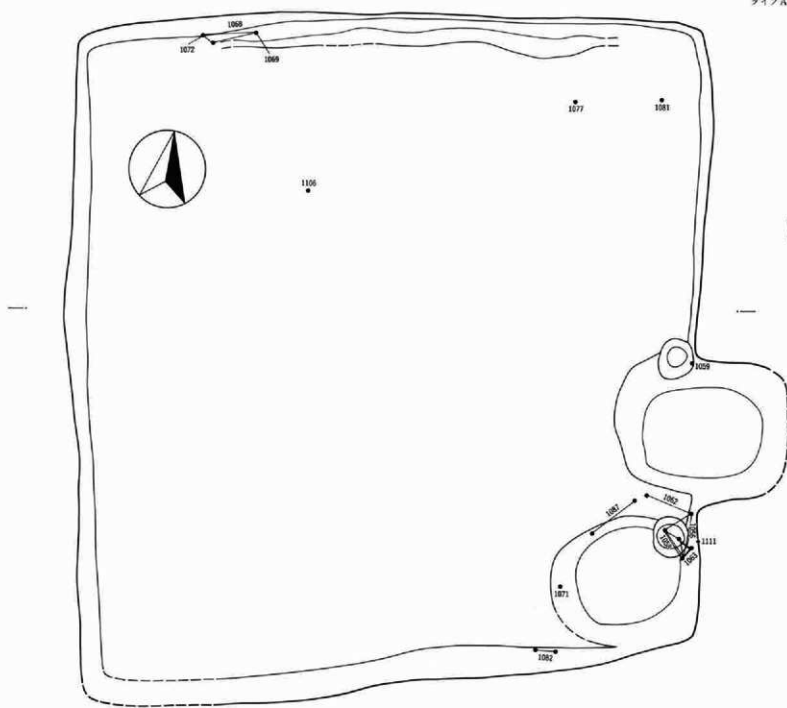


第227図 6・03b号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第228図 6・03b号住居址出土遺物



第229図 6・03b号住居址接合分布図



## 6・04号住居址

遺 構 (挿図番号第230図 写真番号P L-142)

本住居址は遺跡地の北半に位置し、A14・07、08グリッドに所在する。周囲には北西6mに09号住、北東6mには06号住、すぐ南2mには10号住があり、08号掘立柱建物跡とは切り合い関係にある。確認面の標高は84.50mを測り、北へ向かって緩やかに傾斜している該遺跡地の北半の遺構としては、かなり高い確認面と言える。

規模は東西2.60m・南北2.70m、面積10.96㎡で、平面形態は正方形を呈している。主軸方位はN-74°-Eである。壁は南壁が若干70°程の傾きをもっているが、他の壁は85°以上の際だった明瞭な立ち上がりを示し、壁高は約50cmを測り深い。覆土は5層に分けられ、黄褐色土とオリープ褐色土を主体にレンズ状堆積の層相を示して乱れない。床面の状態はフラットで、床面上の施設としては壁下に周溝が全周し、南東コーナーには円形の貯蔵穴が穿たれていたが、貼床は施されていない。

竈 (挿図番号第231図 写真番号P L-142)

燃焼部は東壁右寄り壁面を掘り込み作られ、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、レンガ状に焼き締まる。覆土は乱れ、煙道部方向からの焼土の流れ込みが見られる。火床面は床面と同レベルで、灰の堆積が薄く、直上に焼土層が乗る。煙道部へは鋭角に立ち上がり、緩やかに外へ伸びる。

遺物の出土状態 (挿図番号第232・233図 写真番号P L-142)

出土遺物総点数は110点と比較的少ない。遺物の平面分布は北壁際に偏っており、層的には散在的に各土層中に遺物が混入しており、自然な埋没過程を裏付けている。遺物は小破片が多く、掲載遺物は6点で、その殆どが接合遺物である。接合線は最大で土師器壺1123の1.6m程で、さほどのバラツキはない。出土レベルは1123が25cm程のレベル差をもつ他は、同じ層に属するものと思考される。タイプAは土師器杯1119で、残りはタイプCである。

出土遺物 (挿図番号第232図 写真番号P L-202)

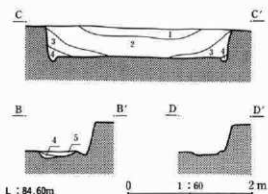
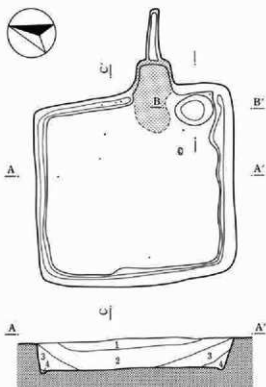
図示した遺物は、土師器壺3、土師器杯2、軽石1の6個体である。

土師器壺1123は外反する口縁部と頸部に横位の寛削りが認められ、器内が薄くなり胴部中位に膨らみをもち短胴化の進む体部が予想される。1121は頸部に斜位の寛削りが施され、膨らみの余りない体部に続く。土師器杯は、僅かな丸底から浅い体部に至り、底部にのみ寛削りを施す。法量に14cmタイプと12cmタイプがある。

## 所 見

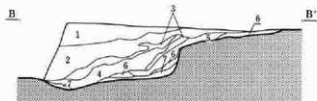
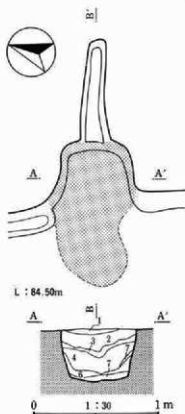
該住居址は廃絶後それほど激しい廃棄行為はなかったものと解され、遺物は各土層中に散在し多くが流入遺物と判断される。

IV 遺跡の調査



- 土層説明
1. 黄褐色(2.5Y5/4) 明黄褐色土を斑状に含む、固い
  2. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 焼土粒・炭化物粒・明黄褐色土を斑状に少量含む、固い
  3. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 焼土粒・炭化物粒少量含む
  4. オリーブ褐色(5Y5/4) 細砂土含む
  5. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 明黄褐色の焼土

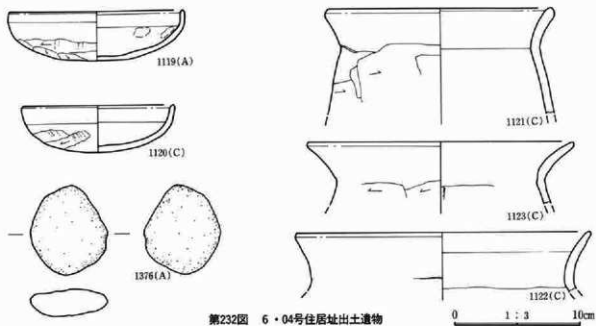
第230図 6・04号住居址



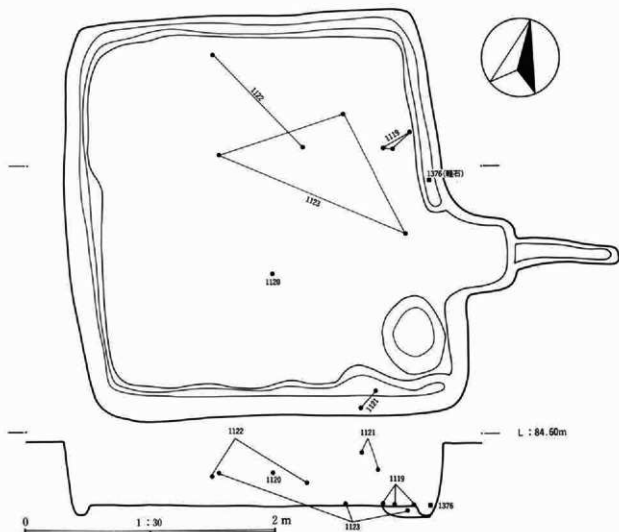
- 土層説明
1. 黄褐色(2.5Y5/4) (住居址埋没土1層)
  2. オリーブ褐色(2.5Y4/4) (住居址埋没土2層)
  3. にぶい黄色(2.5Y6/4) オリーブ褐色土少量含む
  4. 黄褐色(2.5Y5/4) 焼土塊・にぶい黄色細砂土塊少量含む、固い
  5. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 焼土塊少量含む、固い
  6. 黄褐色(2.5Y5/4) 焼土塊含む
  7. 暗灰黄色(2.5Y5/2) 灰層、焼土・黄褐色土塊・炭化物粒含む

第231図 6・04号住居址電

4 下大塚北原地区（5B・6区）の遺構と遺物



第232図 6・04号住居址出土遺物



第233図 6・04号住居址接合分布図

#### IV 遺跡の調査

##### 6・05号住居址

##### 遺 構 (挿図番号第234図 写真番号P L-143)

**絶対的位置  
相対的位置  
確認面** 本住居址は遺跡地の言わば南半に属し、所在するグリッドはA14・57である。近接する住居址は北1mに重複する07、08号住が存在する。確認面の標高は84.70mだが、住居址確認面は低い。また床面高は84.60mを測る。

**規模・形態** 規模は東西3.48m・南北4.34m、面積16.53m<sup>2</sup>を測り、平面形態は東西軸：南北軸の比が1：1.24の横長長方形プランを意図したものである。主軸方位はN-92°-Eと僅かばかり南へ振れている。残存する住居址の掘り込みは浅く東壁は緩やかに立ち上がり、現況での壁高は10～15cmを測れるのみで角度は測り難い。覆土はシルト質の暗オリーブ褐色土で、水の影響を受けた土に通有のシルト質土下に鉄分やマンガンの凝集が見られる。

**床** 床面は住居址北半が礫の露出した床で、南半がシルト質土が踏み固められた貼床の様相を呈している。床面上の施設としては、南東コーナーに円形の小貯蔵穴と、南壁際中央に入口に係わりと推量されるピットが穿たれている。貼床は小礫を含む黄褐色土で構成されており、上面が堅く踏み締められている。掘り方は西壁際から該住居址南半が掘り込まれていた。また礫層が該住居址の床を北西コーナーから南東コーナーにかけて露出している。

##### 竈 (挿図番号第235図 写真番号P L-143)

**燃焼部** 燃焼部は東壁は中央に位置し、中心は壁の延長上にあり、壁を掘り込み袖を持つ。壁面はやや開き気味に立ち上がる。袖は地山を掘り残り残される。火床面は床面と同レベルで、灰の堆積が見られる。灰直上または灰層中より多くの土器片が出土している。竈前には小ピットがある。灰の掻き出しによるものか。

##### 遺物の出土状態 (挿図番号第237図 写真番号P L-143)

**総点数** 出土遺物総点数は443点を数え、浅い住居址ではあるが比較的多数の遺物の出土を見た。遺物の平面分布は住居址南半部に偏り、層位的には床面から若干浮いた状態で数多くの遺物が検出された。接合遺物は3個体で、土師器坏1133は最大2.5mの接合線が引かれる。接合遺物の出土レベルはさほどの変化はなく、須恵器坏1124で5cmほどである。該住居址の出土遺物は単体の小破片が多く、住居址廃絶後の遺物廃棄の様相をしめしているものと考えられる。それゆえにタイプAはなく、タイプBaが土師器壺1136、土師器坏1134で、タイプBは土師器壺1135である。

##### 出土遺物 (挿図番号第236図 写真番号P L-202・218)

**図示遺物** 図示した遺物は、土師器壺4、土師器坏3、須恵器壺破片2、須恵器坏2、須恵器高台付塊2、砥石1、刀子1の15個体である。

**土師器** 土師器壺は胴部の膨らみが小さく、口縁部上位と下位の屈曲が弱くなって、コの字口縁が崩れ始まるもの(1135)と口縁部が直立して上位で外反するコの字口縁への変化を示し始め、頸部に横貫削りを施すもの(1136)がある。土師器坏は平底の底部から外反する体部に至り、底部に篋削り、体部に指頭成形後撫を施す。

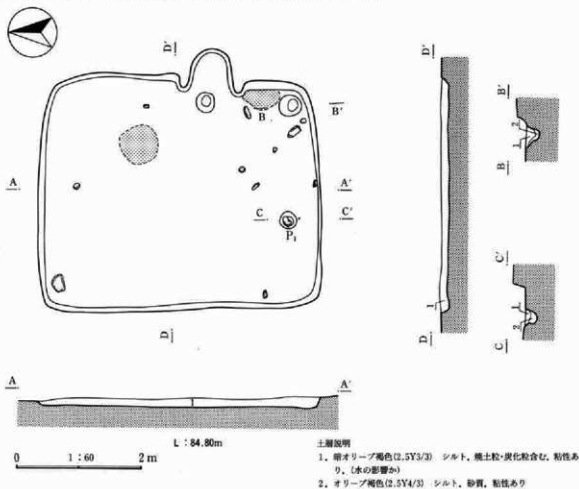
**須恵器** 須恵器坏は回転糸切り未調整の底部から丸味をもって外反する体部で、色調が灰白色から橙色を呈する。

##### 所 見

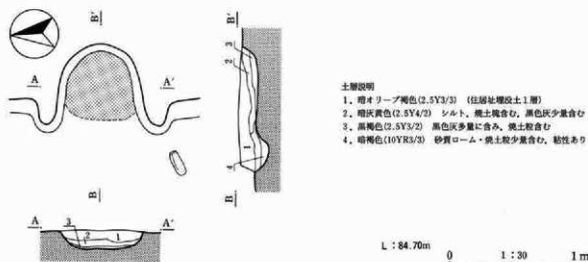
該住居址は辺り一面に滞水した水の影響により生じたと推測されるシルト質層を切り込んで形



成されている。出土遺物は小破片が多く殆どが廃棄遺物と認められる。

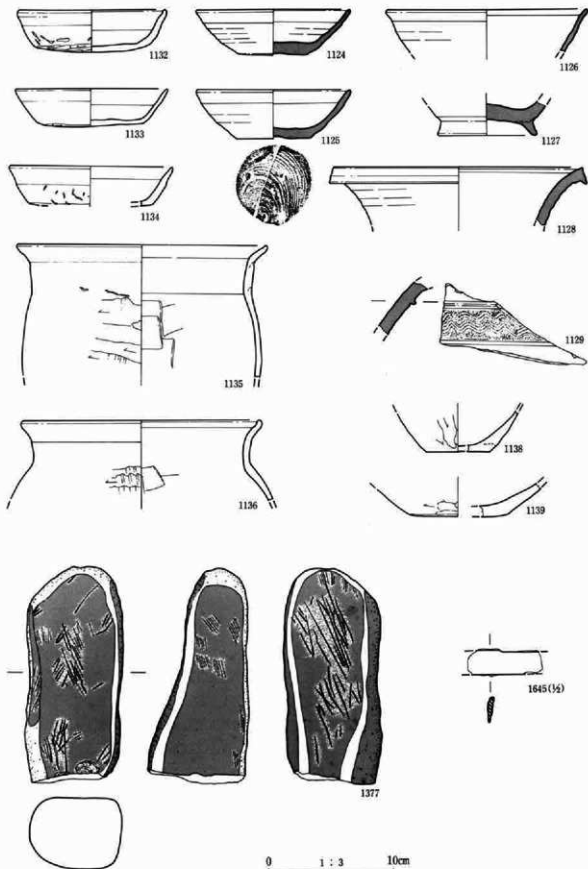


第234図 6・05号住居址



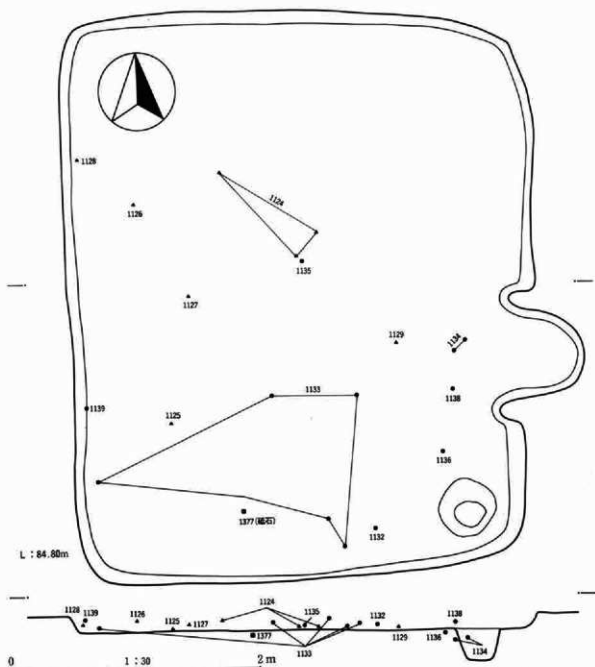
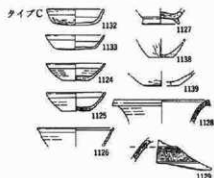
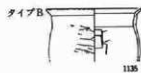
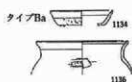
第235図 6・05号住居址裏

IV 遺跡の調査



第236図 6・05号住居址出土遺物

4 下大塚北原地区（5B・6区）の遺構と遺物



第237図 6・05号住居址接合分布図

IV 遺跡の調査

6・06号住居址

遺構 (押図番号第238・239図 写真番号P L-144)

絶対的位置 相対的位置 確認度	本住居址は6区の北東端に位置し、A13・98グリッドに所在する。周囲には西5mに01号掘立、10mに09号住が、北西5mには04号住がある。また02号掘立とは切り合いの関係にある。確認面の標高は84.25mで、床面高は84.00mを測る。
規模・形態	規模は東西3.28m・南北2.78m、面積12.75㎡で、平面形態は東西軸：南北軸の比が1.17：1の縦長長方形プランを示す。主軸方位はN-86°Eとほぼ東向きである。壁は北壁と西壁はシャープな垂直に近い立ち上がりを見せるが、東壁と南壁は若干だれた75°内外の立ち上がりである。覆土は3層に分けられ、オリーブ褐色土の第1a、第1b層はレンズ状堆積の住居内覆土で、2層の三角堆積土は黄色土ブロックを含み住居址外からの流入土である。
主軸・壁	
覆土	
床	床面には貼床が施されているためフラットで、床面上には南西コーナーに楕円形の貯蔵穴が穿たれ、周溝が全周している。また北壁と周溝の間に幅10cmの細長い槽状の段が存在する。貼床の構成土はオリーブ褐色土と黄褐色土の混土層で、若干砂質気味であるが黄色シルトブロックを多量に含んでいる。掘り方は中央部を掘り残すタイプで、壁に沿って幅の広い周溝状に掘り込まれ、北東隅と北西隅には円形の土坑が穿たれている。また南壁際東寄りには円形の小ピットが2基並んで検出されたが、これらのピットはその位置から当然床面で確認されるべき入り口施設に係わるものと推量される。
貼床	
掘り方	
ピット	

竈 (押図番号第240図 写真番号P L-144)

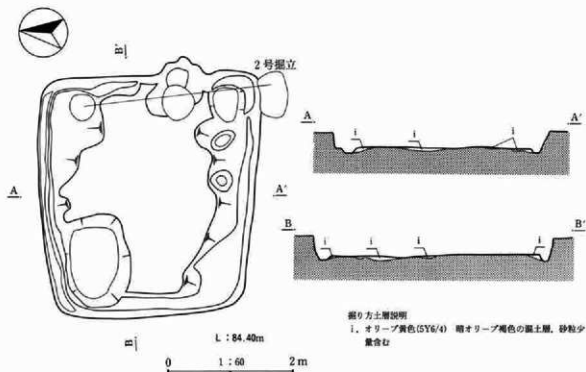
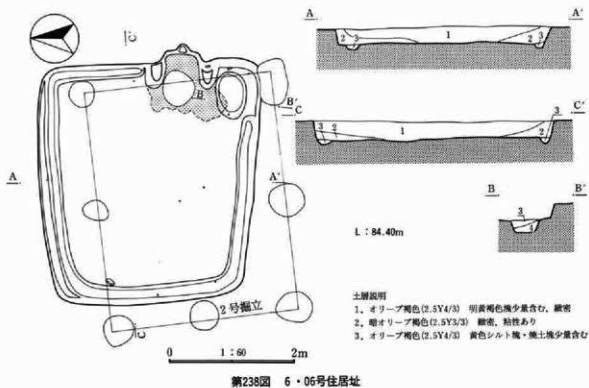
燃焼部	燃焼部は東壁中央や南寄りの壁を少々削り込み作られる。壁面は地山を掘り込んだ部分は焼き締まるが、袖部分の焼けは弱い。また後世の掘立柱建物の柱穴により、焚き口部分が攪乱を受けている。袖は地山塊主体の混土を貼り付けており、中間に焼土塊も混じる。火床面は攪乱を受けていない部分は灰の堆積が厚く、前方部の広がりが見られる。また奥壁寄りの灰層直上には、焼土塊が乗る。
袖	
火床面	

遺物の出土状態 (押図番号第242図 写真番号P L-144)

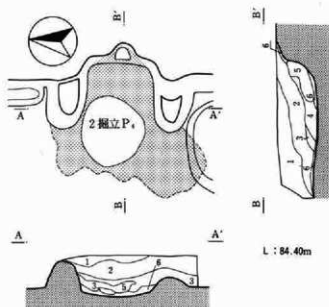
総点数 平面分布 層位分布	出土遺物総点数は311点を数え、出土遺物の平面分布は該住居址南半部に集中している。層位的には土層とオーバーラップさせて見ると、各層に遺物が混入しているのが理解される。遺物接合状況は掲載遺物のほとんどが接合線で結ばれ、土師器壺1148と土師器坏1140は竈を中心に対面の西壁にまで接合遺物が飛んでいるのが認められた。層位分布は土師器壺1149の最大25cmのレベル差を示しているが、他の遺物は同一層内のレベルに収まる傾向にある。出土状態はタイプAはなく、タイプBaが須恵器坏蓋1150で、タイプBが土師器壺1147と土師器壺1145である。
タイプ	

出土遺物 (押図番号第241図 写真番号P L-202・218)

図示遺物	図示した遺物は、土師器壺3、土師器坏2、土師器壺2、須恵器坏蓋1、須恵器高台付盤1、硯石1、金環1の11個体である。
土師器	土師器壺は胴部の膨らみが僅かに増し、頸部に斜位の寛削りが施される。土師器坏は丸底で体部が内湾するタイプで、法量が16cm (1140) と13cm (1144) の2種類ある。土師器壺は①体部と口縁部を画す稜線をもつ1143と②体部の弱い稜線から外湾する口縁部に至る1145に分けられる。
須恵器	須恵器坏蓋は精選された胎土をもち (6・02号住の高台付境1046と同質)、水平な天井部から緩やかに湾曲して口縁部に至り、つまみだした短い返りがつく。



IV 遺跡の調査

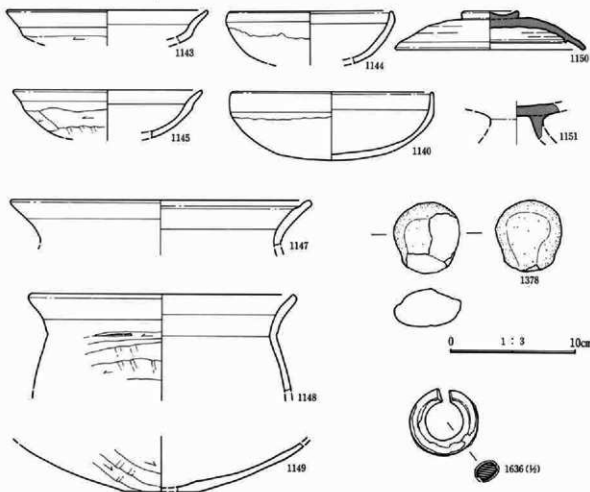


土層説明

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) (住居址埋没土1層)
2. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 焼土粒少量含む。細粒。固い
3. 黄褐色(2.5Y5/4) 焼土粒少量含む。緻密で固い
4. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 焼土粒多量を含む。細粒
5. 明赤褐色(5YR5/6) 焼土塊の硬土層
6. 暗灰黄色(2.5Y5/2) 灰層。焼土粒含む

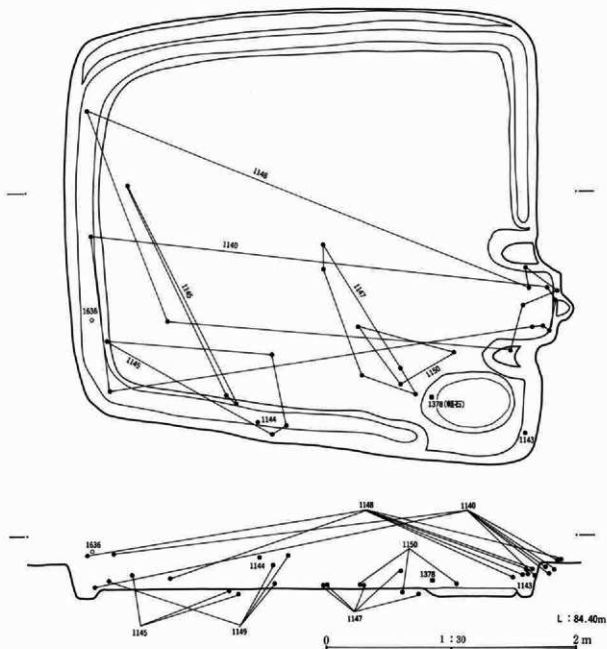
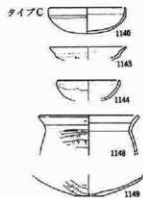
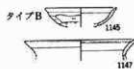
第240図 6・06号住居址竪

0 1 : 60 1 m



第241図 6・06号住居址出土遺物

4 下大塚北原地区(5B・6区)の遺構と遺物



第242図 6・06号住居址接合分布図

#### IV 遺跡の調査

##### 6・07号住居址

遺 構 (押図番号第243・244図 写真番号P L-145)

絶対的位置	本住居址は遺跡地の南半中央部に位置し、A14・47グリッドに所在する。周囲には南1mに
相対的位置	05号住、北西コーナーを切り合う形で08号住、南東コーナーを切り合せて16号独立が存在する。確
確認面	認面の標高は84.60mで、床面高は84.55mを測る。
規模・形態	規模は東西3.72m・南北3.02m、面積12.61㎡で、平面形態は東西軸：南北軸の比が1.23:1の縦
主軸方位	長長方形を呈している。主軸方位はN-73°-Eを示す。なにしろ10cm足らずの浅い住居址なので、
壁・覆土	壁の状況については不明な部分が多い。覆土はシルト質の暗オリーブ褐色土1層で、下層の鉄分
床・貼床	凝集層の存在から05号住の覆土との類似が指摘できる。
掘り方	床面の状態はフラットで貼床が施され、南東コーナーに楕円形の貯蔵穴が穿たれている。貼床
	の構成土は、シルト質の暗灰黄色土で鉄分の凝集が見られる。掘り方は西壁から南西コーナーに
	かけて、壁に張り付いて幅80cm、長さ2mの落ち込みが検出された。

竈 (押図番号第245図 写真番号P L-145)

燃焼部	燃焼部は東壁中央部を掘り込み作られる。壁面はやや傾斜して立ち上がる。壁面の焼けは上方
火床面	が焼き締まる。火床面は床面よりやや下がり、灰混じりの層が見られる。直上に須恵器坏片等が
	出土している。

遺物の出土状態 (押図番号第247図 写真番号P L-145)

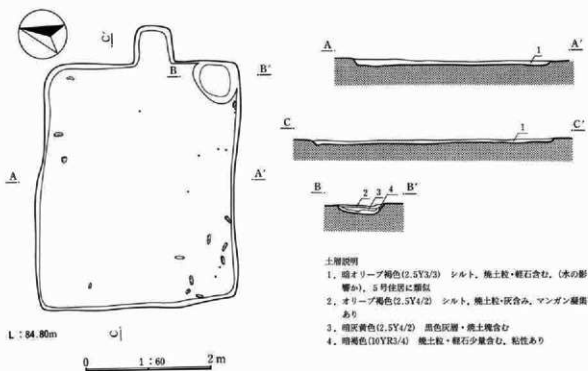
平面分布	出土遺物総点数は668点と比較的多い数量を記録し、遺物の平面分布は西壁から南壁沿いに密集
層位分布	している。層位的には該住居址が浅いゆえか床面直上の遺物が多く見られるが、その在り方は小
	破片が大部分を占め、タイプAの認定には至らない。接合遺物の平面分布は接合線の長く引かれ
	る遺物が土師器壺や須恵器坏蓋に多く、土師器坏や須恵器坏は単体か接合線の短いものが多い。
タイプ	出土レベルを見ても、それほど大きくレベル差の認められる接合遺物はない。タイプAは土師器
	坏1341のみで、タイプBaに土師器壺1354、1356、土師器坏1339、1340、1342、1344があげられ、
	他はタイプBである。

出土遺物 (押図番号第246図 写真番号P L-202・218)

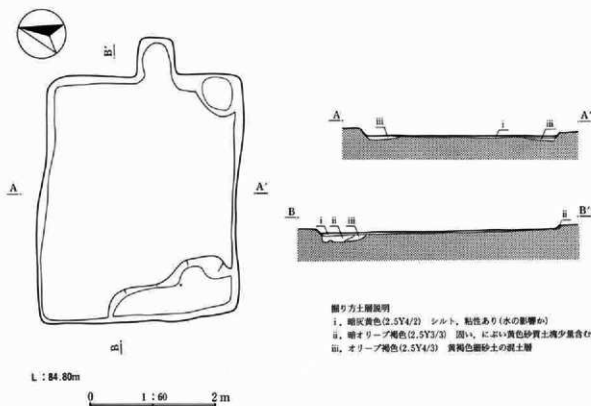
図示遺物	図示した遺物は、土師器壺2、土師器坏2、土師器坏5、須恵器坏2、須恵器坏蓋3、刀子
	2の16個体である。
土師器	土師器壺1356は、丸味をもつ胴部上位から直立して上位が短く外反するコの字口縁で、外反は
	弱い。土師器坏1345は、器内の厚い体部が湾曲して口縁部に至り外反する。土師器坏は3種類に
	分けられる。①平底の体部から外反する体部に至り、底部に篋削り、体部に指頭成形後無でを施
	す(1340、1341、1342)。②若干丸底気味の底部から、直線的に外反する体部に至る(1339)。③
	丸底の底部から屈曲して外反する体部をもち、体部の大半に横撫でを施す(1344)がある。
須恵器	須恵器坏は回転永切り底部から直線的に体部が立ち、ロクロ目が顕著である(1347、1348)。須
	恵器坏蓋は、天井部が水平な1350と水平な天井部から緩やかに口縁部に至る1351と直線的な体部
	の1352がある。また1350にはリング状のつまみの跡があり、1352にはボタン状のつまみが付され
	ている。



4 下大塚北原地区(5B・6区)の遺構と遺物

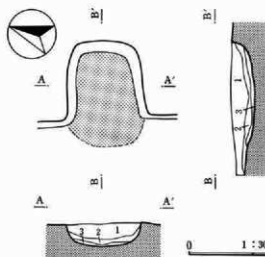


第243図 6・07号住居址



第244図 6・07号住居址掘り方

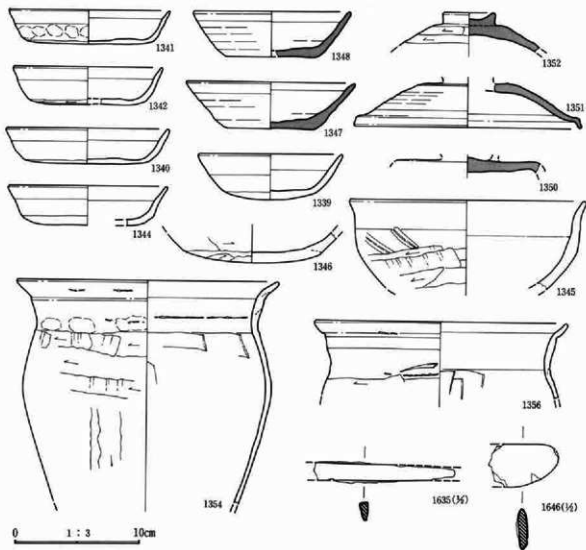
IV 遺跡の調査



土層説明

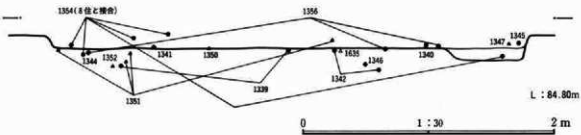
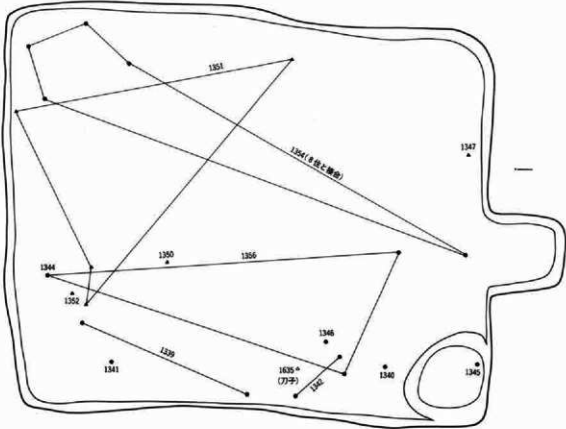
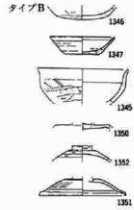
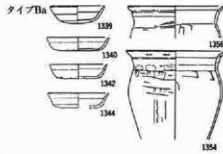
1. 暗オリーブ褐色(2.5Y4/6) (住居址埋没土1層)
2. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 焼土塊・黒色灰含む。粘性あり
3. 暗褐色(10YR2/3) 灰層。シルト・焼土粒含む。固い

第245図 6・07号住居址竈



第246図 6・07号住居址出土遺物

4 下大塚北原地区 (5B・6区) の遺構と遺物



第247図 6・07号住居址接合分布図

#### IV 遺跡の調査

##### 6・08号住居址

遺構 (挿図番号第248・249図 写真番号P L-146)

**絶対的位置  
確認面** 本住居址は07号住と南東コーナーで切り合い、A14・47グリッドに位置している。確認面の標高は84.70mと若干高く、床面高は84.40mである。

**規模・形態** 規模は東西2.82m・南北3.20m、面積11.60㎡を示し、平面形態は東西軸：南北軸の比が1：1.13の横長長方形のプランを呈する。主軸方位はN-68°-Eで、07号住よりも若干北へ振れている。

**主軸方位** 壁は南壁を除いて80°~90°のシャープな立ち上がりを見せるが、南壁は70°である。覆土は3層に分かれ、第3層のシルト質暗オリーブ褐色土は流入土であり、第2層のオリーブ褐色土も北東方向からの流入の可能性の強い土層で、第1層は07号住の覆土下層と同様の鉄分の凝集層が見られ漏水状態のあったことが窺える。

**壁・覆土** 壁は南壁を除いて80°~90°のシャープな立ち上がりを見せるが、南壁は70°である。覆土は3層に分かれ、第3層のシルト質暗オリーブ褐色土は流入土であり、第2層のオリーブ褐色土も北東方向からの流入の可能性の強い土層で、第1層は07号住の覆土下層と同様の鉄分の凝集層が見られ漏水状態のあったことが窺える。

**床・掘り方** 床面はフラットで貼床の施された形跡は無く、ただ掘り方は東壁から北壁にかけて周溝より僅かに幅の広い掘り込みが巡り、北西コーナーに不整形の掘り込みが確認された。

竈 (挿図番号第250図 写真番号P L-146)

**燃焼部** 燃焼部は東壁中央南寄り部分を掘り込み作られる。南壁は07号住居により壊されている。壁面はレンガ状に焼き締まり、垂直に立ち上がる。左焚き口部は方形のえぐり込みがあり、石でも埋置されていた可能性がある。火床面は床面と同レベルであり、奥壁に向かって緩やかに上がる。中央部から奥壁にかけて焼土層が乗り、左壁際には焼土がサンドイッチ状に堆積しているのが確認でき、壁及び天井部の崩落土と考えられる。

**火床面** 火床面は床面と同レベルであり、奥壁に向かって緩やかに上がる。中央部から奥壁にかけて焼土層が乗り、左壁際には焼土がサンドイッチ状に堆積しているのが確認でき、壁及び天井部の崩落土と考えられる。

遺物の出土状態 (挿図番号第252図 写真番号P L-146・218)

**総点数  
平面分布  
層位分布** 出土遺物総点数は340点を数え、遺物はほぼ住居址全面に散布しているが、北東隅に濃い密度で分布している。しかしその多くは小破片が主で、層位的には床直遺物と第1層混入遺物に大別される。

**接合分布** 接合分布を見ると、土師器壺1161の接合線が広く長く引かれ、竈内出土遺物である土師器壺1354は重複住居址である07号住の土師器壺1356との接合関係にあることが理解される。1354は竈内から07号住内へ流れ込んだものと推定される。タイプAはなく、タイプBaが、土師器杯1159、須恵器杯1152である。

**タイプ** 竈内から07号住内へ流れ込んだものと推定される。タイプAはなく、タイプBaが、土師器杯1159、須恵器杯1152である。

出土遺物 (挿図番号第251図 写真番号P L-202・218)

**図示遺物** 図示した遺物は、土師器壺1、土師器杯2、須恵器壺破片1、須恵器杯2、滑石製品1、刺片1の8個体である。

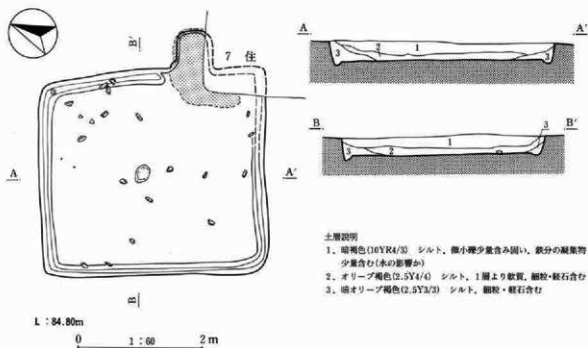
**土師器** 土師器杯は平底の底部から屈曲して外反する体部に至り、底部に寛削り、体部に指頭成形後撫でを施すもの(1160)と器内の厚い丸底気味の底部から直線的に外反する体部に至り、底部と体部に寛削りを施すもの(1159)がある。

**須恵器** 須恵器杯は体部が直線的に外反するもの(1154)と体部が丸味をもって立ち上がるもの(1152)がある。

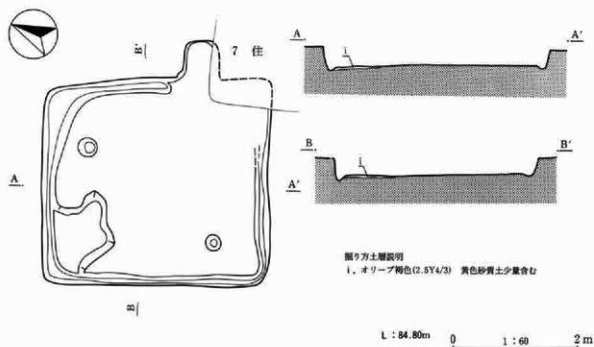
#### 所見

05号住で前述した漏水層を問題にすると、05号住は漏水層を切り込み、07号住は漏水層が床面を覆い、08号住覆土の第1層が漏水層である。以上のことから08号住→07号住→05号住となる。

4 下大塚北原地区 (5 B・6区) の遺構と遺物

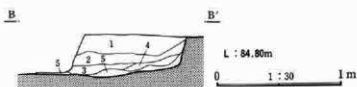
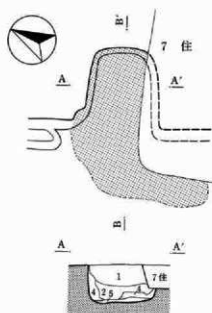


第248図 6・08号住居址



第249図 6・08号住居址掘り方

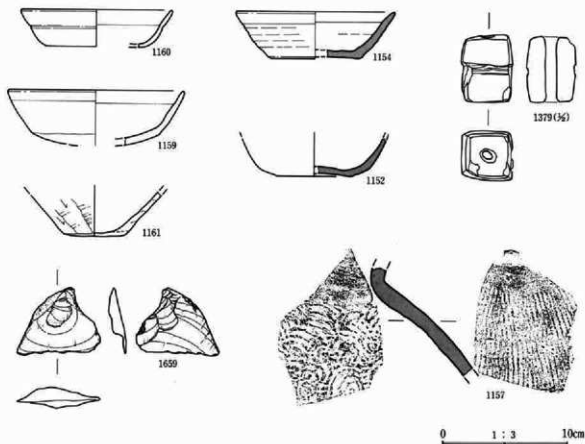
IV 遺跡の調査



土層説明

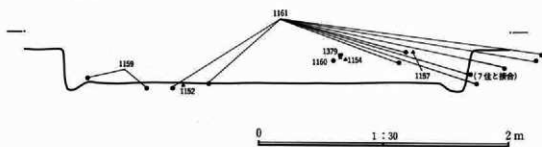
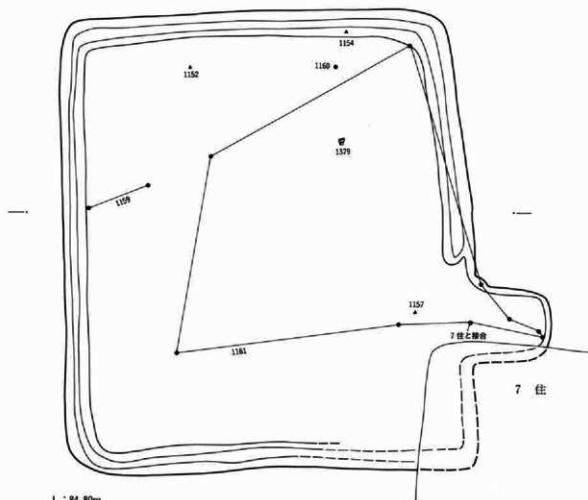
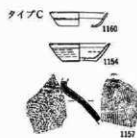
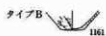
1. 暗褐色(10YR4/3) (住居址埋没土1層)
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 軽石・砂利・焼土粒・マンガン・酸化鉄少量含む
3. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 2層より軽石・砂利の混入少量
4. 明赤褐色(5YR5/6) 焼土塊の混土層
5. 暗灰黄色(2.5Y5/2) 灰層。焼土塊多量に含む

第250図 6・08号住居址竈



第251図 6・08号住居址出土遺物

4 下大塚北原地区（5B・6区）の遺構と遺物



0 1 : 30 2 m

第252図 6・08号住居址接合分布図

#### IV 遺跡の調査

##### 6・09号住居址

遺 構 (挿図番号第253図 写真番号P L-147)

絶対的位置 本住居址は遺跡地の北半部で、1号掘立の西南2mに位置し、A13・86、87、96、97の4グリッドにまたがって所在する。周辺には10m東に06号住、4m南東に04号住が存在する。確認面の標高は84.40mで、床面高は84.00mを測る。

規模・形態 規模は東西4.98m・南北3.78m、面積20.65㎡と東西に長く、平面形態は東西軸：南北軸の比が1.31：1の縦長長方形プランを呈する。主軸方位はN-87°-Eを示し、ほぼ真東を向いている。壁は80°～90°明瞭な立ち上がりを見せ、壁高は35～40cmである。覆土は5層に分層され、オーリーブ褐色土の第1、2層はレンズ状堆積の住居址内覆土で、三角堆積の第3層は流入土であろう。また第4、5層は電の崩落土と思われる。

床 床面は貼床を施しておらず地床面で、床面上には南東コーナーに不整形円形の貯蔵穴が穿たれている。また2基の床下土坑が北東隅に並んで検出された。

竈 (挿図番号第254・255図 写真番号P L-147)

燃焼部 燃焼部は東壁中央やや南寄りの壁を掘り込み作られる。壁面は垂直に立ち上がり、レンガ状に焼き締まっている。覆土上層はかなり乱れた層である。袖は焚き口部分に僅かに地山を掘り残して作られる。火床面は床面よりやや下がり、灰の堆積は竈前に広がる。煙道部は崩落せずに残り、住居確認時には焼土面が露出していた。掘り方は方形を呈し、側壁及び天井部はレンガ状に焼けている。煙道口は奥壁中央からややずれた位置にあり、煙り出口とを結ぶため湾曲して掘られている。

遺物の出土状態 (挿図番号第257図 写真番号P L-147)

総点数 出土遺物総点数は490点を数え、出土遺物は平面的には住居址全体に散在している。層位的には20cm前後浮いている第1層に属する遺物群と、床面に近い第2層に含まれる遺物群に大別される。接合分布 遺物の接合分布状況は比較的接合線の長く引かれる接合遺物が多く、該住居址では土師器環(1163、1165、1166、1168)が大きな散乱状況を示しているのが特徴的である。出土遺物レベルは須恵器破片が例外的に25cm程のレベル差を持つほかは、ほぼ同レベルで同一層内の接合を示している。タイプAは土師器環1163、1164、土師器台付甕1169、須恵器環1171で、タイプBaは土師器環1165があげられ、タイプBは土師器環1168と須恵器甕1174である。

出土遺物 (挿図番号第256図 写真番号P L-202・203・219)

図示遺物 図示しえた遺物は、土師器甕1、土師器台付甕1、土師器環6、須恵器破片2、須恵器甕2、鉄鏝1の13個体である。

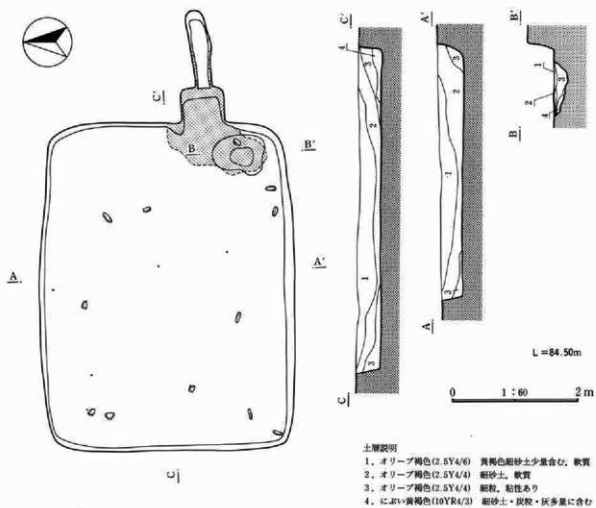
土師器 土師器台付甕1169は、胴部が球状を呈し口縁部の反りは小さい。土師器環は口縁部の形態から①口縁の直立するもの(1163、1166、1168)と②口縁部が短く内傾するもの(1164、1165、1167)の2タイプに分かれる。須恵器甕は器内の厚い底部から丸味を帯びて外反する体部に至り、底部に回転磨削りが施される。

##### 所 見

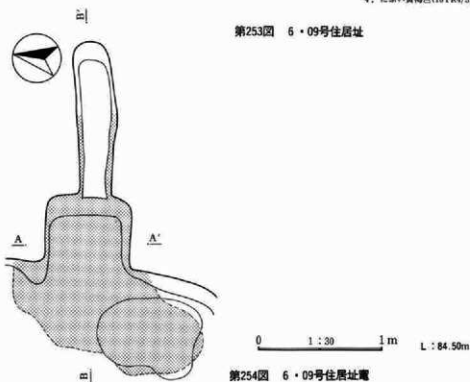
タイプAの遺棄遺物と目される遺物の外は、床に近い第2層遺物はほぼ廃棄遺物と解され、第1層遺物は小破片の多い流入・廃棄遺物であると思われる。



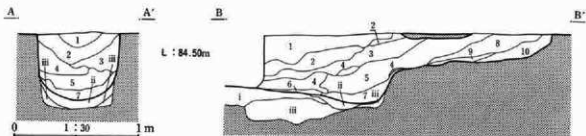
4 下大塚北原地区（5B・6区）の遺構と遺物



第253図 6・09号住居址



IV 遺跡の調査



土層説明

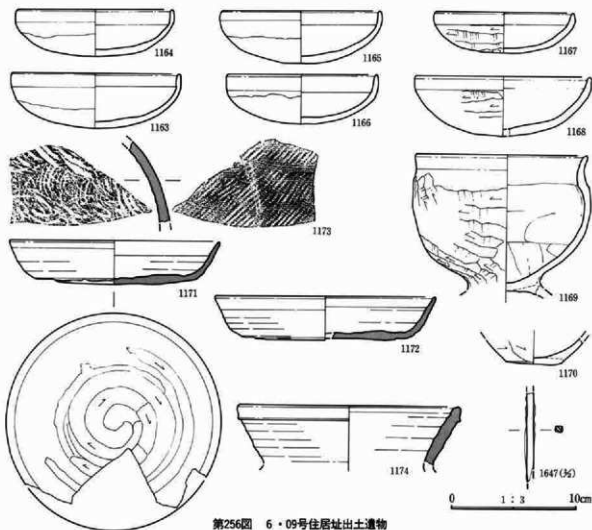
1. オリーブ褐色(2.5Y4/6) (住居址埋没土1層)
2. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 黄褐色細砂土・炭化物粒・焼土塊少量含む
3. 黒褐色(2.5Y3/2) 濃い黄色細砂土少量含む
4. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 細砂土・焼土塊少量含む
5. 暗灰黄色(2.5Y4/2) オリーブ黄色と灰土。緻密、焼土塊・灰少量含む
6. 黒褐色(2.5Y3/1) 灰層
7. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 細砂土・焼土塊多量に含む。灰少量含む

8. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 灰土・黄褐色砂粒少量含む
9. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 灰・焼土塊少量含む。緻密
10. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 緻密で固い。焼土塊含む

掘り方土層説明

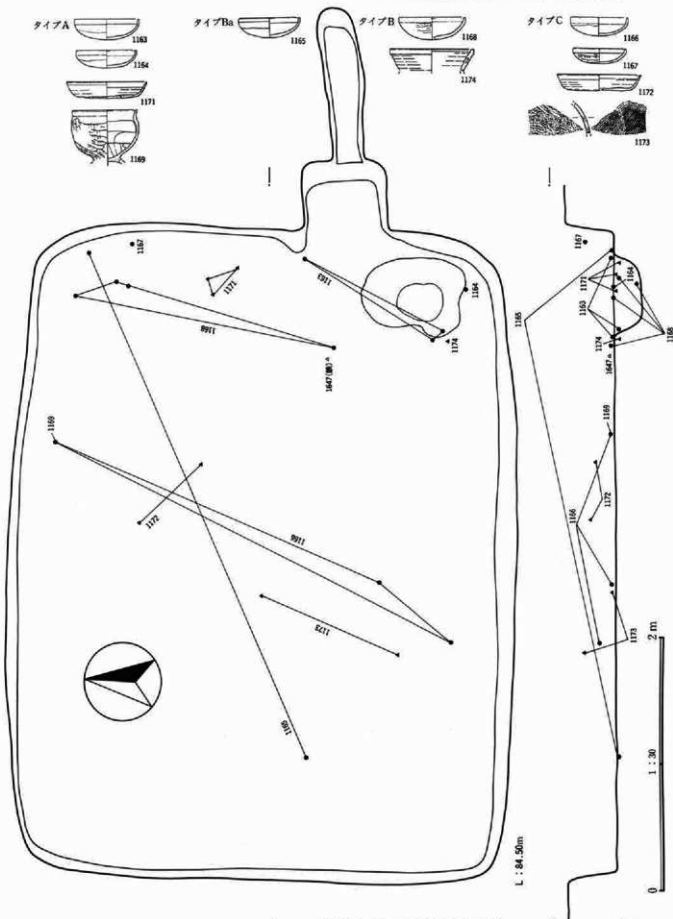
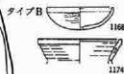
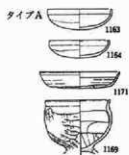
- i. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 細砂土。オリーブ黄色塊・炭分沈着層少量含む
- ii. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 細砂土。焼土粒少量含む
- iii. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 濃い黄色塊の張土層。砂粒多量に含む

第255図 6・09号住居址竈



第256図 6・09号住居址出土遺物

4 下大塚北原地区（5B・6区）の遺構と遺物



第257図 6・09号住居址接合分布図

#### IV 遺跡の調査

##### 6・10号住居址

##### 遺 構 (挿図番号第258図 写真番号P L-148)

**絶対的位置** 本住居址は遺跡地のほぼ中央部東寄りに位置し、A14・07, 17グリッドに所在する。2 mを隔ててすぐ北に04号住、04号住と該住居址にまたがって重複する08号掘立、そして南2 mに11号掘立が近接して存在する。確認面の標高は84.60mで、床面高は84.35mを測る。

**規模・形態** 規模は東西3.16m・南北3.06m、面積10.73m<sup>2</sup>で、平面形態は東西軸：南北軸の比が1.03：1の

**主軸方位** 正方形プランを意図している。主軸方位はN-48°-Eを示し、01号住とほぼ同方向を向いている。

**壁・覆土** 壁は平均85°の角度で立ち上がり、壁高は25cmである。覆土は5層に分けられ、オリープ褐色土の第1, 2, 3層はレンズ状堆積を示し、第5, 6層は電構築土に係わるものと思われる。

**床** 床面は地床面で貼床は施されておらず、若干凹凸が感じられる。そして床面上には南東コーナーに円形の貯蔵穴が穿たれている。

##### 竈 (挿図番号第259図 写真番号P L-148)

**燃焼部** 燃焼部は東壁中央部住居内に作られ、地山掘り残しの袖を持つ。壁面はやや斜めに立ち上がり、

**火床面** 焼けはやや弱い。火床面は袖面と同レベルであり、薄い灰の堆積が見られる。直上には焼土塊主体の層が奥壁から焚き口に向かい堆積し、天井部及び側壁の崩落と考えられる。煙道部へは小さく立ち上がり、水平方向に伸びる。壁面の焼けは弱い。

**煙道部** 煙道部へは小さく立ち上がり、水平方向に伸びる。壁面の焼けは弱い。

##### 遺物の出土状態 (挿図番号第260・261図 写真番号P L-148)

**総点数** 出土遺物総点数は46点と非常に僅少で、平面的には住居址中央部に出土遺物の中心がある。層位的には第1層に含まれる床面から20cm以上浮いた遺物群が大半を占め、最下層の遺物は土師器環1175, 1176の2個体のみで、接合関係は見られず小破片が孤立して点在する様相が看取される。

**タイプ** タイプAは1176のみで、同タイプの1175は同一層に属するが若干の時間差が認められタイプCとした。また円面硯1177もタイプCに分類される。

##### 出土遺物 (挿図番号第260図 写真番号P L-203)

**図示遺物** 図示した遺物は、土師器環2と円面硯1, 円形叩き石1の4個体のみである。

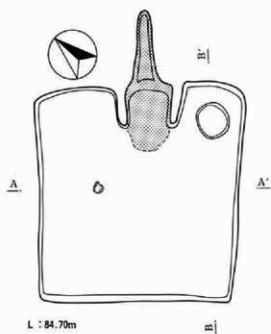
**土師器** 土師器環(1175, 1176)は、体部と口縁部を画する稜線をもつが、稜線の明らかなもの1176と弱いもの1175がある。

**円面硯** 円面硯1177は硯面の陸の周縁に堤がなく、稜線を描いて海に続くもので、無堤式と呼ばれる。台脚に長方形の透かしを複数施していたと考えられ、硯面は陸の面と外縁とがほぼ同じ高さである。また1177の特徴は、脚部の上部に突き出している脚の張り出しの大きさにある。

##### 所 見

該住居址は出土遺物が僅少なところに特色をもち、敢えて解釈すれば断絶後周囲には住居は営まれず、殆ど遺物廃棄が行われない状況があったものと推測できる。

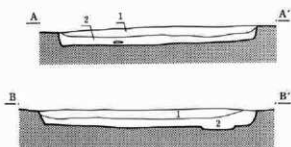
4 下大塚北原地区(5B・6区)の遺構と遺物



L : 84.70m

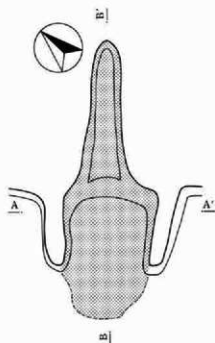
0 1 : 60 2m

第258図 6・10号住居址



土層説明

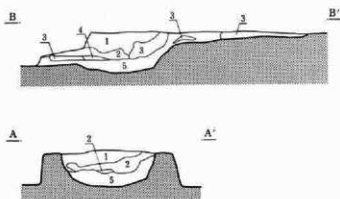
1. 褐色(10YR4/4) 軽石少量含む砂質土層、焼土・炭化物少量含む
2. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 軽石・焼土粒・炭粒少量含む、反黄色の粘性土含む(水の影響か)



L : 84.70m

0 1 : 30 1m

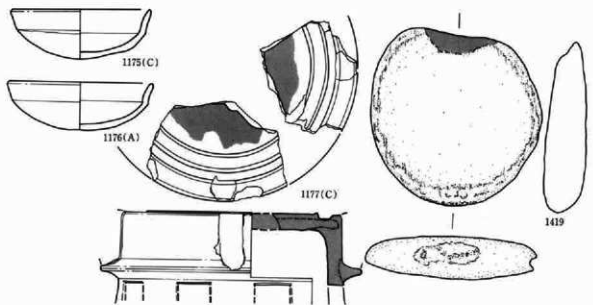
第259図 6・10号住居址竈



土層説明

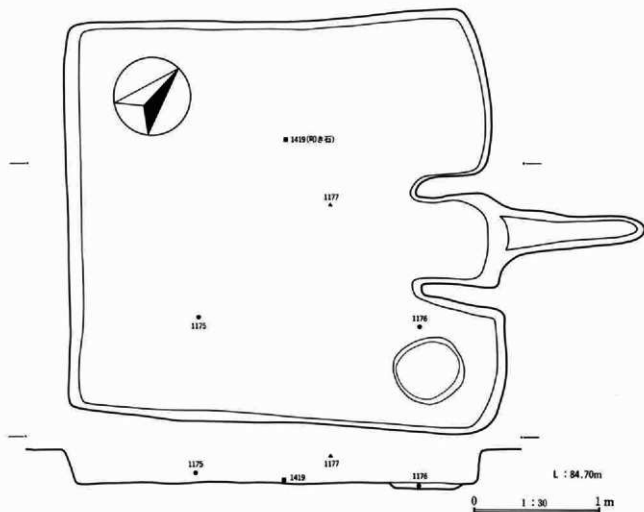
1. 褐色(10YR4/4) (住居址増設土1層)
2. 褐色(10YR4/6) 焼土粒塊・黄色微砂少量含む
3. 赤褐色(2.5YR4/6) 焼土層
4. 暗赤灰色(2.5YR3/1) 灰層に焼土塊・炭粒の凝土
5. 褐色(10YR4/6) 焼土粒塊・黄色微砂少量含む

IV 遺跡の調査



第260図 6・10号住居址出土遺物

0 1:3 10cm



第261図 6・10号住居址接合分布図

## 6・11号住居址

遺 構 (挿図番号第262・263図 写真番号P L-149)

本住居址は遺跡地の東縁中央部に位置し、住居址部分1/3を調査区外へ突き出している。所在するグリッドはA14・29, 39である。該住居址は1m北の12号住と南西1mの02, 03号住に挟まれるようにして存在している。確認面の標高は84.50mで、床面高は84.40mである。

規模は推定東西5.82m・南北6.66m、推定面積38.36㎡で、平面形態は正方形プランが推定される。主軸方位は壁の走行方向からはN-78°-Eが推定される。壁は上部からの削平が激しく僅か10cmが測れるのみでその様相は定かでない。覆土は5層に分けられ、暗オリーブ褐色土の第1, 2層は第1層が住居址内覆土で、第2層は三角堆積の流入土と考えられる。また第3, 4, 5層は新しい土坑の覆土である。

床面には僅かに貼床が施されておりフラットで、床面上には4基の柱穴が整然と穿たれている。また南壁の中央部に沿って、4基の小ピットが並列しており、入り口施設との関連が思考される。貼床の構成土は砂質分の多い黒褐色土で、該遺跡地の粘性の強い貼床土と比べると異質である。掘り方は西壁際にJ字状の掘り込みが認められ、土坑は南西コーナーと柱穴周辺に検出された。

## 電

電は調査区外に東電として存在したものと考えられる。

遺物の出土状態 (挿図番号第266図 写真番号P L-148)

出土遺物総点数は、該住居址の確認面が低い割りには1120点と非常に多く、その平面分布は住居址中央部よりも各壁際に濃密な分布が認められた。層位的には殆どの遺物が床面直上で検出されており、タイプAあるいはタイプBa, タイプBに該当する。1000点を越える出土遺物数にも拘わらず接合線の引ける遺物は6点のみで、孤立した小破片が多く、住居址廃絶時の遺物廃棄の状態が窺われる。出土遺物のレベルはほとんど床直と言ってよく、土師器埴1182が僅か5cmに満たないレベル差をもつに過ぎない。タイプAは土師器埴1178, 1179の2点で、タイプBaが須恵器埴1185, 1186, 1187で、タイプBは土師器埴1180, 須恵器埴1189, 1190, 須恵器埴1183, 須恵器埴1193, 1195, 1196, 1197, 1198である。

出土遺物 (挿図番号第264・265図 写真番号P L-203・218)

図示した遺物は、土師器埴5, 須恵器埴破片6, 須恵器埴3, 須恵器埴1, 須恵器埴蓋3の18個体である。

土師器埴は内面に暗文を有し、口縁部の先端が内傾した大形のもの(1182)と小形のものに分かれる。さらに小形のは、僅かな丸底から浅いが丸味を帯びて立ち上がる体部をもち、底部に篋削りを施す1178, 1179, 1180と平底気味の底部からほぼ直立する口縁をもつ1181に分類される。

須恵器埴の底部成形・調整手法に3タイプ認められる。①回転篋切り後篋撫で調整(1185)、②回転篋切り後篋削り調整(1187)、③回転糸切り後撫で調整(1186)、須恵器埴蓋は1188, 1190は緩やかな体部から垂直に折れる口縁を有し、1190はリング状紐をもつ。

## 所 見

床面直上まで削平を受けているため、遺棄遺物と廃絶直後の廃棄遺物が混在している。1120点にも及ぶ出土遺物数は激しい廃棄行為のありようを示している。

絶対的位置

相対的位置

確認面

規模・形態

主軸・壁

覆土

床

ピット

貼床

総点数

平面分布

層位分布

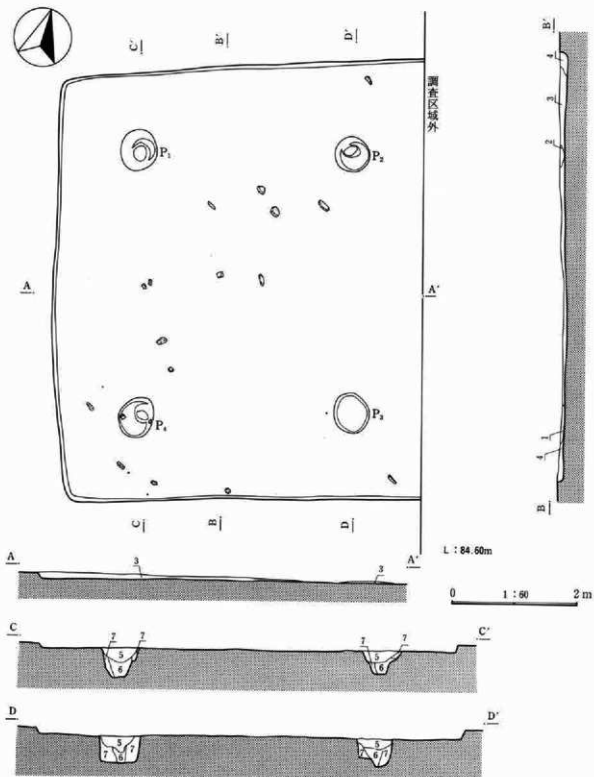
タイプ

図示遺物

土師器

須恵器

IV 遺跡の調査



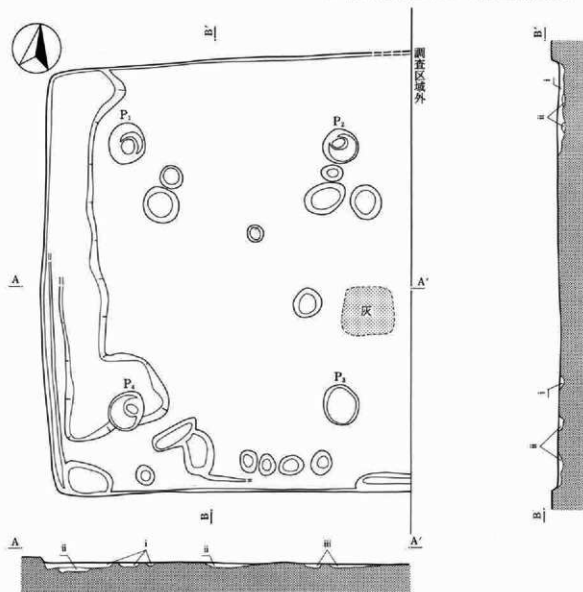
土層説明

1. 明褐色(7.5YR6/5) 黒色灰土主体、焼土粒含む
2. 黄灰色(2.5Y4/1) 砂質土、炭粒・焼土粒・炭粒少量含む
3. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 焼土粒・炭化物含む固い砂質ローム含む
4. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 粘質土、焼土粒・礫石少量含む

5. 褐色(10YR4/4) シルト質土、ローム粒ブロック・焼土粒含む、固い
6. 暗褐色(10YK3/3) 粘性土、砂粒少量含む、軟質
7. 暗褐色(10YK3/3) 砂質土、砂質ローム土少量含む

第262図 6・11号住居址





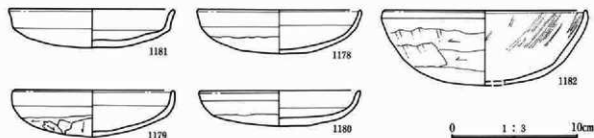
L : 84.60m

0 1 : 60 2m

掘り方土層説明

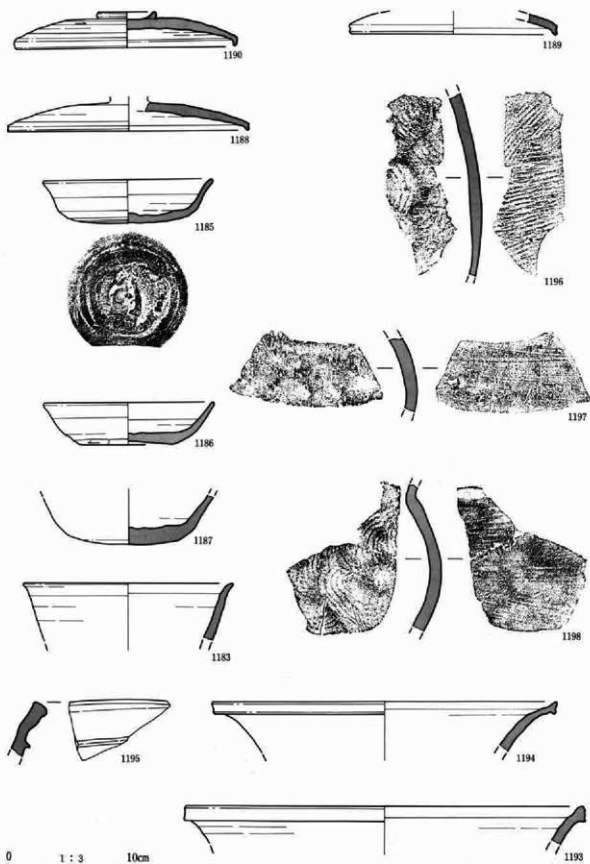
- i. 黄褐色(2.5V5/4) 細砂主体、土層片少量含む
- ii. 黒褐色(2.5V3/2) 中や緻密
- iii. 黒褐色(2.5V3/2) 黄褐色細砂土・土層片少量含む

第253図 6・11号住居址掘り方



第264図 6・11号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第265図 6・11号住居址出土遺物





## 6・12号住居址

遺 構 (押図番号第267図 写真番号P L-149)

本住居址は11号住の北1mに位置し、住居址の2/3を調査区外へ突出している。所在するグリッドはA14・19, 29である。11号住とは南1mに近接して立地している。確認面の標高は84.50mで、床面高は84.25mを測る。

絶対的位置  
相対的位置  
確認面

規模は南北軸のみ測定可能で4.28mを測り、平面形態は不明である。主軸方位は推定でN-6°-Wを示すものと思われる。壁は西壁と南壁で80°以上の角度で立ち上がっているが、北壁は45°の緩やかな立ち上がりである。不明である。覆土は第1層がシルト質の暗灰黄色土で住居址内覆土と考えられ、第2層はオリーブ褐色の流入土である。

規模・形態  
主軸・壁  
覆土

床面はフラットで貼床が施され、床面上には柱穴が2基としっかりした周溝が巡っている。また焼土が細長く西壁に沿って広がっていた。灰層との状態から焼失住居と考えられる。掘り方は北壁に沿って僅かに掘り窪められている。その施工の様相は11号住のやり方に類似している。

床  
掘り方

遺物の出土状態 (押図番号第268・269図 写真番号P L-148)

出土遺物総点数は208点を数え、住居址の2/3が調査区外にある遺構としては妥当な数量といえる。また出土遺物量に対する須恵器の割合は24%にのぼる。遺物の平面分布は住居址全体に及んでいるが、小破片が多数を占めるために遺物量に比較しては掲載遺物が少ない。層位的には床から10cm未満のレベルの遺物が多く、床面密着の遺物もかなり検出された。接合が確認されたのは3個体のみで、破片の多さが印象的である。接合遺物の出土レベルは須恵器壺1205の30cmのレベル差が最大で、須恵器壺破片の移動の大きさを真付けている。タイプAは須恵器環1201で、タイプBaが土師器環1199, 1200, 須恵器環1202で、残りはタイプCである。

総点数  
平面分布  
層位分布  
接合遺物

出土遺物 (押図番号第268図 写真番号P L-203・219)

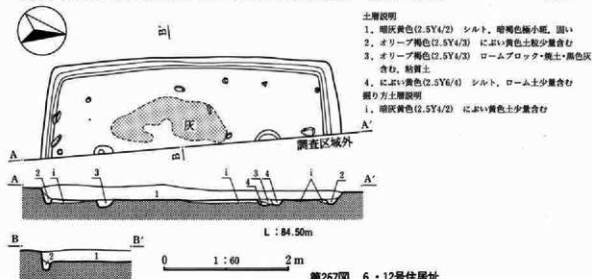
図示した遺物は、土師器環2, 須恵器壺1, 須恵器環2, 須恵器環蓋2, 石製紡錘車1, 鉄製品1の9個体である。

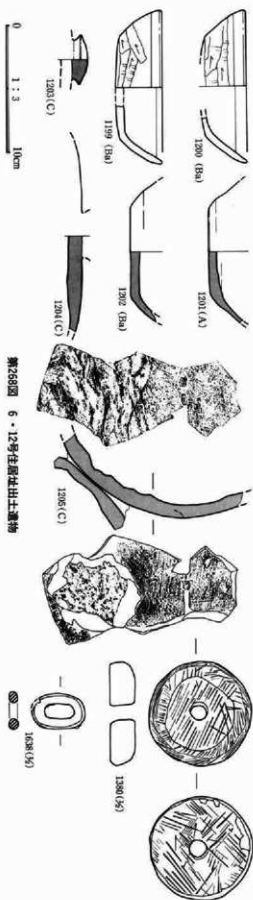
図示遺物  
土師器

土師器環は平底の底部から丸味をもって外反する体部に至り、体部の大半には寛削りが施される(1199, 1200)。

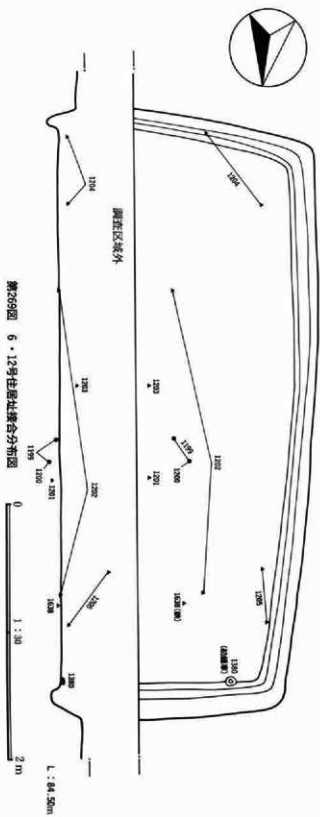
須恵器環は底部回転糸切り成形が認められるが、摩耗が激しい(1201, 1202)。

須恵器





第268図 6・12号住居址出土遺物



第269図 6・12号住居址遺物分布図

## 6・13号住居址

遺 構 (挿図番号第270図 写真番号P L-150)

本住居址は集落の西北端に位置し、A13・84, 85グリッドに所在する。09号住の10m西で、15号住の9m北に立地し、現象面的には他の住居址から孤絶しているように見える。確認面の標高は84.55mで、床面高は84.45mを測る。

規模は東西2.52m・南北3.58m、面積9.91m<sup>2</sup>で、平面形態は東西軸：南北軸の比が1：1.42の横長方形プランを呈しているが、トレンチによって南西コーナーを欠失している。主軸方位はN-94°-Eを指している。壁は壁高10cm程でその立ち上がり方は不明である。覆土は住居址内覆土のシルト質オリブ褐色土1層のみである。床面は地床面で貼床はなく、床面上の南西コーナーに不整形の貯蔵穴が穿たれている。

竈 (挿図番号第271・272図 写真番号P L-149)

燃焼部は東壁南寄りの壁を掘り込み作られる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、焼けは弱い。覆土は乱れ、中間に焼土塊を含む層があり、天井崩落土と考えられる。火床面は奥壁に向かってやや窪む。竈前に灰面の広がりが見られ、土器片が多く出土している。

遺物の出土状態 (挿図番号第273・274図)

取り上げ遺物は46点を数え、出土遺物総点数はさらに数量を増すものと思われるが、データ不足で確かでない。平面分布は貯蔵穴を中心とした南壁際に偏っており、層的にもそれぞれのバラツキは認められない。接合遺物は竈内と貯蔵穴周辺遺物で、いずれもタイプBaとタイプBに分類される。タイプAはなく、タイプBaが須恵器環1207, 1209, 須恵器高台付埴1206, 須恵器壺1213で、タイプBが須恵器環1208である。

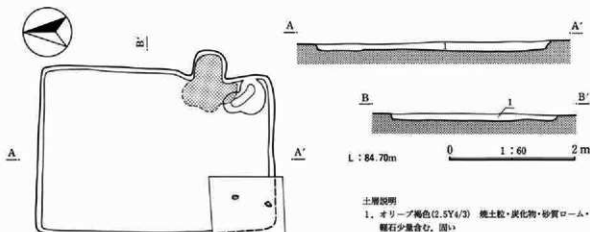
出土遺物 (挿図番号第273図)

図示した遺物は、須恵器高台付埴1, 須恵器環3, 須恵器壺1の5個体である。

須恵器環は底径が小さく口縁部が外反するタイプで、底部回転糸切り未調整である。

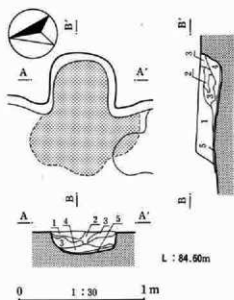
所 見

該住居址も05号住と同様に滞水層と思われるシルト質オリブ褐色土を掘り込んで形成されており、9世紀前半と推定される洪水後の所産と理解される。



第270図 6・13号住居址

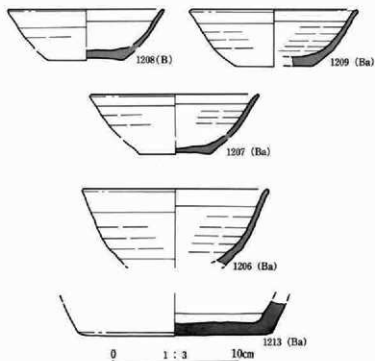
#### IV 遺跡の調査



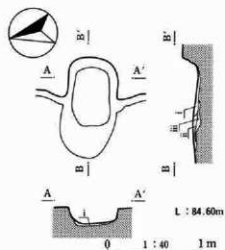
##### 土層説明

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) (住居址埋没土1層)
2. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 粘性土、軽石・焼土粒少量含む
3. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 焼土境の強土層
4. にじみ黄色(2.5Y6/4) 焼土小塊・灰・炭粒含む、緻密で固い
5. 暗灰黄色(2.5Y5/2) 灰層

第271図 6・13号住居址竈



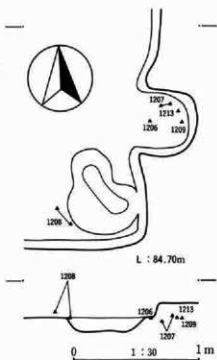
第273図 6・13号住居址出土遺物



##### 掘り方土層説明

- i. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 焼土粒少量含む、固い
- ii. 黒褐色(2.5Y3/2) 黒色灰含む
- iii. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 軽石少量含む

第272図 6・13号住居址竈掘り方



第274図 6・13号住居址接合分布図



## 6・14号住居址

遺 構 (挿図番号第275・276図 写真番号P L-150)

本住居址は遺跡地の南西コーナー附近に位置し、A14・58, 68グリッドに所在する。周囲には絶対的位置  
西5mに05号住、南3mに16号住が存在する。確認面の標高は84.85mで、床面高は84.75mと床  
面直上まで削平を受け、かつ北壁をトレンチによって欠失している。相対的位置  
確認面

規模は東西2.30mを測れるのみで、平面形態も横長方形プランの可能性が高いが定かでない。規模・形態  
主軸方位はN-85°-Eである。壁については情報が少なくコメントできない。覆土はオリーブ褐色  
土1層である。主軸・覆土

床面は貼床の施された形跡は無く、地山と掘り方土の床面である。掘り方は南東コーナーか  
床  
ら南壁に沿って幅90cm、長さ170cmの隅丸方形の掘り込みと、小ピットが南東・南西コーナー附近  
ピット  
に検出された。

竈 (挿図番号第277図 写真番号P L-151)

燃焼部は東壁ほぼ中央部を掘り込んで作られる。壁面の焼けは上部のみ見られる。火床面は床  
燃焼部  
面より低く、レンズ状に窪む。灰の堆積が薄く、竈前に灰が少々広がる。直上より土器片・礫が  
火床面  
出土した。

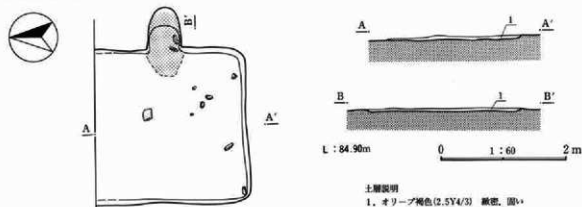
遺物の出土状態 (挿図番号第279図)

該住居址は床面直上まで削平を受けていたため、出土遺物総点数は70点と僅かであるが、その  
総点数  
殆どが床面密着の状態で見出されている。平面的には竈内及び南壁周辺に分布が見られる。平面分布  
掲載  
遺物に接合関係はなく、竈内遺物として土師器甕1216, 1217があげられる。また須恵器播鉢が南  
西コーナー附近で確認されている。出土状態は全て床面密着であるが破片であるのでタイプBと  
タイプ  
認定した。

出土遺物 (挿図番号第278図 写真番号P L-203・219)

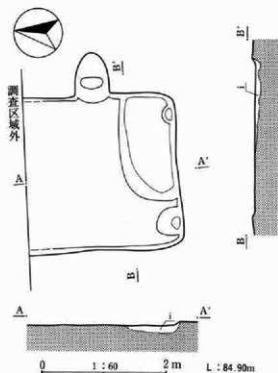
図示した遺物は、土師器甕2, 須恵器坏蓋1, 須恵器播鉢1の4個体と僅かである。図示遺物  
土師器  
土師器甕1216は胴部の膨らみが小さく、口縁部上位と下位の屈曲が弱くなってコの字口縁が崩  
れ始める。

須恵器播鉢1215は、堅く焼き締められて精選された胎土が使用されている。また底部の刺突痕  
須恵器  
に特徴をもつ。



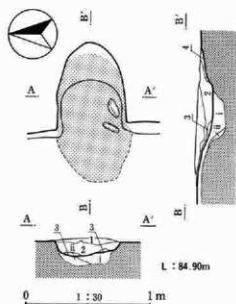
第275図 6・14号住居址

IV 遺跡の調査



掘り方土層説明

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y4/3) 緻密、炭粒・焼土炭少量含む



土層説明

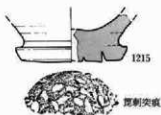
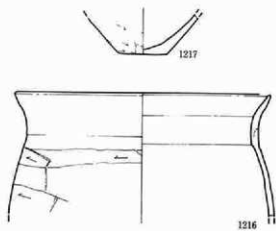
1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 緻密で固い、炭粒・焼土炭少量含む
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 焼土炭・炭粒少量含む
3. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 焼土炭・炭粒・灰少量含む、灰層
4. 明黄褐色(2.5Y6/6) (電機壁土の崩落土e)

掘り方土層説明

- i. オリーブ褐色(2.5Y4/3) (住居址埋没土1層)
- ii. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 砂粒少量含む

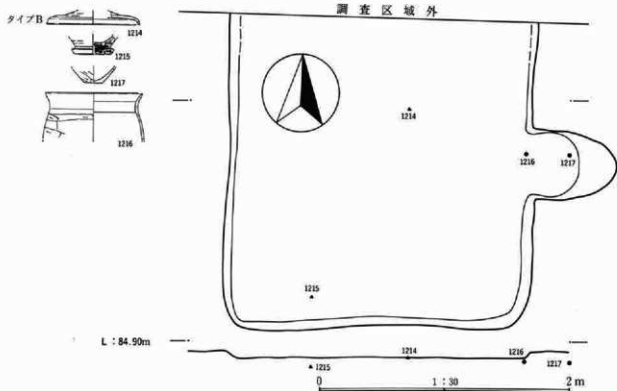
第276図 6・14号住居址掘り方

第277図 6・14号住居址掘



0 1 : 3 10cm

第278図 6・14号住居址出土遺物



第279図 6・14号住居址接合分布図

## 6・15号住居址

遺 構 (挿図番号第280図 写真番号P L-151)

本住居址は、集落の西の外れといった趣のA14・05グリッドに所在する。近接する住居址は9m北に13号住、8m北東に09号住が存在する。確認面の標高は84.55mで、床面高は84.30mを測る。

規模は東西2.22m・南北1.90m、面積5.11㎡で、平面形態は東西軸：南北軸の比が1.16：1の横長長方形を呈している。主軸方位はN-77°-Eを指している。壁は覆土と地山の判別が困難ではっきりとは確認出来なかった。覆土はオリーブ褐色土で周囲の地山土と極めて近似している。

床面の検出も困難であったが、床面は地床面であろうと思われる。

竈 (挿図番号第281図 写真番号P L-151)

燃焼部は東壁中央部南寄りの壁面を掘り込み作られる。壁面は垂直に立ち上がり、上半部に焼けが見られる。覆土中間右壁際に焼土層がサンドイッチされ、傾壁崩落土と考えられる。火床面は床面とほぼ同レベルであり、薄く灰が見られる。焚き口部には、灰の掻き出しによるレンズ状の窪みがある。

遺物の出土状態 (挿図番号第280・282図)

出土遺物総点数は26点と6区の中では最少で、殆どの遺物がかなり浮いた状態で検出された。

掲載遺物の2点の土師器も流入したものと認識され、タイプCと判断された。

絶対的位置  
相対的位置  
確認面規模・形態  
主軸・壁  
覆土  
床燃焼部  
火床面  
焚き口総点数  
掲載遺物

#### IV 遺跡の調査

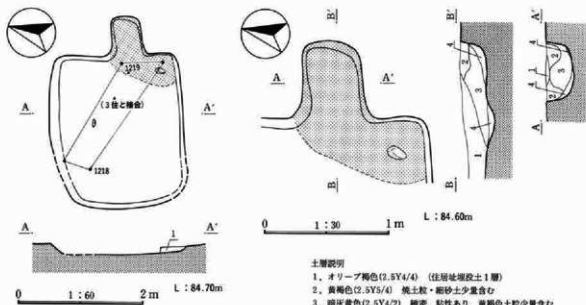
##### 出土遺物 (挿図番号第282図 写真番号P L-203)

図示遺物 図示しえた遺物は、土師器環1、須恵器環1の2個体のみである。

土師器 土師器環1218は僅かな丸底から直立する口縁に至り、底部にのみ削り方を施す。

##### 所見

該住居址の出土遺物は僅少で流入遺物が主であり、廃棄行為は行われなかったと解したい。故に該住居址の完全埋没までは周囲に廃棄行為の主体者は居住しなかったものと考えられる。



土師説明  
1. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 細砂土少量含む、炭粒・焼土粒少量含む

第280図 6・15号住居址

第281図 6・15号住居址竈



第282図 6・15号住居址出土遺物

#### 6・16号住居址

##### 遺 構 (挿図番号第283・284図 写真番号P L-152)

絶対的位置 本住居址は調査区の最南東隅に位置し、A14・68, 69, 78, 79の4グリッドにまたがって所在する。周囲には北3mに14号住、3m南西に17号住が存在する。確認面の標高は84.80mで、床面高は84.50mを測る。

規模・形態 規模は東西5.74m・南北4.14m、面積24.44m<sup>2</sup>で、平面形態は東西軸：南北軸の比が1.30：1の縦長長方形プランである。主軸方位はN-88°-Eを示す。壁は85°~95°の角度で明瞭に立ち上がり、壁高は平均30cm~35cmである。覆土は焼失住居址特有の焼土ブロック・炭化物・土器片の入り混じる細か層に分層され、第2層以下は住居址構築材の炭化物や焼土・灰層が床面上を覆っている。

床面はフラットであるが、貼床は施されておらず地床面である。床面上には全面に灰層や焼土床  
 が厚く分布し、住居址構築材と考えられる炭化材が壁際から住居址内に倒れ込むような状態で検  
 出された。そして特筆すべきは、北東コーナーに敷物と推測される炭化材が、あたかも使用時そ  
 のままの状態で確認されたことと、南壁際中央から入り口施設の一部と推量される炭化物が検出  
 されたことである。施設としては南東コーナーに円形の貯蔵穴と、前述の入り口施設に伴うピット  
 が南壁際中央部で確認されている。また住居址中央で円形の床下土坑が検出された。

竈(挿図番号第285・286図 写真番号P L-151)

燃焼部は東壁中央南寄り壁を掘り込み作られる。壁面は垂直に立ち上がり、レンガ状に焼土化  
 している。覆土は天井部崩落土である地山粘質の強い黄褐色土主体の層で、下層に焼土塊の堆積  
 が見られる。また火床面直上には、蒸焼にされたような褐色土層が乗る。右焚き口には棒状片岩  
 礫が立てられた状態で出土しており、補強材に使用されたものと考えられる。火床面は床面と同  
 レベルであり、灰の広がりが竈前方に広がる。遺物は竈内より土師器壺片を主体として、多量の  
 遺物が出土した。

遺物の出土状態(挿図番号第290図 写真番号P L-151)

出土遺物総点数は1924点と非常に多量で住居址全面に散布しているが、平面的には竈及び貯蔵  
 穴を中心に住居址南半部に濃密である。層的にも土層が攪拌された徴候がみられ、遺物も雑多  
 に混入している。遺物接合線は竈周辺を中心に錯綜した様相を見せ、変動の複雑さを物語ってい  
 る。特に変動の大きいのは土師器環1254で3m程の接合線が引かれる。また土師器壺1263、須恵  
 器環1233、須恵器壺1224もそれに次ぐ移動の大きさを示している。遺物出土レベルは2群に大  
 別できると思われるが、後世の擾乱がかなり入っているために不明である。接合遺物のレベル差  
 の大きいのは1233で、約25cmのレベル差が測れる。タイプAは土師器環1250, 1251, 1252, 須恵  
 器壺1223と意外に少ない。タイプBaは土師器壺1263, 1267, 1672で、タイプBは土師器環1255,  
 1259, 1261, 土師器壺1264, 1265, 1266, 1269, 1271, 1274, 須恵器壺1226, 須恵器環1236,  
 須恵器壺1276, 1246, 須恵器高台付皿1231である。残りはタイプCに分類される。

出土遺物(挿図番号第287~289・291図 写真番号P L-203~205・219)

図示しえた遺物は、総数56個体と非常に多い。その内訳は、土師器壺13, 土師器環11, 土師器  
 台付壺1, 須恵器壺5, 須恵器高台付壺1, 須恵器高台付盤2, 須恵器環11, 須恵器壺蓋6, 紡  
 錘車2, 砥石1, 刀子1, 火打金1, 縄文破片1である。

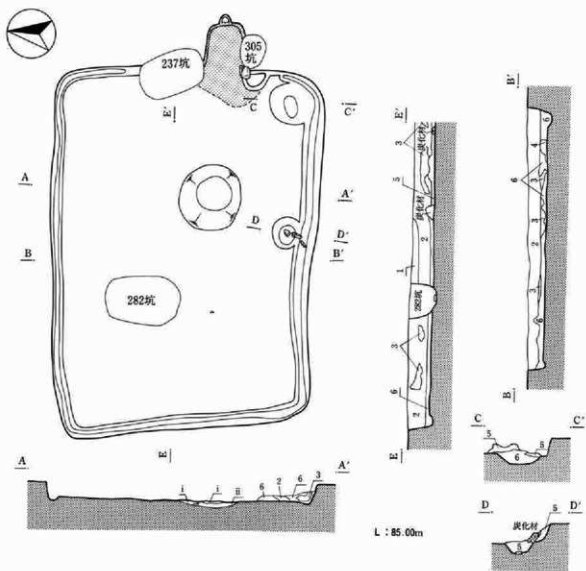
土師器壺は13個体と多いが、器内が薄く最大径を胴部上位にもち、口縁部の屈曲が弱く、胴部  
 上位に横位、中・下位に斜縦位の寛削りを施すものが主流である。土師器台付壺1275は胴部が球  
 状を呈し、土師器壺と近似している。土師器環は4種類に分類される。①底部が湾曲して直立し  
 て口縁部にいたるもので、口径が12cmタイプと15cmタイプがある(1250, 1253)。②僅かな丸底か  
 ら浅い体部に至り、底部にのみ寛削りを施す(1251, 1257, 1259, 1260)。③平底気味の底部から  
 湾曲する体部に至り、底部にのみ寛削りを施す(1254, 1255)。④丸底で外反する体部をもつ(1261)。

須恵器壺1278はほぼ正形に復元され、体部には平行タタキが見られ、底部は若干丸味を帯びて  
 寛削りの調整が施されている。また体部下位には凍てハゼと思われる剝離があり注目される。

須恵器高台付盤は器形を知り得るのは1個体(1232)のみで、1232は回転盤切り後発掘調整  
 が施された底部をもち、底部から体部にかけて焼成時の自然軸で覆われている。須恵器環は底部

#### IV 遺跡の調査

の調整手法で、①回転糸切り後底撫で調整 (1233)、②回転糸切り後底撫で調整 (1234, 1241)、③回転糸切り後底部周辺を刮削り調整 (1235, 1236)、④回転糸切り未調整 (1242, 1277) の4タイプである。須恵器坏蓋は大 (1225) 小 (1223, 1224) の2種類あり、1225は直線的な体部から垂直に折れる口縁部をもち、1223, 1224は水平な天井部から緩やかに屈曲する端部をもつ。



#### 土層説明

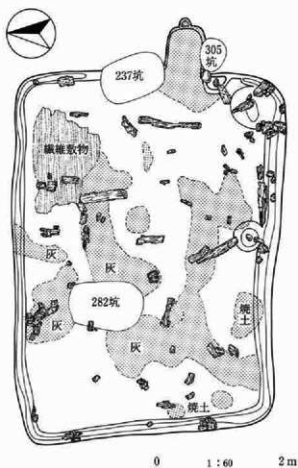
1. 褐色(10YR4/4) 小礫・白色細粒・焼土・炭粒少量含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 焼土粒・炭粒少量含む。土器片多量に含む
3. 明黄褐色(2.5Y6/8) 粘土塊・焼土塊含む。粘性あり
4. 黒褐色(10YR3/1) 繊維質の炭化物含む

5. 褐色(7.5YR4/6) 焼土粒・炭粒・少量含む。礫多量に含む
6. 黒褐色(10YR2/2) 焼土含む。炭化物・灰多量に含む軟質掘り方土層説明

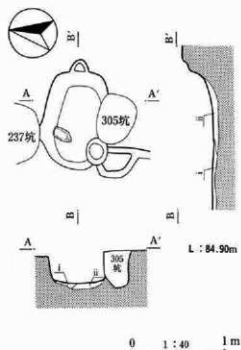
- i. 褐色(10YR4/4) 炭化材・焼土粒・灰少量含む。軟質
- ii. 黄褐色(2.5Y5/6) シルト。焼土粒少量含む。固い

0 1 : 60 2m

第283図 6・16号住居址



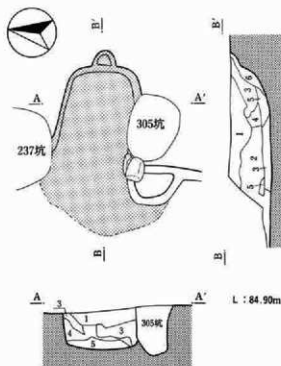
第284図 6・16号住居址(焼失状態)



図り方土層説明

- I. 暗褐色(10YR3/4) 焼土・炭粒・灰含む
- II. 暗褐色(10YR3/4) 焼土・炭粒少量含む

第286図 6・16号住居址掘り方

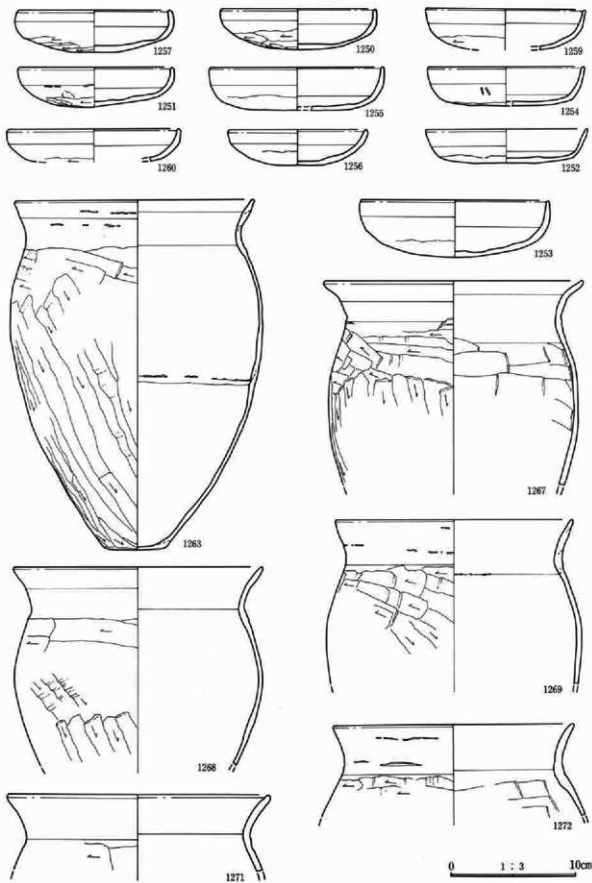


土層説明

1. 褐色(7.5YR4/6) 焼土粒・炭粒・黒褐色土塊・褐色土塊含む
2. 黄褐色(10YR5/2) 明黄褐色粘土・焼土・炭粒少量含む、粘性あり
3. 赤褐色(2.5YR4/8) 褐色粘土が焼土化
4. 褐色(7.5YR4/6) 焼土粒・炭粒1層よりやや多量に含む、軟質
5. 赤褐色(2.5YR4/8) 焼土塊
6. 暗赤褐色(5YR3/3) 焼土・炭粒・灰の混土

第285図 6・16号住居址掘

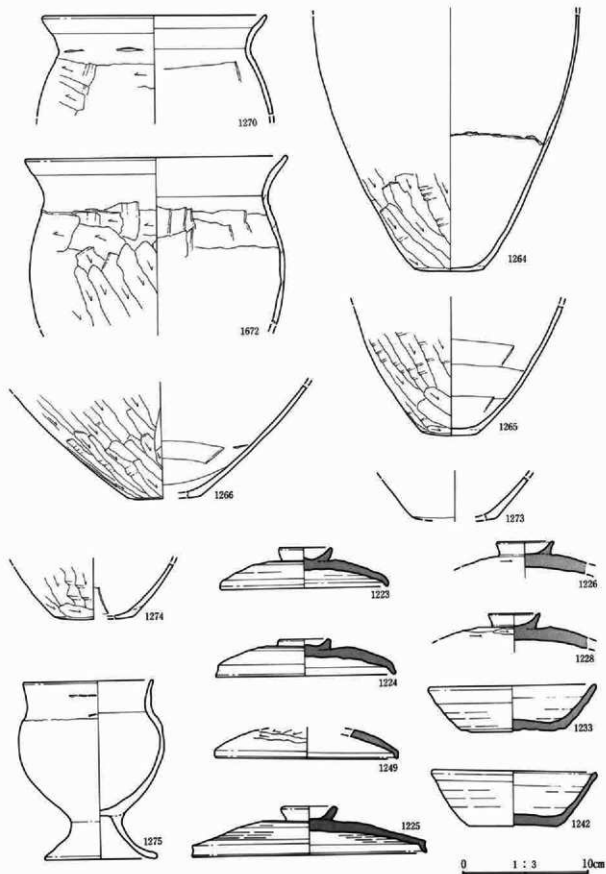
IV 遺跡の調査



第287図 6・16号住居址出土遺物

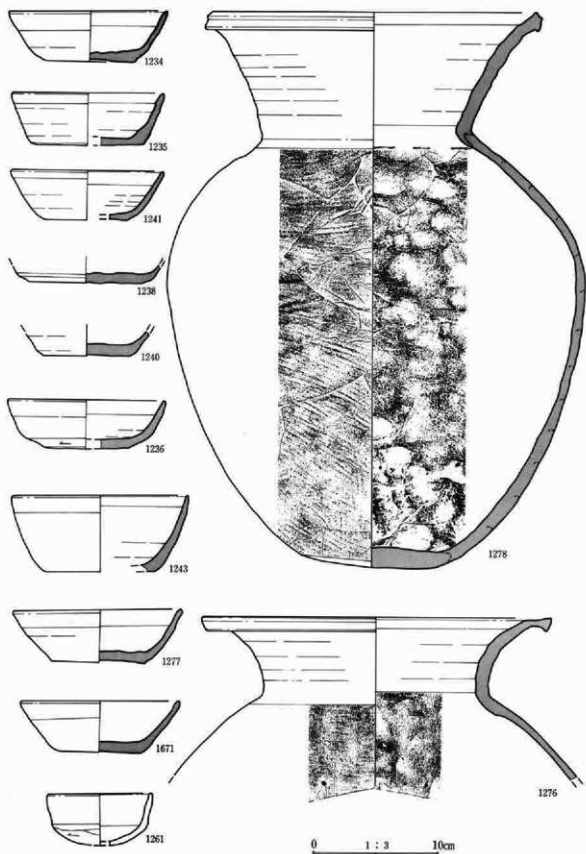


4 下大塚北原地区 (5B・6区) の遺構と遺物

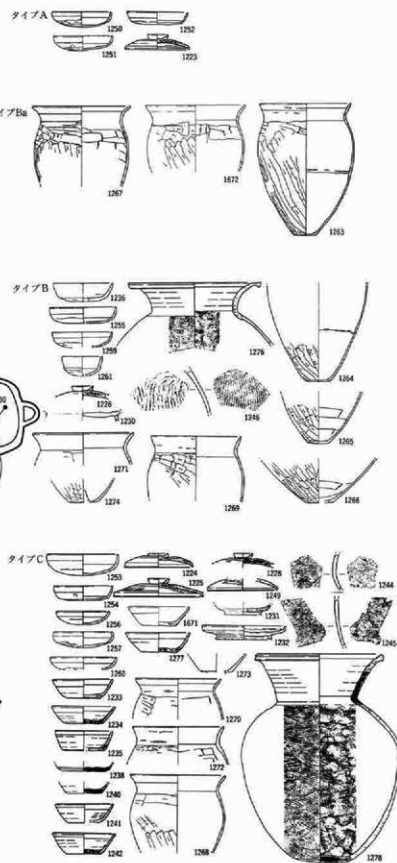
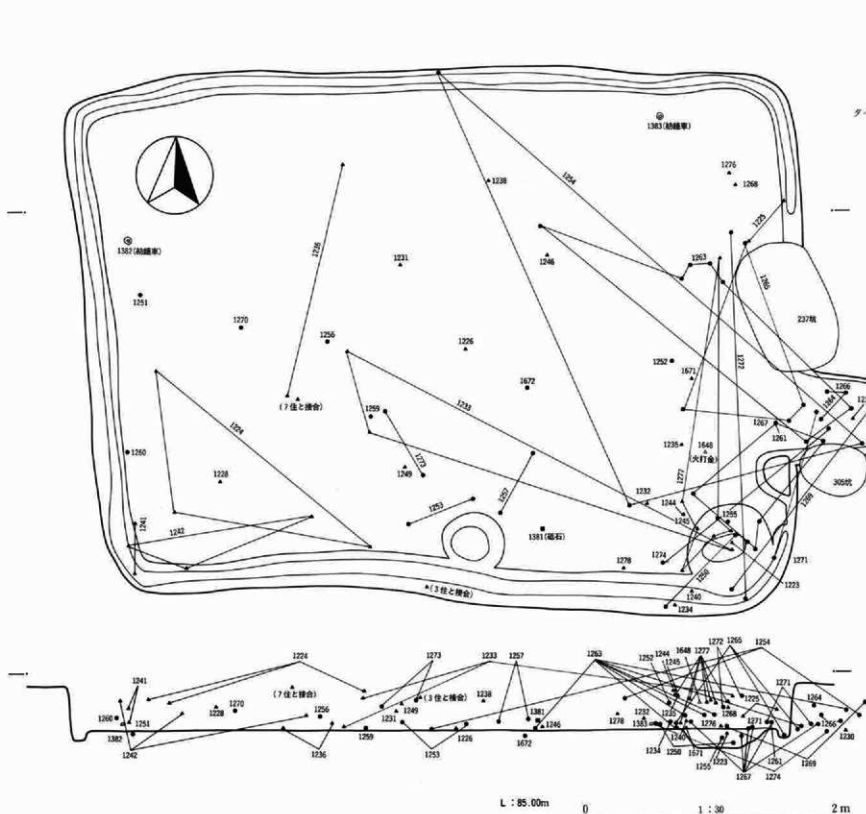


第288図 6・16号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査

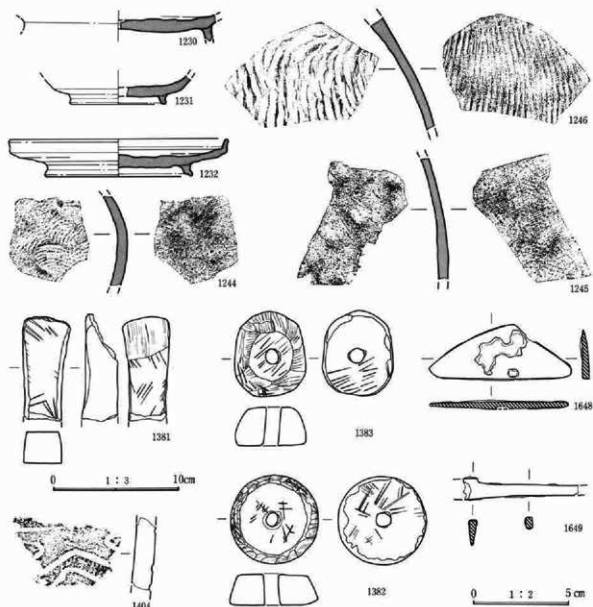


第289図 6・16号住居址出土遺物



第290図 6・16号住居址接合分布図





第291図 6・16号住居址出土遺物

## 6・17号住居址

遺 構 (挿図番号第292図 写真番号P L-153)

本住居址は遺跡地の最南端に位置し、A14・77, 78, 88, 89の4グリッドにまたがり所在する。絶対的位置  
 近接する住居址は、3m北東に16号住が存在する。また247土坑と北東コーナーを中心に約1/3で 相対的位置  
 切り合っている。確認面の標高は84.90mで、床面高は84.80mを測る。 確認面

規模は東西2.34m・南北2.42m、面積6.16㎡(推定)で、平面形態は東西軸：南北軸の比が1： 規模・形態  
 1.03の矩形を呈している。主軸方位はN-87°-Eを示す。壁は10cm程度の壁高であるので立ち上がり 主軸・壁  
 方は不鮮明である。覆土は粘性のある暗褐色土1層でしまっている。 覆土

床面は概ねフラットで貼床が施されており、掘り方は南西コーナーから北へ1.7m、東へ1.7m 庄・貼り床  
 の範囲に掘り込みが認められた。 掘り方

IV 遺跡の調査

竈 (挿図番号第293図 写真番号P L-153)

**燃焼部** 燃焼部は東壁南寄り掘り込む。壁面はレンガ状に焼土化する。覆土中に焼土層は、壁または天井部崩落土と考えられる。灰面は竈前に広がる。

**遺物の出土状態** (挿図番号第294・295図)

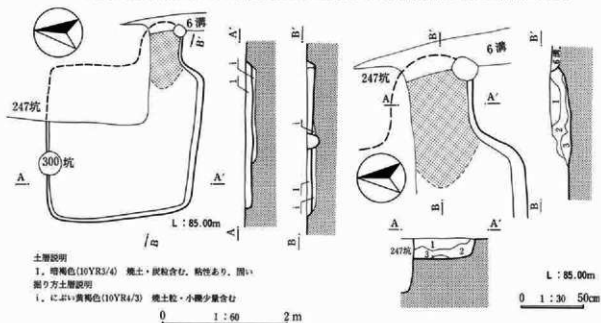
**総点数** 出土遺物総点数は75点と僅少であり、遺物の平面分布は南壁際に偏っている。掲載遺物はどれも床面直上の出土であるが、小破片であるのでタイプBに分類した。

**出土遺物** (挿図番号第294図)

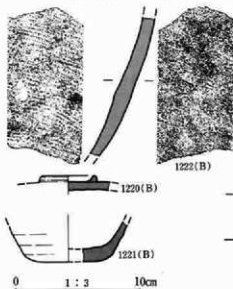
**図示遺物** 出土遺物は僅少で、図示した遺物には須恵器壺1、須恵器坏1、須恵器坏蓋1がある。

**所見**

遺物の出土様相からすると、該住居址はこの付近での最末期の所産である可能性がある。



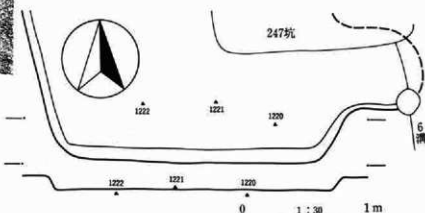
第292図 6・17号住居址



第294図 6・17号住居址出土遺物

土層説明  
1. 暗褐色(10YR3/4) (住居址埋設土1層)  
2. 赤褐色(2.5YR4/6) 焼土塊主体、中央に明赤褐色土少量含む  
3. に近い褐色(7.5YR5/0) 焼土塊・炭粒含む。粘性あり

第293図 6・17号住居址竈



第295図 6・17号住居址接合分布図

## (2) 掘立柱建物跡

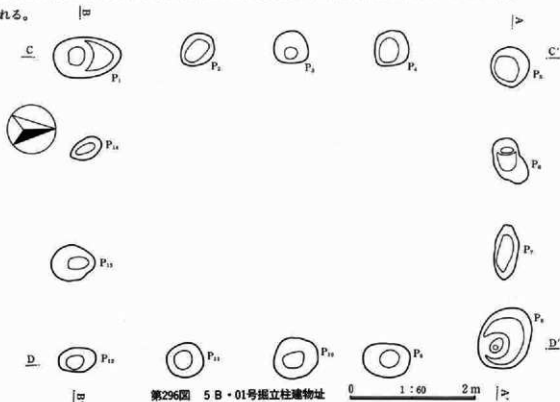
下大塚北原地区の地形的特徴は、微高地状の5B区と浅い谷底低地状の6区に大別され、その  
下大塚北原  
比高差は約1m内外である。

該地区は篠塚清太地区と同様に数多くの土坑群が検出されているが、土層中にAs-B軽石の含  
まれている土坑は殆どなく、篠塚清太地区の土坑群との時期差が考慮できる。

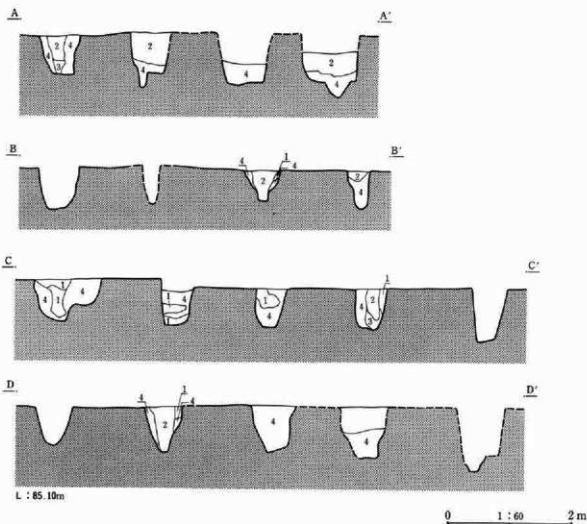
掘立柱建物跡は5B区で1棟、6区で20棟確認された。5B区の1棟は微高地の縁辺にあたかも  
掘立柱建物  
も意図されたかのようにして、6区の掘立柱建物跡群とは主軸方位を異にして、建てられている。  
6区の掘立柱建物跡群の分布を見ると、ほぼ竪穴住居址と重なり合わない位置に建築されており、  
分布  
両者が同時存在したための現象と理解される。これらの掘立柱建物跡は竪穴住居址との切り合い  
時期  
関係や主軸方位から大体5期に分類され、その時期はほぼ奈良時代の全期に亘ることが予想され  
る。ただ唯一の例外は19号掘立柱建物跡で、平安時代の水田跡に建てられたことが推測され、そ  
の根拠としては全土層中にAs-B軽石の多量混入があげられる。

## 5B・01号掘立柱建物跡 (挿図番号第296・297図 写真番号P L-136)

本掘立柱建物跡は発掘区の西端に位置し、B13・91、B14・01グリッドに所在する。5B・01  
位置  
号住と切り合い、1～2m西には05、07号住が存在する。確認面での標高は85.00mを測り、主軸  
標高  
方位はN-0°-Eとグリッド線に平行している。規模は東西4.6m・南北6.7m、面積30.3m<sup>2</sup>であり、  
規模  
棟方向は南北である。平面形態は3間×4間の長方形で、柱間寸法は一定でない。柱穴の形状は  
平面形態  
円形・楕円形で、円形の柱穴の土層断面には柱穴痕とその回りのつき固めた土層が明瞭に観察で  
き、楕円形の柱穴の土層断面は乱れている傾向が看取される。これは円形の柱穴痕の柱はその  
柱穴・形状  
まま立ち腐れたのに対して、楕円形のそれは柱抜き取り時の状況を如実に示しているものと思わ  
れる。



IV 遺跡の調査



土層説明

1. 褐色(10YR4/4) 砂質土、炭粒・焼土粒少量含む  
2. 褐色(10YR4/4) 砂礫、雜土

3. 灰黄褐色(10YR4/2) 緻密、黄色土塊少量含む

4. 褐色(10YR4/6) 粘性土、黄色粘土塊少量含む、粘性あり、固い

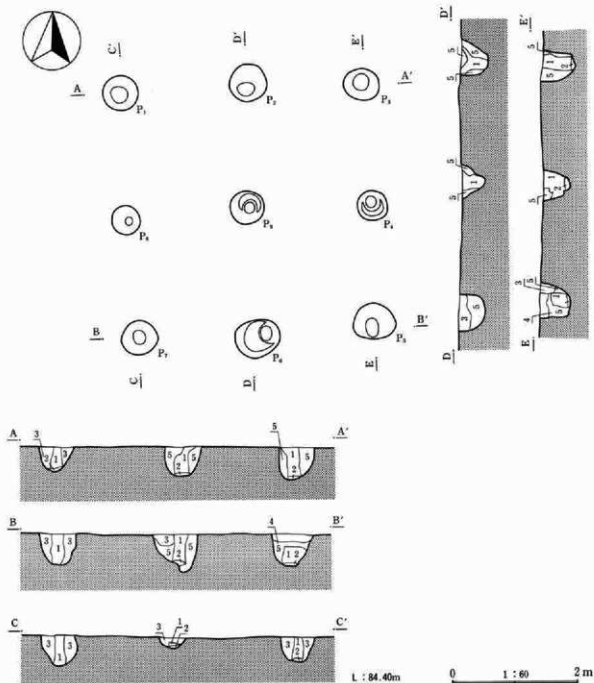
第297図 5B・01号掘立柱建物址

6・01号掘立柱建物跡 (拝図番号第298図 写真番号PL-153)

- 位置** 本掘立柱建物跡は、調査区の北東端に位置しA13・87グリッド内に所在する。近接する遺構は南西1mに09号住が、東1mに03号掘立が存在している。確認面の標高は84.30mを測り、長軸方位はN-84°-Eを指し示す。規模は東西3.7m・南北3.8m、面積14.7m<sup>2</sup>である。平面形態は2間×2間のほぼ正方形形状を呈し、柱間寸法がほぼ一定の総柱建物である。柱穴の形状は円形で、それぞれの土層断面には柱痕が明瞭に観察され、柱底の最下層には一様に灰青色の還元土層が確認された。各柱穴の深さは一定であるが、独りP8のみ他の柱穴の約1/3の深さを呈している。該掘立柱建物跡は本遺跡中唯一の総柱建物であり、その構造から稲倉である可能性も考えられ、他の遺構との関係から論じる必要があるだろう。
- 高さ**
- 規模**
- 平面形態**
- 柱穴・形状**
- 深さ**



4 下大塚北原地区 (5B・6区) の遺構と遺物



土層説明

1. 黒褐色(2.5Y2/2) オリーブ黄色土粒少量含む、緻密で固い
2. 灰白色(7.5YR8/2) 粘性土
3. 暗褐色(10YR3/3) 細粒、固い

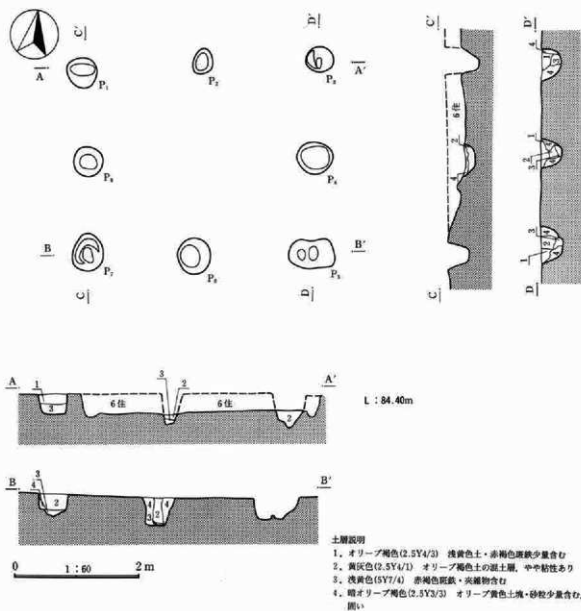
4. 濃い黄褐色(10YR4/3) 黄褐色土粒少量含む、固い
5. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) オリーブ黄色土を斑状に含む凝土层、固い

第298図 6・01号掘立柱建物址

IV 遺跡の調査

6・02号掘立柱建物跡 (挿図番号第299図 写真番号P L-153)

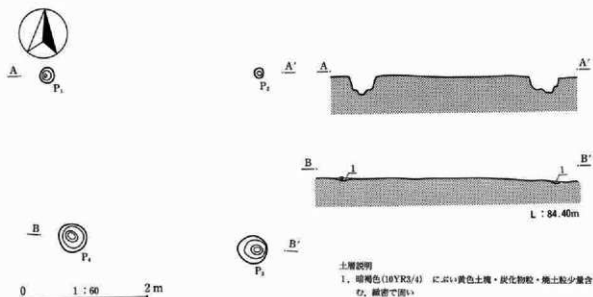
**位置** 本掘立柱建物跡は調査区の北東隅附近に位置し、A13・98グリッド内に所在する。該掘立柱建物跡は06号住と重複しており、北西1mには03号掘立柱が近接している。確認面の標高は84.30mを測り、長軸方位はN-81°-Eを示す。規模は東西3.6m・南北2.9m、面積10.8㎡で、棟方向は東西を指すものと思われる。平面形態は2間×2間の長方形で、柱間寸法は東西方向が若干長い。柱穴の形状はP5を除いて円形を呈し、各柱穴の深さは一定であったことが予想される。土層は06号住との重複の故にしっかり取れたものは少ないが、01号住の土層との類似が看取される。06号住との重複で確認されなかったが、該掘立柱の中央にP9の存在も推測可能で、総建物の可能性も捨て切れない。



第299図 6・02号掘立柱建物跡

## 6・03号掘立柱建物跡(挿図番号第300図 写真番号P L-154)

本掘立柱建物跡は調査区の北東隅に位置し、A13・87、88グリッド内に01号掘立と02号掘立に挟まれるようにして所在する。確認面での標高は84.30mを測り、長軸方位はN-86°-Eを示す。規模は東西3.1m・南北2.6m、面積9.2m<sup>2</sup>で、棟方向は東西であろう。平面形態は1間×1間の不整形で、柱間寸法は一定でない。柱穴の形状はほぼ円形だが、P1、2が小さくP3、4が柱穴としては普通規模の掘り方をもっている。各柱穴の深さは一定でなくP1、2は痕跡程度である。

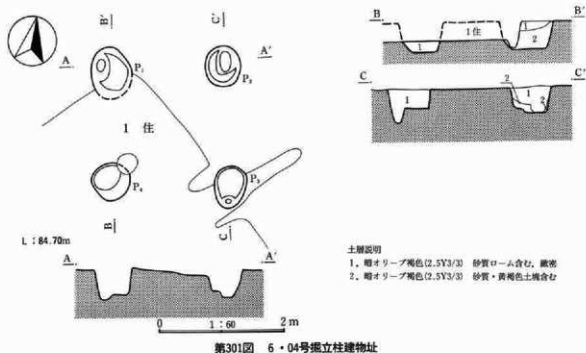


第300図 6・03号掘立柱建物址

## 6・04号掘立柱建物跡(挿図番号第301図 写真番号P L-154)

本掘立柱建物跡は調査区の東縁に位置し、A14・49グリッドに所在する。01号住と重複し、1m北西には02、03号住が存在する。確認面の標高は84.60mを測り、長軸方位はN-80°-Eを示す。規模は東西1.9m・南北1.6m、面積3.2m<sup>2</sup>で、棟方向は東西を示す。平面形態は1間×1間の正方形プランで、柱間寸法は南北に若干長い。各柱穴の深さは一定で、柱穴の形状は楕円形であるが、それは柱痕の観察されない土層のありようからも肯定できる。1間四方の掘立柱建物については、その構造と機能について言及した報告を寡聞にして知らないが、納屋か簡単な稲倉が想定されるかも知れない。

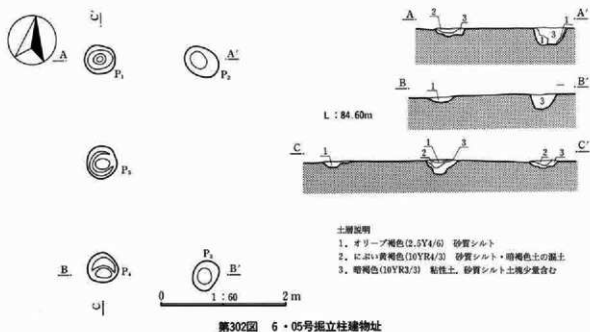
IV 遺跡の調査



6・05号掘立柱建物跡 (押図番号第302図 写真番号P L-154)

**位置** 本掘立柱建物跡は遺跡地の東縁から調査区外へ遺構が展開しており、A14・09グリッド内に所在している。06号掘立と重なり合い、近接する遺構は3m南西に07、18号掘立が存在する。確認面での標高は84.50mを測り、長軸方位はN-79°-Eを指す。規模は南北3.4mが確認できるのみで、棟方向は東西であろうことが推測される。平面形態は2間×3間以上の横長長方形が予想され、柱間寸法はほぼ一定であろう。確認できる柱穴の形状は円形で、深さは一定でなく、土層から柱痕が観察されるのはP4のみである。

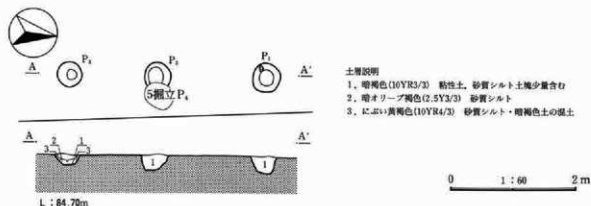
**標高・規模**  
**平面形態**  
**柱穴・形状**  
**深さ**



## 6・06号掘立柱建物跡（挿図番号第303図 写真番号P L-154）

本掘立柱建物跡は05号掘立と重複し、やはり調査区外へ遺構が展開しており、A14・09グリッド内に位置する。近接する遺構は南3mに12号住が存在する。確認面の標高は84.50mを測り、位置  
 標高  
 規模  
 平面形態  
 柱穴・形状  
 深さ

長軸方位はN-83°-Eを指すものと予想される。規模は南北3.1mが測れるのみで、棟方向は不明である。平面形態は不明で、南北2間の柱間寸法も一定でない。柱穴の形状はほぼ円形を呈しているが、各柱穴の深さは一定でない。土層はP3のみ細かく分層されている。

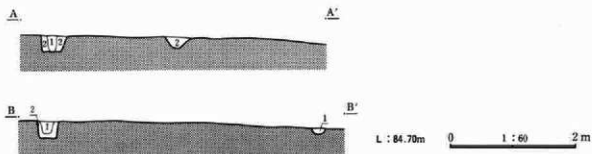


第303図 6・06号掘立柱建物址

## 6・07号掘立柱建物跡（挿図番号第304・305図 写真番号P L-154）

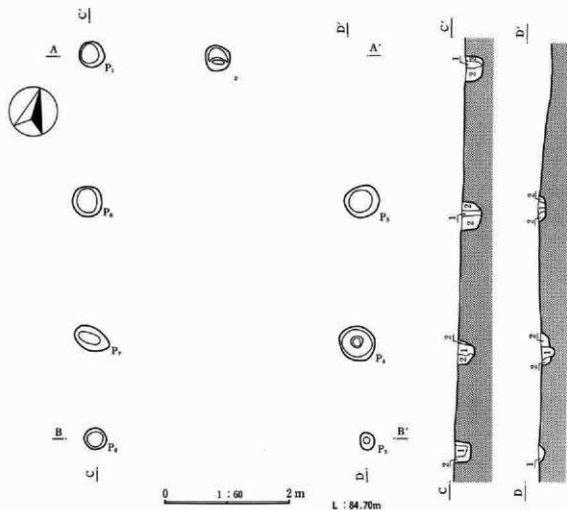
本掘立柱建物跡は、18号掘立と重なり合いながらA14・08, 09, 18, 19グリッドに所在し、05号掘立と09号掘立に挟まれて存在する。確認面での標高は84.60mを測り、長軸方位はN-22°-Wを示す。規模は東西4.1m・南北5.6m、面積26㎡で、棟方向は南北である。平面形態は2間×3間の長方形が推測されるが、北東隅とP5、P6の間の1柱穴が欠失しているため明らかでない。柱穴の形状は円形と楕円形で、各柱穴の深さは一定でなくP3～P5のラインの柱穴が浅い。柱底と見られる土層がP1, 7, 8で観察されたが、それらの痕跡はかなり細いものであった。

位置  
 標高  
 規模  
 平面形態  
 柱穴・形状  
 深さ



第304図 6・07号掘立柱建物址

IV 遺跡の調査



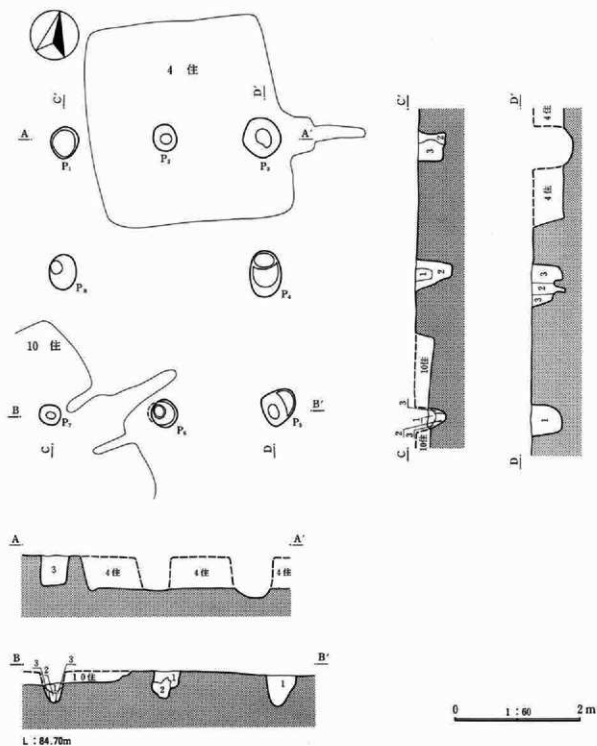
土層説明

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 細砂土、黒褐色・暗黄灰色の風土
2. 暗黄灰色(2.5Y4/2) 締密で固い

第305図 6・07号掘立柱建物跡

6・08号掘立柱建物跡 (挿図番号第306図 写真番号P L-154)

- 位置** 本掘立柱建物跡は遺跡地のほぼ中央に位置し、所在するグリッドはA14・07, 08, 17, 18である。
- 標高** 該掘立柱建物跡は、04号住、10号住、147土坑との切り合い関係が認められる。確認面の標高は84.60mを測り、長軸方位はN-13°-Wを示す。規模は東西3.4m・南北4.2m、面積14.3m<sup>2</sup>で、棟方向は南北である。平面形態は南側面の若干張った2間×2間の不整形長方形を呈し、柱間寸法は東西に短く、南北に長い。柱穴の形状は円形と楕円形で、各柱穴の深さはほぼ一定である。
- 柱穴・形状** 重複に於ける新旧関係は、10号住→08号掘立→04号住の順に新しくなるものと思される。
- 深さ**



土層説明

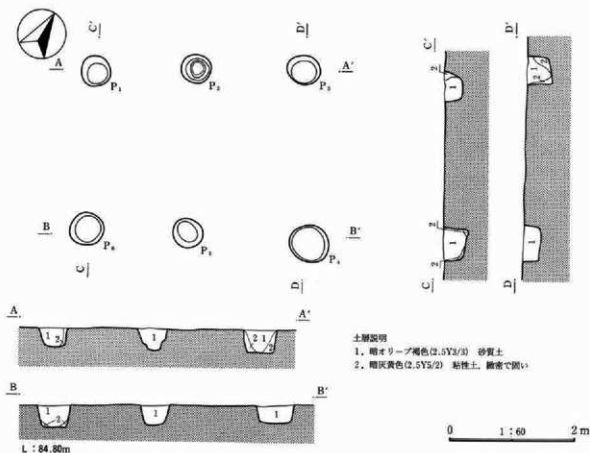
1. 褐色(10YR4/4) 焼土粒・炭粒少量含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 砂質土
3. オリーブ褐色(2.5Y4/6) 黄色・褐色粘性土塊含む、緻密、粘性あり

第306図 6・08号掘立柱建物址

IV 遺跡の調査

6・09号掘立柱建物跡 (押図番号第307図 写真番号P L-155)

**位置** 本掘立柱建物跡はA14・18、28グリッドに位置し、11号掘立と重なり合い同規模の10号掘立と  
**標高** 対になるように棟方向を描えて所在している。確認面の標高は84.70mを測り、長軸方位はN-61°  
**規模** -Eを示す。規模は東西3.3m・南北2.5m、面積8.6㎡である。平面形態は2間×1間の長方形で、  
**平面形態** 柱穴  
**柱穴** 柱間寸法は一定でなく、南北方向に長く東西方向に短い。棟方向は東西を向いている。柱穴の形  
**形状・深さ** 状はほぼ円形を呈し、各柱穴の深さは一定である。土層断面の柱底はP3とP6観察された。

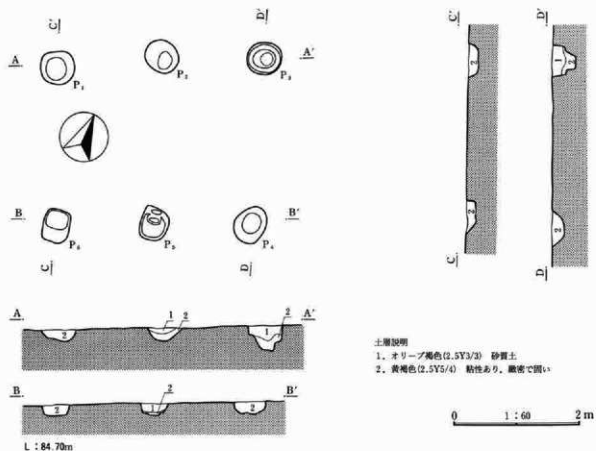


第307図 6・09号掘立柱建物址

6・10号掘立柱建物跡 (押図番号第308図 写真番号P L-155)

**位置** 本掘立柱建物跡はA14・27グリッド内に位置し、09号掘立と同様に棟方向を同じくし、11号掘  
**標高・規模** 立と重複して所在する。確認面の標高は84.60mを測り、長軸方位はN-61°-Eを指し示す。規模は  
**平面形態** 東西3.2m・南北2.4m、面積8.2㎡で、棟方向は東西方向である。平面形態は2間×1間の長方形  
**柱穴** で、柱間寸法は一定でなく南北に長く東西に短い。柱穴の形状は円形・楕円形・不整形とヴァ  
**形状・深さ** ラエティに富んでおり、各柱穴の深さはP3を除いてほぼ一定である。P3についてはその土層  
 の状況から、第2層は柱痕に係わるものと推察される。

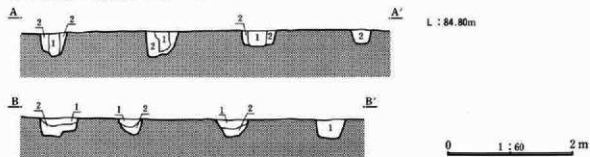




第308図 6・10号掘立柱建物址

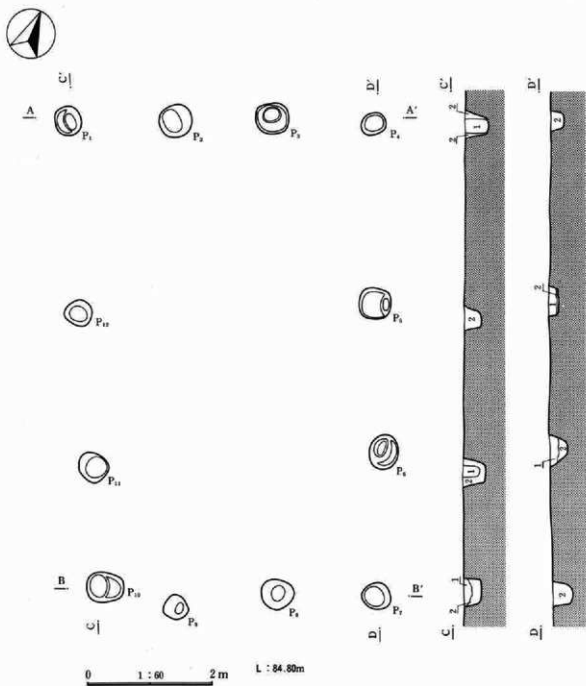
## 6・11号掘立柱建物跡 (挿図番号第309・310図 写真番号P L-155)

本掘立柱建物跡は、遺跡地のほぼ中央部A14・17, 18, 27, 28グリッドに所在する。該掘立柱建物跡と棟方向を直交させる09, 10号掘立柱が重複している。確認面の標高は84.60mを測り、長軸方位はN-24°-Wを示す。規模は東西4.6m・南北7.4m、面積35.7㎡で、棟方向は南北に長い。平面形態は3間×3間の長方形で、柱間寸法は東西が平均1.6mと狭く、南北は2mを越し最長は3mを越すものもあり一定でない。柱穴の形状はほぼ円形が多いが、P10は例外的に楕円形で柱抜き取り時の変形と見られる。柱穴の深さは一律でなく、土層も柱痕の観察されるのはP1とP3のみでかなりの乱れがみられる。またP9とP10の柱間寸法は1.38mと極めて狭く、P8と併せて入り口施設の可能性も考えられる。



第309図 6・11号掘立柱建物址

IV 遺跡の調査



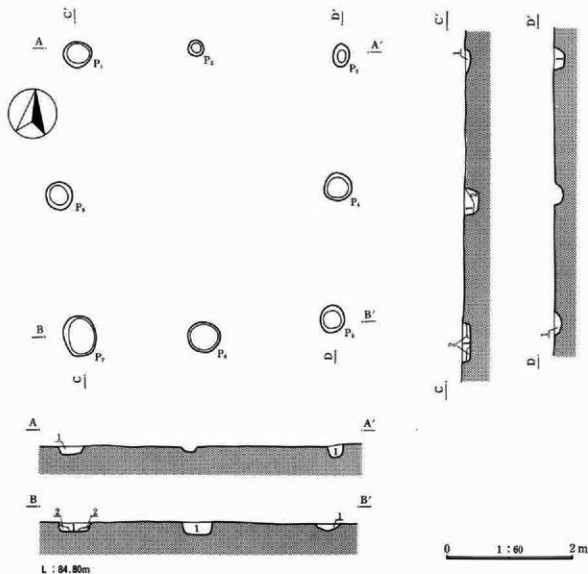
土層説明

1. におい黄褐色(10YR4/3) 砂質土、におい黄色の硬土、一部鉄分比着
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 粘性土、におい黄色土塊含む、固い

第310図 6・11号竪立柱建物址

## 6・12号掘立柱建物跡(挿図番号第311図 写真番号P L-154)

本掘立柱建物跡は、遺跡地のほぼ中央10号掘立の西に位置し、A14・26, 27, 36, 37グリッドに所在する。確認面の標高は84.60mを測り、棟方向はN-8°-Wを示す。規模は東西4.1m・南北4.3m、面積17.9㎡である。平面形態は2間×2間の正方形プランを意図しているものと理解されるが、若干南北に長くそれに伴って柱間寸法も南北に長い。柱穴の形状はP3のみ楕円形で、他は円形を呈し、各柱穴の深さは一律に浅い。またP8が多少西に膨らんでいるため、平面形態が五角形にも見える。



土層説明

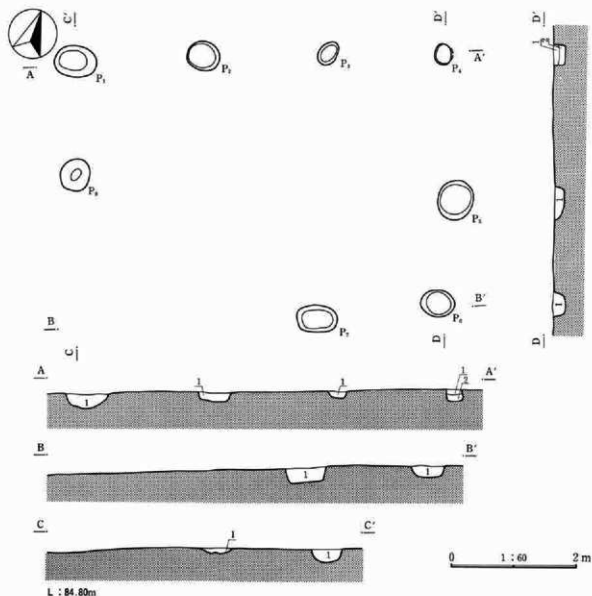
1. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 砂質土。黄灰色を下部に少量含む
2. におい黄色(2.5Y6/4) 粘性土。緻密で固い

第311図 6・12号掘立柱建物址

IV 遺跡の調査

6・13号掘立柱建物跡 (押図番号第312図 写真番号P L-154)

**位置** 本掘立柱建物跡は、該遺跡地の掘立柱建物跡群の西の外れに位置し、A14・35, 36, 45, 46グリッドに所在する。また14号掘立と南東隅で重複が見られる。確認面の標高は84.60mを測り、棟方向はN-68°-Eを示す。規模は東西5.7m・南北4.0m、面積23.3m<sup>2</sup>である。平面形態は3間×2間の長方形で、柱間寸法は一定でない。確認された柱穴総数は8個であり、本来ならP7とP8の間に2個の柱穴が存在するはずだが、攪乱により欠損している。柱穴の形状は楕円形で、深さも浅いが、柱抜き取りの際の土層の乱れは見られない。



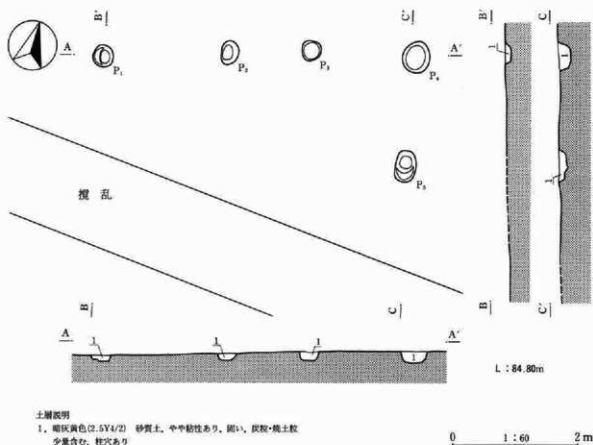
土層説明

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂質土。炭粒・土層片少量含む、柱穴あり
2. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 粘性土。網罟で囲い

第312図 6・13号掘立柱建物跡

## 6・14号掘立柱建物跡(挿図番号第313図 写真番号P L-154)

本掘立柱建物跡は、13号掘立柱と重複して遺跡地の掘立柱建物跡群の西端に位置し、A14・45、位置  
46グリッドに所在する。確認面の標高は84.60mを測り、棟方向はN-76°-Eを示す。規模は東西4.7m・規模  
南北3.5m、面積17.1㎡が推測される。平面形態は3間×2間の長方形プランを呈すると思  
平面形態  
考されるが、柱間寸法は一定でない。確認された柱穴の総数は5個で、残りの5個は攪乱による  
柱穴  
欠損を受けている。柱穴の形状はほぼ楕円形で、深さも浅く、13号掘立柱の柱痕と同様である。形状・深さ

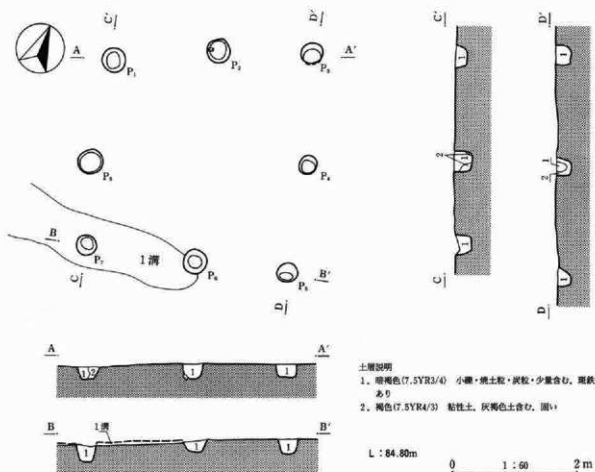


第313図 6・14号掘立柱建物址

## 6・15号掘立柱建物跡(挿図番号第314図 写真番号P L-155)

本掘立柱建物跡は、該遺跡地の掘立柱建物跡群の南西端に位置し、A14・56、66グリッドに所  
位置  
在する。14号掘立柱が5m北に、05号住家が4m東に存在する。確認面の標高は84.70mを測り、棟方  
標高  
向はN-70°-Eと南北を指すものと推測しておく。規模は東西3.2m・南北3.2m、面積10.9㎡であ  
規模  
る。平面形態は2間×2間の正方形プランを意図したと思われるが若干の歪みをもち、柱間寸法  
平面形態  
はP7、P8間を除いてほぼ一定である。柱穴の形状は円形で、各柱穴の深さは一定であるがP  
柱穴  
6とP7は1号溝と切り合い関係にある。また土層断面の乱れは観察されず、円形の形状と共に  
形状・深さ  
柱の抜き取りは行われなかった証左とみたい。

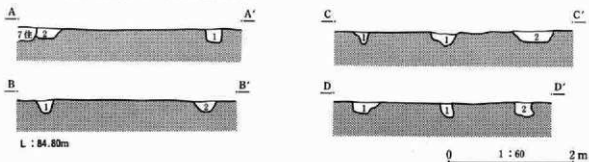
#### IV 遺跡の調査



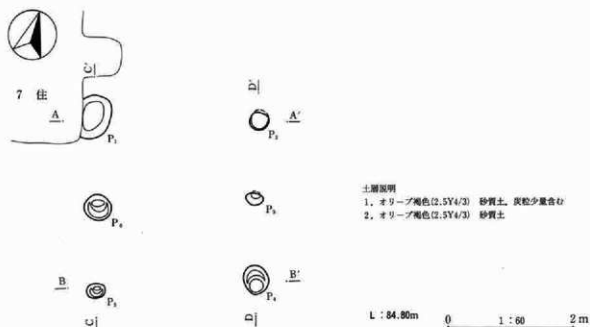
第314図 6・15号掘立柱建物址

#### 6・16号掘立柱建物跡 (拝図番号第315・316図 写真番号P L-155)

**位置** 本掘立柱建物跡は、遺跡地の南半に位置し、A14・47, 48, 57, 58グリッドに所在する。また  
**標高・規模** 北西隅で07号住と切り合っている。確認面の標高は84.70mを測り、棟方向はN-18°Wを示す。規  
**平面形態** 模は東西2.5m・南北2.5m、面積6.6㎡である。平面形態は2間×1間の正方形プランを呈し、柱  
**柱穴・形状** 間寸法は一定でなく東西：南北の比がおよそ2：1となっている。柱穴の形状は楕円形で、各柱  
**深さ** 穴の深さは一定でない。なおP1は07号住との切り合いが見られ、土層断面の観察からP1が07  
 号住に切られていると判断された。



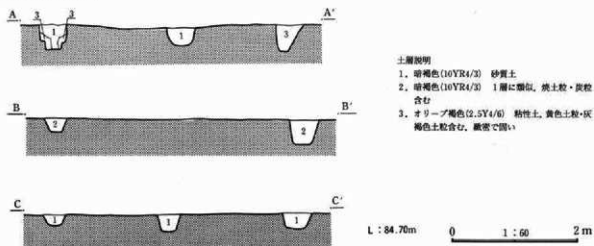
第315図 6・16号掘立柱建物址



第316図 6・16号掘立柱建物址

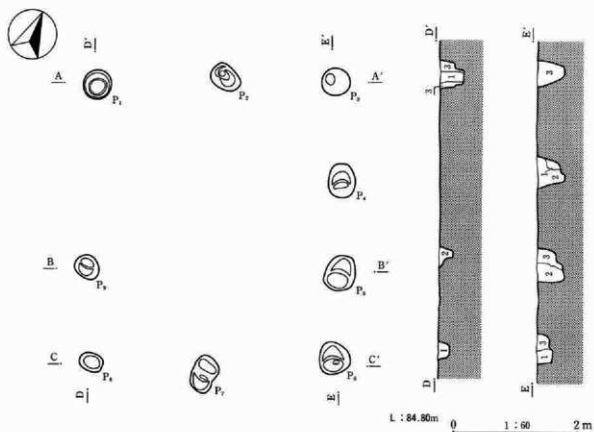
## 6・17号掘立柱建物跡 (押図番号第317・318 写真番号P L-155)

本掘立柱建物跡は、遺跡地のほぼ中央に位置し、A14・37、47グリッドに所在する。3m南に 位置  
07号住があり、3m西に21号掘立が存在する。確認面の標高は84.65mを測り、棟方向はN-24°-W 標高  
と南北を示す。規模は東西3.8m・南北4.4m、面積16.7㎡である。平面形態は3間×2間の長方 焼燬  
形を呈し、柱間寸法は桁行がほぼ1.5m内外で一定だが梁行は不揃いである。確認された柱穴 平面形態  
は10個だが、P1とP9の間に当然1個欠損した柱穴の存在が予想され、またP10の存在はその 柱穴  
位置から一部床付きの平地住居の可能性も考慮される。柱穴の形状は楕円形が多数を占め、各柱 形状  
穴の深さも深淺があり、複数の立て替えが考えられるとすれば、該掘立柱建物跡の存在は重視さ 深さ  
れねばならない。



第317図 6・17号掘立柱建物址

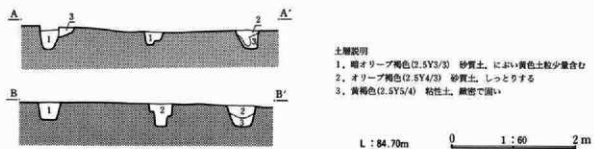
IV 遺跡の調査



第318図 6・17号掘立柱建物址

6・18号掘立柱建物跡 (挿図番号第319・320図 写真番号P L-154)

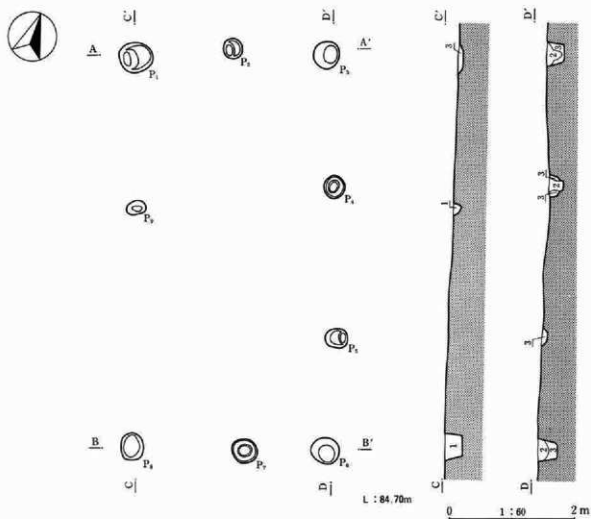
**位置** 本掘立柱建物跡は、遺跡地の東端に位置しA14・08, 09, 18, 19, 28, 29グリッドに所在する。  
**標高** 該掘立柱建物跡は7号掘立と切り合い、12号住居址が東3mに存在する。確認面の標高は84.60m  
**規模** を測り、棟方向はN-21°-Wを示す。規模は東西3.1m・南北6.1m、面積19.4㎡である。平面形態  
**平面形態** は3間×2間の長方形で、柱間寸法は一定でなく南北方向(桁行)に長い。確認された柱穴総数  
**柱穴・形状** は9個だが、P8とP9の間に1個欠損した柱穴が推測される。柱穴の形状は円形と楕円形で、  
**深さ** 各柱穴の深さにも大きな差がある。土層断面からP3とP4に柱痕が観察される。



**土層説明**  
 1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 砂質土、にょい黄色土粒少量含む  
 2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂質土、しっとりする  
 3. 黄褐色(2.5Y5/4) 粘性土、緻密で固い

第319図 6・18号掘立柱建物址



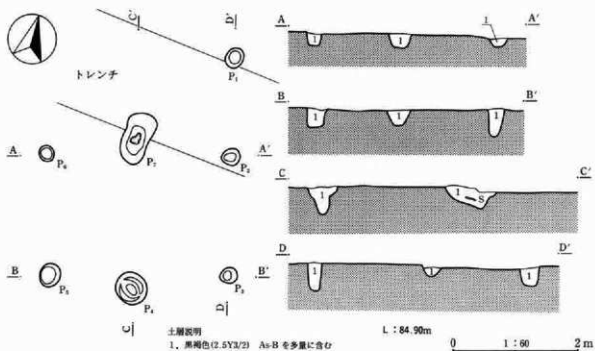


第320図 6・18号掘立柱建物址

## 6・19号掘立柱建物跡 (挿図番号第321図 写真番号PL-155)

本掘立柱建物跡は、遺跡地の西端に位置しA13・91, A14・00, 01グリッドに所在する。西1. 位置  
5mには02号溝があり、As-B下水田址と切り合っている。確認面の標高は84.80mを割り、棟方向 標高  
はN-17-Wを示す。平面形態は2間×2間の長方形で、柱間寸法は南北方向(桁行)に長い。確 平面形態  
認された柱穴総数は7個だが、本来のP1とP2の位置に2個の柱穴が推定され、総柱の掘立柱 柱穴  
建物跡が予想される。柱穴の形状はほぼ円形で、各柱穴の深さは比較的しっかりしており、土層 形状・深さ  
はAs-B層の多量に混入した混土層である。

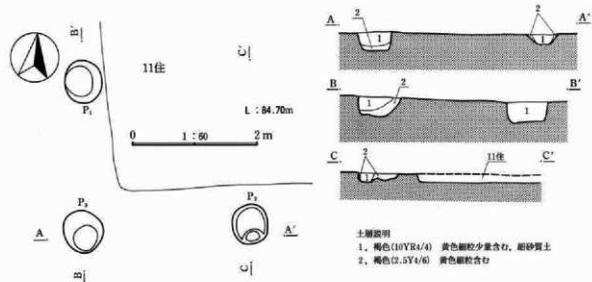
IV 遺跡の調査



第321図 6・19号掘立柱建物址

6・20号掘立柱建物跡 (挿図番号第322図)

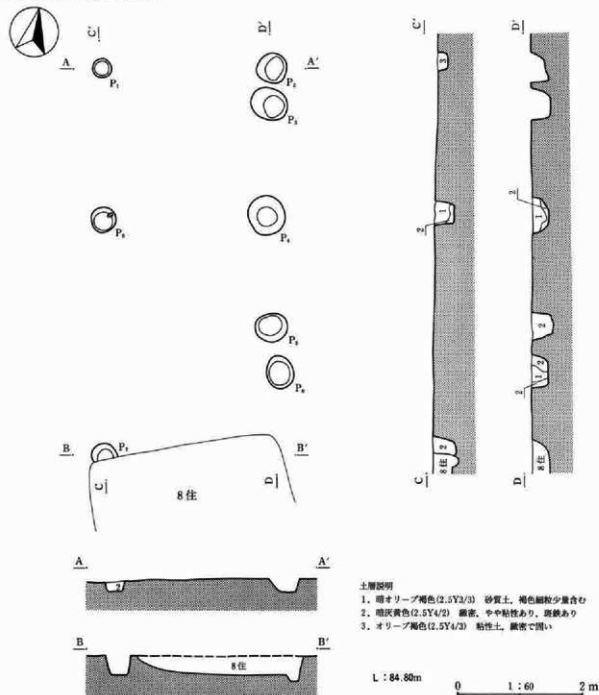
**位置** 本掘立柱建物跡は、発掘区の東縁に近いA14・39グリッドに所在する。02号住、11号住との切  
**標高・規模** り合いが目される。確認面の標高は84.60mを測り、棟方向はN-81°-Wを示す。規模は東西2.6  
**平面形態** m・南北2.5m、面積6.6㎡である。平面形態は2間×2間の正方形を呈し、柱間寸法はほぼ一定  
**柱穴** である。確認された柱穴数は3個であるが、本来P2の位置にあるべき11号住内のピットが発掘  
**形状** 調査の際に欠損したものと思われる。柱穴の形状は円形で、土層断面からP3は02号住に切れ、  
 複数回の立て替えの形跡が観察される。



第322図 6・20号掘立柱建物址

## 6・21号掘立柱建物跡(挿図番号第323図)

本掘立柱建物跡は掘立柱建物跡群の西南端部に位置し、A14・36, 37, 46, 47グリッドに所在する。該掘立を取り囲むように南には08号住が重複し、東3mには17号掘立、北2mには12号掘立、西2mには14号掘立が存在する。確認面の標高は84.70mを測り、棟方向はN-16°-Wを示す。規模は東西2.7m・南北6.1m、面積16.4㎡である。平面形態は基本的には3間×1間の長方形と見られ、P3とP6はそれぞれP2とP5の立て替えに関係する柱痕と認識すると合理的である。柱穴の形状は円形で、深さもP1を除いて一定である。土層とP3、P6の存在から複数の立て替えの可能性が推定される。



第323図 6・21号掘立柱建物址

## (3) 溝 跡

下大塚北原地区(5B・6)の溝跡は、5B区では検出されず6区で14条の長短の溝跡が確認された。溝跡の検出された6区は浅い谷底低地で、東南東から西北西に向かって谷が開いており、谷の中央部には紡錘形をした粗い砂礫層(シュートバー=埋没礫堆か)の分布が認められ、過去のある時期の大洪水の痕跡が窺える。溝の多くは谷の開析方向と平行するものと直交するものに分けられ、谷に平行して掘削されている02、03号溝は平安時代水田址にかかわるものと推測される。また直交する諸溝は、中世方形区画遺構(07号溝)に関連する溝跡である可能性も思量される。

## 6・01号溝(押図番号第324・325図 写真番号P L-157)

**位置** 本溝は遺跡地の南半部を西流して、A14・55, 56, 66グリッドを横切り04溝に合流する。  
**形状・層相** 本溝は皿状を呈し、現状では幅80cm、深さ10cmである。土層断面からはAs-B層は観察されないが、04溝の土層と重ね合わせると、すでに欠損した上層に存在した可能性が強い。As-B層の存在が予想されることと出土遺物から、中世でも早い時期の所産であると考えられる。

## 6・02号溝(押図番号第328・329図 写真番号P L-157)

**位置** 本溝は6区を大きく居住域(竪穴住居址)と生産域(水田址)に区分する境界として、N-24'-Wの傾きをもって南南東から北北西に向かって谷の走行に平行している。  
**走向方向形状** 断面形は基本的にはU字形を呈し、現状では幅1.6m、深さ50cmを測るが、実際の掘り込み面を考慮すると、幅は3mを越し深さは80cmを確実に越えるものと推定される。土層の観察からは最低3回の浚渫作業の存在が理解され、砂礫層堆積時を境に前2回・後1回以上の掘り返しが窺える。出土遺物には平安時代前期からの土器が含まれており、中世初めの04号溝との接続関係から、該溝の存続期間は、様々な災害や諸条件の変化による断絶はあるにしても、平安時代中・後期を通して使用されていたものと思われる。また溝中に規則的に並ぶ土坑列は集落址と絡めて考究する必要がある。  
**出土遺物**  
**土坑列**

## 6・03号溝(押図番号第326図)

**位置** 本溝は遺跡地の西端に位置し、02溝と平行して北流するもの(N-19'-W)と考えられるが、A14・10グリッド以南では確認されていない。  
**走向方向形状** 断面形はU字形を呈し、幅30cm・深さ13cmの小溝である。土層中にはAs-B軽石が多量に含まれ、底部付近には砂粒の堆積があり水流の存在を裏付ける。該溝と02溝は水田址を挟んで平行して流れており、その位置関係と底面レベルから03溝で引き込んだ水を水田に落とし、さらに02溝に最終的に水を集めて流したものと思われる。  
**層相**  
**水田址**

## 6・04号溝(押図番号第324・325図 写真番号P L-157)

**位置** 本溝は北北西に開く谷方向に直交する溝の一本で、N-71'-Eの傾きをもって東流している。  
**走向方向形状** 該溝は遺跡地の西南に位置し、A14・54グリッドで01溝と合流する。溝の断面形は上部が傾斜状で下部がU字形を呈し、現状での幅は165cm・深さ66cmである。土層断面の観察から理解されることは、該溝の掘削はAs-B軽石降下後若干の時間の経過があった後のことと見られ、また溝底部の鉄分沈着層や砂層の状態から水流や滞水状態の存在したことが看取できる。俯瞰すれば、本溝は08溝とともに07溝が画する方形区画遺構と平行しており、その外縁を為すものと考えられる。  
**層相**

## 6・05号溝(挿図番号第324・325図)

本溝は遺跡地の西南04号溝の南2mを東流していたものと思われるが、確認できたのはA14・位置  
64グリッドの2mの範囲のみである。走行はN-71'-Eと04溝と同方向を示している。断面形は浅いU字  
形を呈し、幅は50cm・深さ16cmを測る。土層は黒褐色土でAs-B軽石を含み04溝の第1層  
形状・層相

## 6・06号溝(挿図番号第327図 写真番号P L-157)

本溝は遺跡地の南東端に近く、A14・88, 77, 67グリッドの順に北流し、走方向はN-15'-Wを  
位置  
走方向  
とる。該溝は当然直進して10溝に合流するか横切るかするはずだが、現状では10溝の手前で消失  
している。これは2次に互った調査の確認面の相違により、10溝との接点付近で痕跡が失われ  
たためであろう。断面形は逆台形で上幅32cm・深さ11cmを測り、基本的には02溝に平行する溝で  
形状  
層相

## 6・07号溝(挿図番号第324・325・330図 写真番号P L-158・205)

本溝は遺跡地の西南隅に位置し、A14・83, 84, 93, 94グリッドに所在する。該溝は検出され  
位置  
走方向  
た遺物から中世方形区画遺構の一部と見られ、東西に走る溝はN-77'-Eを示し、中世における該  
地域の地割りにほぼあった形で形成されている。断面形はすり鉢状を呈し、上幅260cm・深さ61cm  
形状  
層相

を測る。土層は3層に分層され、第2層にはAs-B軽石が多量に含まれ、第3層の底部から検出  
された多数の礫からは断絶に際して多量の礫を投入して埋没せしめた様子が窺われる。

07号溝は04溝、08溝と共に何等かの中世遺構を構成するものと理解され、その時期はAs-B軽  
石層降下後それほど時間の経過のたたない時期が推定される。

## 6・08号溝(挿図番号第324・325図 写真番号P L-158)

本溝は遺跡地の西南隅07溝の北2mに07溝に平行して位置し、A14・74, 73グリッドと西へ進  
位置  
形状  
層相  
み調査区外へ伸びている。断面形は深いすり鉢状を呈し、上幅290cm・深さ62cmを測り07溝と同規模  
である。土層はAs-Bの混土層で、最下部に粘性のある鉄分沈着層があり滯水状態のあったこと  
が窺われる。該溝は再三述べているように07溝、04溝と共に中世方形区画遺構の一部と理解され  
る。

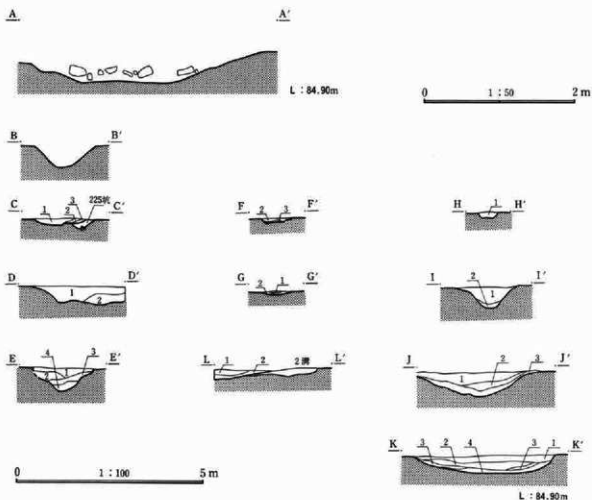
## 6・09号溝(挿図番号第324・325・329図 写真番号P L-158)

本溝は遺跡地の南に位置し、07溝の延長線上にありA14・75, 76, 85, 86グリッドに所在する。  
位置  
形状  
層相  
断面形は皿状を呈し、上幅は350cmを越え深さは48cmを測る。形状は大きな土坑を思わせるが07溝  
との連続として溝としたが、07溝とは画然とした境が存在するため溝とするには多少の疑問が残  
る。As-Bを最上層に含む土層には最低2回の波深の兆候が認められ、土層の堆積の仕方には土坑  
状の遺構に多く見られる三角堆積状の流れ込み土が観察される。

## 6・10号溝(挿図番号第327図)

本溝は遺跡地の南06溝の延長線上に直交して位置し、A14・67グリッドに所在する。該溝は全  
位置  
形状  
走方向  
長6m程の小溝で、断面形は逆台形を呈し、上幅は70cm・深さ8cmを測る。走方向はN-86'-Eで  
西流するものと思われる。また規模や走方向からみてあるいは01溝とつながる可能性もある。

#### IV 遺跡の調査



##### 1号溝土層説明

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 褐色鉄分比着面含む、細砂粒少量含む
2. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 繊維で固い、炭粒少量含む
3. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 2層に類似、鉄分比着面含む

##### 4号溝土層説明

1. 黒褐色(10YR3/2) A=B 多量に含む、粗砂・灰褐色土含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 軽石少量含む、灰褐色土・茶色鉄分比着の斑点あり
3. 灰褐色(7.5YR4/2) 灰褐色土粒埋鉄・軽石・粗砂の混土
4. 褐灰色(7.5YR4/1) 鉄分比着、粘性あり

##### 5号溝土層説明

1. 黒褐色(10YR3/2) A=B 含む、粘性あり

##### 7号溝土層説明

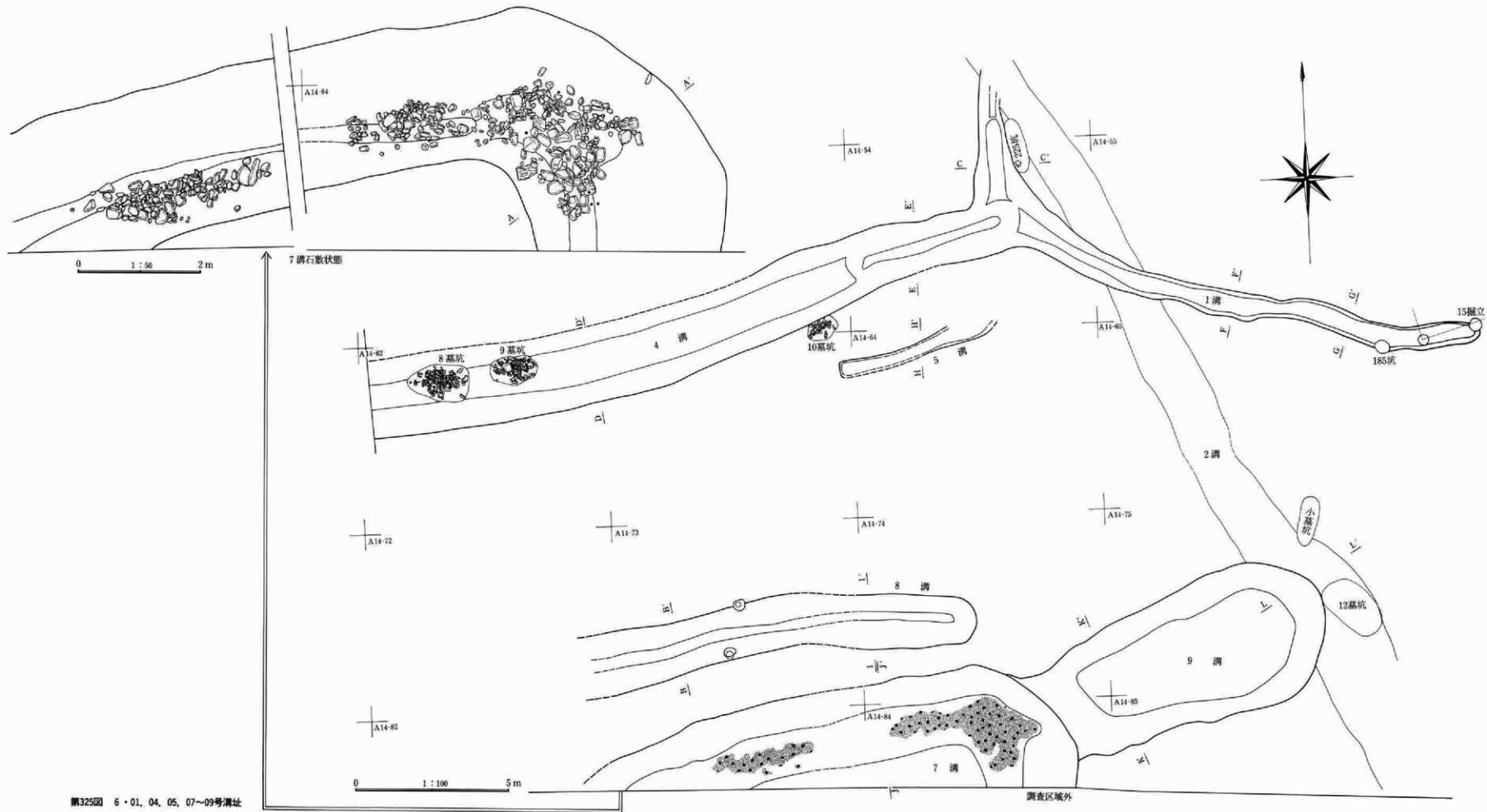
1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) A=B 少量含む、砂質
2. 黒褐色(2.5Y2/2) A=B 多量に含む、礫含む
3. 灰黄褐色(10YR4/2) 粘性あり、礫多量に含む

##### 8号溝土層説明

1. 黒褐色(2.5Y3/2) A=B 混土
2. 黒褐色(2.5Y3/2) A=B 混土、黄色粘性土塊少量含む、粘性あり、鉄分比着あり

##### 9号溝土層説明

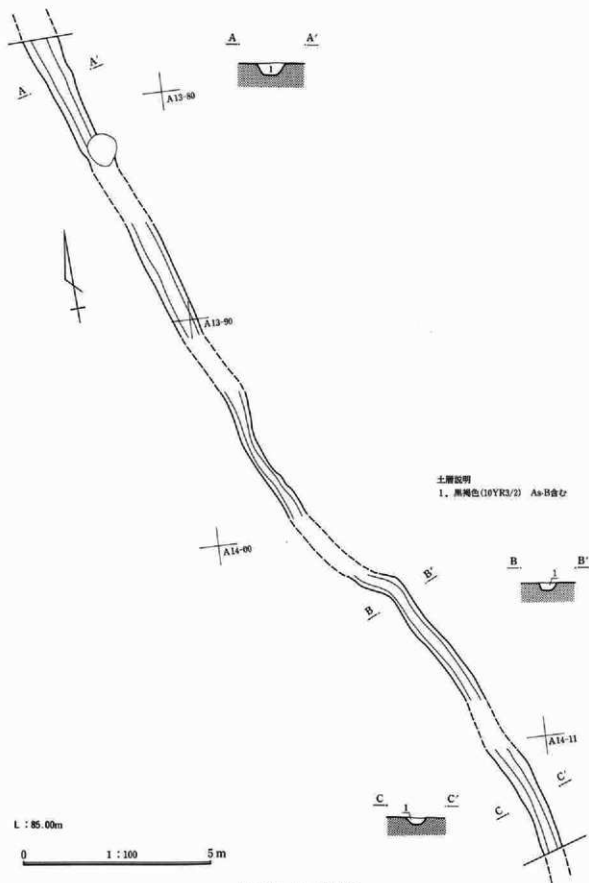
1. 暗褐色(10YR3/4) A=B 含む
2. 褐色(10YR4/4) 礫含む
3. オリーブ褐色(2.5Y4/6) 黄色土塊・茶褐色斑点含む
4. 黄褐色(2.5Y5/4) 黄色土塊含む、シルト質、粘性あり





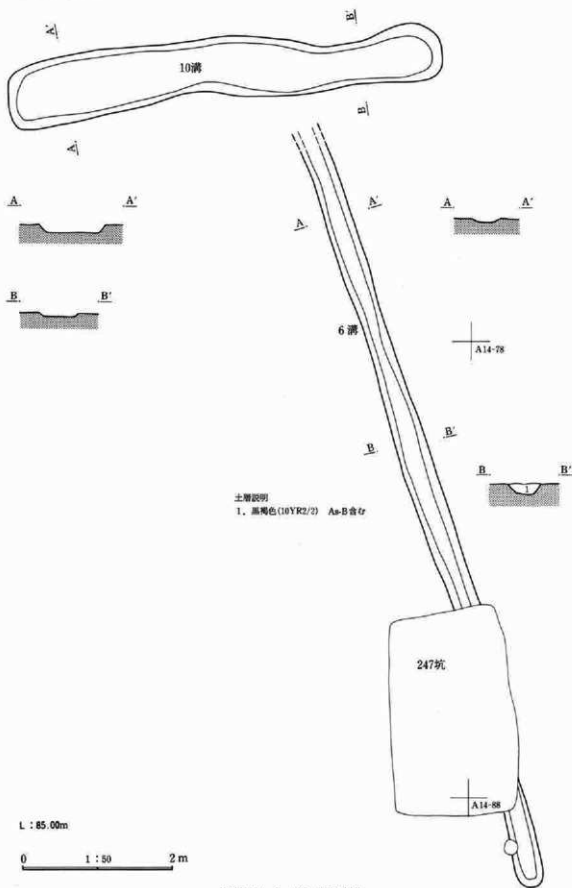


4 下大塚北原地区 (5B・6区) の遺構と遺物



第326図 6・03号溝址

IV 遺跡の調査

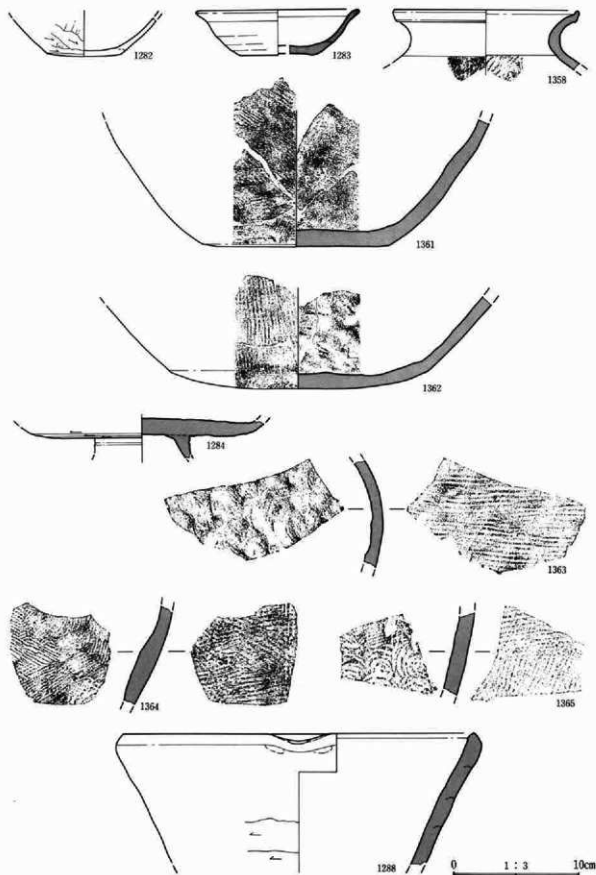


第327図 6・06、10号溝址



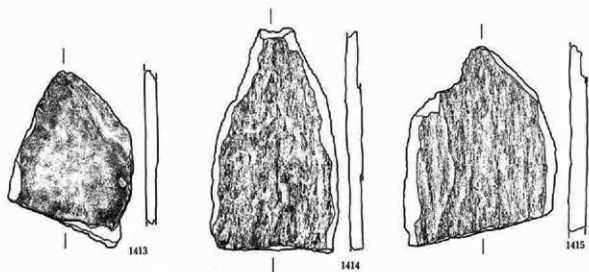
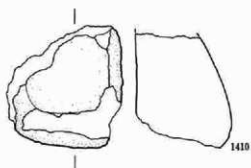
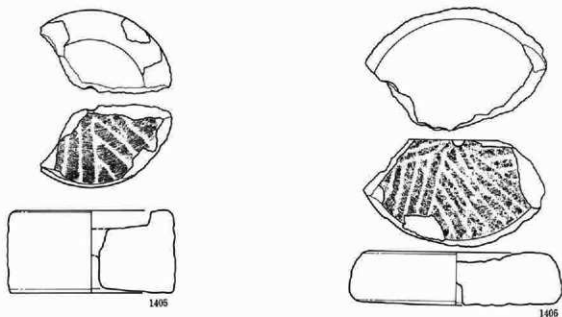


4 下大塚北原地区(5B・6区)の遺構と遺物



第329図 6・02, 09号溝址出土遺物

IV 遺跡の調査



0 1 : 6 20cm

第330図 6・07号溝址出土遺物

## (4) 土坑・土器溜まり・井戸

## 5B区

## ①土坑(挿図番号第332~334・339図 写真番号P L-136・205・206)

5B区の土坑は通算ナンバーで71基を数え、B13・92, 93グリッドに偏在している。また殆どの土坑は柱穴状の円形プランを呈し、土層断面の観察からも柱痕が明瞭に看取されるものも存在する。01土坑では、平面形態は円形を呈し断面形は壁が若干袋状である。規模は102cm×95cmで深さ47cmと他の土坑と比較するとかなり大きく、土層にはAs-B 軽石が多量に観察された。

01土坑  
As-B軽石

## ②土器溜まり(挿図番号第331・339図 写真番号P L-136)

土器溜まりは遺跡地の最西端に位置し2カ所検出された。1号土器溜まりは土師器環が多く、図示した環は20点にのぼる。この1号土器溜まりの位置する所は、低台地が浅い谷底低地に向かう変換点に当たる。また該土器溜まりの東南6mにはしっかりした深い掘り方を有し、主軸方位をほぼ真北にもつ4間×3間の掘立柱建物跡が存在する。

1号土器  
溜まり

## 6区

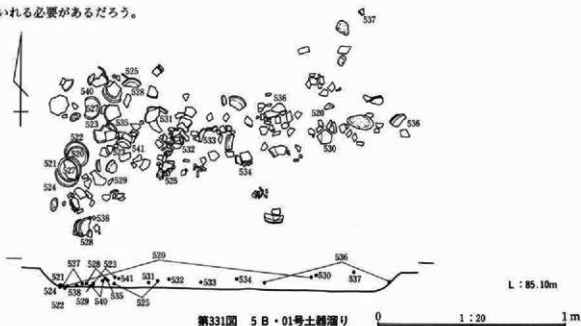
## ①土坑(挿図番号第334~338・340・341図 写真番号P L-158・159・206)

6区の土坑は遺跡地の中央部から南部にかけて02溝の東部分に色濃く分布する。中央部の土坑はほとんどが柱穴状の小土坑で、掘立柱建物跡遺構として多くの部分を組み合わせることができた。遺跡地の南端の土坑群は16, 17号住居址周辺に密集し、大きささまばらで大は長軸2.7mに及び、247土坑(270×165cm)と248土坑(230×210cm)が特に隔絶している。247土坑は覆土の主体がAs-B 軽石の混土で、しかも17号住を切っている。248土坑は17号住と平行して所在し、As-B 軽石は上層に混入しているのみで、出土遺物には丸底タイプの土師器環と鉄製品がある。また15号住と切り合って存在した222土坑からは、器高65cmを越える須臾器大甕2個体が出土している。

中央部土坑  
247土坑  
248土坑  
222土坑

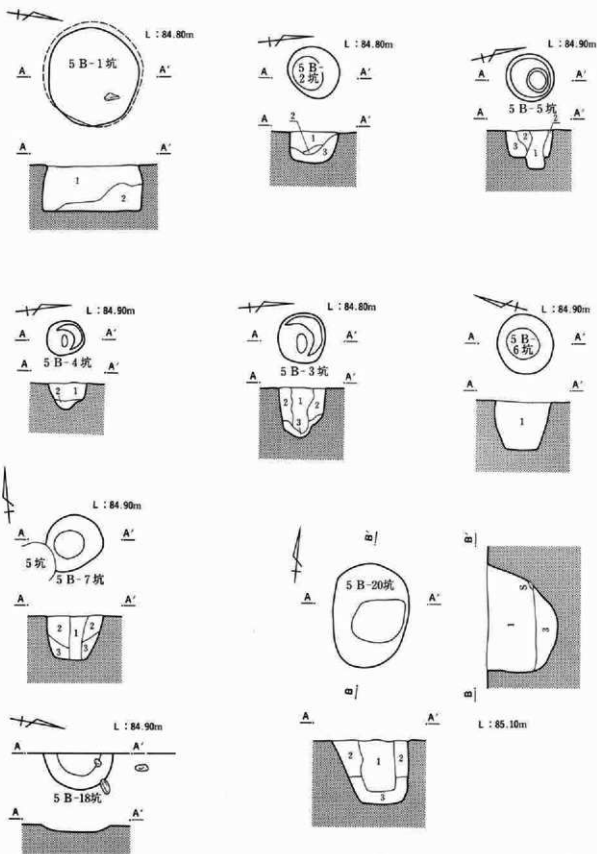
## ②井戸(挿図番号第338図 写真番号P L-158)

06溝の南の延長線上に位置し、その形態から井戸と判断した。方形区画遺構との関係も考慮にいれる必要があるだろう。



第331図 5B・01号土器溜り

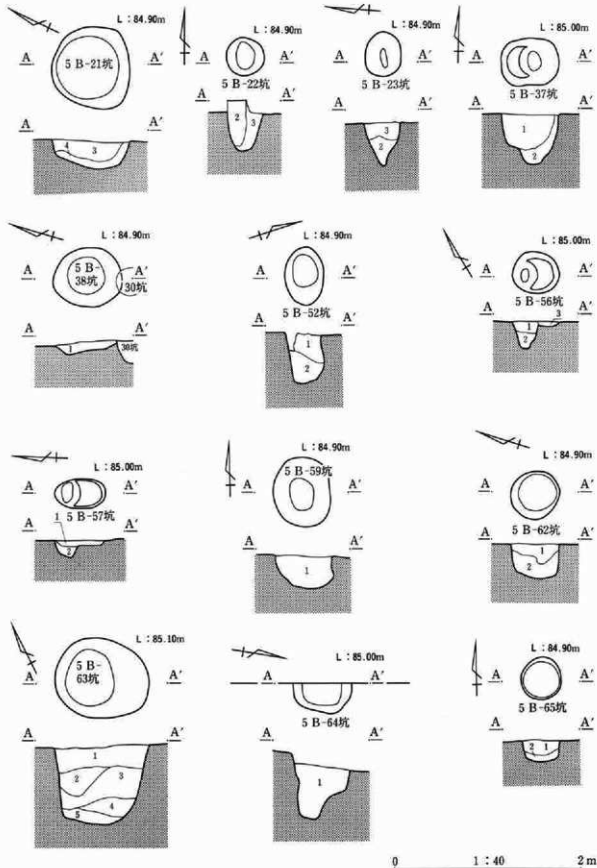
IV 遺跡の調査



第332図 5B・01~07, 18, 20号土坑

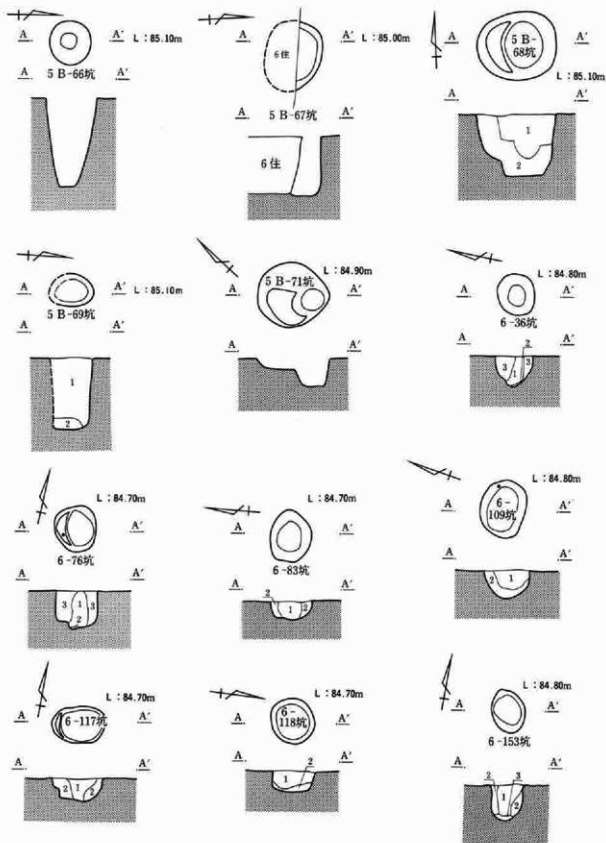


4 下大塚北原地区 (5 B・6区) の遺構と遺物



第333図 5 B・21~23, 37, 38, 52, 56, 57, 59, 62~65号土坑

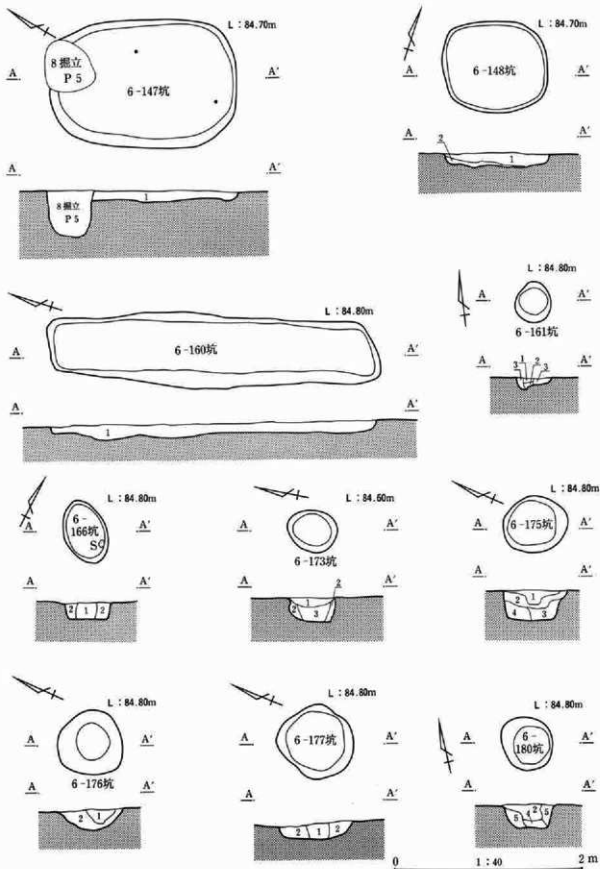
IV 遺跡の調査



0 1 : 40 2 m

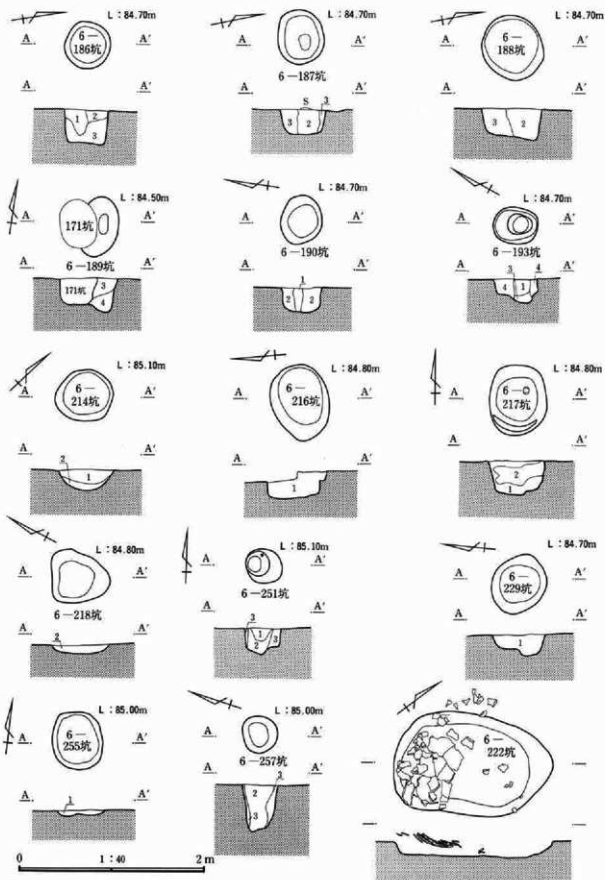
第334図 5 B・66~69, 71, 6・36, 76, 83, 109, 117, 118, 153号土坑

4 下塚北原地区 (5B・6区) の遺構と遺物



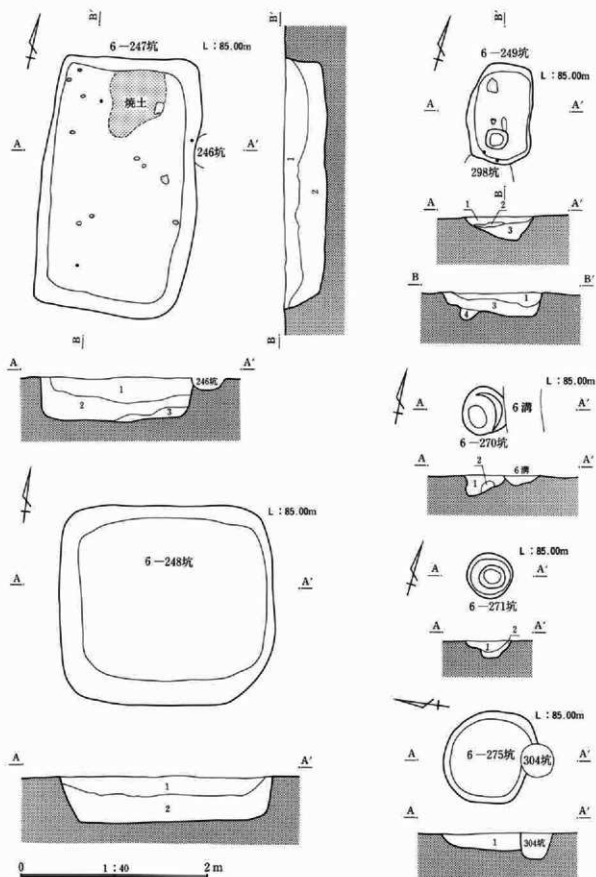
第335図 6・147, 148, 160, 161, 166, 173, 175~177, 180号土坑

IV 遺跡の調査



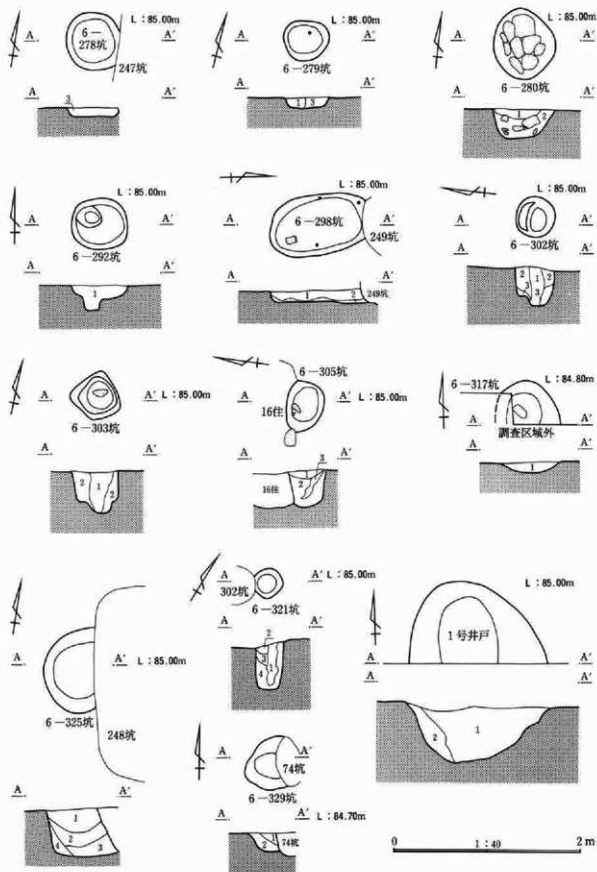
第336図 6・186~190, 193, 214, 216~218, 222, 229, 251, 255, 257号土坑

4 下大塚北原地区 (5B・6区) の遺構と遺物



第337図 6・247～249, 270, 271, 275号土坑

IV 遺跡の調査



第338図 6・278~280, 292, 298, 302, 303, 305, 317, 321, 325, 329号土坑, 01号井戸

#### 4 下大塚北原地区(5B・6区)の遺構と遺物

##### 5B区土層説明

###### 1号土坑

1. 浅黄色(5Y7/4) 暗灰黄色の壤土。A&B 多量に含む
2. 黄褐色(2.5Y5/4) 浅黄色の壤土。1層よりA&B を少量含む。粘性あり、固い

###### 2・3・5号土坑

1. におい黄褐色(10YR5/4) 灰色土・黄色土塊・炭粒含む。粘性あり
2. におい黄褐色(10YR5/4) 灰色土・黄色土塊少量含む
3. 褐色(10YR4/6) 黄色粘土塊少量含む

###### 4号土坑

1. におい黄褐色(10YR4/3) 細礫・焼土・炭粒少量含む粘性あり、固い
2. 暗褐色(10YR3/3) 黄色土層を含む。粘性あり、固い

###### 6・7・21・22号土坑

1. 褐色(10YR4/4) 細礫・焼土・炭粒少量含む。粘性あり、固い
2. 褐色(10YR4/4) 細礫・黄色土塊少量含む。粘性あり、固い
3. 褐色(10YR4/6) 黄色粘土塊含む。粘性あり、固い
4. 褐色(10YR4/6) 黄色粘土塊少量含む。粘性あり、固い

###### 23・37号土坑

1. 褐色(10YR4/4) 細礫・黄色土塊含む。粘性あり、固い
2. 褐色(10YR4/6) 黄色粘土塊含む。粘性あり、固い
3. 褐色(10YR4/6) 黄色粘土塊少量含む。粘性あり、固い

###### 38号土坑

1. オリーブ褐色(2.5Y3/3) 微小礫多量に含む

###### 52号土坑

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 微小礫少量含む、固い
2. 黒褐色(2.5Y3/2) 緻密で固い。微小礫少量含む

###### 56号土坑

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 細砂粒少量含む、固い
2. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) におい黄色土塊・土壌小片少量含む。固い

###### 57号土坑

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 白色微小礫少量含む、固い
2. 黒褐色(2.5Y3/2) 白色微小礫少量含む、固い

###### 59号土坑

1. 暗褐色(10YR3/3) 小礫多量に含む。砂粒含む

###### 62号土坑

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) におい黄色土塊含む
2. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 細粒、固い

###### 63号土坑

1. 褐色(10YR4/4) 砂礫多量に含む
2. 褐色(10YR4/4) 1層に類似。砂礫・黄褐色土塊・焼土・炭粒少量含む
3. におい黄褐色(10YR4/3) 2層に類似。砂礫・黄褐色土塊少量含む
4. 暗褐色(10YR3/3) 黄色土塊少量含む。粘性あり
5. におい黄褐色(10YR4/3) 黄褐色土塊・砂礫少量含む。灰黄褐色粘性土含む

###### 64号土坑

1. 褐色(10YR4/4) 黄色土塊・焼土・炭粒少量含む

###### 65号土坑

1. 褐色(10YR4/4) 焼土・炭粒・灰褐色土少量含む。土層片多量に含む
2. 暗褐色(10YR3/3) 1層に類似

###### 68号土坑

1. 褐色(10YR4/4) 焼土・炭粒・土器片含む
2. 褐色(10YR4/4) 黄色土塊・焼土・炭粒・土層片少量含む

###### 69号土坑

1. 暗褐色(10YR3/3) 黄色土塊・焼土少量含む
2. 褐色(10YR4/6) 黄褐色土塊少量含む

#### IV 遺跡の調査

##### 6区土層説明

###### 36号土坑

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 緻密で固い、細砂粒少量含む
2. 暗灰黄色(2.5Y5/2) やや粘性あり
3. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) におい黄色土塊少量含む、固い

###### 76号土坑

1. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 緻密、粘性あり
2. 灰色(10Y3/1) 細砂土
3. オリーブ褐色(2.5Y4/3) におい黄色少量含む、緻密で固い

###### 83号土坑

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 白色微小礫少量含む、緻密
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 白色微小礫・黄褐色土粒少量含む、固い

###### 109号土坑

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) におい黄色土塊少量含む、緻密
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) におい黄色の凝土塊、固い

###### 110号土坑

1. 黒褐色(2.5Y3/2) 粘性あり
2. 黒褐色(2.5Y3/2) 黄褐色土塊少量含む、緻密

###### 117号土坑

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 緻密、粘性あり、鉄分凝集少量含む
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 黄褐色土粒少量含む

###### 118号土坑

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 黄褐色細砂土塊少量含む
2. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 緻密

###### 133号土坑

1. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 白色微小礫少量含む、緻密で固い
2. 黒褐色(2.5Y3/2) 緻密で固い
3. 黄灰色(2.5Y4/1) 緻密、やや粘性あり

###### 147号土坑

1. におい・黄褐色(10YR4/3) 黄褐色微砂少量含む

###### 148号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) 粘性あり、黄色微砂塊含む
2. 黄褐色(10YR5/6) 微砂主体、暗褐色土塊含む

###### 160号土坑

1. オリーブ褐色(2.5Y4/6) シルト、明黄褐色小礫少量含む

###### 161号土坑

1. 黄褐色(2.5Y5/3) 細砂粒少量含む
2. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 緻密で固い
3. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 固い

###### 166号土坑

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 緻密、黄褐色小礫・灰粒・泥土粒少量含む
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) におい黄色の凝土、微小礫少量含む

###### 173・180号土坑

1. におい黄褐色(10YR4/2) 砂質シルト・暗褐色の凝土
2. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 粘性土、固い
3. 暗褐色(10YR3/3) 砂質シルト・土塊含む、粘性土
4. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 砂質シルト、軟質

###### 175～177号土坑

1. 暗褐色(7.5YR3/4) 灰褐色粘土塊・磁鉄・砂塊含む、粘性あり
2. 褐色(7.5YR4/3) 灰褐色粘土塊・磁鉄・褐色微砂塊少量含む、粘性あり
3. 暗褐色(7.5YR3/3) 灰褐色土・暗褐色土の凝土、粘性あり、固い
4. 褐色(10YR4/4) 灰褐色土・茶褐色土の凝土、磁鉄含む、固い

###### 180・186～188号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) 白色細粒・小石・黄色土塊の凝土
2. 暗褐色(10YR3/3) 小礫・灰粒少量含む
3. 暗褐色(10YR3/3) 白色細粒・小石少量含む、緻密で固い、粘性あり
4. 灰黄褐色(10YR4/2) 砂礫層
5. 灰褐色(7.5YR4/2) 粘性土、磁鉄含む、固い

###### 190・193号土坑

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 緻密で固い、黄褐色土少量含む
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) におい黄色微砂粒少量含む
3. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 緻密、鉄分沈着あり
4. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) におい黄色土塊少量含む

###### 214・216～218号土坑

1. 黒褐色(10YR3/2) A+B 主体、黄色粘土塊少量含む
2. 黒褐色(10YR3/2) 1層に類似



#### 4 下大塚北原地区(5B・6区)の遺構と遺物

##### 229号土坑

1. 褐色(10YR4/4) 黄色細粒少量含む

##### 255・257号土坑

1. 黒褐色(10YR2/3) A+B 混土、褐色土塊含む
2. 黒褐色(10YR2/3) A+B・褐色土塊の混土、粘性あり、固い、炭土粒少量含む
3. 暗褐色(10YR3/4) A+B 少量含む、黄色土塊混土、粘性あり

##### 251号土坑

1. 暗褐色(10YR3/3) 炭土粒・土器片・褐色土粒含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土粒・褐色土粒少量含む、粘性あり、固い
3. 褐色(10YR4/4) 白色細粒含む、粘性あり、固い

##### 247号土坑

1. 黒褐色(10YR2/2) A+B 混土、褐色土塊少量含む
2. 褐色(10YR4/5) A+B・砂粒・黄褐色細砂混土
3. 灰黄褐色(10YR4/3) 砂粒主体、黄褐色細砂土塊少量含む

##### 248号土坑

1. 灰黄褐色(10YR4/2) A+B・黄色土塊・炭土粒の混土
2. 褐色(10YR4/4) 黄色土・褐色土・暗褐色土塊の混土、粘性あり

##### 249号土坑

1. 黒褐色(10YR2/3) A+B 混土、炭土粒・炭粒含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 炭土層、塊少量含む
3. におい黄褐色(10YR4/3) 褐色土・黄褐色土の混土、粘性あり
4. 黒褐色(10YR2/3) A+B 混土

##### 270号土坑

1. 黒褐色(10YR2/2) A+B 混土
2. 褐色(7.5YR4/3) 褐色粘土塊

##### 271・278・279号土坑

1. 褐色(7.5YR4/3) A+B・炭土粒少量含む、灰褐色土の混土
2. 褐色(7.5YR4/3) 炭土・炭粒少量含む
3. 褐色(10YR4/4) 炭土・炭粒少量含む、粘性あり

##### 275号土坑

1. 褐色(10YR4/4) 黄色土塊・小礫少量含む

##### 280号土坑

1. におい黄褐色(10YR5/3) 粘性あり、固い
2. におい黄褐色(10YR4/3) 礫含む、粘性あり

##### 292号土坑

1. におい黄褐色(10YR4/3) 黄色土塊・褐色土塊の混土、A+B 含む

##### 302号土坑

1. 黒褐色(10YR2/3) A+B・小礫少量含む、粘性あり
2. 黒褐色(10YR2/3) 1層に類似、黄色土粒含む
3. におい黄褐色(10YR4/3) 褐色土・黄褐色土の混土、粘性あり、固い

##### 305号土坑

1. 褐色(10YR4/4) A+B・炭土粒含む
2. 褐色(10YR4/4) A+B・炭土塊・炭粒含む、粘性あり、固い
3. 褐色(10YR4/4) 黄色粘土塊・炭土粒少量含む

##### 317号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土粒少量含む、粘性あり
2. 黄褐色(10YR5/6) 黄色土塊・砂塊含む、粘性あり

##### 321号土坑

1. 褐色(10YR4/4) 黄色土塊・礫・土器片混土、粘性あり
2. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土塊含む、粘性あり
3. 暗褐色(10YR3/3) 黄色土塊・塊土粒・土器片少量含む、粘性あり、固い
4. 暗褐色(10YR3/3) 黄色土塊・塊少量含む、

##### 325号土坑

1. におい黄褐色(10YR4/2) 黄色細砂・小礫含む、粘性あり、固い
2. 灰黄褐色(10YR4/2) 黄色土・褐色土・暗褐色土塊少量含む、粘性あり、固い
3. 灰黄褐色(10YR4/2) 2層に類似
4. 暗褐色(10YR3/4) 黄褐色土塊の混土

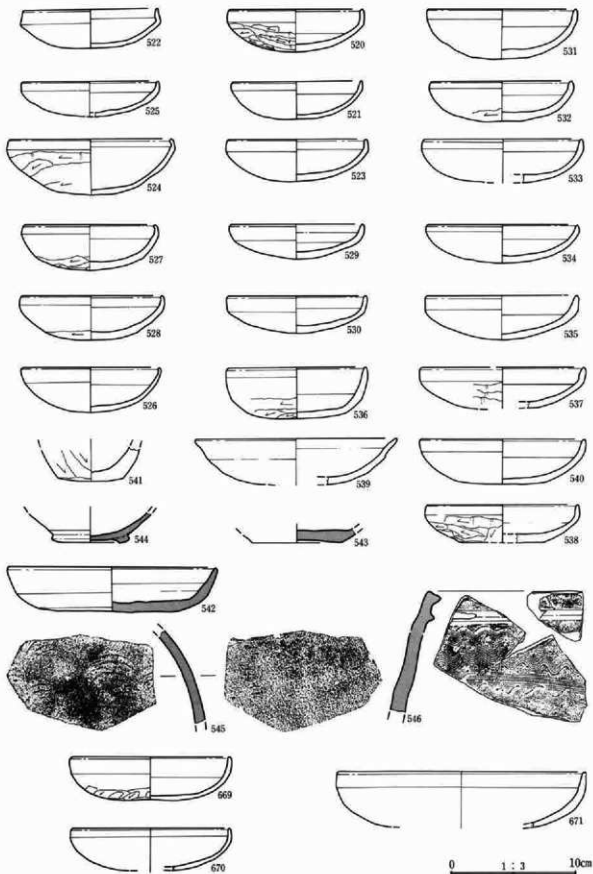
##### 329号土坑

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 細砂粒少量含む
2. 黄褐色(2.5Y5/4) 礫密で固い

##### 1号弁戸

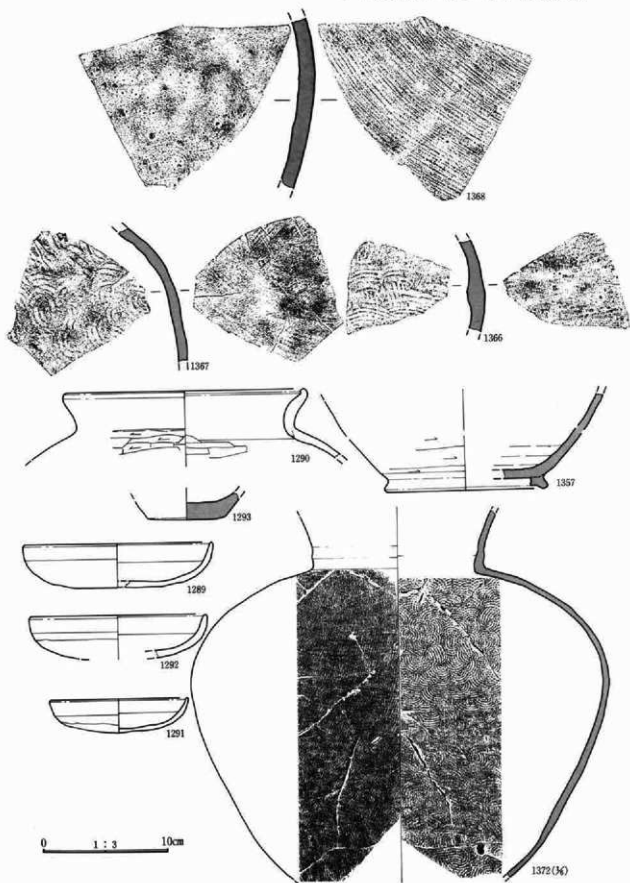
1. 暗褐色(10YR3/4) 粘性土、黄色土粒含む
2. 黄褐色(10YR5/6) 粘性土、黄色土・砂塊少量含む

IV 遺跡の調査



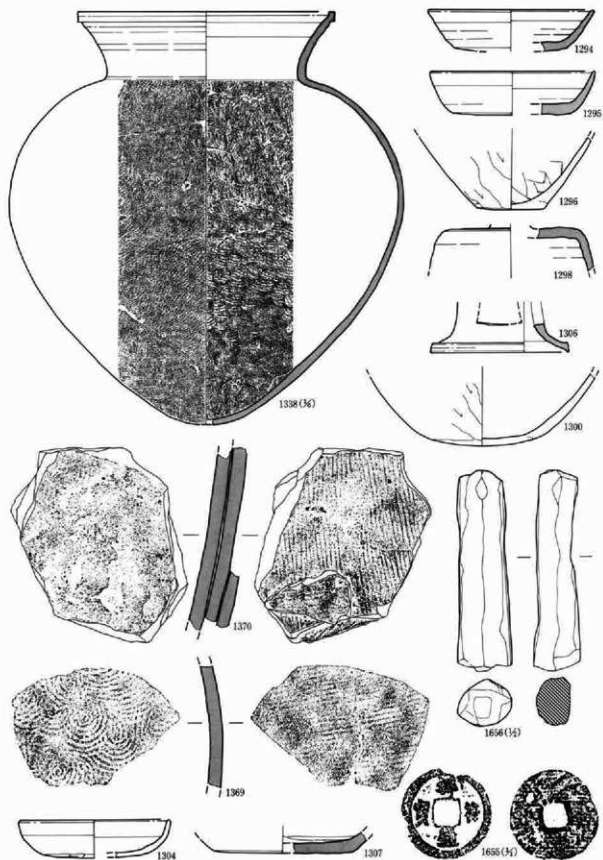
第339図 5B・01号土器溜り, 11・18号土坑出土遺物

4 下大塚北原地区(5B・6区)の遺構と遺物



第340図 6・12, 76, 147, 160, 166, 217, 222号土坑出土遺物

IV 遺跡の調査



第341図 6・222, 223, 248, 249, 280号土坑出土遺物

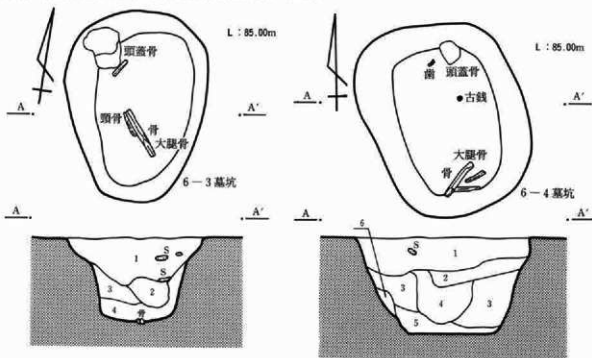
0 1:3 10cm

## (5) 墓 坑 (挿図番号第342～347図 写真番号P L-159～161・206・207)

6区の墓坑群は遺跡地の南部に分布し、大別すると西南端の04溝に絡む一群(01, 08, 09, 10墓坑)と南端の02溝にかかわる一群(11, 12墓坑)と東南端の16号住周辺の一群(02, 03, 04, 05, 06, 07墓坑)に分けられる。仮に西から04溝の一群をA群、02溝の一群をB群、16号住周辺の一群をC群とする。A群墓坑は東西に長軸方向をもち、竈中に内耳土器、播鉢といった中世的様相を示す遺物を出土するが、人骨が確認されたのは01, 10墓坑のみである。B群墓坑は方位に規則性はないが、A群と同様に竈を埋没土中に多量に含み、12墓坑は内耳土器、片口播鉢、等の遺物が出土しているが人骨は確認されていない。C群墓坑はほぼ南北に長軸方向をもち、すべての墓坑から人骨が確認されており、古銭が03墓坑で1枚07墓坑で2枚検出された。

C群墓坑の人骨の状態を鑑定に従って記述してみる。

02墓坑人骨は頭蓋骨、大腿骨、下腿骨、胫骨が残存しており、頭骨を北にして坐髀状態で埋葬されたと思われる。03墓坑人骨は頭蓋骨を北にして大腿骨、胫骨が確認され、骨の状態から女性の可能性が高い。また03墓坑からは紹聖元宝(北宋・1094)と読める古銭が出土している。04墓坑人骨は南北に縦列する一連の墓坑群の一つで、やはり頭蓋骨を北にして歯、大腿骨、下腿骨が検出された。05墓坑は他の墓坑に比べて小振りで、頭蓋骨と大腿骨の間隔も狭く、屈葬の可能性が高い。加えて、検出された犬歯から30歳前後の女性が推定される。06墓坑人骨は比較的残存状況が良好で、北から頭蓋骨、上腕骨、桡骨、尺骨、寛骨、大腿骨、胫骨が確認され、俯きかげんで手を前に組み埋葬された様子が看取される。07墓坑は長軸をほぼ北に向け、人骨は頭蓋骨、上腕骨、大腿骨、胫骨、腓骨が確認され、その有様は06墓坑人骨と似ている。検出された歯の摩耗状況や犬歯の大きさから、25歳前後の女性が推定される。

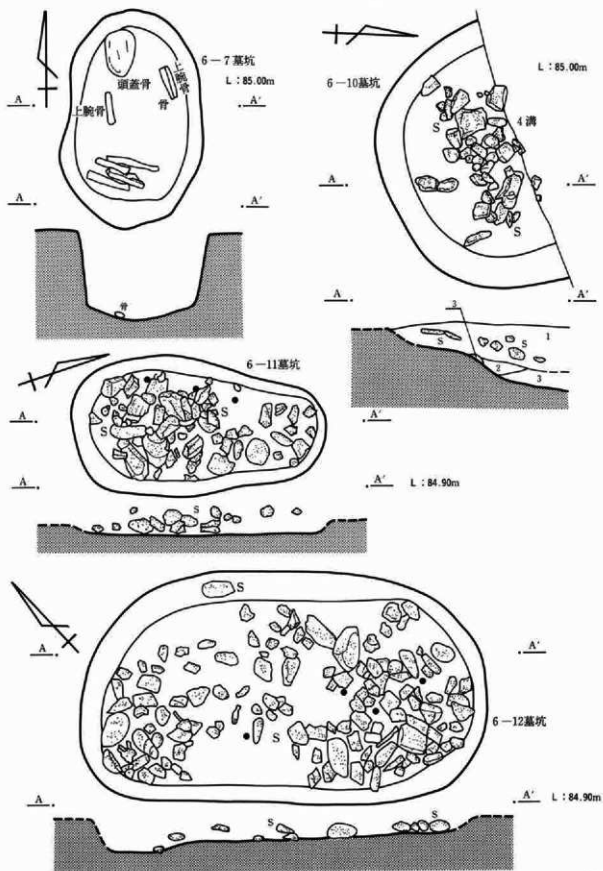


第342図 6・03, 04号墓坑

0 1:20 1m

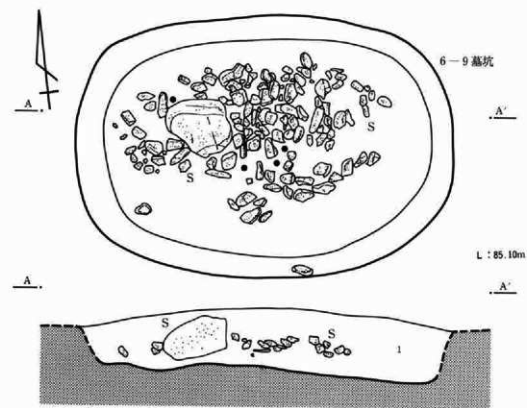
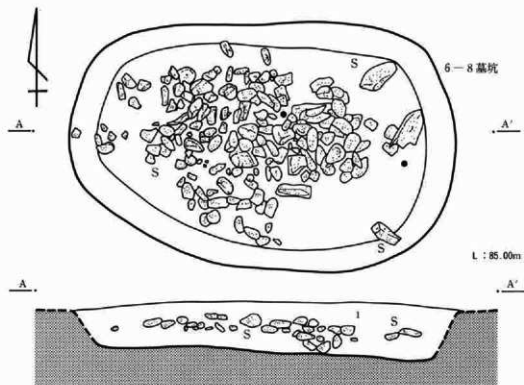


4 下塚北原地区 (5B・6区) の遺構と遺物



第344図 6・07, 10~12号墓坑

IV 遺跡の調査



第345図 6・08, 09号墓坑

0 1 : 20 1 m



4 下大塚北原地区 (5B・6区) の遺構と遺物

1号墓坑土層説明

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 黒褐色土・砂粒の墓土層

2号墓坑土層説明

1. 褐色(10YR4/4) 黄色土・褐色土・暗褐色土の混土、  
焼土・炭粒含む、粘性あり  
2. 灰黄褐色(10YR4/2) 骨片含む、粘性あり

3号墓坑土層説明

1. 褐色(10YR4/4) 暗褐色土塊・黄色土粒・小礫含む  
2. 灰黄褐色(10YR4/2) 暗褐色土塊・黄色土塊・  
細砂塊含む  
3. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土塊含む、粘性あり、固い  
4. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土塊含む、細砂・小礫少量  
含む

4号墓坑土層説明

1. 褐色(10YR4/4) 黄色土塊・焼土・土層片の混土、粘  
性あり  
2. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土塊含む、粘性あり  
3. 暗褐色(10YR3/2) 黄色土塊・焼土粒・土層片少量  
含む、粘性あり、固い  
4. 暗褐色(10YR3/2) 黄色土塊・礫少量含む  
5. 暗褐色(10YR3/2) 砂礫多量に含む  
6. 明黄褐色(2.5Y6/6) 黄色粘土塊

5号墓坑土層説明

1. 褐色(10YR4/4) A-B・黄色土少量含む、粘性あり  
2. 褐色(10YR4/4) A-B・黄色土塊少量含む  
3. 暗褐色(10YR3/2) A-B・黄色土含む  
4. 暗褐色(10YR3/2) A-B 多量に含み、黄色土塊少  
量含む

6号墓坑土層説明

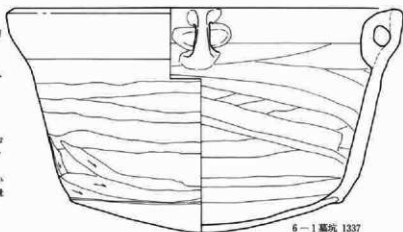
1. 灰黄褐色(10YR4/3) 焼土粒・黄色土塊少量含  
み、炭粒・軽石含む  
2. 暗褐色(10YR3/3) 焼土粒・黄色土塊少量含む、  
A-B 塊含む  
3. 灰黄褐色(10YR4/2) 焼土粒・黄色土塊少量含む、  
粘性あり、骨含む  
4. 暗褐色(10YR3/2) A-B 含む、焼土・炭粒少量含む

8・9号墓坑土層説明

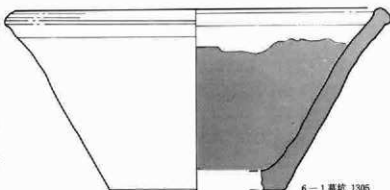
1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 微小礫少量含む

10号墓坑土層説明

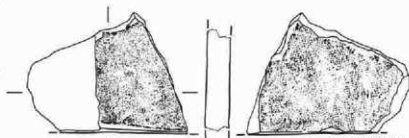
1. 暗褐色(10YR3/3) 微小礫少量含む  
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 細粒、やや固い  
3. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 褐色土塊少量含む、固い



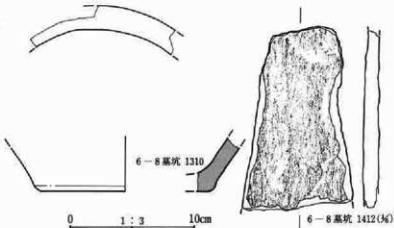
6-1 墓坑 1337



6-1 墓坑 1305



6-8 墓坑 1311

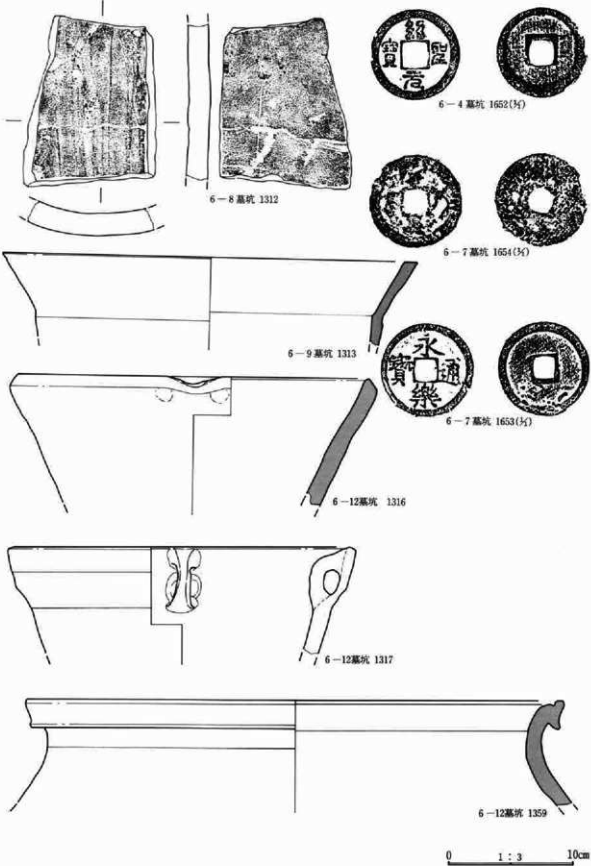


6-8 墓坑 1310

6-8 墓坑 1412(半)

第346図 6・01. 08号墓坑出土遺物

IV 道跡の調査

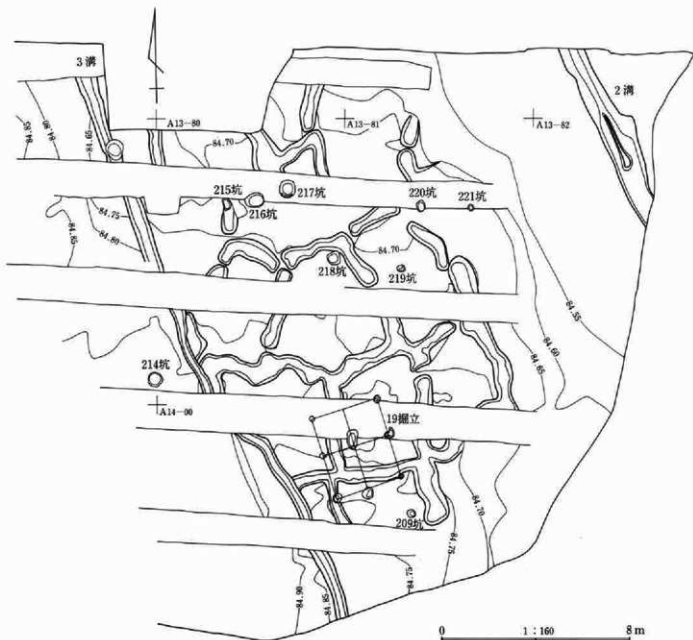


第347図 6・04, 07, 08, 09, 12号墓坑出土遺物

## (6) 水田状遺構 (榑図番号第348図 写真番号P L-161・162)

6区の水田状遺構は該区の西端02溝と03溝に挟まれた範囲に広がっている。As-B 混土層下に確認されたものだが、畦の高まりも薄く、イネのプラント・オパール分析でも「密度は田面部で900~2900個/g、畦部で2100~3100個/gと比較的低い値である。したがって、同遺構で稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入も否定できない。」という結果であった。しかしながら、遺構状況を考えて03溝で引いた水をかけ流して02溝で集水するという灌漑システムが観察され、水田址の可能性も捨て切れない。

絵画  
プラントオ  
パール分析  
灌漑システ  
ム



第348図 6・水田址

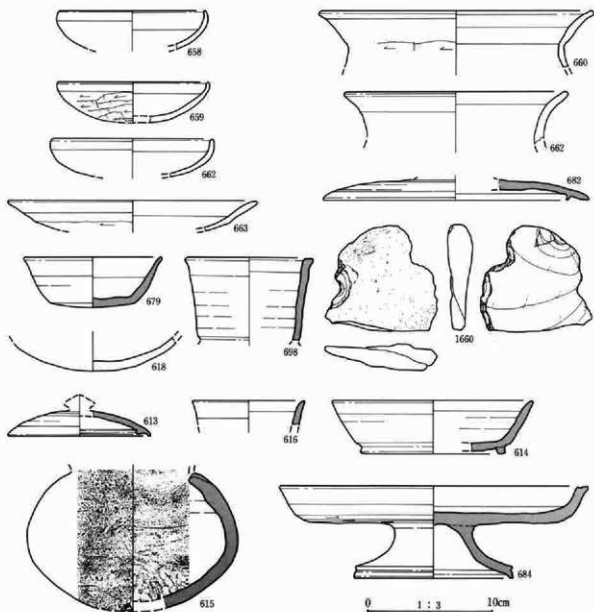
IV 遺跡の調査

(7) グリッド・トレンチ・表採遺物 (採図番号第349～353図 写真番号PL-207・208)

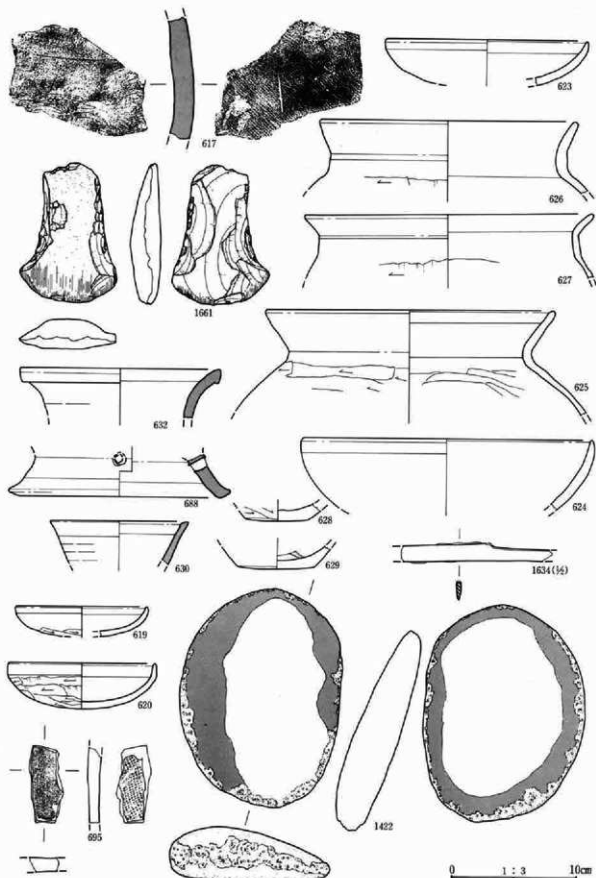
この項ではトレンチ・表採遺物はグリッド遺物としてコメントする。

5 B区 5 B区では遺構確認が困難であったことと、重複が激しかったという二つの理由からグリッド取り上げをしたため、確実に遺構につく遺物以外はグリッド遺物とせざるを得なかった。そのため遺物分布は住居址の重複しているB14・02, 03グリッドと土坑群のあるB13・92グリッドに濃密な散布が認められる。次いで散布密度の濃いのは5 B・01号掘立のあるB13・91グリッドで、カエリをもち宝珠鈕を有する坏蓋、高台付埴、瓶、高坏等の特色ある須恵製品がとりあげられているのは、01号掘立の性格を推定する一資料となるものと思量される。

中世土器 遺構に付く遺物の多い6区のグリッド遺物は僅少で、こね鉢の類の中世土器の取り上げが注目される程度である。

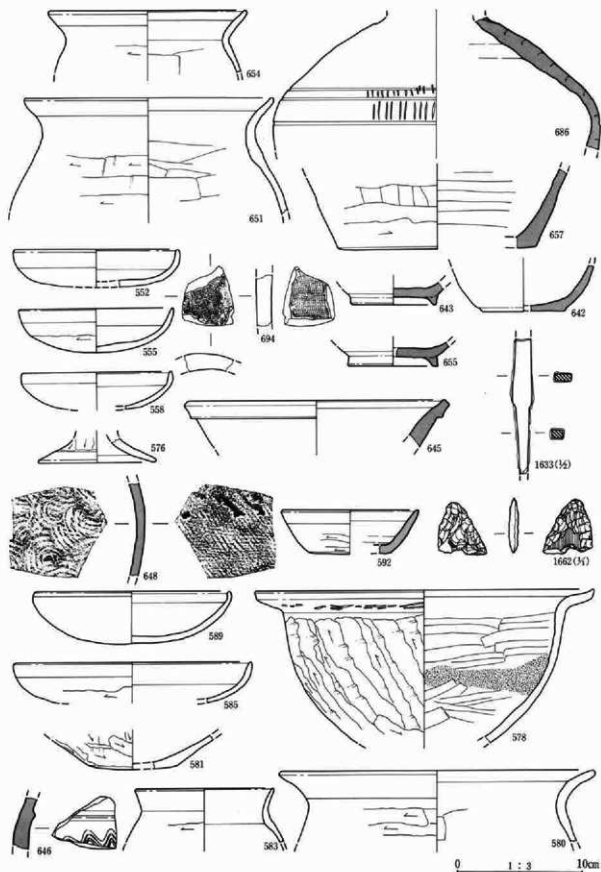


第349図 5 B・グリッド出土遺物



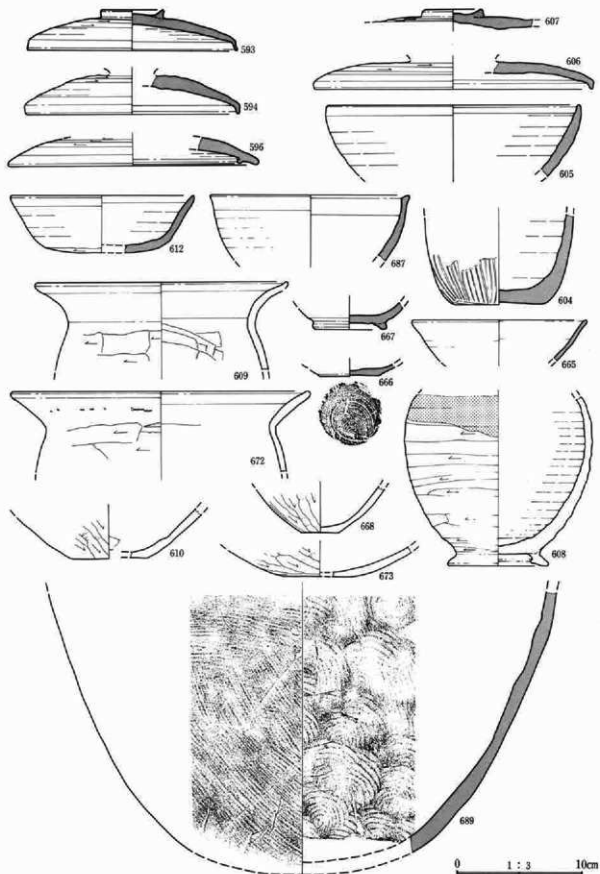
第350図 5B・グリッド出土遺物

IV 遺跡の調査



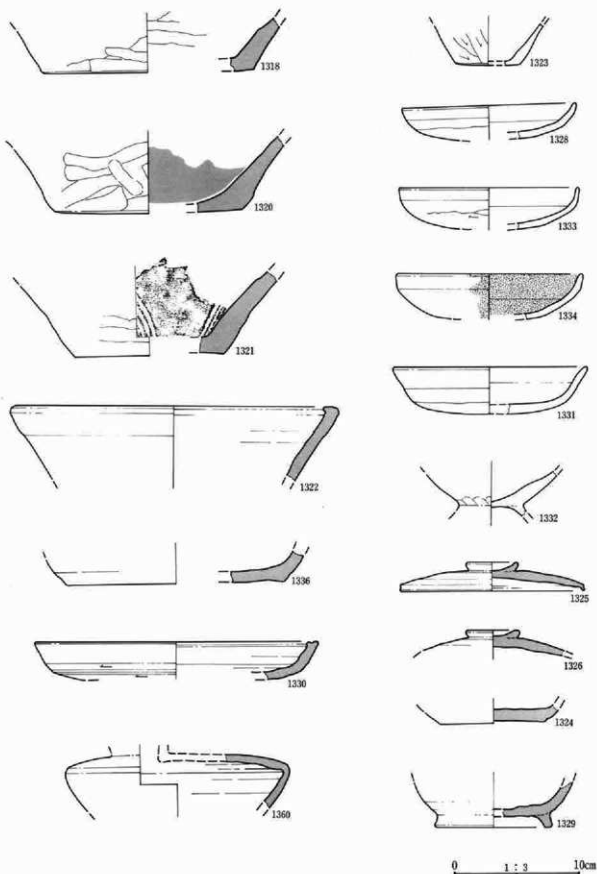
第351図 5B・グリッド出土遺物

4 下大塚北原地区(5B・6区)の遺構と遺物



第352図 5B・グリッド、表採出土遺物

IV 遺跡の調査



第353図 6-グリッド、トレンチ、表採出土遺物



## 5. 本動堂台地区（7区）の遺構と遺物

本動堂台地区の遺構は、比高差1mの崖線上の比較的安定した段丘面に占地している。遺跡地の西方は、藤岡市教育委員会が調査した稲荷屋敷遺跡を越えると、緩やかなスロープを描いて鮎川へと落ち込んでいる。	占地
検出された遺構は、中世基坑・溝、平安時代の竪穴住居・溝、奈良時代の竪穴住居である。該地区は平安時代には居住適地であったようで、何棟もの竪穴住居が重複して存在している。そして1号溝を隔てたすぐ南では、直角に巡る2号溝で区切られた方形区画の一部が検出された。	検出遺構 方形区画

## (1) 竪穴住居址

## 7・01号住居址

遺 構 (挿図番号第354・355図 写真番号P L-165)

本住居址は遺跡地の北東隅に位置し、 $\beta 13 \cdot 91$ グリッドに所在する。近接する06号住とは南西コーナーで切り合っている。確認面の標高は86.90mで、床面高は86.70mを測る。

規模は東西3.60m・南北3.56m、面積15.56 $\text{m}^2$ で、平面形態は東西軸：南北軸の比がほぼ1：1の正方形プランを意図している。主軸方位はN-83°-Eを示す。壁は南壁と西壁で85°~0°のシャープな様相を見せ、北壁と東壁はなだらかな立ち上がりであり、壁高は20cmを測る。

覆土は大きくは4層に分かれ、第1、第3層はレンズ状堆積の住居址内覆土で、4層は三角堆積の流入土で壁崩壊土と思われる。問題はシルト質の第2層土で、多分に水の影響を受けているものと考えられる。

床面には焼土がほぼ全体に分布し、焼土範囲は円形を描き外側ほどレベルが高くなる傾向にある。床面の状態は概ねフラットで掘り込んだ部分には貼床が施され、床面上施設としては円形の貯蔵穴が南東コーナーに穿たれ、周溝が断続的ではあるが各壁下で確認された。貼床の構成土は黒褐色土と黄褐色土が互層の状態掘り込み部分を埋めている。

竈 (挿図番号第356図 写真番号P L-165)

燃焼部は東壁中央を掘り込み作られる。壁面は垂直に立ち上がり焼き締まる。埋土中には焼土塊・地山塊等乱れて入り、煙道方向からの流れ込みも見られる。火床面は竈前から緩やかに窪み、奥壁では湾曲しながら立ち上がる。灰の堆積は薄く、直上に天井崩落土の焼土塊が乗る。煙道部は方形の掘り方を持ち、側壁は焼土化している。煙道口は中央より僅かに南に位置し、水平気味に煙り出しへ伸びる。

遺物の出土状態 (挿図番号第357~359図)

出土遺物総点数は398点を数え、遺物の平面分布は住居址南半部に集中し、特に貯蔵穴周辺にその分布密度が高い傾向にある。層位的には第1層遺物と掘り方遺物にはほぼ大別され、掲載遺物の大部分は掘り方遺物である。遺物の接合関係は土師器壺707、709、710、711に見られ、いずれも炊飯用の煮沸土器と考えられる。接合線は1m程度でそれぞれの散乱状況を示さず、出土遺物のほとんどの出土レベルは床下で、ひとり709のみが竈内と床下と第1層との接合関係を有する。

破片での遺物の出土状態であるのでタイプAはなく、タイプBaが土師器壺706、707、711、須恵器環703で、タイプBは土師器壺710、須恵器環699、700である。

#### IV 遺跡の調査

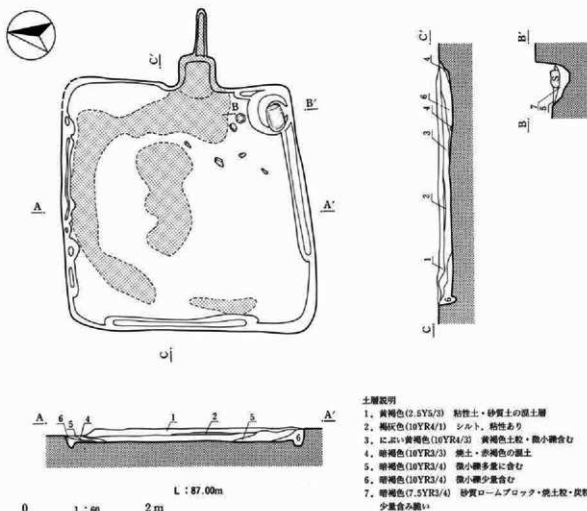
出土遺物 (押図番号第357・358図 写真番号P L-208)

**図示遺物** 遺物総点数は400点に近くかなりの数に上るが、遺存状況は破片が多く、図示した土器は土師器壺4、土師器小壺1、須恵器坏3の8個体にすぎない。

**土師器** 壺は口縁部の形態が①706、明瞭にコ字形を呈する。②707、709、コ字形が幾分不明瞭で頸部の下方が若干開く、の2種類に分けられる。土師器壺706の頸部の表面が波打つような現象は、調整の際の横篋削りによるものと思われる。小壺711の口縁部は壺の②タイプに近く、台付壺であるかも知れない。須恵器坏は口縁部が内湾するもの699と外反するもの700に分けられる。外反する口縁の700は、その形状から高台付壞の可能性がある。

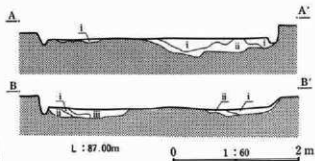
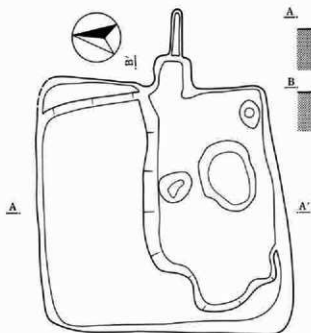
#### 所見

該住居址は床面に灰層が広く分布し一見焼住居とも考えられるが、タイプBaを主体とした遺物廃棄様相から住居廃絶直後の土器廃棄と焼却行為の故と理解したい。



第354図 7・01号住居址

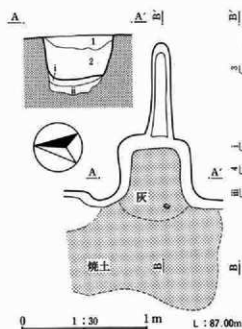
5 本動堂台地区(7区)の遺構と遺物



掘り方土層説明

- i. 黒褐色(10YR3/2) にぶい黄色土塊・微小礫少量含む
- ii. 黄褐色(2.5Y5/4) 砂質土・微小礫多量を含む
- iii. 黄褐色(2.5Y5/4) 砂質土

第355図 7・01号住居址掘り方



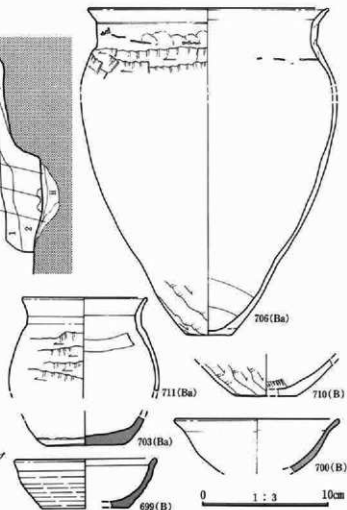
土層説明

- 1. 黄褐色(2.5Y5/3) (住居址埋没土1層)
- 2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 焼土塊・黄色土粒少量含む
- 3. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 細砂土・焼土粒少量含む
- 4. 黒褐色(2.5Y3/1) 灰層, 焼土粒・黄色土粒少量含む

掘り方土層説明

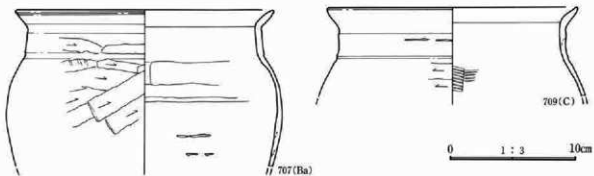
- i. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 焼土塊・炭化物・砂質ロームブロック含む
- ii. 暗褐色(10YR4/3) 砂利・ロームブロック含む
- iii. にぶい黄褐色(10YR4/3) 砂利・ロームブロック含む

第356図 7・01号住居址竪

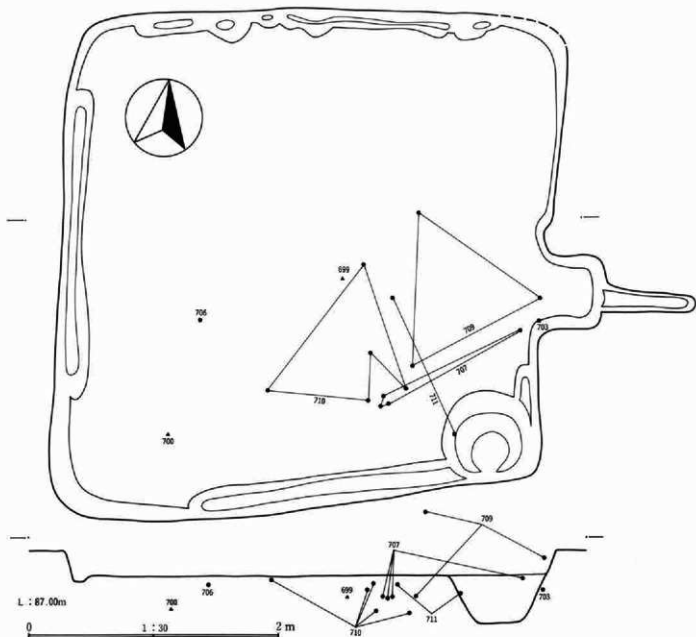


第357図 7・01号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第358図 7・01号住居址出土遺物



第359図 7・01号住居址接合分布図

## 7・02号住居址

## 遺 構（挿図番号第360・361図 写真番号P L-166）

本住居址は遺跡地のほぼ中央に位置し、 $\alpha 14 \cdot 19$ ,  $\beta 14 \cdot 10$ グリッドに所在する。1m北には隣接して03号住があり、南を走る01溝とは切り合いの関係にある。確認面の標高は87.20mで、床面高は86.90mを測る。

絶対的位置  
相対的位置  
確認面

規模は東西1.96m・南北2.68m、面積5.84㎡で、平面形態は東西軸：南北軸の比が1：1.36の横長方形プランである。主軸方位はN-81°-Eを示す。壁は確認作業の時点で01号溝側が深く削平を受けており、北壁と西壁は85°近い明瞭な立ち上がりだが、東壁と南壁は僅かな残存状況を示している。壁高は最大で30cmを測る。覆土は全般に砂質で2層に分かれ、第1、2層ともレンズ状堆積である。

規模・形態

主軸方位  
壁

覆土

床面はフラットで貼床が施され、貼床の構成土は暗オリーブ褐色土とロームブロックの混土層である。掘り方は該住居址の南部部分1/3が掘り込まれ、北西コーナー附近に径50cmの円形土坑が穿たれている。

床・貼床

掘り方

## 竈（挿図番号第362図 写真番号P L-165）

燃焼部は東壁中央南寄りの壁を掘り込み作られる。方形の掘り方を持つが、掘り込みは浅く壁面の焼けは弱い。火床面は床面とほぼ同レベルであり、煙道部まで同レベルで伸びる。焼土・炭・灰の混土が見られ、直上に土器片が出土している。煙道部は側壁上部に弱い焼けが見られ、煙道内にも焼土・灰・炭・土器片等混じる。

燃焼部

火床面

煙道部

## 遺物の出土状態（挿図番号第363・364図）

出土遺物総点数は126点を数え、遺物の平面分布は住居址中央部に多い。層位的には床直遺物は少なく、第1層に属する住居外から流入したと思われる遺物が大半を占める。遺物接合は殆ど認められず、ひとり須恵器高台付塊が約15cmのレベル差で接合されたが、それとても第1層の中の混在と認識できる。遺物の出土状態はタイプAが須恵器高台付塊712のみで、タイプBが須恵器高台付塊715で、残りはタイプCである。

平面分布

遺物接合

タイプ

## 出土遺物（挿図番号第363図 写真番号P L-208・219）

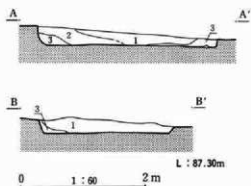
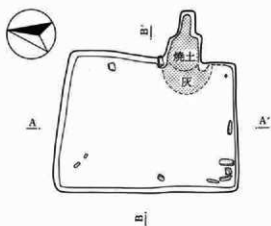
01号住に比べて須恵器の比率の高い住居址の故か、図示したのは須恵器甕1、須恵器高台付塊4、磁石1の6個体である。遺存状況は高台付塊712、713を除いて、いずれも破片として出土している。高台付塊の法量には大小の2種類があり、さらに小形の高台付塊は形態と調整手法から3タイプに分けられる。①713、体部が外へ開き口縁部がさらに外反し、ロクロ目の明瞭なタイプ。②714、体部が外へ開くが口縁部は外反せず、ロクロ目の明瞭なタイプ。③712、体部が内湾し口縁部に僅かな外反傾向が見え、ロクロ目は顕著でないタイプ、これらはみな高台の貼付が難であるという共通点を持つが、若干の時期差をもつものと思われる。

図示遺物

## 所 見

該住居址は01溝と切り合っており、土層の様相から01溝→02号住と判断した。床面に近い遺物は僅少で、遺物の多くは上層堆積時の廃棄遺物が大半を占める。

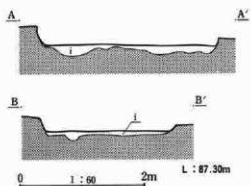
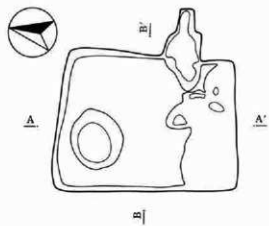
IV 遺跡の調査



土層説明

1. 暗褐色(10YR3/3) 黄色細砂塊・砂利少量含む
2. 暗褐色(10YR3/3) 黄色細砂・褐色土の凝土
3. 暗褐色(10YR3/3) 小礫少量含む

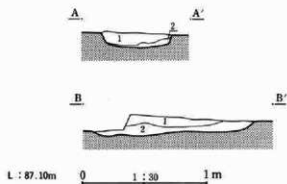
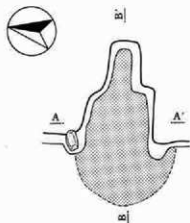
第360図 7・02号住居址



掘り方土層説明

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) ロームブロック・軽石の風土層

第361図 7・02号住居址掘り方

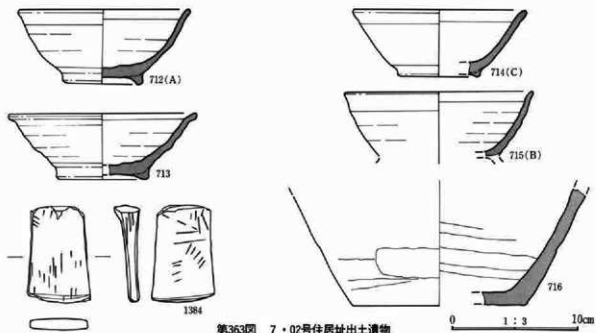


土層説明

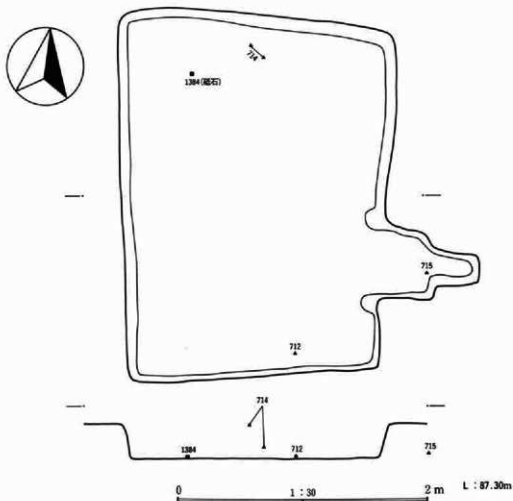
1. 暗褐色(10YR3/3) 黄色細砂塊・砂利少量含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 灰・焼土・灰含む。軽石少量含む

第362図 7・02号住居址竈

5 本駒堂台地区（7区）の遺構と遺物



第363図 7・02号住居址出土遺物



第364図 7・02号住居址接合分布図

#### IV 遺跡の調査

##### 7・03号住居址

遺 構 (挿図番号第365・366図 写真番号P L-166)

絶対的位置 本住居址は前述の02号住の北1mに位置し、トレンチによって北壁を欠失している。所在する  
確認面 グリッドは $\alpha 14\cdot 09$ ,  $19$ ,  $\beta 14\cdot 00$ ,  $10$ にまたがっている。確認面の標高は87.25mで、床面高は87.10mを測る。

規模・形態 規模は東西2.26m・南北2.28m、推定面積6.03m<sup>2</sup>で、北壁が削平されているために平面形態の  
全体は不明だが、東西軸2.26mを測り北西隅の回り具合から、正方形プランを意図しているもの  
主軸・壁 のと思われる。主軸方位はN-88°-Eとほぼ東を向いている。壁は70°と若干緩い傾斜をもって上  
覆土 がり、壁高は平均20cmである。覆土は3層に分けられ、1 a層は住居址内覆土で1 b層は壁崩壊土  
の流入と見られる。

床・貼床 床面はフラットで貼床が全面に厚く施されており、南東コーナーには隅丸方形の貯蔵穴が穿た  
掘り方 れている。掘り方は中央部が僅かに高まっているが、全面掘り盛められているとわいていい。

竈 (挿図番号第367図 写真番号P L-167)

燃焼部 燃焼部は東壁中央僅かに南寄りの壁を掘り込み作られるが、竈左焚き口部柱状の砂岩が埋め  
込まれており、袖の補強材の可能性があり、燃焼部の中心は東壁の延長線上にあったとも考えら  
火床面 れる。火床面は砂岩脇より窪み、中央部ではレンズ状を呈し、グラグラと煙道に伸びる。灰の堆  
煙道部 積は見られる。奥壁寄りでは、底面の焼けた地山塊主体の天井崩壊土が乗る。煙道部は方形の掘  
り方を持つ。壁面の焼けは弱い。

遺物の出土状態 (挿図番号第368・369図)

総点数 出土遺物総点数は271点を数え、出土遺物中の須恵器の割合は34%と高い比率を示し、灰軸陶器  
平面分布 も1%と比較的高い検出率である。遺物の平面分布は住居址のほぼ全面に及び、層的には10~20  
掲載遺物 cm床面から浮いている小破片の遺物が多く、掲載遺物は7点に過ぎない。小破片遺物が多い割合  
タイプ には接合関係が見られず、遺物廃棄の一つのパターンを示している。遺物の出土状態はタイプA  
はなく、タイプBに須恵器環719と羽釜723, 724がある。残りは全てタイプCである。

出土遺物 (挿図番号第368図 写真番号P L-208)

須恵器環破片あるいは高台付塊破片の出土量の多い住居址で、羽釜と灰軸陶器に特徴をもつ。

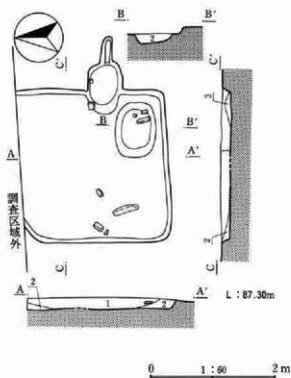
図示遺物 実測可能な個体は7個体で、羽釜2, 須恵器環2, 須恵器高台付塊1, 灰軸陶器高台付塊2, で  
須恵器 ある。須恵器環719は湾曲した体部をもち、該期のものにしては厚手で他住居址からの混入の疑い  
羽釜 がある。羽釜は口縁部723と底部724の一部が図示でき、723はかなりしっかりとした造りをしてい  
る。須恵器は底径比が2で、硬質な焼き締まりをもつ。高台付塊は底部717を掲載する。717は硬  
灰軸 質の焼締と断面が台形の雑な高台の貼付が特徴的である。灰軸陶器は2種類あり、内面に灰軸の  
施される721と漬け掛けの720に分けられる。721は体部が開いて口縁部が外反する特徴をもち、猿  
投窓のK-5窓式に相当するものと思われる。また720は体部が湾曲し丸味をもつ高台の特徴から、  
猿投窓O-53窓式に当てられよう。

所 見

該住居址は須恵器の出土率の高さと灰軸陶器・羽釜の出土に特色をもち、小破片の遺物廃棄は  
住居址埋没最終期に集中している。



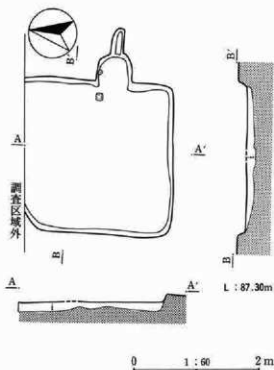
5 本動室台地区（7区）の遺構と遺物



土層説明

1. 暗褐色(10YR3/3) 小礫・砂利・炭粒・焼土粒少量含む
2. 褐色(7.5YR4/4) 小礫・砂利少量含む、焼土粒含む
3. にぶい黄褐色(10YR4/3) 小礫・軽石多量に含む

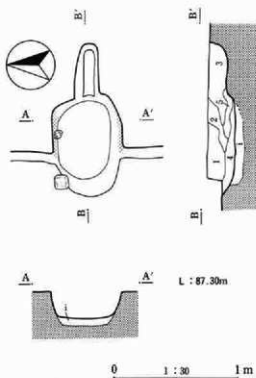
第365図 7・03号住居址



掘り方土層説明

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 小礫・砂質ロームを多く含む濕土層

第366図 7・03号住居址掘り方



土層説明

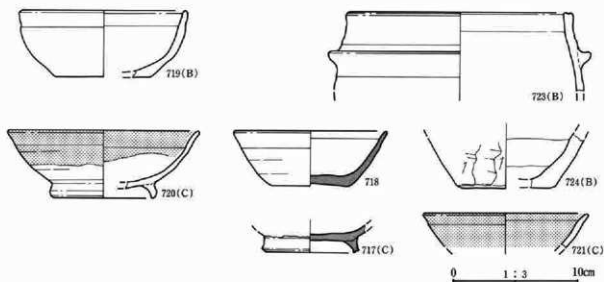
1. にぶい黄褐色(10YR4/3) (住居址埋没土1層)
2. 暗褐色(10YR3/4) 細礫石・砂少量含む
3. 褐色(10YR4/4) 砂利・焼土粒・黄褐色土塊含む
4. 暗褐色(10YR3/4) 2層に類似、焼土粒含む
5. にぶい黄色(2.5Y6/4) 黄色粘性土塊・焼土塊の濕土

掘り方土層説明

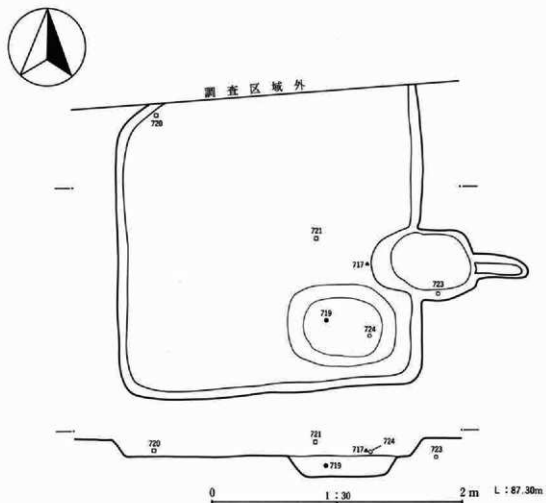
- i. 暗褐色(10YR3/4) 焼土粒・炭粒少量含む

第367図 7・03号住居址竪

IV 遺跡の調査



第368図 7・03号住居址出土遺物



第369図 7・03号住居址接合分布図

## 7・04号住居址

遺 構 (挿図番号第370・371図 写真番号P L-167)

本住居址は集落群の西端に位置し、α13・98, 99, α14・08, 09の4グリッドにまたがって所在する。近接する住居址は、ほとんど接するようにして16号住が北に、15号住が南東1mに存在する。確認面の標高は87.40mで、床面高は87.10mを測る。

規模は東西2.96m・南北3.04m、面積10.83㎡で、平面形態は東西軸・南北軸の比が1:1.02の正方形プランを呈している。主軸方位はN-86°Eとほぼ03号住と同じ方位をとっている。壁は、西壁を除いてほぼ垂直に近い立ち上がりを示しシャープであり、壁高はおよそ30cmを測る。覆土は住居址内覆土の第1a層と流入土の1b, 2a, 2b層に分層され、3b, 4, 5a層は電崩落土である。

床面には貼床が施され、床面上には南東コーナーに円形の貯蔵穴が穿たれている。また掘り方に見られる南壁下の並列した小ピットは、入り口施設にかかわるものと推測される。貼床の構成土は鉄分の沈着した褐色土で、水の影響を多分に窺わせる。掘り方は西壁際が掘り込まれ、北東・南西の対角コーナーに不整形の土坑が穿たれている。特に北東コーナーの土坑は、その位置から旧竈に伴う貯蔵穴の可能性がある。

竈 (挿図番号第372・373図 写真番号P L-167)

燃焼部は東壁中央部壁を掘り込み第1竈と、北壁東寄り壁を掘り込み第2竈がある。両竈とも燃焼部の中心は壁の延長上にあり、袖を有していた痕跡が見られた。第2竈は第1竈使用時には埋め戻され、袖等と除去されている。火床面直上には底面の焼けた地山混土塊が乗る。また中心から竈前にかけて大きく掘り込まれている。第1竈は壁面がほぼ垂直に立ち上がり、上半部が焼き締まる。燃道部は埋土下層に底面の焼けた天井崩落土の黄褐色ローム塊がある。遺物は土師器甕がくずれた状態で出土している。袖は焚き口部に内湾気味に地山の痕跡が認められた。火床面は奥壁に向かって、緩い曲線で立ち上がる。

遺物の出土状態 (挿図番号第374～376図 写真番号P L-168)

出土遺物総点数は280点を数え、遺物の平面分布は住居址全面に亘っているが、若干貯蔵穴周辺に分布密度が高い傾向にある。層位的には第1a層に属する床面から20cm程度浮いた遺物群と、床面に近い遺物群・掘り方に含まれる遺物群に大別される。遺物接合分布図を見ると接合線の間接合関係は3点と比較的少なく、土師器環732が1.7mの距離で接合されている。接合遺物の出土レベルは最大で15cmのレベル差を示すが、同一層内の接合関係が認められる。タイプAはなく、タイプBが土師器甕726, 729, 須恵器高台付皿737で、残りはタイプCである。

出土遺物 (挿図番号第374・375図 写真番号P L-208)

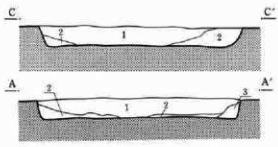
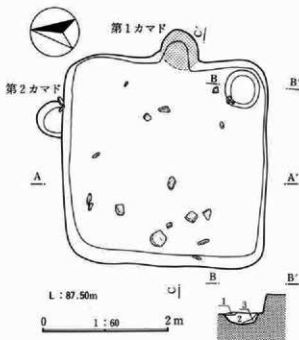
図示した遺物は破片が多く、土師器甕5, 土師器小壺1, 土師器環1, 須恵器甕2, 須恵器環2, 須恵器高台付皿2, 石鏃1, 縄文前期・中期の深鉢破片2の16個体である。土師器甕は口縁部の形態から3種類に分かれ、①727, 口縁の外反が強く、頸部と体部の境界を横ナアにより明瞭に意識するコの字口縁, ②725, 口縁が外反して口縁部と頸部の境界を意識し、頸部に巻き上げ痕を残すコの字口縁, ③726, 口縁が外反し頸部に巻き上げ痕が残るが、体部との境界が明瞭でなくもはやコの字口縁とは言えないの3タイプがある。遺存状況は口縁部破片3(725, 726, 727)と底部破片2(729, 730)である。土師器小壺728は形態も調整手法も②のコの字口縁甕と同タイ

IV 遺跡の調査

ブテ、台付甕であることが予想される。土師器環732は丸底から平底への過渡期的様相を示し、体部が直線的に開き始めている。須恵器740は全くの破片のため様相は不明。須恵器環733は幾分内湾気味の体部をもち底径比が2で、734は大きめの底部をもつ。須恵器高台付皿736は口縁が大きく外反する。

所見

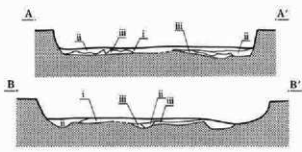
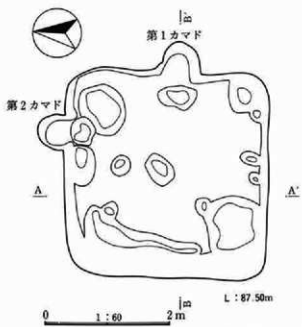
該住居址の貼床土は鉄分の沈着した褐色土で6・08号住の貼床土と類似しており、土器様相からもほぼ同時期の所産と理解される。また遺物廃棄も恒常的に為されていたものと考えられる。



土層説明

- 1. におい褐色(7.5YR5/4) 微小礫多量を含む、炭化物粒・土器片含む
- 2. 褐色(7.5YR4/4) 微小礫少量含む、炭化物粒・土器片含む
- 3. におい黄褐色(10YR4/3) 暗褐色の凝土層、炭化物粒含む

第370図 7・04号住居址

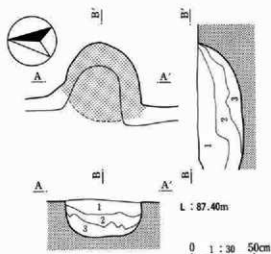


掘りか土層説明

- i. 褐色(10YR4/4) 小礫・炭鉄含む、固い
- ii. 暗褐色(10YR3/3) 小礫・黄色土塊含む、焼土・炭粒少量含む
- iii. 黄褐色(2.5Y5/6) 黄色粘性土塊主体、褐色土含む

第371図 7・04号住居址掘り方

5 本動堂台地区(7区)の遺構と遺物

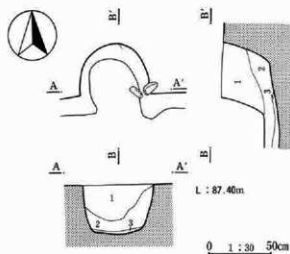


土層説明

第1窟

1. 褐色(7.5YR4/4) (住居址埋込土2層)
2. にぶい黄褐色(10YR4/3) にぶい黄色焼・微小礫・焼土塊少量含む
3. 褐色(10YR4/4) 細粒・焼土塊・灰粒含む, 固い

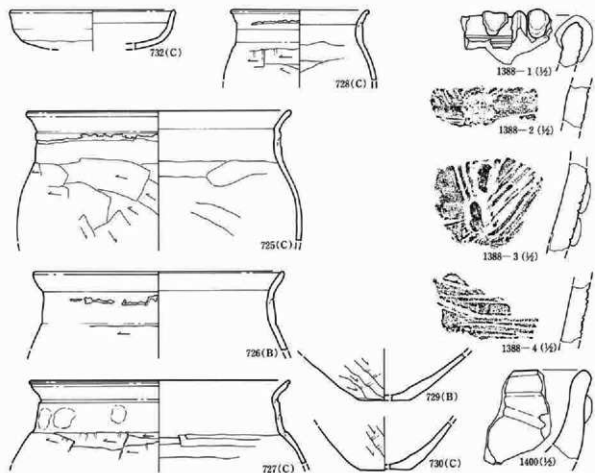
第372図 7・04号住居址第1窟



第2窟

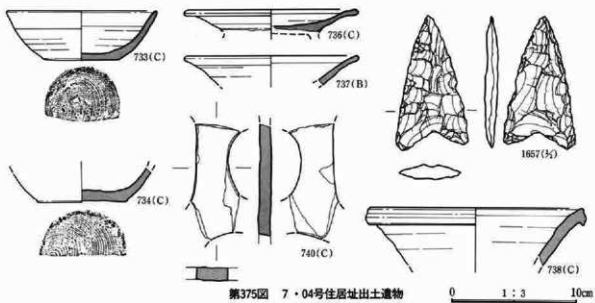
1. 暗褐色(10YR3/4) 小礫少量に含む, 黄色土塊含む
2. 黄褐色(7.5Y5/6) レッド質, 焼土塊・灰粒・小礫・褐色土含む
3. 黒褐色(10YR2/3) 黄色土塊・焼土塊・灰粒・灰粒含む

第373図 7・04号住居址第2窟

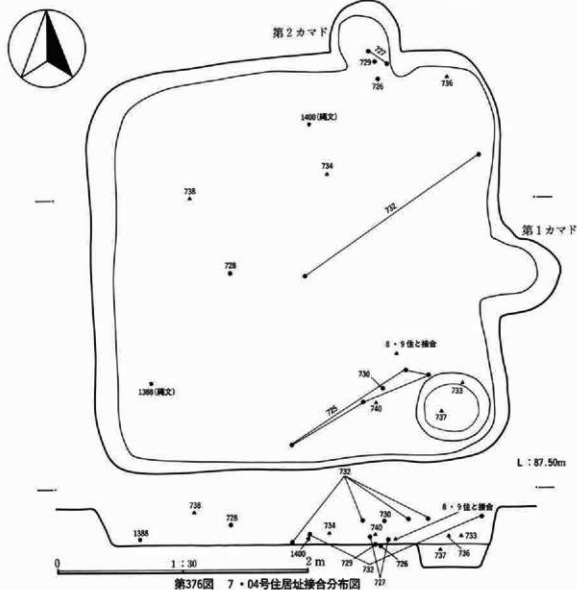


第374図 7・04号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第375図 7・04号住居址出土遺物



第376図 7・04号住居址接合分布図

## 7・05号住居址

遺 構 (挿図番号第377・378図 写真番号P L-168)

本住居址は7区の竪穴住居址群から約10m離れて位置し、 $\alpha 14-07$ グリッドに所在する。近接する住居址はなく、礫層を穿って構築されている。確認面の標高は87.60mで、床面高は87.45mを測る。

規模は東西2.56m・南北3.14m、面積8.64 $\text{m}^2$ で、平面形態は東西軸・南北軸の比が1:1.22の横長方形プランを呈する。主軸方位はN-105°-Eである。壁は脆い礫と砂質土で、全般的に緩い傾斜をもち、壁高は15cmを測る。覆土は2層に分けられ、第1、2層ともレンズ状堆積の住居址内覆土である。

床面は貼床を施されているが小礫の多い床で、南東コーナーには不整形の貯蔵穴が穿たれている。貼床の構成土は、小礫を多く含む暗褐色土で締まりは弱い。掘り方は北東コーナーと西壁寄りに不整形の土坑が穿たれている。

電 (挿図番号第379・380図 写真番号P L-168)

燃焼部は東壁南寄りに壁を掘り込み作られる。この住居は砂礫層を掘り込み作られているため、電被覆には黄褐色粘質土が盛られていた。電外縁部や電内崩落土中に黄褐色粘質土が残っていた。火床面は薄い灰及び焼土の堆積があり、奥壁に向かって緩い曲線で立ち上がる。電前から左側に土器片や黄褐色粘質土塊の広がりがあり、崩落時に散乱したものと思われる。

遺物の出土状態 (挿図番号第383図 写真番号P L-168)

出土遺物総点数は403点を数え、遺物の平面分布は奥・貯蔵穴周辺を中心とした該住居址の南半部に集中している。層位的には第2層に属し、しかも床面に極めて近い遺物が多数存在した。遺物接合分布図は接合線が錯綜して引かれ、電を中心とした遺物接合関係を如実に示している。特に土師器甕754は27片もの小片との接合関係が見られる。遺物出土レベルは754が最高40cm程のレベル差を持つほかは、ほぼ床面密着の遺物が大半を占める。タイプAは土師器環741のみで、タイプBaが土師器甕754、土師器台付甕761、須恵器高台付埴743で、タイプBが土師器甕757、土師器小甕760、須恵器鉢753、須恵器環748、749、須恵器高台付埴742、745、746、750がある。

出土遺物 (挿図番号第381・382図 写真番号P L-208・209・219)

遺物総点数は400点を数え比較的多く、図示しえた遺物数もその内訳を数えると、土師器甕6、台付甕1、小甕1、土師器環1、須恵器鉢1、須恵器環3、須恵器高台付埴6、埴輪破片1、縄文中期深鉢破片1の21個体である。

遺存状況を見ると、土師器甕は底部欠損でほぼ完形に近いもの(754)、口縁部破片3(757、758、759)、底部破片(755)がある。口縁部がコの字口縁甕の形態に2種類あり、①頸部から体部が丸く張り出すタイプ(754、757)、②頸部から体部が直線的に出るタイプ(758、759)に分けられる。台付甕は、脚部が僅かに欠損している他はほぼ完形のもの(761)と、口縁部から体部にかけて1/4残存のものがあり、761は土師器甕の①タイプであり、756は②タイプに相当する。なお756は脚部が欠損しているが、その形態から台付甕と判断した。小甕760は1/2残存で、形態は土師器甕の①タイプに当たり、台付甕の可能性が高い。土師器環741は完全な平底で外反する体部をもち、体部に指頭整形痕を残す。

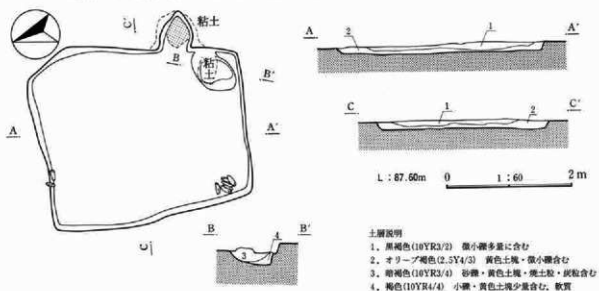
須恵器鉢は金属碗の模倣のゆえか底部を上げ底して成形が施されており、底部附近のハゼはこ

#### IV 遺跡の調査

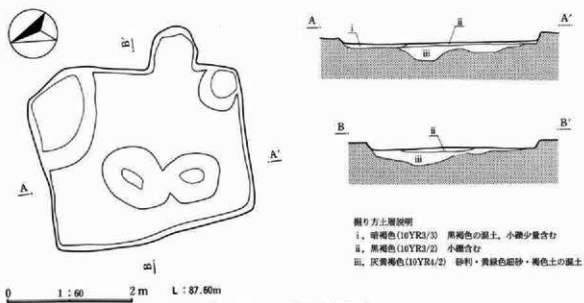
の遺物の置かれた状況を物語っている。須恵器杯は①体部が外傾し口縁部がさらに外反傾向をもつ(747, 749)と②体部が底面から1/2付近まで湾曲傾向をもち途中から外傾し底部が上げ底気味(748)の2タイプに分かれるが体部の外傾角度は変わらない。須恵器高台付埴(742, 743, 744, 745, 746, 750)は体部が若干湾曲して立ち上がり口縁部で僅かに外反するという形態上の共通点をもち、口径が13.7~14.7cmでほぼ同法量とみなされる。744, 745, 746は高台部分が刺彫したもので、該期の高台貼付の粗雑さが窺える。また742は墨書土器で「田」の字が読み取れる。

#### 所見

該住居址は住居廃絶直後から盛んな遺物廃棄が行われ、錯綜とした接合線からも分かるように投棄された遺物の多かったことが理解される。



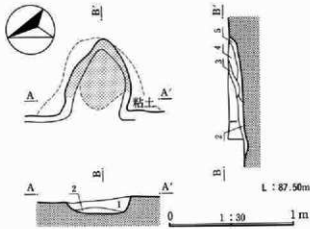
第377図 7・05号住居址



第378図 7・05号住居址掘り方



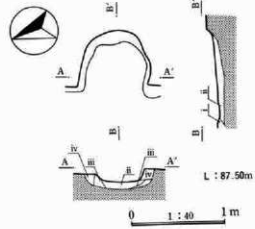
5 本駒堂台地区（7区）の遺構と遺物



土層説明

1. オリーブ褐色(2.5Y4/2) (住居址埋没土層)
2. 褐色(10YR4/4) 細粒・焼土粒少量含む、固い
3. にぶい黄色(2.5Y6/4) 褐色土・焼土塊・微小礫含む
4. 黄褐色(3.5Y5/4) 赤褐色土・焼土含む
5. 褐色(10YR4/4) 焼土塊・炭粒少量含む

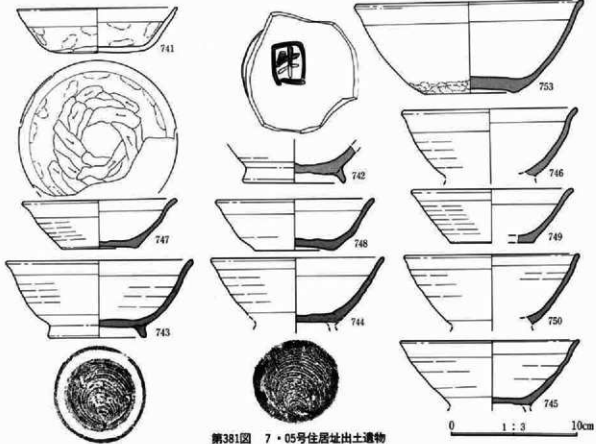
第379図 7・05号住居址竪



掘り方土層説明

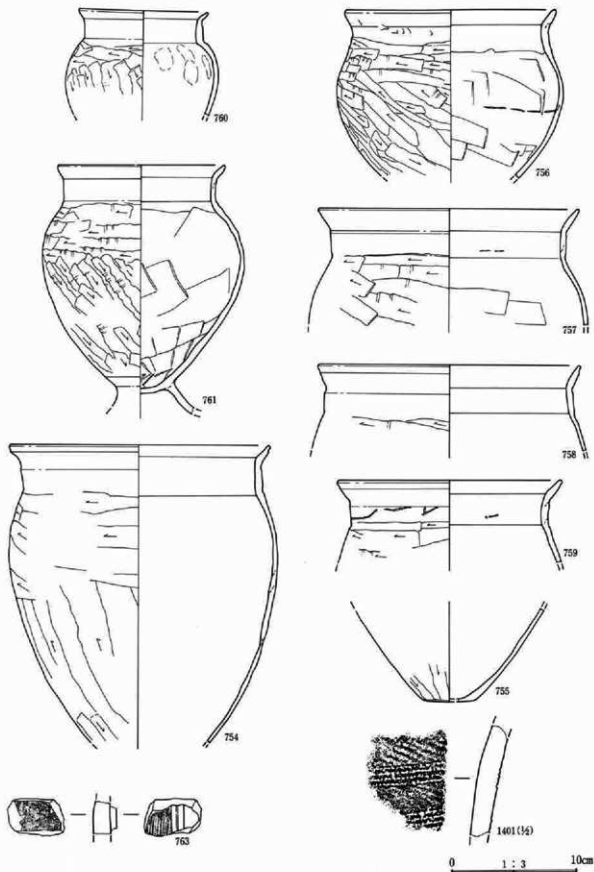
- i. 暗褐色(10YR3/3) (住居掘り方埋没土層)
- ii. 黒褐色(10YR3/2) 砂利・小礫・焼土・炭粒・土器片含む
- iii. 褐色(10YR4/6) 砂利・小礫・黄色土少量含む
- iv. 黄褐色(2.5Y5/4) 黄色土塊含む。(袖部)

第380図 7・05号住居址竪掘り方



第381図 7・05号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第382図 7・05号住居址出土遺物



IV 遺跡の調査

7・06号住居址

遺構 (挿図番号第834・385図 写真番号P L-169)

本住居址は遺跡地の北縁に位置し、北側部分約1/2を調査区外にはみ出している。所在するグリッドはα13・99グリッドである。近接する住居址は、16号住が南西コーナーで該住居址と切り合っている。確認面の標高は87.10mで、床面高は86.80mを測る。

規模・主軸 規模は東西2.74mのみが測れ、平面形態は不明である。主軸方位はN-89°-Eとほぼ東方向を指し示す。壁は85°以上のシャープな立ち上がりで、壁高は40cmである。覆土は4層に分かれ、第1層は住居址内覆土だが、第2層以下は流入土か壁崩壊土の可能性がある。

床・貼床 床面は厚く貼床が施されフラットで、床面上に施設は確認されなかった。貼床の構成土は締まりの弱い黄褐色土で、地山土との判別が困難であった。掘り方は住居址全体が掘り込まれ、さらに南東コーナーの貯蔵穴の位置には隅丸方形の土坑が、住居址中央には小ビットが穿たれていた。

竈 (挿図番号第386図 写真番号P L-169)

燃焼部 燃焼部は東壁住居内に作られ、地山塊を貼り付けた袖が残る。壁面は部分的に焼け、崩落部分もある。また覆土中に煙道方向からの焼土塊の流れ込みも観察できた。火床面は床面と同レベルであり、中央部から竈前にかけて灰の掻き出しによる窪みがあり、灰が詰まっている。

遺物の出土状態 (挿図番号第387・388図 写真番号P L-169)

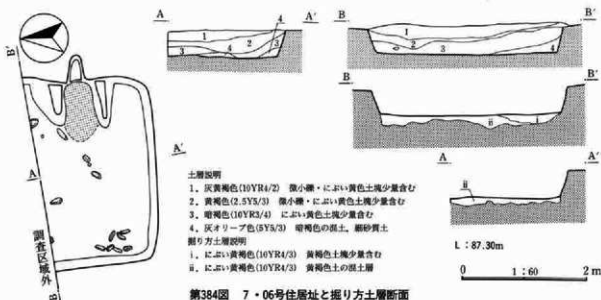
遺物出土総点数は9点を数えるのみで、そのほとんどの遺物が床面から浮いている小破片の遺物で、外部からの流入と考えられる。タイプAは土師器環764で、タイプCが土師器甕765である。

出土遺物 (挿図番号第387図 写真番号P L-209・220)

図示遺物 極端に遺物量の少ない住居址で、遺物総点数は9点を数えるのみである。図示しえた遺物は土師器甕1と土師器大形環1の2個体である。土師器甕765は長胴化した胴部が膨らみを増す時期のもので、斜位寛削りで頸部と体部の境界を区画している。土師器大形環は、尖り気味の丸底から口縁部が短く内傾する17cmタイプである。

所見

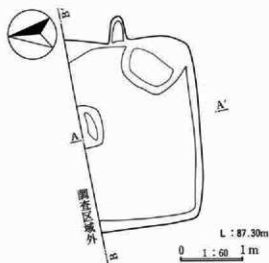
該住居址は7区での一番古式の住居址である。



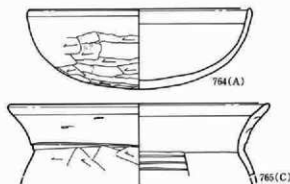
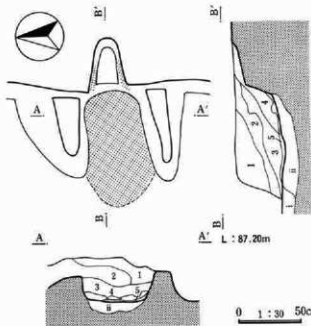
- 土層説明
1. 灰黄褐色(10YR4/2) 微小礫・にぶい黄色土塊少量含む
  2. 黄褐色(2.5Y3/3) 微小礫・にぶい黄色土塊少量含む
  3. 暗褐色(10YR3/4) にぶい黄色土塊少量含む
  4. 灰オリーブ色(5Y3/3) 暗褐色の混土。細砂質土  
掘り方土層説明
  - Ⅰ. にぶい黄褐色(10YR4/3) 黄褐色土塊少量含む
  - Ⅱ. にぶい黄褐色(10YR4/3) 黄褐色土の混土層

第384図 7・06号住居址と掘り方土層断面

5 本動堂台地区(7区)の遺構と遺物



第385図 7・06号住居址掘り方



第387図 7・06号住居址出土遺物

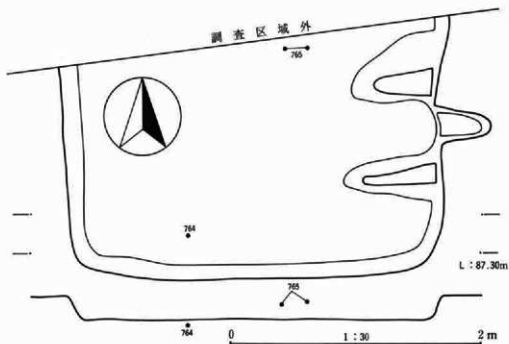
土層説明

1. 灰黄褐色(10YR4/2) (住居址埋設土1層)
2. 黄褐色(2.5Y5/3) (住居址埋設土2層)
3. にぶい黄褐色(10YR4/3) 焼土粒・灰少量含む
4. にぶい黄褐色(10YR4/3) 焼土塊・黄色土塊含む
5. 暗灰黄色(2.5Y5/2) 灰層

掘り方土層説明

- I. にぶい黄褐色(10YR4/3) (住居掘り方埋設土1層)
- II. オリーブ褐色(2.5Y4/3) にぶい黄色の混土層

第386図 7・06号住居址竈



第388図 7・06号住居址接合分布図

#### IV 遺跡の調査

##### 7・07号住居址

遺 構 (挿図番号第389・390図 写真番号P L-170)

絶対的位置	本住居址は遺跡地の北東部に属し、 $\beta 13 \cdot 90$ , $91$ , $\beta 14 \cdot 00$ , $01$ の4グリッドにまたがって所在
相対的位置	する。周囲には軒を接するように住居址が密集しているが、該住居址は08号住に包み込まれるような形で切り合っている。確認面の標高は87.05mで、床面高は86.70mを測る。
確認面	規模は東西2.56m・南北3.44m、面積12.02m <sup>2</sup> で、平面形態は東西軸・南北軸の比が1:1.34の横長方形プランを呈している。主軸方位はN-79°-Eである。壁は西壁に乱れがあるが、他の壁は明瞭な立ち上がり(85°)が窺える。覆土は5層に分かれるが、第1層は住居址内覆土としても第2層以下は細かいユニットの堆積を示し、壁崩壊土であろうと推測される。
規模・形態	
主軸・壁	
覆土	
床・貼床	床面には貼床が施され、南東コーナーには槽円形の貯蔵穴が穿たれている。貼床の構成土は鉄分沈着のある層が中央部に貼られ、その周囲に砂質の明黄褐色土が貼られている。掘り方は床全体が平らに荒掘りされている様相がある。
掘り方	

竈 (挿図番号第391図 写真番号P L-170)

燃焼部	燃焼部は東壁南寄り壁を掘り込み作られる。壁面は垂直に立ち上がり、中央部から奥壁に向かってレンガ状に焼き締まる。焼き口部には礫を立て補強材として利用している。埋土中には焼土塊を含む地山塊の混入があり、天井部崩落土と考えられる。また火床面直上ではなく間層と挟むため、廃棄後間をおいて崩落したものと考えられる。火床面は床面と同レベルであり、焼き口より前に灰の広がり及び、堆積が厚い。煙道部は火床面奥壁から直線的に立ち上がる。
焼き口	
火床面	
煙道部	

遺物の出土状態 (挿図番号第393図 写真番号P L-170)

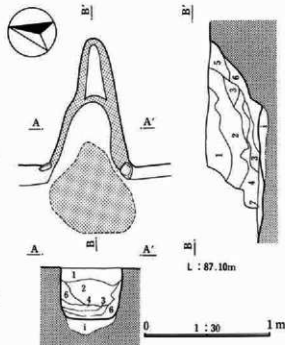
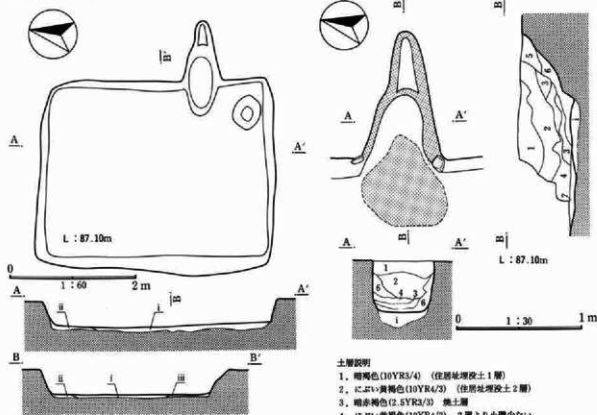
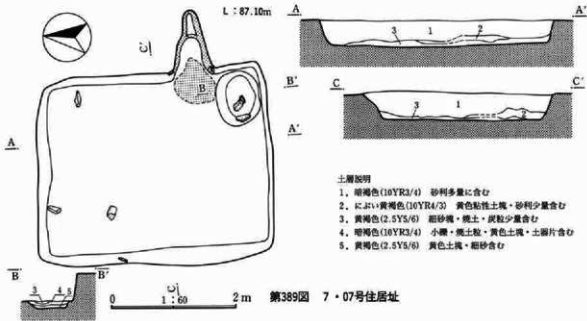
総点数	出土遺物総点数は437点を数え、遺物の平面分布は南壁と西壁に沿った地域に密度の濃い分布域が認められる。層的には第1層の混入遺物が大半を占め、次いで第3層の極めて床面に近い遺物群が認められる。接合線が引かれ接合関係が明らかなのは須恵器高台付埴767のみで、あとの遺物は接合関係なしで存在している。出土レベルを見ると、ほぼ土層の埋没過程に従った形で遺物の混入状況が看取される。タイプAは須恵器高台付埴768, 770, 須恵器高台付皿766で、タイプBaは須恵器高台付埴767, 847, 須恵器高台付埴846, 土師器鉢で、タイプBは須恵器高台付埴769, 771, 須恵器壺777, 778である。
総点数	
平面分布	
層位分布	
接合関係	
タイプ	

出土遺物 (挿図番号第392図 写真番号P L-209・210・220)

図示遺物	図示した遺物は15個体におよび、その内訳は土師器鉢1, 須恵器壺2, 須恵器高台付壺1, 須恵器埴1, 須恵器高台付埴9, 須恵器高台付皿2, 瓦1である。
土師器	土師器鉢(842)は器高9.3cm, 口径18.8cmの法量をもつ大きな器だが、平底を意識しており、出土状態や本住居址の遺物組成からすると真贋である。須恵器埴774は墨書土器である。高台付埴は器高3.7cmの846を除いて、そのほとんどが器高5.7~6.2cmの範囲に入り同法量に近く、体部の外傾もほぼ同角度である(767, 768, 769, 770, 847)。ただ高台の貼付の仕方に①外側をしっかりと撫で調整してあるもの(769, 770), ②内側を主に撫で調整してあるもの(846, 847), ③高台の両面を丹念に撫で調整してあるもの(768), の3タイプが観察された。また高台の高いもの(768, 770, 771)に古い要素が、低いもの(767, 769, 846, 847)に新しい要素が認められる。高台付皿は、皿の底部に高台を捻り付けたような三角形の断面を呈している。
須恵器	

所 見

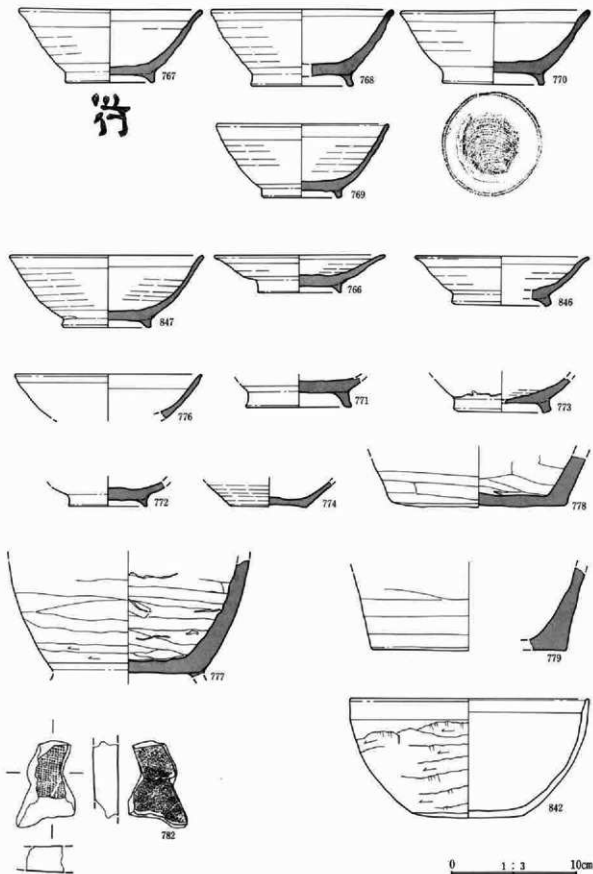
該住居址は08号住と重複しており、土層状態から08号住→07号住の順列になる。



第390図 7・07号住居址掘り方

第391図 7・07号住居址掘

IV 遺跡の調査

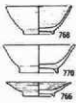


第392図 7・07号住居址出土遺物

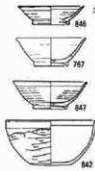


5 本動堂台地区（7区）の遺構と遺物

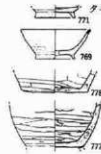
タイプA



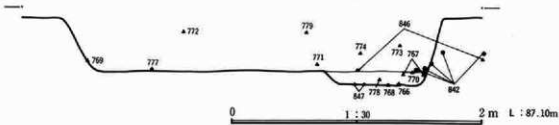
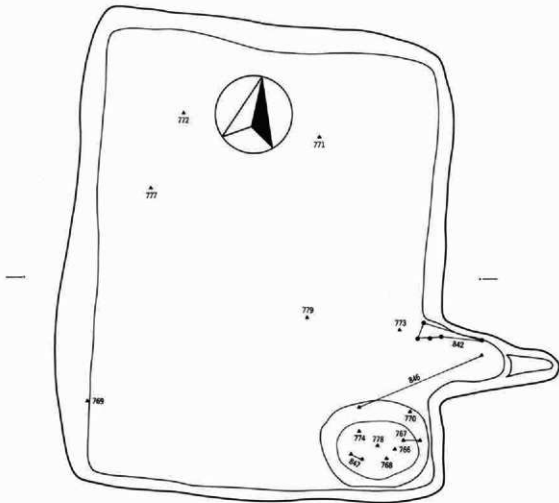
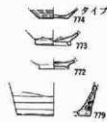
タイプBa



タイプB



タイプC



第393図 7・07号住居址接合分布図

## IV 遺跡の調査

## 7・08号住居址

遺構 (押図番号第394・395図 写真番号P L-170・171)

- 絶対的位置** 本住居址は遺跡地の北東部に属し、所在するグリッドは $\beta 13 \cdot 90$ ,  $91$ ,  $\beta 14 \cdot 00$ ,  $01$ にまたがっている。該住居址は住居址の密集部にあり、北東コーナーを01号住と、北西部1/3を07号住と切り合っている。確認面の標高は87.05mで、床面高は87.90mを測る。
- 確認面** 規模は東西4.70m・南北5.10m、面積18.92m<sup>2</sup>で、平面形態は東西軸・南北軸の比が1:1.08の正方形プランを呈する。主軸方位はN-87°-Eである。壁は15cm程の残存状況であるので確かではないが、基部の立ちあがり様から考えると、かなりシャープな壁面であろうことが推測される。
- 主軸・形態** 覆土は第1層が住居址内覆土で、第2a、2b、3層は電崩壊土と推量される。
- 覆土** 床面にはフラットに貼床が施され、床面上には南東コーナーに貯蔵穴が位置し、対角線上には4基の柱穴が穿たれるという整美な平面構成をとっているが、住居址の建て替えの後、柱穴位置の若干の修正が行われたものと考えられる。貼床の構成土は鉄分沈着した砂礫まじりの暗褐色土で、堅く踏み締められており水の影響も感じられる。掘り方は柱穴痕の他に、電前面に不整形形の床下土坑が2基と電左袖附近に小ピットが1基穿たれているのみである。

電 (押図番号第396図 写真番号P L-170)

- 燃焼部** 燃焼部は東壁中央南寄りに作られ、中心は壁の延長上にあり、袖部分の地山が僅かに高まりとして残り、大部分は削除してしまっただけで、電内に火床面との間に締まりの弱い間層をはさみ、天井部崩落土の底面の焼けた黄褐色粘質土塊がドーナツ状に堆積していた。また電左壁上に礫が出土したが、これは補強材と考えられる。火床面は床面より低く、厚く灰の堆積が見られた。また奥壁寄り中央より、台付壺の脚部が倒立状態で出土しており、支脚の可能性が考えられる。

遺物の出土状態 (押図番号第397図 写真番号P L-171)

- 総点数** 出土遺物総点数は802点を数える。遺物の平面分布は、07号住との切り合いの関係上該住居址の南半部 (特に電・貯蔵穴周辺) に偏っている。層位的には単一層の住居址内覆土中に、遺物が何回かに分かれて多数混入している様相が窺われた。遺物の接合関係を見ると、電や貯蔵穴を中心にいくばくかの接合線が引かれ、しかもその大部分が煮沸用の土師器壺や台付壺である点は該住居址の特徴である。タイプAは須恵器環805、須恵器高台付壺801、タイプBaは土師器環783、785、土師器台付壺789、792、土師器壺293、タイプBは土師器環784、786、787、土師器壺795、797、798、800、台付壺790、須恵器環蓋808、809、須恵器環807、804である。

出土遺物 (押図番号第398図 写真番号P L-210・220)

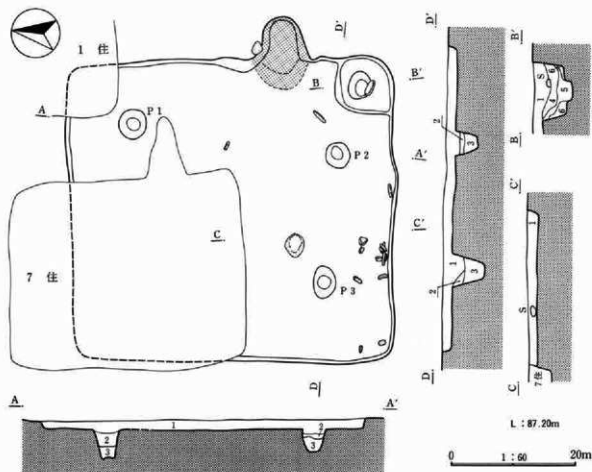
- 図示遺物** 図示しえた遺物は、土師器壺7、土師器小壺1、土師器台付壺3、土師器環5、須恵器環5、須恵器高台付壺1、須恵器環蓋3の25個体である。
- 土師器** 土師器壺は口縁の形態が変化に富んでおり、①いわゆるコの字口縁壺 (796)、②コの字口縁壺の頸部の下方が開いている (793)、③コの字口縁が崩れて、その形態にコの字口縁壺の面影を僅かにとどめる (794)、④口縁が立ち器壁も厚さを増す (795) ものの4タイプに分かれ、①~④の順で時期差をもつものと思われる。土師器小壺は、口縁部に壺の③タイプの特徴の色漬をもっている。台付壺は、頸部から上を欠損しているがその他はほぼ完形のもの (789) と台部のみ残存のもの (790、791) がある。789は最大径を胴部上位にもつ。台部の形態のタイプとしては①薄手で湾曲気味に外反する (789、791) と②若干厚手で外反しない (790) がある。土師器環は形態と

調整手法から3種類に分類される。①底部は平底になりきらず、体部は内湾している、体部の調整は口縁部が横ナデで、体部から底部は寛削りと思われる(786)。②限りなく平底に近い底部からやや膨らみをもって外反する体部、口縁部から体部1/2にかけて横ナデで、底部に寛削り、体部には指頭整形後にナデを施す(785)。③平底の底部から外反する底部に至り、底部に寛削り、体部に指頭整形後ナデを施す。の3タイプで、この①~③の順は時期差と思われる。

須恵器環は、体部の外傾が大(804, 805)小(803)、器高が高(803, 805)と低(804)、底部調整が手持ち寛削り(805)と回転糸切り(803, 804)に分けられる。須恵器高台付塊は内湾した体部と外反する口縁を持ち、雑な台形に近い高台が貼付されている。須恵器環蓋は鈕部分(810)と鈕部分が欠損しているもの(808, 809)が図化された。810はボタン状鈕で、808, 809は水平な天井部から緩やかに屈曲する体部から口縁部を経て下方に折れ曲がる端部を持つ。

### 所見

該住居址は01号住・07号住と切り合い、その時系列は08号住→01号住→07号住の順になる。

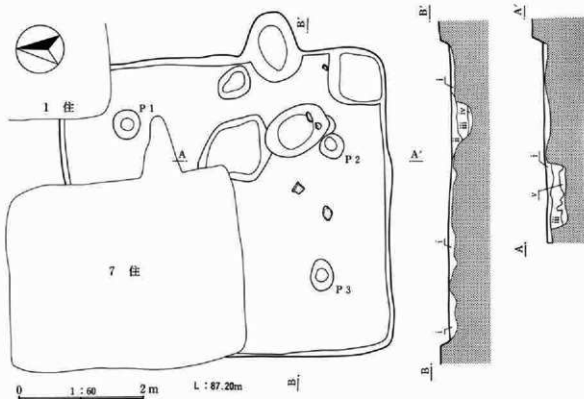


#### 土層説明

- |                                |                                      |
|--------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 暗褐色(10YR3/4) 砂利・焼土・土器片少量含む  | 5. 褐色(10YR4/3) 細砂・褐色土・炭化物・土器片含む、粘性あり |
| 2. 暗褐色(10YR3/4) 砂礫・黄色細砂礫の混土    | 6. 黄褐色(2.5Y5/6) 黄色粗砂層                |
| 3. 黄褐色(2.5Y5/4) 黄色粗砂・褐色土の混土    |                                      |
| 4. 褐色(10YR4/3) 砂利・焼土・炭化物・土器片含む |                                      |

第394図 7・08号住居址

IV 遺跡の調査

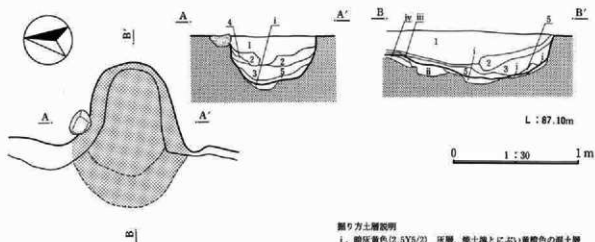


掘り方土層説明

- i. 暗褐色(10YR3/4) 砂利・腐炭・灰色土含む、固い
- ii. におい黄褐色(10YR4/3) におい黄色土と互層、緻密で固い
- iii. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂質土、焼土塊・灰粒・におい黄褐色土含む

- iv. 黒色(10YR1.7/1) 灰層、軟質
- v. オリーブ褐色(2.5Y4/3) におい黄褐色土の風土、砂粒多量に含む

第395図 7・08号住居址掘り方



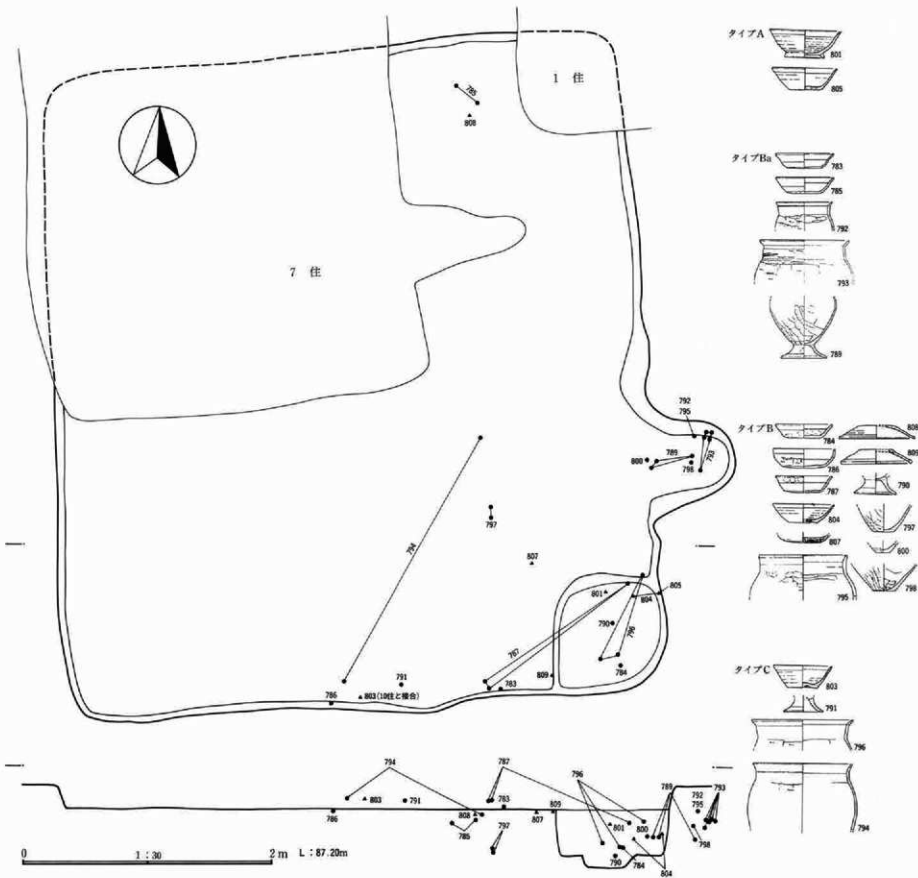
土層説明

- 1. 暗褐色(10YR3/4) (住居址埋没土1層)
- 2. 赤褐色(2.5YR4/8) 焼土層
- 3. 青黒色(10BG2/1) 灰層
- 4. におい黄褐色(10YR4/3) 灰・焼土含む
- 5. 黒褐色(10YR3/2) 灰・焼土塊含む

掘り方土層説明

- i. 暗灰黄色(2.5Y5/2) 灰層、焼土塊とにおい黄褐色の風土層
- ii. 暗褐色(7.5YR3/3) 灰粒・焼土粒含む、におい黄色少量含む
- iii. 明赤褐色(5YR5/8) 焼土・黒褐色土の風土層
- iv. におい黄色(2.5Y6/4) 粘性土、焼土塊少量含む、固い

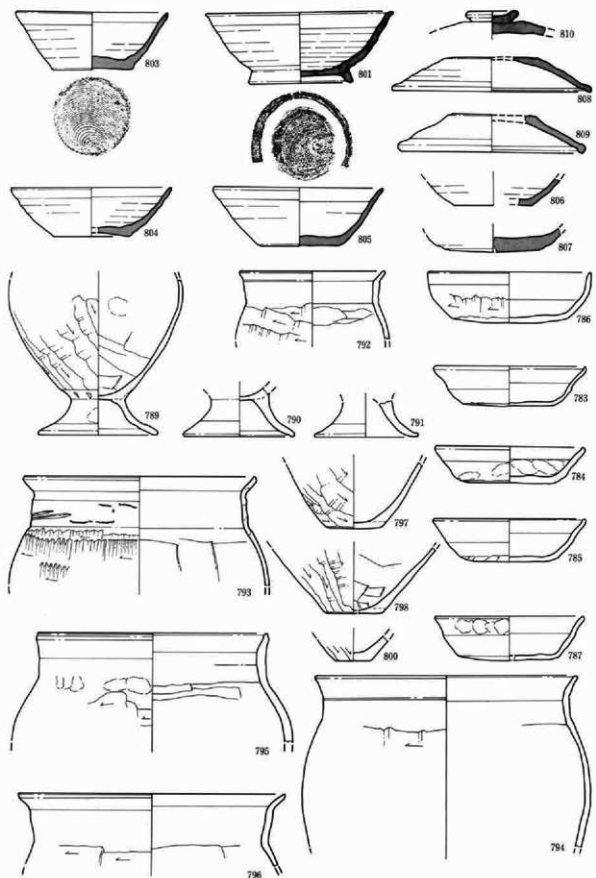
第396図 7・08号住居址竪



第397図 7・08号住居址接合分布図



5 本動堂台地区（7区）の遺構と遺物



第398図 7・08号住居址出土遺物

0 1 : 3 10cm

IV 遺跡の調査

7・09号住居址

遺 構 (挿図番号第399図 写真番号P L-171)

**絶対的位置** 本住居址は住居址密集地のほぼ中央に位置し、所在するグリッドは $\delta 14 \cdot 00$ である。該住居址は  
**確認面** 電と南部分1/3をトレンチによって失われており、また12号住と切り合っている。確認面の標高は  
87.20mで、床面高は87.05mを測る。

**規模・軸** 規模は東西軸のみ2.44mが測れ、平面形態は不明である。主軸方位は $N-90^{\circ}-E$ を指すものと推  
**壁・覆土** 測される。壁も基部が残存しているだけで、その様相は定かでない。覆土は3層で、第1、2層  
は住居内覆土で、3層は三角堆積の流入土であろう。

**床** 床面は確認が困難で、遺物と炭化物や焼土の濃密なレベルを床と認定した。

電

電はトレンチによる削平を受けたものと推量され、確認できなかった。

**遺物の出土状態** (挿図番号第400・401図)

**総点数** 出土遺物総点数は129点を数え、遺物は住居址全体に散在している。層的には床面から10cm以  
**層位分布** 上浮いている遺物が多く、須恵器の割合は18%を示している。接合遺物は土師器環817の1点のみ  
**タイプ** で、タイプAはなく、タイプBが土師器環817、818、土師器小甕819、須恵器環814、高台付塊815  
である。

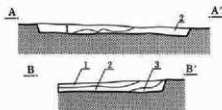
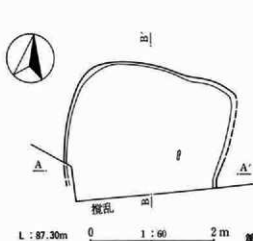
**出土遺物** (挿図番号第400図 写真番号P L-210・219)

**図示遺物** 図示した遺物は、土師器環2、土師器小甕1、須恵器環1、須恵器高台付塊2、瓦1の7個  
体で、遺存状況はすべて破片である。

**土師器** 土師器環は、形態が丸底で、口縁部を横撫でして底部から体部1/2まで笕削りを施した古要素を  
もつタイプ(817)と、平底で底部を笕削りし、指頭成形後口縁部横撫で・体部下方向笕撫でを施す  
という新要素を有するタイプ(818)が混じっている。台付甕の可能性のある土師器小甕819は、  
**須恵器** コの字口縁の要素を残しているがコが崩れ始めている。須恵器高台付塊812は、器高は低いも  
の若干内湾した体部を持ち、底部は回転糸切り後高台周辺に撫で調整を施す。

所 見

該住居址の遺物出土様相を見ると、住居址廃絶時に廃棄された遺物が大部分を占め、それ以降  
の廃棄行為は僅かで、該住居址廃絶以後周囲の住居形成に中断があるものと解される。



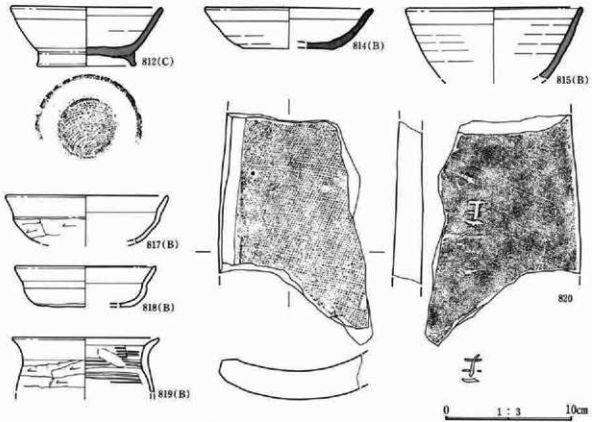
土器説明

1. 褐色(10YR4/4) 黄褐色土塊・焼土粒少量含む
2. 黒褐色(10YR2/3) 炭粒・焼土粒・砂粒・土器片少量含む
3. 褐色(10YR4/4) 黄色土塊・砂粒少量含む

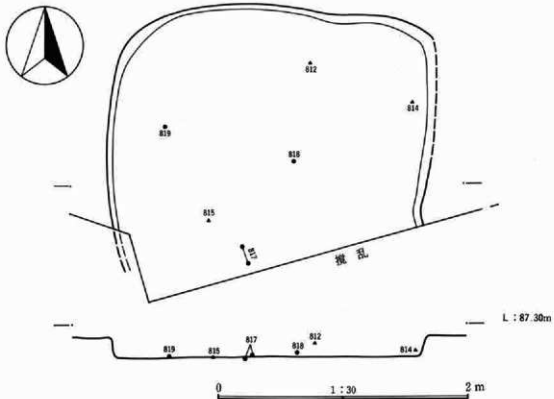
第399図 7・09号住居址



5 本勸堂台地区（7区）の遺構と遺物



第400図 7・09号住居址出土遺物



第401図 7・09号住居址接合分布図

IV 遺跡の調査

7・10号住居址

遺構 (挿図番号第402・403図 写真番号P L-172)

絶対的位置	本住居址は住居址密集部の中央北寄りに位置し、 $\beta 13 \cdot 90$ グリッドに所在する。該住居址は、11号住と西側部分で切り合っている。確認面の標高は87.00mで、床面高は86.90mを測る。
確認面	
規模・形態	規模は東西3.00m・南北3.16m、面積9.76 $\text{m}^2$ で、平面形態は東西軸：南北軸の比が1：1.05の
主軸・壁	正方形プランを意図している。主軸方位はN-82°-Eである。壁は上部を削平されているため基部のみ残存している。覆土は2層で、第1層の住居址内覆土と第2層の壁崩壊土に分かれる。
覆土	
床	床面はフラットだが地床面に貼床は施されておらず、床面上の施設は南東コーナーに貯蔵穴が確認されたのみである。

竈 (挿図番号第404図 写真番号P L-172)

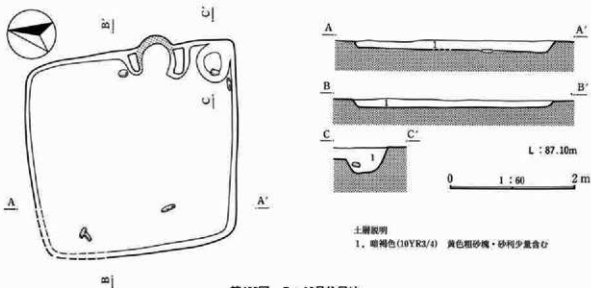
燃焼部	燃焼部は東壁はぼ中央部に位置し、中心は壁の延長上より僅かに袖部分が残る。壁面は上半が焼土化している。袖は地山を掘り残している。火床面は床面よりやや低く、灰の堆積は薄く、直上に焼土主体の層が乗る。
火床面	

遺物の出土状態 (挿図番号第406図)

検点数	出土遺物総点数は154点を数え、遺物の平面分布は住居址南半部に偏る傾向にある。住居址確認面が低く上部の遺物は皆飛んでいるものと思われ、層位的には床面に近い遺物が10cm程の間に混在している。遺物の接合関係では須恵器壺825は切り合っている11号住と12号住の遺物との住居址間接合関係にあり、土師器壺822と823は竈を中心とした遺物の接合状況を示している。出土レベルはいずれも同一層内の変動にとどまる。タイプAはなく、タイプBaが土師器壺822で、タイプBは土師器壺823と灰軸陶器高台付皿824である。
平面分布	
層位分布	
接合関係	

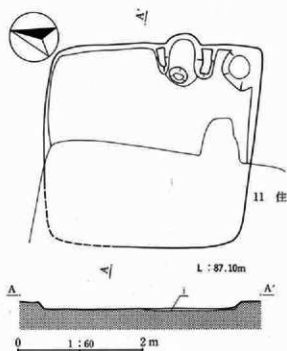
出土遺物 (挿図番号第405図)

図示遺物	図示した遺物は、土師器壺2、須恵器壺1、須恵器高台付埴1、灰軸陶器1の5個体である。
土師器	土師器壺は、典型的なコの字口縁壺822と器内が厚くコの字の大きく崩れた口縁をもつ822の2タイプがある。灰軸陶器824はその形状から高台付皿と推測でき、僅かに丸味をもつ体部から口縁部が小さく外反し、漬け掛けによる施釉を施す。
灰軸	



第402図 7・10号住居址

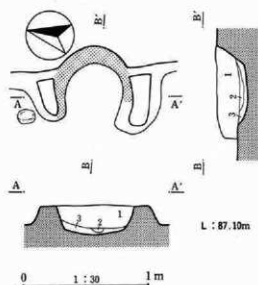
5 本駒堂台地区（7区）の遺構と遺物



掘り方土層説明

1. 濃い黄褐色(10YR4/3) 微小礫多量に含む、固い

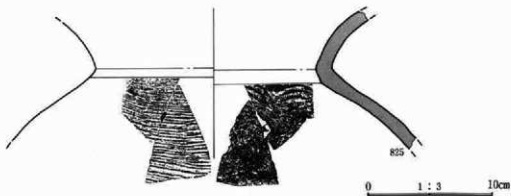
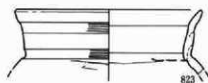
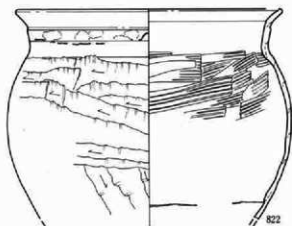
第403図 7・10号住居址掘り方



土層説明

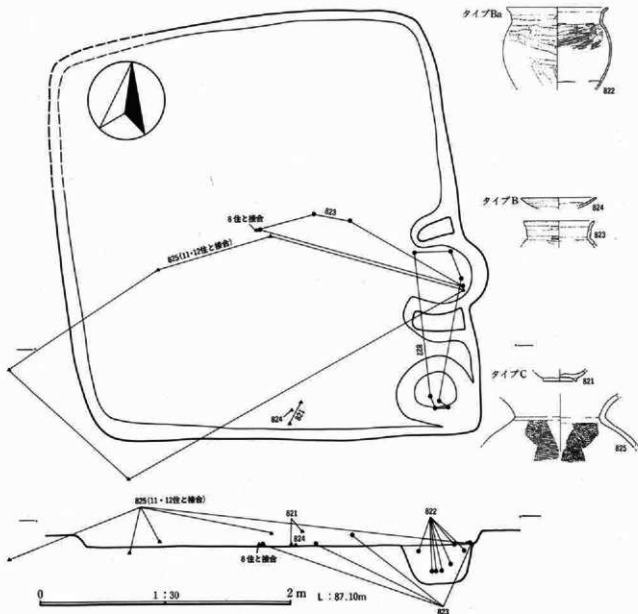
1. 暗褐色(10YR3/3) 焼土粒・灰化物少量含む  
 2. 明赤褐色(2.5YR5/8) 焼土塊多量に含む  
 3. 暗褐色(10YR3/3) 灰・焼土粒・灰化物少量含む、細粒

第404図 7・10号住居址竈



第405図 7・10号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第406図 7・10号住居址接合分布図

7・11号住居址

遺 構 (押図番号第407・408図 写真番号P L-172・173)

絶対的位置 本住居址は $\phi$ 13・90グリッドに所在し、10号住と東側部分で切り合って住居址密集地のほぼ中央部に位置する。確認面の標高は87.10mで、床面高は86.80mを測る。

規模は東西3.48m・南北4.00m、面積13.26㎡で、平面形態は東西軸：南北軸の比が1：1.14の規模・形態  
 横長長方形プランを呈している。主軸方位はN-81°-Eを示している。壁は南壁が90°に近い立ち上り主軸・壁  
 がりを示し、壁高は30cmを測るが、他の壁は削平されており数値に表せない。覆土は2層に分かれ、  
 いずれもレンズ状堆積の住居内覆土である。覆土

床面はフラットで貼床が施され、南東コーナーには長方形の貯蔵穴が穿たれている。貼床の構成床・貼床  
 成土は、下部に明赤褐色の鉄分沈着層を含む締まりのある暗褐色土で、掘り方土には締まりの弱い  
 暗褐色土が詰められている。掘り方は北西と南東のコーナー付近が不整形に掘りくぼまれ、北  
 東コーナーには3基の小ピットが埋坐するように穿たれている。掘り方

電(押図番号第409図 写真番号P L-172)

燃焼部は東壁南寄り壁を掘り込み作られる。大半は10号住により削平され、僅かに壁の立ち上り燃焼部  
 がり部分が残る。火床面は床面より低く、薄く灰の堆積が見られる。電前には天井崩落土である、  
 黄色シルト塊が散乱している。火床面

遺物の出土状態(押図番号第410~412図)

出土遺物総点数は261点を数え、遺物の平面分布は電及び貯蔵穴周辺に密度の濃い分布域がある総点数  
 層位的には床面に近い遺物が多く、掲載遺物のほとんどが床下遺物である。該住居址の遺物平面分布  
 は接合関係を持つ遺物が多く、貯蔵穴周辺の接合線は錯綜している。土師器壺843は電を中心に3  
 mの飛散状況を示している。遺物出土レベルは土師器壺844が20cmの上下差で、南壁貯蔵穴寄りの  
 周溝状部分では床面から10~15cmほど遺物の出土レベルが下がっている。タイプAは土師器杯  
 833, 834, 835, 埴841, 須恵器杯829, 830, 坏蓋832と小型品が多く、タイプBaはなく、タイプ  
 Bが土師器壺843, 845, 坏837である。タイプ

出土遺物(押図番号第410・411図 写真番号P L-211・220)

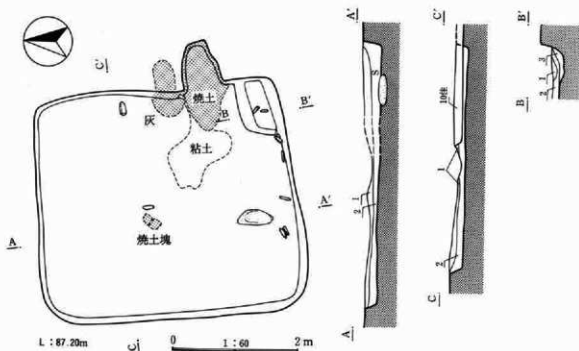
図示した遺物は15個体にのぼり、その内訳は土師器壺3, 土師器鉢1, 土師器杯7, 須恵器  
 杯2, 須恵器坏蓋2である。土師器壺843, 844は口縁部がいったん直立して上位で外反するコの  
 字口縁への変化を示し始め、胴部上位に横位の寛削りを施す。土師器鉢841は、07号住の土師器鉢  
 842と形態・調整手法が同様であるが法量は841のほうが若干大きい。土師器杯は①丸底の底部から  
 垂直に立ち上がる体部をもつ(834, 837)。また834は内面に寛記号をもつ。②僅かな丸底気味の  
 底部から、指頭整形痕による凹凸のある体部を経て口縁部屈曲させる(833, 836)。833は内  
 面に、836は外面に寛記号をもつ。③平底の底部から湾曲する体部をもち、口縁部はさらに内湾す  
 る(835, 840)。④丸底の底部から、直線的に浅い体部が立ち上がる(838)。の4種類に分けられ、  
 いずれも調整手法は体部横撫で・底部寛削りである。図示遺物  
 土師器

須恵器杯829は、底部の立ち上がり部に寛削りを施し、僅かな膨らみをもって外反する体部をもち  
 須恵器  
 ち、回転糸切りした底部に「圭」の墨書がある。須恵器坏蓋は2タイプに分かれ、①832, 器高が  
 高く、緩やかに湾曲する体部を経て口縁部が垂直に折れる。②831, 器高が①に比べて低く直線的  
 な体部から口縁部が内傾する。が観察される。

## 所見

該住居址は10号住と切り合い11号住→10号住の関係にある。須恵器坏蓋831が10号住との間で住  
 居址間接合が確認されている。また該住居址遺物は10号住と同様激しい投棄行為が予想される。

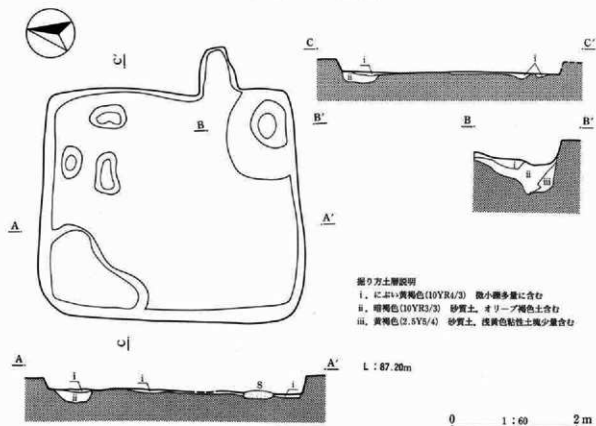
IV 遺跡の調査



土層説明

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) オリーブ黄色の粘土、微小礫少量を含む
2. におい黄褐色(10YR4/3) 黄褐色の粘土、微小礫含む
3. 黒褐色(10YR3/2) 微小礫・黄褐色土粒少量含む

第407図 7・11号住居址

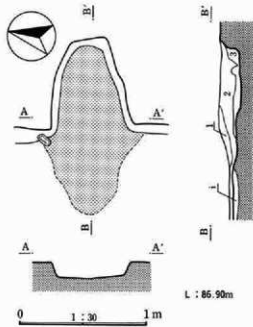


掘り方土層説明

- i. におい黄褐色(10YR4/3) 微小礫少量を含む
- ii. 暗褐色(10YR3/3) 砂質土、オリーブ褐色土含む
- iii. 黄褐色(2.5Y5/4) 砂質土、淺黄色粘性土塊少量含む

第408図 7・11号住居址掘り方

5 本勸堂台地区（7区）の遺構と遺物



L : 86.90m

0 1 : 30 1m

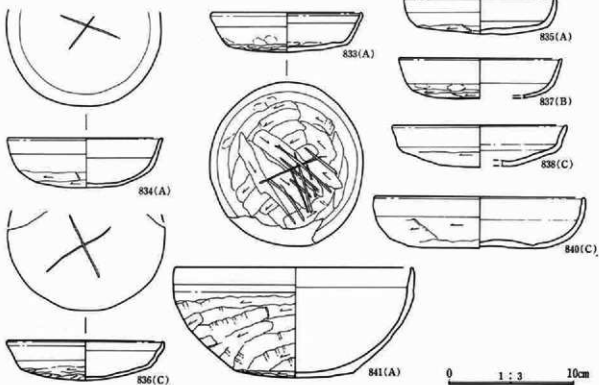
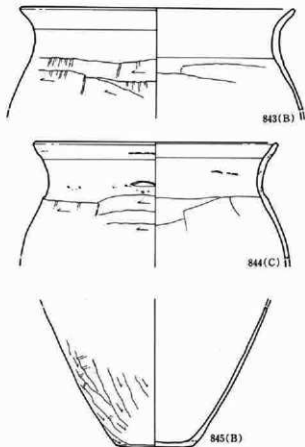
土層説明

1. にぶい黄褐色(10YR4/3) 微小礫・焼土粒少量含む
2. にぶい黄色(2.5Y6/4) 微小礫・焼土塊多量に含む
3. 褐色(10YR4/4) 微小礫・焼土粒少量含む

掘り方土層説明

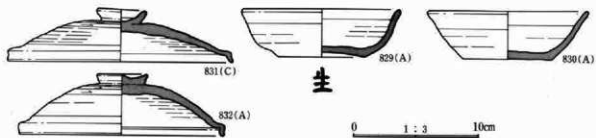
1. 灰オリーブ色(5Y5/3) オリーブ褐色土の凝土層

第409図 7・11号住居址電

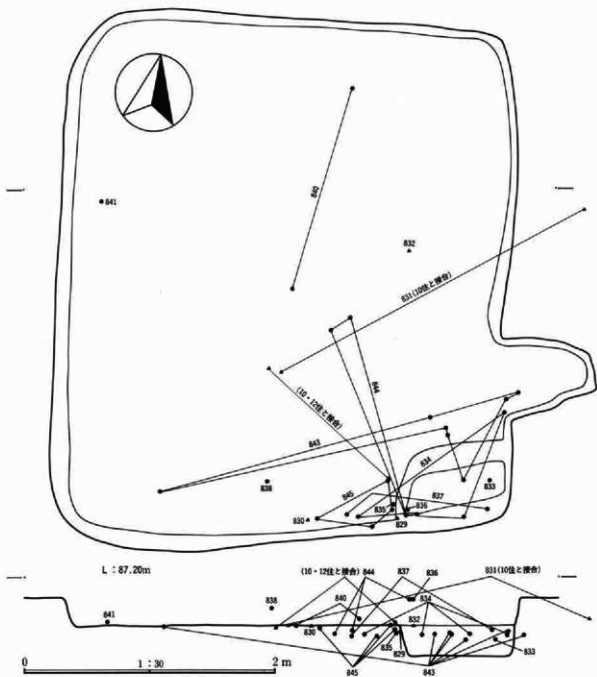


第410図 7・11号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第411図 7・11号住居址出土遺物



第412図 7・11号住居址接合分布図



## 7・12号住居址

遺 構 (押図番号第413~415図 写真番号P L-173・174)

本住居址は7区最大の住居址で住居密集地のほぼ中央に位置し、所在するグリッドは $\alpha 14 \cdot 09$ 、 $\beta 14 \cdot 00$ 、10の4グリッドにまたがっている。該住居址はその占地の良さからか、03, 09, 14号住と激しい切り合いをしている。確認面の標高は87.20mで、床面高は86.90mを測る。

規模は東西5.96m・南北5.42m、面積22.68 $\text{m}^2$ と大きく、平面形態は東西軸：南北軸の比が1.09：1の正方形プランを意図しているものと思われるが、東壁の電左側が約50cm程東へ張り出している。これは5A・03号住と同様の平面プランである。主軸方位はN-95°-Eを示す。壁は残存している部分については、85°程度のかなり明瞭な立ち上がりを示し、壁高は30cmである。覆土は住居址間の切り合いによってかなり乱れているが、基本的には6層に分けられ、ほとんどが崩落土が流入土である。

床面は貼床が施されているものの若干の凹凸と東壁附近で低くなっており、南東コーナーには床・貼床楕円形の貯蔵穴が穿たれ、4基の柱穴が確認された。貼床の構成土は褐色土が主体で僅かに締まりのある混土層である。掘り方は住居址の中央部をコの字に掘り残し、さらにコの字の真ん中を隅丸方形に掘り残すという特異な掘り方をしている。

電 (押図番号第416・417図 写真番号P L-174)

電は東壁南隅寄り部分をかぎの手に掘り残し、右袖側がテラス状になり、左袖のみ作られる。左袖突き口部と奥壁に砂岩を立て、補強用を使用している。覆土中には下層の焼けた地山塊主体の天井部崩落土が、電前まで広がる。壁面は焼土化し、やや内湾気味に立ち上がる。火床面は底面より低く、新旧の灰の堆積がある。直上または灰層中より土器片が大量に出土している。

遺物の出土状態 (押図番号第420図)

出土遺物総点数は1670点と7区では最多の遺物量を数え、遺物の平面分布は削平されたトレンチ部分を除いて住居址全面に亘っている。層的にはかなりのレベル差で遺物が混在している様相が看取される。該住居址の遺物接合線は貯蔵穴周辺で錯綜した状態を表し、どこか11号住の接合分布状態と酷似している。最大4.5mの接合距離をしめす土師器坏870や電を中心とした散布状態を示す土師器壺880が特徴的である。出土レベルはほぼ床面に近い遺物が多く、須恵器坏蓋863が約30cmのレベル差で接合関係を持っている。タイプAは土師器坏875、須恵器坏860で、タイプBaが土師器坏872, 876, 壺879で、タイプCが須恵器坏849, 859, 861, 坏蓋863, 高台付壺866, 土師器坏868, 871, 壺880, 891で、残りはタイプBに分類される。

出土遺物 (押図番号第418・419・421図 写真番号P L-212・219・220)

図示した遺物は、土師器壺8, 土師器台付壺3, 土師器坏10, 須恵器坏13, 須恵器高台付壺1, 須恵器坏蓋3, 円形叩き石2, 砥石1, 打製石斧1の42個体と非常に多い。

土師器壺は、①口縁部がいったん直立して上位で外反し、コの字口縁への変化を示し始めるもの(879, 881)と②全体に器内に薄く、丸味をもつ胴部上位から頸部が直立してさらに口縁が短く外反するコの字口縁壺(880, 882)に分類される。①タイプは古要素で②タイプは新要素である。土師器坏は4種類に分けられる。①平底の底部からやや膨らみをもって立ち上がる体部に至り、底部に篋削り、口縁部横溝で、体部には指頭成形後に撫でを施す(871, 872, 875, 878)。②平底の底部からやや膨らみをもって外反する体部に至り、底部に篋削り、体部には指頭成形後に

IV 遺跡の調査

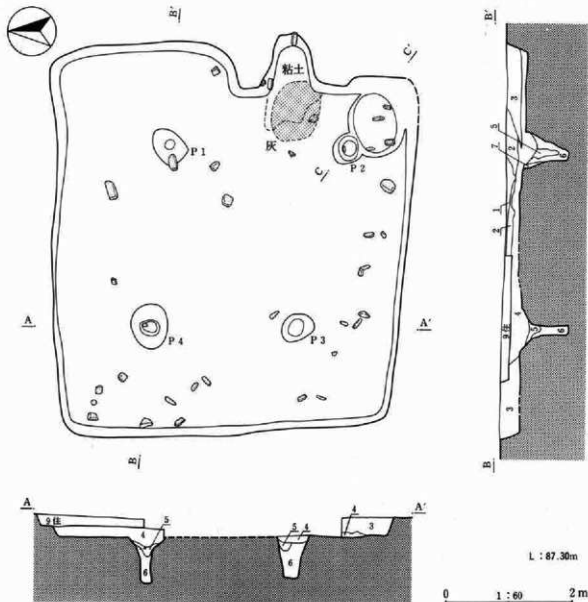
撫でを施す(870, 873, 874, 876), ③平底の底部から外反し、底部彫削り、体部彫削り後口縁部に強い横撫でを施す(868), ④底部から直線的に外反する体部に至り、底部と体部に寛削りを施す(877)の4タイプである。

須恵器

須恵器環は、①器内の厚い底部から、下位がやや丸味をもって外反する(848, 854, 860), ②体部が直線的に外反し、口縁部に至りさらに外反する(850, 861, 862), ③底部から体部が直線的に外反する(851, 852)の3タイプがある。須恵器坏蓋は、水平な天井部から直線的な体部を経てほとんどカエリのないもの(863)と緩やかな体部から屈曲する口縁部が僅かなカエリをもつ(865), ③直線的な体部を経て垂直に折れる口縁部をもつ(864)に分類される。

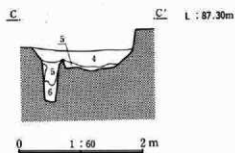
所見

該住居址の1000点を超える出土遺物は、住居址廃絶時からの間断のない遺物廃棄様相を示しているものと解される。タイプCに分類される上層の甕はタイプBaの床直の甕よりも若干新しい。



第413図 7・12号住居址

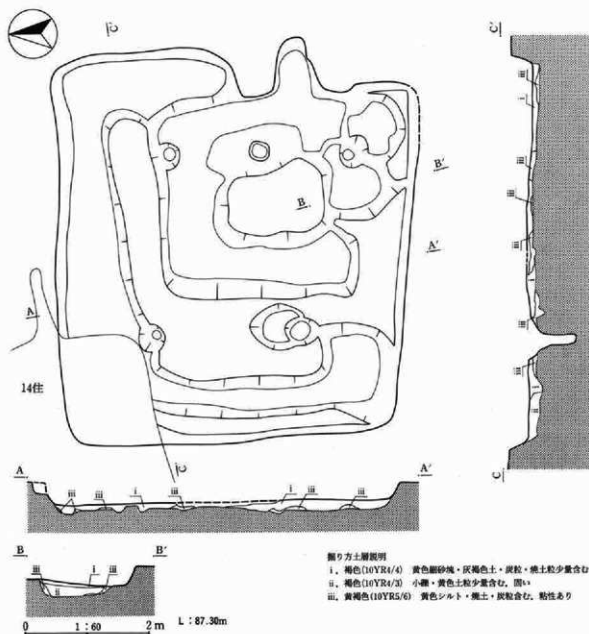
5 本町堂台地区（7区）の遺構と遺物



土層説明

1. 褐色(10YR4/4) 黄色土塊・焼土塊・土器片含む
2. 黄褐色(2.5Y5/6) 黄色粗砂・褐色土の混土、固い
3. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土塊・粗砂含む、土器片・焼土粒少量含む
4. 黄褐色(2.5Y5/6) 粘性あり、褐色土・灰色土・炭粒・焼土粒・鉄分少量沈着
5. 暗褐色(10YR3/4) 小礫・黄色土塊少量含む、粘性あり
6. 褐色(10YR4/4) 黄色土塊・細砂塊・褐色土の混土
7. 明黄褐色(5.5Y6/6) 粘性土

第414図 7・12号住居址

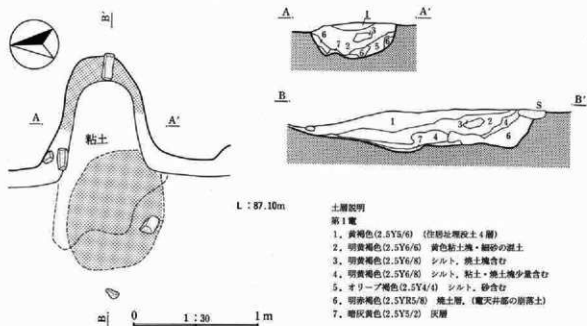


掘り方土層説明

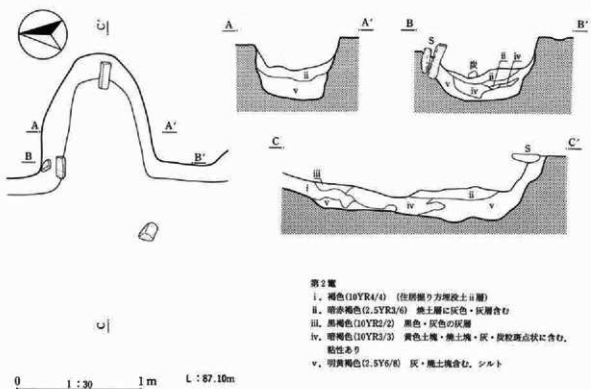
- i. 褐色(10YR4/4) 黄色細砂塊・灰色土・炭粒・焼土粒少量含む
- ii. 褐色(10YR4/3) 小礫・黄色土粒少量含む、固い
- iii. 黄褐色(10YR5/6) 黄色シルト・焼土・炭粒含む、粘性あり

第415図 7・12号住居址掘り方

IV 遺跡の調査

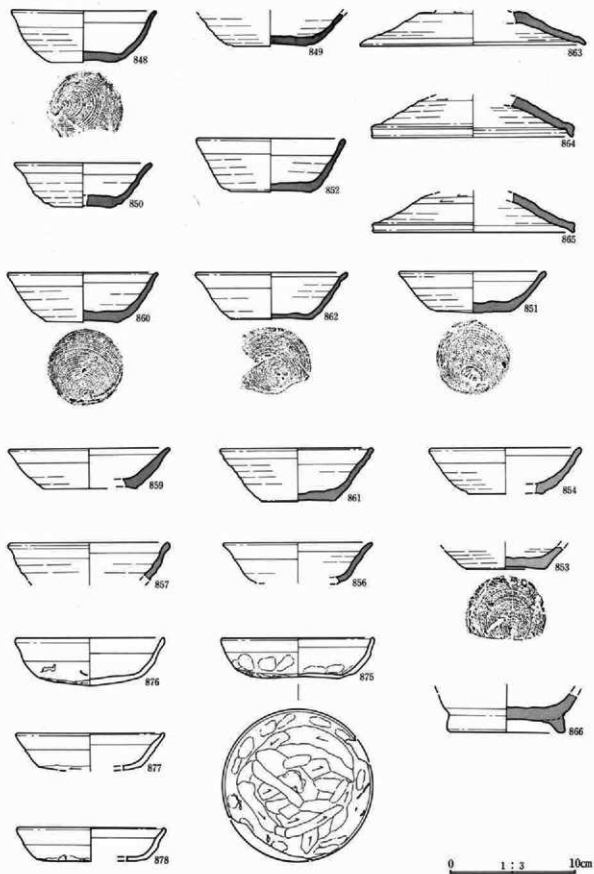


第416図 7・12号住居址第1層



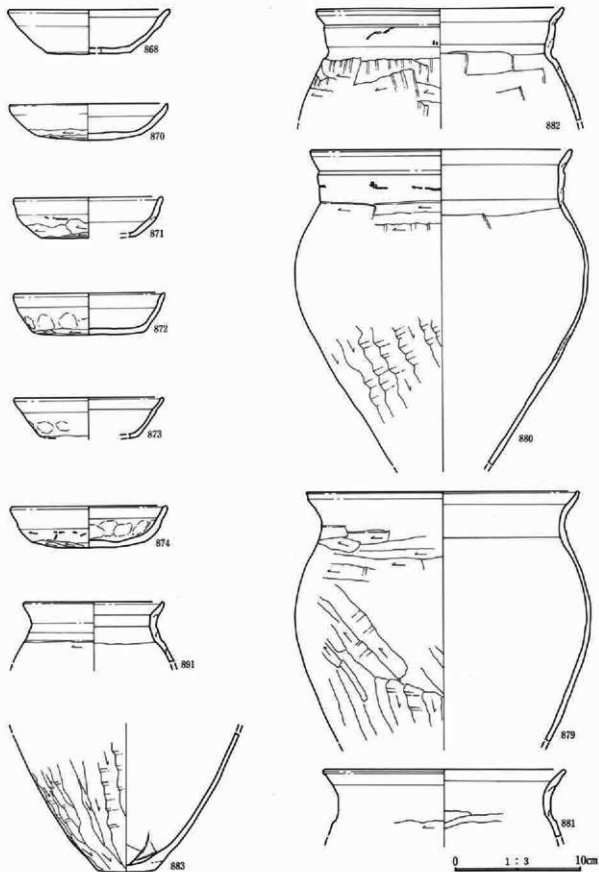
第417図 7・12号住居址第2層

5 本動堂台地区（7区）の遺構と遺物

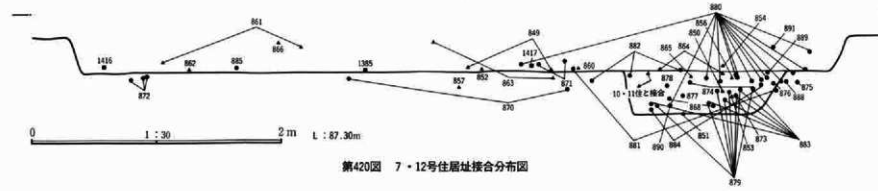
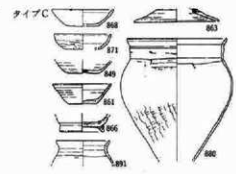
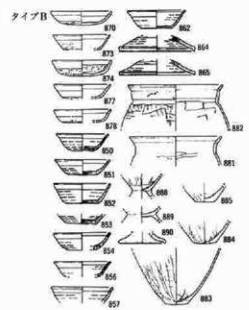
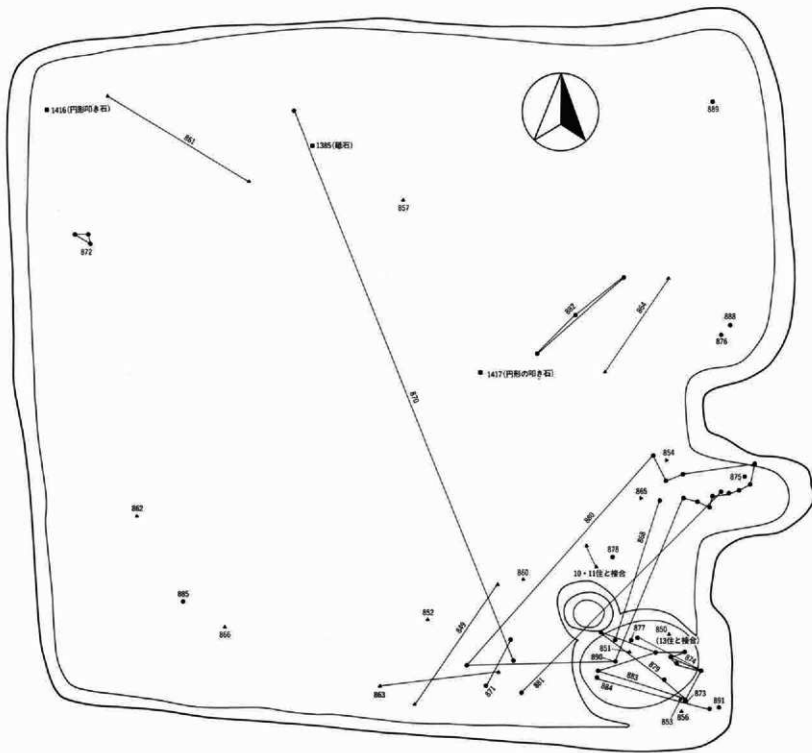


第418図 7・12号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第419図 7・12号住居址出土遺物

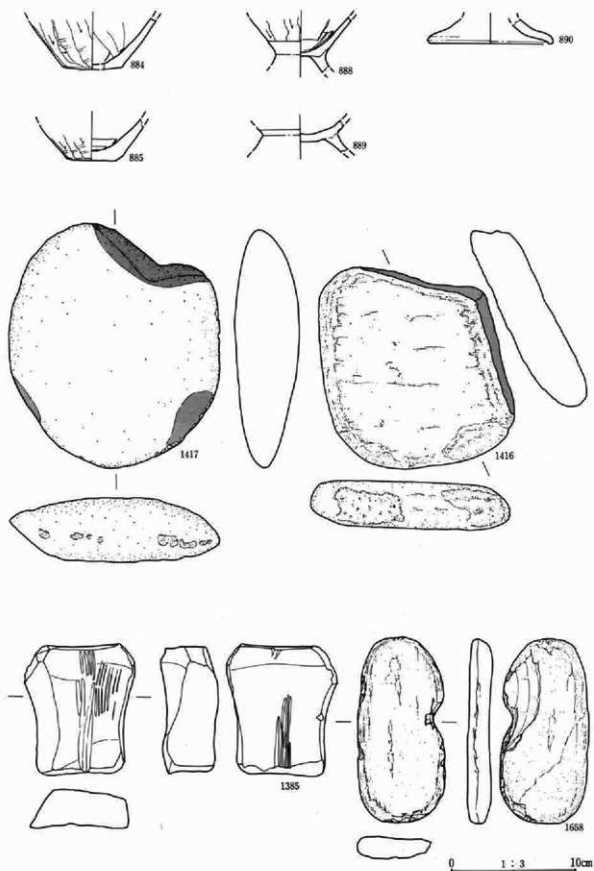


第420図 7・12号住居址接合分布図





5 本動堂台地区（7区）の遺構と遺物



第421図 7・12号住居址出土遺物

## IV 遺跡の調査

## 7・13号住居址

遺 構 (挿図番号第422・423図 写真番号P L-174)

絶対的位置	本住居址は住居址密集部の中央に位置し、 $\alpha 13 \cdot 99$ , $\alpha 14 \cdot 09$ , $\beta 13 \cdot 90$ , $\beta 14 \cdot 00$ の4グリッド
相対的位置	にまたがって所在する。切り合っている住居址は、南東部1/2が14号住で南西コーナーが15号住と
確認面	である。確認面の標高は87.30mで、床面高は86.90mを測る。
規模・形態	規模は東西3.72m・南北2.70m、面積13.82 $\text{m}^2$ で、平面形態は東西軸：南北軸の比が1.37：1の
主軸・壁	かなり細長い縦長方形プランである。主軸方位はN-79°-Eを示す。壁は西壁を除いて90°に近い
覆土	明瞭な立ち上がりを見せ、壁高は約40cmを測る。覆土は5層に分かれ、第1、2層はレンズ状堆積
床・貼床	の住居址内覆土で、第3、4、5層は西南方向からの流入土である。
掘り方	床面には貼床が施されており、南東コーナーには、不整形の貯蔵穴が穿たれている。また、かなり
	しっかりとした周溝が壁下を全周している。貼床の構成土は堅く締まったぶい黄褐色土と
	黄色土の混土層である。掘り方は北東コーナーと南西コーナーに円形の土坑が検出され、北東コー
	ナーの土坑は床下土坑と推測される。

竈 (挿図番号第424図 写真番号P L-175)

燃焼部	燃焼部は東壁中央南寄り壁面を掘り込み作られ、方形の掘り方を持つ。壁面は垂直に立ち上がり、
火床面	レンガ状に焼土化している。竈左前方は、土師器壺や黄褐色粘質土塊が天井部と共に崩落した
	状況が確認できた。袖は、両焚き口壁部分に砂岩が出土し、焚き口補強材として利用されていた
	と思われる。火床面は横いレンズ状を呈し、竈前には方形の灰の掻き出し穴が認められた。

遺物の出土状態 (挿図番号第427図 写真番号P L-174・175)

総点数 平面分布 層位分布	出土遺物総点数は946点と多量で、遺物の平面分布は住居址東半部に集中し、特に竈と貯蔵穴周
	辺に色濃い分布が認められる。層位的には第1層中に小破片の遺物が多量混入しており、第2層
	中にも住居址築設初期に流入した小破片の遺物群が認められる。遺物接合線は、土師器壺912は竈
	を中心に3.5mの散布状況を示し、須恵器高台付壺894は斜辺が2.7mの二等辺三角形状に、須恵器
	壺908はブーメン状に飛散している。前述の三者の接合レベルは、ほぼ第1層遺物と第2層遺物
タイプ	の接合関係が認められる。小破片が多いためかタイプAはなく、タイプBaが土師器壺914で、
	タイプBが土師器壺913、915、小型壺916、台付壺917、須恵器高台付壺722、895、899である。

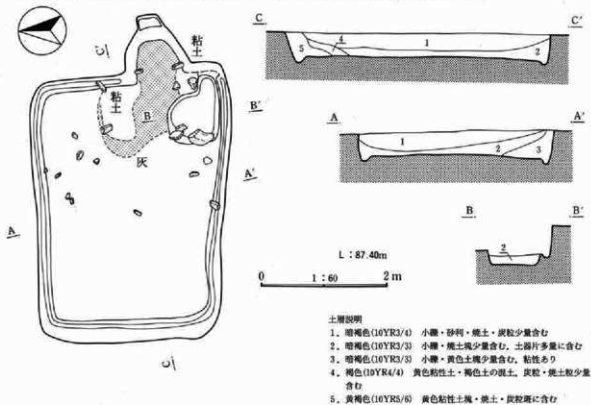
出土遺物 (挿図番号第425・426図 写真番号P L-213・220)

図示遺物	図示しえた遺物は、土師器壺4、土師器小壺1、土師器台付壺2、土師器環1、須恵器壺2、
	須恵器環4、須恵器高台付壺5、須恵器高台付皿1、土鍾1、磁石1、釘1、縄文破片1の24個
	体とかなり多い。
土師器	土師器壺は、2種類に分類される。①丸味をもつ胴部上位から直立して上位が短く外反するコ
	の字口縁部に至り、胴部上位に横位、下位に斜縦位の寛削りを施す、②胴部の膨らみが小さく、
	口縁部上位の外反は強いが、頸部から胴部上位への屈曲が弱くなって頸部が下方に開き、コの字
	が崩れる。の2タイプである。土師器小壺の口縁部は②タイプである。土師器台付壺は、台部の
	高いものと低いものがある。土師器環910は17cmタイプの大形環で、底部が湾曲し内湾する体部か
	ら口縁端部がさらに内傾するという古い要素をもっている。
須恵器	須恵器環893は、底径が小さく器高が低く上げ底である。須恵器高台付壺は高台の貼付が難で、
	その形状も一定の規制が感じられない。904は、堅い焼締めと立ち上りの強い体部に古要素が感

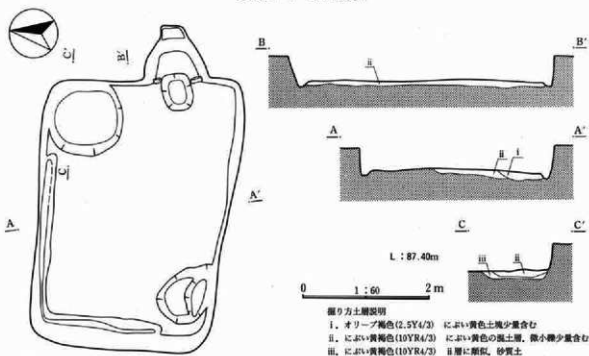
じられる。須恵器高台付皿892は体部が扁平で口縁部が開くという特徴をもつ。

### 所見

該住居址の出土遺物量は12号住に次ぐ多さで1000点に近い。錯綜した遺物接合線は住居址廃絶時の遺物投棄の激しさを物語り、それは周囲の住居の盛んな生活の有り様を推測できる。

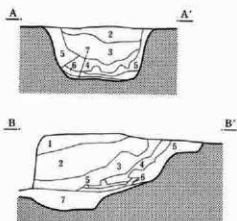
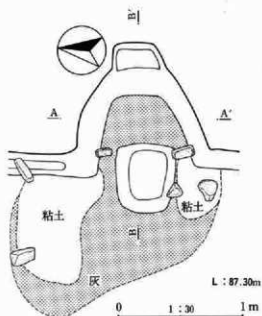


第422図 7・13号住居址



第423図 7・13号住居址掘り方

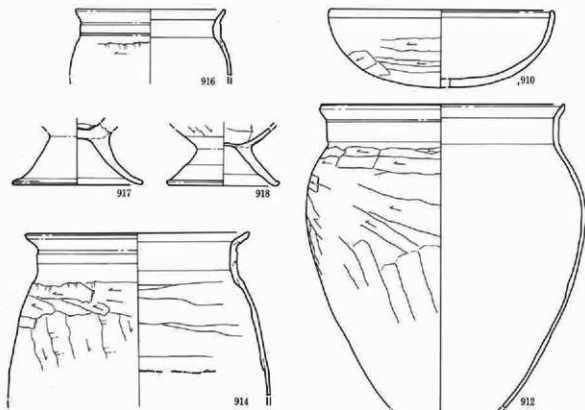
IV 遺跡の調査



土層説明

1. 暗褐色(10YR2/4) (住居址埋没土1層)
2. 暗褐色(10YR3/3) (住居址埋没土2層)
3. 黄褐色(2.5Y5/4) 黒褐色の凝土層、焼土粒少量含む、細粒質い
4. 黄褐色(2.5Y5/3) 灰少量含む、固い
5. 赤褐色(2.5YR4/6) 黄褐色少量含む、焼土塊主体の層
6. 褐色(7.5YR4/4) 焼土粒・灰少量含む、細粒
7. にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼土粒・炭化物・灰含む

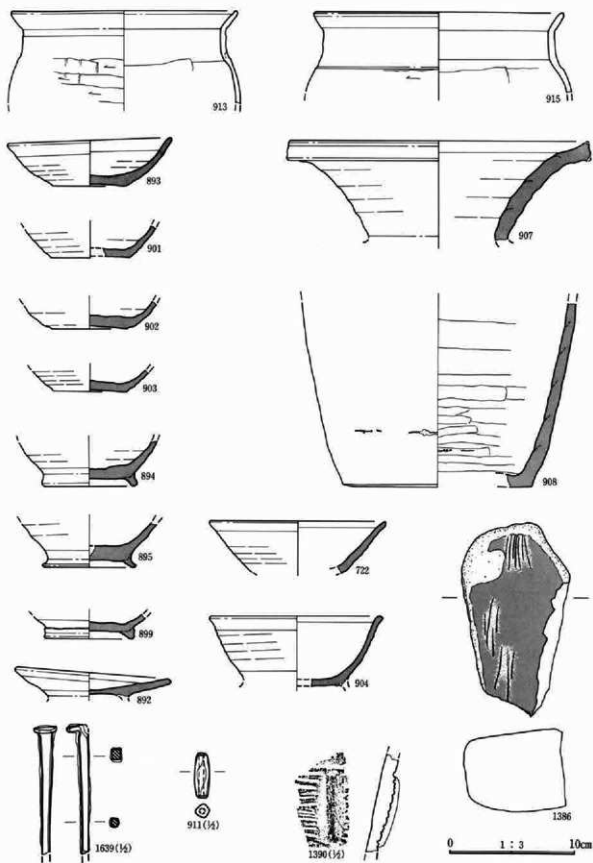
第424図 7・13号住居址竈



第425図 7・13号住居址出土遺物

0 1:3 10cm

5 本駒堂台地区（7区）の遺構と遺物



第426図 7・13号住居址出土遺物



## 7・14号住居址

遺 構 (挿図番号第428・429図 写真番号P L-175)

本住居址は $\alpha 13 \cdot 99$ ,  $\alpha 14 \cdot 09$ ,  $\beta 13 \cdot 90$ ,  $\beta 14 \cdot 00$ の4グリッドにまたがって所在し、09, 12, 13, 15号住と切り合っている。確認面の標高は87.25mで、床面高は86.70mを測る。規模は東西3.58m・南北3.34m、面積14.19 $\text{m}^2$ で、平面形態は東西軸:南北軸の比が1.07:1の正方形プランを呈している。主軸方位はN-78°-Eを示す。壁は南壁のみ健在で、90°に近いシャープな立ち上がりを示している。覆土は3層に分けられ、いずれもレンズ状堆積を呈していたものと推量される。

床面には貼床が施され、西壁下から南壁下にかけて周溝が巡っていた。貼床の構成土は若干粘性のある暗褐色土と黒褐色土で、互層状の堆積が確認された。掘り方は円形土坑と不整形の土坑が、北西コーナーから南東コーナーにかけて斜めに並ぶような平面構成を取っている。

竈 (挿図番号第430図 写真番号P L-175)

燃焼部は東壁中央部住居内に作られる。右袖は12号住により壊され、左袖から煙道部分が残る。左袖は、地山塊混土を壁に貼り付けられた状況が確認できた。火床面は焚き口部が窪み灰の堆積が多く、中心から奥壁に向かい灰の堆積は薄くなる。煙道部は天井部が崩落せずに残り、方形の掘り方を持つことが、壁面の焼けにより確認できた。また燃焼部からは、斜め方向に立ち上がり、煙り出しに至る。

遺物の出土状態 (挿図番号第431・432図)

出土遺物総点数は125点を数え、13号住に上部を削平されているために遺物の出土量も少なく、竈周辺と南壁際にはほぼ限定されている。層位的には浮いた遺物は当然なく、床面に近い遺物が多数を占めている。接合遺物は土師器環921のみで、小破片の遺物が大半を占めていることを物語っている。タイプAは土師器環919, 920で、タイプBaはなく、タイプBが土師器環921で、残りはタイプCである。

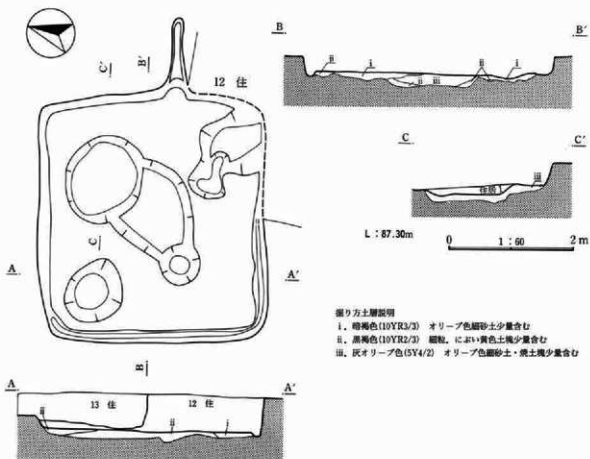
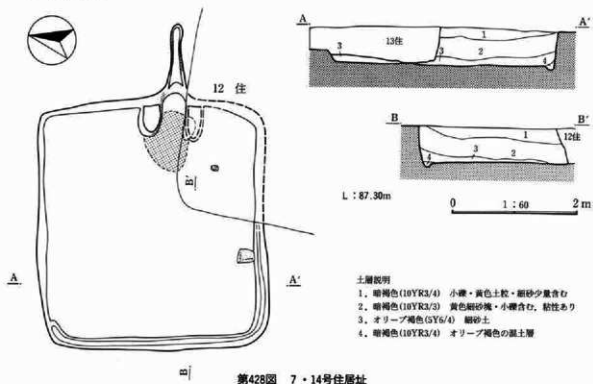
出土遺物 (挿図番号第431図 写真番号P L-213)

図示した遺物は、土師器環3, 土師器小甕1, 須恵器壺1, 須恵器高台付壺1, 軽石1の7個体である。土師器環は①尖り気味の丸底から口縁部が短く内傾する(921)、②若干尖り気味の丸底で体部が内湾する(919)、③内湾する体部から直立気味の口縁部を経て、横撫での幅が広がる(920)の3タイプだが、①921と②919は同タイプ内の変異ともとらえられる。

## 所 見

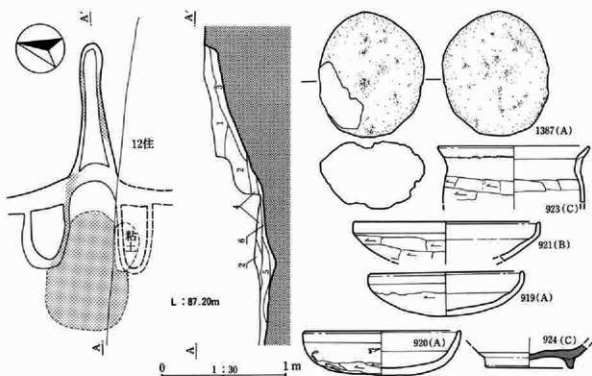
該住居址は09, 12, 13号住と切り合い、14号住→12号住→09号住→13号住の時系列が考えられる。該住居址絶絶時の遺物廃棄は少なく、以後しばらくは周囲に住居形成は無いと解される。

IV 遺跡の調査





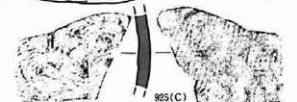
5 本町堂台地区（7区）の遺構と遺物



土層説明

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) におい黄色灰・焼土混含む
2. におい黄色(2.5Y6/4) 細粒。暗オリーブ褐色土・灰粒・焼土粒少量含む。固い
3. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 黄褐色土粒含む。焼土層1層より多量に含む
4. 灰オリーブ(5Y5/3) 細砂土
5. におい黄褐色(10YR4/3) 灰オリーブ色細砂土・灰粒・焼土混含む
6. 暗灰黄色(2.5Y5/2) 灰層。におい黄褐色土・焼土粒少量含む

第430図 7・14号住居址電



第431図 7・14号住居址出土遺物 (S = 1 : 3)



第432図 7・14号住居址接合分布図

IV 遺跡の調査

7・15号住居址

遺構 (挿図番号第433・434図 写真番号P L-176)

絶対的位置	本住居址はα14・09グリッドに所在し、北東コーナーで13、14号住と切り合っている。確認面の
確認面	標高は87.30mで、床面高は87.10mを測る。
規模・形態	規模は東西2.70m・南北3.34m、面積8.76㎡で、平面形態は東西軸：南北軸の比が1：1.23の
主軸・壁	横長長方形プランを呈している。主軸方位はN-99°-Eである。壁は立ち上がりがシャープでなく、
覆土	壁高も平均15cmと低い。覆土は1層で住居址内覆土と見られる。
床・貼床	床面は小礫や砂利を多く含む貼床が施され、床面上には南東コーナーに円形の貯蔵穴が穿たれて
	いる。掘り方は南西コーナーに不整形の土坑と、住居址中央に3基の円形土坑が並んでいる。
	竈 (挿図番号第435図 写真番号P L-176)
燃焼部	燃焼部は東壁南寄り壁面を掘り込み作られ、竈内から右焚き口にかけて、灰白色粘土の広がり
火床面	が見られ、竈天井部で使用された可能性がある。壁面の焼けは弱い。火床面は床面よりやや窪み、
	薄く灰の堆積が見られる。灰は竈前から貯蔵穴方向に広がる。

遺物の出土状態 (挿図番号第437図)

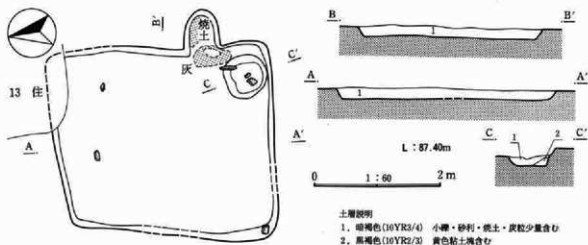
総点数	出土遺物総点数は97点と少ないが、須恵器20%、灰釉陶器9%と特徴のある出土率を示してい
平面分布	る。遺物の平面分布は南壁際と北壁際に濃く、貯蔵穴周辺にも中心が見られる。層位的には単一
層位分布	層の下部に小破片遺物の堆積が見られ、床下からも煮沸用土器の破片が検出されている。タイプ
タイプ	A・Baはなく、タイプBが羽釜934と須恵器高台付埴927、929である。

出土遺物 (挿図番号第436図 写真番号P L-213・220)

図示遺物	図示しえた遺物は、羽釜2、須恵器高台付埴3、灰釉陶器3の8個体である。羽釜933は胴部から
	断面三角形の鈿、口唇部はやや内傾する。須恵器高台付埴927は、調整のない高台をもつ。
反軸	灰釉陶器はすべて高台付埴で、930のみ実存する。施釉方法は3個体とも漬け掛けであると思わ
	れる。また932の内側底部には、重ね焼きの痕跡と思考される跡が見られる。

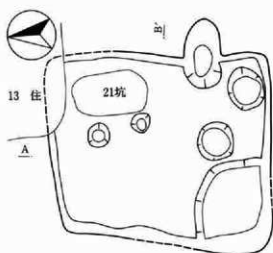
所見

該住居址は13号住と切り合い、13号住→15号住の順列が考えられる。該住居址の遺物は小破片が多く、遺物様相からもこの附近の最終末を示すものと思される。



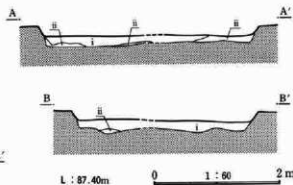
挿433図 7・15号住居址

5 本動堂台地区(7区)の遺構と遺物



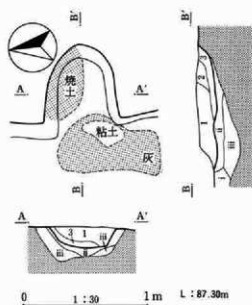
B|

第434図 7・15号住居址掘り方



掘り方土層説明

- i. 黒褐色(10YR2/2) 小礫・黄色土塊少量含む  
 ii. 明黄褐色(2.5Y6/6) 細砂層



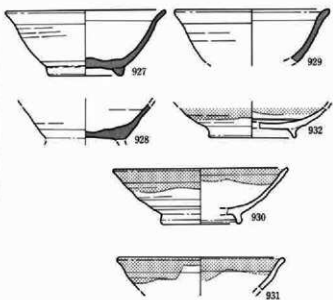
土層説明

1. 暗褐色(10YR2/4) (住居址埋没土1層)  
 2. 褐色(10YR4/6) 黄色粘性土・褐色土・焼土塊の混土  
 3. 黒褐色(10YR3/3) 焼土塊・炭粒少量含む

掘り方土層説明

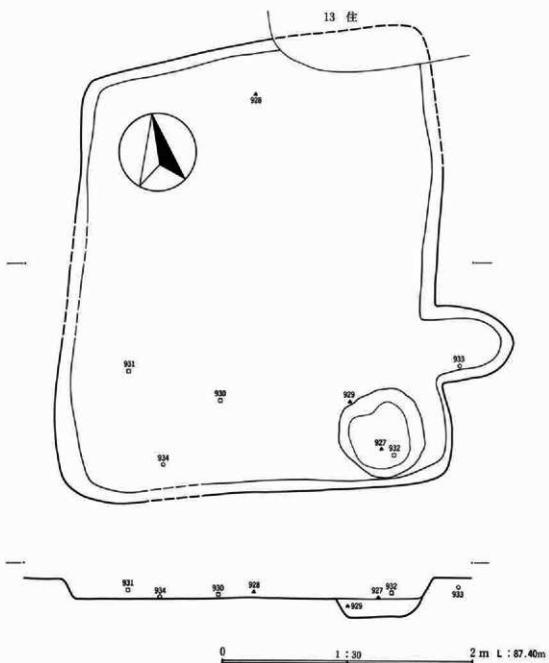
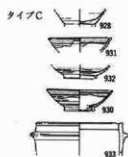
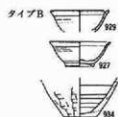
- i. 黄褐色(2.5Y5/6) (住居掘り方埋没土1層)  
 ii. 黒褐色(10YR3/3) 焼土塊・炭粒・灰含む  
 iii. 褐色(10YR4/4) 小礫・焼土塊・炭粒・細砂含む

第435図 7・15号住居址竪



第436図 7・15号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第437図 7・15号住居址接合分布図

## 7・16号住居址

遺 構 (挿図番号第438・439図 写真番号P L-176)

本住居址は住居址密集部の東端に位置し、 $\alpha 13 \cdot 98$ , 99グリッドに所在する。該住居址は06号住との切り合いによって北壁の2/3を失い、04号住との切り合いで南壁の一部を欠失している。またトレンチで北半分を削平されている。確認面の標高は87.30mで、床面高は87.20mを測り非常に浅い。

規模は東西2.70m・南北3.22m、面積10.08m<sup>2</sup>が推定でき、平面形態も東西軸：南北軸の比が1：1.19の横長方形プランが考えられる。主軸方位はN-99°-Eで、09号住や18号住とほぼ方位を等しくする。壁は壁高が10cm内外でその様相は知れない。覆土は砂礫まじりの焼土や炭化物を含む住居内覆土である。

床面上の南西コーナー付近には焼土が分布し、貼床の施されている床は締まりが強く鉄分が沈着している。貼床の構成土は砂礫を多量に含む土層で、附近の土質のありようを端的に示している。掘り方は平均20cmの深さに全面的に掘り込まれている。

竈 (挿図番号第440図 写真番号P L-176)

燃焼部は東壁南寄り壁面を掘り込み作られる。壁面の焼けは弱い。火床面は床面より僅かに低く、レンズ状を呈する。

遺物の出土状態 (挿図番号第441・442図)

出土遺物総点数は38点と少なく、遺物の分布は南壁際に偏っている。層位的には極めて覆土が薄いために、殆どの遺物が床面上に近いレベルで検出されている。接合遺物は土師器甕826で、竈付近で散乱する。タイプA・Baはなく、タイプBが土師器甕826, 827, 須恵器高台付埴828である。

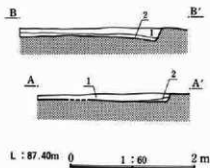
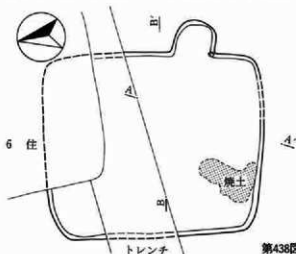
出土遺物 (挿図番号第441図)

図示した遺物は非常に少なく、土師器甕2, 須恵器高台付埴1の僅か3個体である。

土師器甕826は、器肉が厚く口縁部が崩れたコの字口縁を呈する。須恵器高台付埴828は非常に難な高台を貼付している。

## 所 見

該住居址は04, 06号住と切り合い、06号住→04号住→16号住の順列である。遺物廃棄行為の形跡は少なく、この周辺の住居も終末期に近い時期の所産と理解される。

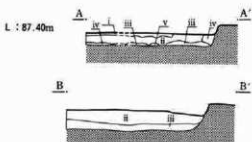
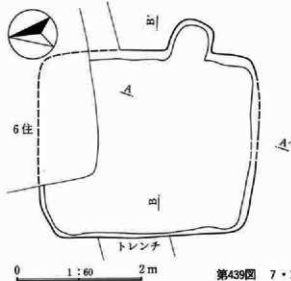


土層説明

1. 暗褐色(10YR3/3) 焼土粒・小礫少量含む、固い
2. 黒褐色(10YR3/2) 灰粉含む、灰層

第438図 7・16号住居址

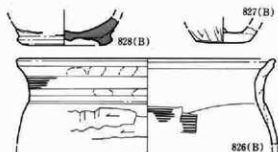
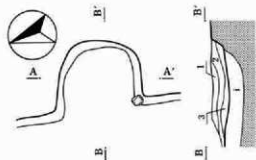
IV 遺跡の調査



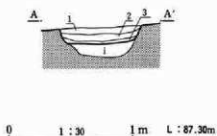
掘り方土層説明

- i. 暗褐色(10YR3/3) 小礫・炭粒含む、固い
- ii. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土礫砂・小礫含む、固い
- iii. 褐色(10YR4/4) 礫多量を含む
- iv. 黄褐色(2.5Y5/4) 粘土塊・褐色土・黄色土・焼土粒少量含む、粘性あり

第439図 7・16号住居址掘り方



第441図 7・16号住居址出土遺物



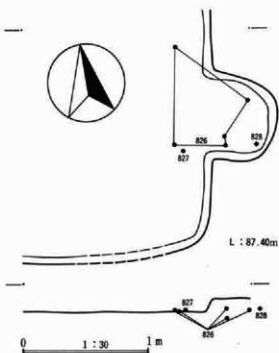
土層説明

- 1. 褐色(10YR4/4) 黄色土塊・褐色土含む
- 2. 褐色(10YR4/3) 焼土粒・炭粒含む
- 3. 黒褐色(10YR2/3) 焼土・炭粒含む

掘り方土層説明

- 1. 暗褐色(10YR3/4) (住居掘り方埋土土層)

第440図 7・16号住居址竈



第442図 7・16号住居址接合分布図

## 7・17号住居址

遺 構（挿図番号第443図 写真番号P L-177）

本住居址は遺跡地の南側部分に位置し、β14・40グリッドに所在する。周辺の遺構は02溝がすぐ東に位置し、南西6mに18号住が存在している。確認面の標高は86.90mで、床面高は86.65mを測る。

規模は東西1.64m・南北1.84m、面積3.66㎡の小形住居址で、平面形態は東西軸・南北軸の比が1:1.12の極めて正方形に近い横長方形プランを呈している。主軸方位はN-81°-Eである。壁は南壁が30cmの壁高で90°に近い立ち上がりを見せているものの、他は北壁が削平されており、東壁と西壁は明瞭でない。覆土は第1、3層がレンズ状堆積の住居内覆土で、第2層は流入土であろう。

床面は僅かに貼床の形跡もあるが、貼床の施されない地床面と考えたい。

竈（挿図番号第444図 写真番号P L-178）

燃焼部は東壁中央部壁面を掘り込み作られ、右焚き口部に補強材として片岩礫を置く。覆土中層及び、火床面直上に天井崩落土の焼土塊が混じる。火床面は床面より僅かに窪み、灰は僅かに認められる。

## 遺物の出土状態

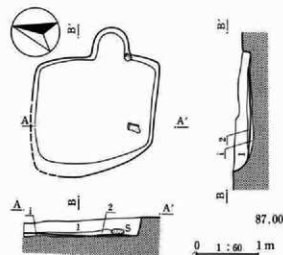
出土遺物は確認されていない。

## 出土遺物

出土遺物は一片も検出されなかった。

## 所 見

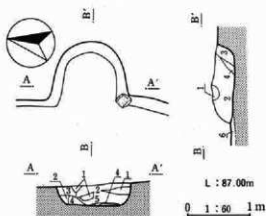
該住居址は全く遺物が見当たらず、遺物の廃棄行為が見られないところに特色をもつ。



## 土層説明

1. におい・黄褐色(10YR4/3) 粘性土、ロームブロック含む
2. 黒褐色(10YR3/2) 緻密掘り方土層説明
1. 暗灰黄色(2.5Y4/2) におい・黄色土塊・小礫少量含む

第443図 7・17号住居址



## 土層説明

1. 黄褐色(10YR5/6) シルトロームブロック、焼土粒含む
2. におい・黄褐色(10YR4/3) 粘性土、焼土・軽石少量含む
3. におい・黄褐色(10YR4/3) 2層より砂質土
4. 黄褐色(2.5Y5/4) 砂粒混入ローム土
5. 暗褐色(10YR3/3) 反層、粘性あり
6. 黒褐色(10YR3/2) (住居址埋没土2層)

第444図 7・17号住居址竈

IV 遺跡の調査

7・18号住居址

遺構 (押図番号第445・447図 写真番号P L-178)

**絶対的位置** 本住居址は遺跡地の南端に位置し、 $\alpha 14 \cdot 59$ グリッドに所在する。周囲には北東6mに17号住、  
**相対的位置** 西方8mに19号住がある。該住居址はトレンチによって中央部分を削平されているため、調査が  
困難であった。確認面の標高は87.20mで、床面高は87.05mを測る。

**規模** 規模は四隅がかりうじて残存していたために、東西1.86m・南北2.44m、面積5.48m<sup>2</sup>が測られ、  
**形態・主軸** 平面形態は東西軸：南北軸の比が1：1.38の横長方形プランであることが窺える。主軸方位は  
**壁・覆土** N-100°-Eである。壁は基部が残っているのみで、その様相はつかめない。覆土は1層で住居内覆  
土である。

**床・貼床** 床面には貼床が施されており、その構成土は若干締まりの感じられる粘性土である。掘り方は  
円形土坑2基と北壁にくっついた方形の土坑がある。

竈 (写真番号P L-178)

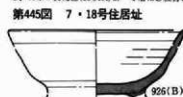
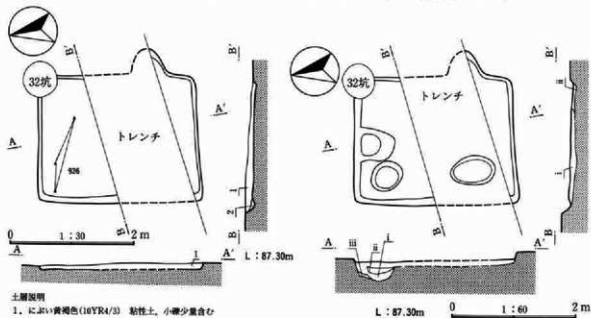
竈はその残骸と思われる痕跡のみで、全容は解明できない。

遺物の出土状態 (押図番号第445・446図)

**総点数** 出土遺物総点数は6点と僅少であるが、須恵器の割合が8割を超えている。須恵器高台付塊926  
**タイプ** がかりうじて接合遺物として掲載でき、出土状態はタイプBに当たる。

出土遺物 (押図番号第446図)

**図示遺物** 図示しえた遺物は、須恵器高台付塊 (926) 1個体にすぎない。926は幅ひろの高台部分は剥離  
してないが、立ち上がりの強い体部とかなり大きな法量を有する高台付塊である。



第446図 7・18号住居址出土遺物 (S = 1 : 3)

掘り方土層説明  
I. におい黄褐色(10YR4/3) ローム土、粘性あり、固い  
II. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) ロームブロック少量含む、粘性あり  
III. オリーブ褐色(2.5Y4/6) 1層に剥離

第447図 7・18号住居址掘り方



## 7・19号住居址

遺 構 (押図番号第448・449図 写真番号P L-179)

本住居址は遺跡地の南西端に位置し、 $\alpha 14 \cdot 58$ グリッドに所在する。他の集落址からは孤立した絶対的位置  
 占地の仕方をしているので注目される。また18号住と同様にトレンチにより住居址の北側を削平相対的位置  
 されている。近接する遺構は8m東の18号住である。確認面の標高は87.60mと高く、床面高は87、確認面  
 20mを測る。

規模は東西2.16m・南北3.06m、面積9.08 $m^2$ で、平面形態は東西軸：南北軸の比が1：1.41の規模・形態  
 の横長方形である。主軸方位はN-82°-Eを示している。壁はそれほど明瞭な立ち上がりは示さないが、主軸・壁  
 南壁と西壁において40cmを測る。覆土は3層に分かれ、第1、2 a層は住居内覆土でレンズ  
 ズ状堆積を示し、2 b層は住居外からの流入土であろう。覆土

床面は概ねフラットで貼床が施されており、床面上には南東コーナーに楕円形の貯蔵穴が穿た床・貼床  
 れている。貼床の構成土は、粘性を帯びた暗オリーブ褐色土に黄褐色土のブロックの含まれた土  
 層である。掘り方は、大小の円形土坑4基と南東コーナーの壁にくっついた隅丸方形の土坑が穿掘り方  
 たれている。

竈 (押図番号第450図 写真番号P L-179)

燃焼部は東壁南寄り壁面を掘り込み作られる。燃焼部中央から煙道部にかけては天井部が残り、燃焼部  
 内面はレンガ状に焼土化している。また焚き口部には、補強材の片岩礫や砂岩が落ちた状態で焚き口  
 出土し、竈内から竈前にかけて、多量の羽釜片が出土している。火床面は焚き口部分でやや床面より火床面  
 より下がるが、燃焼部から煙り出しまで斜めに一気に立ち上がる。燃焼部中央に砂岩の立岩が出土  
 し、支脚と考えられる。支脚

遺物の出土状態 (押図番号第453図 写真番号P L-179・180)

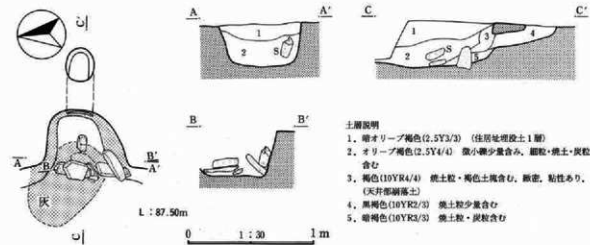
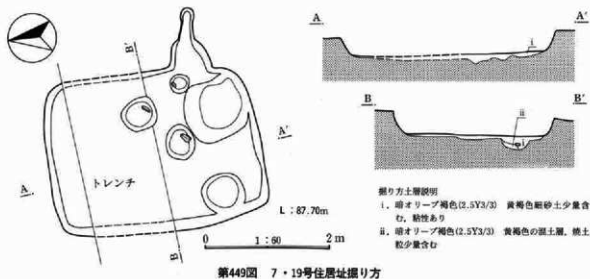
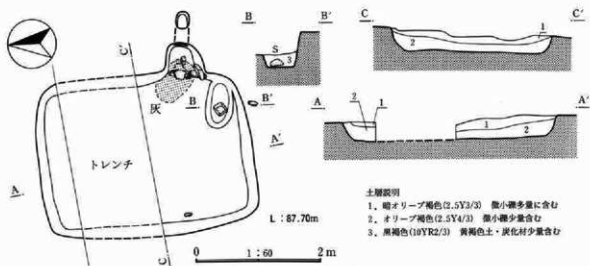
出土遺物総点数は233点を数え、そのうち74%が羽釜で8%余りが瓦である。遺物の平面分布は総点数  
 該住居址の北半部にトレンチが入っている故か、現象面的には南半部に偏った分布傾向を示して平面分布  
 ている。層位的には遺物の垂直分布は、第1層混入遺物と第2層に属する遺物に大別される。層位分布  
 接合線は甚だしく錯綜しており、羽釜937は1.5m四方に散らばっており、瓦953も斜辺3mの三角接合関係  
 形状に散在している。出土レベルはほぼ同一層内で完結しており、平面的な散乱はみられるもの  
 の接合遺物はそれほどのレベル差をもたない。タイプAは須恵器環948で、タイプBaが羽釜937、タイプ  
 938で、タイプBが羽釜939, 940, 941, 947である。

出土遺物 (押図番号第451・452図 写真番号P L-213・214・219)

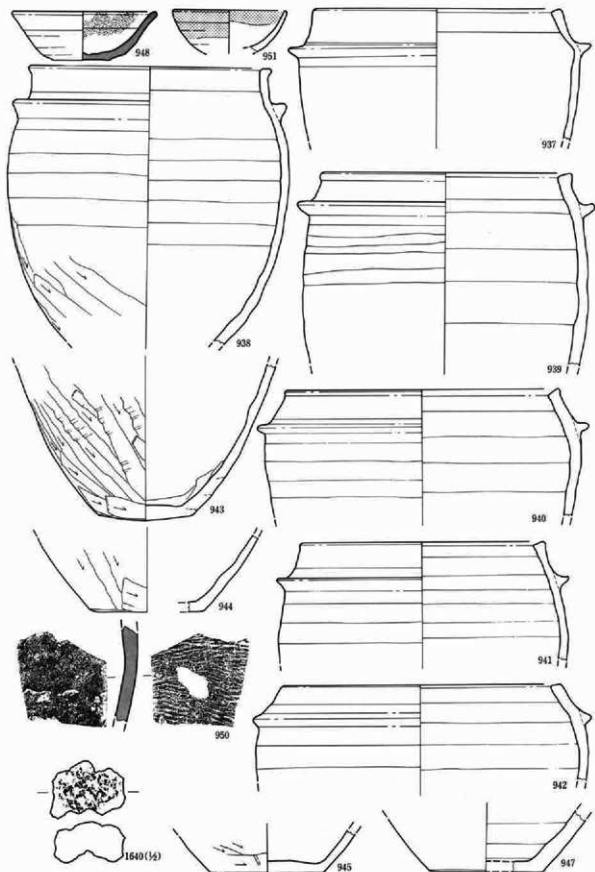
図示しえた遺物は、羽釜10, 須恵器燹破片1, 須恵器環1, 灰釉高台付塊1, 瓦片8, 鉄片1 図示遺物  
 の22個体である。

羽釜は3種に分けられる。①僅かに膨らみをもつ胴部から、断面三角形で上向きに付く鐔を経て、胴部  
 て、内傾する口縁部に至る。全体にシャープな作りで、酸化炭焼成である(939, 941)。②丸味をもつ胴部  
 から、断面三角形の鐔を経て直立気味の口縁部に至り、口唇部は水平である。全体にしっ  
 かりした作りで、バランスが良い(938)。③直線的な胴部から断面三角形の鐔を経て、強く内傾  
 する口縁部に至り、口唇部は水平のもの(946)と内傾するもの(937, 940)がある。須恵器環948  
 は底径が小さく底部から体部にかけて丸味をもち、底部周辺を手持ち寛削りしている。灰釉高台  
 付塊951は、漬け掛けによる施釉であると思われる。

IV 遺跡の調査

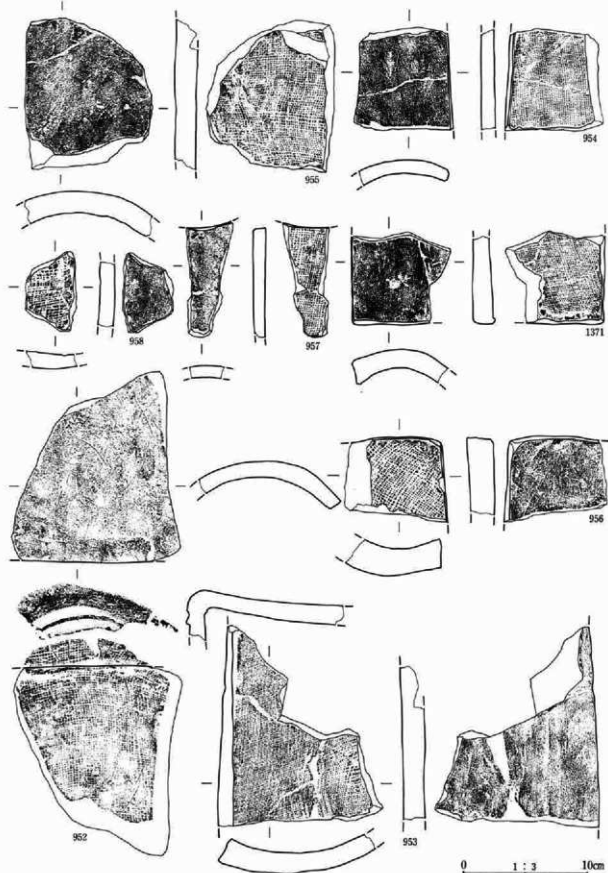


5 本駒堂台地区（7区）の遺構と遺物



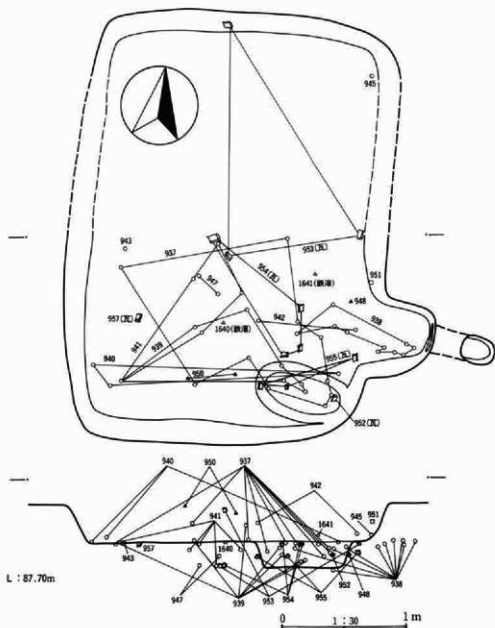
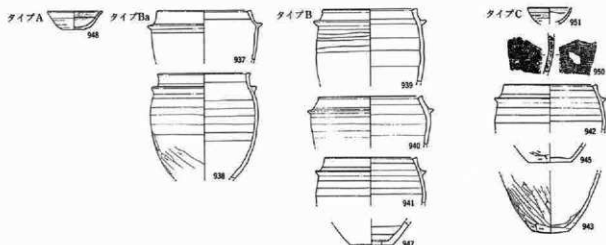
第451図 7・19号住居址出土遺物

IV 遺跡の調査



第452図 7・19号住居址出土遺物

5 本駒堂台地区（7区）の遺構と遺物



第453図 7・19号住居址接合分布図

IV 遺跡の調査

7・20号住居址

遺構 (挿図番号第454・455図 写真番号P L-180)

絶対的位置 本住居址は02溝で区画された遺構の内部に位置し、 $\phi 14 \cdot 52$ , 53グリッドに所在する。住居址は

確認面 04号溝によりほぼ1/2を失っている。確認面の標高は86.85mで、床面高は86.70mを測る。

主軸方位 規模・平面形態とも東側部分を削平されているため明らかにできない。主軸方位はN-64°-Eと

覆土 推測される。壁もその様相は不明である。覆土は3層に分けられ、第1, 2層は住居内覆土であり斑鉄層を含み、第3層は流入土の可能性が高い。

床・貼床 床面は若干の凹凸はあるものの貼床が施され、床面上の中央部には焼土が分布し、周溝が全周している。貼床の構成土は暗褐色土と黄褐色土が互層をなしている。掘り方は残存している部分では、円形土坑が4基確認されている。

電

該住居址はほぼ東部分1/2を04溝により削平され、電も欠損している。

遺物の出土状態 (挿図番号第454・456図)

タイプ 出土遺物総点数は4点と僅少で、床面上に貼り付くようにして検出された。タイプA、タイプBaはなく、土師器環959と須恵器甕960がタイプBである。

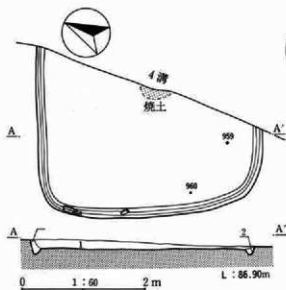
出土遺物 (挿図番号第456図 写真番号P L-214)

図示した遺物は僅かに2個体で、土師器環959と須恵器甕960である。

土師器 土師器環959は、底部が湾曲して直立する口縁部に至るもので12cmタイプの環と考えられる。

所見

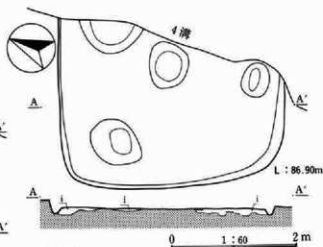
該住居址は方形区画遺構に属するものと見なされ、僅少な遺物廃棄様相も方形区画遺構との関連で考察する必要があると思われる。



土層説明

1. 暗褐色(10YR3/4) 小礫・黄色土小塊・灰色粘土・斑鉄含む
2. 褐色(10YR4/4) 灰褐色土・黄褐色土粒・黄色土塊の混土。粘性あり。固い

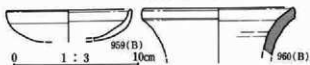
第454図 7・20号住居址



掘り方土層説明

1. 黄褐色(10YR5/6) 褐色土・灰褐色土、黄色土塊含む

第455図 7・20号住居址掘り方



第456図 7・20号住居址出土遺物

## 7・01号溝 (挿図番号第457・465図 写真番号P L-180・214)

本溝は遺跡地のほぼ中央部を弧状に西から東へと東流し、 $\alpha 14 \cdot 17$ , 18, 19, 28, 29,  $\beta 14 \cdot 10$ , 位置  
20, 11, 01グリッドを横切って行く。溝の断面形は洪水によるものと考えられる乱流によって千々 形状  
に乱れており原型を留どめないが、かろうじて上幅85cm, 深さ50cmを測ることができる。土層は 層相  
細かく分層され、洪水の影響を留どめる砂礫の混入が多く見られる。掲載遺物は須恵器環3 (墨 掲載遺物  
書2), 坏蓋2, 須恵器大甕破片1, 縄文土器破片2である。該溝は遺物様相や蝸川の氾濫に於ける  
廃絶状況が、本遺跡の西南1.5kmに位置する滝前遺跡M-4号溝状遺構に類似しており、同時期  
の洪水氾濫による廃絶の可能性が強いものと思われる。

## 7・02号溝 (挿図番号第458・465図 写真番号P L-180・181・214)

本溝は遺跡地の東南部に位置し、その様相からかなりの大掛かりな方形区画遺構の一部を構成 位置  
するものと考えられる。方形区画遺構の西辺を画する該溝はN-22°-Wで北流し、92°の角度で東に 走方向  
折れ、北辺を画する溝はN-52°-Eで東流している。溝の断面形は血状を呈し、上幅7.5m, 下幅4 形状  
m, 深さ90cmを測る。土層断面を観察すると最上層にAs-B軽石層があり、該層降下時点では本 層相  
溝は殆ど埋没しており、下層の鉄分沈着層の存在は水流のあったことを裏付けている。出土遺物  
は23点と少なく、掲載遺物も須恵器環2 (墨書1), 須恵器大甕破片1のみである。

該溝の時期とその性格については「成果と問題点」の項で少し論じてみたい。

## 7・03号溝 (挿図番号第459・465・466図 写真番号P L-181・214)

本溝は02溝と一連の遺構として理解され、 $\alpha 14 \cdot 38$ , 39グリッドに所在する。該遺構は溝状の道路 位置  
路遺構とも言うべきもので、小石を敷き詰めた浅い溝が02溝の屈曲部に向かって緩やかに下って 走方向  
行く様相を呈している。断面形は浅い血状で底部に小石が敷かれ、徐々にその幅を増して02溝の 形状  
底部に至る。04溝が該遺構の上にかぶさる形となっている。

## 7・04号溝 (挿図番号第463・464・466図 写真番号P L-181・215)

本溝は遺跡地の南半部に位置し、 $\beta 14 \cdot 53$ , 43, 33と北流し $\beta 14 \cdot 32$ 附近で西に屈曲して、 $\beta 14 \cdot$  位置  
31, 30,  $\alpha 14 \cdot 39$ グリッドと西流する。溝の断面形は血状を呈し、上幅200cm・下幅117cm, 深さ27 形状  
cmを測る。北流する溝の走行方向はN-36°-W, 西流する溝の走方向はN-80°-Wを示す。出土遺物 走方向  
は90点を数えるが破片が多く、掲載遺物は石臼3, 内耳鍋1, 瓦1の4点に過ぎない。 掲載遺物

該溝は現在まで使用されていた農道の直下から検出されている。このような類例は中世にかか  
わる遺跡では数多く経験されていることで、土層や出土遺物の様相から中世に利用された後廃絶  
され、埋没後道となった溝であることが理解される。

## 7・05号溝 (挿図番号第460・466図)

本溝は遺跡地の東部に位置し、01溝に接して東流し $\beta 14 \cdot 11$ , 01グリッドに所在する。溝の断面 位置  
形は逆台形で、上幅36cm・下幅30cm, 深さ17cmを測る。小溝の割りには46点と出土遺物が多く、 形状  
掲載遺物は土師器環1, 須恵器高台付埴2である。

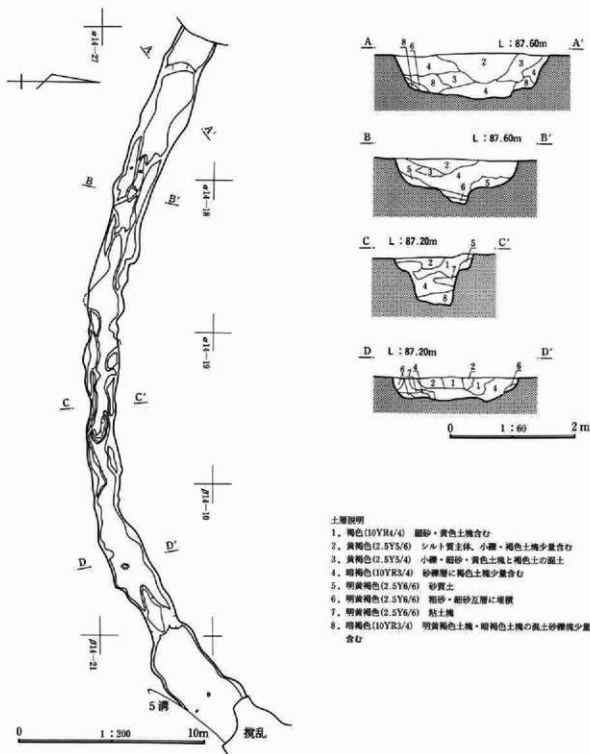
## 7・06号溝 (挿図番号第461図 写真番号P L-181)

本溝は04溝の終結点に直交して位置し、 $\alpha 14 \cdot 39$ , 49グリッドに所在する。確認時点での全長は 位置  
6m程で、溝の断面形は血状を呈し、上幅70cm・下幅30cm, 深さ20cmを測る。土層は第1層にAs-B 形状  
軽石を多量に含み、第2層には鉄分沈着が見られ水の影響が考慮される。 層相

IV 遺跡の調査

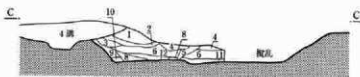
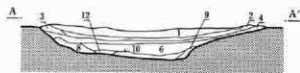
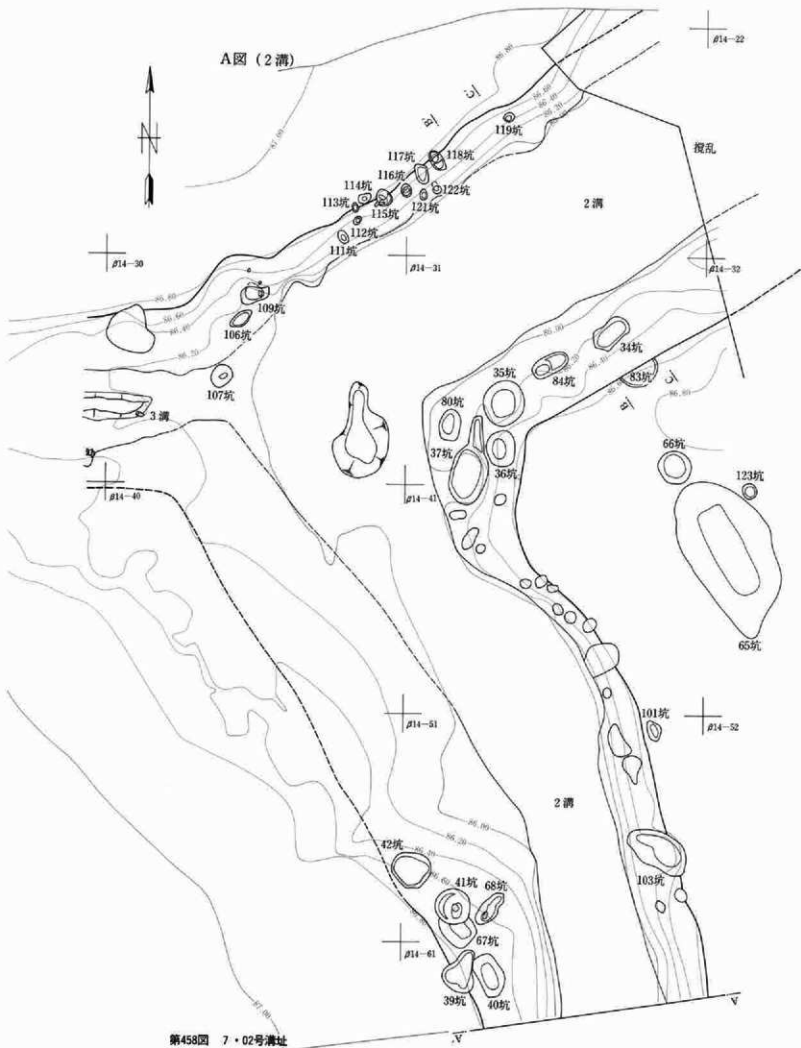
7・07号溝 (挿図番号第462・466図)

位置 本溝は02溝の内部に存在し、東流する02溝の底面の南の立ち上がり部分に沿って $\beta$ 14・31グリッドに所在する。溝の断面形は全般的には逆台形を呈し、上幅40cm・下幅20cm、深さ15cmを測る。該溝は対面する溝掘り方斜面に存在する小土坑群と併せて思考する必要があるだろう。



第457図 7・01号溝址





土層説明

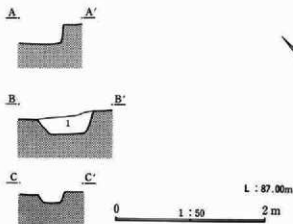
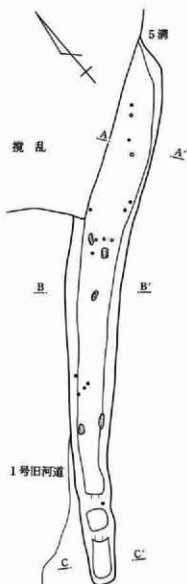
1. 黒褐色(10YR2/2) A-B 多量に含む
2. 黒色(10YR2/1) 小礫少量含む、粘性あり
3. 褐色(10YR4/4) 小礫・鉄分少量含む、粘性あり
4. 灰褐色(10YR5/4) 小礫・灰色土少量含む、鉄分沈着あり
5. 灰褐色(10YR5/4) 小礫少量含む、シルト質
6. 褐色(10YR4/6) 小礫少量含む、灰色土・鉄分沈着あり
7. 灰黄褐色(10YR5/2) シルト、鉄分沈着、粘性あり
8. 灰黄褐色(10YR5/2) シルト
9. 褐色(10YR4/4) 黄褐色土・灰色土・鉄分沈着あり
10. 褐色(10YR4/4) 鉄分沈着、灰色土・礫砂含む
11. 暗褐色(10YR2/3) 砂礫層
12. 暗褐色(10YR2/4) 砂礫層じりの粗砂層







5 本動堂台地区（7区）の遺構と遺物



土層説明

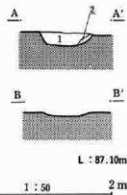
1. 褐色(10YR4/4) 細砂・黄色土粒の混土、粘性あり

第460図 7・05号溝址

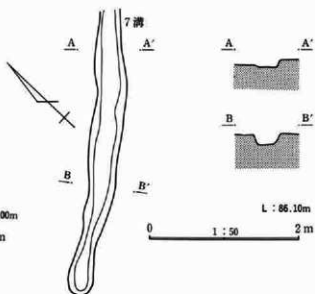


土層説明

1. 黒褐色(10YR2/2) A=B 多量に含む  
2. 褐色(10YR4/4) 粘性・鉄分沈着あり、厚い

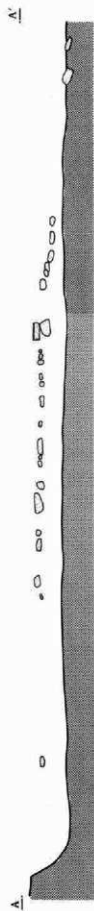
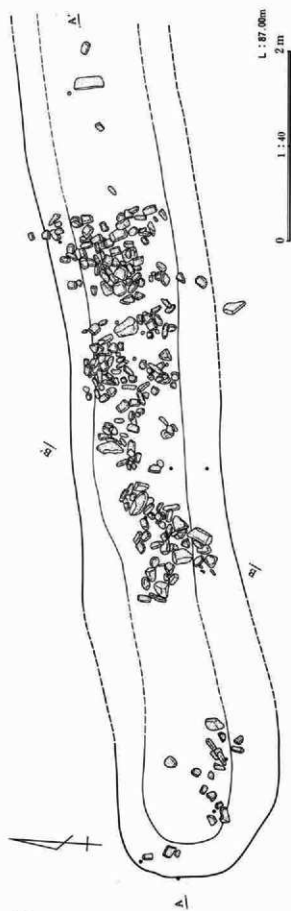


第461図 7・06号溝址

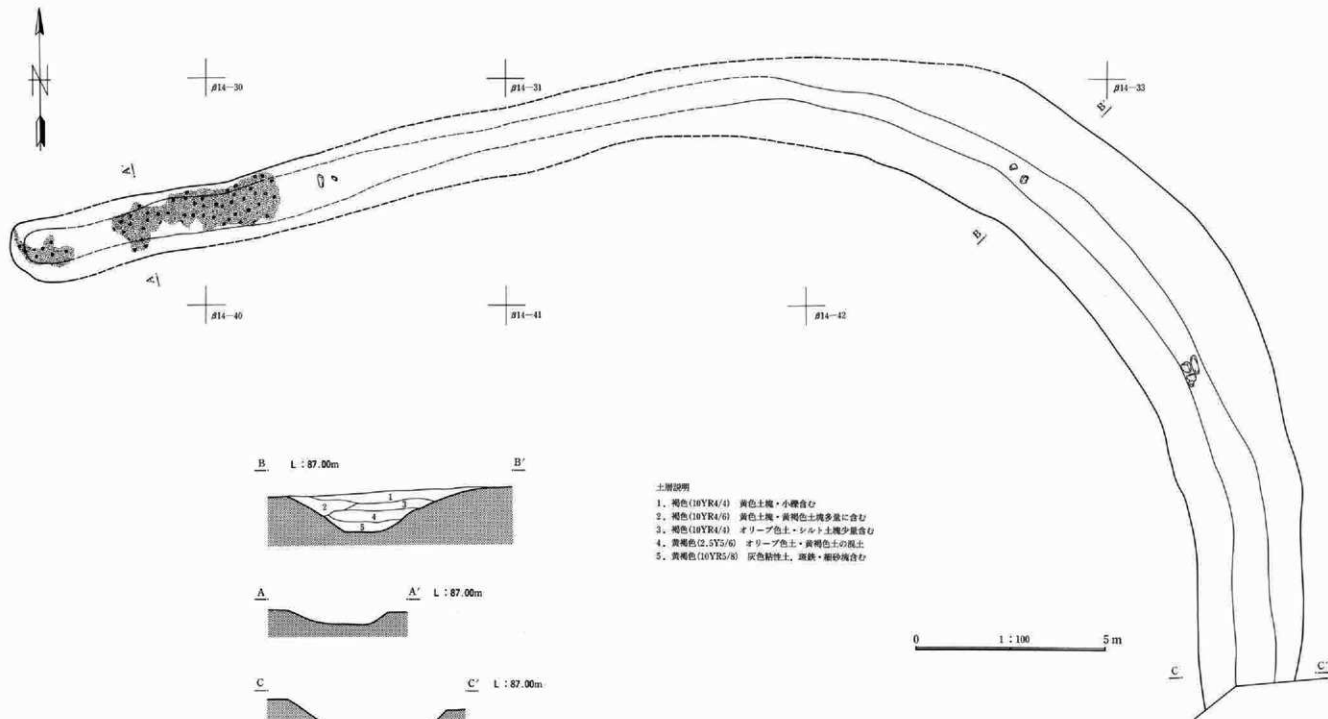


第462図 7・07号溝址

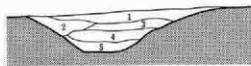
IV 遺跡の調査



第463図 7・04号溝石室部分



B L : 87.00m B'



A A' L : 87.00m



C C' L : 87.00m

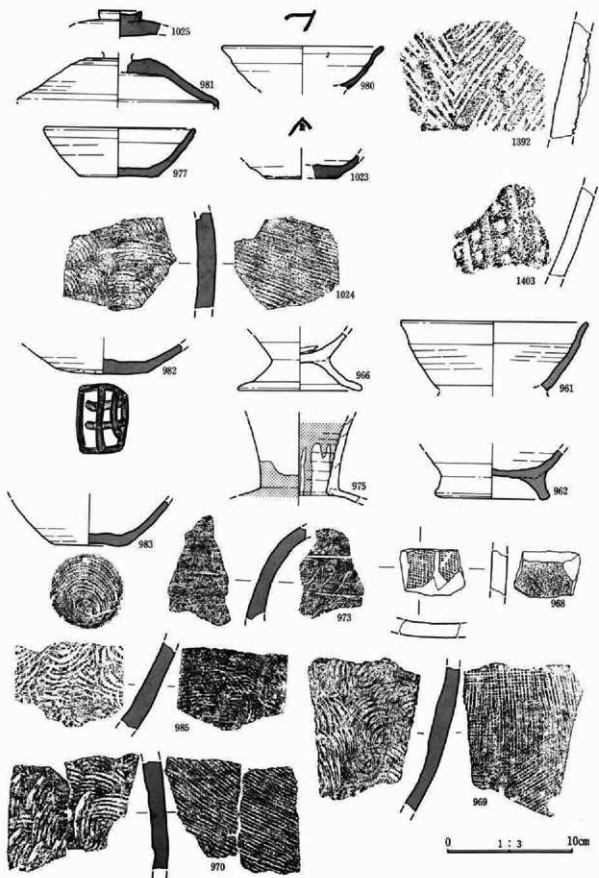


0 1 : 60 2m

第464図 7・04号溝址

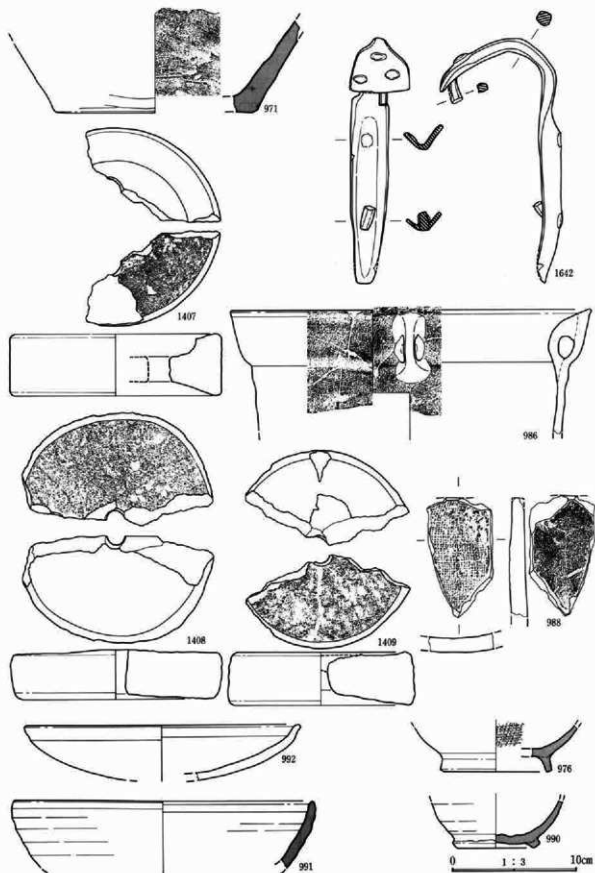






第465図 7・01~03号溝址出土遺物

IV 遺跡の調査



第466図 7・03~05, 07号溝址出土遺物

## (3) 土坑・粘土溜り

## ①土坑(押図番号第468~474図 写真番号P L-182~186)

7区の土坑群は2群に大別され、一つは01溝と02溝に挟まれたβ14・11グリッドを中心とした付近に分布し(A群)、別の一群は02溝の斜面に連なって散布する大小の土坑群である(B群)。特に02溝の斜面に存在するB群は、十分に02溝を意識して掘削された様相が窺われ、その性格究明についての手掛かりとなるものと考えられる。

形状と土層からほぼ柱穴痕と推測できるのは、A群の小型土坑とB群のβ14・20, 21グリッドの02溝斜面に集中する111~122の円形掘り方土坑である。特に111~122土坑はその位置からして、02溝に架橋された橋梁の橋脚の一部の可能性も考えられる。

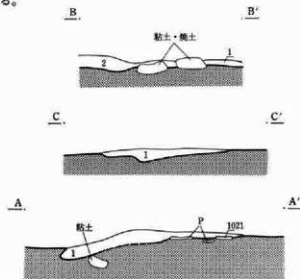
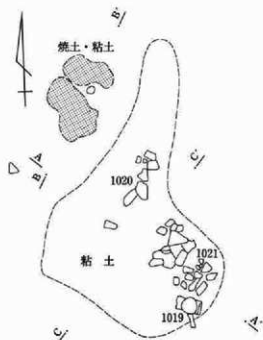
B群土坑の多くは、楕円形で深さも浅く土層に炭化物や焼土粒を含むものが多い。

特色あるものをあげると、37土坑は楕円形の形状を示し北壁から焼土の詰まった煙道状の細長い掘り込みが確認された。この種の土坑は本遺跡群の3区でも検出されている。21土坑は長軸方向を南北にもち、焼土と炭化物が壁から底面全体を覆っていた。7区で最大の土坑は65土坑で、外形の掘り方プランは楕円形だが、中段の掘り込みは隅丸長方形を呈している。また多数の礫が投入された状態で埋没しており、最上層の第1層にはAs-B軽石の混入が見られ、該土坑の使用時期を推定する手掛かりとなるものと思われる。4B区に同種土坑が存在する。

前述楕円形土坑群は、形状とその位置から状況的には基坑の可能性が強いと思量されるが、骨等の積極的な証拠がないために土坑の範疇に入れざるを得なかった。

## ②粘土溜まり(押図番号第467・474図 写真番号P L-186・215)

本粘土溜まりは11号住の土層上に存在し、11号住埋没時に廃棄土器と共に集積したものと理解される。相伴土器には土師器壺と須恵高台付埴がある。



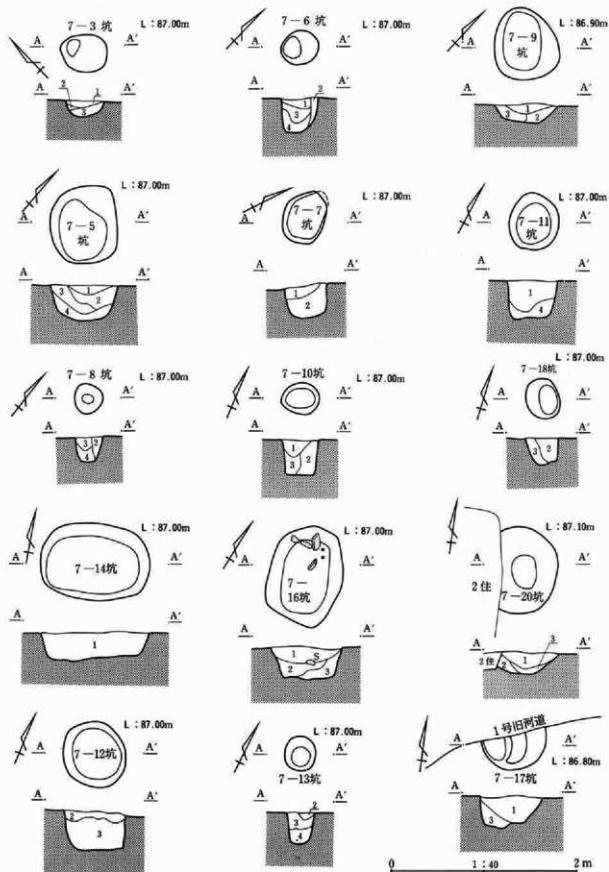
土層説明

1. にぶい黄色(2.5Y6/4) 粘土層
2. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土細粒・砂利含む

第467図 7・01号粘土溜り

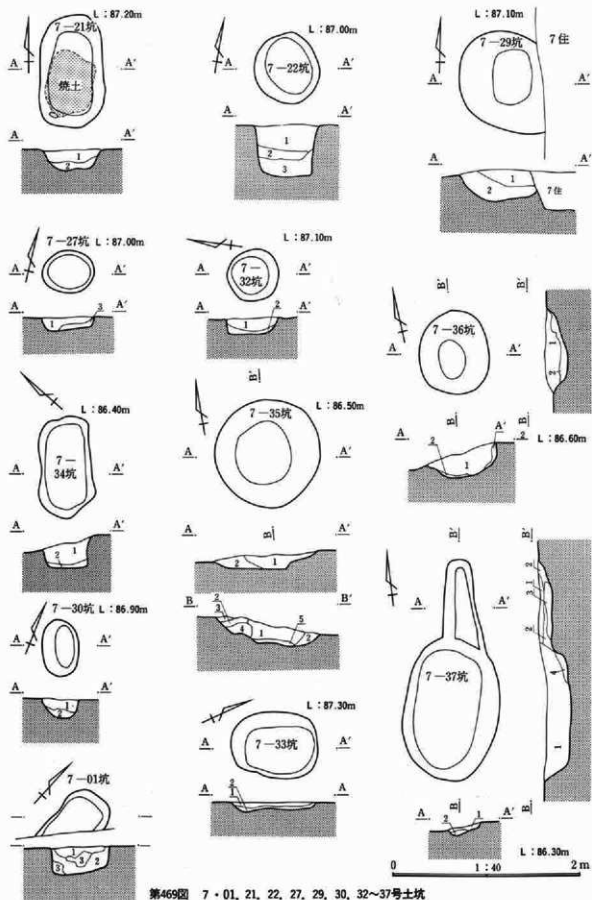
L : 87.20m 0 1 : 20 1m

IV 遺跡の調査



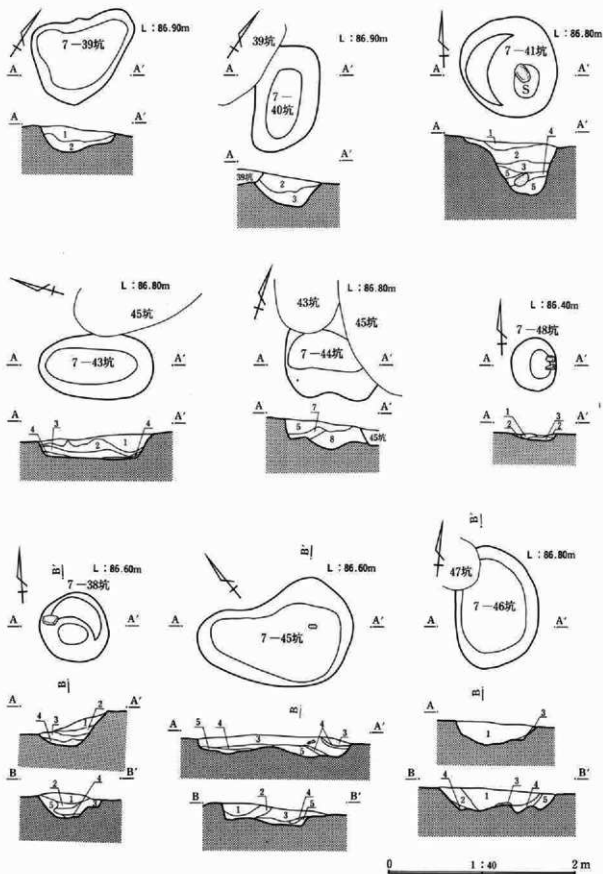
第468図 7・03, 05~14, 16~18, 20号土坑

5 本動室台地区（7区）の遺構と遺物



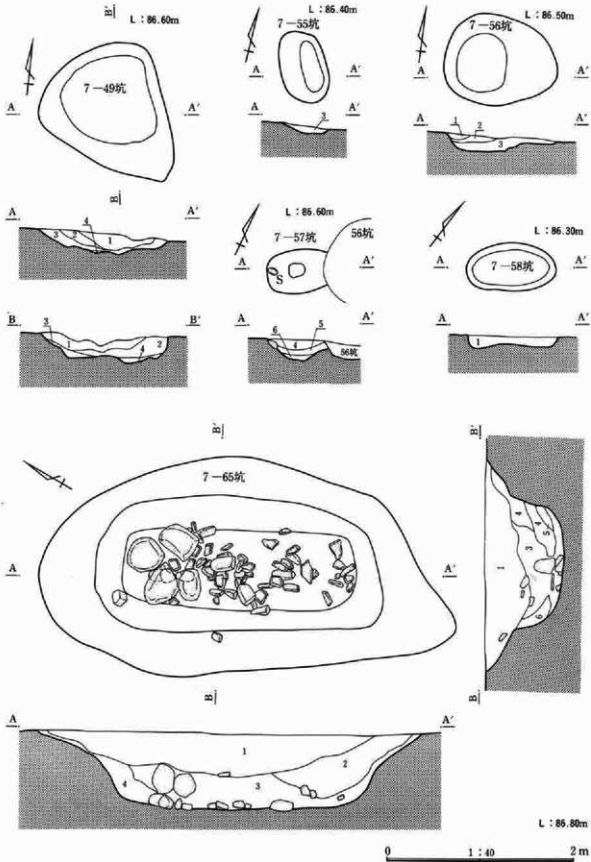
第469図 7・01, 21, 22, 27, 29, 30, 32~37号土坑

IV 遺跡の調査



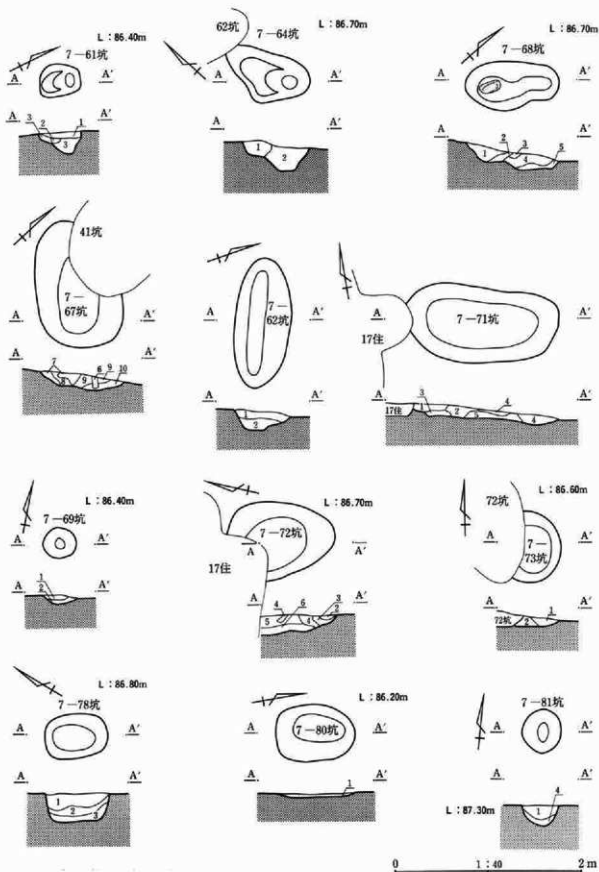
第470図 7-38~41, 43~46, 48号土坑

5 本動堂台地区（7区）の遺構と遺物



第471図 7・49, 55~58, 65号土坑

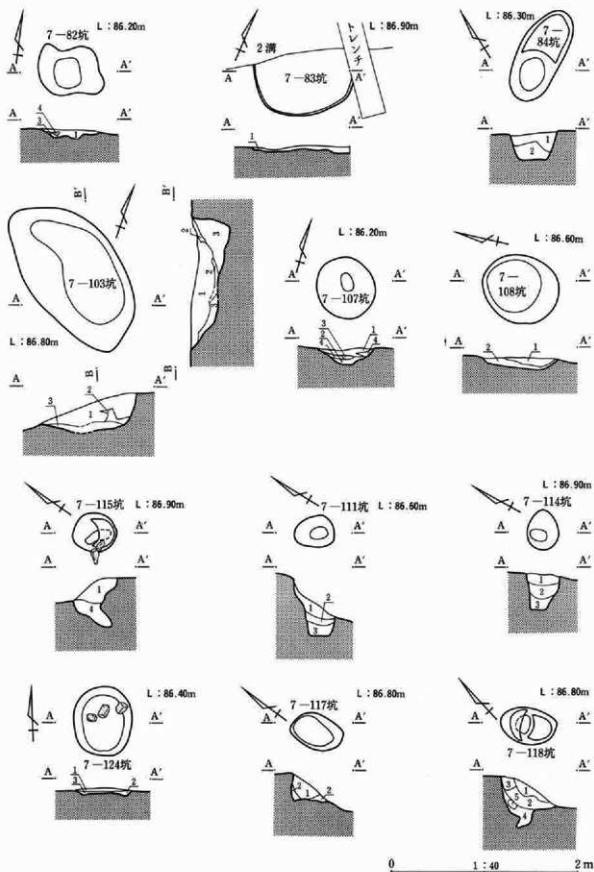
IV 遺跡の調査



第472図 7・61, 62, 64, 67~69, 71~73, 78, 80, 81号土坑

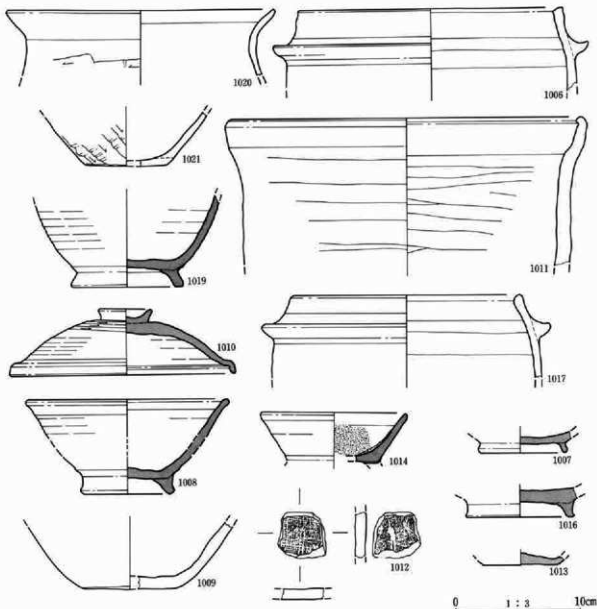


5 本動堂台地区（7区）の遺構と遺物



第473図 7・82~84, 103, 107, 108, 111, 114, 115, 117, 118, 124号土坑

IV 遺跡の調査



第474図 7・01号粘土瀝り、21、28、55、65、78、109、123号土坑出土遺物

7区土層説明

1号土坑

1. 黄褐色(10YR5/8) 小礫・黄褐色粘質土塊含む
2. 黒色(10YR2/1) A-B多量に含む、軟質、黄色土粒少量含む
3. 褐色(10YR4/4) 小礫層、細砂少量含む

3・5～13号土坑

1. 黒褐色(10YR3/3) 砂礫・黄色土粒少量含む
2. 褐色(10YR4/6) シルト、土塊含む
3. 褐色(10YR4/4) 小礫・細砂含む
4. 褐色(10YR4/4) 3層に類似

14・16～18・20号土坑

1. 黒褐色(10YR3/3) 砂礫・黄褐色土塊少量含む
2. 黄褐色(10YR5/6) 黄褐色土・砂質土・粘性土の混土
3. 褐色(10YR4/4) 黄褐色土塊灰に含む、粘性あり

21号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) 砂礫含む、炭粒・焦土粒少量含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 砂礫少量含む、焼土・炭粒含む、粘性あり

22・27号土坑

1. 黄褐色(2.5Y5/6) 黄色土塊少量含む、砂礫含む
2. 黒褐色(10YR2/2) 小礫含む、粘性あり
3. 黒褐色(10YR2/3) 黄色土塊少量含む

29号土坑

1. 褐色(10YR4/4) 細粒、微小礫少量に含む
2. 暗褐色(10YR3/3) 微小礫多量に含む

## 5 本動堂台地区（7区）の遺構と遺物

### 30号土坑

1. 黄褐色(2.5Y3/4) 黄褐色土粒少量を含む
2. 暗褐色(10YR3/3) 微小礫含む、緻密で固い

### 32号土坑

1. 暗褐色(10YR3/3) 砂質で固い
2. にぶい黄褐色(10YR4/3) 1層に類似、シルトロームブロックを含む

### 33号土坑

1. 褐色(10YR4/4) 細粒を含む
2. オリーブ褐色(2.5Y4/6) シルト、黄褐色細砂礫を含む

### 34号土坑

1. 灰黄褐色(10YR4/2) 焼土・灰・黄色土塊斑点状を含む
2. 青黒色(10BG1.7/1) 炭化物類、焼土粒・黄色土塊を含む

### 35号土坑

1. にぶい黄褐色(10YR4/3) 小礫・黄色土塊少量含む
2. 黒褐色(10YR2/2) 砂利層
3. 灰黄褐色(10YR4/2) 黄色土・灰色粘性土の混土
4. にぶい黄褐色(10YR5/4) 砂質土・黄色土塊の混土
5. 黄褐色(10YR5/6) 黒褐色土・砂利塊を含む

### 36号土坑

1. 褐色(10YR4/4) 焼土粒・土塊含む、粘性あり、緻密
2. 黒色(10YR2/1) 灰・灰・焼土含む

### 37号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) 砂利・軽石含み、ロームブロック少量含む
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) ロームブロック含む
3. 暗褐色(10YR3/4) 砂質土
4. 暗褐色(10YR3/4) 3層に類似、焼土粒・炭化物少量含む

### 38号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) 砂利層
2. 黄褐色(2.5Y3/3) ロームブロック含む
3. 暗褐色(10YR3/4) 焼土・炭粒・黄色土塊含む、粘性あり
4. 暗褐色(10YR3/4) 黄色土塊含む、粘性あり

### 39・40号土坑

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 微小礫少量含む
2. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 粘性土の混土層、砂粒少量を含む
3. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 砂粒少量を含む

### 41号土坑

1. 暗褐色(10YR3/3) 微小礫少量含む
2. 黒褐色(10YR2/2) にぶい黄色土塊含む、粘性あり
3. 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質土
4. オリーブ黄色(5Y6/4) 粘性土
5. 黒褐色(2.5Y3/2) 砂粒少量を含む

### 43・44号土坑

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 炭粒・焼土粒・砂粒少量含む
2. オリーブ褐色(2.5Y4/3) オリーブ黄色土の混土層、炭粒少量含む
3. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 細粒、炭粒少量含む
4. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 炭化物・焼土粒少量を含む
5. 黒褐色(10YR3/2) 砂粒少量を含む
6. オリーブ黄色(5Y6/4) 粘性土塊
7. 黒褐色(10YR3/2) オリーブ黄色粘性土の混土

### 45号土坑

1. 黒褐色(10YR2/2) 砂粒少量を含む
2. 暗灰黄色(2.5Y4/2) シルト質土、砂粒少量含む
3. 黒褐色(2.5Y3/1) 砂質土、黄褐色土塊少量含む
4. オリーブ黄色(5Y6/4) 細粒
5. オリーブ黄色(5Y6/4) 黒褐色砂質土の混土層

### 46号土坑

1. 灰オリーブ色(5Y4/2) 砂粒・炭化物を含む
2. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 緻密で固い
3. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 炭化物の混土層
4. 黒褐色(2.5Y3/2) オリーブ黄色土塊少量含む
5. 暗灰黄色(2.5Y4/2) オリーブ黄色土粒少量含む、固い

### 48・124号土坑

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 砂粒少量含む
2. 黒褐色(2.5Y3/1) 黄褐色土粒少量含む
3. 暗褐色(10YR3/3) 細砂土・オリーブ黄色の混土層

### 49号土坑

1. 黄灰色(2.5Y4/1) シルト、黄褐色土粒少量含む
2. 黄灰色(2.5Y4/1) オリーブ黄色の混土層、粘性あり
3. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 砂質土、オリーブ黄色土塊少量含む
4. オリーブ黄色(5Y6/4) 黄灰色土少量含む

### 55・56・57号土坑

1. 黄灰色(2.5Y4/1) シルト、暗赤褐色斑少量含む、粘性あり
2. 黄灰色(2.5Y4/1) 明黄褐色土・暗赤褐色土混含む
3. 黄灰色(2.5Y4/1) シルト、オリーブ黄色土粒少量含む、暗赤褐色斑少量含む
4. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 明黄褐色土塊少量含む
5. 黄灰色(2.5Y4/1) 1層に類似、明黄褐色土粒少量含む
6. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 細砂土

### 58号土坑

1. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 砂粒少量を含む、粘性あり

### 61号土坑

1. 黒褐色(2.5Y3/1) 灰少量を含む
2. オリーブ褐色(5Y6/4) 黒褐色の混土層
3. 黄灰色(2.5Y4/1) オリーブ黄色土・炭粒少量含む

### 62号土坑

1. にぶい黄褐色(10YR4/3) 細粒、粘性あり
2. にぶい黄褐色(10YR4/3) 暗オリーブ褐色微砂質土の混土層

### 64号土坑

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) オリーブ土塊少量含む、シルト質で粘性あり
2. 灰オリーブ色(5Y4/2) 1層に類似

### 65号土坑

1. 黒褐色(10YR2/2) Aa-B・白色細粒・焼土粒・赤褐色土塊含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 粘性あり、礫・砂利含む
3. 暗褐色(10YR3/4) 大量少量を含む、緻密
4. 褐色(10YR4/6) 黄色土塊少量含む、緻密
5. 暗褐色(10YR3/4) 細砂・褐色土塊の混土
6. 黄褐色(10YR5/6) 黄色シルト質土の混土層

#### IV 遺跡の調査

##### 67・68号土坑

1. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 砂質土
2. 暗灰黄色(2.5Y4/2) オリーブ黄色土塊少量含む
3. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 砂質土
4. 暗灰黄色(2.5Y4/2) シルト質
5. 黄褐色(2.5Y5/4) 砂質土
6. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂質土
7. 暗灰黄色(2.5Y4/2) オリーブ黄色土塊少量含む
8. オリーブ黄色(5Y6/4) 7層に類似
9. 暗灰黄色(2.5Y4/2) オリーブ黄色土塊・砂粒少量含む
10. 暗灰黄色(2.5Y4/2) オリーブ黄色土の風土層、7層に類似

##### 69号土坑

1. におい黄褐色(10YR4/3) 砂粒多量に含む
2. オリーブ色(5Y5/4) 灰色土の風土層、粘性あり

##### 71号土坑

1. 暗褐色(10YR3/3) 微小礫多量に含む
2. 黒褐色(10YR2/2) 砂粒少量含む
3. 黒褐色(10YR2/2) 微小礫・オリーブ黄色土粒少量含む
4. 灰色(5Y4/1) オリーブ黄色土塊少量含む
5. 明黄褐色(2.5Y6/6) 灰オリーブ色土の風土

##### 72・73号土坑

1. におい黄褐色(10YR4/3) 細粒、固い
2. におい黄褐色(10YR4/3) 1層に類似
3. 褐色(10YR4/4) 砂礫層
4. 明黄褐色(2.5Y6/6) オリーブ褐色土少量含む
5. 暗褐色(10YR3/4) 白色微小礫多量に含む
6. 黒褐色(10YR2/2) 微小礫少量含む
7. 暗褐色(10YR3/3) 砂質土、微小礫6層より多量に含む

##### 78号土坑

1. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 微小礫多量に含む、淡黄褐色土粒少量含む
2. におい黄褐色(10YR4/3) 微小礫少量含む
3. 黒褐色(2.5Y3/2) オリーブ色土塊少量含む

##### 80～83号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) 炭化物・焼土粒・土層小片含む
2. 暗褐色(10YR3/4) 砂質・砂粒多量に含む
3. におい黄褐色(10YR4/3) 砂質土
4. オリーブ褐色(2.5Y4/4) シルトロームブロック

##### 84号土坑

1. 暗褐色(10YR3/4) ロームブロック・砂質土・砂粒少量含む
2. 暗褐色(10YR3/4) ロームブロック含む

##### 103号土坑

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 砂粒・軽石含み、砂質ローム少量含む
2. 黄褐色(2.5Y5/4) シルト質ローム
3. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 1層に類似

##### 107号土坑

1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 軽石・砂質少量含む、粘性あり、固い
2. 暗褐色(10YR3/3) 軽石・微小礫少量含む、固い
3. におい黄褐色(2.5Y6/3) シルト質ローム
4. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 3層に類似

##### 108号土坑

1. 暗褐色(10YR3/3) 軽石少量含む、固い
2. 暗褐色(10YR3/3) 1層に類似、シルトロームブロック少量含む

##### 111・114・115・118号土坑

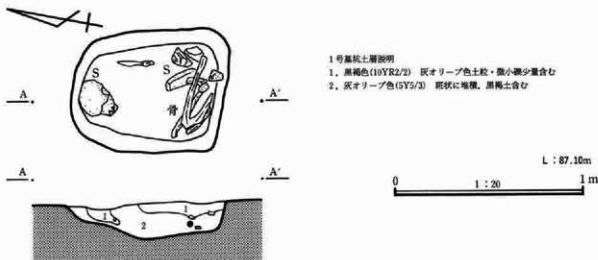
1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) ローム粒・軽石少量含む、粘性あり
2. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 1層に比べ夾雑物少ない、粘性あり
3. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 2層より粘性あり
4. 暗褐色(10YR3/3) シルトロームブロック・軽石少量含む

##### 117号土坑

1. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 砂質・砂質ロームの風土
2. オリーブ褐色(2.5Y4/4) 1層に類似、砂質で固い

## (4) 墓 坑 (挿図番号第475図 写真番号P L-186)

01墓坑は長軸方向を南北にもち、 $\beta 13 \cdot 90$ グリッドという7区の土坑群とは隔離した位置に存在している。この土坑を墓坑と認定したのは、人骨と礫の出土によるもので、02溝のB群土坑の大部分が墓坑の可能性をもつとした理由の一半は該墓坑の在り方による。なお人骨は小片であるため鑑定に耐え得なかつた事を付記しておく。



- 1号墓坑土層説明  
 1. 黒褐色(10YR2/2) 灰オリーブ色土粒・微小礫少量含む  
 2. 灰オリーブ色(5Y5/3) 斑状に暗緑、黒褐色土含む

第475図 7・01号墓坑

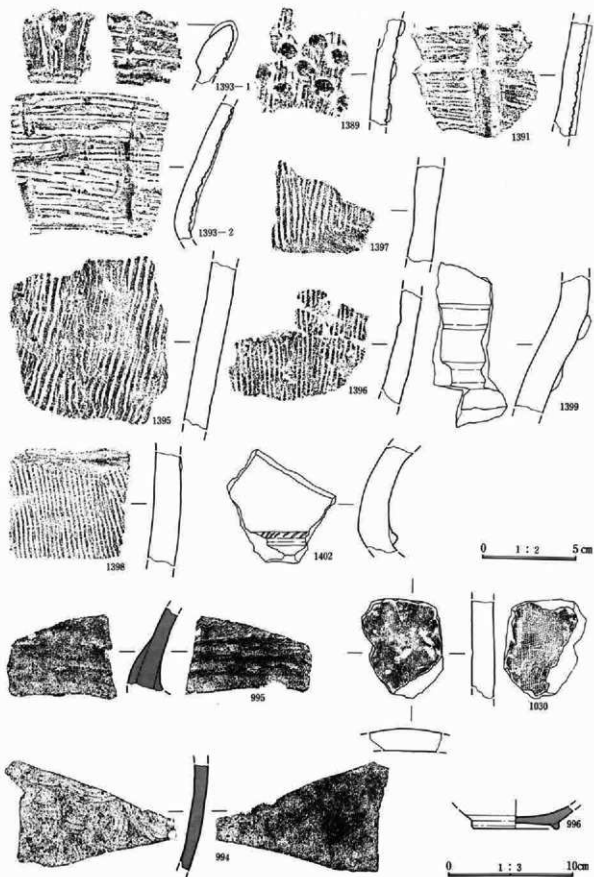
## (5) グリッド・トレンチ・表採遺物 (挿図番号第476・477図 写真番号P L-215・216)

本項で紹介する遺物のほとんどは、前年度に試掘調査した際のトレンチから出土したものである。調査地の7区はマッピング調査等から遺構のない地区と見られていたため、かなり念入りに9本のトレンチを東西方向に入れた。その結果1, 8, 9トレンチで溝が、2トレンチで竪穴住居址が確認された。

遺物出土状況は2, 8トレンチで多数の土器片が採集された他は僅少であった。次年度の発掘調査結果と重ね合わせて考えると、2, 3, 4トレンチ付近で竪穴住居址が密集して確認されているため、3, 4トレンチにおいて2トレンチと同様の遺物量の出土があってもいいと思われるがそうでもなかった。

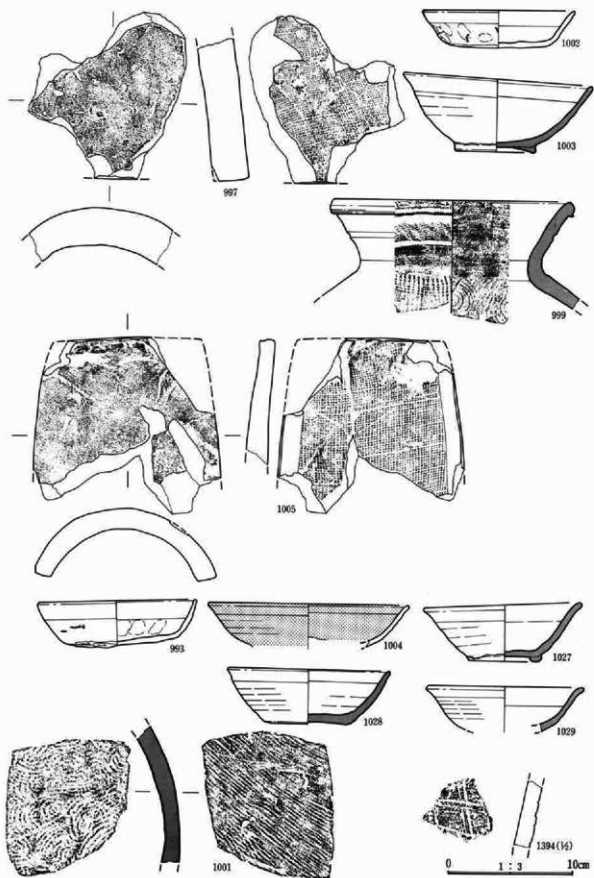
出土遺物である須恵大甕破片、布目瓦、平底の土師髷环、須恵高台埴、須恵环等の平安時代を示す遺物群の存在は、検出された平安期を中心とする竪穴住居址群との齟齬はない。

IV 遺跡の調査



第476図 7・グリット、トレンチ出土遺物

5 本動堂台地区（7区）の遺構と遺物



第477図 7・トレンチ、表採出土遺物





群馬県埋蔵文化財調査事業団  
調査報告第141集

## 上栗須寺前遺跡 I

第2分冊(本文編)  
関越自動車道(上越線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第13集

平成4年12月18日 印刷  
平成4年12月25日 発行

編集/群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北嬭村大字下箱田784-2  
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行/群馬県考古資料普及会  
勢多郡北嬭村大字下箱田784-2  
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷/朝日印刷工業株式会社